

BanG Dream ! 澄み渡る空、翔け抜ける星

ティア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「無理なんだよ！私には、誰かを勇気づけるだけの力なんてない!!」

「約束する。俺が、誰が何と言おうとも、最後までお前を信じて見せる」

幼い時に見た『星の鼓動』を求めて、キラキラドキドキできるものを探す高校生、戸山香澄。

そんな彼女を幼馴染に持つ少年——成川翔は、とある理由から香澄も入学した女子校である、花咲川女子学園に特務生扱いとして入学する。

新しい環境の中、高校生活を過ごす翔と香澄。そんなある日の事、2人は偶然にも見つけた星型のギターに、幼い時の感覚に似た興奮を感じ取る。

「こんな私でも、夢を見てもいいのかな……?」

そのギターに導かれるように見たライブで、香澄は運命の出会いを果たすことになる。

そこからもたらされる、4人の少女との出会い。それらはやがて、1つのバンドを生み出す。

「大丈夫さ。お前はもう、二度と夢を失うことはない」

彼女たちの物語が動き出す時、翔に秘められた物語もまた動き出し、交わることになる……。

「音楽は、夢を撃ち抜くためにある——」

どうも、ティアです。ガルパにハマったのがきっかけで、この小説を書くことにしました。

基本は1期の振り返りみたいな感じで行くつもりですが、普通にオリジナルストーリーもドンドン入れていきます。

不定期更新になるかもですが、よろしくお願いします！

目次

prologue	約束	1
phrase 1	たった1人の男子生徒	5
phrase 2	求める輝き	14
phrase 3	音楽に愛された少女	25
phrase 4	星の導き	34
phrase 5	湧き上がる熱情	45
phrase 6	夢への道標	53
phrase 7	胎動の狭間で	65
phrase 8	踏み出す君の背中を押すのは	75
phrase 9	活路を開く武器	88
phrase 10	意図	102
phrase 11	導くもの	114
phrase 12	目指す姿	125
phrase 13	星の涙、揺れる心	140
phrase 14	バンドはできない	153
phrase 15	心の波音	166
phrase 16	臆病な私にできる事	178
phrase 17	変わるチャンス	190
phrase 18	キミにもらったもの	203
phrase 19	友のための約束	214
phrase 20	変態の定義	225
phrase 21	虚ろな瞳が映す世界は	237
phrase 22	邂逅	250
phrase 23	亀裂	263

phrase 48	phrase 47	phrase 46	phrase 45	phrase 44	phrase 43	phrase 42	phrase 41	phrase 40	phrase 39	phrase 38	phrase 37	phrase 36	phrase 35	phrase 34	phrase 33	phrase 32	phrase 31	phrase 30	phrase 29	phrase 28	phrase 27	phrase 26	phrase 25	phrase 24
今だけの時間	笑顔で	待つてるから	振り絞る声	決意の向かう先に	決めつけないで	今を変えるために	君にできる事	時間の重さ	星の瞬きの中で	当たり前のようで	弾け出す存在	緑の風、雨の雫	私の心は	初めての	重なる音色	微かな胎動	伝えたい言葉	隔たり	まだ誰も知らないこの歌	目指す先、その高みは	君の声	震える時を	仲直り	素直な気持ち
604	587	570	551	532	521	506	492	475	464	451	440	424	414	399	389	376	361	349	337	326	314	302	290	275

phrase 49	昨日までの日々に	621
phrase 50	ホシノコドウ	633
phrase 51	ありがとうの気持ち	651
phrase 52	懐疑	662
phrase 53	凍てつく笑顔	680
phrase 54	深まる熱情	691
phrase 55	後戻りはできない	703
phrase 56	求めた答えを解き、そして……	720

prologue 約束

俺は今、自分の命が少しずつ消えていくのを感じていた。

自分に何が起こったのか理解できない。気が付いた時には、俺はうつぶせに倒れていた後だった。重くのしかかる何かが邪魔して、身動きも取れそうにない。

そして、全身から流れ出す粘膜質の温もり。視界を半分塞いだそれを見て、俺は本質的に悟る。

ああ……俺、死にかけているんだな……。

「う……っ」

力を込め、動きを制限する重圧を押しつけようとする。このまま下敷きになつていては、俺の将来は永遠に断たれる。何としても、ここから抜け出さなくてはいけない。

だが……。

「……あつ、く、う……！」

力が入らない。圧迫による痛みもあるが、身体が思うように動かない。恐らく、腕が折れているんだな。足も動かせないし、きつとそつちも折れているんだろう。

「……れ」

あれ、と言つたつもりだった。だが、言葉にならない。上手く話したくても、話すことができない。

それに、妙だった。今まで鬱陶しく感じていた痛みも、粘り気も、重圧も、急になくなっていく。四肢の感覚も、熱も全て。だから疑問を抱いたのに、それすらも言葉にならないとは。

なのに、なぜか冷たさだけは残っている。体の底から凍えるように、じわじわと侵食している。その意識すら、目は冴えていたはずなのに薄れていく。

「……………」

終わるのか、ここで。俺の人生は、こうもあつけなく途絶えてしま

うのか。

「……………」

答えてくれる人は誰もいない。ただの独白だ。まだ高校生なのに、あまりにも寂しい幕切れだ。

夢を見て、笑いあつて、未来を描けるだけの時間は有り余るほど残されていたはずなのに。

何色にも染まるはずだった明日は、真っ黒に塗りつぶされてしまう。他の色で塗り直すことは、もう不可能だった。

「……………」

そうなる前に、せめて最後に……あいつらと音を合わせて見たかったな……。

「——くん！な——ん!!」

何か聞こえる。音？いや、これは……声？

「ねえ——てよ!」

「おい——りしろよ!おま——けてん——ぞ——っ!」

「——だ、こんな——しょうが——わけない!」

「——のせいで——あ、ああ——!?!」

断片しか聞こえない。内容を推測しようとしたが、全くできなかつた。いや、俺にはそれだけの意識が残されていなかったと言わなければならない。

「……………」

つい数日前。新曲の練習をしていた彼女に付き合っていた時の事を思い出す。ふとした事から、積み重ねた過去に想いを巡らせていた……あの時の事を。

思えば、あれが予兆だったのかもしれない。思い出と言う名の、夢

き手向け。

「……………」

ああ……記憶までぼんやりとしてきた。俺に向けられているのは分からないが、さつきまで聞こえていた声も、断片すら聞きとれなくなる。

最早、何もかも奪われた。俺に残ったのは、間もなく消えゆく命。この肉体から全てがなくなった時、俺は本当にこの世から――。

いや、そうじゃない。

3

まだ、残っているはずだ。残さないといけないはずだ。俺にはまだ、やるべきことがあるはずだ。

今日ここに来る前に、彼女と交わした約束が。

「……………」

薄れゆく命の中でも、この約束だけは絶対に離さない。果たされることのない約束を、彼女に背負わせるわけにはいかないから。

ふと、誰かが近づいてくる気配がした。するはずもない感覚に体が刺激され、そちらに意識がわずかに傾く。

その瞬間だった。脳裏に浮かんだ、5人の少女。
そして俺は……成川翔は、完全に意識を手放した。

phrase 1 たった1人の男子生徒

——私、小さい頃『星の鼓動』を聞いたことがあって——

それは、幼き日の記憶。明日への扉を叩かれ、心の奥底に眠る何か
が解き放たれた瞬間。

不安で俯き、下を向いて歩いていた自分を明るく照らした、満天の
星空。美しさに心を奪われ、自然と上を向いたことで満たされてい
く、抑えきれない衝動。

——キラキラドキドキって、そういうのを見つけないです——

いつかまた、あの星空のような興奮に出会える夢を信じて。この秘
めた思いは、今までもこれからも、絶対に消えることはない。

まだ出会うことはできないけど、踏み出す自分を待っているはずだ
から。そのために探し続ける。あの時のような鼓動を感じられるも
のを。

——キラキラドキドキしたいです!!——

夢を撃ち抜く瞬間を。

桜舞い散る並木道。雲一つない穏やかな青空。その中を駆け抜け
る、一人の少女。すれ違う景色に胸を震わせながら、少女はある場所
へとたどり着く。

「ふー、学校に来たら実感するなく。今日から私も高校生なんだよね

！」

花咲川女子学園。通称花女。都内でも有名な女子校で、中高一貫の教育を行っている学校だ。そのため、大半の生徒は内部からの持ち上がりとなるのだが……今学校に来た少女は違った。

小柄で華奢な体つき。星をイメージした、猫耳のような髪。アメジストの瞳を輝かせ、彼女は——戸山香澄は、これから始まる学校生活に心を躍らせる。それもそうだ。彼女は、今日からこの学校の一員となるのだから。

「楽しい学校に新しい制服！何かキラキラすることが始まりそうな気がする！」

「何を大声出してんだよ、香澄」

「あつ！その声は……」

香澄と呼んだ一人の人物。香澄はその姿を捉えようと、人目もはばかることなく駆け出した。

「なーくん！遅かったね？」

「遅かったね、じゃないだろ！勝手に一人で走って行くな！追いかけるの大変だったんだぞ!!」

「え〜？だって、早く学校行きたかったから〜。なーくんだって、楽しみじゃなかった？学校！」

「まあ、楽しみなのは楽しみなんだけど……とりあえず、抱き着くな。離れてくれ」

癖っ毛が少し目立つが、端正に整えられた黒髪。香澄よりも一回り高い身長で、体格は優れている。

そんな彼——成川翔は、香澄と同じ制服に身を包んではいた。もちろん、男性用に加工はされているが。翔もまた、香澄と同じ学校に入学することになっている。

「もー、最近なーくん抱き着くなつて言う事多いよ〜。小さい頃はギョ〜ってしても怒らなかつたのに……」

「恥ずかしいんだよ。俺だって、年頃の男の子だぞ？もっと自分が女の子だって事自覚してほしいんだけどな……」

香澄のせいで、俺たちの横を通り過ぎる花女の生徒は好奇の視線を

向けてくる。こんな事で注目されるのはごめんだが、香澄が関わって
いなかったとしても、どのみち注目されることは避けられなかったは
ずだ。

それもそうだろう。この学校は、花咲川女子学園。『女子』とついで
いるだけあって、れっきとした女子校だ。

そして俺は、改まって言う必要もないが男だ。女子校に男子がいる
だけで、自然と注目的になるのは仕方ない。けど、あまりじろじろ
見られるのも嫌だな……。しかも女の子だし。

ここに来る途中でも何人かに見られてたし、しばらくは落ち着かな
い登下校が続きそうでならない。と、ここで香澄がようやく疑問に触
れる。

「そう言えば、何でなーくんはこの学校に入学できたの？ここって、確
か女子校だったよね？」

「あ、ああ。通える学校の中じゃ家から一番近いし、家計の都合もある
からさ。家族に迷惑もかけなくなかったし、特務生って扱いで特別に
入学許可が下りたんだ」

そう。俺がここにいるのは、異例中の異例。本来はあってはならな
い事態だ。女子校なのに、男子生徒を入学させるわけにはいかないか
らな。

だが、俺の事情を知った学校側は、快く入学を許可してくれた。制
服も用意してくれたし、色々と手続きも済ませてくれた。そして、現
在に至ると言うわけだ。

「へえ〜そうなんだ。なーくん、女の子になったのかと思ってた！」

「ならねえよ！健全な男の子だ！」

だから、正直この環境は慣れるまでに時間がかかりそうだ。どこを
見渡しても女子だぞ？何かのライトノベルでそんな話を見たことが
あるが、またわけが違うし。

香澄が一緒だったのは、唯一の救いだったけどな。幼稚園時代から
の付き合いだし、知り合いが1人いるだけでも心強い。

「でも、これから楽しみだね〜！なーくんも一緒だし！」

「……そうだな。今日から高校生だからな。青春って感じがするよ」

俺の青春は、他の男子どもとは全然違ってくるけどな。上手くやっていけるかどうかもわからない。

けど、これは自分で選んだ道なんだ。いきなり不安になって、後悔なんてしているようじゃダメだよな……。

「今日からお世話になります！ほら、なーくんも！」

「わかったって。……よろしくな、花女」

香澄に制服の裾を掴まれ、俺も香澄に倣って挨拶を済ませる。やはり過ぎ去っていく生徒の視線は痛い、今は始まりの余韻に浸っている。

挨拶をしなくてはいけない人は、他にいるからな。

「そうだ、クラス！何組かな」

「掲示板は……お、あつたぞ」

「さすが、なーくん！よくし、行こう！」

強引に腕を引っ張られ、俺は香澄に連れられて行く。足元がおぼつきそうになるが、何とか香澄に合わせて歩き出す。

ただでさえ珍しい男子だ。それを入学初日から女子生徒に振り回されているとなると……もう周りを気にしていたら負けなレベルだ。変な噂が立たないといいんだけどな……。

「よし、とうちやくく！」

「わかったから、もう放してくれよ。色々痛い……」

掲示板の前は、既にクラスを確認する生徒でいっぱいだった。あの中に入って名前を探すのかよ……。接触不可避だな。大丈夫か？

「えーと、なるかわは……おい、香澄。俺の名前も探してくれ」

「一緒に探してるよー。とやまになるかわ……あ、あつた！」

指さして俺に教える香澄。クラスを見ると、A組らしい。しかも、どうやら俺と香澄は同じクラスみたいだ。これは幸先がいいな。

その事に気を取られるあまり、近づいてくる人影がいたことに俺たちは気づくことができなかったが。

「……わっ！」

「おっと、大丈夫か？悪い。こっちの不注意だったな」

「あ……」

香澄にぶつかる女子生徒。そのはずみで、よろけて倒れそうになってしまう。俺はとっさに手を伸ばし、背中から腕を回して受け止めた。

「怪我とかないか？立てるか？」

「あ、えと……うん。こちらこそ、ごめん。掲示板見てて、横見てなかったから」

桃色の髪をポニーテールにまとめた、今日の青空のような澄んだ瞳を持つ少女だった。

だが、頬は対照的に赤く染まり、空色の瞳もチラチラと俺を映すばかり。どこか恥ずかしく、照れ臭そうにしているようだった。

「そ、それよりも彼女の方は大丈夫？私は何ともだけど……」

「ああ、こいつは大丈夫。ほら、香澄も謝れ」

「うん。こつちもぶつかってごめ——あれ、いい匂い？」

「えっ？」

謝れと言ったはずなんだがな、俺は。だが、香澄の言う通りいい匂いが漂ってくる。この匂いって……。

「これって、パンか？」

「そう、パン！すっごい、いい匂いした！」

と、そんな食欲をそそる体験をした香澄は……。

グググキュルル……。

俺たちの目の前で、盛大におなかを鳴らしたのだった。

「うう、朝ごはん食べてないの思い出しちゃった……」

「朝飯食べてないのかよ。俺と一緒に家に家出たんじゃなかったのかよ」

「だって、楽しみで仕方なくて……。それに、あっちゃんが始業式明日って言うから……」

顔を赤らめ、恥ずかしそうにする香澄。この辺は女の子らしい。

あ、香澄の言ってた『あっちゃん』の話は、今はしないでおう。そのうち話す機会もあるだろうしな。

「フフツ……。うちパン屋だから。1ついる？」

「えっ？パン!？」

「飴玉。パンじゃないけど」

「違うのかよ。今の流れは絶対にパンだった。この子、狙ったな……？」

「飴だ！いいの？ありがと〜！」

質問しておいて自分で完結させるな。だが、香澄も我慢の限界だったらしく、女子生徒から飴を貰うと、すぐに舐め始めた。もごもごと何かしゃべっていたが、わからないので放っておく。

そんな香澄を横目に、彼女は俺に視線を向けてくる。と言っても、少しきこちなかったが。

「どうした？さすがに俺も、女の子にじろじろ見られるのは恥ずかしいんだけど」

「ううん。何でもない……。ってこともないかな。さつきからずっと気になってただけど、あなたって……」

「ああ、そう言う事か」

なら、見られても仕方ないわけだ。目立って仕方ないしな。

「あなたって、男の人だよな？何で女子校なのに、この学校にいるのかなって思ってる」

「やっぱりか。ま、今日の入学式の時に説明されると思うんだが……特務生として入学することになったんだ。正真正銘、この学校の生徒だ」

本日二回目の説明。これから話しかけるたびに、今みたいな説明をしないといけないのかよ……。大変だな。

「へえ、何組なの？」

「俺は——」

「A組！私と一緒に！」

「おい、こら。割り込むな」

しかも飴舐め終わってるし。腹の足しにはなっている……と思いたい。

「そうなんだ。私もA組なんだよ。山吹沙綾」

「やまぶき……あつた！私はね〜戸山香澄！で、こっちが幼馴染のな〜くん！」

「フルネームで紹介してくれないか!」

そのやり取りを見て、山吹さんは口には手を押さえて笑い出す。そのしぐさは、年相応の女子が見せる可愛らしいものだった。

てか、普通に可愛いぞ、この子……。って、待て。いきなり何を考えてるんだ、俺は。まずは俺の自己紹介をしておかないと……。

「俺は成川翔。香澄が言ったように、俺もA組だ。これからは同じクラスってことになるな」

「成川君に、戸山さんか。戸山さんは中学で見た事ないし、外部生だよな?どうしてうちに来たの?」

「えつとね!妹がここの中学に通つてて、楽しそうだな〜って!あとね、いっぱいあるんだけど……あ!制服好き!」

香澄には一つ下の妹がいる。それも、姉妹で性格が正反対の。香澄は明るくてお調子者だけど、妹の方はしつかり者だ。どっちが姉なのか、わからなくなることもよくあるな。

「あはは。大事だよな、制服」

「うん!それで花女に決めたんだ!」

「いいね、そういうの。私、内部生だから。半分は中学からの持ち上がりだし、中学そこだし。制服も一緒だから、何も変わらないって言うか……」

内部生ならではの事情か。俺には上手く理解できないが、確かに新鮮味に欠けるとは考えてしまう。

「でも、高校生だよ!何か始まる感じしない?」

「え?何かって……」

「ほら、もう始まつてる!新しい友達、できちゃったし!」

屈託のないキラキラとした笑顔を、香澄は山吹さんに向ける。そのまますくなく姿勢に思わず苦笑してしまった山吹さんは、

「友達認定早いね」

「え、早すぎた!?!」

「まあ、この行動力が香澄のいいところでもあるからな。嫌いになら

ないでくれよ？」

受け入れない人には受け入れられないキャラだからな……。俺は幼馴染だし、そうじゃなくても気にしてないからいいんだけどな。むしろ好きだし。

「そんなつもりないよ。よろしくね、戸山さん。それに成川君も」

「香澄でいいよ！」

「俺も、翔って呼んでくれ。同じクラスになるんだし、堅苦しいのはなしってことで」

約1名、ずつと名前を呼んでくれない元気な幼馴染がいるんですけどね！

「そっか。なら私も、沙綾でいいよ。香澄に……。翔、だね。改めてよろしく」

「うん！それじゃあ、なーくんにさーや！早くA組の教室に行こうよ！」

「あー、悪いんだけど先に二人で行っててくれないか？」

「えっ？」

「俺、特務生だからさ。一応、学園長とかに挨拶しておかないといけないんだ」

俺は香澄たちと別れ、学園長の部屋の前にいた。高級感のある木製の扉をノックし、俺は学園長の部屋に入る。ここは本当、何回来ても慣れないな……。

「失礼します」

「ん……。？おや、君は確か……」

「今日から、特務生としてこの学校に入学することになった、成川翔と言います」

丁寧に挨拶を済ませ、俺は立派な椅子に腰かける初老の男性と目を

合わせる。彼こそが、この花女の学園長。俺の入学を特別に認めてくれた張本人だ。

「わざわざ挨拶に来てくれるとは……そこまで畏まる必要はないんだよ？」

「とんでもない。あ、先日はどうもありがとうございます」

「私の方こそ、感謝しているよ。こちらとしては、本当にありがたい話だったからね」

「いえ……感謝するのはむしろ、俺の方ですよ」

この学校に入学し、生徒として過ごすことができる。それだけで、俺はありがたかった。俺の理不尽な要求を呑んでくれたのは、まさに奇跡としか言いようがないからな。もう足を向けて寝ることはできない。

「……わかっているとは思うけど、くれぐれも『あの条件』だけは守ってもらいたい」

「もちろんです。俺には、この学校に入学する目的がありますから」

香澄に語った、この学校に入学した理由……。あんなもの、全てでっち上げた嘘だ。

家から近い？家計を助ける？そんな都合だけで女子校には入れるのなら、女子校の意義を再確認する必要がある。

俺には、この学校に入学しなくてはいけない理由がある。だが、普通に考えたら無理だ。そこで、とある条件と引き換えに、学園長はこの異例の入学を認めてくれた。

「……もう、あんなことは繰り返したくありませんから」

「私も、君と同じだ。目指す場所は違っても、過ちを犯したくない思いは一緒だからね」

女子校の中に、たった一人の男子生徒。完全にアウェイな環境に足を踏み入れ、普通の男子とは道を離れることになったとしても……やるべきことが俺にはある。

あの悲劇を、再び起こさないように……。

phrase 2 求める輝き

音楽には、力がある。その事を意識し始めたのは、いつの事だっただろう？

誰かを笑顔にしたり、幸せを運んだり。

そして、勇気をくれるもの。

幼いときから側にあつて、当たり前のように触れて。

小学生の時には、ベースを弾けるようになって。

「あなた、とっても上手に演奏するのね！」

「え……う？」

音楽を通じて、友達もできた。誰かと喜びを共有できる幸せを手に入れた。

「私と一緒に、やりましょうよ！音楽！」

「君と……う？」

「そうよ！私、歌は得意なの！あなたの演奏に合わせて歌えば、最高に楽しいと思うの！」

音楽には、力がある。今でも、その事を信じている。

「あ、まだ名前言ってなかったわね！私は——」

「知ってるよ。同じクラスだし、いつも明るくて。それから、家がお金持ちって話だよね」

「それなら話は早いわ！さあ、一緒に音楽を奏でましょう！」

「もちろんさ。けど……『自分を笑顔にするため』に音楽をやるのとは違うよ？」

「どういう事？」

「音楽は……『誰かを笑顔にするため』にあるんだから」

音楽には、力がある。彼女との出会いは、まさにすべての始まり。次第に新たな出会いを運び、音楽がより一層好きになった。

でも……。

それがいつも前向きな感情ばかり与えてくれるとは限らない。

その事を、痛感した。

音楽は、なくてはならないものだった。

そのはずだった。

それでも、今の自分じゃ――。

もう、誰かを笑顔にすることはできない。

「それじゃあ、自己紹介しましょうか。もう高校生ですから、自己PRであることを意識してくださいね」

入学式も終わり、俺たちは今A組の教室に戻っていた。担任の先生が教壇に立ち、これから自己紹介を始めようとしている。

「では、牛込さんから」

「は、はい！牛込りみです。……えと、その……うう……っ」

かなりの引っ込み思案だな。もじもじと周りの視線を気にして、何も話せなくなっている。自己紹介とは言え、深く思いつめすぎているんだな。

こういう子は、かえって新鮮だったりして。どっかの誰かとは、全くの正反対だからな。

「……へっくしっ！」

「こら、そのの……確か、戸山さんね。集中して、クラスメイトの自己紹介を聞きましようね」

「は、はい……」

噂したくらいでくしゃみするなよ。まあ、みんな笑ってるし、空気も軽くなった。今自己紹介している彼女にしてみても、結果オーライだろう。と、思っていたのだが……。

「……あ、うう」

こいつは、相当後ろ向きだな。深めの青色をした短めの髪を揺らしながら、やはりオドオドとした様子で言葉を詰まらせている。

「……よ、よろしく願います」

結局、この一言しか話せないまま、彼女……牛込さんの自己紹介は終わった。だが、彼女なりの頑張りを賞して、クラスメイトからパチパチと拍手が送られていたけどな。

にしても、自己紹介か……。人の心配しているのはいいが、俺は何話そう？こんなアウエイの状況で、さすがに男受けを狙うようなことは話せないしな……。

「PRって、アピールってことだよな。アピール……なーくんはどう思う？」

「席が前後だからって、俺に意見を求めるなよ」

運がいいのかどうかかわからないが、俺の席は香澄の後ろだった。出席番号順らしく、孤独は感じないが、親近感しかない。

「では、戸山さん」

「ほら、呼ばれたぞ」

「はいっ！えっと……皆さん、こんにちは！戸山香澄、15歳です！」
年齢まで言う必要があるのか？一応受けてはいるし、まあいいか。

「私がこの学校に来たのは、楽しそうだったからです」

やまぶ……じゃない。沙綾か。香澄、彼女にもさつき言ってたからな。

「中学は地元の学校だったんですけど、妹がここに通ってて。それで文化祭に来てみたら、皆楽しそうでキラキラしてて、ここしかないって決めました！」

俺もこの学校の話は何度も聞いていた。女子校ならではの明るい雰囲気の魅力で、近所の評判も悪くない。俗に言う、お嬢様学校らしいな。

そんなところに入学した俺って……。まあ、こっちにもこっちの事情があるから、そこはスルーだ。

「だから今、すっごくドキドキしてますー！」

擬音語ばかりで、自己紹介になっているのかいないのか。内心苦笑する俺だったが、それも今の間だけだった。

「私、小さい頃『星の鼓動』を聞いたことがあって。キラキラドキドキって、そう言うのを見つけないですー！」

「……っー！」

そうか……。やっぱり、あの時の事は覚えているんだな。もう高校生だけど、俺だって忘れたことはなかった。それだけ、鮮明に残り続けるほどの体験だったからな。

あの時の星空と、高鳴るときめきは忘れられない。それは、まだ俺たちが幼かった頃の話で……。

「キラキラドキドキしたいです!!」

と、香澄の一際大きな声で現実に戻される。周りからも、良くも悪くも注目を集めているようだった。話を終え、呆然としている周りを見て、香澄は首をかしげていたが。

「星の鼓動って?」

「えっとね、星がキラキラって」

「ふふ。可愛い。戸山さんって面白いね」

ま、何はともあれ、香澄の自己紹介成功って感じかな? 最後は結局クラス全体から笑われてたけど、悪い意味じゃないからよしとしよう。

さて、問題は俺の自己紹介だけ……。ん?

「うわぁ……。いー！」

香澄の言葉に魅了されたのか、さつき臆病な自己紹介をしていた子……。牛込さんが、ジーンと香澄の方を見つめていた。正確も真逆だし、自分もあんな風になれたらいいのと思っっているのかな。

「はい、静かに。えー、では次は……成川君ですね。入学式の時にも説明がありました、彼は唯一の特務生として入学を許可されました。その点も含めて、自己紹介をお願いしますね」

「はい、わかりました」

俺は席を立つ。たったこれだけの事で、さつきまで雑談していたクラスメイト達が一齐に俺に注目を向けてくる。

うわ……こんなに大勢の女子に囲まれたことなんてない。じっと見られることも初めてだ。冗談抜きで、圧を感じる。

心臓も張り裂けそうなほどに高鳴ってる。ここまで緊張する自己紹介になるなんてな。俺も、さつきの牛込さんの事を笑う事なんかできないな。

俺は深呼吸して、気持ちを落ち着かせてから自己紹介を始めた。

「えつと……入学式の時にも紹介していただいた、成川翔と言います。家の都合から、特務生として入学することになりました」

頑張れ、俺。プレッシャーとか半端じゃないが、このままやり切るんだ！

「正直女子ばかりで、この先上手くやっていけるかどうかも不安です。ですが……俺は皆と何一つ変わらない高校1年生です。気軽に楽しんで、高校生活を過ごしていきたいと思っています。以上です」

拍手が鳴り響き、俺はすぐに席に座る。やり切ったと言う達成感と、緊張から解放された事による疲れが、俺の中を満たしていた。

「ありがとう、成川君。みなさん、仲良くしてくださいね。では次は……」

よし、やり切ったぞ。もうあんなに緊張する自己紹介は正直体験したくはないんだけどな……。とにかく、次の自己紹介が始まってるし、そっちに集中するか。

「……成川、翔」

ただ……牛込さんの視線が俺にも向けられていたことを、この時は知る由もなかった。

「……何か、今日は帰ったらすぐにでも眠れそうな気がする」

「お疲れ様。あんなに質問攻めされるなんてね」

自己紹介が終わり、ホームルームも何とか終わった。とりあえず、波は超えたかと思っただが……その直後が問題だった。

俺はその珍しさから、クラスメイトの女子にすぐに声をかけられる。しかも、何人も詰め寄られて、次から次へと質問を受けていた。一つ一つ質問に答えてはいたのだが、女子のテンションの高さにはついていくのが大変だった。後は、大勢の女子を相手にして、かなりメンタルを削られたとだけ言っておく。

「なーくん人気者だね！いいな」

「よくねえよ……。てか、香澄も何人かと話してただろ」

「あれは私から話しかけたんだよ。そうじゃなくて、もつとなーくんみたいに黙つても声かけてくれるようなのがいいんだよ！」

いや……香澄が黙り込むつてのが想像できないんだけどな。

「それって、香澄みたいに自分から話しかけるんじゃないかって、翔みたいに向こうから話しかけてほしいってこと？」

「そうそう！さすが、さーや！」

「おい、沙綾。それだと俺が自分から積極的に行けない奴みたいに聞こえるんだが」

「アハハ。そんなつもりないって。言葉のアヤだよ」

本当かね？こうやって気さくに話してはいるが、まだ知り合つて1日も経つてないし、沙綾の事はよくわかっていないんだよな。

「そう言えば私、変な事言つたかな？自己紹介」

「あー……」

「それは、な？」

「なっ、て……二人とも、やっぱり変だった？」

変ではなかったんだけどな。少し周りから浮いていただけってだけで。

「私はいいと思ったよ。真つすぐで、よかったな」

「おつ、ナイスフォローだな沙綾」

「え、それってなーくんは私の自己紹介が……」

しまった。余計なことを言わなかったらよかったか。

「大丈夫。翔もいいと思ってるよ。だよね？」

「……本当？なーくん？」

「あ、ああ。高校になって新しい環境になったんだ。何か始めてみるのも悪くないんじゃないかと思うんだけどな」

香澄の上目遣いに少しドキリとしながら、俺は何とか弁解する。途端に笑顔を取り戻したようで、本当にわかりやすかったけどな。

後は沙綾、マジでナイスフォロー。俺は沙綾に目配せすると、向こうもウインクで返してきた。その反応が可愛かったのは、俺の心の秘密にしておく。

「そうだよね！じゃあ明日から部活見学、一緒に行ってくれる？」

「あー、ごめん。部活は……無理かな。放課後はうちの手伝いがあるから」

「うちって、今朝言ってたパン屋の事だよな？」

「うん。お客さんも多いし、結構忙しいからさ。少しでも助けになりたいって思っで、ずっと手伝いは続けているんだよ」

しつかりしてるんだな。それに優しいし、かと思えば年相応の無邪気さを見せることもある。何となく、目の前の山吹沙綾と言う少女の事を掴んできたのかもしれない。

「そっかあ……じゃあ仕方ないね。なーくんと行くよ」

「俺かよ。言っておくけど、俺は部活には入らないからな」

「えー!?どうしてなの!？」

「放課後はダメなんだ。俺にだって用事がある」

香澄には悪いけど、部活には一人で入ってもらおう事になるな。でも、香澄の社交性ならやっていける。幼馴染がそう言うんだし、大丈夫だろ。

「見学ぐらいならつきあってやれるけど……香澄としては、何かやりたいことってないのか？」

「私がやりたい事か……。うーん……」

腕を組み、香澄は真剣に考えだした。こっちの声が聞こえなくなるくらい、何かをぶつぶつとつぶやきながら。

「キラキラドキドキできるような、何か新しいことを始めてみたいんだよね……。あの時みたいな気持ちになれる何か……。うーん……。？」

「……。ねえ翔。あの時って、さつき自己紹介で言ってた話？」

「ああ。俺も、その時のことは覚えてるんだ」

「へえ、そうなんだ」

香澄の邪魔をしては悪いと思ったのか、沙綾は俺に耳打ちしてくる。俺は懐かしく思いながら、その時の事を話し出す。

「まあ、話せば何てことないんだけどな。小さい時に、香澄と星空を見ただけ」

「それが、香澄の言ってる『星の鼓動』？」

「……。ああ」

たったこれだけのこと。でも、その記憶は今でも胸に残り続けている。その星空から何かがあふれ、冷めない熱となつて満たす感覚も。

「忘れられないんだよ。それだけの事でも、俺たちにとっては特別な事だった。沙綾にも多分あるだろ？何気ないことでも、自分にとっては特別な出来事に感じる事ってさ」

「……。それは」

「となりの席の子に消しゴムを借りる。それだけの事でも、当事者にとっては思い出になったりするだろ？その隣の子が気になってた異性のクラスメイトなら、話ができただけでも嬉しかったりとかさ」

周りが何と言おうとも、その人にしかわからない感情がある。香澄は、その感情の答えを求めている。どこに行けば、見つけられるのか。また感じられるのか。

簡単な事じゃない。それでも香澄は、今こうして探し続けている。俺だって、その答えを知ることができたらと、そう願っている。

その思いが、沙綾に少しは届いてくれただろうか。隣にいる沙綾は、ふわりとした表情のまま。何を考えているかはわからないけど……。何か感じてくれると嬉しいな。

だが……沙綾の表情に、一瞬影ができたのを俺は見逃さなかった。

「……ふくん、翔ってそう言うシチュエーションが好きなんだ。翔って女の子みたい」

「なっ……!?!ちよ、沙綾まで香澄みたいな事言うなよ!?!」

「フフツ。翔って可愛いね。そんなに慌てちゃってさ」

「さ、沙綾……」

おい、いきなりからかわれたぞ。沙綾って、こういう一面もあるんだな……。

「……あくダメだく!全然わかんないよ〜!」

「いきなり大声出すなよ、香澄……」

「それで、答えは出たの?」

「ううん。考えたら考えるほどモヤモヤしてきて、グワーツてなって、よくわかんなくなっちゃって……」

だから擬音語ばかり使っちゃって。

「アハハ……私も一緒に考えてあげたいけど、そろそろ時間みたい。もう帰らないと」

「ん、そっか。店の手伝い、大変だな」

「そうかもしれないけど、やりがいはあるからね。苦労だけじゃないんだよ」

「へえ〜。すごいな、沙綾は」

「そ、そうかな?ありがとね、翔」

やりがいなんて言葉を口にできるんだから、大したものだ。照れ臭そうにしていたが、そこは立派だと思うな。

「じゃあ……また明日ね」

「おう。またな」

「さーや、またねー!」

俺たちに見送られ、沙綾は荷物を持って教室を出ていく。だが、沙綾は扉のすぐ外で立ち止まり、こつちを振り返る。

何か忘れものか?そう思っていた瞬間、静かに口を開いて……。

「……今朝はありがとう。まだお礼、言ってなかったからさ。それじゃあね、翔」

頬をかすかに染めながら、沙綾は笑顔で帰っていった。

phrase 3 音楽に愛された少女

「なーくんって、本当に人気だよね。学校出るのも大変だったし」
「ああ……。今日だけで終わってくるといいんだけどな……」

教室を出た後も、事あるごとに声をかけられる時間が続く。同級生だけじゃない。上級生も普通に話しかけてくる。

それが誰かとすれ違うたびに起こるから、昇降口に着くのもやっとだった。俺もそうだが、つき合わせた香澄も苦労しただろう。

あ……。でも、香澄は途中からこの状況を楽しんでるみたいだった気がするが。金髪のお嬢様みたいな女子生徒や、ピンクの髪の少し間の抜けた先輩とも少し言葉を交わしていたからな。

質問攻めは大変だったが、話してみると皆いい人ばかりだ。クラスメイトも面白い人たちが多かったし、上手くやっていけそうさ。今のところは、特に心配する必要はないだろう。

「けど、この学校って本当に楽しいね！色んな人がいるし、私今すつごくドキドキしてる！」

「俺は違う意味でドキドキさせられたけどな……。女子の元気には敵わないよ」

やつとの思いで正門を出て、俺たちは帰路に着く。香澄とは家が隣同士だし、このまま家まで一緒に帰ることになる。家から学校までは電車で通っているため、しばらくは香澄と二人きりの時間が続くことになるな。

女子と並んで一緒に帰るとか、男子からしてみれば絶好のシチュエーションなんだけど……。相手が香澄だからな。幼馴染だし、変に意識してるわけでもないし。向こうだって、俺の事を特別な風に見てはいないはずだ。

……。俺なんか放っておいて、道端を歩いていた猫を追っかけて行ったくらいだしな。

「おい、ちよつと待てよ香澄。お前、まだこの辺りの事わかってないくせに、あんまり離れたら……。ん？」

香澄の追いかけた猫の向かう先には、二人組の女子が。それも、俺

と香澄にとつては見覚えのある姿で……。

「待て待て〜!……あれ?」

「あれ、じゃないでしょ?もう。お姉ちゃんって本当子供なんだから。恥ずかしいからやめてよね?」

香澄に気づいた一人が、振り返って猫を抱きかかえる。そこでようやく、香澄は猫を抱えた少女が自分のよく知る人物だと気づく。

俺たちより年下の、どこか香澄に似た少女。物腰は落ち着いていながら、やや幼い印象を与える彼女は……クラス確認の時に香澄が『あつちゃん』と言っていた人物。香澄の妹の、戸山明日香だった。

「わ〜!あつちゃんだ!今から帰るの?」

「そうだけど、大声で名前呼ばないでよ……。恥ずかしいんだから」

「え〜?いいじゃん!あつちゃんはあつちゃんだし!」

「よくない。あつ、翔さんも一緒だったんですね」

「おう。今日から俺も、明日香と同じ学校に通うことになったから、よろしくな」

姉の香澄とは違って、しつかりした性格だ。姉の香澄にはツンツンした言い回しをしているが、俺にはちゃんと畏まって話してくる。別にそこまで気を遣う必要はないと言っているのだが、そこは明日香なりのモットーがあるらしい。

「知ってますよ。中等部にも、始業式の際に紹介がありましたから」

「えっ、そうだったのか?」

「もちろんだよ。だって、学校中でたった一人の男子生徒だよ?紹介されないはずないって、お兄ちゃん」

と、それまで黙っていたもう一人の少女が口を開く。明日香の抱いていた猫をなでながら、俺に屈託ない笑顔を向けてくるのは……。

「他人事みたいに言うなよ、美羽。こっちは会う人みんなに質問攻めにあつて大変なんだぞ?」

「私にとっては本当に他人事だもん。それに、お兄ちゃんが自分で入学決めたんだし、私は関係ないもんね〜」

俺の妹、成川美羽。中等部に通つて、明日香とは同じクラスだ。ちなみに、どちらも3年。今年が中等部で過ごす最後の年になる。

「確かに、俺が決めたんだけどさ……。でも、俺が花女に進学するって話した時はすごい剣幕だったよな、美羽」

「そりゃそうだよ。だって、女子校だよ？お兄ちゃん、変態になったのかと思っただもん」

「へ、変態……」

「なーくん、変態なの？」

「お前は会話に入ってくんな」

そう思われても仕方ないよな。女子校に入学する理由なんて、普通の男子なら下心しかないだろう。

けど、俺にはれつきとした理由がある。女子校に入ってまで、やり遂げなくてはいけないことだからな。

「お母さんだって驚いてたし、私が部屋にいる時も何度も口喧嘩してたじゃん」

「そりゃな……。でも、美羽にも言っただろ？俺は家の事を考えてこの学校に進学したんだ。俺の学力で行ける高校は近くにはないし、行けたとしても家計を圧迫する」

「それは、確かに……」

「でも、花女なら最適なんだ。家から一番近いし、学力も問題ない。学費面の心配もいらぬし、選ばない理由がどこにある？」

「まあ、お兄ちゃんの言うこともわかるけどね……」

俺の家は、母さんと美羽の3人暮らしだ。父さんとは数年前に離婚して、今は母さんが1人で俺たちを養ってくれている。

だから、家に帰ってくるのもかなり遅いし、朝も早い。実際、母さんが家にいる時間はほとんどない。たまの休みに家にいるくらいだ。家事も俺たちでどうにかしてるし、贅沢が言えるような環境じゃない。家計を支えると言う理由は、あながち間違っただけじゃないんだよな。

俺にはそれ以外にも、理由があると言うだけでな。

「でも、それだけの理由で簡単に入学なんてできるものなんですか？

だったら、他の人も入学できちゃうんじゃない？」

明日香め、鋭いところを突いてくるな……。こいつは少し考えて返答しないといけないか。そう思っていたのだが、

「だよね。なのにお兄ちゃんは、自分の意見を押し通してまで入学できちゃうんだから。ある意味執念だよ」

「かもな」

美羽が無意識にフォローに回ってくれたから助かった。一応便乗しておいたが、戸山姉妹も揃って頷いてたし。止めるよ。俺に向けた皮肉のつもりだったのに。

「みーちゃんも今から帰るところ？」

「そうですよ。今日は家でゆっくりしようかなって」

「意外だな。美羽の事だし、今日は寄り道すると思ってたのに」

「やだなく？いくら私でも、学校早く終わったからって遊びまわるわけじゃ……。うっ、ゴホッゴホッ！」

「……。っ、美羽！」

マズい、来たか。何の前触れもなく、美羽は激しくせき込みだす。咳に驚いた猫は明日香の手の中から逃げ出し、美羽は周囲に構うことなくその場にうずくまってしまう。

香澄と明日香も心配そうに美羽を見つめるばかり。当の本人は、苦しそうに口と胸に手を押さえて咳を続ける。

「大丈夫か!? 確か薬は……」

「しの……。かば……。手前の……」

「黙ってる！ 薬なら俺も持つてる！」

俺は苦しむ美羽を黙らせると、鞆のすぐに取り出せる場所に入れているカプセル状の薬を手にする。今朝買った飲料水と一緒に、美羽の口の中に薬を流し込んでやった。すると、せき込む回数が減っていき、すぐに表情が和らいでいく。

「どうだ、美羽!？」

「……。うん。もう大丈夫だよ。ごめんね、心配かけて」

「何言ってるんだ。美羽に何もなくてよかった……」

目に見えて落ち着きを取り戻し、俺は胸をなでおろす。この発作

は、いつ起こるか分からないからな。

「みーちゃん、本当に大丈夫？」

「そんなしんみりした顔しないでよ、香澄さん。私ならもう大丈夫だから！」

そうは言っても、俺や香澄たちは美羽の事情をよく知っている。もう何年も、この発作を見続けてきているから。

美羽は……数年前から、心臓に重い病気を抱えている。それも、完治することが極めて難しい病気に。

「明日香も、ね？」

「わかっているけど……美羽は友達で、幼馴染だから。そんな弱ってる姿を見るのは、耐えられないよ……」

いつになっても、この発作には慣れない。明日香だって苦しいと思うくらいだ。家族の俺は、美羽の発作を見るたびに胸が痛くなって仕方ない。

「私も、みーちゃんが大変なのに、何もできないのは辛いよ……」

「だから、そうやって気を遣う必要なんてないですって。それに、私は魔法のおまじないがありますから」

「それは、音楽の事か？」

「うん！」

美羽は、音楽に関することをしている間だけは、どういうわけか病気の発作が起こらない。偶然と言われたらそれまで。だが、俺にはどうしても、偶然なんて言葉では片付けられない何かがあると思っている。

音楽を聞いたり、歌ったり。家では趣味でギターを弾いている。そんな美羽の姿は、とにかく元気で幸せそうだった。病気なんて最初からなかったかのように。

音楽を愛し、楽しんでいる美羽の事を、きつと音楽は守ってくれているのだと俺は思う。美羽は、音楽に愛されているんだ。

「音楽か……。何だかキラキラしてそう！」

「おっ、香澄さんも音楽に興味持ち始めた？この機会に、ギターとかどう？」

「ギター！いいかも！ちよつと考えて見よつかなく？」

「だったら今から家来いよ。どうせ暇だろ？」

母さんも家にいないし、香澄が家に遊びに来ることは普通だったしな。美羽に関しては、逆に香澄の家に遊びに行くことも日常茶飯事だったし。

「うん、そうする！みーちゃん、帰ったらギター聞かせてよ！」

「おっ、香澄さん直々にご使命ですか！これは腕が鳴りますね〜！期待しててくださいいよ？」

「もつちろん！」

勝手に盛り上がってやる気全開な香澄と美羽は、さっさと走ってしまった。ま、駅に行けば合流できるし、あいつらに追いつくのも面倒だ。俺は明日香とゆっくり行くか。

「……元気ですよね、香澄さんと美羽って」

「昔からな。それに振り回される俺たちって……」

「苦労が絶えませんかよね」

「本当それ」

「——♪ どうかな？」

「おお……！すごいすごい！何だか胸の中にドカンと響いてきた感じ！」

それから少し時間は流れて、今は俺の家。香澄はわかっていたが、明日香も一緒に美羽の演奏を聞いていた。曰く、暇だったかららしい。

美羽のギターの腕前はそれなりに高く、こっちのリクエストした曲を簡単に弾いてしまうくらい。ミスも少なく、音と一体化しているような演奏が行われているみたいだった。我ながら、ほれほれするな。

香澄も体を乗り出して演奏を聞いてたし、音楽に対して後ろ向きで

はないみたいだ。こいつはもしかすると、香澄も音楽を始めたりして……。

「でしょ？音楽って、無限の可能性を秘めた生き物なんだよ。誰かを勇気づけたり、時には感動させたりね。色んな世界へ連れて行ってくれる、魔法のような物なんだ♪」

「みーちゃん、言ってることが難しいよ……」

「私は何となくわかるかも。応援ソングとか、恋愛ソングとか。そう言うのって、音楽の力ってことじゃないかな」

「お、さすが明日香！私の幼馴染だけあるね！」

「何年の付き合いだと思ってるの？美羽の言いたい事、さすがにわかるよ」

ぶつきらぼうに言い返す明日香だったが、美羽にとっては嬉しかったのだろう。顔をくしゃくしゃにして、明日香に抱き着いていた。

「明日香く！もう超嬉しい！」

「うわっ、止めてよ美羽！」

「やれやれ。まるで香澄だな……」

「だったら私はなーくんに……」

「来なくていいからな」

「何で〜!?!」

そんな小動物みたいな顔でこつちを見ても無駄だぞ。面倒だし、恥ずかしいし。……って、だからじつとこつち見るな。ウルウルするな。それに近い。いや、マジで。

「と、とにかく！香澄は音楽の事、どう思ったんだ!?!始めようって気にはなったのか!?!」

俺は強引に香澄を押しつけ話題を変える。香澄は膨れっ面になっていたが、俺だってあのまま向かい合っているのは少々堪える。

「うーくん、そうだね……。私は、音楽いいと思うな」

「だったら、香澄さんも音楽デビューしちゃう!?!ギターなら私が教えるよ?」

「ありがと、みーちゃん！でも……まだ部活見学もしていないし、音楽って言っても、私の中でちよつと何か足りない気がするんだ。あの時み

たいなキラキラドキドキには、少し遠いつて言うか……」

「キラキラドキドキ？」

美羽と明日香が同時に疑問を口にする。俺たちよりも小さかったし、すぐには思い出せないのだろう。いや、もう完全に忘れてしまっているだけなのかもしれない。

「あっちゃん、子供の頃キャンプに行ったこと覚えてる？」

「キャンプ……うん。それは覚えてる」

「あつ、確か夜にみんなでテント抜け出して、森の中を探検したって話？」

「それぞれ！覚えてるじゃん、みーちゃん！」

最初は香澄の興味本位。無理矢理俺を連れ出して、そこに美羽が便乗して。明日香は怖がっていたのに、美羽がテントから引きずり出して。

親には内緒で、結局後で大目玉くらったけど……俺はその探検で、運命の出会いを果たせたんだ。

「あの時、茂みを抜けた先に広がってた星空、すごかったよね！宝石みたいでキラキラしてて、星がドキドキしてた！」

沙綾にも話した、満天の星空。言葉では言い表せない美しさが広がり、華やかな光が夜空を彩る。隣に立つ香澄たちの事も忘れてしまうくらい、俺はその景色に見入っていた。

途端に何かが俺の中で弾け、胸の中に抑えきれない衝動となつて満たされていくのを感じていた。興奮？感動？歓喜？その正体が何なのかもわからず、ただ目の前の世界に浸り続けていた。

「そうだ……！思い出した！すっごく綺麗な星を見たんだ！あんな星空見たのは、あの時くらいじゃなかったですか？」

「うん！私、それがずっと忘れられなくて、いつかまたキラキラドキドキしてみたいなって……！」

俺も、そして香澄も。あの光景を忘れることはない。だから俺たちは、探し続けているんだ。あの時の星空に近い何かを。

もう一度、あの空に会いたいから。

「それ、星じゃなくて自分の心臓の音でしょ？」

「うわっ、明日香はロマンがないな。お兄ちゃんはわかってくるよね？」

「ああ。俺も、いつかまた感じてみたいって思ってる。香澄と同じだな」

「翔さんまで……。まあ、お姉ちゃんほどじゃないからいいですけど」「私はダメなの〜!？」

香澄の場合は、オープンすぎるんだよな。もう高校生だし、ちよつとはしつかりしろとでも言いたいんだろうな、明日香は。

寂しい目を向けてるし、明日香の考えてること当たってるんじゃないか？ だつたらすごいな、俺。

てか、さつきは美羽にくつつかれてたのに、今度は香澄が明日香にくつついているな……。明日香も若干嫌がってるし、ご苦労様だ。

「まあ、音楽も一つの可能性ってことで、考えておいてもいいんじゃないか？ 心変わりすることだつて、あるかもしれないしな」

「そうだね〜……。キラキラドキドキすること、見つかるといいな……。」

だが、この時の香澄はまだ知らない。運命を変える出会いは、すぐそこまで迫っていることに。

そこから、全てが動き出すことになることも……。

phrase 4 星の導き

「うくん、今日もキラキラすること見つからなかったな」

香澄たちが花咲川女子学園に入学して、1週間近くが経とうとしていた。香澄も翔も学校生活に慣れ、友達もできた。順調なスタートを切っているように見えているが、香澄にとっては違う。

まだ、キラキラドキドキで見つかったくない。翔にも付き添ってもらい、部活見学にも足を運んでいるのだが、どうも納得行く部活がないのだ。

妹の明日香の所属する水泳部も、求めているイメージとは違っていた。

高校生になった。新しい日々が始まった。なのに、自分の中でくすぶる熱の居場所を見つけることができていない。焦ってはいなかったが、ウズウズとした興奮が香澄を駆り立てていた。

そして放課後。特にやることもないまま、香澄は家に帰る途中だった。明日香は部活。沙綾は家の手伝い。翔は……。

「お〜い、香澄！」

「……あつ、なーくん！」

香澄の後ろから声をかけてきた。香澄と同じく一人だったが、そこでふと疑問に思う。

「あれ？今日はみーちゃんと一緒に帰るって言ってなかったっけ？」

「そのつもりだったんだけどな。クラスの友達と遊んでくるって言ってな。さすがに引き留めるのも悪いし、俺だけ帰ることにしたんだ」
美羽の体調の事もあるが、美羽にだってプライベートな時間はある。そこは俺も割り切ってるし、大切にしないとイケないと思ってるからな。少し心配ではあるんだけど。

「で、香澄は？今日は部活見学は良かったのか？」

「見学はもういいかな〜って。ちょうどいいから、なーくんと一緒に帰ろっかな……あれ？」

並んで歩き出す香澄だったが、何かを見つけて駆け出してしまふ。すぐ近くの電柱の脇にしゃがみ込むと、そのままジーンと動かなく

なつてしまった。

何に惹かれたのか。俺も香澄に倣つてしやがんでみることにした。ちらりと俺の方を見た香澄は、その視線の先を指さして……。

「ねえ、なーくん。これって……」

「こいつは……星のシール？何で地面なんかに着てるんだ？」

アスファルトの地面に、可愛らしいラメ入りのシールが一つ貼られている。星型で、爪でこすつてもはがれそうにない。前からここにあつたのか？

と言うか香澄の奴、星に反応しただけじゃないだろうな……。ただのシールだし、これって子供が喜ぶような奴だろ……。

「えへへ。キラキラしてて可愛いね。こんなところで星に出会えるなんて、いいことありそう！」

やっぱりかよ。どうせ、あの時の星空の事を考えているんだろうな。さすがに香澄の思考パターンも、そこまで単純だとは思えないけど。

「星つて、シールだろ。あの時みたいな星空とは、ちよつと違うんじゃないか？」

「かもしれないけど、何かあるかもしれないじゃん！あれ、こつちにも貼つてあるね？」

「ん？本当だな。向こうの方にも見えないか？」

「うわー！星がいっぱいだね！ちよつと追いかけてみようよ！」

「え、ちよつとかす——」

おい、マジかよ。反対しようとしたが、そんな暇もなく香澄に手を引つ張られたため断念。キラキラの笑顔を振りまきながら、香澄は俺を振り回す。まあ、楽しそうだからいいかな……。

にしてもだ。この星のシール……さっきの電柱もそうだが、ガードレールや壁に至るまで、とにかく目に付くところに貼つてある。しかも数が多い。子供のいたずらか何かか？

「どこかに続いているのかな？何かキラキラすること、始まりそうな気がする！」

「始まろうが何だろうが、俺は構わないんだけどさ……本当にこの

シール追っていくのか？」

「そうだよ？この先に何かあるのか、気にならない？」

「気にはなるけど……」

俺はスマホで時間を確認する。まだ遅い時間帯じゃないし、このまま香澄を放っておくと、どこまで行くかわからない。

と言うより、香澄が俺の腕をがっちりホールドしているせいで、抜け出すのも困難だ。無理に離れようとすると、何かふくらみが当たって健全な男子にはよろしくないもので……。

しかも、香澄はちょうど上目遣いで俺を見上げる立ち位置。前にもこんなことあったが、この手のやり口には俺は弱い。香澄の上目遣いは見慣れているはずなんだけど、放っておけないオーラが出ているんだよな……。

「……あくもう、わかった！やるよ！付き合えばいいんだろ!」

「やったー！ありがとつ、なーくん！だーいすきっ♪」

抱き着く力が強くなった。俺はどぎまぎしながらも、香澄を引きはがして先に進む。後ろでグダグダ言ってたが、俺の羞恥心は限界なんだ。

あ、俺の反応見て勘違いしてもらった困るから一応言っておくが、俺は別に香澄が好きだとかそう言うんじゃないからな？ただ心配してるだけだし、幼馴染くらいしか今の香澄のブレーキ役はいないしな。

そう。こいつはあくまでも幼馴染。こんなぶっ飛んだ奴を好きになるなんてことは、絶対じゃない。そのつもりだ。

星のシールを辿り、俺たちは歩き続けて10分ほど。さっきまで無数に見つけていたシールも、ここに来て急に途切れた。

「シール、シールは……あれ？」

「なくなつたな。向こうは来た道だし、こいつで最後つてとこだな」
「え〜!?!お終い〜!?!」

シールがなくなつたことで、香澄は駄々をこね始める。本当に子供みたいだが、付き合つた俺としても、こんな結果は不本意だ。完全に時間を浪費しただけになる。

てか、ここはどこなんだ。もう日も暮れ始めているが、このままじゃ帰り道もわからない。またシールを辿つて元の道に戻るにも、時間がかかりそうだ。

「これで終わりなんてやだよ〜!このままじゃ、何もキラキラドキドキしない〜!」

「そうは言つても、仕方ないだろ。いくら探しても、もうシールはないんだ。諦めよう」

あるのは、少し古びた店くらいだ。カーテンが閉まつていて、もう閉店した後みたいだが。どっちにしてもアウトか。

「でも、星のシールが――」

「うるさいな!大体、星のシールを見つけて、キラキラがどうか言つて追いかけ始めたのはどこの誰だ?そいつに無理矢理付き合わせた人の気持ちも、少しは考えてほしいんだけど!?!」

「ひ、ひはいよ、ふあーふん!ふおめ、ふおめくん!」

俺はさすがにムカついてきたので、香澄の頬を軽くつねる。手に伝わる柔らかい弾力とは裏腹に、香澄は痛そうに俺の手を引きはがそうとするが、そんなの知らん。

「ふえ、ふえもふあーふん!ふおんふおうひふおふおまふえいーの!?!」

それに、何言つてるのかもわからないしな。解読できた奴、俺に教えてくれ。

「何言つても、ダメなものはダメだ。もう遅いし、シールが見えなくなる前に帰らないと」

「うう……」

ようやく香澄も大人しくなつたか。せめてあの店が開いていれば、少しは珍しい物でも見て帰ることができたかもしれないのにな。

その前に、まず何屋だここ。名前は……『流星堂』？質屋みたいだな。なら、本当に掘り出し物とかもあったかもしれないのか。もう少し早く来ていれば……。

「……ん？」

「ふえ？」

「いや、今あの店の裏手の方、何か光った気がしてな」

香澄の頬をつねる手を離し、俺は光る何かを確かめるために店の方へ。やはり店は閉まっていたが、奥に続く通路には入れるみたいだった。

「光ったって……もしかして、さっきのシール!？」

「わからないけど……あ」

見つけた。さっき見つけた、謎の光の正体を。

「星のシールだ! うわ〜キラキラ!」

それは、通路の壁に貼られていた、さっきの星型のシール。しかも、何個もペタペタと貼ってある。続いているかと思っていた道だったが、ゴールが見え始めてきたか。

「けど、ここ人の家だぞ? 勝手に入って——」

「わあ、すごい! 蔵がある!」

はい、俺は無視ですか。そうですか。何も気にせずに奥まで入っていくため、俺は香澄の後について行くことに。やっぱりブレーキ役は必要だったってことだ。

遠慮がちに通路を進む俺だったが、すぐに視界が開けて明るくなる。そこには、時代劇に出てくるような派手な蔵が建っていた。まるで星のシールに導かれて、タイムスリップしたかのように。

「こいつは驚いたな……」

「あの蔵、少し開いてるね。誰かいるのかな?」

「開いてるね、じゃない。もうこの辺にした方が——」

「あ、何だろ、あのケース?」

また無視かよ。どうなっても知らないからな?

「ねえ、なーくん。ちよつと見て!」

「何だよ。あまり人の家覗くのは、俺も嫌なんだけど」

「あのケース、大きな星のシールが貼ってある……」

「星のシール？」

少し開いた蔵の入り口から、中の様子がうかがえる。段ボールや中古品らしいものが、散らかりながらも置かれていた。

その中でも、香澄の見つけた星のシールのケースは、一際存在感を放っているように見えた。黒色で、形は長方形。大きめのケースだったが、中に何が入っているのか全く分からない。

何となく中身の予想はついているが、質屋の蔵だし、どんなものが入っているもおおしくないからな。

俺たちはもつと中を見たいと、身を乗り出して……。

「両手を挙げるー！」

「えっ!？」

後ろから何者かに脅される。そうつと振り返ってみると、そこにいたのはツインテールの金髪の少女。吊り上がった険悪な目つきを俺たちに向け、手には刃物を持っている。

「きゃー、はさみー!ひ、人に向けたら危ないよ!」

「逃走経路を確保しておかないなんて、とんだ素人ね!逃げられるなんて、そんな甘い考え通じると思うなよ!」

「……何で盆栽用のはさみだ?」

「変なところに触れてんじゃねー!」

いや、気になったんだからしようがないだろ。それはそうと、少女ははさみを持ち直して脅しをかける。女の子なのに、大した度胸だな……。じゃなくて。

「つたく……で、あんたたちは何?初犯?」

「あ、あの、私たち星を見つけて……!」

「そ、そうだ。星のシール。そいつを辿って言ったら、ここに着いたって言うか……」

マズいよな。俺たち、完全に泥棒扱いされてる。何とか誤解を解こうと必死に弁解を試みるが、少女には全然届いていない。それどころか、さらに語気を強めて俺たちに問いただしてくる。

「両手!」

「はい！」

「名前！」

「戸山香澄です！」

「そっちのあんたは!？」

「成川翔——あっ!？」

勢いで名乗ってしまったじゃねーかよ！これってかなりヤバくないか!？」

「ふん、言ってから気づいても遅えつつーの。つか、それ本名？責任逃れで偽名使ってんなら……止めるよ」

「え……お泊り？」

「何でそうなる!？」

つい突っ込んでしまっただろうが！この状況で親切に泊めてくれる展開なんてそうそうねーよ！てか、香澄はこの状況を理解しているんだろうな？

「違うー！あんたたちを捕まえるって言ってるの！」

「えっ!?!泥棒じゃないです！なーくん、もしかして私たち、泥棒だっと思われてるの!?!」

「当たり前だろ！てか、やっぱり気づいてなかったんだな!?!」

「この幼馴染とききたら……」。

「……あんたも大変だな。って、その制服、花女……うちの生徒かよ」

「えっ、同じ学校なの!?!何年生？私は高1！」

「おい、ちよつと香澄……」

何を平気で話し出しているんだよ。こいつ、本当にわかってるんだろうな？

「違うから！もー出てって！質屋は今日は終わりだし、こっちは全部

「ゴミー」

「ゴミ!?!あの中のもの、みんなそうなのか!?!」

「さつきそう言ったんだけど」

てつきり、質屋に出す商品かと思っていたんだけどな。探せばいくらでも使えそうな物がありそうなのに。

「ゴミってあれも？あの星の……」

「質流れのギターかなんかでしょ！」

予想通りか。あのケースに入っているのは、ギターだった。美羽のギターケースも、あれくらいのサイズだったはずだしな。

「壊れているのか？」

「さあ？私は何も知らねえし。興味もねーよ」

「見ていい？触っていい？」

「はあ？お前なあ！」

と言うか、もう蔵の中に若干入ろうとしているしな。これは強引だろうが、押し通すパターンだろう。

「ダメに決まってんだろ！それにお前、どの口が言ってるんだよ！」

「この口！ねえいいでしょ？ちよつとだけ！ちよつとだけだからー！」

「うわっ、ちよま、伸びる伸びる！服引っ張んな！」

「……はあ。触ったら出てってよ。あんたも、すぐに連れて帰れよ？」

「わかってる。俺はこいつのブレーキ役だからな」

「だったら何でここに入る前に止めなかったんだよ」

「そ、それは……」

香澄が押し切るまでもなく、すぐに彼女は蔵に入ることを承諾してくれた。ついでに俺も入れてくれたところを見ると、口調は荒いが性格は悪くなさそうだ。

「てか、さつきから気になってたんだけど、その制服花女だろ？何で女子校なのに、あんたが花女の制服着てるわけ？男子用の制服があるのも初めて知ったけど」

「……ん？」

俺は彼女の質問に、少し疑問を抱いた。俺たちの学校を特定したところと、話しぶりから察すると、彼女も花女で間違いはないだろう。男

子用の制服とは言っても、すぐに花女だと言い切って見せたのだから。

なら……どうして彼女は、俺の事について知らない？

入学式でも説明され、中等部にすら情報が行き届いている。当日休んでいたとしても、連日の騒ぎから俺の事を知っていてもおかしくない。今でこそ、その騒ぎは落ち着いたんだけどな。

「言えないってか？変態紛いの行動なら、それこそ警察呼ぶけど」

「待て、そうじゃない！ただ——」

「ねえ、ケース開けるけどいいー!?」

「あつ、そうか。あいつのこと忘れてた……」

心の底から嫌そうな顔をしながら、少女は香澄を目の前に呼ぶ。まだ少女の中では、俺たちは泥棒扱いだからな。

ドスンと音を立てて地面に置かれたケースは、相当重そうだ。香澄がケースに手をかけるのを見て、俺も横から中を覗き込む。少女は迷惑そうに視線だけ向けていたが。

「……………」

その瞬間だった。香澄の表情が変わり、笑顔が消えたのは。だが、見覚えがある顔だ。そう、これはまるで、あの時の星空を見ているように……。

「星の、ギター……………」

星の形をした、赤いギター。中古品とは思えないほど、状態は良かった。弦も張り替える必要はなさそうだし、このまま使えるんじゃないか。

「すごい、このギター星の形してる……！見てよ、なーくん！」

「デザインといい、なかなかカッコいい……。香澄が食いつくのもわかるな」

「……………そう言うギターもあるんだろ」

俺たちが興味津々にギターを見ているのもどうでもいいと言わんばかりに、彼女だけは無関心だった。だから、ガラクタ同然に扱って

いるんだろ。うな。

そんな彼女をよそに、香澄は弦に手を置き、鳴らしてみる。ギターなんて弾いたことないはずだから、軽く弦を弾くだけ。だが、香澄にとってはこれ以上ない興奮を呼び覚ましていた。

「鳴った！すごい！聞こえた!?!」

「聞こえたよ。ゴミにしておくにはもったいないギターだ」

「はい、終わりー」

と、彼女はパンパンと手を叩いて、すぐにギターを取り上げようとする。いつまでも赤の他人に騒がれるのは、我慢ならないのか。まあ、ならないよな……。

「待って！もうちよつとー!」

「終わりつつつたるー!そんなに弾きたいなら、楽器屋さんとかライブハウス行けよ!」

「えっ、ライブハウス!?!どこにあるの!?!」

「知らねーよ!」

「わかった!探してくる!」

そう言うと、香澄は赤いギターを持ったまま蔵の外に出て——つて、

「「えっ?」」

おい、あいつ何した?今、普通にこいつらのやり取りを見守っていたが、さらつと何したんだよ香澄は。ねえ?

「……おい、お前」

「わかっています。すみません。すぐ呼び戻します。追いかけます」

もう泥棒紛いでも何でもない。真正正銘の泥棒だ。普通に人のギター持って行って、完全にアウトだからな!?

俺は急いで香澄を追いかける。と言うか、無視はできないだろこれは!!

「もう何なのあいつら……。この泥棒が——!!」

その後ろで、怒りでわなわなと震えていた少女は、騒ぎを起こした

張本人に聞かれることのない怒号を、一人発していたのだった。

phrase 5 湧き上がる熱情

「ふんふんふーん♪ライブハウスはどっこかな♪」
「うっさい。今調べてるから」

香澄がギター片手に逃走(?)してから数分後。俺は何とか香澄に追いつくことに成功し、例の少女も後から息を切らして追いついてきた。もう日は暮れ、夜になっている。

家に帰る時間もあるし、ギターは諦めて返すように話を進めていたはずだったのだが……。

『待って！本当に後少し！このギターに、私何か感じたの！キラキラドキドキできること!!』

と言いだして聞かない。そうならばキリがない。俺は幼馴染のキャリアから、この状況をこっち側に傾けることは不可能だと悟っていた。

なので、もう香澄の気のすむまで付き合うことにする。美羽にはメールで、遅くなるとだけ伝えておいた。

話し合いでもできないとわかった少女も、仕方なく香澄と行動を共にする。適当にその場を凌げばそれでいい。そう割り切って、ライブハウスを調べているところだった。

「私がいなかったら、本当に泥棒だよ？わかってる？」
「うん！一緒にいてくれてありがとう！」

はあ……と大きなため息を吐く少女。さすがに申し訳ないので、俺から謝っておく。本当は香澄も謝らないといけないはずだが、こんな慣れっこだ。一々腹を立てていては、香澄とはやっていけない。

「本当に悪いな。香澄が迷惑かけて……」
「そう思うなら、あんたもちゃんと止めてくれよ」

いくら何でも、ギター持ってどこか行くなんで、さすがに俺にも手に負えない話だよ。

「優しいね！何だかあっちゃんみたい！」
「は？何？あっちゃん？おい、誰の事だよ」

「こいつの妹。しつかり者で、こんな騒ぎ起こす奴とは大違いなしっ

かり者」

「そんな言い方ひどいよ〜!」

「ひどくなんかないからな!?俺が香澄にどれだけ振り回されてきたと思ってる!?小学3年の遠足の時に、おやつ忘れてきたからって半ば無理矢理奪ってきたりとか、中学2年の時なんか——」

「う……。その、ごめんなさい……」

珍しくシユンとしおれる香澄。言い寄られてた時も、目が泳ぎまくってたからな。言おうと思えば他にもエピソードはあるが、それはまたの機会だ。

「うっせー。何勝手に盛り上がってんだよ。どうでもいい」

「盛り上がってなんかないよ〜!な〜くんが私の悪口行ってくるだけだも〜ん!」

指さして泣きつくとか、マジで小学生だな……。

「知らねー。それに、これは優しさじゃねーからな?私はただ巻き込まれただけだし、そもそもお前が素直にギター返してくれたら、こんなことにはならねえんだっつーの」

正直、俺もそう思うんですが。

けど、素っ気ないな……。気がない発言は目立つが、それでも香澄に付き合ってる辺り、何だかんだでいい奴なんだよな。ライブハウスの場所も探してくれてるし。

だが、この近辺でライブハウスって言うと、俺の記憶の中に思い当たるのは……。あそこしかないんだよな。

「……あ、あった」

「……?えっと、ライブハウス『SPACE』……?」

ギターを抱えたままドアを開け、香澄たちはライブハウスの中へ。そんな一行を出迎えてくれたのは、何人ものお客さんの視線だった。ロビーはほぼ満員で、何かを待っているようだ。

香澄はすぐに受付のスタッフを見つけると、グイグイ話を進めていく。物怖じせずに積極的にになれるのは、香澄の長所だな。

だが……その願いは多分、聞いてくれないと思うんだよな。

「こんばんはー！ギター弾きたいんですけどー！」

「えっ？ギターを弾きに来たの？え、えーと、ここはね……」

思った通り、スタッフも相当困っているな。香澄も意地で押し切ろうとしているし、このままではどうなるかわかったものじゃない。

仕方ない。ここは助け舟を出してやろうか。

「ここは練習スタジオじゃないよ」

「あつ、オーナーー！」

俺が口を開く前に、このSPACEのオーナーである、おば……ゴホン。人生経験の豊富な女性が仲裁に入る。バンドに対する情熱は、人一倍持っている人だ。

受付のスタッフも、わかりやすく安堵している。と、そこでオーナーがちらりと俺に視線を向けてきた。

「……ん？何だ、成川もいたのかい」

「お疲れ様です。今日ここに来たのは、本当に偶然なんですが」

「えっ、なーくん知り合いなの？」

「知り合いも何も……俺、ここでバイトしてるんだけど」

だからすぐにSPACEの事が思い当たったし、ここが練習スタジオじゃないこともわかっていた。ちなみに、香澄が声をかけたスタッフは、互いに顔見知りだ。

「ふーん。あんた、ここでバイトしてんだ」

「まあな。中学の時から、手伝いをさせてもらってる」

そんなわけで、この辺りの事は香澄よりはわかってたりする。SPACEの近辺に流星堂なんて質屋があるのは知らなかったけど。

小声で話す彼女と俺をよそに、オーナーは香澄に近づいていく。迫力ある存在感に圧倒されながらも、香澄は星のギターをギュツと抱え込み、オーナーと向き合った。

「ステージに上がれるのは、オーディションに合格した奴だけだ」

「そう、ですか……」

「練習ならよそでやりな。ここはライブハウスなんだ」

「……………」

さすがに言い返すことはしなかった。わきまえるところはわきまえる。それくらい線の引きは、香澄にだってできる。

「ほら、やっぱダメなんだって。帰ろうって……………」

「こいつの言うとおりで。これ以上は迷惑になる。オーナー、いきなり押しかけてしまい、すみませんでした」

「そう謝ることはない、成川。どうだ、せつかくだし見て行くかい？ライブ」

「確か今日は、Glitter*Greenのライブでしたよね」

Glitter*Green(グリッターグリーン)——通称グリグリは、俺たちの通っている花女の生徒で構成されたバンドだったはずだ。全員先輩で、この頃SPACEで人気を集めているバンドの代表格だ。

「ライブう？おい、ヤバいつて。何か頭振ったりするんだろ？」

「見てもいないうちから決めつけるんじゃないよ」

「そうだぞ。お前が思っているような、ヘビーでロックなものじゃないからな」

露骨に嫌がる少女だったが、すかさずオーナーが口をはさむ。なので、俺も一応加勢しておくことにした。

「大丈夫だって。俺も最初はそう思ってたけど、食わず嫌いなだけだったし。それに、どうせここまで来たんだ。見ないで帰るのも損だと思っぜ？」

俺も最初は、彼女が言ったみたいなのハードな印象を持っていたしな。人を選び、万人に受け入れられるかと言ったら違うような、俺もあまり手を出そうとは思えないものだった。

けど、このSPACEのバンドは違う。スタッフとしてライブを何度も見ているが、どれも熱く胸がたぎるものばかり。あの星空の興奮に通じるものが、もしかしたらあるのかもしれない。

「……じゃあ、確かめてやる！あんたがそこまで言うならね！」

よし、決まりだ。香澄は言わなくても見るだろうし、そこは放っておいても問題ない。

「んで、チケット代いくら？」

「高校生かい？」

「違いますー」

「ん？でもさつき、俺たちと同じ花女の生徒だって……」

「言ってねえ」

いや、言ってた気がするんだが……本当にいいのか？俺、親切に教えてやろうとしてるんだけどな……。

「1200円だ」

「くっ、高えな……」

「あの、高校生は……」

「600円」

「なんでわざわざこんなことに1200円も……って、はあ!？」

「ねえねえ、携帯で何見てるの？」

「この店の情報。一応調べておこうと思って」

「隣にこの店のバイトがいるのに」

「別にいいーだろ！自分で調べる！」

開演まで5分を切った。裏ではもう準備を済ませて、グリグリがスタンバイしている頃だろう。

てか、今日は客としてライブを観ることになるんだな。何気に初めてで、ちよつとワクワクしてる。

「……え、ここがガールズバンドの聖地？何で？」

「俺が教えてやろうか？」

「……っ、い、いらねー！」

頑固だな。どことなく、香澄に似ているような気もする。

「お客さんすごいねー！みんなライブを観に来た人かな？」

「うへえ、知らないバンドばっかだな……。何でこんな人いんの？」

「それも俺が教えてやろうか？」

「いらないつつってんだろ！」

「はいはい、わかった。だったら口で言うより、実際に観てもらった方が早い気がするな」

「あ？それってどういう——」

そう言いかけた彼女の言葉を遮るように、ステージ裏から4人の少女が姿を見せる。会場の熱気は急上昇し、歓声が俺たちの話し声をかき消した。

彼女たちこそ、Glitter*Green。出ただけでこの盛り上がりだ。人気の高さは、容易にうかがえる。

それぞれが自分の担当楽器の前に立ち、軽く試し打ちをする。準備が終わったところで、ボーカルを務めている少女がマイクに向かって叫ぶ。

「SPACE！遊ぶ準備はできてますかー!？」

「わあ、あの人たち、すごい人気だね！まだ演奏始まってないのに、みんなテンション高いよー！」

「それがあのバンド……Glitter*Greenだ。彼女たちのライブは、とにかくすごいぞ？」

「ふーん」

本当にどうでもいいって感じだな。もう少し興味を持ってくれよ。一緒になって盛り上がる香澄とは大違いだな。

「オッケー、盛り上がってるね！それじゃあ行くよー！」

観客の興奮が冷めやらないまま、早速演奏に入っていく。それぞれの音が重なり、一つの音を紡ぎます。その音色は、観客の心を掴んで魅了する。

「……っ！」

香澄の表情が変わったのは、演奏が始まってから間もない頃だった。

「やっぱグリグリライブは安定感があるなく。……ん、香澄？」

「綺麗……！とつても、キラキラしてる……！」

あの時と同じだった。幼い頃、森の奥で星を見上げた時に見た、心が奪われた表情と。そして今も大事に持っている、星型のギターを見た時と。

(すごい！ペンライトの光がいっぱい！まるで……あの時の星空みたい!!)

翔の考えていたことは、まさにその時香澄が考えていたことと同じだった。星空から感じた鼓動。ずっと探していたキラキラドキドキが、今日の前に広がっている。

無数のペンライト。そして観客を惹きつけるライブ。答えは、バンドの中にあつた。

「うええ……何だよ、この盛り上がりは……！」

「すごい、すごいよ！なーくんが言ったとおりだった！」

「だろ？だから言ったんだ。観た方が早いってな」

このライブを観たことは、香澄にとつては大きな影響を与えるきっかけになつただろう。それも、間違いなくいい方向に。

記憶の中でしか見ることができなかつた香澄の表情が、今も隣で輝いているのだから。

「はあ、何？聞こえない！」

「すごいんだってよ、このライブが。どうだ？お前もライブ観て何か感じないか？」

「んなの全くねーよ！こんなのに夢中になるとか、何考えてんだっつーの！」

「どうだか？少なくともこいつは、ここにいる誰よりも心を奮わせているぜ？」

こっちの声は一切聞こえなくなるほどに、香澄だけは彼女たちの作り出す音の世界にのめりこんでいた。心を奪われ、抑えきれない衝動が興奮へと転じていくのを、俺は隣で感じ取っていた。

「見つけた……！私が、キラキラドキドキできるもの……!!」

この時、香澄はようやく出会うことができた。ずっと追い求めてきた瞬間に。

そして今、香澄の中で全てが始まろうとしていた。

夢を撃ち抜く瞬間が。

phrase 6 夢への道標

「有咲、待って〜。市ヶ谷さん!」

「市ヶ谷じゃない! ついてくんな!」

翌朝。香澄は速足で歩く金髪の少女を追いかけていた。なぜか少女は、ムスツとして不機嫌マックスな状態だったが。当然、それにも理由はあるわけで……。

「てか、何なの? 朝から人んちに押しかけてきて! 部屋にまで入ってくるとか、マジであり得ないんだけど!」

目が覚めたら、そこには昨日ギターを巡って騒動を起こした少女の姿が。特徴的な髪、鬱陶しい性格。全てが記憶の中にあるままだったが、そもそもなぜ香澄が彼女の家にいたのか。

「だって、一緒に学校に行こうと思っておうち行ったら、まだ寝てるから起こしてきて〜って、おばあちゃんが」

「ったく、そう言う事かよ……。言つとくけど、ばあちゃんが許可しても私は許可してねーからな!」

そんなわけで、彼女は早めに支度を済ませると、逃げるように家を飛び出してきた。もっとも、すぐに香澄も彼女を追いかけ、ものの数分で現在の状況になってはいるが。

「つーか、有咲って……! 何で私の名前知ってたよ!」

「おばあちゃんがそう呼んでたから! 有咲って言うんだよね! 有咲っ ♪」

「何から何までばあちゃんの仕業かよ……」

一応香澄と話を合わせてはいるが、当の本人は何とか香澄を巻こうと必死だった。速足で逃れようとする有咲だったが、香澄も負けじと着いてくる。

なかなか思うようにいかない。有咲はため息を漏らしながら、どうにか隙を作ろうと様子を伺う。

「そーいや、昨日の奴はどうしたんだよ。一緒じゃねーのか?」

「なーくんは多分、今頃学校に向かっているんじゃないかな〜。みーちゃんも一緒だと思う!」

「なーだとか、みーだとか、んな事言っても知らねーし。ってか、ならお前は何でここにいるんだよ」

「昨日の話の続きー」

「昨日って、あの話の事かよ……」

時は遡って昨日の事。SPACEで行われていた、グリグリのリイブが終わってからの話だ。

「すごいキラキラ！バンドバンド！バンドやろうよっ!!」

香澄はライブを観たことで、幼い時に感じた何かが芽生え始めていることに気づいていた。その原動力であるバンドを、行動力のある香澄が実行に移さないわけがない。すぐに香澄は、俺に翔に話を振っていた。

「バンドって、今日のライブで興味出たって事か？」

「うんーなーくんと、それに——」

「って、私もカウントしてんじゃねーよ」

俺は自然と頭数に含まれているんですね……。香澄がそうしたいのは山々だが、それは無理な相談だ。

「俺もできたら協力してやりたい。けどな……。残念だが、香澄とはバンド出来ないんだ」

「えっ、どうして？」

「ガールズバンド規定法って知ってるか？」

それは、女性でも気軽にバンドの世界に足を踏み入れてほしいの思いから成立した、一般的なバンドと女性のバンドを明確に区別するためのルールみたいなものだ。

規定法と言っても、そこまで複雑なものじゃない。大雑把に言ってしまうと、ガールズバンドは、構成員が全て女性である必要があるって話だ。まあ、男性が混じったらその時点でガールズバンドとは呼べ

ないしな。

「そのうち改正されるって話は聞くが……その規定法がある以上、俺をバンドのメンバーとして数えるわけにはいかないだろ」

「うーん、そっか……」

まあ何を言っても仕方がない。とにかく俺は、直接バンドとして香澄をサポートすることはできないってだけだ。あくまでも、直接の話だが。

「大丈夫。練習くらいなら俺にも協力できるし、メンバー探しだつて手伝えるさ。けどまずは、香澄とこいつの二人でメンバーを集めるところから始める必要があるな」

「はあ!? おい、ちよつと待てよ! 何で私がこいつとバンドする前提なんだよ! さつきも言ったけど、私はやらねーからな?」

グイグイと俺に詰め寄り、今にも胸倉をつかみそうな勢いだ。香澄の心には響いたみたいだが、彼女にはうるさい雑音にしか聞こえなかったというわけか……。

てか、この下から見上げられてる体勢、少し危ないんだが。彼女も小さいし、それに割とふくらみがあつて、谷間が服の間から見えてたりするんだが……。てか、若干当たってる。

「お、おい落ち着けて……」

「ふん、バンドとか勝手にしてろよ。私、もう帰るから!」

目のやり場に困っていたが、彼女が自分から離れてくれたおかげで助かった。だが、バンドの事に関しては何も助かってない。

「あ、待ってよ!」

「だからどうでもいいんだって! バンドだか何だか知らねーけど――」

「きやつ!?!」

香澄が彼女を呼び止めた時だった。振り返ったことで前に注意が向いていなかった彼女は、思い切り観客の一人とぶつかってしまった。

彼女には怪我がなかったが、相手は尻餅をついて倒れてしまう。香澄や金髪の彼女よりも背は低く、やや幼い印象を受ける、深い青色の

髪をした少女だった。

……倒れた衝撃で、白い布が見えてしまっていることには触れないでおくが。

「あつ、すみません！前見てなかったので……」

「かなり勢いよくぶつかつたな……大丈夫か？」

「ばっ……べ、別に心配しろなんて頼んでー」

「お前じゃねーよ。そっちの……えと、怪我とかないか？」

やっぱ直視できないんだけど。俺はわざとらしく目を泳がせながらも、倒れた彼女の身を案じる。

「あ、はい……大丈夫です」

「そうか、ならよかつた」

「おい、ちよつと待て！怪我無かつたのはいいとしても、お前のさつき
の発言は悪意あるだろ!?!」

人を倒しておいて、何言つてんだ。まあ、こいつに非があつたわけ
じゃないし、責めるつもりは何もないけどな。

倒れた少女は俺の手を取り、ゆつくりと立ち上がった。ようやく彼
女と正面から目を合わせた俺だったが、この子……どこかで見たこと
があるような気がする。

はつきりとは知らないが、俺は確かにこの少女の事を知っている。
それが一体どこで見た記憶だったのかは、思い出せないんだけどな
……??

「え、あれ……?市ケ谷、さん……?」

「市ケ谷……?」

と、金髪の少女を見た彼女が、驚いたような反応を示す。名前も
知っている辺り、もしかして知り合いなのか。

「……っ！か、返して、ギターー!」

「えっ……あーちよつと!」

市ケ谷さんと呼ばれた彼女は、香澄から強引にギターを引つたく
る。観客の間を上手くすり抜け、そのまま会場を出て行ってしまっ
た。

「待つてよー!えつと、市ケ谷さん!」

「ちよ、おい香澄!?!どこ行くんだよ!?!」
「ごめん、なーくん!先帰ってて!私は、さっきの……市ヶ谷さんを追いかけるから!」

そんな事があつて、香澄は保留になつてしまったバンドの話をするために、朝から有咲の家まで向かったというわけだった。

一緒に登校する間に、少しでも仲良くなつて話したい。香澄は有咲のペースに何とか合わせて、どうにかきつかけを作れないかと積極的に話を続けた。

「あれからすぐにお店出て、追っかけたんだけど……暗くてシール見えなくなっちゃった」

「シール?」

「うん。あ、ほら見て。ここにも貼つてある。星のシール」

そう言えば、このシールは誰が貼つたのか。ふと香澄の頭によぎつた疑問だったが、考えても答えは出ない。知っている人もいるのかどうか怪しいくらいだ。

「そのシール、マジで星の……はっ、今だ!」

「えっ、あれ有咲?」

香澄がしゃがみこんでシールに気を取られた一瞬を、有咲は見逃さなかつた。すぐに走り出し、香澄との距離を広げること成功した。で、置いて行かれた香澄は……。

「え、待って!何で急にダッシュするの!?!ちよ、置いてかないでよ!」

「体調の方は大丈夫か？」

「うん！最近はや作も落ち着いてきてるし。薬だってちゃんと持つてるからさ。心配しなくても平気だよ？」

「何言ってるんだ。これでも俺は、美羽の兄貴なんだ。少くらい心配させてほしいし、頼らせてくれよ」

S P A C Eでライブを観た翌日。俺は早朝から仕事に向かう母を見送り、美羽と一緒に学校まで登校しているところだった。

始めの数日は登校中にも声をかけられることはあったものの、今では少しづつ落ち着きを取り戻している。こうして美羽と並んで登校できるのが、何よりの証拠だ。

「何それ、かっこつけちゃってさ。そこまでガチガチに構えられると、こつちが息詰まりそうなんだけど？」

「い、いいだろうが。兄貴にだって、兄貴なりに思う事はあるんだよ」「ふうん？でもね、私だって妹なりに迷惑かけたくないって思ってるんだよ？本当に心配してくれてるなら、少しはこつちの気持ちも尊重してよね」

「美羽……」

「私は、大好きなお兄ちゃんがずっと変わらないでいてくれたら、それで満足だから。ピリピリしてるお兄ちゃんなんて、私見たくないんだよ」

美羽の気持ちを尊重しろ、か……。ああ、それくらいわかっているさ。今さら言われることでも何でもない。

わかっているから、辛いんだ。

「……これからは気を付けるよ。でも、美羽には俺がついているって事だけは、忘れないでほしい」

「またかっこつけちゃって……。けど、ありがとう。やっぱり私、お兄ちゃんの事が大好きみたい！」

美羽にそう言ってもらえると、俺も嬉しいよ。今ここにいる事に、

確かな意味が生まれている気がするからな。

「そう言えば美羽、お前イヤホンはどうした？」

「今日はいいかなって。イヤホン付けてると、周りの目が気になるし。それに、声も聞き取りにくいからさ。発作も最近ないから、家に置いてきちやった♪」

「来ちゃったって……」

「心配するのわかるよ？けど、そう言う特別扱って、あんまり好きじゃないんだ。人から浮いてるみたいで、1人の世界にいるみたいだからさ……」

音楽に関連したことをしている間は発作が起きない。美羽の不思議な性質が学校側に認知され、特別に校内でイヤホンの常時使用を許可されている。

だが、美羽はその配慮に甘んじようとしない。美羽が言うには、そうやって周りと違うことをして優遇されたくないという持論がある。わからなくもないが、自分の体の事だ。素直に甘えてほしいと、兄として思うのだが……。

美羽の浮かべた悲しげな表情が、俺の言葉を半ばで止める。さつきも言っていたからな。美羽の気持ちも尊重してほしいって。

「そう言えば、香澄さんは？明日香は朝練なんだけど、知らない？」

「いや、何も聞いてないな。家にもいなかったみたいだし、もう学校に向かったんじゃないか？」

「ええ？あの香澄さんが？」

「おい、その言い方は香澄に失礼だろ」

「あつはは。あ、でも香澄さんって起きるの遅くなかったか」

遅くないだけで、早いとも言えない時間帯だけだな。とか言っている間に、もう正門が見えてきた。もうここまで来るのにも慣れたな。

だが、香澄の奴どこに行ったんだ？部活に入ったって話は聞いてないし、あるとすれば……昨日のバンドの話くらいか。SPACEのライブに何かを突き動かされ、星のギター片手にバンドをやる決心し——
待て。

「あれ、お兄ちゃん？何でいきなり止まったの？」

「……いや、香澄のこと考えてたら、何となくあいつの考えてることが分かった気がして……」

昨日の出来事。そして香澄の大胆な行動力。思い当たるとすれば、向かっている先は一つしかない。

「えっ、何？幼馴染パワーって奴？」

「俺知らないんだけど、そのパワー。いや、昨日色々あつてさ。香澄がバンド始めるつもりなんだよ。その流れでちよつと、行き先思い当たってさ」

「なくんだ。私てつきり、幼馴染以上に親密な関係を意識し始めたからなのかと思つてね〜？」

「……違うからな？」

「その間が怪しいんだけどね？」

うるせーな。べ、別に動揺したとかじゃないぞ。ただ、美羽がそんな事言つてからかつてきたのに、ちよつと呆れただけだ。

「まあ、それはそれとして……香澄さん、バンドやるんだ？」

「ああ。香澄と一緒に帰つてたら、地面に星のシール貼つてあるのを――」

「待つてよー！有咲〜！市ヶ谷さ〜ん!!」

「うわあ、しつこいな！もう学校だぞ!!」

「そうそう。そのシール追っかけたら、その市ヶ谷さんとか言う子に会つて……ん？」

「ねえ、お兄ちゃん！後ろから知らない人と香澄さんが走ってくるんだけど!?!」

「……は？」

俺は美羽に体を掴まれて、後ろを振り返る。その先にいたのは、昨日蔵で会ったあの少女。そして、その少女を追いかける香澄。

「えええ、お、お兄ちゃん!?!あれ、何してるの!?!」

「いや、俺が聞きたいくらいなんだけど!」

朝から何を鬼ごっこしてんだよ。だが、背景が何となく想像つくのは、やっぱり幼馴染だからなんですかね?

『てつきり、幼馴染以上に親密な関係を意識し始めたからなのかと思っただけ?』

いや、違う……と思いたい。

「あつ、あんた昨日の……!ちよつと邪魔!どいて!」

「会って早々そんな口の聞きか——うおつ!」

見知った顔と遭遇したことで、憎まれ口を叩く彼女。反論しようとしたが、強引に突き飛ばされて機会を失う。

男子の俺でも倒れそうになり、美羽に体を支えてもらう始末。昨日の激突を思い出し、同時にあの小柄な少女の事を思い出した。

「ああ〜!行っちゃった……。もつとバンドの話したかったのに……」

「お前は何をしてるんだ、香澄」

とりあえず、周りに迷惑をかけまくったわけだし、1発軽く殴っておく。

「うう、痛いよなーくん……。あつ、みーちゃんいたんだ!おはよつ!」

「う、うん。おはよう香澄さん。それじゃあ、私はもう行くね」

「おう。気をつけるよ」

香澄の騒動に苦笑しながら、美羽は中等部の校舎に向かって行った。さっきの彼女の姿はもう見えず、香澄は疲れ果てて俺に体を預けてきた。

もう少し周りの事も考えてほしいが……こいつの体力の事もあるし、仕方がない。俺は息が戻るまで、香澄を支えることにした。と言うか、密着しているから息遣いがダイレクトに伝わって仕方がないんだが。

『てつきり、幼馴染以上にs——』

違うんだって！一応俺も男子だし、香澄も一応女子だから、女子に密着されてドキドキしない男子なんていねえってただけだ！

ああ、もう！美羽が余計なことを言うから……。

「はあつ、あー走った！有咲ってすばしっこいんだね！」

「もう少し落ち着いてから話せ。で、有咲って？」

「市ヶ谷有咲さん！昨日一緒にライブ観たでしょ？」

あいつの下の名前か。てか、いつの間に名前知ったんだよ。

「おはよう香澄、翔。えと、香澄かなり疲れてるみたいだけど、これはどういう状況で……？」

「ん、沙綾か。香澄が市ヶ谷さんとか言う奴と、朝から鬼ごっこしてた。それで俺にもたれかかっている。正直周りからの視線は痛いぞ」

「ご、ご苦労様……。けど香澄、市ヶ谷さんと知り合い？」

「あ、さーやおはよう！有咲の事知ってるの？」

「知ってると言うか、ある意味有名人だから。中1から成績は学年トップだけど、全然学校に来ないって」

学年トップ!?あの金髪ツインテールが!?あんな口悪い奴でも、頭はいいんだな……。

「来ないって、不登校って事か？」

「どうなんだろう。たまに学校には来るし、不登校……ってわけでもないと思うな。ただ……」

「ただ？」

「あんな市ヶ谷さんは初めて見たよ。普段は何と言うか、もつと大人しくて……上品？」

何だそれ。俺たちが昨日見た姿とまるつきり違うじゃねーか。例えるなら、猫かぶりってところか。

「そうなのか。実は昨日、あいつと色々あってな」

「星のシールがあつて、そしたら蔵があつて、星のギターがグワーってなって、ライブ観てキラキラになったんだ！だから私、バンドやるの！ドキドキする！」

「……えっと、ごめん。話が上手くつながらないから、翔も説明してくれない?」

「言われなくても、そのつもりだから安心しろ」

説明へたくそか。沙綾も何とか理解しようとしたが、そもそも事情を知っている俺ですらわかりにくい。要領も何も得ていないので、俺が順を追って一から説明した。

「へえ、そんなことがあったんだ。説明ありがとね」

「こいつがもつとマシな説明してたら、俺の出番はいらなかったんだけどな」

「わ、私がそう言うの苦手だって、なーくん知ってるでしょ?だから、その……フオローってことで……えへへ」

「目をそらしながら言うな」

「ってか、俺がいなかったらどうしてたんだよ。もう詰んでるぞ、多分。」

「それで香澄、バンドはするの?」

「うん!あのギターと昨日のライブの事が、頭からずくつと離れないんだ!こんな気持ちになったの、あの時以来だもん!」

「ま、今はメンバー集めの最中だけどな。とりあえず、香澄はさっきの市ヶ谷つて奴をメンバーに入れるつもりみたいだぜ」

「えっ、市ヶ谷さんを?なかなか難易度高い相手だけど、大丈夫?」

「もつちろん!」

その根拠はどこから来るのか。さっきだって逃げられてたのに、あいつがしつぽを見せて捕まってくれるとは思えないんだが。

と言うよりも、他のメンバーはどうするかを考えないといけない。大体5人編成が基本だし、最低でも4人は欲しい。

市ヶ谷が入れば3人になるが、そもそも香澄に当てはいるのか。まあ、俺にも当てはいないんだが……あ。

「そうだ沙綾。せっかくだし、沙綾も香澄のバンドに入らないか?」

「えっ……私も?」

「放課後ダメだったら、休み時間でもいいと思う。とにかくメンバーがいないと、バンドにはならないからな」

「それいいね！ねえさーや、一緒にやろうよバンド！」

楽器ができるかどうかは、まず置いておく。問題は、香澄に協力してくれるかどうかだ。その気になれば、時間はかかっても楽器は弾けるようになるからな。

「……ごめん、私はいいよ。やっぱり放課後は時間ないし、他の人を当たってよ」

「そっか……。さーやとバンド出来たら、楽しいと思ったんだけどな」
だが、沙綾の都合が取れないのなら仕方ない。諦めて他の人を探すしかないだろう。

「でも、香澄見つけたんだ。キラキラドキドキできるもの。自己紹介の時から、香澄ずっと言い続けてたよね」

「うん……。私今、すっごく嬉しいんだ！ずっと探してたものが、ようやく見えてきて……。目の前に広がってる！」

「フッフ、本当に楽しそうだね、香澄。応援するよ」

「ありがとー、さーや！よし、まずは有咲だ！絶対バンドやるぞー！！」

友に背中を押され、香澄は今動き出す。

夢の舞台への一步は、始まったばかりだ。

phrase 7 胎動の狭間で

香澄がバンドへの決意を固め、まずは有咲を誘うと言う目標を立てた日の昼休みの事。俺は少し腹に痛みを感じて、花を摘みに行っていた。登山家かよ。

香澄は沙綾と中庭で昼飯を食うみたいで、今からそっちに向かうつもりだ。結構立派な中庭で、ちょうどいい木陰もある。昼休みを過ぎずにはうってつけない場所だ。

「香澄もガチでやる気って感じだな。俺も何かできる事は協力してやるか……」

こっちにはこっちでやることもあるが、まだ動く時じゃないだろう。それに、このまま香澄が行き詰まるのを見ているのも俺が嫌だ。

まあ……もしかしたら、直接的ではないとしても、少しは俺の目的を達成するためにもなるだろうし。

「だとしても、まずは本当にメンバー探しか。って言っても、クラスの人しか知らな……ん？」

と、花摘みから戻った俺は、廊下に見慣れた人影がある事に気づく。彼女は確か……。

「よう、りみ。1人か？」

「あつ、し、翔君……」

牛込りみ。俺と同じA組の生徒で、かなり大人しい。って、今更言うのもなんだけどな。自己紹介の時に緊張でうまく話せなかった生徒が、この子だ。

けど、俺は嫌いじゃない。むしろ好きだ。何故かと言われると、少し長くなるんだが……。

「こ、これからお昼にしようかなって。飲み物買いに行くところなんだ」

「自販機こっちだったよな。それはいいけど、学校だからってそんなにオドオドする必要はないぞ？」

「そう、だよな。ごめんね、翔君」

少し照れ臭そうにしながら、りみは俺の名前を呼ぶ。学校と言う事もあつてか、まだ少しぎこちないように見えるけど。

と、こうして互いに下の名前で呼び合っているわけだが……実は知り合ってからそう時間は経っていない。と言うより、明確に互いの事を知ったのは昨日の話だ。

なら、俺たちはどうやって仲良くなったのか。それは、昨日のSPACEのライブ。香澄が有咲を追いかけてSPACEを出て行った後の話にさかのぼる。

「ごめん、なーくん！先帰ってて！私は、さっきの……市ヶ谷さんを追いかけるから！」

「ちよ、おい香澄!」

香澄も出てった……。付き合わせておいて、普通に置いて行かれてしまった。この場に残されてしまったのは、俺と見覚えのある少女だけ。

深めの青色をした、ショートヘアの女子。つい最近見たはずなのに、どうしても思い出せないんだよ。くそ、俺の記憶力を呪いたい。

「あつ、あのー!」

「……はい、何でしょう?」

「さっきはその、ありがとうございまして……成川君」

「俺の名前……」

うん。知り合いだよな、完全に。え、マジで誰だっけ?このままだと、向こうに失礼でしかないんだが。

「あ、あれっ?違いますか?花女の1年A組、成川君ですよな?私、同じクラスの牛込りみですけど……」

そうだ、牛込さんだ!自己紹介でうまく話せなかった、あの子か!だから見覚えがあつたのか。

てか、クラスメイトの顔忘れるとか……物覚え悪すぎるだろ。

「い、いや合ってるよ。俺はただ、牛込さんがライブ会場にいるなんて思ってたなくてさ……」

「お姉ちゃんがグリグリ Gitar ボーカルなんです。だから、今日のライブはどうしても見たくって」

そう言えば、グリグリのメンバーの中に牛込って人がいた気がするな。その人の妹が、この子だったのか。とてもボーカルで激しく歌っていた女の子の妹とは思えないほど、性格が物静かと言うか……。

「そうなんだ。お姉さん、かつこよかったよ」

「あ、ありがとうございます。成川君」

そんなに畏まらなくてもいいのにな。歳が離れているならわかるけど、俺たちは同級生。しかもクラスメイトだ。もつと気軽に接してくれてもいいんだけどな。

「あの、成川君はどうしてここに？市ヶ谷さんと、戸山さんも一緒だったよね？」

「あー……それは、話すと長くなるんだけど……」

ライブも終わり、スタッフたちがステージの片付けに入った。このままここで話しては、片付けの邪魔になってしまう。それに、SPACEも閉められない。

「せつかくだし、今から飯でも食いに行かないか？俺、腹減ってるさ。ここも閉まるだろうし、牛込さんも何も食べてないんじゃないか？」

「え、そんなー！私はいいですよー！一緒にご飯なんて……」

グゥ……。

「……………」

キュルキュル……グゥ。

「う、うう……」

「体は正直なんだから、遠慮なんかしないでさ。あ、俺と一緒にするのが

嫌なら無理強いはしないけど」

「そ、そんなわけないやん！うち……あつ、関西弁!？」

ハツと口を押えてごまかそうとしていたが、時すでに遅し。俺に関西弁を聞かれたことで、余計に恥ずかしさを募らせていた。

「うう……やっぱり出ちゃうな。関西弁……」

「出身が関西なのか？」

「うん……。中学の時にこっちに引っ越してきて、関西弁はなるべく使わないようにしてるんだ」

「そうなのか？俺はいいと思うけどな。変じゃないし」

それに、俺は関西のノリって面白いし、好きだと思ってるけど。

まあ、本人が気を付けてるのなら無理強いする必要もないよな。

「とりあえず、場所を変えよう。この辺りだと……近くにファミレスがあつたな。そこに行くか」

「あ、ありがとう成川君。何か、恥ずかしいところ見られちゃって……」

「いいって。俺も腹減って仕方ないしな。じゃ、行くか」

「……つてことだな」

「だから戸山さんもいたんだ……」

俺はファミレスに入った後、適当に料理を頼んでから今日の話の説明する。星のシール、そして星型のギター。そのきっかけを作ったのが、牛込さんが『市ヶ谷さん』と呼んだ少女だと言う事も。

牛込さんは俺の話に真剣に耳を傾けていた。性格が真面目なものもあるかもしれないが、あの場に俺たちがいた理由も気になっていたのだろう。時々相槌を打ってもらいながら、何とか一通り話を済ませた。

にしても、緊張するな……。異性と二人きりで食事とか、初めての

事だからな。

香澄とはあるけど、あいつは異性と呼ぶにはちよつと違うし。美羽は家族だしな。牛込さんも、ほんのり頬を染めているみたいで、緊張はあるようだった。

「戸山さん、バンドするってことなんですか？」

「だと思う。ただ、俺はメンバーとしては協力できないからな。別の人を探せとは言ったけど」

香澄なら、その点は心配ない。まだ1ヶ月も経っていないが、同年の人脈は広いはずだからな。俺が知らない間に、顔も知らない奴とバンド組んでそうだな、あいつ。

「ガールズバンド規定法があるから、ですよね」

「おつ、よく知ってるな」

ガールズバンド自体がまだまだ認知度が低いからな。その事を、我らがライブハウスSPACEのオーナーも嘆いていた記憶がある。

「私もお姉ちゃんの影響で、音楽は好きなんです。ベースもちよつとだけ弾けるんですよ」

「へえ、ベースやってるんだな」

「成川君は楽器は何かやっていますか？」

「翔でいいよ、牛込さん。俺は——」

それから俺たちは、音楽の話で盛り上がった。どんなジャンルが好きなのか、弾いている楽器の話など。俺は音楽の知識はそれなりにある方だが、牛込さんもなかなかだった。話も合うし、普通に楽しい。もう緊張はどこかに行ってしまった。

話が弾むと、音楽以外の話もするようになった。趣味だったり、好きな食べ物の話になったり。牛込さんがホラー好きだと知った時には、正直驚いたけど。

「俺、こう見えて甘い物とか好きなんだよな。スイーツとか、また食べに行きたいなつて」

「そうなんだ。私も、チョコが好きで……」

「お、牛込さんとはとことん気が合うな。俺もチョコ系は大好きだ」

「本当!?うち、チョココロネ大好きなんだ!特にやまぶきベーカリー

のは最高で、めくっちゃおいしいんだ♪」

やまぶき、つて……沙綾の家のパン屋か。そう言えば、まだ行ったこともない。どんなパン屋なのか、興味あるな。

「あつ、また関西弁！うう……／＼／＼」

「ははっ、いいじゃん関西弁。何か今の牛込さん、すごく生き生きしてるよ」

「え……そ、そうかな、翔君」

「ああ。音楽の話してる時も、他の話してる時も、牛込さん楽しそうだった。教室でも、もつと積極的になったらしいのに」

内気なのかもしれないが、こうして俺と打ち解けてくれたんだ。きっかけさえあれば、牛込さんはきつとクラスのみんなども仲良くなれるだろう。それこそ、香澄なんかとはいい関係になれそうなんだけどな。

「あ、ありがとう。そんな風に言ってくれたの、翔君が初めてだな……」

「別にお礼を言われることじゃないって。ただ、牛込さんと話しているのが楽しかったからさ。自分から話題振ったり、話を進めたりしてたから、今の姿を学校でも見せたらいいって思ったんだよ」

「うん……。でも私、緊張して上手く話しかけられないし、ビクビクしてしまふから……。引越してきたこともあって、本当に友達もいなくて……」

「なら、俺が友達第1号ってことでいいじゃん。ここから友達、増やしていこうぜ？」

「……っ！」

俯いて後ろ向きな発言を繰り返していた牛込さんだったが、俺の言葉にハッと顔を上げる。何か光明を見出したような、力の籠った眼差しを俺に向けていた。

「さて、もう少し話していたいところだけど……そろそろ帰るか。時間も遅くなってきたしな」

「えっ、あ……本当だ。私も帰らないと」

ライブを観た後にそのままファミレスに入って話し込んでいたか

らな。いつの間にか、時間の事をすっかり忘れてしまっていた。

俺たちは会計を済ませて、ファミレスを後にする。牛込さんが自分の分は払うと言っていたが、そこは男だ。女の子にお代を持たせるわけにはいかないし、俺が二人分支払うことに。店員からニヤニヤされてしまったのは少し恥ずかしかったが。

「うっ、寒っ……。風が冷たいな」

「あの、何から何までありがとう、翔君。でもやっぱり、迷惑じゃ……」
「何言ってるんだよ。牛込さんと一緒に居られて楽しかったから、そのお礼も兼ねて、な？」

「あ、た、楽しいって……。えっと、その……ありがとう／＼／＼」

さつきから『ありがとう』としか聞いてない気がするな。でも、この『ありがとう』は少し違ったニュアンスを含んでいるように聞こえた。平たく言えば、前向きな感謝。

「どういたしまして……。なのかな？でも、本当に楽しかったよ。また明日からも、学校でいろんな話してほしいな」

「う、うん！もちろんだよ！むしろ、私の方から頼むくらいなのに。それに……」

「それに？」

そこで言葉がいったん途切れた。言葉を探していると言うよりは、言葉を出そうと頑張っているような空白。指を絡めて、もじもじと俯いている牛込さんは、小動物のようにか弱く見えた。

暗くて顔は良く見えないが、かすかに見えた頬は少し赤みを帯びている。待つこと数十秒。牛込さんはようやく前を向き、途切れた言葉を絞り出した。

「その……名前」

「え？」

「私も翔君って、呼んでるから……。私の事もその、りみ、って……。下の名前で、呼んでくれないかな？」

何を言い出すのかと身構えていたが、そんな事だったのか。だが、当の本人は耳まで顔を真っ赤にして、チラチラと視線を向けてくるばかり。牛込さんにとっては、勇気のいる行動だったんだな。

まあ、俺にとつては破壊力のあるチラ見で、ドキドキしているのが現状なんです。

「……………えと、ダメですか？」

「あ、いや。ダメじゃないよ。確かに、俺だけ他人行儀みたいに呼んだから、ちよつと申し訳ないなって思ってただけ」

「そ、それじゃあ……………」

「もちろん。これからは、ちゃんと『りみ』って呼ばせてもらうよ」

辺りは暗いが、太陽のように明るいりみの笑顔が広がる。恥ずかしさとは違った赤みが、りみの頬を染めていた。

ただ名前を呼んだだけなのに、そんな嬉しそうな顔をされると……………こつちが恥ずかしくなってしまう。俺は照れ隠しで話題を変えるところにした。

「そ、そうだりみ。俺たちまだ、連絡先交換してなかったよな。今からやっておくか」

「あ……………うん！」

俺はスマホを取り出し、牛込さんと連絡先を交換する。その一つ一つの行動が嬉しそうで、結局見えていて照れ臭い。香澄じゃないが、キラキラと目を輝かせ、交換した俺の連絡先を眺めていた。

「えへへ、友達出来た……………♪」

うん、何と言うか……………そう、キュンとする。

「じゃあ、帰ろうか。ここにいても、寒いだけだしな。うゝ寒い……………」

「……………っ、う、うん」

スマホをしまい、俺はりみと並んで歩き出す。SPACEから駅までは少し距離があるし、しばらくは二人だな。また違った緊張感に襲われながら、俺は足を進めた。

あ、でもよく考えてみたら……………。

「ところで、りみって家どこだ？俺は電車通学だから、駅まで行くけど」

「私はこの辺りのマンションだから、駅まで一緒だね」

「そうなのか。ってことは、もうすぐ着くな」

歩いている間に、もう駅のすぐ近くまで来ていたみたいだった。そろそろこの時間も終わりだろう。少し名残惜しいけど、もう会えないわけじゃないからな。

「でも、今日は本当に楽しかったよ。りみと色んな話できたし、案外香澄に振り回されて正解だったかも」

「翔君は、戸山さんと幼馴染なんだよね。羨ましいな……」

「そうなのか？あいつといると、ロクな事ないぞ？」

別に何か意識しているわけでもないし、手の付けられない子供みたいなものだし。まだまだ俺がいないとダメな……って、香澄の話になってしまったところだった。

「うくん……。私、まだ戸山さんの事はよくわからないけど……入学式の時の自己紹介聞いて、すごくかっこいいなって思ったんだ」

「そうか？あいつ、かなりぶっ飛んだこと言ってたぞ？」

「でも、自分がやりたいことをまっすぐに伝えられる戸山さんを見て、私もあんな風になりたいなって思ったんだ……！」

あの自己紹介が、りみに大きな影響を与えていたなんてな。本人は知る由もないが、その姿勢が誰かの背中を押したのは紛れもない事実だった。

俺もあんな風に、背中を押せる日が来るのだろうか……。

「あつ、もう駅に着いたね」

「ん、本当だな。じゃあ、今日はここでお別れってことになるな」

何だか短いようで長い一日だった。香澄に振り回され、金髪の少女に出会って。その結果、なぜか同じクラスのりみと飯食うことになって。

色々あったが、充実した時間だった。それも、りみがいなかったら
思えなかっただろう。

「……そうだね、翔君。また明日」

「おう。これからもよろしくな、りみ」

胸の前で小さく手を振って、りみは家の方角へと帰っていく。何回
かチラチラとこつちを見ていたが、いつしかその姿は消えていた。

牛込りみ。また1人、俺は花女で友達ができた。

phrase 8 踏み出す君の背中を押すのは

そんなわけで、俺はSPACEでのライブ後の一時を経て、牛込りみと仲良くなることができた。

まだ昨日の今日だし、元々後ろ向きな性格な事もあって、少しぎこちなくはなっているんだけどな。もつと昨日みたいに話していたいとは思ってる。

「りみはこれから昼なのか？」

「うん。飲み物買ったたら、1人で屋上に行くつもりで……」

「だったら、俺と一緒に食べようよ。香澄に、同じクラスの山吹沙綾もいるけど」

「えっ、いい……の？」

「当たり前だろ？きつと香澄や沙綾も、喜んで迎えてくれるって」

俺はりみを昼食に誘い、香澄たちの待つ中庭へと向かう。その途中に自販機もあるし、りみはそこで飲み物を買っていくことにした。

「それで、戸山さんはどうなったの？」

「ああ。市ヶ谷さんをバンドに引き込むんだ！って意気込んでてさ。俺も何かしらのサポートはしてやりたいんだよな」

「そうなんだ。バンド、か……」

ん？この反応、もしかして脈ありか？まだ決断はできていないみたいだが、もしかしたらメンバーになってくれるかもしれないぞ。

「やっぱり興味あるのか？お姉さんもバンドしてるし、りみだってベースやってるんだろ？」

「う、うくん……。バンドに興味はあるけど、私……。どうだろ……。やりたい気持ちは、あるって言えばあるけど……」

ないと言えばないって事か？何とも微妙な回答に、俺はどう返したらしいのかわからない。

「あ、ごめんね。何か、あいまいな返事になっちゃって……」

「いや、いいよ。無理にバンドさせるのも、りみに悪いしな。もしやる気があるなら、その時は香澄と一緒にバンドしてやってくれ」

「うん、そうだね……。あ、私飲み物だけ買いに行っていていいかな？」

いつの間にか、もう自販機前に着いていた。俺はりみの抱えていた紙袋を持ち、りみは制服から財布を取り出しながら自販機へと向かう。

「そーいや、この紙袋の中身って何だ？何だかいい匂いがするし、それにこの紙袋のロゴ……やまぶきベーカリーのか。へえ、初めて見たな。」

「とすると、中身はパンか。俺はちらりと中をのぞき、何のパンを買ったのか拝見。メロンパンか？クロワッサンか？いや、りみはチョコ好きだつて言ってたし、確か昨日も言ってたはず。チョココロネが大好物だつて——。」

「つて、それにしても大好きすぎないか!?チョココロネばっか……いや、チョココロネしかない!?!」

数まではわからなかったが、紙袋の中にはチョココロネが詰められていた。それ以外の種類のパンはない。もつと色んなパンを買えばいいのに、マジでチョココロネだけかよ……。

俺はりみのチョココロネ好きにある意味感心しながら、ふと自販機に目を向けて——。

「——ひゃあ!ああつ、えつと……!?!」

「牛込さん、昨日いたよね!バンドやってるの?いつから?何弾くの?歌?ライブいつ!?!」

「おい、待て。なぜりみが香澄に絡まれている。そして矢継ぎ早に質問をするな。ただでさえ臆病なのに、香澄について行けてないだろ。」

「ちやう!あつ、しま……じゃなくて、あのっ!」

「関西弁!?可愛いっ!こつちに引つ越してきたの?」

「う、え、えと……」

「こら、香澄。少しは抑えろ」

俺は香澄の頭をコツンと殴り、一旦話を止めさせる。香澄は痛そうにしていたが、りみは安心したような目を向けてきた。

「いたた……叩かなくてもいいの!私は牛込さんとお話ししてた

「ただだよ！」

「だったらもつと落ち着いて話せ。そんなに一度に質問したら、りみが答えられないだろ」

「あ……そっか。ごめんね、牛込さん」

律儀に謝った後、香澄はりみの隣の自販機でオレンジジュースを買っていた。りみはイチゴオレだったけど。

「う、ううん。大丈夫だよ。戸山さんが話しかけてくれるなんて思っ
てなかったから、ちよつと嬉しいな」

「えっ、本当!? ありがとく牛込さん！」

で、テンションが上がって抱き着くと。うん、いつも通りだな。
じゃない。

「ひゃあ〜!? え、戸山さん!?!」

「だから止めろって。お前は事あるごとにハグしないと気が済まない
のか」

「えへへ……つい、ジャーン! ってなっちゃって……」

ジャーンって何だよ。俺わかんねえよ。頼むから、日本語で説明し
てくれ。

「いや、そもそも……お前中庭で沙綾と一緒にいたんじゃないのかよ」
「ちよつと飲み物だけ買いに行こっかな〜って」

ああ、はいはい。状況はわかりましたよつと。

「でも、なーくん。さつき牛込さんの事、下の名前で呼んでたけど
……」

「お前が俺を置いて帰った後に、色々あつたんだよ。それで仲良く
なっただけだ」

「え〜? なーくんだけズルいよ〜!」

「ズルいとか言うな」

香澄が俺を置いて行ったのが悪い。俺にとっては楽しい時間だつ
たから悪い気はしないが。

「でも、牛込さんもライブとか観に来るんだね! 私は昨日が初めて
だったんだ!」

それもりみには話したけどな。

「お、お姉ちゃんがグリグリ Gitar で……」
「えっ、そうなの!? お姉さん、すごいかつこよかったよ!」
「う、うん!」
「すごいキラキラしてた!」
「うん……!」
「ライブやりたいよ!」
「うん……」
「わあ! やろー!」
「う……ん?」
「!……えっ!」

「バンドやるんだ、牛込さん」
「りみりんすごいんだよ! えと……何だっけ?」
「ベースだろ?」
「そう、ベース!」

俺たちは沙綾を待たせていた中庭に向かい、バンドの話をしなが
ら昼食を取っていた。話の流れでいきなりバンドに加入させたとき
は驚いたが、りみも断る素振りは見せていない。

「翔、牛込さんと仲良かったんだ」
「昨日香澄とライブ観たって言っただろ? その後、香澄が勝手に帰っ
てな。それから、りみとファミレス行って色々話したんだ」
「いいな。なーくん、私がいけない間にそんなことしてるんだもん
……」

「やらしいことしてるみたいに言うなよ!」
とんだ被害者だ。沙綾にも笑われてるし……くっ、何と言うか、可
愛くて様になってるな。言い返そうにも言い返せない。
「でも、ちよつとだけだよ……。私、お姉ちゃんみたいにベース上手く

ないし……」

「ちよつとでもすごいよ！それに、お姉さんはお姉さんだよ！」

「そ、そうだよね……」

うん？どうも歯切れが悪い気がするな。協力してやってくれとは言ったが、どうも本調子じゃなさそうだ。まだ迷っているのか？

もしかして……無理に付き合っている、なんてことないよな……？

「牛込さん、嫌なら断つてもいいんだよ？」

と、先に沙綾が助け舟を出してくれた。りみの様子が少しおかしいことには気づいていたみたいだな。にしても、マジで沙綾は空気を読むのが上手い。ナイスフォローだ。

「ひどーい、りみりくん！」

「ひどくない。りみの気持ちだつて優先するべきだ。香澄は、嫌な奴にバンドを無理やりさせてまでキラキラドキドキしたいのか？」

「そ、それは……」

自分の発言が軽率だつたと気づき、香澄は黙り込む。確かに自分の求めた気持ちのために、バンドはやりたいと思っている。だが、そのために手段を選ばないやり方を使用するのは、間違っているはずだ。そこは香澄にも理解してくれたみたいだ。

「嫌やない……あつ、嫌じゃないよ。戸山さんが誘ってくれて、私……。それに、翔君も」

「俺も？」

「戸山さんの力になってくれて。一緒にバンドしてほしいって、言ってくれたから……。だから私、勇気だったの……」

そうか。俺の言葉が、もう一押しを決めるきっかけになったのか。てか、今ちよつと関西弁になりかけたよな？

「りみりくん！ありがとう!!」

「ひゃつ、と、戸山さんー！」

こいつは、また抱き着いてやがる。俺は香澄の頭を叩いて、若干嫌そうにしているりみから引きはがす。このやり取り、もう2回目だか

らな？

「うう、痛い……。あつ、りみりん！私の事、香澄って呼んでよ！戸山さんだと、何か……。息苦しい？」

「お前でも、息苦しいなんて難しい言葉使えたんだな」

「あく今のは言っちゃいけないかったよ！もう、怒ったよなーくん！私だって、それくらいの頭はあるよー！」

ポカポカと俺の肩を叩く香澄だったが、正直痛くも何ともない。むしろほほえましいくらいで、沙綾とりみは止めようとしなかった。

「うりやうりや〜！観念したかー！」

「いや、何でだよ」

「あつ、そう言えぱりみりん。さつきからずっと気になってたんだけど……」

「えっ？何だった？」

「……ベースつて、何？」

「え？」

「あはは、香澄……」

「そ、そこからののか……」

あまりにも無知な香澄に、俺たちは頭を抱えるしかない。俺は音楽に詳しいから知っていたが、沙綾ですら知っていたような反応だぞ？りに関しては、聞き返すしかできなかったらしい。

あのギターに一目ぼれしてバンドを始めようとは言っても、演奏技術や楽器の知識があるわけじゃない。まだまだ素人同然だからな。わからなくもないが……。せめて、どんな楽器があるのかは把握してほしい。

「てか、さつきからりみの話ばっかだけど、あの市ヶ谷とか言う奴はどうなったんだよ。お前、休み時間もどっか行ってただろ」

「あつ、それがね……。有咲、早退しちゃったみたいで……」

家に帰ったって言うのか？朝は元気に走ってたのに、具合が悪くなったのか？それとも仮病？

あ、でも沙綾が言っただけでなかったか？市ヶ谷って奴、学年トップの成績を持ちながら、ほとんど学校には来ないことで有名だって。

とすると……仮病かよ。

「ねえ、香澄？さっき教えてくれた、星のギター……だっけ？スマホで調べたけど、この中にある？」

「えつとね……あつ、これ！へえ！ランダムスターって言うんだ……！」

「どれどれ……？何か刺さりそうだな、これ」

「言われてみればそうかも」

ランダムスター。沙綾が調べた情報によると、ネット上でそれなりの価値がついていると言う。熱狂的なファンも多くいるみたいで、現在オークションに出品されているものもあるとか。

その金額、何と30万近く。とても手の出せる代物じゃない。俺は委縮しながらも、それだけの価値のあるギターだったのだと感心する。

それ以上に、そんなギターが蔵に無造作に放置されていたという事実に、不満を覚えてもいたけどな。

「ね、りみりん！私、バンド初めてで、楽器も弾いたことないんだ！だから、色々教えてよ！」

「え、私が教えるなんて、あの……」

「いいんじゃないか？経験者なんだろ？」

「翔君まで……。あ、あの香澄ちゃん」

「はい、先生！」

「ええっ!?や、やめてよ香澄ちゃん〜！」

「じゃあね、美羽〜！また明日ね〜！」

「うん！またね〜！」

その日の放課後。美羽は友達に別れを告げて、帰路に着こうとしていた。部活にも入っていないため、帰るのは1人だ。電車通学の友達も、今はみんな部活に励んでいる。明日香も水泳部があるため、結局美羽だけ。

「今日はお兄ちゃんもバイトだし、帰ったら何しよつかなく？」

ギターでも弾こうか。今練習している曲もマスターしたいし、新しく弾きたい曲もある。今日は特に予定もないから、遠慮なく自分の時間に費やそう。そう思いながら、美羽は足を進める。

「あつ、みーちゃんだ！」

と、そんな美羽を呼び止める声。親し気に、みーちゃんと呼ぶ人は記憶の中では1人しかいない。

「香澄さん！今から帰りですか？」

「ううん。ちよつと行きたいところがあるから、まだ帰らないよ。みーちゃんは？」

「私は暇なんで、帰ってギターでも弾こうかなって」

身体の前でギターをかき鳴らすような仕草を試みせる美羽。その動作を見た香澄は、バンドをはじめようとしていることを美羽に教える。

「あつ、そうだみーちゃん！私ね、バンドしようかなって思ってるんだ！」

「え、バンド!?」

「うん！まだメンバーは1人しか集まってないんだけど……これから集めるんだ！」

香澄がバンドを始めると聞き、美羽も黙ってはいられない。つい先日、美羽はギターの演奏を香澄に見せたばかり。その時の影響を受けたのなら、美羽にとっても嬉しい話だったからだ。

「香澄さん、バンドやるんですね！何の楽器にするんです？」

「ギター！昨日、赤い星のギターを見つけて、キラキラドキドキしたんだ！」

「星のギターって……もしかして、ランダムスターですか？」

「うん。そんな名前だった気がする」

「え、それってすごくレアなギターじゃん！何かのイベントの開催記念に作られたギターで、全国に500台しかない限定品なんだよ！しかも赤い星型のタイプは、中でも数台しか生産されていないレア中のレア！もうギター好きなら黙ってなんかいないよ!」

今となっては幻のギター。それもかなりのレア物だ。美羽の熱も上がり、あの香澄ですら圧倒されてしまうほどの饒舌ぶりを見せていた。

「そ、そうなの!? みーちゃん、詳しいね!」

「もつちろん! 私だって、ランダムスター欲しかったですよ……。ネット通販もすぐに売り切れ。オークションで出されていないか色々調べてみましたけど、それでもダメ。何とか見つけたんですけど、もう値段が80万くらいで……」

「は、80万……」

とても手の出せる代物ではない。社会人ですら、購入をためらってしまうほどの金額だ。子供なら、なおさら手が届かない。

「まあ、ランダムスターの話はまた別として……香澄さんがバンドかあ……。それも、ギターするなんてね」

「あつ、そつか! みーちゃんもギターやってるんだ! 何だかお揃いで感じるね!」

「お揃いかあ……。私としては、楽器なんか全然やったことなかった香澄さんが、私の大好きなギターに興味を持ってくれたってことが、本当に嬉しいんだよね」

「みーちゃん……」

同じ世界に立てることが嬉しくて。ギターに触れ、そこからバンドと言う世界に踏み出そうとする香澄を、美羽は祝福していた。今の言葉は、美羽なりのそんな思いが込められていた。

香澄も、美羽が自分の事のように喜んでくれていることに、笑みを浮かべずにはいられなかった。口元が緩み、それを見た美羽もまた、にこりとほほ笑みかける。

その笑顔が崩れたのは、一瞬の事だった。

「…………う、ぐっ…………ゴホッ！が…………ぐ、う…………！」
「みーちゃん!？」

美羽の抱える重い病。その発作が、今起こった。

美羽は胸を押さえ、苦しきで歪む視界が余計気分を悪くする。固い地面に膝を打ちつけるのも気にせず、美羽は荒い息遣いのままうなだれる。

「みーちゃん、大丈夫!?!しっかりして!」

「あ、ぐあ…………ぐーゴホッ!!」

「みーちゃん…………」

香澄は美羽の背中をさすり、声をかける事しかできない。咳はひどくなるばかりで、香澄にはどうすることもできなかつた。

昔からそうだった。美羽が病気で、苦しんでいることも知っている。この発作も、どれだけ見てきたのかわからない。

そのたびに、香澄は自分の力のなさを痛感する。励まそうと言葉を並べても、苦しみを取り除くことはできていない。薬で痛みを消し去ることは簡単だ。香澄だって、それくらいの事はしてやれる。

でも、苦しみを肩代わりすることはできない。

ただ見ているだけ。外面上でしか、力にはなることができない。そんな情けない自分を見るのが、どうしても香澄は辛かった。苦しむ美羽を見る以上に、誰かを勇気づけるだけの力がないのだと痛感してしまふから。

「か、すみ、さ…………かば、ゴホッ!前、の…………ケツト…………ゴホッ!!」

「鞆の前ポケットだね！待ってて!!」

それでも、今この場で助けることができるのは、香澄しかいない。言われた通りにポケットを漁ると、すぐに薬は見つかった。

「これだよね、みーちゃん!」

「あり、がと……」

カプセル状の薬を口に入れ、美羽は水で流し込むこともせず飲み込む。それだけ切羽詰まっていたのだろう。と、徐々に発作は収まり、落ち着きを取り戻した。

「……はあ。ごめんね、香澄さん。見苦しい姿を見せちゃって」

「そんなの、全然いいよ!私だって、みーちゃんの力になりたいよ……」

「その気持ちだけでも十分ですよ。それに、香澄さんは今、私の力になってくれました。1人だったら、どうなってたかわかりませぬね……アハハ」

その言葉だけで、香澄は少し救われた。そんな気がした。

「じゃあ、私は早めに帰ってちよつと休みます。ギターでも弾いて、気分落ち着かせますよ」

「私も一緒に帰るよ!みーちゃん、また発作が起こったら……」

「心配してくれてありがとう、香澄さん。でも、私なら大丈夫。鼻歌でも歌いながら帰ったら、発作なんて怖くも何ともないです」

音楽を聴いている時、歌っている時。美羽は病気に苛まれることはない。その不思議な体質を香澄はもちろん知っていた。

けど、それで安心できるかと言われるら違う。今の状態の美羽を1人で返すわけにはいかない。香澄にだって、それくらいはできるはずだ。

「でも——」

「香澄さんには、香澄さんのやることがあるでしょ?」

続けようとした言葉は、凜とした美羽の言葉でかき消される。怒っているわけではない。ただ優しく、そして強く諭すように。

「そ、それは……」

「バンドのメンバー集め。今から行くところがあるって、そう言う事なんじゃないの?」

「え、どうしてわかったの?」

「そりゃあ……女の感?」

「みーちゃん、そんなものあるの?」

「いや、ないよ。真に受けないでよ。まあ、でも……幼馴染だから、ですかね?」

さつきと何も変わらない、いつもと同じ笑顔。美羽は鞆をかけ直しながら、香澄に向かって微笑んで見せた。

もう大丈夫だから、と。

「行つてくださいよ。私、香澄さんがバンドするの、すつごく楽しみなんです!」

「みーちゃん……」

「どんな人が香澄さんとバンドして、一緒に演奏するのか……考えただけでもワクワクするんですよ!だから私、これから香澄さんの事応援します!バンド、本当に頑張ってくださいね!」

目を輝かせ、美羽は香澄に精一杯のメールを送る。バンドと言う世界に踏み出し、そこでどんな音色を奏でるのか。その旅路に、思いをはせて。

そんな美羽の熱い気持ちは、香澄を動かすには十分だった。

「……ありがと、みーちゃん!私、絶対にバンドやるよ!そして、みーちゃんもキラキラドキドキさせて見せるから!」

「そうしてよ!香澄さん、ファイト!」

「うん!じゃあ、私行ってくる!」

「頑張つてね、香澄さ〜ん!!」

強い思いに背中を押され、香澄は走り出す。後ろから聞こえる美羽の声に、笑みをこぼしながら。

その先に待つ、赤いギターと少女の元へ。

phrase 活路を開く武器

放課後。部活や帰路に着く生徒が大勢いる中、俺は正門を出てバイト先へと向かおうとしていた。香澄たちと一緒に行った、SPACEだ。

「今日は2組ライブがあるって話だから、少し遅くなるな……ん？」

俺の目の前を歩く生徒たちの中に、見慣れた姿が。桃色のポニーテール。間違いない、沙綾だ。

俺はまだ気づかれていないことを確認して、ゆっくりと近づく。そして、後ろから静かに肩を叩いた。

「よっ、沙綾」

「うわあっ!?!し、翔?!脅かさないでよ……」

予想以上の反応で、つい笑ってしまった。それに対して、沙綾はすねてしまったのかムスツと頬を膨らませる。

「アハハ、悪い悪い。あんなに驚かれると、俺もからかい甲斐があったって言うか……」

「むく。今度私からも絶対に仕返しするからね？」

「お手柔らかにな」

こんなことで張り合うなんて、沙綾も案外子供みたいな一面があるんだな。普段はもっと、落ち着いた雰囲気って言うか……。どっちかって言うと、お姉さんみたいな存在感があるんだよな。

「あれ、翔って家こっちだっけ?香澄と同じ電車通学でしょ?」

「今日はバイトなんだ。この辺りにある、SPACEってライブハウスでさ」

「……そうなんだ。ライブハウスでバイトをね」

「ああ。沙綾は家の手伝いだろ?しかも毎日だし、大変じゃないか?」
「大変かって聞かれたら、確かに大変かも。うち、結構人気あるからね」

りみもチョココロネ買いに行くって言ってたな。にしても、今日のチョココロネの紙袋には驚かされたけど。

それだけ沙綾の家のパンは旨いってことなんだよな。うわ、ますま

す気になるんだが。

「人気か……だったらなおさら大変だろ？放課後すぐに帰って手伝いなんてさ」

「そんなことないよ。心配してくれて、ありがと」

空色の瞳を俺に向け、太陽のような笑顔を見せる。思えば、沙綾と二人きりになるのは初めてな気がするな。少しドキドキしてきたかも。

「そっちはどうなの？ライブハウスのバイトって、楽しい？」

「俺が音楽好きだったのもあるし、楽しく仕事してるよ。バイト仲間在花女の生徒もいてさ。そいつとも仲良くやってるし」

今日は非番だったと思うから、会えることはないが……かなり天然で、言動が香澄以上にわからない奴。でも、仕事はきっちりこなしてくれるし、一応面白いから、何だかんだで憎めないんだよな、あいつは。

「へえ。いいバイトだね」

「ああ。けど、やつば大変ではあるけどな。今日も2組ライブが入って、割とハードみたいだし」

「そっか……。あ、だったらうちのパン持ってく？差し入れてことで、喜んでくれるんじゃない？」

「えっ、持ってくって……」

それは、俺にパンを無償でくれると言っていると言う事だ。いくら沙綾がいいと言っても、さすがに少し遠慮してしまう。

「いや、さすがに悪くないか？店の事だってあるだろうし……」

「いいの。友達なんだし、いつも仲良くしてくれてるお礼って言うか。こんな形でしか用意できないけど」

「お礼なんて、そんな……」

「素直に受け取ってよ。入学式の時だって、翔に助けられたからね」

沙綾がそこまで言ってくれるのなら、逆に断りづらい。俺はありがたく、沙綾の好意に甘えることにした。

「……わかった。じゃあ、ちょっと沙綾の家に寄らせてもらおうよ。行ったこともないしな」

「言われてみればそうだよ。あ、でも牛込さんはいつも来てるんだよ。朝早くから、チョココロネ目当てにね」

「知ってる。りみ、沙綾の店のパンはおいしいんだって、前に嬉しそうに話してたからな」

「ついさつき食べたいと思っていたパンが、こんな形で手に入るなんてな。りみの話もあるし、期待が高まる。」

「俺はひとまずSPACEに少し遅れると連絡を入れ、沙綾の家のパン屋に向かう。道中、俺はあまり沙綾と話をする機会がなかったこともあって、他愛もない話を繰り広げていた。」

「昔の思い出や、学校生活。いつしか話題は、お互いの趣味に関するものへと変わっていた。」

「沙綾は、何かはまっている事とかないのかな?」

「そうだな……。あ、野球観戦とか好きかな」

「や、野球?! イメージと全然違う!」

「もっと女子っぽい趣味を持っているのかと思っていたが、手に汗握る熱血路線の趣味だとは。意外過ぎて、開いた口が塞がらない。」

「アハハ、よく言われるよ。何だか男の子っぽいってね」

「俺もそう思うからな……」

「翔はどうなの? 男の子の趣味って私、あんまり詳しくわかんないから」

「そうだな、俺は……。やっぱり音楽かな。ずっと身近に音楽はあったし、聞いていて楽しいからな」

「ライブハウスをバイトに選んだのも、音楽にかかわる仕事があったから。苦労は多いが、楽しさが勝るいい環境だ。」

「後は……。また別の理由があるんだけどな。」

「……音楽、か。私も音楽はよく聞くよ。ノリノリのロックとかね」

「やっぱり意外」

「そうかな……。? って、じゃあ翔には私の事がどんな風に見えるの?」

「うーん……何と言うか、大人なバラードでも聞いてしみじみして
るって感じ」

「そう言う時もあるけど……」

いや、あるのかよ。

「でも、そんなに私、想像してるほど大人ってわけじゃないと思うんだ
よね。はしゃぐ時ははしゃぐし、自分では子供っぽいかなって思う時
もあるよ」

子供っぽいか……。あ、でもさつきだって子供みたいに拗ねてた
な。案外、そんな沙綾の一面を俺がまだ全然見てないだけなのかもし
れないな。

「あ、着いた。ここだよ」

大きく見えてきた、やまぶきベーカリーの看板。ガラス張りの外観
からは、豊富な種類のパンが行人の食欲を刺激している。てか、俺
も今すぐ食いたい。腹減ってきた。

「外で待ってるのも何だし、中入って。これからパン持ってくるから」
「そうするよ。お邪魔します」

「店なんだから、そんなのいいよ。何か欲しいパンがあったら、そこか
ら声かけてくれたらいいから」

「おう、わかった」

俺をパン屋の中に誘導して、沙綾は裏手へと消えていった。待つて
いるだけなのも退屈なので、沙綾の言う通りに何かリクエストでもし
ようかとパンを物色。

あんぱん、メロンパン。あ、チョココロネもある。へえ……色んな
種類のパンがあるんだな。どれもおいしそうで、人気なものよくわか
る。

「……………」

ただ、俺は少し気になっていた。それは、沙綾と話していた時、俺
が音楽についての話題を振った時だった。話は聞いてくれるし、沙綾
の方からも話してくれた。思い返してみても、内容自体は特に違和感

は感じない。

だが、沙綾は一瞬だけ、何かをためらったような空白の時間があつた。それ以降は普通に接してくれたが、俺にはあの一瞬が引つかかって仕方がない。どうも気乗りしないような、そんな沈黙。

音楽が嫌いではないだろう。だったら、わざわざ俺に話を合わせて、音楽の話題を広げようとはしないはずだ。無理にでも、違う話を持ち込もうとするだろう。

だとしたら、何か音楽の事で問題があるのか……？

「ごめん！パン選ぶのに迷っちゃった！」

と、沙綾が紙袋を抱えて戻ってくる。あれは、前にりみが昼飯に持ってきてたものと一緒だな。

「いや、いいよ。そんなの気にし——って、こんなにくれるのか!？」

「そんな驚かなくても……それでも少ないくらいだよ？」

どこがだ。紙袋からはパンの一部が見えるほど、パンが詰め込まれているんだぞ。まるで限界まで袋詰めして、持って帰る気分だ。それだけのパンを、俺のためにわざわざ……何だか、そう考えると涙が出そうになった。

「本当、ありがとな。SPACEのみんなで、おいしくいただくよ」

「そんな気負う必要ないって。これは私からの差し入れなんだから」

「沙綾……」

俺は目の前の天使みたいな少女に感謝して、紙袋を受け取った。中のパンがつぶれないよう、大事に抱えて。

「ライブと言えば、香澄のバンド計画はどうなってるの?」

「ひとまずは、今日の昼に話してた感じだな。りみは加入したが、まずはメンバーだ。後は楽器か」

「楽器って……あのランダムスターってギター?」

「多分、あいつの事だからな。一度これがいって決めたら、そこに向かって真つすぐ突っ走るし」

それが香澄の長所でもあるんだけどな。俺も見習うべき点だ。

「つてことは、香澄は今……」
「ああ。沙綾の考えてる通りになつてゐるだろうな」

「ふー、こつちの荷物はこんなところか。後はあつちのガラクタを……」
「あ、有咲いたー」
「不法侵入だつてんでらろ！」

沙綾の読み通り、香澄は昨日の蔵にいた。星のギターが目当てでもあつたが、香澄にはもう一つ目的がある。

(さつき、みーちゃんと約束したから。バンドやるつて)

有咲をバンドに誘う事。美羽の応援も受け、香澄のやる気の炎は燃え上がつていた。

「よかつた。早退したつて聞いたから、心配しちゃつた。朝もなんか変だつたし」

「誰のせいだと思つてやがる」

「えっ？誰つて……誰？」

「聞き返すなよ！」

苛立ちをあらわにする有咲だったが、香澄には自分の事を言われていることに気づいていない。本気で考えだす香澄を見て、有咲は渋い顔をしながら、

「お前だ、お前。マジでわかんねえつて顔すんな」

「え、私？」

「他に誰がいんだよ」

有咲は何か作業をしていたみたいだったが、香澄が来たからか休憩を始めたみたいだった。昨日よりも蔵の中は散乱していて、香澄もうかつちの中に入れない。

「まあいいや。んで、何の用？午後は出なくてもいい日だし、連れ戻す気なら断固拒否」

「出なくていいって、どういう事？」

「自主休講。出なくても単位とれるし。悪い？」

単位は取れるから勝手に休む。香澄にはよくわからなかった。けど、有咲が自分からわざと早退したのはわかる。

それが、ちよつともつたいない気がすること。

「ん〜つまんなくない？友達にも会えないし、お昼一緒に食べられないし」

「何、自慢？それとも説教？先生にでも頼まれたとか？大変だな」

「ち、違うよ〜！私はただ、有咲と——」

話をしたい。昨日のライブでのキラキラドキドキを、もっと有咲と共有したいだけなのに。あ、ギターも気にはなっているかな〜なんて……えへへ。

「冷やかしたら帰れよ。私は今、忙しいんだよ」

「う、ううん。まだ帰りたくない」

「……はあ？お前、話聞いてたのかよ」

「うん、聞いてた。けど、帰りたくないよ。だって私、有咲とバンドしたくてここに来たんだから」

このまま引いたら、有咲の言う通りに帰るしかなくなってしまう。まだここに来て少ししか経ってないのに、そんなのは嫌だった。

「はあ、お前なあ……。つか、そもそも何で私なわけ？もつと適任な奴なんか、探せばいくらでもいんだろ？」

「う〜ん、そうかもしれないけど……私は有咲としたいの！」

「んだよそれ！だから、答えになつて——」

「だって、あの時の有咲、とてもキラキラしてたから」

輝いていた。少なくとも香澄の中では、他の誰よりも。

「……何言ってんだよ。私が、キラキラだつて？」

「気づいてる？有咲も、あのライブ観てすつごく夢中になつてたんだよ。」

「私が……？」

「有咲、ツンケンしてるけど……音楽が好きなんだなつて気持ちは、伝わってきたよ。そんな有咲とだから、私は有咲とバンドがしたいんだっ！」

私は知っている。無数のペンライト、湧き上がる歓声。それらを作り出すバンドの音色。魅了され、彼女たちのようにバンドをやつてみたいと志した隣で……あなたも心動かされていたことに。

口ではなーくんと言い争つてたけど、表情は正直だった。吸い込まれるようにライブに魅了され、半開きの口から漏れだすのは、興奮を伴った吐息。

「は、はあ？ふぎげんなよ。そうやって私を上手く誘い込もうとしても、バンドをやる気なんて絶対にならないからな」

「かもしれないけど、有咲がその気になるまで諦めないよ！私！」

「……こいつ、マジで何なんだよ」

しつこいにもほどがある。バンドなんて面倒で、有咲にとっては必要な物。絶対に気持ちは傾くはずがない。そう言っているのだから、ポツキリ心が折れてくれたらいいのに。

だが、香澄の芯は太かった。かつての星空から感じた思いを、もう一度感じるために。そのためには、あの日香澄のように音楽に心を奪われた、有咲の力が必要だった。

「……あ、そうだ！ランダムスター！ね、また見せてよ！」

「……っ！ふん、知らねーな」

「え、どういう事？そこにケース置いてあるじゃん」

昨日と変わらない黒のケース。星のシールも貼られているし、あのギターのもので間違いないはず。いくら何でも、この状況でしらばっくれるものなのか。

だが有咲は、ここぞとばかりに強気に出る。狂わされた気持ちを落ち着かせるために。

「残念だけど、あれは近いうちに私の物じゃなくなる。商品だ」

「そ、それって本当なの？」

「ネットオークションに出したんだよ。私にとってはゴミでも、どっかの誰かにはめっちゃくちや価値がある。昨日のあいつが教えてくれた通りだ」

「あいつって？」

「お前と一緒にいた奴。あいつ、あのギターに食いついてたじゃん。それって、価値があるからってことだろ？」

翔は確かに楽器には詳しい。しかも香澄は、さつき美羽からランダムスターがどれだけ高価なギターなのかを聞いている。香澄の中に、焦りが生じていた。

「そのギター、もうすぐ30万超えそうだしな」

「さ、30万……!?!」

しかも、追い打ちをかけるような情報が突き付けられる。下手に手が出せる金額じゃない。香澄は、自分の表情が強張っているのを感じ取っていた。

「欲しいなら、あんたもオークションに参加したら？ぼさつとしてると、誰かに購入されるかもしれないけど」

「う、うう……」

「お疲れさまでした!」

その日の夜。俺はようやくバイトが終わり、ロッカールームで制服に着替えていた。やはりハードだったが、沙綾からもらったパンのおかげで、スタッフ一同最後まで踏ん張ることができた。

「後で沙綾にメールでお礼言っておかないとな……」

スタッフの人も喜んでたし、俺も大満足だ。本当においしかったし、今度は普通に客として買いに行きたい。

俺は着替えを済ませると、ロッカールームを出る。もう客もない通路を歩き、SPACEを後にしようとして……。

「……成川」

いつものように固い表情を振りまくオーナーに呼び止められる。さすがに無視は良くないので、振り返って頭を下げる。

「今日はお疲れ。成川のおかげで助かったよ」

「ありがとうございます」

「また次もよろしく頼むよ。それはそうと……」

視線だけで周りを確認し、オーナーは俺と正面から向き合う。まるで何かを気にするようなオーナーは、誰もいない事を確認すると、ゆっくりと俺との距離を縮めていく。

表情一つ変える事ないオーナーの顔が、少しずつ俺に迫る。威圧感と焦燥感、やや嫌悪感に苛まれながらも、俺は微動だにせずオーナーの接近を待つ。

じりじりと詰まる2人の距離。見届けるものはいない。

やがて、完全に密着しようかと言わんばかりに、両者の姿が重なって――。

「調子はどうだい？」

「……おかげさまで」

「そうか。あまり時間はないぞ？」

「もちろん、心得ています」

俺の横を通り過ぎ、すれ違いざまにオーナーは耳元でささやく。俺は短く答える事しかできずに、オーナーが去っていくのを待つ。

まだ何も変化のない現状に、俺はそろそろ動かなくてはいけないと、決意を固めながら。

「……行つたみたいだな」

オーナーがいなくなつたのを見届け、俺はすぐさま外に出る。とりあえず、新鮮な空気を吸いたかつたからな……。

「美羽も待つてるだろうし、早めに帰らないと……ん？」

突然スマホが震える。メールじゃない。誰かからの電話みたいだ。発信者は……。

「こいつは……香澄からか？」

こんな時間に電話なんて珍しいな。普段は家が隣だし、近所迷惑にならない程度に呼んでくるからな。今日はバイトだつてことは香澄にも言ったし、電話してまで話したい事でもあつたのか。

「もしも——」

「うわ〜ん！な〜く〜ん!!」

「何だなんだ!？」

いきなり泣きつかれ、俺は困惑する。何かあつたのは確實だが、状況がわからない。

「どうしよ〜な〜く〜ん！ランダムスターが〜！あ〜り〜さ〜が〜!!」

「わかつたから落ち着け！何があつたのか全然わからん！」

どうしてこうなつた。俺は何とか香澄を落ち着かせると、何故泣いているのかについて事情を聞きだす。断片しか情報は出なかつたが、何となく理解はした。

「つまり、有咲とライブとかバンドとかの話をしたくて家に行つたけど、ランダムスターがオークションに出されて、手の出せる金額じゃないくらいになってると。それで話どころじゃなくなつて、今日は帰つてきましたと」

「そうなの！ねえ、助けてよな〜くん！」

「いや、無理だよ！そんな大金どこにもねえよ！」

だから俺に電話してきたのかよ。香澄の中で、俺は一体何なんだ。足長じいさんとも言つうのか。

「で、でもバイトしてらつて……」

「家計が苦しいって話、前にしたよな!?!だから花女に特務生として入

学したって話も、忘れてないですかね!？」

無理難題を押し付けるのが上手いな……こいつは。昔からそうだったし。建前の理由が役に立ってよくなってよかったよ、本当。

「うう……そこを何とかしてよ〜!私、ランダムスターを使ってバンドやりたいんだよ〜!」

30万とか、ぶつとんだ幼馴染のために出せるか。駄々こねても無理なものは無理。

「そうは言っても……どうしようもないぞ。30万なんて簡単に用意できるものにじゃないだろ。それに、オークションの落札が決まったら、それこそ俺たちにできる事なんて何も無い」

「そんな事言わないでよ〜!なーくんだけが頼りなんだよ〜!」

俺だけって事は、お母さんにも断られたんだな……。だからって、こっちに頼むなよ。

「うう、私はどうしたら……」

「香澄……」

けど、珍しく弱気だな。香澄らしくない。

「……オークションの落札までに、どうにかするしかないだろうな。何とかして、その……ありさ?って奴を説得するか、最悪買うか」

「でも、どうすれば……」

「どうもこうも、考えて答えが出るような簡単な事じゃない。それは香澄だってわかってるだろ?」

「うん……」

まだ時間は残っている。落札がいつ決定するかは分からないが、この機会を逃せば、ランダムスターは手に入らないかもしれない。そうなる前に、少しでも足掻くしかない。

だが、電話越しに聞こえてくる香澄の声は、不安を含んだ後ろ向きな声だった。俺の言葉に、香澄の心は何も動いていない。

「打てる手が限られてるなら、その中からどうにかするしかない。今できる事から順に試していくべきだ」

「それはそうだけど、もしかしたら手に入らないかもしれないんだよ?そう考えると、私……」

「その時はその時だろ。今動くのは、そうならないようにするために必要な事だ。行動を起こすのなら、今しかない」

「そんな事言っちゃって——」

「……ああ、もう！何をウジウジと悩んでいるんだ、香澄！」

「……っ!?!」

俺はさすがにきつく言う事を決めた。香澄の取り柄。それは、今でこそ発揮されるべきものなのに。

「何を迷ってるんだ！香澄は昔から、すぐに行動に移す奴だっただろ!?!どんなに無理でも、お前はまず動いた！それは、あの星空を見てからだろ!?!」

「あ……っ!?!」

「言い続けただろ？そうやって。そいつに出会うために、お前はずっと探し続けてた。行動していた！なのに、何で今動かない？すぐそこに、香澄の求めていたキラキラドキドキが待っているんだろ!?!」

香澄は何かあるとすぐ動いていた。それは、あの星空を見てからよく目立った。前と後では、見違えるほどに。

俺はそいつに振り回され、変な目に遭ったことも少なくなかったけど……香澄を変えたのは、あの星空だった。

動けよ、香澄。香澄らしく。

その先にはきつと、星が待っている。

「……そうだよ。私、まだ諦めない。それに、ギターも大事だけど、まだ有咲とちゃんと話してない。もっといっぱい、キラキラすること話したい！」

「よく言ったな。それでこそ香澄だ」

「うん！何だか元気出てきたよ！なーくんの話して正解だったよ！」

声に明るさが戻った。これで香澄は、不安で立ち止まることもないだろう。

だが、事態は一刻を争う。香澄の頑張りに期待はするが、それだけ

で解決するかと言われたら、正直分からない。俺もできる限り、サポートに回らないとな。

「じゃあ、なーくんもう切るね！おやすみ〜！」

「おう。頑張れよ」

応援の言葉を残し、俺は電話を切る。明日からは、忙しくなりそう
だ。

phrase 10 意図

「起立・礼！ありがとうございます！！」

香澄から電話を貰った次の日の事。と言っても、既に授業は終わり、これから放課後。俺は特に何も無いから、このまま帰ろうとしていたのだが……。

「じゃあね、なーくん！さーやも、りみりんも！」

「また明日な」

香澄はすぐに教室を飛び出し、全速力で校舎を出る。向かう先は、間違いなくあそこだ。

「香澄ちゃん、行っちゃったね……」

「帰る準備早かったね。香澄、急いでるみたいだったけど」

「ああ。昨日話した、市ヶ谷って奴の家にな。色々あって、ちよつとまづい状況になっているんだ」

「えっ、そうなの？」

俺は手短に2人に説明する。香澄の欲しがっているランダムスターが、ネットオークションに出品されていること。その額は、とても学生が手の出せるものじゃない事。

だからこそ、何としても市ヶ谷に交渉して、ランダムスターを譲ってもらう必要がある事を。

「そうなんだ……。香澄、大変だね」

「私たちにできる事って、何かないのかな……？」

「わからない。その市ヶ谷を説得するくらいしか、道はないんじゃないか？」

みんなで金を集め合って、ギターを買いうって言うのも……正直無理な話だからな。言っている間にも、額はさらに膨れ上がっているかもしれないし。

「私にも手伝えることがあったら言ってね。香澄が頑張ってるのに、ただ見ている事なんてできないよ」

「私も、香澄ちゃんが困ってるなら、力になりたいから……」

「ありがとな。沙綾、りみ。俺も、何をどうすればいいかわからないか

らな。俺の方こそ、協力してくれると嬉しいよ」

俺の言葉に、沙綾とりみが力強くうなづく。俺もこれからやるべきことを考えなくてはいけないな。

その前に、まずは香澄がどう動くかが問題だ。

「こんにちは〜有咲っ！」

「またかよ！しつこいな！」

翔に励まされたことをきっかけに、香澄は気持ちを新たに有咲の家へと向かった。蔵の中は少し綺麗になっており、相変わらず冷めた反応だが、香澄は気にしない。

何か反応があるまで、ぶつかり続ける。行動を起こすことが、自分の取り柄だと教えてくれたから。

「有咲、今日も早退したって聞いたから、心配したよ？でもやっと会えた！」

「こんな奴に心配されなくてもいいっつーの……。てか、ここまで行くとストーカーみてえ……」

本当は今朝も家には行っていた。だが、有咲は学校に行ったという話をおばさんから聞き、すぐに学校へ。休み時間も探し回っていたのだが、担任に確認したところ、すぐに早退したと言う事だった。

「ストーカーじゃないよ！私はただ——」

「ギター目当てだろ？」

「違う！それだけじゃないよ！」

「ふくん……。『それだけ』じゃないってことは、ギターは目的には含まれてるってことじゃん」

「う……」

ほら見ろと言わんばかりに、有咲は素っ気ない眼差しを香澄に向け

る。凶星だったことに落ち込みそうになるが、何とか気を保つ。この程度で折れていては、ギターは夢のまた夢だ。

「つーか、何でもまた来るわけ？ギターは貸さないし、蔵にも入れねえ。欲しいなら買えば？」

「それは……」

「な？結局そう言う事だろ？前はバンドがどうか適当な事言っておきながら、ギター目的のために気を引こうってわけだ。私をその気にさせて、ギターを譲ってもらう。魂胆が丸見えだ」

「ち、違うよ！バンドの話は、でたらめなんかじゃない！私は本当に有咲と——」

「うるさい。そこどいて。片付けの邪魔になる……って、何この段ボール、重っ!？」

掃除でもしているのだろうか。乱雑に置かれた段ボールの1つを持ち上げ、有咲は蔵の空いているスペースへと運んでいく。だが、香澄の見た限りでもかなりの量だ。これを1人でするのか。

しかも、持ち上げられた段ボールは、すぐにドスンと音を立てて地面に降ろされる。とても有咲だけで終わると思えない。

それを見た香澄のすることは、決まっていた。

「大丈夫!?私、手伝うよ!」

「な、何だよ!?恩でも着せて、ギター貰おうってか!?その手には乗んねえぞ!」

「違うよ!こんな重いのも、1人じゃ持てないよ!」

それに、香澄は何とかして有咲と話ができる時間を作りたいだけだった。明らかに毛嫌いされている状況を、どうにか改善したい。普通に話ができるようになるくらいの関係構築しようと、香澄は考えている。

「そ、それは……余計なお世話だ!1人だって……」

「うっ、重いね……。こんなの、やっぱ1人じゃ無理だよ!早く運んじやおう!」

「く……。い、言っとくけど、何もやらねーからな！仕方なく、あなたを利用するだけだ！」

「それでもいいよっ！じゃあ有咲、そっち持って！」

有咲は香澄とは反対側を持ち、息を合わせて持ち上げる。2人とは言え、女子の力だ。重いことに変わりはないが、それでも1人の時よりは負担は軽い。有咲の指示を受け、香澄たちは段ボールを運び終えた。

「ふー！段ボール、すっごく重かったー！」

「……どーも」

「えへへ、どういたしまして！他にも手伝うことあったら言ってね！」

「……ふん」

有咲は感謝こそしていたが、まだ警戒は解いていない。どうせギター目当てのアップールなだけだ。あんなものに善意も何もない。自分がよかったらそれでいいってだけ。

バンドなんて、なおさら……。知ったことじゃない。

「でも有咲？ずっと中片付けてるけど、何してるの？昨日も掃除してたよね？」

「何って……別にいいだろ？お前には関係ねーよ」

「いいじゃん！それくらい教えてよ？」

「うっ、くつつくな！暑苦しい……」

抱き着く香澄を押しつけながら、有咲はこれ以上密着されるのを避けるため、渋々事情を話し出す。本当に遠慮がないと、有咲は香澄に嫌気をさしながら。

「何って事もねーよ。ただ、片付けたらここを好きに使っていいって、ばあちゃんかな」

「そっか。けど、この荷物って有咲が1人で片づけるの……？」

「は？そうに決まってるじゃん」

「ええー!?こんなにあったら、いつ終わるかわかんないよー!？」

1つ片付けたが、まだ山のように段ボールや使わないゴミが広がっ

ている。しかも、さっきのように重い荷物も出てくるはずだ。これを1人で掃除するのは、骨が折れる。

「よし、だったら私も頑張らなくちゃ！2人でやったら、きつと早く終わるよ！」

「は？手伝えなんて、私一言も——」

「暗くなる前に。パパッとやっちやおう！まずはこっちの方から……」

「ちよ、おい！」

あいつ、また勝手に片づけだした……。こっちから頼んでもないのに、本当に必死だな。そこまでしてまで、あのギターが欲しいのかよ。バンドやりたいのかよ。

それとも、あいつ本当に……？

「マジで何だよ、あいつ……」

それから数日が過ぎた。香澄は欠かさずに市ヶ谷とか言う奴の家に出入りするようになっていた。朝早くから家に向かい、放課後も何やら蔵の掃除をやっているらしい。事情がよく見えないが。

その甲斐あってか、香澄曰く、市ヶ谷は少しずつ心を開いてくれているらしい。気がない返答なのは相変わらずみたいだが、話す機会は増えて行っているそうだ。一方的に話しているのを、適当に相槌打つてるだけじゃないかと心配になるんだが。

でも、毎日家に行っているんだ。しつこいと思われてもおかしくはないが、まだ何事もないところを見ると、案外うまくいっているみたいだな。

とは言え、オークションの期限も刻一刻と迫っている。どうにかして決め手が欲しいところだ。俺や沙綾たちも、今のところは香澄を応

援することしかしてないからな。何かできるなら手伝いたいところだが……。

「それで？ 珍しく店に来たと思ったら、どうして朝からご機嫌斜めなのかな？ 翔は」

「……あのバカな幼馴染のせいだ」

俺は今、沙綾の家のパン屋、やまぶきベーカリーに来ていた。いつもなら、朝早くに起きてわぎわぎ寄っていくなんてことはしない。と言うか、こつちから出向くのは今日が初めてだったりする。だが、俺がここにいるのは、頭キラキラしてるアホ（誰とは言わない）のせいだ。

昨日は夜遅くまで起きていたから、睡眠時間がかなり少ない。その上、毎朝のように早く家を出る香澄の声に起こされてしまった。いつもならこんなことはないのに、今日に限ってこれだよ、畜生。

で……こうなった。

「二度寝するにも、寝たらず起きられないなって悟ったからな。でも学校まで全然時間あるし、どうしようかな〜って思ってた」

「それで、うちに来たって事だね」

「ああ。今普通にしゃべってるけど、気を抜いたらマジで寝る。延々と話題振ってくれ」

「うん、相当深刻そうだね……」

1 限目の授業は、遠慮なく睡眠時間に使わせてもらう。幸いなことに、厳しい先生じゃないからな。

「あ、この前はありがとな。SPACEの人も喜んでくれたし、俺も嬉しかったよ。すつごくおいしいな」

「ありがと。あ、もしよかったら、焼き立てのパンもいかがですか？ この前は冷めちやっただでしょ？」

「そうなんだが、さらつと商売に持ち込んだな……」

「アハハ。一応パン屋の娘ですから。どう？買ってく？」

「ああ。そのつもりで寄ったんだしな」

トレイとトングを持ち、俺はパンの並ぶコーナーへ。こうして見ると、やはり種類が多い。前は沙綾が選んでくれたパンを食べただけだからな。

「どれにしようかな……何か、どれも旨そうだな」

「だったら全部買ってく？なんちゃって」

「それはさすがに……あつ、確か前に食べたメロンパンが旨かったな。それにするか」

サクサクのパン生地に、ふんわりとして香ばしいパンのコンビネーションが抜群にヒットする。俺は迷わずメロンパンをトレイに置いて、他のパンを物色。りみじやないが、何個でも食べられるメロンパンなんだよな。

「ふ、ふくん。翔、前のメロンパンが一番おいしかったんだ」

「そうだな。他のパンも確かにおいしかったけど、あれが一番だったな。冷めても旨かったし、最高のメロンパンだ」

「そ、そっかく。そうなんだ……フフツ」

やっぱり自分の店のパンを褒められるのは嬉しいのか。髪をクルクルといじりだし、わかりやすく喜んでいる。そんな姿は、年相応の少女らしい。

「……よかった。気に入ってもらえて♪」

「沙綾？何か言ったか？」

「(えっ、声出てた……!?) う、ううん。ゆっくり選んでって、それだけだよ」

何か小声で話すのが聞こえた気がしたんだが……気のせいかな。けど、何か慌てているし、少し落ち着きもないように見える。何か企んでいるのか？

だが、その答えはすぐにわかった。話が途切れ、他にも何種類かのパンを選び終えた後の事。レジで会計を済ませようとしている時だった。

「……あ、やっぱりもう一個言う事あった」

「ん、今度は何だ？おすすめのパンでも教えてくれるか？」

「ううん。さっきのメロンパンの話なんだけど……あれ、私が作ったんだ」

「えっ、そうなのか!？」

あのメロンパンを、まさか沙綾が作っていたなんて……。沙綾はただの手伝いだと思っていたが、まさか作る方もやっていたなんてな。沙綾の方を見ると、視線を下げて照れ臭そうにはにかんでいた。

「だから、褒められて何だか嬉しくって……ありがとうね」

「お、おう。お礼なんて言われると、こつちが照れるんだけどな」

「アハハ。でも、私のパンが気に入ってくれてよかったよ。すっごく嬉しい！」

ただでさえ気恥ずかしいのに、追い打ちをかけるように笑顔を振りまいてきた。屈託ない表情に、俺は顔が熱くなるのを感じていた。今ので上機嫌になった沙綾を見ているとなおさらだ。普通に可愛いんだが。

何だろう、この空間。2人の男女が向かい合って、頬を染めてるって時点でマズくないか？これじゃあ誰かに見られたら絶対に誤解を招く。このまま何事もなく終わってくれたら――。

「……あ」

み、見られたー!？」

入り口付近から聞こえてくる、乾いた声。何も悪いことはしていないはずなんだが、余計な事を考えてしまったせいで思考が停止してしまう、時が止まってしまおうとは、こういうことを言うんだな……。

それは沙綾も同じだったんだろう。ギクリと効果音が聞こえてきそうなほどに表情を強張らせ、変に意識してしまったらしい。こんなことを考えてる俺たちの方が変なんだと思うけどな。

そもそも誰が見たかだ。俺たちは恐る恐る目を向けると……口をパクパクさせているハネっ毛の小柄な少女が。そうか、りみだったか

……。

「あ、う、え〜つと……お、お邪魔しまし——」

「いや、大丈夫だから!!」

完全にフラグ立ててしまったってことだよな、今のは。

「そう言う事だったんだね。私、何だかいい雰囲気だったから、その……」

「違うって。私がちよつと舞い上がっちゃただけだよ」

「そう言うわけで、今回は沙綾に原因があるってことだ」

「もうっ、そんな人聞き悪い言い方しないでよ……」

さっきの騒動(?)が起こってから数分後。何故か泣きそうになっていたりに、俺たちは事情を説明する。誤解も解けたみたいで、今はりみもパン選びの途中だ。

「で、りみはチョココロネか?」

「うん。翔君は……メロンパン?」

「前に食べたことあってな。こいつはオススメだぞ」

「私も食べたことあるよ。あの食感がたまらないよね」

何だ、食べたことあったのか。今もトレイにはチョココロネしか乗っていないが、他のパンも食べることはあるんだな……。

「フツ、今翔が考えてること、教えてあげよっか」

「いや、いいです」

「牛込さん、中学の時からうちの常連さんでね。最初はチョココロネだけじゃなくて、色んなパンを買って行ってくれたんだよ」

「待って。何で無視して言っちゃってんだよ」

「え?何の事?私はただ、牛込さんの事話したただけだよ。もしかして翔、牛込さんがチョココロネにしか目がないなんて考えてた?」

「もう全部言ってるだろそれ!沙綾こそ、やり方が汚いぞ!」

「あく、翔って牛込さんの事そんな風に見てたんだ？」

「くっ……ここぞとばかりにからかってきやがって……」

「さっきのお返しですよ♪」

いや、違うからな？俺は決して、りみがチョココロネ大好きマンだとか、りみⅡチョココロネだなんて考えてるわけじゃないからな？りみはほら、音楽も好きだし、読書やホラーだって目がないって聞いたし。

……決して、チョココロネだけの奴じゃない。

けどな……りみ、昼はいつつもチョココロネだから、もうそのイメージで定着してしまっただけか……うん、ごめん、りみ。ちゃんとりみの良さはわかってるから、許してくれ。

「あく面白かった！やっぱ、翔と一緒にいるのって楽しいね」

「さらっとゲスな事言った気がするが……まあ、俺も沙綾といえるのは楽しいよ」

「それはどうも。あ、牛込さんもう選び終わった？お会計するよ？」

トレイには5個のチョココロネ。と、何故か1個のメロンパン。さっきの会話を意識してしまっただろうな……悪い。沙綾も複雑な顔をしながら、紙袋にチョココロネ(とメロンパン)を詰めていく。

「……あの、翔君と山吹さんって、仲いいんですか？」

「ん？いきなりどうした？」

「あ、えっと……その、今の二人、仲がいいような気がしたから……」
と、りみが口を開く。俺と沙綾の中について聞いてきたが、いきなりどうしたのか。しかも不安そうで、また泣きそうに見えたのは気のせいかな。

「まあな。花女で初めてできた友達だし」

「そうだったんだ。私、初耳かも」

「あのバカ以外だったら、誰かと話したのって沙綾が最初だからな」

へえ、と相槌を打ちながら、沙綾は手慣れた動きでパンを詰めていく。だが、りみはまだどこか優れない表情のままだ。

「俺から言えるのはこれくらいなんだけど……りみの納得できる答えだったかな？」

「う、うん。ごめんね。何か、変な質問だったと思うけど……」

「別に謝るような事じゃないって。それに、仲がいいかどうかで言ったら、りみだって俺の中では仲がいい人に入るからな？」

「私も……？」

「あのレストランでの話、楽しかった。きっかけは偶然だったけど、出会っているんな話して、仲良くなれた。明るくて、活き活きしてて……あの時出会えてよかったよ」

音楽の話題で盛り上がれる、数少ない友達だ。気も合うし、本当にいい人に出会えたと自分でも思う。香澄や沙綾とは、あんまり踏み込んだ話はできないからな。

他にできるとしたら……それこそ、美羽くらいか。後は、もう1人。

黒髪ロングの、黙っていれば美人な奴が。

「……何か、翔ってある意味すごいよね」

「え？何がだよ」

「よくそんな告白みたいなの、聞いていて恥ずかしいセリフを淡々と言っちゃうのになくって」

見ると、りみはあからさまに俺と目を合わせようとしない。髪の間からちらりと見える耳は、真っ赤に染まっていた。沙綾もニヤニヤとはしていたが、どこか恥ずかしそうだ。

「翔って案外、女つたらしだったりして」

「は!?ち、違うからな!?俺はただ、りみは大切な友達なんだって言いたかっただけで!だから、これからもずっと仲良くしてほしいなって思っただけなんだが!」

「そのセリフも、ギリギリアウトだと思うけど?もしかして無自覚?」
「~~~~っ!だ・か・ら!」

くっそく……。沙綾ってこんな奴だったか?出会った頃と全然キャラが違ってるんだよな……。

「ウフフ、ごめんね。少しからかいすぎちゃった。はい、牛込さん」
「あ、ありがとう……」

紙袋を牛込さんに渡し、エプロンを外す沙綾。何だかんだで、もう学校に行く時間か。早いな。

「さて……着替えてくるから、2人ともちよつと待っててよ」

「ああ、わかった」

「う、うん」

ここまで来て、沙綾を放って先に学校に行くつもりはないからな。りみは少し緊張しているみたいだけど、俺の横でこくりと頷いていた。

「あ……そうそう、翔」

「うん？」

「翔にとっては無自覚でも、周りは自覚しちゃうからね」

「……え？」

謎の言葉を残し、沙綾は裏手へと消えていく。俺は呆気にとられながら、その言葉を頭の中で繰り返し返していた。りみにも聞いたが、どこか気まずそうな笑顔がこぼれただけ。

結局、沙綾の言葉の意図を掴めないまま、俺は学校に向かうことになったとき。

phrase 1 導くもの

「有咲ー、お待たせー！」

「呼んでない！しつこい！何でそこまで毎日付きまとうんだよ!？」

「有咲といろんな話したいんだもん！あ、ギターの事もあるけど……」
「ふん、結局はそこですか。話がしたいとか、ただの都合のいい理由に過ぎないってことだ」

「ち、違うのに……」

数週間が経った。香澄は欠かさずに有咲の家に入りに入りするようになり、蔵の片付けを進めていった。最初は口数が少なかったが、少しずつ話す回数も増えている。

と言っても、香澄が一方的に話しているのを、有咲が適当に相槌を打っただけだが。

「あっそ。どっちにしたって、あのギターはもう渡さねーよ。もう50万超えたからな」

「ごっ!？」

さらに膨れ上がる金額。これでは、ギターを買う選択肢はまず放棄しなくてはいけない。そんな大金を用意できるつては、いくら人脈を広げるのが上手い香澄とは言っても、まずどこにもない。

「ま、それでも手伝うつてのなら別に止めねーけど。人手がある方が、こっちも楽だし」

「……うん、わかった。ギターだけが目的じゃないし、だからってまだ諦めたわけじゃないから」

「そうですか。強がって見せたところで、同情なんかしねーけど。さてと、次がこいつ……って、くそ！また重いもんかよー！」

「手伝うよ、有咲ー……って、何これ重い！重すぎるよ!？」

香澄がサポートに回るが、2人掛かりでも上がらない。これでは、いくら時間がかかったところで永遠に動かせそうにない。荷物はまだまだあると言うのに。

「ぜえ、ぜえ……。や、やべえな。ここにきて、とうとう強敵出現かよ……」

「どうしよう、有咲。これじゃあ、荷物が——」

「言われなくてもわかってるっつーの！けど、困ったな。せめて力のあるやつがいてくれたら、こいつもどうにかできるんだけどな……」

「近くにそんな人いないの？」

「いるかよ、そんな都合のいい知り合い。引きこもりなめんな」

それは威張れるのかどうか。だが、この状況では八方塞がりなのは間違いない。香澄も有咲も、少し心が折れかけていた。

「くっそ……。ここまで来ておいて……」

「……あつ！私、そう言う人知ってる！」

「本当か!?……あ」

思わず喜んで、香澄に詰め寄る有咲。だが、そんな姿を見せてしまったことに恥ずかしくなり、すぐにそっぽを向いて距離を取る。

「有咲、顔真っ赤になっただね」

「う、うるせえ！で、そいつはどこにんだよ？ここに來れるんだろうな!？」

「今日は何もなかったと思うから、多分大丈夫！待ってて、すぐ電話するよー」

腕を組んで、頑なに香澄と目を合わせようとしないう咲。きつと、トマトみたいに顔を染めているんだろう。そんな有咲の姿に、香澄がほほえましい笑顔を向けていたことは、有咲は知らない。

「……で、何で俺が呼ばれる!？」

「だって、力持ちな知り合いって、なーくんしかいなかったんだもくん！」

「こいつかよ……」

さて、俺は今、あの市ヶ谷とか言う奴の蔵の中にいる。今日はバイトもないし、家に帰ってゆっくりしようかと思いつつ、駅で電車を

待っていた。

そんな時だ。俺のスマホに入った一通の着信。相手は香澄。その時点で何か嫌な予感はしていたが、無視するわけにもいかない。すぐに電話に出ると、香澄からの SOS が。

で、俺は二度目となる蔵にお邪魔し、香澄と合流。いきなり泣いて抱き着かれることになり、俺の貴重な休日は、こうして奪われることになりました。

「んで、何するんだよ」

「この荷物！片付けるの手伝ってくれない？」

「そう言う事か。ま、頼まれたのなら引き受けるしかないな。女の子だけに力仕事させるわけにもいかないだろ」

「やったー！ありがとくなくん！」

協力するって言っちゃったからな。香澄も喜んでいるみたいだし、ここは男の出番だ。せっかくの休日だったが、返上してやるとしましようかね。

「それで、あんた……市ヶ谷、だったか。事情はよく知らないが、ここを片付けるって言うなら協力させてもらうよ。これでもバイトで鍛えてるから、戦力にはなると思うぜ。よろしくな」

「……ふん。別に誰だろうと、こいつをどうにかしてくれるなら、私はそれでいいし」

「んなっ……！」

こいつ、やっぱり態度悪いな！前から薄々思っていたが、どうもこいつとは反りが合いそうにない！突っかからないと気が済まないのかよ!?

「……へ、へえ。香澄の話だと、あんたが本当に困ってるってことだから飛んできたのに、何か歓迎されてないような気がするのは何でだろう？」

「知るかよ。ほら、手伝うって言うんなら、さっさとその荷物をあっちまで持って行けよ」

「人にも頼むときは、もう少し言葉遣いに気を配った方がいいと思うけどな」

「何？私は別に、あんたに一言でも頼んでないし。あんたが勝手に来たから、せいぜい役に立ってもら——」

「何だとー!?!」

どうしてここまで罵倒されないといけないんだ!?確かに出会いは最悪で、まだあの時の事を許してもらってはいないと思うけど、これはあんまりだろ!?

「もう、有咲！手伝ってくれるんだから、ちゃんと仲良くしないとダメだよー！」

「仲良く?……ふん。私がいっと仲良くなんて、できるんだったら何も苦労してないっつーの」

「くっ……何か気に入らない性格だな……」

うん、もうわかった。俺はこいつとは当分仲良くなれそうにはないらしい。悲しいことだけだな。

「な、何かごめんね。なーくん……」

「香澄が謝ることじゃない。そう気を遣う必要はないって」

ピリピリした空気を感じ取ったからか、なぜか香澄が謝ってきた。俺は香澄のそんな一面を見て、心配することはないと優しくなだめる。

香澄はぶっ飛んでいて、周りなんか気にしないで突っ走るところがあるけど。いつも迷惑をかけて、自分の事しか見えてないような人に見えるかもしれないけど。実はそうじゃないんだよな。

香澄は、誰よりも周りの事を見ている。友達や仲間を大切に、その絆を宝物のように扱っている。

それに、香澄は……何よりも、そう言った人間関係のもつれに敏感で、繊細なんだよな。

「……まあ、別にいいか。俺は気にしてないし、会った時からずっとこんな感じだったしな。時間はまだあるけど、やるなら早くやってしまおうぜ。市ヶ谷」

「は？何普通に名前呼んでんだよ」

「香澄だつて呼んでるだろ。しかも下の名前じゃん」

「あいつが勝手に呼んでるだけだし。こっちは迷惑なんだけど？」

ほう、迷惑なのか。だったらちようどいい。さつきから散々な目に遭つてるし、ちよつと仕返しでもしてやろうか。

「……じゃ、俺もお前の事、有咲つて呼んでやるよ」

「あつそ。好きに……つて、は、え、何!?今何つた!？」

「だから、俺も名前で呼ぶつて言つてんだよ。よろしくな、有咲」

「はあ!?意味わかんないんだけど!？」

「早くご指示をお願いしますよ、市ヶ谷有咲さん？」

「こ、こいつ……!」

ん、何だ。意外と反応が面白いな。感情の起伏が激しいつて言うか、見ていて楽しい奴だ。何だか苛ついていた気持ちもどこかに消え、俺はこいつの指示を待つことにする。

「有咲く早く手伝つてもらおうよ。時間なくなつちやうよ?」

「そうだぞ。俺も毎日暇なわけじゃないんだし、やれることは早めにやつておかないと。な?有咲?」

「くくくくつ!あくもう!わかつたよ!うぜえけど、蔵の掃除のためだ!おい、あんた!」

「名前は最初会つた時に言つただろ。成川翔だ」

「何でもいい!まずはその段ボールを、あつちまで持つて行つて!」

半ばやけくそになりながらも、有咲は俺に指示を出す。俺は頼まれた荷物を両手で持ち上げ、指示された場所まで運んでいった。

けどこいつ、バイトで鍛えているとは言つたが、何とか持つてるつて感じの重さだな。中に何が入つてるんだよ……。

それに、まだまだ片付けなくてはいけない荷物は多い。つてことは、俺が呼ばれなかつたら二人だけで片づけるつもりだつたつて事かよ!?香澄もそうだが、有咲も見かけによらずなかなかやるな……。

「私たちも、軽めの荷物を片付けよう!行こつ、有咲!」

「ちよ、引つ張んな!わかつたから、もう!」

俺が重い物を片付けてる間に、香澄たちは二人でも持つてる荷物を片付ける。重量ごとに役割を分担したおかげで、作業は効率よく進んで

行った。その甲斐あって、何とかゴールは見えてきた。

「ふう……。結構きついな。二人とも大丈夫か？」

「大丈夫！でも、暗くなってきたね。今日はもう終わりかな？」

一旦俺たちは外に出て、風に当たると、汗ばんだ体には心地よく感じるな。香澄はすぐにまた蔵の中に戻り、寝転がっていたが。

「そうだな。つか、よかったのかよ？気に入らねーけど、結局手伝ってもらったし」

「別にいいさ。今日は暇だったしな。それに、この重い荷物、もし俺がいなかったらどうするつもりだったんだよ？」

「え？そ、それは、その……。えく……。気合で」

「どうにかなるか」

俺でも大変だったのに。香澄が呼んでくれなかったら、先が思いやられるところだったな。

「う、うるせえよ！何も考えてなかったんだから！……。け、けど、まあ一応助かったし。その……。あ、ありがと、な」

プライと視線をそらし、有咲は顔を真っ赤にして礼を言う。気恥ずかしい気持ちはわかるが、そこまで照れる事ないだろ。

「何だよ、素直じゃないな」

「うるせーつつつてんだよ！どうせお前も、こいつの肩持つてんだろ！？ギター目的で手伝ってやったんじゃないのか！？」

「香澄がそこまで考えて俺を呼ぶなんて思うか？」

「それは……。うん。思わない」

疲れ果てて蔵に大の字に倒れこむ香澄を見て、有咲はそう結論付ける。おい、香澄。お前こいつからバカ認定されてるぞ。

「な？むしろひねくれてんのは、有咲の方ってわけだ」

「な……。何をー!？」

別の意味で顔を染め上げ、有咲は俺に組みかかってくる。俺は軽く抵抗していたが、こいつの性格から、ある事に気づいていた。

……。こいつ、あれだ。ツンデレなんだ。

しかも、金髪のツインテール。よく見ると、膨らみも香澄とはレベルが違うくらい大きい。どこのとは言わないが。

俺は疎いからよく知らないが、何だかギャルゲーのヒロインみたいな奴じゃね？要素って言うか、そう言うのがてんこ盛りって言うか。「もー！有咲落ち着いてよ！私は別に、ギターが目当てじゃないんだよー！」

「嘘つけ！」

いつの間にか、香澄が乱入。寝てたんじゃないのかよ。

「嘘じゃないよ！私、さつきから有咲と掃除しながらお話しできたことの方が、すつごく嬉しいんだよ！」

「……え」

俺が荷物を片付けている横で、香澄は有咲と積極的に会話をしようとしていた。大抵は長続きしなかったり、適当にあしらわれていたんだけどな。有咲も、嫌そうな顔しかしてなかったし。

でも、無視されていたことは一度もなかった。本当に香澄に気がないなら、スルーしていれば済む話だ。香澄に対して、気がないわけではないんだ。

表向きは嫌そうでも、もしかしたら、本当の顔は……。

「あ、でもギターもちよつとは気になったりして……」

「ほら見ろー！」

って、何を油注いでいるんだよ。突つかかってくる勢いが強くなった気がするんだが。こつちにまで飛び火来そうだな。と、思っていたんだが。

「……つたく。見たけりやみれば？あのギター、見たいんでしょ？」

「えっ？いいの、有咲？」

「何だ？さつき以上に素直って言うか……」

「余計な口はさむな！だつ、だから、見たかったら見ていいって言ってるの！文句ある!？」

「ねーよ！てか、俺の首を絞めながら言う事じゃねえ！放せつて！」

ツンデレ全開だな。素直になったと思ったら、すぐに照れ隠しで口調も強くなるんだし。それで人に当たるのは止めてほしい。マジで死ぬわ。

「わーい、ありがと！有咲！」

「……ふん。けど、一瞬だけな？ほら、ケースはそこに——」

「もう開けようとしてますが」

「はあ!?お、おま、人話聞けよ！」

蔵の奥の方で大切に保管されていたケースを、香澄は大事そうに抱えて外まで持ってくる。オークションに出したからか、保存はしっかりとしているみたいだ。

香澄は慎重に地面に置き、ケースのロックを外して中を見る。あの時と変わらない、深紅の星。香澄の心を掴んで魅了した、ランダムスターがそこにはあった。

「ギター、ギター……！わあ、すごい！また会えたね、ランダムスター！」

「やつぱいつ見ても、かつこいいな。このデザインがたまらないよな」「はい、終わりー。つてか、お前まで見ていいなんて誰も言つてねー」「何でだよ。てか、もう少し見せてやつてもいいだろ。手伝ったんだし」

「うっさい」

ひどくないか、こいつ。問答無用でケースを閉じられ、そのまま没収される。

「でも、見せてくれただけでも私は嬉しいよ、なーくん。それに、ありがと有咲。ランダムスター、いい人に貰われるといいね」

愛でるように、有咲の抱えるケースをなでる香澄。簡単に言っているが、都合よく割り切れる物じゃないはずだ。今、香澄はどんな気持ちで、その言葉を口にしたのか……。

「……何で、そんなにこのギターにこだわるわけ？あんだ、バンドやりたいんでしょ？こんなギターじゃなくても、他のギターだって演奏はできるんじゃないの？何でもよくね？」

確かにな。ギターと言う、演奏道具としての立ち位置で考えるな

ら、有咲の意見ももつともだ。音を鳴らして、弾くことだけを求めるのなら、どんなギターだろうと構いはしない。

だがな、楽器はそんな軽いものじゃない。もっと奥深い物なんだ。楽器にもいろんな種類があるように、ギター一つとったとしても、一つとして同じ楽器は存在しないんだからな。それぞれに特徴があつて、個性があるんだ。

それに、香澄にはそんな理屈以上に、思い入れがある。

「んー……そうかもしれないけど、星のシールを追いかけて出会ったギターだから、何て言うか、上手く言葉にできないんだけど……」

「運命、って奴か？」

「そう、運命！何かね、運命なんだよ！私、そんな気がしてる！このギターと出会ったことが、運命だって！」

そのギターも星の形。星に勇気づけられ、歩み続けた香澄にとって、これ以上ない運命だ。

「それだけじゃないよ。ランダムスターに出会って、SPACEでライブ観て、ずっと探していたものに会えた！キラキラドキドキできるもの、見つけちゃった！」

だから香澄は、あのギターにこだわる。星のギター、ランダムスターじゃないと……香澄の言う、キラキラドキドキには出会えない。

そんな香澄の気持ちに感化されたのか、有咲が口を開く。

「……あのシール貼ったの、私」

「えっ、そうなのか？」

「お前には言ってるよー！」

けど、あのシールを張った張本人が、こいつだったとは。そんな有咲の話は、まだ先があつた。

「昔、小学生の時にピアノ習ってて、一つ曲が弾けたら貰えたの。家に帰る途中、色んな所に……多分、好きなものに貼ってたんだと思う」

さらっと言ってるけど、それでよく今まではがされずに、ずっと残っていたな……。

「ピアノ止めちやつたの?」

「中学受験。そう言う子つて、結構いるし」

「少なくとも、それまではピアノに打ち込んでいたわけだ。香澄はそこを追求していく。」

「ね、ピアノをやつてた時、キラキラドキドキしてた?」

「それ……前から言ってるけど、何だよ?キラキラつて」

「気にするな、香澄語だ」

「あつそ。……まあ、ピアノはそれなりに楽しかったけど」

「そうなんだ!だったら、もう1回やってみようよ!ピアノ!」

「は?何で今から、またピアノしねーといけないんだよ?」

「だって、楽しかったんでしょ?バンドには、キーボードのパートもあるんだつて、調べたんだ。だからさ!」

へえ、なるほどな。香澄も、なかなか考えてるじゃないか。有咲をバンドに誘う切り口、掴んだみたいだ。後は、どこまでくらいつけるか、根競べだぞ、香澄。

「私、有咲とキラキラドキドキしたい!バンド、一緒にやろう!絶対楽しいよ!」

「そ、そんなの——」

「有咲もドキドキしたでしょ?私、有咲が夢中になつてたの知ってるんだから!」

「う、うるせー!しつこいと、もうギター見せねえからな!」

「わー!ダメー!」

とは言え、まだまだ先の話になりそうだがな。俺は言い合いになつた香澄たちをその場に置いて、邪魔をしては悪いからと敷地の外に出る。

「これで、有咲をバンドに引き込む可能性はできたつてことだな……ん?」

俺に目に留まつたのは、壁に貼られた例の星のシール。幼い時の有咲が残した、ピアノに対して前向きに努力し、そしてピアノに打ち込んでいた証らしいが……。

「……そう言うことか」

だとしたら、何て嬉しい話だ。

香澄や俺をこの場所に導き、全ての始まりを作ってくれたのは……
有咲だったって事だからな。

phrase 12 目指す姿

「はあ!?今日は手伝えないって、どういうことだよ!？」

「ちよ、うるさい!耳元で大声出すな!」

昨日と同じように有咲の家に向かう俺と香澄。香澄は蔵の掃除の手伝い。だが、俺は別の目的があった。

もちろん、俺も掃除を手伝う必要はある。まだ昨日できなかった分が残っているからな。重い荷物は、さすがにこいつらに任せるわけにもいかないし。だが、今日はどうしても外せない用事が入ってしまった。

俺が蔵に来たのは、別の用事が入ったことに対して一言断りを入れておこうと思ったからだ。目的の場所も、ここからなら近いしな。それが終われば、すぐに出ていくつもりだ。

「今日は残りの荷物を一気に片付けるって話だっただろ!?お前がいねえと終わらんないんだけど!?こいつじゃぜってー当てにならないし!」

「そんな事ないよ、有咲!ほら、何人が集まったらもんじゃ焼きが何とかって……」

「でたらめすぎるだろ。3人寄れば文殊の知恵、だな」

「そう、それ!」

いや、まず人数が2人しか残らない時点でアウトだと思っただけだな。それに、もんじゃって何だよ。食い意地強いな。

「言いたいことはわかったが、それでも無理だな。香澄もそこまで力がないし、こんな引きこもりじゃ戦力にもならないだろ」

「かもしんねーけど、言い方に悪意あんだろ!？」

ギャーギャー怒鳴り出したが、本当の事だから仕方ない。まず重い荷物の件もあるし、香澄と2人じゃいつまで経っても終わらない。

「手伝えないことは悪かったよ。けど、ちよつと妹に頼まれてな。どうしても行きたい場所があるんだと」

「えっ、どこどこ?」

「ショッピングモール。一緒に行きたい店があるんだってさ」

美羽とは前からよく一緒に遊びに出かけることはある。中学の時も、休みの日は俺が付き添いに行くことも多かったし。

ま、そうやって頼られてるってのは……悪い気はしないよな。

「ふーん、お前妹もいんの?」

「私もいるよ!」

「お前には聞いてねえ!」

「こいつら、本当に仲いいな。毎日来ているだけの事はあるな。

「……はあ。しゃーねーな。用があるなら、止めるのも悪いしな」

「あれ、意外と素直だな。もっとツンケンすると思ってたんだけど」

「う、うるせーよ! さっさと出て行けよ!」

パイとそつぽを向いて、有咲はふてくされる。もう少しかまってやりたいが、美羽との待ち合わせもある。そろそろ行かないとな。

「じゃあ、香澄。俺はもう行くよ。このツンデレの相手でもしてやってくれ」

「ちよ、誰がツンデレだ!」

「ツンデレ……? よくわからないけど、なーくんがいなくても、掃除は頑張るよ!」

ツンデレわからないのかよ。

「……にしても、どうするよ。力だけが取り柄の奴もいなくなるし、今日できる事も限られてくるぞ? どっかの誰かがいなくなったせいで」

「おい、棘むき出しの発言止めてくれよ」

「ふん。さっきのお返しだつっの」

絶対2割増しだった気がするんだが。有咲は下をベーツと出し、してやったりのようだ。可愛げのない奴だ。

「私たちにできる事だけでもやっておこうよ! そうすれば、早く終わるって!」

「そうは言っても、こいつがいねえと結局は何もできねえんだよ。軽いのは、もう大方片付いたし」

「そっか……。あ、じゃあさ!」

香澄が手を叩き、蔵を出ようとする俺を呼び止める。遠巻きに話は聞こえていたが、内容はよくわかっていない。

「何だよ？本当に美羽が待って——」

「だったら、私も行く！有咲も！今日は掃除も休みにして、たまには息抜きって事で!!」

「……はい？」

「……んで、毎度毎度私も巻き込まれると」

「それが香澄にかかわった奴の末路だ。諦めて受け入れろ」

「悟ったような事言いやがって……」

「何の話してるの〜？」

「今日の前にいる奴の話」

有咲の家を出てから数分後の事。俺は急遽ついてきた香澄たちと一緒に、シヨツピングモールへと向かっていた。この分だと、美羽との待ち合わせには間に合う。オプシヨンがついてしまっているが。

けど、何となく展開は読めていた。香澄がいる時点で、一緒に行きたいとか言い出すんじゃないだろうな……とか。本当にそうなったんだが。

「それって私の話!?!どんな事話してたの!?!」

「あーもう、近い！ウザい！いちいち気にすんな!!」

「え〜?いいでしょ、有咲〜!」

「ちよ、くつつくな！暑苦しい!!」

香澄の餌食になつてもらったので、とりあえずこいつに任せておけばいいか。俺に抱き着かれるのは、メンタルを削られるから……。外だし、今も何人かすれ違ってるし。

「……お前、こんな奴の相手をずっとしてきたのかよ。そこだけ尊敬する」

『『そこだけ』と言わずに、もつと褒めてくれてもいいんだぜ?』
「そう言うウザいところは、やっぱ付き合い長いと似てくるんだろうな!」

それは関係ないだろうが。互いに皮肉をぶつけあってはいたが、やがて有咲はハアツとため息をつき、

「つーか、マジで意味わかんないんだけど。蔵片付けねーといけな
いってのに……」

「嫌だったらついてこなかったらよかつただろ」

「あ……っ、そ、そんなの1人で片づけるとか疲れるだけだし! だった
ら仕方ねーから、付き合ってやろうってだけだ!」

とか強がっているが、俺たちが手伝わなかつたらどうしていたんだ
よ。弱気な事なんて言ってられないと思うんだけどな。

要するに……だ。こいつ、疲れると言いながら、ただ寂しかっただ
けって事なんだよな……。

「……ははっ」

「な、何だよ。いきなり笑いだして」

「いや、お前って考えることがガキみたいだと思つてな」

「は!?! 何言いだしてんだお前!?!」

「うん。そうやって、すぐにムキになるところとか。素直じゃないと
ころとかも、強がってる子供って感じで——」

「ちよ、止めろ! 今度言つたら、残ってる分全部掃除してもらおうからな
!?!」

「へいへい、あ・り・さ・ち・ゃん?」

「くううっ……! マジ腹立つ! 後で覚えてやがれ!」

その反応もガキみたいだな。面白い。最初は嫌な奴だと思つてた
が、この短期間の付き合いで印象も変わったな。

と、言ってる間に……着いたみたいだな。シヨップینگモール。美
羽は入り口付近で待っていたらしく、向こうから見つけて駆け寄って
来てくれた。

無事に合流できたところで、早速中へ。お目当ての店に向かうことになる……はずだったんだが。

「あれ、明日香？何で美羽と一緒にいるんだ？」

「今日、急に部活休みになっちゃって。それで美羽に誘われて、一緒に来たんです」

「そうだったんだ！あっちゃんもいたなんて、驚いたよー！」

俺もだ。明日香の手には部活道具もあるし、本当に急だったんだな。

「それで、えつと……お兄ちゃん？何で香澄さんと一緒に？後、この人は誰？」

「事情はまあ、歩きながら話す。で、こいつは市ヶ谷有咲。クラスは違うが、同じ学年だ」

不思議そうな顔をしていたが、まあそうなるよな。待ち合わせしたと思ったら、知らない奴と一緒に来ているんだからな。

「うーん、話は全然見えてこないけど……どうも、初めまして！私、花女の中等部3年の、成川美羽です！お兄ちゃんがいつもお世話になってます！」

「同じく、戸山明日香です。お姉ちゃんがいつもご迷惑をおかけして——」

「い、妹!?この子が、こいつの……!?」

「えつ、有咲それってどういう事!？」

いや、香澄には悪いけど、そのまんまの意味だと思う。

とまあ、説明は後回しにして、まずは有咲の事を紹介する。美羽に明日香も事態はわかっていなかったが、腕を組んでいる有咲の前に立ち、ペコリとお辞儀して挨拶する。

有咲も、黙っているのも悪いと思ったのだろう。組んでいた腕をほどこき、一つ咳払い。姿勢を直し、口元をフツと緩めて——。

「……ごきげんよう、成川さん。戸山さん。市ヶ谷有咲です。あなたたちの事は、お二人から聞いておりますわ」

「え、ごきげん……!?」

何だこの口調は!?お前、さっきまでの勢いはどこに行ったんだよ!?

しかも俺たちには到底見せないような満面の笑み。どこか余所余所しく、愛嬌を振りまく有咲がそこにはいた。

あ、でもそう言えば前に沙綾が言っただけ？学校では静かで、大人びているって。こいつが、猫被った方の有咲ってわけだ。略して猫有咲。大してうまくなかったな。

「あ、有咲!?何か変だよ!すごく変!熱でもあるんじゃない?」

「大丈夫ですわ。それに、私は何も変ではありませんよ?」

「そこが変!だって有咲、普段はもっと話し方違う!ムスツとしてる!」

「後はすぐ照れる。チョロい」

「チョロくなんかねーよ!……あ」

「「あ」」」

「……アツハハハ!もうダメです、ギブギブ!」

「おま、勝手に笑ってるだけだろ!」

「だってさっきの……プツ、クク……!」

「こ、んの……!兄妹そろってマジウゼエ……!」

俺は関係ないだろうが。何はともあれ、俺たちはショツピングモールの中に。目的の店に向かいながら、香澄と有咲がいる理由を美羽と明日香に話しているところだった。

「……ふ〜。落ち着いたつと。何かムキになるところが可愛いんですよね〜」

「くっ、いや待て私。ここは我慢だ。またキレたら、同じことの繰り返しになるだけだぞ」

何を悟ってんだ。とまあ、こんな感じに仕上がっている。美羽が有咲の本性を気に入り、その反応を見た有咲が苛立つてツツコミを入れ、そしたらまた美羽が……ってループ。嫌われるよりはいいと思う

んだけどな。

「ねえ、有咲！見て見て、この服！」

「……んあ？」

「この色合いの服って、最近流行っているよね。どう？似合ってる？」
「知らねえし」

香澄は香澄で、服屋を物色してるし。気になる服を見つけては、有咲を読んで感想を聞いていた。完全に気のない返事だったが。

「じゃあ、こっちの模様のは？」

「別に何とも」

「この服は？」

「興味ねー」

「もう！ちゃんと聞いてよー！」

香澄のやりたいことはわかってる。何か話すきっかけを作りたいだけなんだよな。有咲の方が無関心で、空回りしてはいるんだけどな……。それでも必死になる辺り、香澄の心は折れていない。

「あ！だったら、こう言うのはどう？」

「しつけど。私はそんなのは……って、何だそのヒラヒラした服？」

「ロリータファッションって奴か。このショツピングモール、そんな服まで売ってる店があったのかよ。」

「いいでしょ？こう言うのって、有咲に似合うと思うんだ〜！」

「似合わねーよ！そんなお人形みたいな服、誰が着るか！」

「人形……。ヤバ、想像したら普通に似合ってたて笑いが……」

「起こんなくてもいいんだよ！あーもう、この妹どうにかしろ！」

「いや、俺もありだと——」

「何便乗してんだ、お前!？」

ツッコんでばかりで大変だな、こいつも。相手があの人ならなおさらか。あ、俺もか。

けど、今のこいつ……すごく活き活きしてるよな。

「えと……大丈夫ですか？市ヶ谷さん」

「大丈夫じゃねーよ……もう！道草食ってないで、さっさと目的の店行けよ！」

「それもそうだな。もう少し楽しんでいたかったけど」
「楽しまなくていい！」

「待ってました！よろし、行こつ！お兄ちゃん♪」

美羽に腕を掴まれ、俺は美羽の後について行く。スキップでも始めそうな上機嫌で、美羽は小走りで店に向かっていった。そんな美羽の姿を、俺はほほえましく見守っていた。

「有咲、遅いよー？早く早く！」

「走るの嫌いなんだよ！あー疲れる……」

「学校来ないで引きこもってるからだろ。もつと運動しろよ」

「またそれか！遅いもんは遅いんだから仕方ねーだろ!!」

「有咲さん、あんまり大声出すと余計に疲れますよ？」

「言わせてんのは誰だよ、畜生！」

ついに美羽まで有咲をいじりだす始末。年下になめられてしまっ
てはどうにもフォローできない。強く生きろ。

とか言ってる間に、目的地に到着。そこはフードコートの一角にあ
るスイーツ店だった。そんなに並んでないし、この分だと大丈夫そう
だな。俺たちは最後尾に並び、順番を待つ。

「てか、この店に入るのか？妹はわかるけど、お前が？」

「俺はこう見えて、甘党だからな。全然平気だぜ？」

「そうそう！私、中学の時もなーくと帰りによく甘いもの食べに寄
り道してたし！」

「あつそ」

冷たくないか。だが、俺が甘い物好きなのは本当だ。りみにも前に
話したからな。

「今日は兄妹デーって言って、この日に兄妹で来た人は限定のパフェ
を注文できるんですよ！」

「ふーん」

「もう少し反応してやれ」

美羽の説明によると、ここは兄妹で来店した時にだけ注文できる、

特別なパフエのある店だ。大きさは通常の1.5倍ほど。だが、普通のパフエと変わらない値段で食べられる。お得な一品だ。

食べ応えは抜群らしく、前から行きたいと言っていた店らしい。しかもパフエが食べられる日は決まっているとのこと、今日一緒に行くことになった。俺も気になったからな。

「そうだったんだ。だからみーちゃん、なーくんと一緒にここに来たかったんだね」

「はい。この店には、明日香とも何回か来たことがあったんですけど、そのパフエだけは食べた事なくて。明日香もさつきその話してたら、香澄さんが来てくれて助かったって言うか」

「わーそうなんだー！今日はいっぱい食べようね、あっちちゃん！」

「いや、私は……って、うわっ！すぐに抱き着かないでよ……！」

くつついてきた香澄を、明日香は手慣れた動きで押しのける。さすがは香澄の妹やっただけあるな……。

「つか、私たち次じゃね？さつきと入らねー？」

「有咲、随分積極的だね？甘いもの食べたかったの？」

「違えよ！後ろに並んでいる人が困るって言うてんの！」

「と言いながら、本心はどうなんですか？」

「追い打ちかけるな！」

美羽もいじるの楽しそうだな……。しばらく遊び相手にでもなつてやってくれ、有咲。

「あ、あの翔さん。美羽、あんな口きいてますけど、市ヶ谷さんって先輩なんですよ？その、失礼じゃないんですか？」

「それなら心配ないよ。今のあいつ見て、先輩らしさを感じるか？」

「え、それは……」

「ちよつと、いも——あつ、変な髪型の方の妹！何でそこでそんな反応してんだよ！」

あ、そうか。この場に妹2人いるのか。名前で呼べばいいのに。

「ご、ごめんなさい！やっぱり失礼ですよね！」

「姉の方と違って、妹は聞き分けいいな……。わかってくれるなら——」

「いや、こいつは寂しがり屋だから、誰かに構ってもらえるのが嬉しいんだ。ん？つて事は、いじられてる状況を楽しむ……もしかして、M体質？」

「バカ言っつてんじゃねーぞ!?そればっかりは聞き捨てならねー!」

こいつ、ずっと大声出してるよな。よく疲れないもんだ。でも、むしろこれくらいでちょうどいいのかもしれないな。

初めて会った時に比べたら、感情を表に出す機会も増えているからな。

「ねえ、有咲。そんなにうるさくしたら、お店にも迷惑だよ？早く中入ろうよ？」

「な……っ、ん……!お前に正論言われると、何か腹立つな!」

香澄、ナイスプレイ。

「はくおいしかつた〜!」

「ですよね、香澄さん!兄弟がいて、本当によかったですよ〜!」

「ねー!」

「……ち、ちつとも羨ましくねーからな」

「とか言いながら、急に元気なくなつたのは気のせいかな？」

「事あるごとに突っかかってくんない」

俺たちはパフェを堪能し、今はショッピングモールの散策中。食後の軽い運動つて奴だ。

にしても旨かったな。これでもかと詰め込まれたフルーツに、その甘さを引き立てるクリーム。バニラアイスもマッチしていて、文句のつけようもない逸品だった。また来たい。

「でも、おなかいっぱいだな……。私、途中でギブアップしちゃった

し」

「明日香は食が細いんだって！途中から香澄さんが1人で食べてたじゃん」

「有咲にも手伝ってもらったんだけどね。全部食べられなかったけど……」

「そこに現れたバカみたいなのバケモノ兄妹。自分たちの分のパフェ食った後に、こいつらの分のパフェまで食い始めるんだからな。アホだろ」

「バカだとかアホだとか、散々な言われようなんだが。3分の1くらい残った香澄たちのパフェを食べてやっただけだろ。」

「えっへん」

「褒めたわけじゃねーんだぞ、妹の方」

「ほら、甘い物は別腹って言葉があるだろ」

「2人で食う量じゃなかったと思うんだけどな！」

確かに、自分たちのパフェ食べた後に、余ったパフェをたいらげただけだからな。大体……普通のパフェ基準で、2人前か？あれ、だったら案外言うほどでもないんじゃないか？

「今度来るときは他のも食べーあれ？何だろ、この音？」

「香澄、どうかしたか？」

「何か歌みたいなのが聞こえた気がしたんだけど……」

急に香澄が立ち止まり、周りの音に耳を傾ける。歌が聞こえると言っているが、聞こえてくるのは店内に流れる軽快なBGMくらい。後は、周囲の喧騒か。

——いや、違う。かすかに、少女の歌が耳に届いた。

「あ、本当だ。お姉ちゃんが言った通り……」

「しかもこいつは……かすかにドラムの重低音も混じってるか？」

「これってバンドだよ！多分、このショッピングモールの中でライブしてるんじゃない!?!」

「えっ、バンド!?!」

美羽の言う通りかもしれない。何か有名なバンドを招いて、客寄せのためのライブをさせているのかもしれないな。

「気になる！行こつ、みんな！」

「賛成！大賛成!!」

「俺も見たいかな。明日香はどうする？」

「私は……まあ、みんなが行くなら、行こうかな……？」

「ええ？マジかよ、面倒くせえ。行くんなら、お前らだけで行つて来いよ」

お前はブレないな。ちよつとライブしている様子を覗きに行くだけなのに、付き合つてくれてもいいんだけどな。

「そんなー！有咲も行こうよー！」

「行かねーつて言つてんだろ！」

手で払いのけるような仕草を見せ、音とは反対側に歩き出す。だが、この場にいるのは香澄だ。ちよつと突き飛ばしたくらいでは、すぐに起き上がつて捕まえられてしまうぞ？

「そんな意地悪言わないでさー！あーりーさー！」

「泣きつくな！駄々こねた子供か！」

「香澄さん！早くしないと終わっちゃうかも！」

「あつ、そつか！急がないと！」

美羽が走り出し、香澄も後に続く。……有咲の服を引っ張りながら。な。

「ちよま、だから服！てか、結局これかよー！」

断末魔と共に消える有咲。置いて行かれた俺たちは、ゆつくり後を追うことに。

「本当、美羽は音楽好きですよね……。でも、お姉ちゃんがバンドにハマるなんて、ちよつと意外だったかも」

「ま、そうだよな。バンド始めるって話、香澄から聞いてるか？」

「もう何十回って聞かされたので、暗唱できるくらいです……」

イメージできてしまうな……。その場面。明日香も見えないところで、俺以上に苦勞してるとして事なんだよな。お疲れ様。

「明日香は、バンドには興味……。ないよな。高校受験でも忙しいだろ

うし。羽丘だっけ？」

「そうですね……それはそれですよ。私、バンドってどうも自分とは無縁な気がしちゃって。もつとこう、明るくてクールっぽい人がしてるイメージがあるし、私ってどっちかって言えば大人しいから。そう言うの、向いてないんじゃないかな〜って」

「そっか。でも、やる気がないならともかく、向かないかどうかで決めてしまうのは、もつたいたい気がするんだけどな」

俺の勝手な意見だけだな、と付け足して。別にバンドを強引にやらせようってわけじゃないし、明日香がやらないと言うなら、それでいい。

ただ、その選択が自分の可能性を狭めることに繋がってほしくない……そう思っただけだ。

「もつたいたい、ですか……あ、ここですね」

天井が吹き抜けになつていゝ円状の広場。そこを囲むように、観客の姿があつた。それなりに観客はいる様子だ。

俺たちは2階にいるため、上から見下ろす形になる。ちょうど香澄たちも見つけて、最善咳で下の様子を見られるポジションにつけた。

「遅いよ、なーくん！あつちやんもー！」

「お前らが早すぎるんだよ。少しは明日香の事も考えろ」

「……無理やり連れられた私の事も考えてくれ」

いや知らん。美羽は演奏に熱中してるみたいだし、会話に入ってくる様子はない。

が、その気持ちもわかる。耳に入るロック調のリズムは、どのパートをとつても安定感がある。歌声を引き立て、熱情が呼び覚まされるようだ。客を集めるだけの理由が、今ようやく分かった。

このバンド、実力は確かだ。それに、長年培ってきたような信頼……絆。そんな言葉で言いくるめるのも無粋な、息の合った連携がよく目立つ。

そして何よりも――。

「ええ〜？有咲嫌なの？すごくかつこよくて、ドバーツしててるのに！」

「日本語で頼む」

「あつ、あつちゃんも見てよ！私の言ってること、わかると思うから！」

「はいはい。じゃあちよつとだ――っ!？」

眼下を見つめる明日香は、そこに広がる景色に驚きを隠せないでいた。それもそうだろう。この音を奏でていたのが……俺たちとそう歳の変わらない、5人の少女だったからだ。

豪快にドラムを叩く赤のロングヘアの少女。ベースとキーボードの少女は、可愛げのある風貌だ。ギターの少女は、どこか独特なマイペースを貫いている。だが、演奏自体は申し分ない。

そして、その中心にいるギターボーカル。赤のメッシュを入れ、ギターの音色と共にその歌声を響かせる。力強さを兼ね備えたクール性を持ちながらも、どこか幼く少女らしさを残している。

これが、ガールズバンド。俺は改めて、その姿を目に焼き付けていた。

「すごい……あの子たちも、バンドやってるんだ……!」

「かつこいいなく！明日香も……あれ、明日香？」

明日香を呼ぶ美羽の声。だが、それに反応を返すことはない。目の前で繰り広げられている演奏に、明日香は魅了されていた。

俺や香澄、美羽との驚きや興奮とはまた違う。そして、どこか見覚えのある眼差し。

それこそ、あの時の星空が見せた高鳴りのような何か。まさか、明日香は――？

「――ありがとうございました！Afterglow（アフターグロー）でした！」

演奏が終わり、彼女たちは控室のテントに戻っていく。割れんばかり

りの拍手も起こり、大絶賛みたいだ。

それだけの演奏をこなす彼女たち……アフターグロウか。俺もまだ知らないガールズバンドがいるんだな。

「あれが、バンドなんだ……」

「ああ。バラバラの音の一つになつて、生まれた音色が誰かの心を動かす。音楽つて、そう言うもんだ」

「かっこよかった。私も、あんな風にライブしてみたい！バンド組んで、一緒に！キラキラドキドキの音、奏でてみたいよ！」

ギターを鳴らすように、香澄は体の前で腕を動かして見せる。あれだけの演奏を見せられて、黙っていられるような性分ではないだろうしな。

「……で、何でお前は私の方を見る？」

「有咲もやろうよ！バンド！」

「もうその下り飽きたっつーの。バンドはやらねえからな」

「いいじゃないですか！有咲さんも香澄さんに協力してやってくださいよー！」

「こいつまで!?ちよ、何を言われたところで、私はぜってーにやらねえからなー!?!」

有咲が二人からバンドの勧誘を受け、必死で逃げている光景。見慣れたような場面が広がる中で、俺は一人、違う方に目を向けていた。

香澄がバンドへの熱をもらい、その炎を高ぶらせている横で。

「……………」

静かにバンドへの熱を呼び覚ましている者がいる事を、俺は見逃してはいなかった。

phrase 13 星の涙、揺れる心

「これをここに置いて……と。よし、ようやく片付いたな」

「うーん、終わったねー！」

「……ああ」

最後の荷物が片付けられ、すっかり綺麗になった蔵の中を私——市ヶ谷有咲は、念願叶った目で見つめていた。

綺麗にしたら自由に使つていいと言えばあちやんと約束通り、ここは今日から私の独壇場。これからの生活に、私は心を躍らせている。

もつとも、私だけじゃこんなに早く終わらせることなんてできなかっただろうけどな。頼んだわけじゃねえけど、好きで協力してくれたこいつらにも、少しは感謝しないとイケないのかもしれない。

「にしても疲れたな……。俺これからバイトあるんだぞ？」

「それなのに来てくれてありがとう、なーくん！おかげで助かったよ！」

「バイト前のウォーミングアップだと思えば楽なもんだよ。何にせよ、よかったな有咲」

「……そうだな」

戸山香澄。成川翔。花咲川女子学園の生徒と言う事しかわからないが、その魂胆は見え透いている。うちの蔵に眠っていた、例の真っ赤なギターだ。私には値打ちはこれっぽっちもわかんねえけど、相当レアな物らしい。

そのギターが欲しくて、私に付け入ろうとしている。親切にしてくれるのも、ただそれだけだ。こいつらに心を許して、私からギターを譲ってもらおうとでも考えてるんだろ。

けど、そうはいかない。今朝確認したら、まだ値段が吊り上がっていた。もう間もなく落札時間だけど、100近く値がついてたはず。高々ギターで、よくそんなに熱くなれるよな……。

「んじや、俺はもうバイト行くよ。これ以上遅くなると、オーナーに怒られるからな」

「うん、わかった。本当にありがとう、なーくん！」

「気にするな。また何かあったら、いつでも頼ってくれよ」

荷物を持ち、あいつは走って家を出て行った。これからバイトつて、あいつも苦勞してるんだな。関係ねーけど。それに、よくこんな私のために協力してくれるもんだ。

さて、後は……こいつだけか。

「ねえねえ有咲！またギター見せてもらってもいい？」

「……別にいいけど」

って、あれ？何で私今OKしたんだ？こいつにギター見せるなんて、本当は死ぬほど嫌なはずなのに。

わかった。きっと今の私は、少し浮かれているんだ。蔵も片付いたし、100万円と言う大金もすぐに私の物になることが確定している。

それに比べたら、ギターを見せてやることなんて大したことはない。適当に済ませておいたら、後は関係ない。

「えへへ、ありがとうーそれじゃ早速……」

ギターバカは放っておいて、外の風に当たるために蔵を出る。何だかんだあつたけど、これでようやく蔵が私の物になるんだ。そう考えると、嬉しくて仕方ない。

「……………」

さて、まずは何をしようか。ふかふかのソファでも置いて、ネット回線も引いて……ずっとネットサーフィンしてるのも悪くないな。防音だし、少し騒がしくなってもばあちゃんの迷惑にもなんねーし。

「……………」

なのに……何でだろう。楽しみで、仕方ないはずなのに。そのために、私は借りたくない手を借りてまで、見たくない顔を見続けてまで、蔵の掃除を終わらせたはずなのに。

どうして、私は今、寂しいなんて思ってるんだ……？

「あつ!?!」

バカの声だ。それに、固い物を打ち付けたような衝撃音。何かあつたに違いない。別にあいつの事はどうでもいいが、大事な商品に傷でもついてたら大変だ。

「ちよつと大丈夫!?!怪我とかしてない!?!」

蔵の中に入ると、そこにはあのギターを大切に抱えたあいつが。傍にあるケースは、なぜか取っ手が取れている。って、何であいつを氣遣う言葉が先に出たんだよ、私は!?!

「わ、私ケース落としちゃって……ごめん……!?!」

「別に謝らなくていいだろ。落としただけで言うかこれは……取っ手が外れただけだな」

金具もさび付いていて、もう使えそうにないな。ケースは丸ごと取り換えるしかないか。落としした衝撃で弦も何本か切れていたけど、本体に傷はない。それくらいなら、楽器屋さんに行けば直せないことはない。

胸をなでおろし、私は未だにギターを抱えているこいつから、ギターを取ろうとして……。

「ごめん、ちゃんと持ってなかったから……!?!どうしよう、ごめん……!?!」

「え……!?!」

ちよつと待てよ、こいつ……泣いている?目立った外傷と言えば、さつき話した弦の事くらいだ。なのに、こいつは大切な宝物を壊してしまったようにうずくまって泣いている。ボロボロと、涙はまだ止まりそうにない。

何でだ?どうしてだ?そこまでお前は、このギターの事が大事なのかよ……?!

「……………」

意味が分からない。そんな事をして、情けをかけてギターを渡す

はずがない。理想の未来を掴めそうなのに、それを放り投げる必要はどこにもない。

それに、私はこいつにギターを盗まれたこともあるんだぞ？それに、しつこく付きまとってくる。ウザくてたまったもんじやない。私とは気が合わない人種なんだよ。

「うっ、うっ……ごめん……！」

でも、今の涙は。そんな言葉で片づける物とは違う。こいつの事はウザいけど、ギター目当てで流した嘘の涙とは違う。

こいつは、いつだって本気なんだ。真剣なんだ。

「戸山さん」

「ぐすっ、うう……」

「戸山さん……。戸山……。っ、戸山香澄!!」

「っ!？」

周りも見えずに泣いていたこいつも、ようやく我に返った。私は壊れたケースを適当な場所に寄せ、スマホを取り出して近辺の地図を調べた。

「いつまで泣いてるつもり？さ、行くよ」

「行くって、どこに……?」

「楽器屋！そのギター、直しに行くって言ってんの！」

「うう、直ってよかったよ〜！」

「あくはいいい、そうだな」

私たちは近くの楽器店に駆け込み、ギターの弦を張り替えてもらった。壊れたケースについては、新しいケースを発注してもらう事で折り合いがついた。

てかこいつ、また泣いてるのかよ。どれだけこのギター好きなんだか。

けど、何か眩しいな。何かのために、ここまで真つすぐでいられるって。

「よかったよよかった〜！ごめんね、本当にごめんね〜！」

「落とすたくらいで大げさなんだよ。店員も若干引いてたぞ？弦が切れてただけだし、特に支障もないって言ってたし」

「よかった……」

って、また向こうの世界に入っていくやがった。私の事は眼中にありませんってか。へいへい。

「……………」

こいつ、うるさくてウザくて、まだ盗まれたことを忘れたわけじゃないけど……悪い奴じゃないのかもな。今の姿を見ていたら、そう決めつけるのも違う気がする。

何だかんだで協力してくれてたし、最後まで弱音を吐くこともなかった。それがギターのための頑張りだと思えば、それまでなんだろうけど……。

「もう落としたりしないからね。フッフ」

私以上に、このギターの事を考えて、心配していた。大切に思っていた。ほんの少し見せてやる時でも、触らせる時でも、あいつはいつも楽しそうだった。

あいつなりに言うなら、キラキラドキドキしてる……って事なんだよな。

もし、あのギターが私の知らない誰かの手に渡ったとして、その人は大事にしてくれるのかな。大金は得られるかもしれないけど、こいつみたいに関心から一喜一憂してくれることなんてあるのかな。

それはわからない。けどこのバカ……戸山香澄なら、きっと大切にする。この先何があったとしても。

だったら……私は。

「……それ、持って帰れば？オークションの出品、取り下げたから」

「えっ？な、何で？だって有咲……」

「大事にする？」

「す、する！大事にする！どんな事があっても、絶対にランダムスターは手放さないよ!!」

「ちよ、近い近い！わかったから！」

たく……マジで何なんだか。ついさつきまでは、そんなこと口にするなんて誰が想像してたんだ。

でも、これでよかったんだよな。ギターのためにも、こいつのためにも。柄にもないことをやったとは、自分でも思うけど。

「よし。じゃあ今からオークションの取り下げを……実行、と。これで、そのギターはお前のものだ」

「や、やった〜！ありがと、あり——」

「ただし、540円」

まさかタダでやるわけじゃない。そこまで私はお人好しじゃねーんだ。催促するように、私は手を出す。

「……えっと、何で540円？」

「オクの取り下げ手数料。100万はおまけしてあげる」

「ありがとう！え〜お財布は……あ」

「どうしたんだよ」

「ギターの修理代に使っちゃったから、後300円しかなくて……ダメ？」

「やっぱ売る」

「ダメー!!」

「ただいま……あ、ばあちゃん」

「おかえり、有咲。蔵の中、すっかり綺麗になったねえ」

蔵に戻ると、そこには様変わりした蔵を見て感心しているばあちゃん。その手には、待ち望んでいたものが。

「約束通り、有咲の部屋にしているから。はい、鍵。なくさないでね」「鍵？おばあちゃん、2個ついてるけど……予備？」

「違う。1個は地下室の鍵。片付けしてたから、気づかなかったかもしれないけど」

それだけ済ませると、ばあちゃんはすぐに蔵から出て行った。私は地下室の扉を開け、あいつを招き入れる。

小ぢんまりとした場所だが、静かに過ごすには最適な場所だ。地下室の扉を閉めると、もう外の音はほとんど聞こえなくなる。中にはレコードや最小限の音楽機材があり、それらはすぐに戸山さんの気を引いた。

「……わあ！何ここすごい！レコードもいっぱい、おっきいスピーカーも！」

「そんなに驚くことかよ。こっちはスピーカーじゃなくてアンプ」「あんぷ？」

「こいつ、本当に何にも知らねーの……。私でも知ってるのに、そんなにでよくバンドなんてやる気になってるよな。」

「ほら、シールド。そのギターに刺してみて」「う、うん。えっと……これでいいのかな？」

「じゃあ、弾いてみたら」「うん……」

そんなに緊張されると、こっちまで緊張するだろうが。もっと気楽に弾いてくれよ。なんてこっちの気持ちも知らないで、戸山さんはぎこちなくギターの弦を鳴らす。

前に軽く鳴らしていた時とは違う。音が何倍にも増幅され、地下室に響き渡る。って、アンプ付けたけど音漏れ大丈夫だよな？扉は一応閉めたし、ここは防音対策も施されてるけどな……。

で、当の本人はどうかと言うと。

「すごい……すごいすごい！すごい、鳴ったよ！ギューンって！すごい！」

すごいしかレパートリーねえのか。何か、呆れてくるな。高々アンブ付けてギター鳴らしたただけなのに、こいつは子供みたいに無邪気に喜ぶんだし。

まあいつか。喜んでくれたなら、ギターの出品を取り下げた甲斐があったってmondashi。これからは、そのギターと一緒にバンド作りに励むことだろ。

そう考えたら、何だか急に寂しい気持ち芽生えてきた。

「もう一回……きゃ〜！すごい！音が私の中に、ギヤーンって流れ込んでくる！」

何故だかわからない。こいつは、目当てのギターを手にした。私が折れる形になってしまったけど、そのおかげであいつは、もうここに来ることはないはずだ。蔵の掃除も終わったし、あいつを惹きつけるものは、ここにはない。

って、何で私はこんなこと考えてるんだ。あんな奴、用が済んだらさっさと帰ってくれたらいい。こっちは迷惑して、振り回されて、毎日が憂鬱で仕方なかったんだ。もう顔なんて見たくない。

「……………」

見たく、ない……はずなんだよ……。

「あ……でも私、そろそろ帰らないと。有咲、ギターありがとね！」

「…………外まで、送ってやるから」

「…………うん、わかった」

蔵の外に出ると、綺麗な夕日が輝いていた。私は眩しさに目を細めながら、家の外までこいつを連れて行く。わざわざ送るほどの距離じゃなかったし、すぐに着いたけど。

「本当にありがとう、有咲。ギター大切にするよ！」

「……ああ」

これで、こいつとの時間も終わりか……。

「……………」

別にいいさ。悪い奴ではないけど、暑苦しくて休む暇もない。キラキラだとか意味不明な事を言い出して、周りを引きずり込もうとする。付き合う方の身にもなっかってほしい。

終わり……なんだよな。

「それじゃあね、有咲」

「……………」

違う。なら、今私を感じている、このモヤモヤは何だ？

あいつがいなくなる。嬉しいはずだ。なのに、心は真逆の気持ちを訴えている。

終わることに意味なんてない。また元に戻るだけの話だ。あいつに出会う前からずっとそうだったように、1人だけの世界に……。

そう思っていたはずなんだ。でも、そうじゃなくなった。あいつが、いきなり蔵に入り込んでギターを盗んで。私だけだった世界を、無理矢理にこじ開けたから。

知ってしまったんだ。誰かという事が、楽しいんだって事に。

私、この時間が終わってしまうことが嫌だったんだ。

「……………待ってくれー!」

「え?」

声が出た。けど、次は?行かないでくれとでも頼んでみるか?そんな恥ずかしいこと、口が裂けても言えない。ましてこいつに対してなんて……。

でも、止めないと。私1人の世界を壊したのは、他でもないお前なんだ。責任は取ってもらおう。

「あ、あのさ……戸山さん。いや、香澄」

「うん?」

「ここで……その、練習すれば?今日は無理だろーけど、また明日から

……」

「え?! いいの!?!」

くっそ……こんだけの事言うのに、何で顔が火傷しそうなくらいに熱くなるんだ。それに、そんなに喜ばれるところっちも困る。に、二重の意味で恥ずかしいだろ……。

「た、ただし! 昼休みに……」

「昼休みに?」

上手く言えなくて、声が裏返ってしまう。ここまで緊張したのは、今日が初めてかもしれない。それこそ、告白でもするような……つて、何考えてんだよ!?

いや、今ので少し落ち着いた。とは言え目は合わせられないから、俯いて言葉を続ける。

「……ごはん」

「ごはん?」

「そ、その……一緒に、ごはん食べてほしい……です」

何故か丁寧口調になってしまった。最後の方は声が小さくなってしまったが、香澄が息を呑むのが聞こえた。恐らく、私の言葉は届いている。

「い、嫌ならいいけど!」

「あ……有咲! 嫌じゃないよ! むしろ私の方からお願いすることだよ!」

「えっ……? お願いって、もうギターは手に入っただろ。私なんかと一緒にいる理由が、どこにあるってんだ?」

「確かにギターも欲しかったけど、それだけじゃないよ! 私、もつともつと有咲と一緒にいたい! いっぱいおしゃべりして、仲良くなりたいたい!」

「香澄……」

「それに、私有咲とバンドやりたいんだ! 前にも言ったでしょ? SP ACEでの有咲、すっごくキラキラしてたって!」

バンド……そういや、私をバンドに誘うって話もあったな。適当な事言っつて、都合よくメンバーを集めているようにしか聞こえなかつ

た、あの話。ま、別にやるとは言っていないから、その件はどうでもいいんだけど。

そんな事よりも。香澄が、一緒にいたいって言ってくれたことが……ただ嬉しかった。

「だからバンドやろう？ねえ、有咲く！メンバーもまだ1人しか集まっていないだよ〜！」

「あーもう、肩掴んでブンブンするな！あんまりしつこいと、やっぱりギター返してもらおうからな!？」

「わ〜っ！ダメだよ、有咲く〜！」

ギターを強引に奪おうとする有咲と、それを阻止しようとする香澄。夕闇の中で繰り広げられる光景は、一見すれば仲の悪い喧嘩にも見えるかもしれない。

けど、今は……。

「……ハハッ」

「え？有咲、今笑った？」

「は!？わ、笑ってねーよ!」

「ううん、絶対笑った!だって今、ハハッて言った!」

「うるせーよ!からかうんなら、本当にギターやらねーからな!？」

「それだけはダメー!」

気に入らない奴ではある。今でも、最悪な出会いだった事は忘れていない。でも、

ぶつきらぼうだった彼女の心にも、かすかな光が灯る。気に入らない奴で、出会った頃から印象は悪かったはずなのに。そんな奴と過ごした時間が、気が付けば楽しいものになっていたなんて。

でも、それだけじゃなかった。何かのために真剣になり、涙を流した姿に心を打たれた。あれが演技だとは思えない。ただ純粋な気持ちだったんだ。それが今ならわかる。

有咲にはそれが眩しかった。自分には欠けているものが、彼女にはちゃんとある。だから、ギターを託した。

そんなもの、いくら大金を貰ったところで買えるものじゃないから。

夕闇に溶ける、少女たちの人影。楽しそうで、ほほえましくて、幸せに包まれた彼女たちだけの空間。

だが……。

「……………」

2人の少女、そして星のギター。それらを怒りの形相で見守る、もう1つの影。

快く思わない者も、確かに存在していた。

その日の夜。香澄はランダムスターを持ち帰り、上機嫌で家に戻っていた。隣の翔の家の電気は、まだついていなかったが。

翔の母が仕事で忙しい事は、香澄も知っている。帰りも遅く、香澄もここ数か月は見えていない。だから、電気がついていないことは珍しいことじゃなかった。

翔はバイトに行っているし、美羽はきつと友達と遊んでいるんだろう。と言っても、それにしても遅い時間だとは思ったが。

「たっだいま〜！」

「あつ、お姉ちゃん帰ってきた……」

リビングから明日香の声が聞こえる。ちょうどいい。譲つてもらったランダムスターの事、明日香に自慢してやろう。何の興味も示さないだろうけど、今は誰かにギターの事を見てほしかった。

だから、香澄は明日香の様子がおかしいことに気づくことができなかった。

「聞いてよ、あっちやん！私、ギター貰っちゃったんだ！」

「……へえ、そうなんだ」

「ランダムスターって言ってね！このギターと一緒に、バンドやるんだよー私ー！」

「……何か、嬉しそうだね」

「うん！一目見た時から、このギターがいいな〜って思ってた！オークションに出された時は、ちよつと焦っちゃったけど……」

「その様子だと……メール、見てないよね」

「え、メール？」

スマホを取り出して確認すると、確かに明日香からメールが。時刻はかなり前だ。楽器屋さんでギターを直してもらっていた時くらいか。

「あ、ごめん。全然気づいてなかった……」

「やっぱり……」

「何かあったの？」

さつきから返事が上の空。そして香澄は、ようやく明日香の表情が優れないことに気が付く。ただごとじゃない。そう悟るのに、時間がかからなかった。

そんな明日香が香澄に向けた一言は……。

「美羽が、今日……病院に運ばれたんだ……」

「え……!?!」

高ぶっていた香澄の気持ちを冷ますには、十分すぎるものだった。

phrase 14 バンドはできない

美羽が病院に運ばれたと知ったのは、俺がバイト中の時だった。仕事がひと段落終わり、俺は休憩室で一息ついていた。そんな時、病院と香澄の母さんから連絡が入っていることに気が付く。

思い当たるのは、1つしかなかった。美羽に何かあった、それで電話してきたのだと。

俺はすぐに電話し、事情を確認した。何でも、美羽が自宅から119番の電話をかけたらしく、すでに息苦しそうにしていたらしい。

家に救急車が駆けつけ、その騒ぎを聞いた香澄の母さんが付添人として同行。それで俺に電話してきたと言う話だった。

俺はすぐにオーナーに事情を伝え、バイトを早引き。SPACEから病院までは近いため、そのまま走って向かった。到着した時には俺の母さんの姿もあり、香澄の母さんと心配そうに待っていた。

俺も固唾をのみ、無事を祈って待つばかり。やがて香澄の母さんも家に戻り、俺は母さんと2人で待合室に残った。

「美羽……お願い、無事でいて……」

「母さん……」

「あなたは大切な娘なの。もう、何も失いたくない……」

父さんとは数年前に離婚している。だからこそ、1人で育ててきた大切な娘だ。それは俺だってそうなんだろうが……やはり、美羽に対する思いは大きい。

何にせよ、母さんは家にいる時間は少なくとも、俺たちの事を何よりも考えてくれてる。

「……………」

今にも泣きだしそうな母と、何もできずに検査が終わるのを待つ俺。

美羽の検査が終わったのは、それから数時間後。もう夜も更け始めてきた頃だった。

「しばらく安静にしていれば、今回は楽になるってさ。入院じゃなくてよかつた〜！」

検査が終わり、医師から告げられたのは、当分の間安静にしている事だった。薬を投与し、家で大人しく経過を見る。学校に行けなくなるのは美羽にとって辛いだろうが、そうは言ってもらえない。

「ごめんね、お兄ちゃん。迷惑かけて。それに、お母さんも」

「そんな事言ってる場合か。病人は安静にしてろよ？」

「そうよ。美羽が早く元気になれば、それだけすぐに学校に行けるようになるから」

「は〜い。仕方ないけど、2人の言うとおりだからね。家でゆつたりしてしま〜す」

こうして、俺たちは家に戻り、美羽が安静にする準備をすすめた。けど、俺は最初、医師に対して美羽の入院を勧めていた。

どのみち学校に行けないなら、家に美羽を置いて放っておくよりも、病院に美羽を任せられた方がいいと思っただからだ。美羽の容態の事もあるし、何より家に美羽を残すと、1人で過ごす時間が増えてしまう。

それだけは、どうしても避けておきたかった。

だが、医師からはそこまで深刻に対処する必要はないと言われ、そのための様子見だと言っていた。説得を続けようとしたが、仕方なく折れた。本当によかつたのかと、腑に落ちない点はあるけどな。

「翔、今日はもう疲れたでしょ？バイトもあつたみたいだし、後は母さんに任せて」

「何言ってるんだよ。母さんだって俺以上に頑張ってる仕事してるだろ。休める間に休んでおかないと、母さんこそぶつ倒れるぞ？」

「ダメよ、翔。明日も学校あるでしょ？もう遅いし、ゆつくり休んで」
「現役の高校生なめんなよ。それくらい……」

「いいよ、お兄ちゃん」

反発する俺に歯止めをきかせたのは、美羽だった。

「お母さんも、私は大丈夫。全身不随の患者じゃないんだし、さすがに自分で出来ることくらいはするよ」

「いや、安静にしろって言われてただろ」

「日常生活くらいできるよ！それに、本当にヤバいんだったら、こんな軽口叩くことなんかできないでしょ？」

「……………」

『う…………うつ、ひつく…………お、お兄ちゃあん…………！』

「…………ああ、そうだな」

一瞬、脳裏に浮かんだ風景。俺はそれを振り払い、いま置かれている状況にだけ目を向ける。

「お母さんも、そんなに心配しなくてもいいよ。どうしても手を借りたくなったら、こつちから言うから」

「本当に、大丈夫なんだな？」

「もうっ、あんまりしつこいと私も怒るよ？お兄ちゃん」

「わ、わかりました。じゃあ俺はお先に失礼します…………」

これ以上は美羽にガチギレされそうなので、スタスタと自分の部屋に退散する。が、素直に従ったとは言え、すぐに寝付けるはずがない。特に話し声は聞こえてこないが、美羽の容態が気になって仕方なかった。

「……………」

俺が、何とかしないといけないのに。

『お兄ちゃん…………お兄ちゃん…………！！』

あの時の美羽の泣き声が、俺の鼓膜に焼き付いて離れない。忘れてくても忘れられない、あの一瞬だけは。

俺が全てを悟り、そして誓いに変えた日の事は。

「……俺が、お前を」

「おっはよーごぞいますー!」

「……………」

「おい、そろそろやめとけ香澄。生徒会の人がすごい形相で睨んでる」
翌日。俺は香澄といつものように学校へ。だが、その手には何故かあの星のギター。わけを聞くと、有咲に譲ってもらったらしい。一体どういう風の吹き回しなのか。

で、そのまま学校に来てしまったことで、香澄は朝っぱらからライトブルーの髪色の生徒会役員に目を付けられる。問題児だな、こいつ。

「つか、何でギター弾きながら登校してんだよ!」

「だつて嬉しくて!」

「と言うか、何で有咲は普通に俺たちと登校してんだ?」

「そこは別にいいだろ! いや、そもそも突っ込むの今じゃねーだろ!」
それは有咲の言う通りなんだが。だが、さも当たり前のように香澄が有咲の家に寄り、有咲と一緒にいてくる。サイクルが出来上がっているみたいだったし、何かこう……ツツコミを入れるのも野暮なかと。

「つて、今はそれどころじゃないからな。ほら、生徒会の人がかつちに来たぞ」

「え? 何かいけないことでもあるの?」

マジかこいつ。どういう事態なのか、全くわかってねえ……。

「あなた……校内に私物を持ち込むのは校則違反です。即刻、没収させていただきます」

「私物つて……えっ!? もしかしてギターの事ですか!? ダメなんですか

!？」

「ダメに決まってるだろ」

「なーくんまで!？」

そんなに堂々とギターを持ってくる奴がどこにいるんだよ。香澄は愕然とうなだれて、されるがままにギターを取り上げられる。

「弾きながら登校なんてありえません。私物を持ち込むなら、生徒会に手続きを行ってから持ち込まなくてははいけませんから」

「そ、そうなんですネ……」

「放課後、生徒会室に取りに来るように。以上です」

「うう、そんなく」

てきぱきとした動きで、生徒会の人香澄のギターを持ち去っていった。手慣れていると言うのが適切か。

「どうしよう有咲く！ギター持っていかれちゃったよく！」

「私に言ってもしょうがねーだろ」

「じゃあ、なーくんく！」

「消去法で俺に来るな」

「じゃあ……あつ、りみりん！」

と、そこにりみが登校してきた。姿を見つけた途端に、香澄はすぐにダツシユしてりみに抱き着く。ちなみにこれ、さつき有咲の家に行った時にもしてるからな。有咲に。

「あ、香澄ちゃん……おはよう」

「おはよう、りみりん！」

「それに翔君と……あれ、市ヶ谷さん？」

「ど、どうも……」

また猫かぶりか。本性を知られていない奴の前では、コロツと態度を変えるらしい。美羽と明日香の前なら、もう猫かぶりは使えないんだけどな。

「聞いてよ、りみりん！私、有咲からギター貰ったんだけど、ギター取られちゃったんだよく！」

「う、うん。そうなんだ……」

「あつ、でも放課後には返してもらえるから安心してよ！そうだ、放課

後！ね、今日から練習、有咲の家でしようよ！」

「勝手に誘うな！あつ、じゃなくて……」

もう手遅れだ。簡単にはがれる化けの皮だな。ごまかそうとして俺と目が合い、何故か睨みつけられたが。意味わかんねえよ。

それよりも……何だかりみの元気がない。確かにいつも大人しく口数も少ないが、今日は声のトーンが低い。ギョツと口をつぐみ、拳を握りしめている。

何かあったのか？俺はりみに何かあったのか聞こうとするが……。

「う、あ、あの……ごめんなさいっ！」

突然、りみが深々と頭を下げる。何に対しての『ごめん』なのかは、俺たちには全く分からない。面食らった俺たちは、続くりみの言葉を待つことしかできなかった。

「その、香澄ちゃん……。私の事、バンドに誘ってくれたのは嬉しいよ。けど、ごめんなさい……。私やっぱり、バンドはどうしてもできないよ」

バンドができない。その事に対しての『ごめん』だったのか。ひとまず、謝罪の意味だけは理解した。

けど、どうしてだ？りみがバンドをできない理由は、一体どこにあるんだ？音楽には興味あるって、前にも話していたはずなのに。本人だって、バンドはやってみたいと言っていたはずだ。

だが……やるのは遠慮したいとも言っていた気がする。今になって、俺はそんな彼女の言葉を思い出した。

「え……？何でダメなの？親にダメって言われた？」

「ううん！」

「それとも、私が無理に誘っちゃっただけで、他の人とバンドやってるとか……」

「ううん！」

「じゃあ……誰かに脅されてる？」

「ううん！」

いや、むしろ『うん！』って言いだしたらどうするつもりだったんだよ。どんな奴と関わり持ってたんだ、りみは。

「だったら、やっぱり私とするのが……」

「ち、違うの！私、その……ごめんなさい!!」

「あつ、りみりん!」

走り去っていくりみ。そして取り残された俺たち。バンドはできないと決別され、香澄は唯一のバンド仲間を失った。

その理由も、定かではないまま。

「牛込さん、来ないね」

「そうだな……。教室で声はかけたんだけど、1人で飯食いたって」「うくん……。どうしちゃったんだろ、りみりん」

りみが逃走して数時間。と言っても、クラス自体は一緒だし、話をすることはできた。けど、口にするのはごめんの3文字。それ以上の事情を聞きだすことは、俺や香澄ですらできなかった。

そして昼休み。俺たちは中庭で、昼食を取ろうとしていた。りみは俺たちと距離を置いているから、俺と香澄、沙綾の3人。そのつもりだったんだが。

「何でいるんだ?」

「居て悪いかよ」

「えつと……市ヶ谷さん、だよね?」

「失礼。契約結んだんで」

俺と沙綾で対応が違いすぎる。とまあ、そう言う事だ。何故かこの場に有咲がいて、これから俺たちと昼飯を食べようとしている。今まではそんな事なかったのに、マジで理由がわからない。しかも、契約って何だ?

「有咲と一緒に食べたいって」

「言ってるねえ」

「言ったよ」

「そう言う言い方はしてねえ」

ああ、そう言う事か。香澄から直接聞いたわけじゃないのに、何となく経緯が想像できてしまう。やっぱこいつ、ツンデレなんだなくつて。

「へえ、いつ仲良く……」

「なっていないです」

「忙しいな、お前」

「横やり入れてくんない！」

こうもコロコロ性格が変わると、役者とか向いてんじゃないかって気もして……あ、でもそれはないか。さつきもすぐに本性見せてしまったからな。前言撤回。

「翔とも仲良さそうだね。クラスも違うのに」

「アハハ……ちよつと成川君とは、色々あったので……」

「そんな呼び方されたの初めてだぞ。もっと普通に話せばいいのに」
「うるせーって言うてんだろ！」

沙綾もキョトンとしているな。こっちの有咲を見るのは、これが初めてだったんだろう。沙綾よ、これが市ヶ谷有咲なんだ。

「でもどうしよう！りみりん、何でバンドやるのダメなんだろう？」

「知らねえよ」

「ちやんと考えてよく！」

「本人に聞けよ！」

もつともなんだが、それができないから苦労している。理由がわかればこっちも納得して引き下がれるんだが、このまま立ち去られてしまつてはどうしようもない。

だから俺たちは、何とかして理由を探り当てようとしているんだ。

「ごめんとしか言ってくれなくてな。だから無理なんだ」

「お前に聞いてねー」

「口はさむくらいいいだろ。そんなに香澄に夢中なのか」

「……っ、はあ!? な、何変な事言つてんだよ!?! / /」

顔を真っ赤っかにして言うセリフではないな。説得力が皆無なんだが。

「市ヶ谷さんって面白いね。反応が見ていて楽しいって言うか」

「面白くないし、楽しくもないです。見せ物じゃないですから」

「そうかな？私、市ヶ谷さんの違う一面が見られて嬉しいよ。普段は学校にも来ないし、あまり知らなかったから」

「う、嬉しいって……いや、えつと……は、話を戻すぞ！／＼／＼」
「照れ隠しだな」

「ニヤニヤすんな！翔が一番タチ悪いぞ!」

だって、面白いんだよ。普段は振り回される方だから、振り回す方になるのも悪くないな〜って。

「悪かったって。とりあえず、話をいったん戻すぞ。何でりみがバンドを止めたのか……やっぱ、放っておくのもモヤモヤが残るだけだしな」

「ごめんとしか言ってくれないし、どうしたらいいんだろ……。さーや、何かわかる？」

「私？う〜ん……。でも、何か事情がないとやめるなんて言い出す事ないよね？最初は乗り気だったんでしょ？」

「そこなんだよな。どこで心変わりしたって話なんだが……」

やっぱり直接話が聞けたらな……。何とかして、りみと自然に話せる状況を作り出せたらいいんだが……。

「つーか、ごめんって言ってたなら、そう言う事なんじゃねえの？」

「そんなー！ちゃんと考えてよ、有咲ー！」

「くっつくなんて言ってるんだろ！ああもう、うぜえ、うぜえ!!」

「む〜……。あつ、有咲！卵焼きあげるから！」

「えつ……。こ、これは、よくあるおかずの交換ってやつ……!?!」

食いつくのかよ。しかもすぐくソワソワしてるんだが。交換したくて仕方ないって気持ちだが、もう全身から滲み出てる。

「アハハ。市ヶ谷さん、やっぱり面白いね」

「い、いや今のは……」

「交換でもいいよ?」

「し、しねえよ!」

「アハハ……。ごめ、可愛い」

「なっ!?可愛くないです!」

耐え切れなくなつたのか、沙綾が笑い出した。沙綾の知ってる有咲と、今の有咲のギャップが違いすぎるからな。完全にからかっているようにしか見えないけど。

「いいじゃないか。可愛いって、褒めてくれたんだぞ?」

「お前まで止めろ!」

「やっぱ、本当におもしろい……プツ、アハハ!」

「そ、そんなに笑わないでください!ちよ、あーもう!!」

困り果てた有咲の声が、中庭に響く。ま、沙綾にも気に入られたよ
うで何よりだつてことだな。

「……さて、どうするよ」

「りみりんの事だよね」

「この状況で他に何かあるんだ」

結局、何事もないまま放課後に。りみはすぐに家に帰つたみたい
で、追いかける暇もなかった。

仕方ないので、香澄は有咲の蔵でギターの練習をすることに。その
辺の事情も、俺はまだよくわかっていないんだけど。

で、俺はバイトもないし暇なんで、香澄と蔵にお邪魔してきた。有
咲の嫌そうな顔と言ったら、般若のお面かっけくらいだったけど。

で、数時間くらい練習して、今日は家に帰ることに。練習と言つて
も、まずは基礎的な部分を教えるところからだったけど。正直進捗は
ほとんどないです。別に俺自身ギターをやつてるわけじゃないから
な……。

俺は香澄と並んで帰り、せっかくなのでりみの件を振ってみた。香
澄だつて、このままにしておくつもりはないに決まっている。

「どうにかして知りたいよ。りみりんがバンド出来ないのは仕方ない

けど、何で止めちゃったのかだけでも知っておきたい」

「だよな。無理にバンドに誘うのも筋違いだ。だから俺たちは、りみを連れ戻すためじゃなくて、りみを納得して送り出すために理由を見つけるんだ」

「え〜？それじゃあ何だか卒業式みたいだよ、なーくん」

「ん？いや、そう言うつもりじゃなかったんだけどな……？」

にしてもだ。りみがバンドを止める理由を考えてはいるが、どうにもそれらしいものが思い当たらない。家族の事でも、他にバンドをやっているわけでもない。既に八方塞がりって感じだよな……。

「でも、何でだろう？私、りみりんに何か嫌われることしちやったとか……？」

「心当たりはあるのか？」

「ないけど……」

「だったらそう言う話じゃないってことだ。香澄が嫌で、避けたいわけじゃないんだよ」

仲もいいし、ランダムスターの件もりみの方から心配してくれたくらいだ。香澄に気がないわけじゃない。なら、距離を置かざるを得ない事情があるのか。

「う〜ん、もうわかんなくなってきたよ……。りみりん、私とバンドしたいって言ってくれたのに、誘ってくれて嬉しいって言ったのに……」

「いや、そうとも限らない。俺はりみから、バンドをやりたい気持ちもあるけど、やりたくない気持ちもあるんだって話を聞いたことがある。もしかしたら……」

「そ、それって本当なの!？」

「ああ。直接聞いたから間違いない。それも、香澄がまだバンドに誘う前の話だからな」

となると、ズルズルと引きずって断り切れなかっただけなのか。いや、それだけの事情では片付けられない『何か』がある。

一時期はバンドに積極的だったんだ。それが今になって、消極的になってしまった。りみを突き動かすだけの『何か』が、きつと俺たち

の知らない場所にある。

その答えを知るのはりみだけ。だが、今の俺たちじや聞き出すことはできない。りみの気持ちが変わってくれないと、教えてもらう事はできない。

「……少し強引な気もするが、これしか方法がないな」

「えっ？何かわかったの？」

「わかったと言うか……りみの事情を知るための作戦って言った方がいいかもな」

俺は思いついた作戦を香澄に伝える。考えていても埒が明かないなら、こつちが取れる手段は限られてくる。

「それって……上手く行くの？」

「行くかどうかは香澄次第だ。もちろん、俺もできるかぎりのサポートはするけどな」

「うん……。りみりんには悪いかもしれないけど、これしか方法がないさそうだし……」

「さつきも言ったけど、これは俺たちが納得してりみを見送るための作戦だ。戻ってきてほしい気持ちはあると思うけど、りみの考えも尊重しないといけない。無理にバンドに引き入れても、それでバンドとして成り立つかと言われたらそんなわけないからな」

「……わかってる。私やるよ、なーくん！」

「よし、その意気だ。詳しいことは明日にでも話すから」

上手く行くのかは、正直よくわからない。成功するかどうかのカギは、香澄にかかっているんだからな。

けど、香澄ならやってくれるはず。腹は括ったみたいだし、俺も協力をするつもりだからな。

「ありがとう、なーくん。あつ、話は変わるんだけど……」

「ん？どうした？」

「昨日、あつちゃんから聞いたんだ。みーちゃんが病院に運ばれたって話」

「ああ……その事か」

改まった口調になるから、まだ何か深刻な問題を抱えているのかと

ヒヤヒヤした。昨日の美羽の事、香澄の耳にも届いていたんだな。

「大丈夫だったの？みーちゃん、元気にしてる？」

「心配ないよ。美羽は今、学校休んで家にいるんだ。しばらく大人しくしてるように言われたけど、香澄が思ってるより元気だから。てか、元気すぎて本当に昨日病院に運ばれたのかって疑いたくなるくらいだ」

「そうなんだ……よかった〜！あっちゃんも思い詰めたみたいだし、お母さんも家にいなかったから、そんなに具合悪いのかなって」
香澄も明日香も、心配してくれてたんだな。そんな必要ないくらいに、美羽はピンピンして家にいるけど。今頃ギターでも弾いてのんびりしてるんだろう。

ま……心配は心配のまままで済んでくれるのが、一番なんだけどな。

「ベッドで寝た切りってわけでもないし、入院もいらないうって言われたからな。数週間様子を見たら、また学校に通えるようになるよ」

「早くみーちゃんが学校に行けるといいね！その時は、このランダムスターも見せてあげたいな！」

「別に隣なんだし、遊びに来ればいいだろ。美羽もその方が嬉しいと思うよ」

「じゃあ、また時間がある時にお邪魔しよっかな♪」

「ああ。でも、まずは明日だ。りみの事情、何としても突き止めるぞ」「うん！」

phrase 15 心の波音

りみが、突然バンドを辞めたいと言い出した。

理由はわからない。俺や香澄も、全く見当がついていない。辞めることを止めるつもりはないが、せめて理由だけでもハッキリさせておきたい。バンドに興味を示していたりみが、いきなり辞めることになった理由を。

だが、りみは俺たちには何も話そうとしない。手掛かりもなく、真相はまだ闇の中にある。俺たちが知恵を振り絞ったところで、答えが出そうにもない。

だから、俺は1つ作戦に出る。そのために……お、来た来た。

「おはよう、りみ。今日はいつもより遅かったんだな」

「あつ……翔君。お、おはよう」

朝。俺はいつもと同じように学校に行き、りみが来るのを待っていた。香澄には、りみが気まづくならないように場所を変えてもらっている。多分、隣のクラスで有咲と話しているんだろう。

けど、りみはわざと時間をずらしたんだろうな。早く学校に着くと、どうしても俺たちの目を気にしてしまう。こうしてりみと話しているのも、1時間目の始まる直前だからな。

そこまで俺たちを避け、バンドから遠ざかる理由は何なのか。すぐにも確かめたいが、正面から向かっても答えてくれるはずない。だから、今は我慢する。それよりも、りみには頼みたいことがある。

「あ、あの……何回言われても、バンドはできないよ。悪いとは思ってるけど、どうしても無理なんだ。ごめんなさい……」

「いや、俺がりみに声かけたのは、バンドの話をするためじゃないよ。それより、いきなりで悪いんだけど……今日の放課後って時間あるか？」

「えっ？ほ、放課後？」

てつきり、バンド関係の話だと思ったんだろう。そうじゃないと知り、りみは面食らっているようだった。

「う、うん……時間はあるけど、何かな？さっきも言ったけど、もしバ

ンドの話なら……」

「違うって。ちよつと買い物に付き合ってほしくてさ」

「買い物？私が、翔君と？」

「ああ。りみにしか頼めなくてさ」

「えっ……？？な、何だろう……？？」

何で顔を赤くしているのかはよくわからないが、これはりみに頼むのが適任な話だ。俺は承諾してくれるのを期待しながら、話を進める。

「実は、楽器屋さんに行きたくてさ。妹からギターの弦を買ってくるように頼まれたんだよ」

「翔君、妹がいたんだ」

「ああ。今はちよつと、学校に行けなくてな。それで俺が代わりに行くことになったんだけど……1人で行くよりも2人で行く方が悩むこともないかなって。どうかな？」

「私は翔君に誘ってもらえて嬉しいよ。でも、それなら私じゃなくてもよかったと思うけど……？」

「いや、そうでもないんだ。俺の知り合いで音楽とか楽器に詳しいのって、りみしかいないからな。俺も音楽の知識はあるけど、やっぱ他の人の意見も聞きたくて。どのギターの弦がいいかって、すぐには決められないからな」

香澄は素人同然だし、有咲は素直についてきてくれるかも怪しい。そもそも音楽に詳しいのかどうかもわかんないけどな。

沙綾は放課後は実家の店の手伝いあるし。それ以前に、前に沙綾と話した時、どこか音楽の話題に乗り気じゃなかったのもあるからな……。

けど、りみなら音楽に詳しいし、お姉さんはグリグリギターボーカルだ。その影響で多少ギターの知識は持っているだろう。ここまです適任な奴、他にはいない。

まあ、後1人思いつく奴はいるんだが……あいつはな……。

「だから、一緒に行ってくれないかな？他に頼める奴がいらないし、力になってくれるとありがたいんだけど」

「……うん、わかった。私でよかったら、力になるよ」

「そうか、助かるよ！ありがとな、りみ！」

「う、うん。どういたしまして……／＼／＼」

よし、これでギターの弦の事は解決だな。りみが引き受けてくれて、本当によかったよ。

……作戦の方も、ひとまず第一段階クリアってところだな。

「起立、礼！ありがとうございます！」

そんなわけで放課後。部活や帰路に着く生徒がちらほらと見られる中、俺はすぐに荷物をまとめていた。約束通り、楽器屋さんに行かないといけないからな。

「りみ、帰る準備はできたか？」

「うん、大丈夫だよ」

「なら行こうか。早く買ってきてほしいって頼まれてるからな」

早く弦張り替えて練習したい！って言ってたからな。俺はりみを引き連れ、教室を後にする。あ、そうそう。香澄に声だけかけとくか。

「おーい、香澄」

「……ど、どうしたの、なーくん？」

「悪いけど、今日は一緒に帰れないからな。ちよつと用事があるから」
「う、うん。わかった」

どこかぎこちない返事だな。まあいい。俺は背後に目を向け、特に何事もないまま2人で学校を出た。りみも香澄に対して表情を曇らせていたが、それ以上の反応は見せていなかったからよしとする。

「この辺りで楽器屋って言うところ……SPACEの近くにあったよな」

「うん。あそこなら扱ってる楽器の種類も多いし、弦もいくつも見ることが出来るよ」

「決まりだな。じゃ、そこに行くか」

場所も決まったところで、俺たちは足を進める。2人とも知っている場所だった事もあり、進む足取りは何も重くない。もつと俺に負い目を感じているかと思っただが、割り切っているようなら俺としても嬉しい。

この場で俺や香澄の事を気にされると、後々の作戦に支障が出る。

「ところで翔君。さつき妹がいるって話していたけど……」

「ん？ああ。1つ下だな。俺たちと同じ花女の中等部に通ってるんだよ」

「その……学校に行けないって言ってたから、どうしたんだらうって思っ……」

その話が……。別に隠すことじゃないんだけど、口にするのは少し痛ましい。だが、このまま黙っている事でもないし、俺は重い口を開く。

「……俺の妹、美羽って言うんだけどさ。小さい頃から重い病気を抱えてるんだ。それも、完治するのが難しい病気だな」

「えっ……!?!」

「その病気の発作が原因で、昨日病院に運ばれてな。命に別状はないんだけど、しばらくは安静にしないとイケないんだ」

それから俺は、今の美羽の容態がそこまで深刻なものではない事。音楽を聞いたり、演奏したりしている間は発作が起きない特異な体質がある事。そのため、早く弦を買って美羽に届けてあげたい事を教える。

りみも真面目な話だからか、真剣に耳を傾けていた。そう言えば、美羽の事を誰かに教えるのは、これがはじめてな気がするな。

「……そうだったんだ」

「暗い顔するなって。確かに病人には変わらないが、美羽は今も家で

元気にしてるよ。むしろ、もつと落ち着いてほしいくらいだ」

「でも、それなら早く美羽ちゃんのためにギターの弦買って行かないとダメだよな」

「そうだな。……お、噂をすれば、楽器屋に着いたな」

一通り話し終えたところで、目的地の楽器屋に到着。SPACEの近くと言う事もあって、この辺りでは割と有名な楽器屋だ。店舗も広く、品そろえも豊富に取り扱っているのが、この店の魅力なのかもしれない。

「さて、ギター売り場は……あっちか。この店には、まだちよつとしか来た事ないんだよな」

「広いから、最初はどこに何が売っているのかわからないよね。私もそうだったよ」

この辺りにはSPACEのバイトで何回も来たことはあるが、この楽器屋に入ったことは全然ない。俺だけだったら、まずギター売り場にたどり着くまでに余計な時間を使うところだった。やっぱり、りみが一緒に来てくれて助かった。

程なくして、ギター売り場へ。美羽から弦の話はよく聞いているが、弦のコーナーだけでもかなりのスペースを取ってあるな。

どれも同じように見えるが、材質や感触が微妙に違うらしい。その差異で、音も変わってくるみたいだ。

「美羽ちゃんは、普段どんな弦を使ってるの？」

「一応、美羽から使ってる弦は聞いてきたんだ。これなんだけど」

そう言っただけは、スマホのメモを見せる。やはり、お姉さんがギターをやっているからか、その名前を見てりみはすぐに弦の特徴を理解したみたいだった。

「この弦だと、落ち着いた音が出せるよね。前にお姉ちゃんも使っていて、どの音域でも安定するって言ってたよ」

「みたいだな。こいつを買って行けばいいと思うんだけど……えくと、どこにある？」

「この種類の弦なら……あつ、ここだよ、翔君」

見つけるの早いな。俺なんかどれも同じに見えてしまうんだが。

ギターには詳しいと思っていたはずなんだけどな。

「おつ、これこれ。美羽に聞いた奴だ。ありがと、りみ」

「あ……でもそれなら、こっちの弦も買って行った方がいいと思うよ。今お姉ちゃんが使ってる弦なんだけど、音に派手さが出て、しかも長持ちするんだよ」

「なるほど。じゃあ、この弦とりみの言ってる弦、2種類買っていくかな」

その方が美羽も喜んでくれそうだな。俺はりみに勧められた弦を手に取り、購入を決める。りみも無知な俺にアドバイス出来て、満足そうにしているみたいだし。

……まあ、さつきまでののは全部、演技でしかないけどな。

「これで美羽も喜んでくれるだろ。じゃ、会計を済ませてくるから、ちよつと待っててくれ」

「うん。それじゃあ、私はこの辺りにいるね」

そう言っさりみが向かったのは、ベースのコーナー。新型のベースや弦に目を通し、色々と手に取って確認していた。こうして見ると、やはりりみには音楽へのこだわりはあるみたいだな。

なら、どうしてバンドを……？音楽が嫌いってわけじゃないんだろ？それに、今だってベースのコーナーを物色する辺り、ベースを弾くこと自体は好きって事なんだろ……？

「し、翔君？えと……そんなに私の事見て、どうしたの？」

「えっ……あ、いや何でもない。りみが熱心だと思っただけだよ。それじゃ、行ってくる」

先客もいなかったため、俺はすぐに代金を支払い、弦をゲット。ベースのコーナーに戻ると、何個か弦を手に取りにらめっこしているりみの姿が。ベース、本当に好きって事なんだな。

でも、不思議だよな。音楽に対する熱はありながら、『バンド』だけは自分から遠ざかるほどに嫌っている……どうも矛盾してる気がする。

「あつ、終わった?」

「おう。りみも弦見てたけど、何か欲しいものでもあつたか?」

「うくん……。今はまだ弦も張り替えたばかりだし、今月のお小遣いも残しておきたいかなって」

「気になるのがあつたら、俺が買ってやるぞ?」

「い、いいよ!前だって、奢ってもらっちゃったし……」

別に遠慮しなくてもいいんだけどな。まだ懐には余裕があるし、もう少しで給料日だからな。けど、りみも今日はいいと言って引き下がらなかつたし、そこまで言われたら逆に押し付けているみたいになつてしまう。ここは素直に、楽器屋を後にした。

「よし。無事に弦も買ったわけだし……今日は駅までかな」

「えつ、終わり……ですか?」

「ん?他にどこか行きたい場所でもあつたか?」

「あ、えつと……翔君の事、疑っていたわけじゃないんだけど……やっぱり、どうしても気にしちやつて。もしかしたら、バンドの事を聞かれるんじゃないかって」

そりやそうか。このタイミングで、わざわざ誘い出すくらいだ。嘘をついてでも2人きりの空間を作り、バンドの話を切り出そうと画策していると思うのが筋か。

自然に振る舞つてはいたけど、りみは不安だったんだろう。それこそ、何かの犯人に仕立て上げられているような気分だったに違いない。そんなりにみに、俺は優しく声をかける。

「さつきも言っただろ?俺は今日、りみとバンドの話をするつもりはないんだつて。だから、こつちからそんな話をしなかつただろ?」

「うん……そうだよね。ごめんね、変におびえて、ビクビクしちやつて……」

「いいよ。言いたくない事だつて、誰にでもある。こつちが無理に聞いても、何も答えてくれない、解決はしないってわかつてる」

「……うん」

俺はりみを追い詰めたいわけじゃないんだ。拷問させて、思いを吐かせて、苦しめたいわけじゃない。そんな悪人になつてやりたいわけ

なんかじゃないんだ。

「けど……できる事なら、俺は知りたい。りみが何でバンドを辞めた
と思ったのか」

「それは……言えない」

「わかつてる」

「言ったらきつと、香澄ちゃんや翔君を失望させちゃう。それは嫌な
んだ。だから私はバンドを辞めて……その理由を言ったところで、翔
君は私の事を、どうするつもりなの？」

「どうもしないよ。俺は、いや香澄も、りみをバンドに連れ戻すために
……説得するために事情を知りたいんじゃない。ただ知りたいだけ
なんだ。音楽好きなりみが、バンドにも前向きだったりみが、どうし
てバンドを辞めたのか」

今、失望させてしまうと言ったが、それも何か関係あるのだろうか。
演奏に関して迷惑をかけると思うなら、素人の香澄は涙目になる。

「……ごめん。やっぱり、私は」

「いいよ。ただ、これだけは知ってほしい。俺たちは、理由を知りたい
だけなんだって事をな。それがわかったら、バンドを辞めるのもりみ
の自由だ。もうこっちからバンドに誘ったりすることはしないよ」

「……っ、そ、それは……」

うん……？どうも反応がおかしいな。バンドを辞めたいと思っ
ている人間が、第三者からのバンドの勧誘を止めると聞いて表情を曇ら
せるのか？遠ざかりたいと思うのなら、喜ぶのが普通なんじゃないか
？

どっちなんだ？りみは、本当にバンドを辞めたいのか？

もしかしたら、本当はバンドを……。

「……そ、そうだね。その方がきつと、私にとってもいいと思うから。
香澄ちゃんにとっても、私はバンドには必要じゃないはず……」

「必要じゃない……？それって——」

「どうということなの、りみりん」

後ろからかけられた声に、俺たちはハツとなって振り返る。そこにいたのは、ランダムスターを抱えた少女……戸山香澄だった。

「バツ……お前、何で出てきた!?まだ話の途中で——」

「ごめん、なーくん。それにりみりんも。盗み聞きするような真似してて」

「えっ……?翔君、どういう事……?」

くそ、仕方ない。本当はもう少し後で香澄に出てきてもらうはずだったんだけどな……。

「……悪い、りみ。俺たち、どうしてもりみの事が気になってな。何とかして、話ができないかって考えてたんだ」

「本当は、なーくんが私とりみりんの2人だけで話をするように、色々考えてくれてたんだ。2人の後をつけて、さっきまでの話も全部聞いてたよ。りみりんの事が心配で、でも何も話してくれなかったから」

本当は、2人だけになれるポジションを見つけて、そこで俺が離脱するはずだった。駅前までりみと行動し、コンビニにでも立ち寄ったところを後につけた香澄と交代するって作戦だったはずなのに。

2人であることを活かし、俺もできるだけりみから事情を聞きだそうとしていた。香澄に後をつけさせたのは、交代のタイミングもそうだが、俺がりみから聞いた話の内容を把握させておくためだ。そのための合図が、教室でのやり取りだった。

でも、香澄もいてもたつてもいられなかったんだろうな。自分は必要ない。そんな事はないはずなのに、りみの口から自虐の言葉を聞いてしまった後だから。

「香澄ちゃん……」

「りみりん、必要ないなんて事ないよ!そんな事が理由でバンド辞めたのなら、私は戻ってきてほしい!」

「香澄、昨日も話しただろ。りみに無理強いさせるのは間違ってる」

「わかってるよ!でも、りみりんがどうして自分の事をそんな風に言うのか、私にはわかんない!だって私、りみりんがバンドに入ってくれて、嬉しかった!いらんないなんて、言うわけない!」

香澄にとっては、初めてのメンバーだった。バンドをやりたいと一

念発起し、ようやく賛同してくれた1人だった。俺やりみよりも、香澄が一番嬉しかったはずなんだ。

「……そうかもしれない。でも、香澄ちゃんとバンドはできない」「何で!？」

「……迷惑かけちゃう。きつと、私は香澄ちゃんと——」

「迷惑なんて、私の方がかけちゃうよ!ギターだって全然だし、音楽だって詳しくないから、何から手を付けたらいいかもわかんなくて……。だから、りみりんの力が必要なんだよ!」

「……っ」

りみの表情が、苦痛に歪む。香澄がこうも必死になってくれて、なのに期待に応えることができなくて。りみの中で葛藤が起こり、痛みとなって蝕んでいく。

「悪いな、俺からも1つ言わせてくれ」

「翔君……?」

「りみ、俺がりみ事情を知ったら、バンドにはもう無理に誘う事はしなかって言ったよな。あの時の反応が、俺にはどうしても気になつてな」

「私の反応……?」

「バンドを辞めたくて、香澄の前からいなくなったりりみが、俺たちがバンドを誘わないと口にして何でためらうような素振りを見せる?嫌がって、名残惜しそうにしていたんだ?」

楽器屋でベースを見ていたのだからそうだ。もうバンドからは縁を切ったはずなのに、それでもベースに目を向けている。前々からの趣味と言われたらそれまでだが、俺にはそうは思えない。

「俺には、りみがバンドを辞めたいと思う理由がわからない。だってそうだろう?りみ、本当は続けたいんじゃないのか?香澄が誘ってくれたバンドを、辞めようなんて気はないんじゃないのか?」

「……っ!」

この反応、りみは本当は続けたいと思っている。それを押し殺し、自分を卑下してまでバンドを斬り捨てようとしている。

その答えの核心を突くカギは、まだ見つからない。だが、近づいて

いる。確実に。

「どうしても無理なら、話は別だ。けど、自分の気持ちに嘘をついてまで無理だと言いつけるのなら、正直になれ」

「私は……」

「りみりん、もう1度バンドやろうよ！私には、りみりんの力が必要なの！」

「私は……っ」

俺たちから投げかけられる言葉に、りみは俯いて、揺れる心と格闘する。前髪で表情はよくわからないが、小刻みにりみの華奢な体は震えていた。

どんな事情があるのかは分からない。けど、もしりみの選択が、望んだものじゃないのだとしたら……打ち勝ってほしい。自分を縛る枷に。

時間にして数秒。答えを待つ俺たちの前で、顔を上げたりみが口を開き――。

「私はっ……！香澄ちゃんと一緒にいたらいけない！そうしたらきつと……香澄ちゃんのやりたかったバンドを、壊してしまう！憧れた香澄ちゃんに、泥を塗ることになってしまう！」

「り、りみりん……!?!」

「そんな事、私はやりたいわけじゃない！香澄ちゃんから、何もかも奪うなんて事……したくないっ！」

体を震わせ、涙を流し、激情に身を任せてりみは叫んだ。感情が溢れ出したことで、りみは耐え切れずにその場から走り去ってしまう。

「あっ、りみりん!?!」

「追いかけるぞ。あのまま放っておくわけにもいかない」

「そうに決まってるよ！なーくんはこっちをお願い！」

「わかった。香澄、そっちは任せたぞ！」

りみの出した答えは、俺たちが望んだものではなかった。だが、せめぎ合う心の中で漏れ出した感情が、今のりみの精一杯の叫びだった

んだ。

「……りみ」

もうりみの姿は見えない。俺は逃げた先を追い、りみを見つけるために走り始めた……。

phrase 16 臆病な私にできる事

「はあ……はあ……」

私、何で逃げちゃったんだろう。

「はあっ、はあ……っ」

あんなに大声出して、香澄ちゃんに翔君もびっくりしていたよね。私のために、声をかけ続けてくれていたのに。

2人は何も悪くない。その期待に答えられない、私が悪い。応えたくても、そのためにバンドに戻ったところで、私は香澄ちゃんには相応しくない。釣り合っていない。

そんな香澄ちゃんが、こんな私のために……。

「……っ」

でも、私は香澄ちゃんと一緒にバンドをすることはできないんだ。

初めて声をかけられて、バンドに誘ってくれて、私はめっちゃ嬉しかったのに。大人しくて、影でコソコソしているような私とは、別世界のようだったのに。

そんな人が私の力を必要としてくれていることが、夢のようで。思わず泣きそうになって。

ライブのステージで輝いているお姉ちゃんの姿を見て、バンドをやってみたいと思う事もあった。ベースを始めたのも、お姉ちゃんみたいになりたかったのがきっかけだった。

でも、それが遠い場所の話だと思っていた事もあった。その思いが、香澄ちゃんの手で現実になろうとしている。

お姉ちゃんと同じ舞台に立てる。香澄ちゃんに導かれて、新しい扉を開けるのかもしれない。こんな自分を、帰られるんじゃないかって思ってたんだ。

だから、香澄ちゃんとバンド……できたらやってみたかったんだ。

なのに私は、断ってしまった。無理なんだって、思ってしまったから。だって、私は……。

「Excuse me」

「……えっ?」

「Could you give me——」

え、ええっ!?こんなところに、外国人!?困っているみたいだけど、いきなりの事で頭が混乱して、真っ白になってる。どうしたら……。

「えと、あの……」

「Hum?」

ど、どうしよう。このままじゃ私、この人のために何もしてあげることができない。でも、逃げるのだから失礼だよね……。

やっぱり、私には何かできる力なんて……。

「りみ!よかった、こんなところにいたのか!」

「翔君!」

もう追いついてきたんだ。けど、香澄ちゃんの姿はない。多分、手分けて探しているのかも。

翔君を見てさっきの事を思い出してしまったけど、今は誰でもいいから助けを借りたかった。この様子を見た翔君は、私と外国人の間に立つ。

「なるほどな。この辺りに外国人なんて珍しいけど……事情は大体わかった」

「あの、翔君……」

「任せておけよ。まずはそれからだ」

任せてって言われても、何をするつもりなんだろう?私なんか、固まってしまったこともあるけど、全然言ってることわからなかったから……。

そんな事を考えている私の前で、翔君はゆっくりと深呼吸。困ったように、そして不思議そうに翔君の事を見つめる外国人だったけど、それは一瞬の事だった。

「……Hello! What's up?」

「Oh! Could you give me——」

え、ええっ!?!きつきとは違う意味で、私は目の前で起こっていることに驚いている。外国人の人も嬉しそうだし、翔君も饒舌に英語を話している。2人で笑っているし、会話を楽しんでいるのかな……?」
「ほわあ……」

今の翔君、めっちゃ良かった……。

「See you!」

「See you!……よし、どうやら役に立てたみたいだな」

あんなに堪能に英語を話して、翔君ってすごいんだ……。外国人と会うのも珍しいことなのに、何も怖気づくことなくなんてないまま話をしていた。しかも、楽しそうに。

それに比べて、私は……何もできなかった。

「いや、にしても焦ったな。りみもテンパっただろ。外国人と話すなんて、なかなかないし難しいからな。英語の成績だけ良くても、実際に会話しようと思うと話は別物だからな」

「で、でも翔君はあんなに英語を……」

「まあな。前から英語は得意だったし、自信はあるんだ。あ、国語も得意だけ」

それで、あんなに流ちょうなんだ。自分に自信があるからできる事なんだね。私だったら、あんなに話せる自信はどこにもない。

「……ありがとう、翔君」

「いいって。慣れないことはするもんじゃないし、気にするなよ」

「ううん。私、すぐに固まっちゃうし、どうしたらいいかわからなくなつて、動けなくなつちやつて……かつこ悪いよね」

「何言ってるんだよ。固まるって事は、何とかしようと思ってるからだろう?何もしようとしな人より、その方がかつこいいじゃんか」

「……そんな風に言ってくれるんだ」

「何か変だったか?」

「ううん。そうじゃないよ」

けど、結局は何もできていない。後ろ向きだから、行動に移る前にあれこれ考えてしまうから。一步踏み出す事でさえ、私にはできない。情けない。

だから私は、昔から人よりも友達が少なかった。内気な性格が災いしていたから。もう高校生なのに、ズルズルと引きずってきてしまったから。

こつちに転校してきたからかもしれないけど、それでも花女に通い始めて3年目になる。それはもう、言い訳でしかない。

「……ただ、すごいなって思ったただだよ。翔君も、香澄ちゃんも」「香澄も?」

「入学式の時の自己紹介……私は緊張して、全然上手く話せなかった。中学から持ち上がりだから、知ってる子も何人かいたのに」

口ごもり、上手く言葉にできずに、座り込むしかなかった。間違えないで、堂々と話そうとすればするほど、間違った時に笑われてしまふんじゃないかってビクビクしていた。そんな私に送られる拍手が、恥ずかしくて仕方なかった。何も言えなかったのに。

けど、香澄ちゃんだけは違っていた。

「そんな中でも、香澄ちゃんは堂々としていたんだ。初めて会う人達ばかりで、私なんかより緊張していてもおかしくないのに……活き活きしてたんだ」

周りとは拍子抜けなことを言って、笑われていたとしても。香澄ちゃんは真剣に、言葉を紡ぎだしていた。

全部が一生懸命で、とても楽しそう。そんな香澄ちゃんの事が、私はずつと気になっていた。まるで恐れを知らない、私なんかとは違う世界の人だと思っていたのに。

あんな風になりたいって、私は香澄ちゃんに憧れたんだ。

「だから、そんな香澄ちゃんにバンドに誘われて、本当に嬉しかったんだ。続ける気だつて、もちろんあったよ。ベースやってたのも、いつかはバンドをやってみたかったからなんだ」

「じゃあ、どうしてりみは、バンドを辞めようなんて言い出したんだ？香澄に影響を受けて、一緒にバンドをやってみたって思ってたんだろ？」

「うん……」

香澄ちゃんと一緒にバンドをやっていたら、少しでも香澄ちゃんみたいになれるかと思つた。もつと堂々と、臆病な自分を変えられたらいいと思つていたんだ。

「なら、何でだ？」

「……怖かつたんだ。私、ステージに上がる自分を想像したら、足がすくんじやつて」

「自分が、ステージに立つ姿……」

「変だよ。バンドやりたいのに、そんな事で怖がつてるなんて。でも、ダメなんだ」

何となく考えてたんだ。私たちがバンド組んで、ライブ……SPAの舞台にしよう。そこでライブをする姿を。お姉ちゃんたちが立っている場所に、同じように立って、おなじように演奏する姿を。

最初は楽しそうだと思つた。けど、段々と不安が芽生えてきた。私なんかステージに立って、ちゃんと演奏できるのかつて。

「みんなに見られてるって思つたら、頭が真っ白になっちゃう。どうしようかつて、それだけ考えちゃつて、精一杯になっちゃうんだ……」
今だって、私はどうしたらいいのかわからなかった。何もできなかった。もし、香澄ちゃんと演奏しても、自分は絶対に香澄ちゃんの足を引っ張ってしまう。

後ろ向きな私と、前を向いている香澄ちゃん。方向が違う2人は、決して交わることなんてないんだよ……。

「香澄ちゃんがやりたいって願っているバンドを、私のせいで台無しにしたくなんてない。お姉ちゃんみたいに上手くないし、緊張してすぐ間違えちゃう。きつと……香澄ちゃんをがっかりさせるよ」

だから、私じゃない方がいいんだ。香澄ちゃんには、こんな目の見えない私なんかよりも、もっとぴったりの人がいるはず……。

「……そっか。だから、さつき俺たちにあんな事言ったんだな」

「……うん。自分でもどうしたらいいのかわからなくなって、ついカツとなっちゃって……」

「いいさ。りみの本音、聞いたからな」

話がひとしきり終わり、私たちは身近なベンチに腰かけていた。何を話すわけでもなく、2人ならんで座っているだけ。静かな時間が流れ、夕焼けが私たちを照らす。

翔君は、こんな自分に失望しているかな？ いや、そうだよ。失敗が怖くて、逃げただけなんだから。香澄ちゃんの力になろうともしないで、上手く行かないことだけ考えて諦めてしまっただから。

香澄ちゃんだって、こんな私の事を嫌いになったはず。頼りにしてもらったのに、振りほどいたのは私なんだから。憧れて、目標にしたところで……追いつくなんて、夢のまた夢だったんだ。それがわかったんだ。

私、本当に何やってるんだろう……？

乾いた風が私たちの間を吹き抜ける中、私はいてもたってもいられなくなり、ベンチから立ち上がる。

また逃げるつもり？ 心の中でそう尋ねられた気がしたけど、これ以上香澄ちゃんや翔君に迷惑をかけるわけにはいかない。私のせいで、憧れの人の夢を壊したくない。

こんな私に構ってくれなくてもいい。もっと堂々として、緊張なんて知らない人によってもらえばいい。大人しく身を引けば、それで――

「……待てよ」

「……っ!？」

腕を掴まれた。逃げようとする私をつなぎとめようとするように、翔君の手が伸びる。

止めてほしい。何もできない私がこんなところにいても、恥ずかしいだけなんだ。情けない理由を赤裸々に告白して、惨めな私を晒して……。

それなのに、まだ手を伸ばし続けるのは……どうしてなの……？

「は、放してよ。翔君」

「いや、放さない。りみだけ言いたい事言って、俺には何も言わせてくれないのか？」

「それは……私がかっこ悪いって、何もできない私のみつともないって、そんなことを言いたい……？」

「違うよ。俺は、そうやって後ろ向きにならずに、もっと自信を持ってほしいって思ったただだから」

「……えっ？」

「今のりみは、自信が何もないんだ。上手く行かなかつたら恥ずかしい。ドジで情けない姿を見せると、他人からそんな目で見られてしまうって。だから、何もできないって思い込んで、閉じこもってしまおう」
翔君が言ってる通りだよ。他人の目ばかり気にして、動けないでいるんだから。お姉ちゃんみたいに、香澄ちゃんみたいに。堂々と、前を向けるように。

それができないんだ、私には。なのに、翔君はそんな私に力強く言葉を投げかけてくる。

「でも、そうじゃないだろ。もっと前向きに考えてみるよ。かっこ悪い？間違えて迷惑かける？そんなの上等じゃなか。怖がって動けなかつたら、できる事も出来ないんだぜ？」

「で、でも……」

「失敗する姿を見せることは、確かに恥ずかしい事かもな。俺だって、香澄だって見せるのは嫌なはずだよ」

「だったら——」

「けど、その姿がみつともないなんて、何とも思わない。自分のやりた
い事やって、それで失敗してしまっても……逆に誇らしいじゃんか。
真つすぐに向き合っているって事なんだから」

「……………」

翔君の言葉が、私の心を満たしていく。あれだけネガティブに考え
ていたはずなのに、抱えていた恐怖や不安が、簡単に剥がれ落ちてい
くみたいだった。

「後ろは見るな、前を見ろ。自分の行ったことに自信を持て。香澄み
たいに、もつと何事にも体当たりで挑んでみるよ。あいつ、いつも俺
に迷惑かけてばかりだけど……いつだって全力だ。やれること、どん
なに笑われたってやってるじゃないか」

「あ……」

そうだ。香澄ちゃんは自己紹介の時も、周りからはどこか浮いてい
たような気がする。それでも、香澄ちゃんは前を向いていた。自分に
正直になっていた。

恥ずかしい。情けない。そう考えてしまう気持ちは、誰にだってあ
るんだ。その殻を破ればいい……なんて、難しいことは何も考える必
要はなかったんだ。

自分にできる事を精一杯する。何かしないと、間違えないように、
成功しないと。そうやって自分で自分にプレッシャーを与えている
から、いつまでも上手く行かないんだ。苦しめていたのは、私自身
だったんだ。

自分に自信を持つ。正直でいる。やりたいことに、真つ直ぐに向き
合ってみる。香澄ちゃんがそうしていたように、私も少しずつ前を向
いてみる。そんな姿に憧れたんだから。

そうすれば、きつと私だって……何かできる。後ろしか見ないで、
人の目だけ気にしている自分を、変えることができると思うから。

「おーい、なーくんー！りみりくん!!」

「遅いぞ、香澄！どこ行ってたんだ!」

「えへへ、ちよつと道に迷っちゃって……」

「香澄ちゃん……」

赤いギターを抱えたまま、香澄ちゃんが走ってくる。道に迷ったと言ってたけど、ギターを持ったままずっと私の事を探してくれていたんだ。

今だって、私のためにやれることをやっていたんだ。周りの目なんか気にしないで、自分にできる事だけを考えていた。そんな姿が、みつともないわけがない。

……すごいな、香澄ちゃんは。やっぱり、敵わないよ。

「な？こいつは、何事にも全力でいるだろ？道に迷っていようが、ここまで来てくれたんだ。できないとか、かつこ悪いとか、迷惑だとか……関係ないだろ？」

「……うん。そうだね」

「へ？なーくん、何の話？」

「お前が単純で、前しか見ないで突っ走るバカ野郎って話だよ」

「えー!?それってどういうことなのー!?!」

張りつめていた空気が、一瞬にして和らいでいく。私の気持ちも緩んでいったのか、つられて笑ってしまった。

「えへへ……。翔君、ありがとう」

「ん？お礼なんて、別に言われるような事じゃないよ。さっきの話で、りみがおか考えてくれたならそれでいいんだ」

「うん……。それと、香澄ちゃん」

「えっ、私？」

「さっきはその……ごめんね。急に逃げて、戸惑っちゃったよね」

まだ、さっきの事を謝ることができていない。翔君もそうだけど、一番謝らないといけないのは、香澄ちゃんなんだから。

許してくれるのかな。あれだけきついこと言って、甘い考えかな。ううん、そうじゃないよね。そうやって失敗したことばかり考えるから、何もできないんだよね。自分に自信をもって、やるべきことをやるんだ……！

「私、こんな性格だから……上手く行かなかったらどうしようとか、そ

んな事ばかり考えちゃう。そうしたら、すくんで何もできなくなつて、香澄ちゃんの足を引つ張るんじゃないかって思ったんだ……」

「りみりん……」

「こんな事で、香澄ちゃんのやりたかったバンドを壊したくない。夢を奪いたくないって思つて……それで、さつきは逃げちゃったんだ。本当に、ごめんなさい」

香澄ちゃんの前に立ち、深々と頭を下げる。恥ずかしいけど、そんな気持ちに負けちゃダメ。それじゃあ、今までと何も変わらないんだから。

「……顔を上げて、りみりん」

「……うん」

「りみりんの気持ち、ちゃんとわかった。私、何にもわかってなかったから、知ることができてよかった。またこうして話ができただけでも、私は嬉しいよー!」

「香澄ちゃん……!」

本当に真つすぐで、憧れる。そんな香澄ちゃんと、私はバンドを……。

「よし、なら2人の仲直り記念つて事で、今からやまぶきベーカリーにでも行くか。もちろん、今日は俺の奢りだ!」

「本当!? わーい、なーくんありがと〜!!」

「えっ、いいの?」

「ああ。りみがまた一つ成長したつて記念に、つて事も含めて……な?」

「……うん!」

成長……私、できたのかな? 少しでも、変われることはできたのかな?

まだわからない。今も、香澄ちゃんや翔君の背中では遠い場所にあるように思えてしまう。

けど、その場所にちよつとずつでも近づくことができるように……

なっっていけるのなら、嬉しいな……。

「あ、そうだ。今度お姉ちゃん……グリグリのライブがあるんだけど、よかったら香澄ちゃんたちも来てくれないかな？」

「ゆりさんの！わあ、行く行く！なーくんも行こー！」

「そのライブって、確か次の週末だったか。だったらバイトもなかったはずだし、久しぶりに観客としてSPACEにお邪魔しようかな」「よかったー！じゃあ、お姉ちゃんにも伝えておくね！」

香澄ちゃんと翔君も、喜んで承諾してくれた。お姉ちゃんたちもきつと喜んでくれると思うな。

「……ん？でも今、ゆり先輩たち3年生って修学旅行だろ？」

「帰ってくる日がちょうどライブの日なんだ。ライブの時間には全然間に合うみたいだから、大丈夫だよ」

「そうなんだ！楽しみにしてるね、りみりん！」

お姉ちゃんたち、グリグリのライブに香澄ちゃんも来てくれる。帰ったら、お姉ちゃんに連絡しようかな。

「……にしても、よかったな。一件落着いて感じた」

「うん！でも私、何もしてない気がするけど……？」

「いや、そんな事ないぞ。りみが自分の弱さを吐き出して、前を向こうって思えるようになったのは、間違いなく香澄のおかげだからな」
香澄ちゃんのおかげ……。

ううん、多分そうじゃないと思う。私は香澄ちゃんがきつかけで、憧れを抱くようになった。自分を変えたいって、そう思うようになった。でも、それだけじゃダメだったんだ。

今の場所から抜け出すこともできなくて。そこから這い上がる勇氣をくれたのは、翔君なんだ。

だから……。

「……ありがとう」

「ん？何か言ったか？」

「えっ、う、ううん！何でもないよー！」

ありがとうございます、香澄ちゃん。

そして、ありがとうございます。翔君。

私に、前を向ける力を与えてくれて。

phrase 17 変わるチャンス

「じゃーん！見て見て、ペンライト！持ってきた？」

「当然だろ。な、有咲？」

「いないし」

りみに誘われたライブ当日。俺は香澄、りみ、有咲と4人でSPA CEに来ていた。もうライブは始まっていて、今は次のバンドが登場するまでの空き時間だ。

にしても盛り上がりすごい。グリグリだけのライブじゃないんだが、他のバンドも負けず劣らずの人気っぷり。ガールズバンドが注目されているのがよくわかるな。

「つーか、何で私まで普通に誘われてるわけ？面倒くさいのに……」

「どうせ暇だろ」

「そんな言い方されると腹立つな、おい！」

本当の話だ。今日の昼に誘いに言った時にも、盆栽いじってただけの奴だからな。特に予定もなさそうだったから、香澄に協力してもらって、強引に連れ出した。

「ああ、もう……私の盆栽との時間を返せ」

「そんなものと戯れてる暇があるなら、もつと声出して楽しめ」

「そうだよー！ペンライト、貸そっか？」

「いらねえし、ただでさえ暑苦しいのにくっつくな。てか、山吹さんは？誘うって言ってなかったか？」

「来て欲しかったのか？」

「そう言う言い方はしてねえ！／＼／＼」

沙綾の事も誘ったんだが、店も忙しいみたいだし今回はパスするみたいだ。一緒に行きたかったんだけどな。

それに……多分、前に話した時の違和感も関係してるんだろうな。音楽の話題を無意識に避けようとしている、あの態度が。

「りみりんはどうしたんだろうね？次、グリグリだよ？」

「姉ちゃんのごとこにでもいるんじゃないの？」

さっきまで一緒にいたはずなんだけどな？有咲の言うように、ゆり

先輩のところに行つたのか？それにしては、帰りが遅い気がするんだが……。

「あつ、出てきたよ……あれ？」

ステージの照明が、舞台袖から登場するバンドを照らし出す。だが、そこにいたのはグリグリではなく、さつき演奏を終えたバンド。出番はもうなかったはずなのだが、各パート毎に楽器を構え、今にも演奏を始めようとしている。

それに、俺の位置からわずかに見える舞台袖には、グリグリの次にライブを行うはずのバンドが。入念に話し合いをしているようだが、その表情は切迫している。

「ね、ちよつとグリグリが……！」

「マジかよ!? わかつた、すぐに準備しよ！」

何かあつたな。こうも立て続けにイレギュラーな事が起これば、観客だつてすぐに感づく。緊迫した空気の中、不安だけが募っていく。

「……グリグリに何かアクシデントがあつたな」

「何があつたんだろう……？ わかんないけど、とにかく行つてみようよ」

「行つてみようつて……私たち一般客だぞ!? 牛込さんはグリグリと関係あるから入れるんだろうけど、こつちには何の接点もねーじゃん！」

ステージの裏に回ろうとこの場を離れようとする香澄を、有咲が肩を掴んで止める。

確かに異常事態なことに変わりはないし、そうしている間にもさつきのバンドが演奏を再開した。グリグリにトラブルがあつたことは、有咲だつて気づいている。

だが、そんな思い付きだけで今の自分たちにできる事は何も無い。有咲は香澄に、そう言つてやりたいんだらう。

「でも、私たちはりみりんと知り合いじゃん！ 何とかならない？」

「私に聞くなー！ つーか、そんなんでどうにかなるんなら、何も苦労なんて……」

友達がスタッフと知り合いだからステージ裏に行けるなんて、虫が

よすぎるからな。一般客が裏方に回れる方が特別なんだから。

けど、それはこの場に香澄と有咲だけだったらの話だ。

「おいおい、俺がいる事を忘れてないか？一応、ここでバイトしてるんだぜ？俺は中に入れるし、ついでに香澄たちも中に入れられる」

「あ、そっか！頼りになるね、なーくん！」

「そうだったな……翔って、このバイトだったか」

俺は観客の間をすり抜け、会場を一旦出る。スタツフ用の通路を通り、俺はステージ裏に入った。香澄たちも後に続き、りみの姿を探す。

慌ただしく作業するスタツフたち。待機しているバンドのメンバーも、スタツフと念密な話し合いを重ねていた。

そんな中、不安そうにスマホを見つめ、ソワソワと落ち着きのない少女が。りみだ。俺たちは何があったのかを確認するため、りみの元に向かう。

「りみりくん！何かあったの!？」

「香澄ちゃん！翔君に、市ヶ谷さんも……!」

「グリグリじゃないバンドが出てきたから、気になってこっちに来たんだ。りみ、何があった？」

「それが……お姉ちゃんたち、まだ来てなくて……!」

「「えっ!？」」

やはりそう言う事か。何かトラブルが起こって、予定通りにこっちに戻ってこられていないってわけだ。となると、理由として考えられるのは……。

「確か、3年って沖縄に修学旅行だったな。なら向こうは台風で……それで飛行機が遅れたんじゃないか？」

「翔君の言うとおりだよ。さつき空港に着いて、こっちに向かってくるって連絡はあったんだけど……」

「それでこの騒ぎって事か。っーか、それってヤバいんじゃないの?」

ヤバいなんてものじゃない。どんな事情があっても、客は自分たちの時間を割いてライブを観に来てくれているんだ。その期待に応え

るのがバンドマンとしての務めだし、遅刻なんて理由が許されるはずがない。

バンドは客がいてこそだし、客を大事にしないバンドは……言い方は悪いが、バンド失格だ。まだ他のバンドが見つないでくれてはいるが、これで間に合わなかったら、どうなるかはわからない。オーナーだって、黙ってはいないはずだ。

こうなったら仕方ない。呑気にライブ観戦なんてしている場合じゃなくなったからな。俺は仕事モードに切り替え、スタッフに状況を確認して回る。

「すみません、ライブの状況はどうなってますか？」

「えっ、成川君？今日は休みだったんじゃない？……？」

「今はそんな事言ってる場合じゃないですよ。それより、グリグリが遅れているみたいですが……埋め合わせの方はどうなっているんですか？」

「前のバンドは追加で2曲演奏させて、次のバンドからはMCを伸ばして引つ張ってもらおうようにしている」

「けど、それじゃあ限界があるから、どうしたものかと思っていたんだ。よりにもよって、グリグリが遅れるなんて……」

「いつもはそんな事ないのに、今日に限って……」

スタッフの口から、次々と後ろ向きな言葉が吐き出される。こいつは相当疲弊しているな。愚痴の一つや二つ、言いたくなる気持ちもわからなくもない。

だが、ここで俺たちの心が折れるわけにはいかない。俺はスタッフに喝を入れるために、力強く言葉を投げかける。

「皆さん、弱音を吐いてる場合じゃないでしょう？バンドを全力でサポートするのが、裏方の役目なんですから。グリグリは今必死にこっちに向かっているのに、俺たちが先に音を上げるわけにはいきませんよ！」

「成川……」

「まずは曲と曲との間を広くとってもらおうようお願いしてください。演出。バンドの方だけじゃなく、音響や照明にも伝えてください。演出

一つで、わずかでも時間は延ばすことが可能ですから」

今いるスタッフに指示を出し、何とかしてグリグリが到着するまでの時間を作る。客だって、香澄たちだってグリグリのライブを楽しみにしていたんだ。その期待を裏切らせて、このまま終わるような真似だけはさせない。

「今から演奏曲を増やすのは難しいか……。可能なバンドっているかどうか、確認してくれませんか？」

「わかった。俺の方で確認して来よう」

「それから、MCでつなぐ話をしていましたが……。あまりバンド側に負担させるのも、本来の演奏ができなくなってしまうリスクがあるかもしれない。だから、MCを伸ばすのはなしです」

「えっ、どうしてなの、成川君？それだと時間が……」

「時間を稼ぐことも目的ですが、このライブはグリグリだけのものではありません。出演しているバンドがベストなパフォーマンスを行わなくては、観てくれる人だって満足はしない」

「……そう言う事ね」

「もし協力してくれるバンドがいるなら、話は別です。ですが、曲を増やすのはともかく、MCとなると話す内容を今から考える必要がある。それは負担になるかもしれないと判断したので……。その辺の事も、バンドの方に伝えてくれませんか？」

「了解。私の方で伝えておくわ」

よし、これでひとまずは落ち着いたか。そうしている間にも、次のバンドがステージに向かっていている。残されたバンドも少ないし、時間は限られている。

間に合ってくるといいんだが……。こればかりは、俺もどうしようもない。

「……へえ。結構仕事してんじゃん」

「これでも、オーナーのお墨付きなんでね。後は、グリグリが来るのを待つだけだ」

「うん……。お姉ちゃん、大丈夫だよね……？」

「大丈夫だよ！グリグリのみんなだって、こっちに向かっているんだよ

「?それなら、来るまで待てば——」

「ダメだね」

香澄の言葉を遮ったのは、普段は滅多に裏方には顔を見せないオーナー。騒ぎを聞いて、わざわざここに来たのか。

「ひやつ!?お、オーナーさん!?!」

「いつの間にいたんだよ……」

「客を待たせるなんて、許せるはずがない。何があろうとステージに立つ……。客は最高の演奏を期待してるんだ。期待を裏切るようなバンドはダメだ」

大方さつき俺が言ったような話だな。オーナーの登場で驚く香澄と有咲だったが、オーナーの言葉を聞いて、別の意味で驚きを見せる。「も、もし間に合わなかつたら……お姉ちゃん、グリグリはどうなりますか?」

「……二度と家の敷居をまたがせない」

「「そんな……!」」

オーナーのやり方に、非道だと感じる人もいるかもしれない。けど、それだけバンドに情熱を捧げているのが、オーナーなんだ。伊達にSPACEのオーナーなんて務めているわけじゃない。

「……りみ!ゆりさんに連絡取れるなら、今どこにいるのか確認してくれないか?それと、できるだけ急いでもらうように伝えてくれ!」
「う、うん!」

「成川か……。今日は休みのはずだろうか?」

「ええ、今日は客だったんですけどね。けど、トラブルみたいですし、人手も必要でしょう?」

「情けない話だが、そのようだね。すまない。向こうの音響を頼めるかい?」

「音響ですね。了解です」

俺は3人を残し、音響の方に向かう。新たに曲を増やすとなると、音響にフォローに入る必要があるからな。

「……お姉ちゃん」

心配そうにステージを見つめる、りみと香澄。有咲もまた、彼女な

りに心配している。そんな3人に気を向けながら、俺は持ち場に着いたのだった。

「オーナー！最後のバンドのステージ、終わりました！」

「……間に合わなかったようだね。仕方ない、片づけを始めるよ」

他のバンドも、なーくんたちもがんばって引き伸ばしたライブ。でも、ゆりさんたちグリグリは、最後までSPACEに来ることはなかった。間に合わなかった。

どうしよう。こんなの、納得できない。りみりんだって、グリグリがこのまま終わってしまうなんて嫌なはずだよ。

「……っ。お姉ちゃん……！」

スタッフの人たちも落ち込んでいる。みんな、悔しいんだ。有咲も、何もできずに呆然としているしかない。

何よりも悔しいのは、りみりんで。堪えきれずに、熱い涙がポロポロと零れ落ちていた。

「………」

私、何もできないのかな。このまま見ているだけで、ゆりさんたちを助ける事なんてできないのかな……？

昔から、ずっと。誰かを励まして、勇気を与える事なんてできなくて。今も、ほんの少しでも支えになることができない私が……憎い。

「……嫌だ」

「香澄？」

そんなの嫌だ。それじゃあ、私は何一つ――。

「……行かないと」

「って、ちよーおい、香澄！どこに行くつもりなんだよ!?!」

「ステージだよ！ゆりさんたちが来るまで、引き伸ばさなくちゃ!!」

私が、何とかするしかない。このまま終わりたいくはない。

「はあ!?!わけわかんねーよ!もう終わってんのに、お客さんだつて帰り始めてるのに……香澄が今ステージに出て、何かできる事なんてあるのかよ!?!」

「わかんないよ!何をしたらいいのか、全然思いつかないよ!」

有咲の言うとおりだから。何ができるかなんて、そんなの知らない。考えることは、小さい時から苦手だったから。

でも、これだけはわかるんだ。

「それでも、何もしなかったら……終わっちゃうんだよ!?!私は、絶対に嫌だよ!」

「香澄ちゃん……」

「だから行くんだよ!待っててね、りみりん。時間を作って見せるから!」

「うわ、ちよつと待ってて!あーもう、マジかよあいつ!」

有咲の言葉は、ステージに出たことで最後まで聞こえなかった。それよりも今は、大勢の人に注目されて、さっきまでは感じていなかった緊張が私を襲う。

こんな形で立つことになった、SPACEのステージ。あの時憧れ、立ちたいと願ったステージで……私は今、何ができる?

何も持っていない。このステージには一人きり。足がすくんで、動けなくなりそうだ。何か、何か言わないと……。

「こつ、こんにちは!私、と……戸山香澄です!」

「え、誰?」

「グリグリじゃないの?」

咄嗟に自己紹介したけど、お客さんも戸惑っている。うう、どうしよう。何かしないとイケないのに……。

あつ、そうだ！歌だ！楽器もないし、ランダムスターがあつたところ
ろで、まだちゃんと弾けない。えっと、私の知ってる曲は……。

「……きーらーきーらーひーかーるく、おーそーらーのーほーしーよ
〜」

「つて、きらきら星かよ!?おい、香澄！早く戻れつて！ヤバいから、マ
ジでー!」

あ、あれ〜……?お客様の反応がイマイチな気がする……。1人
で歌うのじゃ、限界がある……。

こうなつたら……。

「有咲、お願い！力を貸して！」

「ちよま、え、はあ!?!い、いやいや無理だし！絶対無理！」

「無理じゃないよ！有咲はこのままでいいの!?!」

「そ、それはよくないと思うけど……」

「だつたら一緒に！」

「おい、嘘だろお!?!」

もう仕方ない。有咲と二人で歌うしかない。力を借りてでも、何と
かするしかない。私だけじゃダメでも、どうにかなるかもしれない！

「服引つ張んな……っ!?!」

(げっ、お客さん多っ!?!すげーこっち見てるし、うちに帰りたい……
!)

「行くよ、有咲！」

「マジで言ってるのか……つて、何でカスタネット渡すんだよ!?!」

使えそうな物がこれしかなくて……。私は有咲にカスタネットを
強引に押し付け、深呼吸してマイクの前に立つ。

ちらりと目配せして、有咲を確認。渋々カスタネットを手に取って
いたが、やがて吹っ切れたみたいで……。

「くっ……うう、仕方ねーな！こうなつたら、もうどうにでもなつてや

る！どうぞ恥かくなら、最後まで付き合っただけでやるよ！」

「す、すみませんオーナー！あの子たち勝手に……」

「もう少しだけ、待ってやりな」

「え？しかし……」

「まさかステージに出ていくなんて思わなかったが……彼女たちの気持ちは本物だ。今だけは、汲み取ってやろうじゃないか」

香澄ちゃんがステージに飛び出して行って、もう5分になろうとしている。有咲ちゃんはカスタネットを片手に、香澄ちゃんはカスタネットの音に合わせてきらきら星を歌い上げている。

二人とも、一生懸命に頑張っているのに。大勢のお客さんの前で、恥ずかしいはずなのに。出来ることを全力でやっている。

「……………」

私は？このまま、何もできないままでいいの？かつこ悪くても、間違えても、今の香澄ちゃんは自分にできる事をしようとしているんだ。

『もつと前向きになれよ。香澄みたいに』

「……………」

翔君だって、私に言ってくれた。今の私は、自信を無くしているだけなんだって。だから、香澄ちゃんのようにまっすぐでいられることを、私自身が望んだんだ。そうなりたいって、心から思っていたから。香澄ちゃんも、有咲ちゃんだって頑張っているんだから。私だって、お姉ちゃんたちのために今できる事はきつとある。

私が変わるチャンスは、今なんだ。ううん。今しかないんだ。

「……………」

だったら、なろうよ私。香澄ちゃんみたいに、自分にできる事を

……素直に、できるように！

「やっぱグリグリ出ないのかな……。うーん、帰ろっかな……。？」

「ど、どうしよう有咲！お客さん、このままだと帰っちゃう……。！」

「そりゃ、きらきら星じゃ限界あるだろ！選曲だつて——」

「香澄ちゃん！有咲ちゃん!!」

私は愛用のベース……。お姉ちゃんからのお下がりで、ピンク色のベースを持って、ステージに上がる。香澄ちゃんたちも、私がステージに来るのは予想外だったみたい。

お客さんの視線が怖い。震えが止まらない。気を抜くと、足の力が抜けて倒れそうになる。思考が止まって、頭が真っ白になりそうになる。

でも、それじゃいけないんだ。だから私、今ここに立っているんだ。そして、自分の足でステージに上がる勇気をくれた、三人の力になるために。

「り、りみりん!?!」

「持つてるの、それベースか……。!?」

「お、お姉ちゃんも、グリグリのみんなも絶対に来る！そのために、私も……。やれることをやりたい！もう逃げたくない！」

「りみりん……。！」

「だから、一緒に……。お願い!!」

「……。うん！」

曲は、さつきも歌っていたきらきら星。香澄ちゃんはボーカルを。有咲ちゃんはカスタネットで合いの手を。そして、私は。

「……。きらきら星のベースアレンジか。やるじゃん、牛込さん！」

「ありがとう、有咲ちゃん。でも、今は……」

「わかつてる。最後まで付き合うって言っちゃったからな」

声を掛け合い、一つの音を完成させていく。私たちの想いが届いたのか、帰ろうとするお客さんもいなくなった。足を止め、私たちの演奏に耳を傾けている。

歌とカスタネットとベース。香澄ちゃんが目指しているバンドと

は、あまりにも遠くて、かけ離れているものだけど……。

(……楽しいね、香澄ちゃん)

香澄ちゃんと有咲ちゃん。二人と一緒に演奏するのが、めっちゃ楽しい。怖いけど……それ以上に楽しいんだ。この気持ちも、香澄ちゃんが、翔君が教えてくれた。

どうして私は、あんなにも臆病になる必要があったんだろう？逃げ必要なんであったんだろう？そんなもの、何にもなかったのに。前を向くことができ、本当によかった。後ろを向いてちや、絶対に見えていなかったから。

今こうしてステージから見える、二人と一緒に見ている景色は。

「……ん？翔の奴、何かこっちに合図みてーなの送ってね？」

音響の場所にいる翔君が、何か伝えようとしている。あれは……丸？両手で大きな円を作って、一体何を……？

「あつ……りみりん、あれ！」

香澄ちゃんが何かに気づき、指を指す。その先にいたのは、私たちが待ち望んだ姿で……。

「お待たせ！遅れてごめんね!!」

「お姉ちゃん！よかった……っ！」

「ありがとう、りみ。それに……二人も。後は私たちに任せて、ね？」
私たちと入れ替わりにステージに立ち、楽器を構えるグリグリのメンバーたち。お客さんの歓声が、ワアツと広がっていく。

「SPACE！まだまだ元気ありますかー！」

間に合った。グリグリのみんなが、お姉ちゃんが。もうダメかもしれないなかったけど、このライブに。

ありがとう。私に勇気をくれた、香澄ちゃん。それに有咲ちゃん、そして……翔君。

こんな私でも、前を向いて……でできること、ちゃんとできたよ……！

phrase 18 キミにもらったもの

「みなさん、本当にごめんなさい……!」

「私たちも勝手にステージに上がっちゃって、すみませんでした!」
グリグリのライブは無事に終わり、何とか今日のライブは成功した。一時はどうなるかと思っただが、観客は大満足した様子で帰っていった。

裏で働いていたスタッフも、ようやく一息つけたと言ったところ。後片付けは残っているが、今はやり切った達成感の方が大切だった。そんな中、グリグリのメンバーと香澄たちは、ちやうど楽屋に戻っていたオーナーに今回の一件について謝罪を入れる。結果こそ重要ではあるが、そこに行きつくまでの過程に問題があった。しっかりとけじめはつけなくてはいけない。

「オーナー、ご迷惑をおかけしてすみませんでした。アクシデントとは言え、私たち……」

「遅れてしまったのは、事実なので……」
「……………」

だが、オーナーは頑なに無言を貫く。気まずい空気だけが流れ、グリグリのメンバーの不安も徐々に大きくなる。

これまでも、自分たちと同じ状況でSPACEを去るバンドはいくつかあった。今度は、自分たちの番。そう思うほど、恐怖と悲しみでグリグリのメンバーの心は満たされていく。

これがラストライブになるとは、誰も思っただんかいなかったのに。

「ダメ、でしょうか。私たち、もうあの場所に……ステージに立てませんか?」

「……………」

「お願いします。まだ、立ってたいです。ライブを台無しにするかもしれないなかった私たちが、図々しく口にできるような事ではありません

が……」

「……………」

「…………っ、お願いです！オーナー！」

悔しくて仕方ない。ベースボーカルのゆりは、何とか復帰してもらえるように頼み込む。だが、それでもオーナーは答えない。揺るがない。

焦りでオーナーに詰め寄ろうとしたゆりだったが、バンドメンバーに止められて引き下がる。その様子を、同室にいた有咲とりみも黙って見ていることしかできない。

最早、覆らない。グリグリのSPACEからの追放は、決定的な事実となってしまった。

そんな中、口を開いたのは香澄だった。

「あ、あのっ！オーナーさん！」

「……………何だい」

「おい、香澄……………」

「グリグリの人たち、遅れちゃったけど…………でも、お客さんたちも喜んでました！みんな、キラキラしてたんです！楽しそうだったんです！」

「……………それで？」

「私も楽しくて、キラキラして…………そんなグリグリが好きなんです！私もバンドやりたいって思ってた、そのきっかけを作ってくれたのは、グリグリだったから！」

今日のライブ。そしてこのライブを観ているからこそ、香澄はグリグリをSPACEと言う場所から失わせたくはなかった。彼女たちは間違いなく誰かを笑顔にして、その姿に香澄自身も力を貰ったから。

何よりも、バンドと言う舞台を香澄に見せてくれたのは、グリグリだった。彼女たちこそが、香澄の原点だった。

キラキラドキドキできるもの。ずっと探していた答えをくれ与え

てたのは、この場所であり……彼女たちだから。そのため今、香澄は声を上げる。

「だから、SPACEから追い出さないでください！誰かを笑顔にするだけの力が、グリグリにはあるんです！」

「香澄……」

「香澄ちゃん……」

香澄の熱のこもった言葉も、涼し気に顔色一つ変えずに静聴するオーナー。手ごたえはあるのか、それともないのか。香澄にも焦りの色が見え始め、再び口を開こうとした時だった。

「……客が満足して帰ったのなら、それでいい。あんたの言う通り、力のあるバンドをこのような形で追い出すのは私としても不本意だ」

「そ、それじゃあ……！」

「けど、次はないよ。……気をつけな」

一言だけ言い残し、オーナーは楽屋を出て行った。グリグリのメンバーは安堵の色を浮かべながら、その背中に感謝の言葉を投げかけた。

最悪の事態を逃れることに成功し、香澄もりみと手を取り合って喜ぶ。もし追放となっていたら……想像したくもない。

「ゆりさんたち。許してもらえてよかったね！」

「うん！香澄ちゃんや有咲ちゃんのおかげだよ！」

「は、はあ？べ、別に私は何もしてねーし……」

「あれ？有咲照れてる？」

「そ……そんなんじゃないし！」

そう強がってはいるが、有咲は明らかに頬を真っ赤に染めていた。照れ隠しと言うやつだろう。

「つーか、私は、香澄に乘せられてステージに上がったただけだ。けど香澄は、あんなアウェイの中でもステージに上がって、さつきもオーナーに真っ向から言いあってただろ。私に何かできたって言うんなら、間違いなく香澄がいてくれたからだ」

「あ、有咲……」

「……っ、あ！ちよ、今のはなんつーか……こ、言葉のアヤだ！真に受

「けんな！っーか忘れろ！／＼／＼」

「有咲〜！」

「ちよ、抱き着くな！牛込さんも見てないで、早く助けてくれよ！」

「あ、あはは……」

かえって心配になるほど顔を赤く染める有咲と、嬉しきで抱き着く香澄。余計に有咲の赤みが増し、りみは苦笑することしかできない。

だが、そんな二人に勇気をもらって、自分を変える一步を踏み出すことができたのは事実だ。りみはじゃれ合う二人をほほえましく見つめていた。

「ちよつとあなたたち、もう二度とあんなことしちやダメだよ！」

「わあ!?ご、ごめんなさい！」

「結果的にグリグリのライブができて、お客さんが喜んでくれたからよかつたけど……ダメなものはダメだから！わかつた!?!」

「は、はい！もうしません！絶対に!!」

と、そこにSPACEのスタッフからの説教が入る。だが、グリグリのライブの成功と言う功績も配慮してか、少しきつめにお灸を据えるだけで終わった。

片付けのためかスタッフの人は楽屋を出ていき、残ったのは香澄たちとグリグリのメンバーだけとなる。

「あ、あはは……怒られちゃったね」

「何とかなったからいいけど、普通に怒られるに決まってるだろ！大体、何でお前きらきら星なんだよ!?もつとまともな曲とかねーのかよ!?!」

「だ、だつて……キラキラする曲つて言ったら、きらきら星くらいしか……」

「レパートリー少なつ!?そんな事なら——」

「あの……戸山さん、だよな?ちよつといいかかな?」

声をかけたのは、グリグリのギターボーカルのゆりだった。他のメンバーもゆりの後ろで、香澄たちに熱い視線を送っている。

「は、はい！何でしょう、ゆりさん！」

「そんなに固くならなくてもいいよ。りみから話は聞いてたよ。周り

を振り回すほどに明るくて、何にも気にしないで突っ走る、元気な同級生がいるって」

「お、お姉ちゃん!?その話、ここで言わなくても……／＼／＼」
香澄の事を褒め称えていたことがばれて、恥ずかしさで顔を隠すのみ。香澄も嬉しそうにしているのを見て、ゆりは話を続ける。

「あはは、ごめん。それで、戸山さん。さっきはありがとう。ライブが終わってからもうステージで時間をつなげてくれようとしたのって、戸山さんなんだよね?」

「はい!私にも何かできる事ないかなって、とにかく何かしたくって。そうしたら、身体が先に動いてて……何にも考えてなかったんですけど、上手く行きました!」

その姿勢に、有咲もりみも心打たれた。だから3人で時間を稼ぐことができた。きっかけは、全て香澄から生まれていた。

「そうだったんだ。本当に嬉しいよ。もう少しで私たちは、このSPACEに立てなくなるところだったから。そんな私たちを助けてくれたのは、戸山さんだよ」

「ゆりさん……」

「それに二人も、本当にありがとう。感謝しても、しきれない」

深々と、ゆりは香澄に頭を下げる。ライブを続けられるかどうかの瀬戸際だった。トラブルとは言え、一瞬で終わってしまうような事態だった。

その危機を救ってくれたのは、有咲にりみであり、間違いなく香澄だ。後ろにいたメンバーも、香澄たち3人に対して頭を下げた。

「お、お姉ちゃん……!」

「そんな、頭なんて下げないでください!下げなくちゃいけないのは、私の方なのに……」

「えっ?」

謝罪、感謝。そんな気持ちなんて、彼女たちから貰っていい物じゃない。むしろこっちから返さなくてはいけないんだ。

先に貰ったのは、香澄の方だから。

「……私、小さい頃に星の鼓動を聞いたことがあるんです。キラキラドキドキしていて、その時感じたものを、ずっと探していたんです」
「星の、鼓動……」

「でも、前のグリグリライブで私、出会ったんです！キラキラできるものに！それが、バンドだったんです！」

「それって、さつきオーナーに言っていた……」

「そうです。私、やっと見つけたんです！まだギターも弾けないし、メンバーだって全然ないけど……でも！バンドがやりたいって、その気持ちだけは譲れない！それだけは確かなんです！」

メンバーも揃って、ギターも上手に弾けるようになって。バンドとして、ライブして。今度は、自分の手でキラキラして見せる。

それがいつの話になるのかは分からない。けど……絶対にこの思いは消させない。キラキラしたいから。有咲と、りみと。

「その気持ちを与えてくれたのは、ゆりさんなんです！だから……ありがとうって、その言葉を言うのはゆりさんじゃない」

頭を下げる。難しいことを考えるのが苦手な香澄でも、できる感謝の気持ちを。最大限に込めて。

「私につーキラキラドキドキできることを与えてくれて……ありがとうございます……」

ゆりは驚いているようだったが、香澄は構わず頭を下げていた。そんな香澄に、しばらくしてゆりが優しく声をかける。

「……顔を上げて」

ゆつくりと顔を上げる。そこには、ゆりの差し出した右手が。香澄はハツとして、ゆりに視線を移した。

「戸山さんの気持ち、すごく嬉しい。私たちの音楽で、夢を与えることができたんだから」

「ゆりさん……」

「だから、そんな私たちにまた……誰かのために、夢を与えられるチャ

ンスを与えてくれたことは、ちゃんと感謝として伝えておきたいんだ。ありがとう、戸山さん」

互いに救い、救われて。そんな2人が今、こうして向かい合っている。香澄はゆりの右手を握り返し、その気持ちに答えた。その握手に、2つの意味を込めて。

握った手から感じる温もりは、香澄の心を温める。こんなにも優しく、暖かな人からキラキラを貰えたこと。それが何よりも嬉しくて。

交わしたその手が離れるまで、香澄はその余韻に浸り続けていた。

「はあ……。これで、本当に終わったって事だな」

それからしばらくして、グリグリのメンバーはSPACEを後にした。オーナーには改めて挨拶に行き、これからは反省会も兼ねて近くのアミレスに寄っていくらしい。

香澄たちも誘われたが、さすがに邪魔はできない。それに、いつまでも出歩くには遅い時間だ。翔はまだ片付けに追われているらしいので、3人で先に帰ることにした。

「ありがとね、有咲ーりみりんもー」

「巻き込まれた時はどうしようか本気で焦ったからな！めちやくちや恥ずかしかったんですけど!？」

「えへへ……。でも、有咲がいてくれたから助かったよ。ありがとね、有咲」

「……つ、そ、そんな真面目にお礼言われると、恥ずかしいだろ……」

外は暗くてよくわからないが、香澄にもりみにも、今の有咲の顔がどうなっているのかを想像するのは容易かった。そんな様子をほほえましく思いながら、りみは口を開く。

「でも、二人のおかげでステージに立てた……。怖かったけど、楽しかったよ」

「うん！私も、りみりとステージに立ててよかった！ありがとう、りみりん！」

「香澄ちゃん……！」

怖くて、何ができるのかもわからなくて。そんな自分と一緒にステージに立ち、演奏とは呼べないかもしれないライブができたことを喜んでくれる人がいる。胸の中で、何かが広がってりみを満たす。

そんな香澄の言葉で、りみは決断した。迷っていたバンドへの思い、まだはつきりと伝えていなかった思いを打ち明けるのは、今この場所なのだ。

「……あの、香澄ちゃん」

「うん？」

「前に言ってた、バンドの話だけ……。もし、まだ間に合うのなら、私も一緒にバンドしたい！こんな私でも、香澄ちゃんのバンドに入れてくれないかな……？」

「りみりん……！」

もう一度、バンドに。諦めかけていた言葉、そして待ち望んでいた言葉をりみの口から聞けた香澄は、嬉しさのあまりりみに思いつきり抱き着いた。りみは倒れそうになるが、それを有咲が受け止める。

「か、香澄ちゃん！ちよつと苦しいよ〜！」

「ちよ、危ねえだろ香澄！もうちよつと考えろ！」

「ごめ〜ん！でも嬉しくって！りみりんがバンドしたいって言ってくれたこと！そんなの、断る理由なんか何も無いよ！」

「それじゃあ……！」

「バンド、一緒にやろう！りみりんが一緒なら、私も心強いよ！」

りみの気持ち。それを香澄に伝えることに成功し、ようやく香澄たちの仲間入りを果たすことができた。香澄、りみ、有咲。少しずつ、バンドのメンバーが集まり始めてきた。

「ありがとう、香澄ちゃん！私、めっちゃ嬉しい！」

「私もだよ！よくし〜りみりんもバンドに入ってくれたし、次は文化

「祭だね！」

「……はあ!?ちよ、文化祭はどっから出てきたんだよ!?!」

「ギターを返してもらいに生徒会室に言った時に聞いたんだ!申請すれば、体育館でやるライブステージに出られるんだって!」

「あんどきかよ……」

文化祭のクラスの出し物とは別で行われる、有志のライブステージ。香澄の話によると、例年盛り上がりを見せる目玉企画らしい。

香澄はそのライブステージに、自分たちのバンドで出場しようと考えていた。折角バンドを組むのだから、人前で演奏しなくては意味がない。

「だつて……。お前、まだろくにギター弾けないんじゃないよ!?!」
「のかよ」

「大丈夫!いっぱい練習すれば、きっと上手く行くよ!」

「本当か!?つか、私まで頭数に入れてねえだろうな!?!まだバンドに入るとは一言も言つてはー!」

「一緒にがんばろ!有咲、りみりん!!」

「人の話は最後まで聞けよな!?!」

有咲の怒号が夜道に響き、一拍遅れて2人の笑い声が木霊する。それがおかしくて、有咲もつられて苦笑する。

「えへへ……うん!香澄ちゃん、私も頑張るね!」

「りみりくん!ほら、有咲も!」

「だからなあ……」

目指すのは文化祭。最初の目標が生まれ、香澄は決意を新たにすのだった。

「……………」

声が、聞きたい。

「……………」

もう一度、笑い合いたい。

「……………」

あの頃のように、戻りたい。

「……………ねえ」

その声に答えてくれる人は、ここにはいない。

「また、歌いましょうよ……………」

目の前に横たわる少女は、何も口にしない。

「笑顔にする事の意味を覚えてくれたのは、あなたじゃない……………っ！」

それでも。悲痛な声は、どこにも届かない。

「……………」

虚ろな目は、何も映さず。そんな目を見つめる少女は、返事を聞かせてくれる時を待っている。

「……………美空」

窓から吹く風が、悲しげに瞳を揺らす金髪の少女を包む。

その視線の先にいる少女も、銀色の髪をなびかせていた。

phrase 19 友のための約束

「はあっ……。疲れたな……」

グリグリのライブが終わってから約1時間半。俺は疲れた体に鞭打ちながら、ステージの片づけを手伝っていた。

非番とは言え、今日はアクシデントが重なって大変だった。休みだからと言う理由だけで、自分だけ先に帰るわけにもいかないからな。手伝うのは当然だ。

それにしても、何とかライブが成功したようでよかったな。間に合わないかと思っただけど、上手く時間をつなげることができたし。

途中で香澄がステージが上がっていったときは、俺もどうなる事かとヒヤヒヤしていたけどな。

で、現在俺はSPACEの休憩室のベンチに腰を下ろしながら、ぐったりとしているところ。何とか仕事を終わらせ、一息ついていたというわけだ。

いい汗はかいたが、さすがに疲れる。休日返上してるんだからな。

「お疲れ、翔」

「おっ、その声は……」

腰まですらりと伸びたロングヘア。スタッフ用の作業着に身を包んではいるが、スタイルは抜群で清楚な印象を与える少女。互いに知っているのは、スタッフ仲間と言うのもあるのだが……。

「たえか。そっちも仕事終わったのか？」

「うん。今日は翔のおかげで助かったよ。ありがとう」

花園たえ。俺と同じくSPACEのバイトで、花女の生徒。と言うか同じクラスの知り合いだ。最初に話したのはSPACEでの事で、そこから同じ学校だと知った。でも、学校ではあんまり話してない気がするな……。

「それにしても、グリグリがライブに遅れるなんて思わなかったな。スタッフもかなり慌ててただろ」

「グリグリはSPACEじゃ人気のバンドだから。来ないなんて知ったら、お客さん悲しんじゃう」

ふう、と息を吐き、たえは俺の横に座る。汗ばんだ髪がひらりと舞い、俺の鼻腔を刺激する。

と、この花園たえと言う少女だが……見た目は割と可愛らしい部類に入ると思う。いっそのこと、モデルでもやらせたら人気に火が付くこと間違いなしだ。

まあ、見た目は、だけどな……。

「そうだな。それより、何か飲み物奢ってやるぞ」

俺はブラックコーヒー片手にくつろいでいたが、たえは今さっき来たばかりだ。喉だつて乾いているに違いない。そう思い、俺はポケットから財布を出したんだが……。

覚悟しておけよ？たえの本領は、ここからだからな？

「え？何で？今日って何か記念日だった？」

「い、いや違うけど……」

「私、誕生日まだまだ先だよ？」

「お、おう。知ってるよ。前に聞いたし」

「じゃあどうして奢ってくれるの？」

「……………」

こいつ、香澄以上に言動がわからない。その上、ド天然。そこから繰り出されるボケは、ベテランの芸人でも全く見当がつかないはずだ。タイミングすら予測できないからな。

「……今日は一日中バイトだっただろ。アクシデントもあったし、お疲れさまって事で」

「そう言ってくれないとわからないよ。翔のイジワル」

今のは俺が悪かったのか？よくわからないが、このままだと話が進まないの口には出さずにスルーする。

「……で、何にする？コーヒーか？微糖のやつ」

「……………？ビトウさんって誰の事？」

「逆に誰だよ」

ほら。進めようとしても、ちよつと気を抜いたらすぐにこれだよ。本人も無自覚つてのがどうしようもない。ま、面白いと言えば面白いんだけどさ……。

「だって、ビトウの奴って……」

「苗字じゃないんだよ。佐藤の奴、調子乗りやがって……とかそう言う言い回しをしてたんじゃないんだよ。コーヒーは微糖か無糖か聞いてんだよ」

「え？砂糖はどこに行ったの？今、砂糖の奴って」

「……………」

が、我慢だ俺！今のところ、飲み物奢りましようか？ってところから全く話が進展してないのはわかっているけど！

たえはこういう奴なんだって、俺はSPACEでの付き合いでよくわかってはいるはずなんだ！

「……砂糖は忘れる。で、コーヒーは？微糖なのか無糖なのか」

「オレンジジュースがいい」

「……ああ、はい。わかりました」

もう内心ですらツツコミを入れる気力も起きないので、俺は休憩室にある自販機でオレンジジュースを買ってやる。取り出したジュースをたえに放ってやると、キャッチしてすぐに飲みだした。やっぱり、今日は疲れていたんだろうな。

「うん、おいしい。でもやっぱりコーヒーの方がよかったかな」

「後から注文するな」

「ねえ、翔」

「……何となく言いたいことは察しがついてる」

「よくわかったね。じゃあコーヒー一口ちよーだい」

でしようね。こういう時のたえはわかりやすいからな。新しくコーヒー買うのも面倒だし、仕方ないから俺の飲みかけのコーヒーをたえに渡す。

「ほい。全部飲むなよ？」

「それってフリ？」

「なわけないだろ。ちゃんと残しておけ」

「はい。じゃあいただきます」

そう言うのと、たえは口をつけて一気に飲み干し……一気に？

「つて、おい！全部飲むなって言っただろ！」

「ん〜？……大丈夫だよ。翔が飲む分は残してあるから。ほら」

軽く肩をひっぱたき、俺はたえがコーヒーを飲むのを阻止する。当の本人はケロッとした顔で、俺に缶コーヒーを渡してきたが……。

「おま、残ってはいるけど後ちよつとじゃねえか！」

「残したのは残したから、問題ないでしょ？」

「限度があるだろうが……」

ないわけじゃない。でもあるわけでもない。何とも微妙なラインだが、残っているなら飲んだ方がいいに決まっている。

俺は缶に口をつけ、一気に上半身を傾けてコーヒーを飲み干し――

「あ、間接キス」

たえの一言で、思いつきりむせた。

「はあっ、はあっ……。し、死ぬかと思ったぞ」

「大丈夫？誰がそんなひどいことしたんだろう？」

「それわざと言ってるのか？」

たえのせいで生死の境をさまよいそうになった俺は、ようやく落ち着きを取り戻した。狙ったように変な事言いやがって……後で覚えてろ。

当の本人は呑気にジュース飲みだすし。人のコーヒーほぼ全部飲んでおいて、たえって奴は……。

「……………」

あ、そうだ。折角たえがいるんだし、あの話でもしておくか。前から言おうと思っていたんだが、時間が取れなかったからな。

「なあ、そういうやさ、たえ」

「どうしたの？ジューズ欲しい？」

「いらないます。確か、たえってギター弾いてるんだったよな」

「そうだよ。それがどうかした？」

たえがギターを弾いている話は、前に本人から聞いたことがあった。昔からギターをやっているらしく、SPACEにギターを持ってきて、演奏している姿を見せてもらったこともある。

その腕前は、プロにも通用すると思わせるほど。美羽も技術はあるが、数段は上だ。美羽が聞いても、同じ感想を持つに違いない。

そんなたえだからこそ、俺には話したい事があった。優れたギターセンスを持ったえにしか頼めない事が。

「実は、俺の友達にギターを始めた奴がいるんだ。けど、そいつ楽器の知識なんてからつきしでさ」

香澄の事だ。有咲からギターを譲ってもらったとは言え、完全に初心者だ。一応りみもいるが、本職はベースだ。ギターの事を手取り足取り教えられるかと言ったら、正直分らない。

そこで、俺は香澄のためにも指導役となつてくれる人が必要だと考えた。その役として最適なのが、たえだった。俺の知り合いで、一番ギターの技術と知識に精通しているのは、たえだからな。

「ふくん。どんな子なの？」

「底抜けて明るい、元気だけが取り柄な奴。ってか、俺たちと同じクラスなんだけどな。戸山香澄って知ってるだろ？」

「戸山……うん、知ってる。あの子、ちよつとおかしいよね」

お前も相当な変人だけだな。

「機会があれば、あいつにギターの事教えてやってくれよ。香澄、本気でバンド始めるつもりだからな。俺も協力してやりたいんだよ」

「おお……」

「って、何だよその反応は」

「翔って、本当に優しいなって思ってた。私が初めてここでバイトする事になった日も、翔は優しく仕事教えてくれたよね」

俺は中学からここでバイトしているから、たえとは先輩後輩の間柄だ。まあ、今となってはそんな事気にもしていないけどな。

「いつもサポートしてくれて。誰にだって優しくして。そんな翔の事、とっても頼りにしてる」

「そんなの当たり前だろ。同じSPACEの仲間だし、学校だって一緒のクラスなんだからな。もちろん、俺だって頼りにしてるからな」
「翔……ふふっ。私、やっぱり翔の事、好きだな」

「そっか……は？」

い、いやちよつと待て。軽く聞き流していたが、今さらつととんでもないこと言わなかったか!?何か真剣な雰囲気になったかと思ったら、好きとか何とかって……。

たえは何食わぬ顔でジューズ飲んでるし、意図が全然わからない。普通に話の流れってだけなのか、それとも本当にそう言う気があるのか？

でも、雰囲気は結構ガチだったし……どう受け止めたらいんだよ!?

「私、何か変な事言った？それに翔、顔赤いよ？熱でもある？」

たえが俺のおでこに手を当てて、熱を確認してくる。何だ？わざとなのか？ほんわかとした温もりを感じ、もう軽くパニックだ。

「な、ないって！それより、さっきの話だけ……」

「え？ああくそうだった。ギター初心者戸山さんの事だよ」

とりあえず、回避成功。俺、たえに気があるとかじゃないんだけどな……。でも、一応男だし、見た目は可愛いし、告白紛いな事されたら、ちよつと意識はしてしまう。

「ああ。だから香澄のギター上達のために、付き合ってもらえないかって」

「うん。私は大丈夫。ギターを弾きたい気持ちさえあれば、私はまわりついてでも協力するよ」

「それは香澄もさすがに……。いや、案外乗ってきそうだな……」

だが、これで香澄のギターについては一安心だ。たえがいてくれるなら、きつとすぐに上達できるだろう。

そろそろ、俺は俺でやらなくてはいけない事があるしな。

「戸山さんって、どんなギター使ってるの?」

「ん? ああ、確か……ランダムスターって名前のギターだったな。星の形をした、特徴的なギターだったはずだ」

「特徴的……。それに、変な性格……変態って事?」

「……ある意味で」

「じゃあ、戸山さんは変態なんだね?」

「いや、そう言う事じゃないからな?」

そもそもたえの中の変態の基準がよくわかっていないんだけどな。香澄が聞いたたら、違うと言い張るに違いない。

「とにかく、香澄の事はよろしく頼むよ。俺、ギターはあんまり詳しくないし」

「合点」

どんなノリだよ。時代劇か。それはそれとして……ここは引き受けてくれたんだ。たえに任せておくことにしよう。

「ところで、さつきからずっと気になってたんだけど」

「うん? どうした?」

「今日って、翔休みだったよね? 何でいるの?」

「ライブの客として来てたんだよ。それでこの異常事態だ。手伝いに回ろうって思うのは当たり前だろ」

「何だ、そうだったんだ。私、てつきりずっと働いてないと満足できない体になっちゃったのかと思ったよ」

「……………」

「……今日はご苦労だったね」

「いえ。あのまま黙ってライブを観てるなんてできませんよ。むしろ集中できないです」

それからしばらくして、俺はSPACE内のある部屋にいた。たえや他のスタッフは既に帰っており、俺と目の前のオーナー以外には人はいない。

そこは、オーナーの私室。と言っても、SPACEの資料やライブの記録などが保管されている倉庫みたいなものだ。他は最小限の家具や事務用具しか置いていない。意外と殺伐とした場所だった。

俺はそこで、オーナーの腰掛ける机の前に直立し、今日のライブについての話をしている。オーナーはいくつかの資料を並べ、目を通してきているようだったが。そんな事は気にせず、俺はオーナーの望むままに話を進める。

どうしても目に入ってしまう、机の上の写真立てを横目に。

「まさかアクセシデントが起こるとは、予想外だったよ。それもグリグリ関連とは。おまけもついてきたようだしね」

「と言うのは……グリグリの遅延と、ステージ乱入の件ですか？」

「ああ。彼女たちのしたことは本来あってはならないことだ。客を待たせ、ましてやステージに一般人を立たせてしまうとは。これでは私も、立派な笑いものだよ」

結末が少し変わっていただけで、客の期待を大きく裏切ることになってしまった。その瀬戸際に、今回の一件は立たされていた。

ライブとは、自分たちの独りよがりでは決して達成しないものだ。客がいて、聞いてくれる人がいて、初めて達成されるものだ。

その期待を蔑ろにしてしまう事態になるほどに、追い詰められていたのは事実。

「だが、ステージに上がっていった彼女たちのおかげで、ライブが成功したのもまた事実だ。咎めようにも咎めがたいアクセシデントだった

よ」

オーナーは苦笑して、今日のライブの資料をまとめてファイリングする。そのファイイルを脇に除けると、再び俺に向き合った。

「私もあの場にはいた。止めようと思えば、いくらでも止められたさ。それでも止めようとしなかったのは……あの子たちの事を、止めたくなかったからかもしれないね」

「オーナー……」

「あの子たちは……何なんだい？前にも、成川と一緒にここに来ていたはずだが」

「俺と花園の通う、花女の同級生です。3人共、俺とは面識がありません。最近バンドを始めようと行動しているみたいで……」

「ほう？バンドを……」

オーナーも根っからのバンドマンだ。その点には食いついてきたか。過去については知らないが、バンドの経験でもあったのか？

「ところで……例の件についてだが、順調なのかい？」

「明日から行動に移そうかと考えてます。これまでは少し、私用で動けませんでしたから」

香澄の事もあったからな。結局、どう話が転んだのか、蔵の掃除までする羽目になったけどな！

「なのでその……今のところは、状況に変化はありません。と、言いたいところなのですが」

その瞬間、さつきよりも激しく、俺の言葉に食いついてきた。身を乗り出すほどの目に見えた変化はなかったが、目つきが変わった。明らかに興味を持っている。

「俺は、彼女たち……戸山香澄たちが有力ではないかと考えています」

「戸山香澄……そうか。それがあの子の名前か。それはそうと……やはり、考えることは同じみたいだ」

お？どうやらオーナーも同じ考えに至っていたみたいだな。香澄の事を止めなかったのも、その辺りが関係しているのだろう。

「彼女たちの演奏……いや、演奏とも呼べないお遊戯だった今日の乱入……。話にもならないものだよ」

「それはまあ……彼女たちも、初心者ですから」

「でもね、気持ちは伝わってきたよ。バンドなんて呼べるものじゃないが、見合うだけの気持ちは備わっていた。特にボーカルの……戸山香澄、だったな？」

悪い側面じゃなくて、いい側面を見てくれたんだな。仮にもオーナーだし、人を見る目は十分のようだ。

「成川はいなかったが、ライブが終わってから言われたよ。誰かを笑顔にするだけの力を持ったバンドを、この場所から追い出す真似なんかしないでほしい、とね」

「香澄が、そんな事を……」

「それだけじゃない。カスタネットの子も、ベースの子も、あの子たちの行動には何かを感じたよ。人の心を奮わせるような、そんな何かを」

俺もだ。あんな性格だが、香澄は人を動かすことができる何かがあると信じている。だから、香澄の周りにはその人柄に惹かれた人が集まってくるんだと思う。

「……彼女たちなら」

「俺も……そうであることを信じたいです。彼女たちが、オーナーの希望であってほしい」

ふと、オーナーが机に置いてあった写真立てを手に取る。そこに写るのは、少し若さの残る女性。

そして、その脇で笑顔を振りまく……1人の少女。

「……絶対に、何とかして見せます」

「私も、成川には期待している。あの子たちにも。だからこそ、成川には頑張ってもらいたい。そのために……」

不意に、オーナーが身を乗り出してくる。そして俺の耳元に近づき、周囲に人がいたのならだれも聞こえないほどの声で――。

「あの学校へと、お前を入学させたのだから」

「……わかっています」

そう低く、俺に対してつぶやいた。

「……………」

俺がああ学校……女子校である花咲川女子学園へと入学した理由。その根底には、二つの理由がある。

一つは、俺自身が求めた理由。そしてもう一つは、オーナーが求めた理由。

両者の思いがせめぎ合う中、俺は花女に……唯一の男子生、特務生として入学したんだ。

「……俺が」

果たすべき使命。俺は改めて心に刻み付けながら、明日からの行動を考えるのだった。

phrase 20 変態の定義

「大丈夫か？美羽」

「うん！気分もスッキリ！もう学校行けるんじゃないかな？」

「ダメだ。明日までは我慢してろ」

「ちえく。つまんないのく」

美羽が病院に運ばれた日から、今日で1週間が経つ。母や俺も心配しながら看病していたが、特に目立った発作も起こることなく、美羽も元気に過ごしている。

とは言え、何があるかは分からない。母は学校に行かせてやろうと言っていたが、俺が拒否した。万が一もあるし、せめて1週間は様子を見ておきたかったからだ。

過保護だと思うか？そうかもしれないな。でも、それくらい美羽は大切に、俺にとってはかけがえのない存在なんだ。

かわいいそうな妹だから、少しでもいいから力になってやりたいんだよ……。

「そんな事よりお兄ちゃん？もう学校に行く時間じゃないの？最近家出るの早いじゃん」

自分の事なのにそんな事で片づけるなよ……。それはともかく。

「今日は香澄と一緒に登校したいって言うから、まだ家を出ない。迎えに来るみたいだからな」

「ふくん。だったらお兄ちゃんが迎えに行けばいいじゃん」

「香澄が来たって言ったんだよ。何かよくわからないけど」

「……ふくん」

香澄も明日香も、美羽の事は心配してくれてたな。今日会ったら、明日には学校に戻るって教えてやろう。

「……ところでさ、お兄ちゃん」

「うん？喉でも乾いたか？」

「香澄さんとは……今どんな感じなの？」

一瞬何を言われたのかわからず、俺は美羽の横になるベッドに足をぶつける。ゴツンと鈍い音がして、俺は痛みで足を抑える。

「あつ、動揺してる！もしかして、何か進展がおありのようで……!?
キヤー！羨ましいー!」

「な、何言ってるんだ美羽!?香澄とは何もねーよ!／＼／＼」

「そんな事言っちゃって〜?顔が赤いですよ?お兄ちゃん?」

ぐっ……この妹は、朝から何を言い出すんだ!?心臓に悪いし、ニヤニヤしてるのが本当腹立つ!

「だから違うって言ってるだろ!?大体、何で俺が香澄の事をそんな目で見ないといけないんだよ!」

「え〜?長年の関係だし、あ〜んな事やこ〜んな事をするような、大人の関係に近づいていても……」

「美羽、何か今日変だぞ?!いつもこんなだったか!」

「あー!今私の事変な人みたいに言った!ひっどーい!お兄ちゃんのイジワル!」

え、どうして俺の方が責められないといけないんですかね?誰か教えてくれ。

「うるさいな!香澄とはそんな関係じゃない!ただの幼馴染だし……
／＼／＼」

「へ〜?でも、香澄さんって一緒にいて楽しいし、可愛くてスタイルもいいじゃん!身近にそんな子がいたら、特別な感情を持ってもおかしくないって!隠す事なんかないよ!」

「ば、バカな事言うな!香澄をそんな風に見た事なんて、一度もねーよ!
!／＼／＼」

くそ……そんな気なんて全然ないのに、美羽のせいでどうも意識してしまう。ただの幼馴染で、空回りするほどの元気っ子。俺の中では、それくらいの認識しかない。……はずなのに!

だってそうだ。あいつにはいつも振り回されて、苦勞する事ばかりだ。厄介事に関する記憶の方が強いくらいだし、よかつたことなんてまず数えるほどしかない!いや、それは香澄にちよつと失礼か。

それに、香澄も香澄だ。俺の事をそんな……特別な意識を持っているとも思えない。あの香澄だぞ?異性を好きになるなんて、まだ子供みたいな香澄には到底早い。恋愛感情なんて知りもしないだろう。

ずっと一緒にいたし、仲もよかつたし。当たり前のように隣にいたから、今更何かを感じることも俺にはない。

「……………」

でも、香澄と一緒にいるのは別に悪い気はしない。何だかんだで、香澄はいつも楽しそうで、眩しい笑顔を俺に向けてくれて。

そんな香澄の姿を見ているのが、俺にはとても楽しくて…………。

「あれ〜？また顔が赤くなってるよ〜？」

「……………!!／／」

頼むから止めてくれ。これじゃあ、俺が本当に香澄に恋してるみたいじゃねーか…………。

「なーく〜ん！待たせてごめ〜ん！学校行こ〜！」

「ほら、行つてきなよ。彼女さんが迎えに来てくれたよ〜？」

「だから、彼女じゃねえよ〜！」

俺はからかう美羽に見送られ、美羽の部屋を出る。自分の部屋に置いてあった鞆を持ち、急いで玄関に向かおうとして…………俺はまた、自然と美羽の部屋に視線を向けていた。

「……………」

俺は、美羽を守らないといけない。病気で苦しむ妹に、これ以上の苦しみを与えないためにも。

俺が、守るんだ。

「……………そうだ。俺が」

誤解させないように言うが、母への美羽の接し方が悪いわけではない。美羽が病院に運ばれた時だって、心から涙していた。俺と同等に愛情を注いでるんだ。実の娘なのだから。

なら、俺が美羽を守る理由は何なのか。

「おはよう、なーくん！」

玄関に向かうと、そこには身支度を整え、ランダムスターを背負つ

た香澄が。いつも通り、髪型は星をイメージしたものになっている。どう見ても猫耳だけだな。

俺は靴を履きながら、香澄に挨拶しようとして……。

『彼女さんが迎えに来てくれたよ?』

「……あ、ああ。おはよう香澄」

さっきの美羽の言葉を思い出して、言葉に詰まってしまった。

「あれ?どうしたの、なーくん?具合でも悪いの?」

「いや、何でもないんだ……ハハ」

美羽の奴……後で覚えているよ!?相手はあの香澄なのに、どうして

こうもドキドキしないといけないんだ!?

「くそ……美羽が余計な事言うから……」

「みーちゃん?」

「あ、いや、何でもない!何でもないんだよ、ハハハ!」

「絶対何かあるよ!なーくん、今日なんか変!」

香澄に変とか言われたら、もうダメなんじゃないか!?これも全て、

美羽が意味深な事を口にするから……。

「……美羽」

なら、俺が美羽を守る理由は何なのか。それは……。

俺だけが、美羽に求められていたから。

「じゃーん!どう?私のギター!かっこいい?」

「わあ！香澄、ギター始めたんだ！」

「すごい！星のギターだ！」

香澄と一緒に登校し、教室に入ってからのこと。背負っていたランダムスターを取り出し、香澄はまるで新しいおもちゃのようにクラスメイトに見せびらかしていた。

しかし、よく生徒会の人に見つからなかったよな……。今度見つかったら、ただじゃすまないだろうし。俺は自分の席に座り、香澄のギターお披露目会(?)を傍観していた。

「おはよう翔。今日は少し早いね？」

「沙綾か、おはよう。これでも香澄と一緒に家出てきたんだけどな」

「そっか。家隣なんだったよね」

と、そこに沙綾が声をかけてきた。空席の椅子を借り、俺と向き合う形で椅子を置いて腰掛ける。

「それで？香澄は……何やってるの？」

「さあな。ギターの発表会でもしてるんだろ」

「発表会って……」

「でも、沙綾にだってそう見えないか？」

「……確かに」

ジャカジャカと鳴らしてみたり、クラスメイトに触らせてみたり。どうみても、お遊戯で発表会をしているようにしか見えない。ま、当の本人がご満悦そうだから、俺は別に何も言う事はないんだけど。

「えへへー！じゃあ、とっておきのきらきら星を聞かせちゃおうかな！」

「……ねえ翔。何できらきら星なの？」

「いや、わからない。あいつの持ち歌第一号なんだろ、きつと」

適当に理由を作ったが、昨日のライブの時も何できらきら星なんだと内心ツツコミを入れていたからな。もう少しバンドらしい曲を歌えばよかったのに……。本当に発表会じゃないんだぞ。

あ、そう言えば沙綾は昨日の話を知らないな。折角だし、きらきら星のエピソードも交えて順に説明しておいた。

「……って事があってな」

「そうだったんだ。翔も大変だったね」

「ああ。でも、良くも悪くも香澄に助けられたよ。選曲がきらきら星ってのはどうかと思っただけだな」

「香澄らしいと言えば、香澄らしくない？」

「……その一言で解決できてしまうのは、逆に恐ろしいな」

でも、香澄だけの手柄じゃない。有咲も、りみだって頑張ってくれた。俺は裏方として、できる事を全力でやったんだ。その火付け役は、間違いなく香澄だった。

「あれ？今、香澄に近づこうとしてるのって、確か……」

「うん？」

教室に入ってくる、香澄と同じようにギターケースを背負って登校してきた少女。腰まで伸びた長髪。スタイルのいいモデル体型。間違いない、奴だ。

「あ、花園さん……だよな」

香澄が先に気づいた。俺が昨日SPACEで指導役について頼んだ、花園たえの事に。たえは香澄のギターをマジマジと見つめ、それから香澄の顔に目を移す。

「あれ？その背負ってるの、ギターケース？すごい！花園さんもギター弾くんのだ！」

「そのギター……」

「あ、これ？えへへ、ランダムスターって言うんだ♪珍しいギターみたいで——」

「……変態だ」

「へっ？」

「え……」

「私、変態なのかな……？」

「じゃん？」

「変ではある」

「当たり前だろ。何言ってるんだ」

「ええっ!? 有咲にさーやも、なーくんまで!」

昼休み。俺は相変わらず、香澄たちと中庭にいた。有咲と沙綾はそうだが、りみもグリグリの一件があつてからは、香澄と昼食を食べるようになってる。

後で香澄から聞いた話だと、りみがもう1回バンドをやってくれろと言いついてくれたみたいだし。自分に自信をもって、バンドに向き合ってくれるのなら、俺としては嬉しい限りだ。

「り、りみりくん……。私、やっぱり変態なの……?」

「え、えっと……」

「そうなんだああああ!!」

しどろもどろになるりみ。かえつて変態説を濃厚にさせてしまい、香澄は悲鳴を上げていた。ここにいる全員から変態認定して……。香澄も哀れだな、おい。

「ちよ、ちよつと変だけど、全然変じゃないよ!」

「それ、フォローになつてなくね?」

こればかりは、有咲の言うとおりでと思う。たえみたいにストレートな言い回しじゃないけど、変だつて言つてしまつてるし……。

……待てよ? 俺、気づいてしまつたんだが。

「有咲の方が変だよ!」

「はあ!? 何でここで私の名前が出るんだよ!」

「この前、盆栽に……。『トネガワ可愛いね。お水あげるね』つて言つてた!」

趣味が盆栽つて、女子にしては珍しいよな……。ある意味、そつちの方が変ではあるか。いや、それは盆栽女子を敵に回すことになるな……。

「へえ? 市ヶ谷さん、盆栽とおしやべりを……」

「してね……。ないです!」

あ、また猫かぶり。はがれかけてたけど。

「言ってた！」

「言ってねえ！」

「有咲、絶対言ってたよ！」

「そんな言い方はしてねえ！」

「あ、そういや前に有咲の家の前通ったら……『私の大事なトネガワ』。ずっと可愛がってやるぞ〜』って……」

「お、お前ら何で人の家をのぞき見てんだよ!? プライベート空間だぞ!?!」

ムキになって突っかかってくるが、逆にこの場にいる全員の笑いを誘う事しかない。何だか香澄よりも子供みたいで、おかしいんだよな。だから沙綾も、たまにからかったりしてるんだと思うし。

「でも、何で変態なんだろうね?」

「わかんなくい! 有咲、どうしてだと思っう?」

「知らねえ」

「りみりんは?」

「わ、私も……」

「さーやは!?!」

「え〜……? そう言われてもな〜……」

「なーくんは!?!」

ギク……。

「……知らないな」

「じゃあ何で変態なの!?!」

……すまん、香澄。それは多分、俺のせいだ。たえは、昨日の俺の話を真に受けて変態って言ったんだ。そうに違いない。

昨日だって、香澄の事は戸山さんと呼んでいたはずだ。そう、俺が話の流れで、香澄の事を変だと言わなかったら……。

「あれ、翔? 何か気分悪そうだよ?」

「ええっ!? だ、大丈夫なの翔君!?! 保健室行かないと……!?!」

「いや大丈夫！りみも保健室とか、そこまで大げさに考えなくてもいいから！」

くそ……。今日はやけに振り回される一日だ。朝は美羽にからかわれてたし、今だってたえの天然が招いた騒動に巻き込まれてるし。てか、本当に変態呼びするなんて思ってたないだろ!?

でもまあ、いつか……。何だかんだで、香澄は変態みたいなものだしな……。

「皆さん、ナップザックは完成しましたか？終わらなかった人は、放課後補習ですよー」

家庭科の時間。俺たちはナップザックを作ることになっていた。用途は問わず、自分の入れたいものに合わせて作っていく。俺は特に決まっていなかったが、それなりの大きさに仕上げておいた。

「よし、完成つと」

「……俺もだ。にしても、沙綾早いな」

「袋物はよく作るから、結構得意なんだ」

俺よりも一回り小さめのナップザック。その分、細部が丁寧に作られている。慣れてるって感じが伝わってくるな。

「牛込さんは？」

「私もできたよ、沙綾ちゃん」

って、あれ？りみの作ったナップザック、沙綾の奴より小さいな？小物でも入れるつもりか？

「うわー沙綾ちゃん、上手だねー！」

「牛込さんもね。でも、上手と言えば……翔のじゃない？」

「ん？俺？」

沙綾が俺のナップザックを手に取り、それをりみに見せる。適当に作ったから、お世辞にも上手とは思えないと思うんだけど……。

「本当だ……。細かいところも丁寧に縫ってある……」

「翔、器用なんだね。感心しちゃった」

「そ、そうか？別にそこまでこだわって作ったわけじゃないんだけどな……？」

「だったらなおさらだよ。普通にこんな綺麗なナツプザック作れるなんてね」

「あ……でも俺、母さんが仕事忙しくてあまり家いないからさ。それで家事とかやってるから、もしかしたらそのおかげかもしれないな」
美羽が小学生の時とか、シューズ入れがほつれたりすると俺が縫ってあげてたからな。自然と裁縫スキルが身についてたのかもしれない。

「へえ、偉いね。家の事、翔がやってるんだ」

「まあな。昔からやってるし、毎日の事だからな。もう慣れたって感じだな」

「翔君、すごいな……」

そんな風に尊敬のまなざしで見られると恥ずかしい。家事ができるって、そんなに立派なことなのか？当たり前のようにやってきたから、よくわからないが。沙綾もりみもそんな感じなので、俺は強引に話を変える。

「そ、そう言えば二人とも、ナツプザックは何入れるつもりで作ったんだ？」

「ん〜特に決めてなかったけど……ちよつとした小物入れって感じで使えないかな〜って。牛込さんは？」

「私は……チョココロネとか、入れられないかな〜って……」

どれだけチョココロネ好きなんだよ。ナツプザック作るのに、コロネ入れる用途なんて普通考えないぞ。

「アハハ。牛込さんらしいね」

「だったら、もっとデカいの作ってもよかったんじゃないか？そうすれば、チョココロネだったくさん入れられるだろ？」

「……はっ!?そ、そうだよね!ああ……失敗しちゃったな……」

本気でショック受けてるし。何かこうして見ると、りみって可愛く

見えるな。また今度、チョココロネでも買いに行つてやろうかな。きつと喜んでくれるはずだ。

「で、香澄は？もうそろそろ時間ないけど、終わってる？」

「うう、さーや助けてー！全然終わらないよー！」

終わらない？香澄は裁縫とか下手じゃなかったと思うんだけどな……。中学の時も、家庭科の成績はよかったはずだし。これくらいならすぐに終わらせてもおかしくない。

じゃあ何で？そう思い、俺は香澄の机をのぞき込むと……。すぐに理由は分かった。

「な、何だか香澄ちゃんのナツプザック、おっきいね？」

「うんー！これくらい大きくないとね！」

デカイ。まだ半分もできあがってないほど、香澄の作ろうとしていたナツプザックのスケールが大きかった。

「……何入れるつもりなんだよ」

「ギターケース！」

「えつと、ケースを袋に入れるの？」

また香澄は、他の人が考えないようなぶっ飛んだ発想をするんだな……。ケースを入れるケースって、どういうことだよ。

「いやいや、そりゃ終わらないって。みんな作ってるの、小物を入れるようなサイズだよ？」

「りみなんか、チョココロネ入れるやつだぞ」

「な、何か恥ずかしいからやめてよく。あ、でも沙綾ちゃんに翔君。あれって……」

りみの指さす場所。そこには、机一杯に布を広げて、はさみで切断している女子生徒の姿が。どう考えても、ナツプザックの大きさではない。

「花園さん、それ何作ってるの……？」

「ギターケースを入れる袋だよ」

お前もかよ……。香澄と考えてる事一緒か。似ていると言えば似ているんだけどな。

「あ、あはは……。香澄とおんなじことしてる人がいる」

「花園さん……だったよね。私、ちゃんと話したことないかも……」
たえはどこか浮いているからな。言動はぶっ飛んでるし、いつも一人でいるようなイメージがある。

でも……本人だつて、望んでそうだったわけじゃない。俺は、その事を知っている。

「はい、時間ですよ。終わってないのは……戸山さんと花園さんね。放課後、頑張つて完成させましょう」

「あ、はい……」

居残り確定。ま、こればかりは仕方ない。今日の練習には行けそうにないな。有咲が知ったら、どんな反応するだろうな。

「香澄ちゃん……」

「うう、りみりくん……」

「泣きついても居残りは居残りだろうが。放課後は一人で頑張るんだぞ」

沙綾は家の手伝い。りみは先に有咲の家に行つて練習を始めるだろう。香澄には悪いが、自分で始めた事には責任持ってもらわないとな。バンドの話に置き換えてもいい。

それに……俺は今日、放課後に行くべきところがあるからな。

phrase 21 虚ろな瞳が映す世界は

「えっ、香澄練習来ないのかよ?」

「うん。家庭科の授業で居残りになっちゃって。終わったら行くって言ってたけど……」

「……ふーん」

放課後。正門前で有咲と合流した俺たちは、香澄が遅れるかもしれないことを伝える。特に気にしてないように振る舞っているが、明らかに不自然な間があったことを俺は見逃さない。

「何だ? 香澄が来なくて寂しいのか? 後で教えてやろう」

「ぼっ、止めろ! そんなんじゃないからね! 私は別に、香澄の事なんか全然、これっぽっちも気にしてねーし!」

言えば言うほど、気になっていっているようにしか聞こえないんだよ……。ここまでわかりやすくツンデレなもの、俺の周りじゃ有咲くらいだぞ。

あ、沙綾は先に帰っていった。手伝いつても忙しそうで大変だよな……。家事の事を褒められたばかりだが、沙綾には敵わないと思うよ。

「あの、私たちだけでも練習しに行ってもいい?」

「練習って……牛込さんはまあ仕方ねーけど、こいつもセットかよ?」

「こいつって言うな。練習くらい、俺にも見学させてくれてもいいだろう……って言いたいんだけどな。今日は用事があるから、俺は行かない。りみ、悪いけど有咲の面倒見てやってくれ」

「どういう意味だ、おおい!」

やっぱ、有咲をからかうの楽しいな。こりや、沙綾が茶化したくなる気持ちがよくわかる。

「翔君、用事ってバイトの事?」

「そうじゃないけど……。ちよっと行かないといけない場所があったな」

「そうなんだ……。だったら、仕方ないよね」

よかった。深く追求されたら、どうしようかと思ってたからな。俺

としては、できるだけ公にはしたくない話だし。

が、その様子を見ていた有咲が……。

「ふーん？何か怪しいじゃん？彼女とデートでもするのかよ？」

「……はあ？」

「えっ!?し、翔君に、か、かの……彼女っ!?!／／／」

なんて事を言い出すから余計にややこしくなるし。と言うか、そこまで驚かなくてもいいだろ、りみ。しかも顔を真っ赤にして、何だか落ち着きがないように見えるし。

「何を言い出すんだよ。俺に彼女はいないからな？」

「へえ、言い逃れか？」

「いや、違うから」

弱みを握ったような気になりやがって……。違うものは違う。いくら突いたところで、何も出てこないのは俺が知ってる。

「は、はわわ……翔君に、彼女が……」

「つて、りみもいつまでそうしてるんだよ。俺に彼女はいないからな？」

「……えっ!?ほ、本当に!?!」

「あ、ああ。俺に彼女なんかいるわけないだろ？」

「よ、よかった……」

何がよかったのかは全く見えてこないが、りみは俺以上に安堵していた。もし俺に彼女がいたら、何か不都合な事でもあったのか……？

「つーか、香澄はどうなんだよ？幼馴染なんだろ？」

「……違うからな？」

「何だよ、その不自然な間は」

け、今朝の一件がまだ頭に残ってるみたいだ……。本当、美羽の奴帰ったら覚えてろよ!?!

「ま、香澄は有咲のものだからな。仕方ない」

「……はあ!?!ちよま、それってどういう意味だよ!?!」

そのままの意味だけだな。

「それに、俺に女つ気があるように見えるか？そもそも、俺って女の子に好かれてると思うか？自分じゃよくわからないけど」

「……ふーん？」

「何だよ、その反応」

「別に？翔って、予想通りに鈍感なんだと思ってな」

「予想通りに!？」

俺って鈍感なのか……？自覚はないし、そもそも俺は鈍感キャラだって認識だったのかよ……。

「だって……なあ？牛込さん」

「えっ!？い、いや、私はちが……あ、有咲ちやくん!／／／」

で、りみもまたソワソワし始めるし。理由が全く分からないんだけど……あ、これが鈍感って事なのか……？何か嫌だな、それ。

けど、今の俺にはこれ以上こいつらに構っている暇はない。そろそろ行かないと、間に合わなくなってしまう。

特にこいつらには、まだ知られるわけにはいかないからな。

「悪い。時間なくなるかもしれないから、俺はもう行くよ」

「う、うん！じゃあまた明日！」

「おう！有咲の事、適度にかまってやれよ！」

「う、うん……？」

「って、私の事を何だと思ってんだ！それに牛込さんも、あいつの言う事に悪乗りしなくてもいいからあ!!」

「縫っても縫っても、全然終わんない……。うう、今日中に完成なんて無理だよー！」

切って、縫っての繰り返し。二人だけの家庭科室で、私は終わりの

見えない作業を続けていた。花園さんは、黙々とナツプザックを作っているけど……。

「はあ……。ちよつとギターで気分転換しようかな」

私には無理だよ！何にもキラキラしないし、同じことの繰り返しで飽きちゃうよ。よく花園さんは続けられるよね……。……。

「よいしょつと。ふんふんふん♪」

やつぱり、ギター弾いてる間は落ち着くよね。楽しいし、キラキラするし。まだ始めたばかりだけど……。

でもいつか、有咲やりみりんや……。まだ集まっていないメンバーの子と一緒に、ステージに立ってライブしたいな。このギターで、キラキラする演奏ができたらいいな。

私にも、誰かを勇気づけることが、できたら――。

「それ、音変だよ」

「……ひゃああつ!!」

心臓止まるかと思った！え、だって花園さん、さつきまで真剣にナツプザック作っていたはずじゃ……。!!いつの間に私の後ろにいたの!?

「は、花園さん……。!!ビックリしたよお……。……」

「えっ？何かあった？虫でもいたとか？」

「うええ!?!む、虫つ!?!どこどこ!?!取って取って!!」

もう軽くパニックだよ……。椅子が倒れるのも気にしないで、私は花園さんに抱き着く。花園さんは驚いていたみたいだけど、そのまま周りに虫がいらないかを探し始めた。

「……いないみたい。気のせいじゃないかな？」

「ほ、本当!?!うう、脅かさないでよ〜!」

私は倒れた椅子を直して、ギターを構えなおす。と、さつき花園さんが何か言いかけていたことを思い出した。

「あ、そう言えば、さつき何か言おうとしてなかった？」

「うん。音が変わって言ったの。チューニング、ずれてると思う」

音がずれてる？私は何回か音を鳴らし、どこがずれているのかを確認してみると……。

「あ、本当だ……！」

さつきまでは気づかなかったのに、今聞いたらちよつと違う！でも、さつき少し鳴らしてただけなのに、あの一瞬で音のずれがわかるなんて、花園さんってすごい……！

「聞いただけでわかるの？絶対音感？」

「うん、絶対音感。これ、ちよつと言ってみたかったんだ」

「あはは、教えてくれてありがとう！えつと、チューナーは……あ、あった！」

「ケースに入れるだけでずれるから。自動でしてくれるギターもあるけど」

へえ〜そうなんだ。花園さん、ギターの事よく知ってるんだなあ……。経験者なのかな？みーちゃんもそうだけど、花園さんはどれくらいやってるんだろう？

聞きたい気持ちはあるけど、まずはチューニングだよ。集中しないと、上手くできないからね。

「……よし、できた！それじゃ、もう一回——」

「待って。私も弾く」

花園さんは、作業用の机に立てかけていたギターケースを持つてくる。その中には、私のランダムスターとは違った、青いギターが入っていた。私の赤もいいけど、花園さんの青もキラキラしててかっこいい……！

「わあ、それ花園さんのギターだよね!?青い!かっこいい!キラキラする!」

「うん。戸山さんのギターは、変態って感じだよ」

うっ、また変態って言われた……。ランダムスターのどこが変態なんだろう……？

「へ、変態じゃないよ!」

「そう?ランダムスターはレア中のレアなギターだから、意地でも欲しいって人が多くて。だから、そんなギターを持つてる戸山さんは、

ランダムスターへの執念がすごいんだな〜って。ある意味、変態？」

「珍しいギターなのは知ってるけど、変態じゃないっ！」

「それに、戸山さんだって少し変わってるし。だから変態」

「か、変わってるかな……？って、違うよ！変態じゃないから！」

「大丈夫。私はそう言うの、気にしないから」

「だから〜！」

花園さんが私を変態って呼ぶ理由は分かったけど、どうしよう。私、このままだと花園さんにずっと変態だって思われちゃうよ……。そんなの嫌だな……。

「……そうだ。翔から戸山さんの事聞いたよ。最近ギター始めたばかりなんだって」

「えっ、なーくんが？」

「翔、心配してたんだ。戸山さん、情熱だけは確かだから、何か力になってやりたいんだって。それで、戸山さんにギターを教えてほしいって頼まれたんだ」

「なーくん……！」

なーくんが、私のためにそんなことまでしてくれたんだ……。バンドの事も考えてくれて、応援してくれて。私の事も、考えてくれるんだ。

昔から、私の事を助けてくれるなーくん。嫌そうな顔をすることもあるけど、私の隣にはいつもなーくんがいて。仕方ないと言いながら、力を貸してくれる。とっても優しい、私の幼馴染。

何だか嬉しくて、ドキドキしてきちやったな……。

「どうしたの？戸山さん、笑ってる」

「……う、ううん！何でもないよ！」

「それに、何だか顔も赤いみたい。熱でもあるの？」

「な、ないよ！全然！本当に、何もなければ！」

そんなにわかりやすく、顔が赤くなっていたんだ……。なーくんの事、ちよつと考えてただけなのに……。

「そ、それより、ギターを教えてくださいって言ってたけど……いいの？」

「もちろん。でも、戸山さんのやる気次第だよ？戸山さんは、ギターを弾きたい気持ち、ちゃんと持ってる？」

「……うん！やる気もあるし、引きたい気持ちもあるよ！私、キラキラドキドキしたいから、ギター上手になりたい！今はまだバンドじゃないけど……いつかバンドができた時に、ずっと探していたキラキラが見られるように！」

そのために、ギターを弾けるようになりたい。上手になりたい。まだ手探りで、走り始めたばかりな私が、少しでも前に進むために。

そんな私の言葉を聞いた花園さんは、ニツと笑って……。

「それだけやる気があれば、戸山さんは大丈夫。きつとすぐ上達するよ。ギター、頑張って教えるから、一緒に練習しよう！」

「ありがとう、花園さくん！私、これから頑張ります！」

こんな助っ人ができるなんて、本当に嬉しいよ！出来たら、一緒にバンドとかやってみたい気持ちもあるんだけど……。

「早速だけど私、花園さんのギター聞きたい！聞いてみたい!!」

「おっ、アンコールありがとう！」

「あはは。花園さん、まだ演奏してないよ〜！」

話したことは全然なかったけど、花園さんって面白いな。ギターにも詳しいし、どんな演奏をするんだろう？

そう思って、期待しながら花園さんを見つめていると……。

「……っ!?う、うわあ……！」

私の演奏とは全然違う！もつと音がグワーツてなって、ジャーンってなって！とにかくカッコいい！

私も練習すれば、あんな風に弾けるのかな……!?

「すごい！すごいよ花園さん！い、今のどうやって弾いたの!？」

「う〜ん……何となく？」

「な、何となくで弾けるの!？」

「頭に思い浮かんだリズムを、そのまま演奏しただけだよ」

イメージしたメロディーが、すぐに演奏できるなんてすごい……！私にはできそうにないことを、花園さんは簡単にやっているんだね……。

「それに、戸山さんだってコードを覚えたら弾けるよ」

「コード？」

「和音の事。ドミソ、レファラー♪」

実演しながら、丁寧に教えてくれる。早速教わることができた……コードか。これまでは弦の一本一本を鳴らしていただけだったけど、そうじゃなかったんだ。

私、まだまだギターの事、何にも知らないんだ。これからもっと、花園さんに教えてもらわないと！

「わあ〜！私もコード覚えたいっ！」

「うん、いいよ。まずは——」

「……戸山さん、花園さん。仲良くおしゃべりするのはいいけど、終わったの？」

「あ……」

つい夢中になって、先生が教室に来たことに全然気づいてなかった。私たちは苦笑を浮かべながら、ナップザック作りを再開した……。

静かな廊下に、俺の靴が地面と触れ合う音が響く。

学校から少し距離のある場所に建つ病院。りみたちと別れた俺は今、その病院の中にいた。看護師に部屋の番号を確認し、俺はその部屋を探して歩いている。

俺がここに来たのは、ある人に会うためだ。

「……………」

美羽の事？いや、それは今は関係ない。と言うのも、見方を変えたら嘘になるのかな？だが、美羽は今家にいるし、お見舞いなら病院じゃなくて家に戻るべきだ。

俺の中で、美羽と同等に重要となる人物が、この先にはいる。

「……………ここか」

さつき看護師に聞いた番号。そして、部屋の前にかかっているネームプレートの名前。

一致している。この部屋で間違いない。

「……………」

俺は深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。俺も、この部屋に入るのは初めてだ。それに、この中にいる人と会うのも初めてだ。向こうだって、俺の事なんか知りもしない。

緊張する。だが、そろそろコンタクトを取り始めなくては。こんな事しかできないのはわかっていても、行動に移さなくては。

時間は、過ぎていく一方なのだから。

「……………あらっ？」

「……………え？」

だが、俺がノックして中に入ろうとする前に、中から人が出てきた。少し高そうな服装の、金髪をなびかせた物悲しそうな少女。泣き腫らしたような跡があり、瞳はわずかに濡れていた。

俺の聞いた話だと、今から会う人は金髪じゃない。なら、お見舞いにも来ていたのだろうか？あの人の友達なのか……………？

「あ、えっと……………」

「……………あなたも、美空の友達なの？」

俺を見つめる目は、寂しそうで、でもどこか嬉しそうで。俺がここに来たことを、喜んでるように見えた。その気持ちだが、今の一言にこもっている。

「友達……とは、少し違うのかな。でも、俺もあの子を放っておけないのは確かだ。だから、ここに来て少しでも……話がしたいんだ」

「……そう。嬉しいわ。美空にもまだ、そうやって思ってくれる人がいてくれるのね」

「君は……あの子の友達なのか？」

「あたしは、昔から知ってるわ。美空の事を。いつも笑顔で、眩しくて、音楽が大好きで……私に、笑顔を与えることの意味を教えてください」

痛ましい。昔を懐かしみ、思いをはせる彼女の語る姿は、無理矢理傷口をえぐるかのような悲痛なものだった。だが、彼女はその言葉を止めない。

「でも……あんなことが起こって、美空から笑顔がなくなつて……あたしは決めたの。もう一度、美空に笑ってほしいって。あたしは美空が教えてくれた音楽で、世界を笑顔にする。そうしたら、きっとまた……美空は……っ」

「……もういい。君の事はよくわかった」

泣き出しそうになる彼女に手を置き、先に続く言葉を止める。これ以上、辛い告白を言わせたくなかった。俺も、聞きたくなんてなかった。

「君があの子を何よりも大切に思つて、そのために動こうとしていることもな。俺も、あの子のために力を尽くすつもりだ」

「……美空が聞いたら、どう思うかしら」

「それは……わからない」

素直に喜ぶほどの余裕が、彼女に残されているとは……俺にはとても思えない。

「そうだ。まだ名前言ってなかったな。俺は成川翔。これでも花咲川女子学園の生徒でな。特務生って形で入学してる」

「やっぱり……花女の生徒だったのね？」

「ああ。って事は、君も？」

「ええ。1年E組の……弦巻ころろって言うの」

同じ花女の生徒だったのか。制服じゃなかったから、よくわからなかったな。向こうは俺が花女の制服だったから、何となく想像ついてもみただけだ。

「そうか。なら、また学校で見かけることもあるな」

「ええ。その時は、もうちよつと楽しい事を話しましょう?」

「そうだな。けど、俺がここに来ていることは、あまり公にしないほうがいい。あの子の事、あまり広めたくはないだろ?あの子にもストレスになるだろうし」

「……そうね。わかったわ」

それじゃ、と軽く挨拶を残し、弦巻さんは帰っていった。これから用事でもあるだろうし、引き留めはしない。

さて、ここからが本題だ。

「……失礼するよ」

ノックをして、俺はゆっくり扉を開けて中に入る。返事はなかったが、俺は遠慮なく病室の中へ。

そこは、個室タイプの病室だった。窓に平行になるようにベッドが立てつけられ、そこから夕焼けが射す。眩しさを目を細めそうになるが、ベッドに横たわる人物……幼さを残す少女は、何も反応を示さない。

俺の事を気にも留めず、窓の外の景色を眺める少女。俺は少女に近づき、ようやくコンタクトを取り始めた。

「初めまして。君の事は、色々と聞いているよ」

ようやく俺の存在に気づいたのか、こちらに顔を向ける。銀髪のショートボブが揺れ、その表情があらわになる。

すぐに俺は、胸の中に痛みが走った。こんなにも、悲しい表情をするのかと。

細い四肢は力なく垂れ下がり、髪の下から覗く目は虚ろに俺に向けられる。感情の類は一切感じられず、何かがゴツソリと抜け落ちてしまっているような、そんな印象を感じていた。

「……俺は何もしない。ただ、君の事をもっと知りたい。それだけなんだよ」

余計なことを言うのは、きつと刺激になるから。最小限の話題だけを交えて、俺は彼女に向かって話し出す。

だが、少女は何も答えない。俺は一人話を膨らませ、少女に聞かせてやる。そうするだけでいい。返事なんて無理に求めてはいない。

少女が話すらできないことも、既に聞いていたから。

「……さて、今日はこの辺にしておくよ。そろそろ日も暮れそうだ」

返事はない。元より、俺を見てもいない。

「また来るよ。次は……いつになるかはわからないけど」

待っているかは分からない。それでも、俺は足を運んでやる。

「じゃあな。体に気を付けるんだよ」

そんな心配なんて、必要ない。少女は、きつとそう思っている。

「……………」

彼女は、重い過去を背負っている。誰とも言葉を交わさず、感情をも失ってしまった。

そんな彼女を、俺は救う必要がある。

それが、俺の使命だから。

phrase 22 邂逅

「有咲、りみりん！昨日は練習行けなくてごめん！」

翌日の昼休みの事。香澄は昨日の件で練習に行けなかったことを謝っていた。場所はもちろん中庭。もはや、俺たちの定位置となりつつある。

「う、ううん。大丈夫だよ」

「まあ、そうなる予感はしてたしな」

二人は大して気にしてないみたいだな。香澄の事だから、仕方ないと割り切っているのかもしれないが……。俺も行けないだろうとは思ってたし。

「あんな大きいの作るから……」

「でもさーやくケースの袋作りたかったんだもくん」

「気持ちには分かった。で、完成はしたのか？」

「そ、それが……」

おい、雲行きが怪しい言い方だぞ。まさか、今日も居残りなんて言い出さないだろうな……？

「また、今日も居残りなんだよね……あはは」

おいおい。そんな調子で大丈夫なのかよ。このままだと、いつまで経っても練習できなくなるぞ？有咲もりみも待ってるのに。

「あははじゃねーだろ。こつちだって、暇じゃねーんだから。待ってやる方の身にもなってくれよ」

「おつ？何か有咲が珍しく素直だな」

「一言余計だ！」

いや、訂正。やっぱりいつもの有咲だったな。

「あ、でもねなーくん！おたえと仲良くなったよ！」

「おたえ……ああ、たえの事か。あいつと仲良くなれたのか」

「誰だよ？」

「花園おたえちゃん！うちのクラスのー！」

あいつも居残りだったな。ギターの件もあるし、仲良くなってくれたのならこつちも嬉しい。キャラと言い、どこか似ている二人だから

な……。

「おたえって……香澄もなかなかネーミングだよね」

「えー？そうかな？おたえも喜んでたよ！おたえって名前！」

「有咲のために言っておくけど、本名は花園たえ、だからな。おたえはこいつが勝手に呼んでるだけ」

「ふーん。別に私、そいつの事知らねーからどうでもいいけど」

何その辛辣コメント。もしたまたま会って、何も知らずにおたえなんて呼ぶことになったらどうするんだよ。

と言うか、おたえって名前は俺もどうかと思うがな……。俺もなーくんだし、りみはりみりん。たえは、その……なんだ。おたえって何だよ。

でも、本人は普通に気に入ってそうだけだな。香澄とはどこか波長の合いそうな面もあるし、すんなりOKしたに違いない。

「おたえってすごいんだよ！音聞いただけでチューニングしちゃうし、演奏も上手なんだ！」

「あいつの演奏聞いたのか。かつこよかっただろ？」

「うん、すごかった！上手く言えないけど、胸の中でこう……グワーツと何かが溢れて止まらないって感じで！」

どういう事かは全然わからないが、何となく言いたいことは伝わってきたからよしとする。これ以上追及すると、香澄語ばかりで余計にややこしくなりそうだし。

「花園さんって、SPACEでバイトしてたよね、翔君」

「えっ、そうなの!？」

「ああ。りみの言う通り、たえとはバイト仲間なんだ。この前香澄がきらきら星歌ったグリグリライブの時も、一緒に仕事してたんだけど……気づかなかったか？」

「全然だよー」

何だ。SPACEのバイトの事は、まだ香澄には言ってなかったのか。仕事の時のたえの姿、できる事なら見てほしいくらいだ。

いつもの天然はどこに行ったのかと疑いたくなるほど、真面目で頼りになるからな。手際はいいし、まさに縁の下の力持ち。もう別人だ

からな。

「つーか、あの時は周りなんて見てる余裕もなかったつーの」

「カスタネット叩くのに必死だったからか？」

「そうじゃねーよ！無理矢理ステージに立たされて、すげー恥ずかしかったんだぞ!？」

それでも逃げ出さずに最後までステージに立っているところを見ると、有咲も無関心ってわけじゃないんだろうな。だから必死になれるし、こっちの事も見えていなかったんだと思うし。

案外、香澄に頼まれたからって理由だけかもしれないけどさ。こいつチョロいし、香澄の事好きだからなあ……。

「居残りの時に聞いてみようかな！おたえがSPACEでバイトしてる事！」

「香澄、花園さんと話すのはいいけど、課題の方もちゃんとしないとダメだよ？市ヶ谷さんたちだって、待たせているんだから」

「そうだぞ、香澄。今日こそは練習、来られるんだろうな？」

「うん！今日は課題終わらせて、絶対練習行くから！」

そう自信たっぷりと言い切る香澄だったが、俺は……いや、恐らくこの場にいる全員が同じことを考えていたはずだ。

こいつ、絶対に課題終わらせる気がないと。

「香澄ちゃん、遅いね……」

「あいつ、今日も来ないつもりかよ」

「かもな……。けど、何となく予想はしてただろ」

「それはまあ……どうせ香澄だし」

やっぱりか。ま、逆に来てたら驚いてたくらいだ。どうせあいつは、たえと話し込んでちよつとギターでも弾いてるんだろう。もう目

に見える。

で、今は放課後。俺はりみと一緒に、有咲の家の蔵に来ていた。地下室へと案内され、俺たちはソファでくつろいでいたところだ。

「だ、大丈夫だよ。今日で課題終わらせるって言ってたし」

「だどいいんだけどな……」

「って言うか、そもそも何でお前は普通にうちにいるわけ？」

「居たら悪いのかよ」

今日は特に用事もないし、練習に付き合うつもりで来たんだけど。香澄にはバンドの練習は協力すると言ったし、その手前、他のメンバーのサポートも必要だと思っただけ。

「香澄はいないけど、俺たちだけでも練習はできるだろ。ま、俺はバンドとは関係ないから、二人のサポートって感じになるけど」

「サポートって、何するってんだよ。この人数じゃ、できる事なんてたかが知れてるだろ？」

「音合わせ……とかはさすがに無理か。とりあえず、個々の演奏技術を向上させるために、俺が手助けする……的な？」

「何だそれ」

「あ、後確かめておきたい物があるんだ。確かこの前、蔵を掃除した時に見つけた気がしてさ」

質屋に出されたり、捨てられたりしてたらアウトだけだな。でも、まだあれから時間もたってないし、残っているとは思っただけど……。

「何の事だよ？」

「それを今から探したいんだ。有咲、悪いけど蔵の中漁るぞ」

「はあ!? おま、何言ってるんだよ! せっかく掃除したのに、また散らかすのかよ!？」

「そんなに汚く漁らないから安心しろ。その探し物が終わったら、俺も練習の方に合流するから!」

「何勝手に決め……おい、翔! 私の許可を取れ!!」

有咲はプリプリ怒らせておく程度でちょうどいいから、無視して地下室を上がる。整頓された蔵の中から、あいつがどこにあるのを見

つけなくてはいけない。

無理に探すこともないんだが……あれば練習が楽になる。山積みになった物の中からでも、あいつはすぐに見つかるはずだ。

「ったく、翔の奴……。んで、どうするよ牛込さん。練習するならしてもいいけど」

「せっかくだし、そうしようかな。本当は、香澄ちゃんと練習したかったけど……」

「そうなるといいけどな。けどま、その花園って子とおしゃべりして、手が止まってるんじゃないの?」

「そ、そんな事ないよ。……多分」

と言いつつ、りみですら先の展開が何となく予想できてしまっているのだが。有咲はハア〜とため息をつきながら、ふと疑問を感じる。

「そーいや、その花園さんってどんな人? 今日の話聞いてたけど、全然そいつの事わかんなかったし」

「花園さん? うーん、あんまり話したことはないかな? けど、ちよつと不思議な感じかも」

「不思議って……」

「あつ、でもいい人だよ! きつと!」

「きつとかよ……。って事は、牛込さんもよく知らないって事なんだな」

「うん……。ご、ごめんね有咲ちゃん。ちゃんと答えられなくて……」

「べ、別にそんな事で謝らなくてもいいっつーの……」

花園たえ。結局どんな人なのかの情報は手に入らず、謎が深まる一方のままに終わった。そもそも有咲は、直接会ったことすらない。完全にイメージ像に頼るしかないのに、そのイメージすらつかめていないのだ。

「てか、あいつは何してるんだよ。探し物って言ってたけど」

「まだ探してるのかな? 翔君、何を見つけようとしてるんだろう?」

りみたちがそんな事を考えている一方、蔵の中を搜索している翔はと言うと。

「思ったよりも物が多いな……。つか、暗いし埃も多いし……。ゲホツ、ゴホツ！ちやんと掃除してるんだろぅな!？」

思いのほか苦戦していた。もう少し早く見つかると思っていただけに、俺は落胆しながら物の山をかき分けていた。その度に埃が舞い、激しくせき込む。

もう捨てられてしまったのか。前に見た時に、有咲に頼んで残してもらえばよかったかな……。？

「もう探せる場所も限られているが……。おっ！」

見つけた。一部だが、確かに俺が探している物が見えている。捨てられていなかったことに安堵しながらも、俺はその物に近づいて状態を確認する。

「思ったより問題なさそうだな。所々使い込まれているが……。ここで使う分なら、別にこれくらいのボロがあっても大丈夫だろ」

俺は周りの物をずらし、地下室までの一直線の道を作る。そうしないと、こいつは運べないからな。それなりに大きいし、重量もある。

ひとまず道を確認し、俺は少しずつ運び出す。重労働はしているから、重さ自体はそこまで苦じゃないけどな。どこかにぶつけてしまわないかの方が問題だ。

「……。よし、着いた」

俺は時間をかけて地下室の前まで来ると、扉を開けて中の有咲を呼ぶ。こいつを一人で下まで持っていくのは無理だ。折角手伝ってくれる人がいるなら、協力してもらおう。

「おい、有咲！ちよつと手伝え！」

「戻ってきていきなり何だよ！私はお前の召使いじゃねーし！」

「探してたものが見つかったんだ。けど、そいつを持っていくには下から支えてもらう方がいいんだ。だから手伝ってくれ」

「んだよそれ……。はあ、都合のいい奴だな……」

と言いながら、重い腰を上げて協力してくれる有咲。何だかんだで優しいからな、有咲は。今言ったら、絶対にツンデレ発動して殴られそうだけど。

「あ、あの翔君。私も何か手伝う事ないかな？」

「いや、りみはいいよ。女の子には重たいだろうし、そこで待つてくれよ」

「翔君……！」

「つて、何で牛込さんは良くて私には手伝わせるんだよー！」

どっちかかって言ったら、有咲の方が力ありそうだったからな……。ただそれだけの理由だったんだけど。

「牛込さんもなんかうつとりしてるし……。もう、仕方ねーな！」

「さすが有咲だ。話が早くて助かる」

「他に誰もいねーんだからしょうがねーだろー……。つて、おい翔。こいつつて……」

「俺の専門分野だ。それに、バンドの練習するんだったら、欠かせなくなつてくるだろ？」

「ここのまでもったいぶる事ではないが、恐らく何のことか想像はついているだろう。俺は有咲と協力して、地下室の中にそいつを運び入れる。空いている一角にセッティングし、準備は万端だ。」

「つーか、よくそんな物見つけたな」

「前の掃除の時に見つけてな。多分使えそうだったから、あつたらいいつて思っていたんだ」

「これつて……。ドラム、だよね？前に叩けるつて言つてたけど……」

「マジか？お前、ドラム叩けるのかよ？」

「りみには話した事があつたな。昔から趣味で、それなりには叩けるんだ」

そう。俺が探していたのは……。バンドにおいてはリズムの要とも言える楽器、ドラムだ。

俺がドラムと出会ったのは、小学校高学年の時。たまたまテレビで見たドラムの演奏に心惹かれ、俺はお金を貯めてドラムを買った。それから独学でドラムを勉強し、美羽とギターでセッションを行う事も多かつた。

だから、ドラムに関してはそれなりに詳しいし、技術もあると思つている。バンドをするならドラムが必要だと考えた俺は、ドラム役が見つかるまでの代役になれないかと考えていた。

そこで蔵で見つけたドラムの出番だ。使い込まれてはいたが、音はしつかり出る。練習程度に使う分には、特に何の支障もないはずだ。使っていて壊れたら知らないが、ないよりはマシだ。

りみには初めて会った時に、ファミレスでの会話の時に言ってたからな。

「いつ使い始めるかはわからないけど、必要になった時に使えるようにはしておきたくてな」

「うわあ……翔君、ありがとう！」

「気持ちありがたいけど、お前がやる気になってどうするんだよ。バンドには入らねーんだろ？」

「あくまで代役だ。それに、やる気なのは有咲も同じじゃないのか？」
ビクツと有咲の肩が弾む。りみも笑っているし、わかりやすい奴だな……。まあ一応、そう判断した理由はあるんだけどさ。

「な、何言ってるんだよ？私がバンドやる気？ふん、そんなのありえないっつーの」

「なら、あそこに置いてあるキーボードは何だ？」

「……げっ!？」

だから反応がわかりやすいんだよ。隠し事とか全然できないな、こいつ。

そこにあつたのは、新品同然のキーボード。最近買ったばかりのやつだろうな。いくら何でも綺麗すぎるし、鍵盤も使い込まれた跡がない。こいつはもしかしなくても、バンドのために買ったキーボードだ。

「私も、昨日来た時はビクリしたんだ。でも、有咲ちゃんもバンドやりたいんだなって思ったら、嬉しくて」

「ちよま、牛込さん！」

「いいじゃないか。香澄も喜ぶだろうし」

「……っ！／／／べ、別にあいつとバンドがしたいわけじゃねーよ！ただ、これ以上アイツにしつこくバンドに誘われるのがうぜえだけだ！わかったか!？」

「はいはい。有咲が香澄とバンドがしたいって事がよくわかりまし

たよ」

「だから違うー！」

本当、素直じゃないよな。でも、有咲がバンドに前向きになってくれてよかったよ。香澄も、この事を知ったら喜んで抱き着くだろうな。そしたら有咲がまた照れ隠しでうるさくなつて……目に見えている。

「あつ、香澄ちゃんから連絡来たよ」

「本当か!？」

「マジで香澄好きだな、有咲」

「ず、ずっと待ってるのも退屈だし、早く来てほしいと思っただけだー！」

「わかったから。で、香澄は何て言ってるんだ？」

「え、えつと……。遅くなったから、今日も行けないって……」

「……………」

期待を裏切らない奴だな、本当。ま、そのつもりではあったけど。

「そ、それで有咲。そのキーボード、どのくらい弾けるんだ？」

「まだ始めて1週間も経ってなーよ。ピアノは習ってたけど、感覚とかもちげーし。だから、まだまだって感じだ」

「饒舌だな」

「うるせーな！」

となると、このドラムはまだ使えないか。香澄がいたところで、まだ基本練習の段階だからな。音を合わせるほどのレベルじゃないか。

「あ、あの翔君」

「ん？どうしたんだ、りみ」

「その……翔君がドラム叩けるって話は前に聞いたけど、私翔君がドラム叩いてるところは見た事ないかなーって……」

「確かにな。ドラム叩けるって言っておいて、下手だったら笑いもんだしな〜？」

有咲の奴、好き放題言ってくれるな。だったらちようどいい。せつかくだから、俺のドラムを見せてやろうか。香澄もどうせ来ないし、このままだと各自で練習するだけになりそうだしな。

「……わかった。じゃ、二人ともソファにでも座っててくれ」
ちようどソファの正面にドラムを置いたからな。りみは期待して、有咲は腕を組んでお手並み拝見と言わんばかりに。
「……………」

俺は自分の趣味としてドラムを叩いていただけだ。当然、人前で演奏したことはこれまでにない。せいぜい美羽の前くらいだ。香澄にだって、よくよく考えたら聞かせたことがない。

緊張する。たった二人とは言え、俺の演奏を聞いてくれる人がいるんだ。少し落ち着かなくては。

深呼吸し、軽くドラムを叩いてコンディションを確認。ドラムの方は問題ない。俺の方も、リズムを刻んだことで気がまぎれた。

まさか、こんな風にドラムを叩くことになるとは。何が起こるかわからないものだな。

「……行くぞ」

「うん……………」

「もったいぶってないで、いつでもいいぞー」

俺は気合を込めて、スティックを振り下ろした……………！

「す、すごかったね翔君！ドラム、めっちゃかっこよかったよ！」

「何回目だよ。さつきからずっと言ってるじゃないか？」

「だって、翔君がかっこよかったから……………」

その日の帰り道。俺は駅までの道を、りみと一緒に帰っていた。もう日も暮れて、少し冷え込んできた。

で、りみはずーっと俺の事をべた褒めしている。有咲も別れるまでは悔しそうに褒めてたし、思ったよりもいい評価で嬉しいんだが。けど、りみはいつまで俺を褒めたら気が済むんだ？

「優しいし、ドラムもできるし……………やっぱり私、翔君の事——」

「ん？何か言ったか？」

「えっ!? な、何でもないよ! / / 翔君の事なんて何も言っていないから! 本当の本当に——キャツ!」

慌てて周りが見えなくなったのか、りみが誰かとぶつかってしまった。俺は二人に怪我がないか、確認することにする。

「おい、りみ。大丈夫か？」

「う、うん。あの、すみませんでした……」

「そちらも怪我はないですか？」

「私は問題ないわ。これからは気をつけなさい」

それなら一安心だ。何かあったら大変だからな。けど、この人どこかで見えたことがあるような……?」

「あなたたちも、バンドをやってるのね」

「は、はい。まだメンバーは揃ってないんですけど……」

「俺は関係ないですから。『も』って事は、あなたもバンドを？」

「ええ。Roselia（ロゼリア）と言うバンドで、ボーカルをやっているわ」

「ロゼリア……!? しかもボーカルって事はあんた、湊友希那さんか!」

「あなた、私の事を知っていたのね？」

知っているも何も、今やガールズバンド界において知らない人はいない。圧倒的な演奏技術と歌唱力で観客を魅了する実力派バンド……それがロゼリアだ。

SPACEでもライブをすることがあるし、何回か見たことがあるが……圧巻の一言に尽きる。まさかこんなところで会うとはな。りみも隣で驚いているしな。

「もちろん、知っていますよ! 何回かライブ、見させてもらいました!」

「それは嬉しいわ。ありがとう」

「各パートの演奏もレベル高いですし、それらを一つにまとめる技術がすごいですよ! 闇雲に練習しても身に着かないようなパフォーマンスで……何と言うか、目標が常に明確で、その芯が全然ぶれることなく保ち続けられてるって印象を受けて! あ、それから歌も——」

「し、翔君! あまり話し込んだら、困るんじゃないかな?」

しまった。つい勢いに任せて饒舌になってしまった。湊さんの事、全然考えてなかったな……。

「あっ……す、すみません……」

「構わないわ。それだけ私たちの音楽が、伝わってくれていると言う事だから。……何だか似てるわね」

「似てるって……何にですか？」

「私たちに、歌とギターを教えてほしいと頼んできた子がいたの。そんな事で寄り道している暇もないし、最初は断っていたわ」

「だったら、どうして？そう尋ねようとしたが、すぐに答えは返って来た。」

「けど、その子の熱意に負けたわ。バンドが、音楽が好きなんだって伝わってきた。あなたもそうなんでしょう？今の話を聞いていれば、すぐにわかるわ」

「……はい。けど、俺よりも音楽に熱く向き合おうとしている奴もいますよ。音楽の事、全然知らないのに……バンド始めるくらいですから」

キラキラドキドキしたい。たったそれだけの理由でも、バンドの世界に足を踏み入れたくらいだから。あいつの気持ちは、誰にだって負けていない。

「そんな子もいるのね。よかったら、あなたたちの名前を教えてくださいませんかしら？」

「えっと、牛込りみです」

「俺は成川翔だ」

「……っ！成川……」

「……？俺の名前、どうかしましたか？」

「いいえ、何でもないわ。それじゃあ、この辺で失礼するわ。また会う時があれば、よろしく」

そう言っつて、スタスタと立ち去って行った。最後の反応がどうも引っかかるが、気にしていても仕方ない。また会う機会があるなら、その時に聞いてみよう。

「すごかったな、りみ……」

「う、うん。ロゼリアに会えるなんて……」

「りみも、もちろん香澄たちも、ロゼリアみたいになれるように頑張らないとな」

「ええっ!?ろ、ロゼリアはちよつと目標が高いんじゃないかな……?」

「何言ってるんだよ。目標は高い方がいいだろ?」

「そ、それはそうだけどく!」

そんなやり取りをしている二人と別れ、一人夜道を歩く友希那は……。

「そうだったのね……。道理で、似ているはずだわ……」

意味深な独り言を残しながら、暗闇へと消えていった。

phrase 23 亀裂

「今日も終わらなかったね〜」

「うん。それに、また先生に怒られちゃった」

翔たちが蔵に集まっていた時から数時間が経った。日もすっかり暮れ、香澄はたえと一緒に帰っている途中だった。たえも電車通学のため、香澄とは帰る方向が一緒だった。

「練習にも間に合わなかったし……。あーあ、また明日の居残りか……。やだなく」

「でも、楽しかったよ。香澄、ギターの呑み込みは早くてびっくりしちゃった」

翔が教えてくれたように、香澄はまだギターを始めて日が浅いみたいだった。弾き方もよくわかっていないみたいで、弦を弾くように音を鳴らしていただけ。

だから、まずはギターのコードについて教えることにした。香澄も昨日からやる気だったし、居残りの時間になったら、すぐにでも教えようって決めてたんだ。と言っても、まだ簡単なコードしか教えていないけど。

最初は苦戦しているみたいだったけど、少しずつモノにしているみたいだった。それは、香澄のギターに対する姿勢ややる気が相当なものだからだと思うんだ。

「えへへ、私も！ね、おたえはいつからギターやってるの？」

「小学生の時からかな。あの時はピアノを習っていたんだけど……」

「えっ、おたえピアノやってたの!？」

「うん。でも、すぐにやめちゃった。楽しくないわけじゃなかったんだけど、そこが色んな楽器を教える音楽教室でね」

懐かしいな。あの時はピアノに夢中になっていたけど、今ではギター一筋だから。まさか昔の自分も、こんなにギター大好きになるとは思っていないだろうなあ……。

私がそうなったのも、ある出来事が関係していて……。

「それでそれで?」

「いつもみたいなのに音楽教室に来てただけど、付き添いのお母さんとはぐれちゃって。それで、探しているうちにギターを教える教室に入っちゃったんだ」

お母さんに似ている人を見つけて、てっきりお母さんだと思って後をつけちゃって。そうしたら全然違う人だったんだけど……教室に入ったなら、その人がギターを弾いてて。

演奏している姿がかっこよくて、何だかしびれちゃって。すぐに心奪われてた。あの時、間違つて教室に入らなかつたら、ギターをすることだつてなかつたかもしれない。

もしかしたら、昔出会ったあのベースの上手な女の子と仲良くなることだつて……。

「……………」

「……おたえ？」

「えっ、あ……ちよつと懐かしくてボーつとしてた」

あの子の事、思い出すなんて。また会えるのなら、会つて話かしてみたいな。

今、何をしてるんだろう……？

「私がギター始めたきっかけは、本当に偶然だったから。そこで聞いたギターの音がどうしても頭から離れなくて……それでギターを習い始めたんだ」

「わあ、すごい！それって運命だね！」

「うん。……ふふっ」

「おたえ？どうしたの？」

「香澄、今翔と同じこと言つてた。翔にこの前話した時も、運命だなんて」

SPACEでバイトを始めて、翔と音楽の事について話している時だった、楽器を始めたきっかけを話した時、翔はまさに香澄と同じこ

とを口にした。

何だか似てる。香澄と翔って。だから、香澄といると楽しいのかな。そう思ったら、何だか嬉しくって。

翔と出会って、私は救われたから。

「なーくんと同じか〜……。えへへっ、私、何だか嬉しいな」

「そうなの？」

「なーくんと一緒の気持ちだったから、それがとつても嬉しいんだ！」

香澄、本当に嬉しそう。さつきよりも声が弾んでる。ほっぺたもちよつと緩んでる。もしかして、香澄って……。

「香澄、翔の事好きなの？」

「……っ!? え、あ、う、い、ええっ!? お、おお、おたえ!! / / /」

香澄、相当慌ててる。こんなに動揺して、言葉も飛び飛びになる人って初めて見たかも。今の香澄、ちよつと可愛いかも。

「凶星？」

「い、いや私、そんな事ないよ!? ナーくんはなーくんで……。その、幼馴染でしかないし……。」

「いつから好きなの? きっかけは? もしかしてもう付き合ってるのか?」

「ちよ、おたえ!! / / /」

「どっちから告白したの? デートとかした? キスは? いや、まさかとは思うけど……。一緒に寝たり、その先まで——」

「す、ストローツプ!! これ以上は恥ずかしいからやめよう! / / /」
あれ? 香澄、顔に手を抑えて悶絶してる。暗くてもわかるくらいに顔が真っ赤だ。色々聞きたかっただけなのに。

「そ、それに私、なーくんとは何も無いよ……。おたえが言うように、付き合ってるのかそう言うものもないし……。」

「でも、翔と一緒に嬉しいって。恋人同士だからかと思って」

「あれは普通に嬉しかったただけだよ! ……本当は、そうなれたらいいけど」

「香澄、何か言った?」

「い、言っていないよ!／＼／＼」

ふうん。何か残念。香澄、翔の事が好きなのかと思ってたのに。隠しているだけなのかな?

「そ、それよりもさ。おたえはバンドってやってるの?」

「ううん。まだ全然そんなレベルじゃないよ」

さりげなく話変えられた……天才なの?

けど、バンドか。私、ギターは一人で弾いてたから、そう言うのはあまり気にしたことなかったな。やりたいって気持ちも、そこまでなかったし。香澄に言ったように、レベルが不足してるのもあるけど。「えー、じゃあ私なんかまだまだだー……。コードも全然覚えられてないし……」

「……………」

確かに、香澄はまだまだかもしれない。コードだって、全てをものにできたわけじゃない。演奏なんてまだろくにできないはずだ。

けど、それでも。今の香澄には……。

「……大丈夫」

「えっ?」

「好きなら、大丈夫。ギターはね、弾きたい人が弾くの」

ギターが弾きたい。大好きで、早く演奏したいって気持ちが香澄にはある。確かな目標を、香澄はしっかりと持っている。

その気持ちさえ忘れずにいれば、きつと香澄は大丈夫だから。技術は、すぐに気持ちに追いついてくるよ。

「……うん!また明日も、ギターの事教えてね!」

「任せて、香澄!」

「……………」

蔵での練習を終え、俺は家に戻っていた。いつも通り、母さんは仕事で家にはいない。いるのは、療養中の美羽だけ。

……………いや。

「おつかえり〜！お兄ちゃん！」

「ただいま、美羽。テンション高いな」

「当たり前だよ！今日から学校に行けたんだから！」

そう。美羽は、今日から学校に復帰していた。家での退屈な生活とはおさらばし、朝も元気よく家を飛び出していった。よほど行きたかったんだろうな。

心配ではあったが、今日くらいは美羽の自由にさせてやらないとな。だから俺も、あえて話題には出さなかったし。本人は満喫できたみたいだから、何よりなんだけどな。

「聞いてよ、お兄ちゃん！私、今日学校でね！」

「はいはい。ちゃんと聞いてやるから、とりあえずごはんの用意するぞ。話はそれからな？」

「は〜い！」

クラスメイトと久しぶりにおしゃべりしたこと。休んでいた間の授業について教えてもらったこと。今日あった面白いことなんかも話してくれた。明日香も登校中にすぐ声をかけたみたいで、心配してくれてたんだな。

夜ご飯を二人で食べながら、俺は美羽の話し相手になってやる。話す美羽はずつと笑顔で、楽しそう。俺は相槌くらいしか打てないくらいに、美羽は延々と話し続けた。

楽しそうでよかった。何よりも、話す姿が生き生きとしていた。病気を抱えていることを、一瞬忘れてしまいそうになるくらいに。

だから、この先も美羽が笑顔で、何も苦しむことなく過ごしていけたら……………俺は嬉しいんだ。

「でね、その後何て言ったと思う？」

「わかんないな……。もったいぶつてないで、教えてくれよ」

「それはねく……。あれ、友達から電話かかってきた。ちよつと電話してくるね！」

友達同士の電話を、立ち聞きするわけにもいかない。美羽はその辺りも考えたのか、自分の部屋に戻っていった。

先にごはんを食べてしまうのも美羽に悪い。俺は適当にスマホをいじり、時間を潰すことにする。いくつかのサイトを見て、SNSを確認して。と、

「……どうにかしないとイケないよな、この問題」

そこに映っていたのは、ある事件を報道した記事。数年前に都内のある場所で起きたものだった。

概要を見ているだけで、腹が立ってくる。痛ましく、悲しい事件だった。当時はニュースでも少しの間取り上げられたほどの出来事ではある。

今でも、まだこの問題は解決していない。いや、表向きには全て収まっている。まだ根底の部分が、解決できていなかった。そしてこの問題をどうにかしなくてはイケない。他でもない、俺自身が。

「人って……。ここまでひどいことができるんだな」

この問題を解決するには、一筋縄ではいかない。だが、あの学校にとどまるためには、泣き言を言っても始まらない。その瞬間に、俺の居場所はなくなる。

そうなれば、俺の目的は……。

「いや〜面白かった〜！……。あれ、お兄ちゃん？そんなに深刻そうな顔してどうかしたの？」

「……ん、終わったのか。何でもないよ」

「ならいいけど……。何かあったら私にも言っつてよ？ 私たち、兄妹なんだから」

「ああ、わかってるよ」

そうだよな。俺たちは兄妹だ。だからこそ、心配にもなる。気にしたくもなる。

それでも……。

「……人の心を動かすって、どうすればいいんだろうな」

どうしても言えないことはあつて。

「……………」

大切だからこそ、陰で支えたいと願う事もあつて。

そんなか弱く、小さな願いを叶えるために課せられた使命は……。

あまりにも大きかった。

「有咲、おはようー！」

「おはようかす——げっ」

「俺を見てそんな反応をするな」

翌日。俺は久しぶりに、香澄と一緒に有咲の家に向かっていた。普段は香澄が有咲を迎えに行ってるからな。俺はのんびりと、一人か美羽と一緒に学校まで行っている。

今日は明日香と一緒に行くみたいだったし、美羽はいない。で、一人のところを香澄に捕まえられ、今に至るってわけだ。

「何でお前までいるんだよ」

「邪魔なら先に行くけど」

「それもそれで何かちげーんだよ！」

じゃあ俺は一体どうすればいいんだよ。

「けど、香澄が来てくれて嬉しそうじゃないか」

「えっ、本当なの有咲!?!」

「……っ／＼あーもう、そんな目で見んな！そんな事ねーから！」

「制服も着て、鞆も持って、すぐにでも出られるように準備して出迎えてくれた奴の言うセリフじゃないぞー」

「翔はいい加減黙ってろおー!!」

普段引きこもって学校行かないくせに、香澄が来るとわかったら準備してるんだからな。それで気がないなんて言い逃れ、通用なんてまじしないぞ？有咲？

「もうっ♪有咲ったらっ」

「ちよ、やめ……抱き着くなっって言っただろ！やるなら翔にやれ！」

「何で俺だよ」

「じゃあなーくん……ドーン！」

「うおっ!?ま、マジで抱き着くなよ！もっど相手を考えろ！」

年頃の男の子を相手にやる行為ではない。こいつには羞恥心とか、そんな感情は持ち合わせてないのか!?

「くっ……と、とりあえず行くぞ。有咲、早く出てこい」

「お前がタジタジしてるの見てたいから、もう少しだけこのままでもいいんだけど」

「んな事言っでないで、早く出てこい！学校遅れるぞ！」

で、強引に香澄を引きはがし、有咲を外に連れ出す。不満そうに頬を膨らませていた香澄だったが、これ以上は俺のメンタルが持たない。他人の家で女の子に抱き着かれるシチュエーションを想像してみろよ？

「っーか、お前また昨日も練習来なかつたな？」

「ごめくん、有咲く！おたえとギターの練習してたら、つい……」

「ん？香澄、あの時間にギター教えてもらってるのか？」

「うん！あつ、なーくんがおたえに指導役頼んでくれたんだよね？ありがとっ！」

どうりで課題が終わらないわけだ。しかもあの二人なら、すぐに歯止めが利かなくなるのも納得が行くな……。

「お前なあ……。私の蔵で練習するって話はどうなったんだよ」

「忘れてないよ！課題終わったら、ちゃんと行くから！」

「そのセリフ、何回目だつて話なんだよ。昨日も聞いたし、その前も聞いたし！」

「怒らないでよ、有咲く！課題も早く終わらせたいけど、おたえとの練習も楽しいんだよ！ちよつとずつギターも弾けるようになって、嬉しくつて！」

「……っ」

「それに、おたえとも仲良くなれるし！ギター教えてくれるあの時間つて、私楽しいんだよね！」

「…………」

少しずつ成長している感覚を知り、香澄も楽しいんだろう。上達すれば、誰だつて気持ちいい。できなかったことができるようになるのは、自分の可能性を広げる事にもなる。それは素直に喜ぶべきだ。

だが、有咲は。

「……ふーん。別に私の蔵じゃなくても、練習はできるつて事か」

「おい、どうした有咲？」

「何でもない。……何か、バカみたいに思ったただけだ」

ひどく冷めた言葉を吐き捨て、香澄の言葉に耳を貸すことはしなかった。

「おたえがアンプ持ってきてくれてね。それがちっちゃくて可愛いのだ！」

その日の昼休み。いつものように中庭に集合し、昼食を取っていた。だが、香澄の口から出るのは、たえの話ばかりだ。

それに有咲も、今朝と機嫌が変わってない。素っ気なく、どこか棘がある。この場にいるだけで、何故か気まずくなってしまふ。

りみも、この気まずさを感じているみたいだった。その原因として考えられるのは、恐らく……。

「おたえは音あんまりよくないって言ってたけど、ちゃんと音出るし！ギターもかっこいいんだよ！青くて、シュツとしてて！」

「そ、そうなんだあ……」
「……………」

まただ。香澄がたえの話をするたびに、有咲は嫌悪感をむき出しにする。その不穏な空気に触れ、俺とりみはどうにもできずに気まずくなっている。

「課題終わらせる気ないな？」

「あるよー！でも、ギターの方に集中しちやつて……」

「集中するところ違うって」

「おたえとギターするの、楽しいんだもくん！」

別にいつも通りの風景なんだけどな……。香澄と沙綾が楽しく話して。俺やりみも、普通に相槌を打って。

ただ一つ、ここまで有咲が無言を貫いている事だけが違っている。この違和感に、香澄は気づかないのか？

「か、香澄ちゃん……」

「どうしたの、りみりん？」

「あの……課題終わったら、また蔵で練習しない？香澄ちゃんがいないと……」

「そ、そうだぞ。言い出しっぺの香澄がいないと、何も始まらないだろ。な？有咲？」

りみが耐え切れなくなつて、香澄に練習に来るように促す。俺も助け舟を出し、どうにか有咲の気を引こうとするが……。

「私、関係ねーし」

「ええっ!?で、でも……」

ダメだった。まるで初めて会った時のように、冷たく斬り捨てあしらっている。笑顔なんて、見せようともしなかった。

「あつ、おたえだ！私、ちよつと行つてくるね！」

「香澄ちゃん……!」

「待て、香澄！これ以上は……!」

渡り廊下を通るたえを見つけ、香澄は俺たちを放っておいてたえの元に向かう。手を伸ばして止めようとしたが、少し遅かった。

俺たちの言葉は、香澄には届かなかった。有咲もまた黙り込み、残ったのは声を出すのもためらわれる気まずさだけ。

「ど、どうしよう翔君……」

「こればかりは……な」

不安そうなりみを安心させるため、俺はりみの肩に手を置く。沙綾も、何となく事情を呑み込んだみたいだった。

「お〜い、おたえ〜!」

「あつ、香澄。どうしたの?」

「昨日の練習、わかんないとこがあつて……Gコードなんだけど」

「それなら、Gコードは中指から抑えた方がいいかも」

「あ、そっか。こうか……」

ダメだ、あいつマジで気づいてない。自分の事で、周りが見えなくなっている。戻ったら、少し教えてやろうかな……?」

そう思っていた時だった。有咲が弁当を片付け、その場を離れようとしたのは。

「……おい、有咲?」

「何?」

「いや、何で戻ろうとしてんだよ。まだ休み時間あるぞ?」

「別に……翔には関係ねーだろ」

ひび割れていく。築き上げていた関係が、たった一瞬で。

「あ、有咲ちゃん……」

「市ヶ谷、さん……?」

「……失礼」

全てを置き去りに、有咲は一人に戻っていく。

「おい香澄! 有咲が……!」

「……? あつ、有咲! もう戻っちゃうの?」

「それが?」

「え……?」

最後に残った、香澄と言うピースも――。

「そこをどいてよ。……戸山さん」

「……っ!」

何もなかったかのように、崩れ落ちてしまった。

phrase 24 素直な気持ち

「どうして、有咲があんな……」

有咲がいなくなつてからの事。香澄はたえと一旦別れ、俺たちのところに戻つてきた。一瞬俺と目が合ったが、よくない状況を察したのか、たえは空気を讀んでその場を離れてくれた。

どうして有咲が。香澄の中で、まだその質問に対する答えは出ていない。

よく言えば、それは香澄がギターに真剣に向き合っている証拠。悪く言えば、そのせいで周りに目を向けられていない証拠。

香澄はひどく落ち込み、さつきまであんなに楽しそうに話していたのが嘘みたいにしぼんでいた。

「……わからないか？」

「えっ……なーくんは、わかるの？」

「わかるよ。りみも気づいているし、沙綾だって何となくわかつてる」
りみと沙綾が頷く。この場でわかつていなかったのが自分だけと知り、香澄は目を見開いていた。

「みんな、わかつてるって事……!？」

「ああ。香澄は、周りの事が見えていないんだ。今の香澄は、自分の事しか見えていない。真つすぐになれる姿勢は、確かに香澄のいいところだ。けど……こうなることだってある」

勢いが先走り、その結果すれ違いが起きてしまう。今の香澄と有咲は、そんな状態だった。

どちらも悪気はないのに。関係を壊したいなんて、心から思っているわけではないのに。

「香澄は、有咲の気持ちを考えたことはあるか？」

「有咲の、気持ち……？」

「あいつは、お前を待ってる。バンドやりたかって、そのために頑張ろうとしている香澄の事を、待っていてくれてるんだ」

香澄にとつては、わかつているのかもしれない。けど、わかつた『つもり』になつてるかもしれない。だから俺は、教えてあげないといけ

ない。香澄のために。

「あいつは、香澄と出会って変わり始めてる。最初はろくに口も聞かなかったのに、今は全然違う。それは、有咲にとって香澄が信頼できる相手で……何だかんだで大切に思ってるからって事じゃないのか？」

「有咲ちゃん、いつもはバンドに興味ないって言ってるけど、本当はあるんだよ？それは多分、香澄ちゃんの影響じゃないかな？私も、香澄ちゃんのおかげでバンドやりたいって思えたから」

「そうだ。本当は、辛かったはずなんだ。この場を離れる事も、香澄を裏切るような真似をする事も。戸山さん、と名前を呼んだ事も。」

自分から、香澄との関係をなかつた事にしたことも。

「そ、それは私だってわかってるよ……。有咲、素直に話してくれないけど、初めてライブ観に行ったとき、すっごくキラキラしてて……。楽しそうだったんだ」

「だったら、もっと有咲の事見てやれ。あいつ、香澄の事を待ってるんだ」

「私を……」

一緒に練習したくて、たまらないんじゃないのか？あのキーボードだって、そう言う事なんだろう？有咲……。

「香澄ちゃん、この頃ずっと花園さんと一緒だったから……。寂しかったのかも」

「ま、要すんに軽いやきもち。拗ねて飛び出して行っただけだ」

「そ……それじゃあ私、どうすれば……」

「決まってるだろ。香澄がちゃんと謝れば、許してくれるから」

「あ……」

香澄の中で、靄がかっていた疑問が晴れていく。次に何をすべきか、その答えもハッキリと見えてくる。

「……私、ダメだね。自分がよかったら、それでいいって。知らないうちに、そう思ってたのかな」

「わからない。けど、これで香澄はわかっただろ？なら、もう大丈夫さ」

「……うん、ありがとう、なーくん。私、有咲の事何にも考えてなくて、自分しか見えてなかったから……待っててくれたのに。……私、結局こうなんだ」

何も知らなかったから、失敗してしまう。失敗を知れば、きっと次は間違えない。香澄なら大丈夫だ。

「だったらさ、香澄。今日こそは課題終わらせて、市ヶ谷さんのところに行った方がいいんじゃないかな？」

「さーや……そうだね。おたえには悪いけど、私は有咲と話をしないと。このまま有咲とずっと離れ離れになるの、私嫌だから！」

香澄の声色に、活力が戻っていく。ようやく、香澄らしくなってきたわけだ。

問題は有咲だ。あの様子だと、素直に聞いてくれるかも怪しい。こう言うところは頑固っぽいからな……。

「……りみ」

「えっ？何かな、翔君」

「香澄が話をつける必要があるのはわかってるが、それまで何も知らないわけにもいかない。俺たちも、できる限りは説得してみよう」

「うん……そうだね」

どうして、私はこんなにもイライラしているのだろう。

「……………」

決まってる。全てはあいつのせいだ。あいつが、私の事をないがしろにしているからだ。

「向こうから振り回しておいて、結局これかよ……」

戸山香澄。最初に会った時から、変な奴だと思ってた。

いきなり蔵に現れて、勝手に人のギターに触るところか、無許可で持ち出す始末。どんな教育受けたら、あんな風に育つのか。一度親の顔が見て見たい。

そこから無理矢理ライブハウスに連れ込んで、ライブを見せられて……。キラキラドキドキだっけ？意味不明な事言って、私をバンドに誘い込んできた。

そんなの知らねーし。私、そんなのに興味ねーし、面倒だし。大体、香澄と観たライブだって、何が楽しくて目を輝かせてたのかもよくわからなかったし。

『気づいてる？有咲も、あのライブ観てすっごく夢中になってたんだよ？』

「……………」

そんなわけない。あの時の香澄の言葉は、ただの数合わせ稼ぎに過ぎない。別に私なんて、バンドに情熱があるわけでもねーのに。

もつと適任な奴がいて、キーボードだって上手な奴とかいるだろ。それなのに、私を引きずり込んで、その気にさせて……………挙句の果てに私を放っておくのかよ。

でも……………あいつのバンドへの思いは。

「……………」

ああ、くそっ！何でも香澄の事しか考えられないんだよ！あんな奴の事、どうでもいいはずなのに！

「……………い……………りさ」

なのに、どうしてあいつの、香澄の事を考えると……………。

「ちよ……………て、あ……………」

こんなにも、胸の中がモヤモヤするんだよ……っ！

「聞いているのかよ、有咲！」

「……っ!？」

誰かに肩を掴まれた。ここは人通りの多い放課後の廊下だ。私は大声を挙げそうになるのを制し、後ろを振り返る。

「やっと気づいたのか。呼んでも無視。目の前横切ってるのにスルー。さすがにそれはないだろ」

「……翔か。それに、牛込さんも」

言われてみれば、ここはA組の教室の近く。こいつらがいてもおかしくないのか。

香澄は……いないみたいだな。その事にほっとしている自分と、なぜか悲しんでいる自分がいる。

「何の用？練習の事？それとも他に何かある？」

「あの、有咲ちゃん。今日の練習についてなんだけど……」

「やっぱりな。別に、勝手に使ってるよ。私は自分の部屋にいるし、どうせ今日も二人だけだろ？」

「……いや、香澄も来るぞ。今日は課題を終わらせるって、約束したからな」

早めに話題を切り上げようと、私は適当に返事して歩き出す。翔が余計なことを言ったせいで、すぐに立ち止まってしまったが。そんなもの、無視すればよかったのに。

「……香澄？誰だよ、そいつ」

「有咲……！冗談もいい加減にしろよ。戸山香澄だ！」

「うるさいって。ここ廊下だけど？」

周囲がざわつき始め、翔も口を紡ぐ。こいつも、何必死になっただか。そんなに幼馴染の女の子が大事ですか。

「で……ああ、戸山さんね。あいつはもう、蔵の中には入れねーよ？」

「えっ!？ど、どうして、有咲ちゃん!？だって、あのキーボードは——」

「入れないって言ってるでしょ？何回も言わせないでくれない？」

牛込さんにも強く当たってしまった。それだけ、私の中でいら立ち

が募っている証拠だった。

『香澄』と、その言葉を聞くだけで。前は何もなかったのに。心地よい鈴の音色のような、そんな響きだったのに。

「有咲、香澄を入れないってどういうことだよ。あいつとバンドするんじゃないかったのか？」

「何それ？戸山さんが勝手に言ってるだけでしょ？私には関係ねーよ」

「その勝手なわがままに、お前も付き合ってみようって思ったんじゃないのか？だから香澄と——」

「……っ、ああもう！うるせーんだよ！香澄香澄って……その名前を呼ぶな！もう、どうだっていいんだよ!!」

我慢できず、私は強く吐き捨てる。さつきから香澄ばかり……：神経に障る。

が、気づいた時にはもう遅かった。首位から怪訝な目を向けられ、私は耐え切れずにその場を逃げ出す。

「あつ、ちよ……：待てよ有咲！」

「翔君、追いかけないと！」

「ああ。けど、りみは残れ。香澄の事もあるし、課題終わるまで待つて、そのまま合流してくれ」

「うん。翔君、気を付けてね」

「わかってる！」

生徒の波をすり抜け、私は何とか昇降口へ。靴をすぐに履き替え、校門の外に出る。

そのまま走り続け、ある程度学校から離れることができた。これなら、もう大丈夫か。

「これで少しは——っ!？」

「待てよ！話はまだ終わっていない！」

「ち……！私には関係ねーんだよ！しつこいと、お前らも蔵に入れねーぞ！」

思っていたよりも、追い付くスピードが早い。私は逃げ続けた。普段使わない裏道や慣れない脅し文句まで使って、それでも追いかける

翔から逃げた。

すれ違う人はどうでもいい。しつこくつきまとうあいつから、逃げられるのなら。

香澄の事で私を惑わせようとするあいつから……逃れたかったんだ。

「……はあつ、やっと家かよ」

気が付けば、もう家の前にいた。こんなにも疲れて家に帰るのは久しぶりだった。

門をくぐり、息を整えながら家に入ろうとした時だった。

「……待って、さつきから言ってるんだろが。有咲」

膝に手をつき、翔が家の門の前に立ったのは。私を気にもせず、ズケズケと家の敷地に入ってくる。

まるで、香澄と初めて出会った時のようで……。

「……っ。まだ追いかけてくるのかよ。しつこーぞ」

「そうさせるのは、お前が素直じゃないからだ。変な強がり言ってる澄を避けようとして、それが本心じゃないんだって見え透いてる。望んでもない事しやがって」

「はあ？何だよそれ。まるで私の事が分かったような口ぶりだな？」

「当然だ。見てたらすぐわかる。お前、感情が表に出やすいからな」

「適当な事言いやがって。こつちを言いくるめようとして言ってるだけだろ。あいつの言う事なんて、気にする必要なんてない。」

「香澄と一緒にいる時のお前、活き活きしてるからな。あのキーボードだって、その気持ちの表れじゃないのか？」

「そんな事……」

「それに、お前が一番よくわかってるはずじゃないのか？本当は香澄と一緒にいたいんだろ？この数週間、楽しかっただろ？だから、いつも香澄の傍にいる」

「そんな事……っ！」

「香澄から逃げる必要がどこにある？自分を偽って、見せたくもない

自分を演出して、それが香澄を傷つけてるんだって、どうしてお前は気づくことができないんだ!？」

「……っ、わかったような口ききやがって! 香澄が好きだあ? 逃げるだあ? 自分を偽ってるとか……そんな事、勝手に決めつけてんじやねーよ!!」

大声で当たり散らし、抑え込んでいる感情を爆発させる。さつきから黙って聞いていれば、調子のいいこと言いやがって。

私にはもう、関係ないんだ。香澄なんて、赤の他人でしかない。バンドもしないし、話すことだって何もない。

私の声が気になり、家からばあちゃんが出てきたが、それを制して中に戻す。ここは翔と話をつけておきたいんだ。こいつは、どうせ何があっても引き下がるつもりはないだろうし。

私は翔に視線を戻し、真っ直ぐに眼光を送って――。

「……決めつけている、だど?」

その瞬間、私は翔のトーンが低くなるのを聞いた。そして向けられる、私への目つき。

怒っているのか。悲しんでいるのか。だが、どこか喜んでいるようにも見える。矛盾した感情を察知した私は、翔が今私に対して何を考えているのかわからなくなってしまう。

その目は、一体何なんだよ……?」

「……お前、俺たちが初めて出会った時の事、覚えているよな?」

「忘れるわけねーだろ。うちの所有物を泥棒しようとした極悪人と、意味わかんねーライブ観ることになったろ」

出会いは最悪だった。そんな奴と、これからも関係を持っていこうとする方がおかしいだろ。私は別に、何も間違っていない。

「あの時のお前は、とにかく冷めていた。全然笑わないし、無愛想で面白くないし」

「……散々な物言いしやがって」

「極めつけは、お前のあの質問だ」

「……質問？」

「何で女子校なのに、花女の制服を着ていたか。有咲、確かにお前はそう俺に聞いたはずだ」

「そう言えば、そんな事も聞いた気がする。結局聞きそびれて、後から事情は知ることになったんだ。こいつが特務生扱いで入学したつて事。」

「その話は何だよ。別に、今は関係ねーだろうが」

「関係あるさ。それに、俺にあの質問をしたこと自体おかしいんだ。俺の事は、入学式の時に全校生徒の前で知らされているはずだからな。中等部の生徒にもだぞ？……知らないはずがないんだよ」

「今の話を聞く限りそうかもしんねーよ。女子校に一人、男子生徒がいるなんて、有名人どころか歴史に名を遺すくらいだ。」

「けど……見えない。こいつは今、どうしてこの話をしている？」

「俺たちが有咲と会ったのは、それからしばらくしての事だ。もう俺の事は、普通に認知されている時期だ。なのに、どうして俺を知らなかった？学校に行っていれば、すぐわかる事なのに」

「……それが、どうしたんだよ」

「意味が分からない。この期に及んで過去の話か？それで香澄との馴れ初めでも語り聞きさせて、香澄への気持ちを再興しようとも言うのか？」

「くだらねーんだよ！昔の事を並べ立てて、それが何になるんだよ！お前を知らない話とか、別にどうだっていい！」

「……………」

「どうせ香澄の話に持っていくだけの、前座なんだろう!?そうやって心揺さぶって、何とかしようってわけだ。笑えるな。そんなもんに何の興味もねーよ！」

「……ああ、そうだよな。だったら、単刀直入に言ってやる」

冷たい風が吹く。そんな中、向かい合った翔は静かに言い放つ。

「有咲。お前は……学校に行かないことが、当たり前になってたんだよな」

翔の言葉が、私に深く突き刺さる。自覚はしていたのに、何故か痛い。底冷えするような何か、私の中を駆け巡る。

「いじめとか、そう言う話じゃないんだろ。けど、ずっとお前は一人だった。それでいいんだって、自分に言い聞かせていたんだろ。お前、人付き合いとか苦手そうだからな」

「……………」

ああ、そうだ。私は一人だった。家でも学校でも、いつも一人。それが普通だったんだ。

別に仲間外れにされてるわけじゃない。学校でも、声をかけられることはあるから。でも、私はいつからか学校に行く回数を減らし、一人になっていった。

それは、私が他人と接することが苦手だったから。

小さい時から、ずっとだった。どうしても他人行儀になってしまつて、本音で話ができない。偽りの自分を演じて、仮面をつけて……そんなんで、上手く付き合いを重ねるなんてできるわけねーだろ。

それに、周りも気まづくなってしまう。当たり障りのない、何の面白みもない返答しかないから。最初は普通でも、すぐにどこかぎこちなくなってしまうんだ。

そんな自分を見るのが嫌で、気まづい空気になるのが嫌で、私は他人から距離を取った。一人の方が気楽だって気づくには、そう時間もかからなかった。

誰とも言葉を交わさなくても、一人だってやっていける。最小限の行動さえとっていれば、何も困ることなんてない。そう言い聞かせて、私は今こうしているんだ。

「一人になる生き方を選んで、ずっと閉じこもっていたんだ、お前は自分の世界の方が、何も考えずにいられるから。満足できるからな」
「……別に、一人でいる事なんて平気だし。私が望んで、こうしようと思ってるんだ。周りに合わせて生きるほど、私は器用でも何でもない」

「それは、本当にお前の望みなのか？」

「そう言ってるだろ。私は、今のままで十分なんだ。だから……放っておいてくれ。このままでいたいんだ」

単位も落とさない程度には学校には行っている。成績だって、今も学年でトップをキープしているんだ。

一人でも、距離をおいても、それが悪影響にならないのなら問題ない。誰にも文句を言われるような生き方は、私はしていない。

一人でいる事が間違いなのかよ？もっと周りと協調性を持って、仲良くして……それが普通なら、そうするしかないのかよ。出来ない奴の気持ちに立って、一度考えてみてくれよ。

私は……今のままでも平気なんだよ。

「……俺には、そうは思えない」

「……っ!?!」

なぜ。私は言ったはずだ。なのにそれでも、否定して言葉を重ねようと言うのか。

「私が……っ、平気だって言ってるだろ。何否定してんだ」

「否定するさ。あの時の有咲は、寂しそうだったからな。今の自分が、心のどこかで満足していないことに気づいてるみたいだったから」

「な……っ!?!」

さつきとは違う質感を持って、翔の言葉が私を満たしていく。心をわしづかみにされたような、強い衝動を感じた。

「言っただろ。お前はわかりやすいんだって。ずっと一人で、冷めて、だから悲しそうだったんだな。キラキラドキドキなんて、してなかっただろ」

「それは、香澄の……」

「そうだ、香澄だ。お前を変えてくれたのは、他でもない香澄なんだ。強引に引っ張り出して、外の世界を見せてくれた。そこには、お前の知らなかった世界が、喜びが……たくさんあったんだ」

「私が、香澄に……?」

「一緒に昼食べたり、話したりする楽しさ。誰かと過ごす時間の充実さ。香澄はあんな奴だけど……大切な物を持つてる。そいつを共有して、お前は変わったんだ。確かに」

変わった、だって?そんな事簡単に言ってくれるよな。

あんな奴、鬱陶しいと思えない。こっちの気持ちなんか何も考えないで、バンドするとか言いやがって。ずっと振り回して、自分の事だけで……。

何もいいことなんてなかったはずだ。ギターもあいつのものになって、やりたくもねーライブに無理に付き合わされて。そんなの、こっちが大損してるだけじゃねーか。

そんな厄介者が、私を変えてくれた?何を言い出すんだよ。あいつは、私の事を邪魔したただけなんだ。迷惑でしかなかったんだ。

引っ張ってくれて誰が頼んだんだよ。外に連れ出してくれなくて、いつ言っただけ言うんだよ。私は、あいつの事なんか――。

『有咲ー、お待たせー!』

『よかった。早退したって聞いたから心配しちゃった。朝もなんか変だったし』

『ごめん、ちゃんと持ってなかったから……!本当にごめん……!』

『すごい……すごいすごい!すごい!すごい!すごい!すごい、すごい!』

何だよ……。何なんだよ?!?どうして……っ、あいつの事ばかり頭

に浮かんでくるんだよ!?こんなの――。

『気づいてる?有咲も、あのライブ観てすっごく夢中になってたんだよ?』

「……!」

『有咲、ツンケンしてるけど……音楽が好きなんだなって気持ちは、伝わってきたよ。そんな有咲とだから、私は有咲とバンドがしたいんだっ!』

「バンド……」

違う、そうじゃない。本当は……。

「けど、お前はその喜びを邪魔されようとしている。それで無意識に、怒りが芽生えるようになったんだ」

「邪魔って……」

「花園たえ。香澄が、自分とは違う人と仲良くなっているのを見て、置いて行かれているように思ったんだよな。だから寂しくて、どうしていいかわからなくて、つい香澄に突き放した態度を取ってしまったんだよな」

「そうだ、嬉しかったんだ。バンドに誘われて、私を必要としてくれて。」

「だからその気になって、キーボードも買って。あいつのために、何でもいから力になってやりかった。」

「あいつといると、楽しかったから。」

「……悔しいけど、翔の言う通りかもしれないな」

でも最近の私は、香澄の中で必要とされていないんじゃないかって

思ってた。他の人と仲良くなつて、ギターだつて上手くなつて。どんな先に進んで行くのに、私だけが取り残されているようで……怖かった。

昔なら、きつと思ひもしなかった。一人でいる事に、ここまで恐怖を覚えるなんて事は。だから、香澄に私の事を見てほしかった。

蔵での練習も忘れて、私の事もそっちのけで。今日の昼休みだつて、勝手に私の前からいなくなつたんだ。

……つて、何だよ。それって嫉妬じゃねーか。私って見苦しいな……。

「有咲がそう思うのなら、もつと素直になれ。香澄から逃げるな」
「……………」

「今逃げたら、また繰り返しだ。それでいいのか？ いや、よくないだろう？ わかっているはずだ」

「……………」
「あの時からお前は、変われたんだ。そんな自分を否定するな。香澄によつて変わった、自分を誇れ」
「……………」

何だよ、こいつは……。私なんかのために、ここまで言ってくれるなんて。マジで、香澄みたいじゃんか。

嫌だと言つてもすぐに先回りして、必死に腕を伸ばして私の事を掴もうとする。逃げてても逃げてても、引き込もうとして明るい言葉を向けてくる。

でも……その眩しさが、私には羨ましかつたのかもな。私は、自分から他人の腕を振りほどいたから。それでも腕を取ってくれる、香澄のような奴に……私は心のどこかで、憧れていたんだな。

それは、翔も……。

「翔君、有咲ちゃん！」

「遅かつたな、りみ。それに……」

その声で、ハッと現実に引き戻される。そこには、息も絶え絶えに

疲れが見えている牛込さんが。ここまで走ってきたのか。

そして、その後ろには……。

「有咲……！」

私が今、一番顔を合わせたくないと願い、そして一番顔を合わせた
いと願う張本人……。

「……香澄」

私を変えてくれた、戸山香澄が……そこにはいた。

phrase 25 仲直り

「え？今日はギターの練習はいいの？」

「うん。ごめん、おたえ。私、この課題終わらせて行かなくちゃいけないところがあるんだ……」

時は遡って家庭科室。香澄はおたえに事情を話し、課題に集中したい旨を伝える。どうしても、今日だけはギターと向き合うわけにはいかなかった。

他に向き合うべき相手が、香澄にはいる。彼女の元へ、急いで向かわなくては。

「……もしかして、今日のお昼休みの？」

「うん……。私の大切な友達なんだ」

そう、大切なんだ。なのに私は、どうして気づくことができなかつたんだろう。

いつも通りに見えていただけで、本当は違っていたんだ。もつとちゃんと、有咲の事を見ていたら……。

「だから、今日はごめん……。ギターはまた、時間ある時に教えてほしいんだ」

「そんなの気にしないで。ギターならいつでも練習できるけど、あの子の事は今じゃないといけない。そうなんですよ？」

「早く行って、直接謝らないといけないんだ……。私のせいで、悲しませちゃったから」

「だったら、早く終わらせようよ。私も今日は、課題モードで行くから」

「おたえ……ありがとう」

自分が周りを見ていなかったせいで、有咲は。私の頭の中には、申し訳なさど自分への情けなさが隙間なく満たされていた。

早く会って話したい。まだ何を話すかなんて決めてないけど、有咲と仲直りはしたい。許してもらえるかは分からないけど、謝りたいんだ。いつまでも、有咲とあのままは嫌だから。

こんな形で傷つけて……私、最低だな……。

「さあ、香澄。早く始めよう。時間がないんでしょ？」

「……うん！」

私たちはすぐにナツプザック作りを始めた。言葉は交わさず、手元の作業に集中する。単調な工程の繰り返しで、根を上げそうになってしまう。

けど、そんな事は言ってもらえない。私は何度も喝を入れ、弱りそうになる気持ちを奮い立たせる。有咲の苦しみに比べたら、こんなのもないんだ。

「……よし、できた」

それから十分ほど。私はようやく、ギターケースを完成させた。ギターに気を取られていなかったら、こんなにも早く終わっていたなんて。

「それ、貸して」

「おたえ？」

「ギターケース。私も終わったから、香澄の分も出しに行ってくる。

……待っているんでしょ？」

おたえは手を差し出して、私を待っている。私の事を気遣ってくれたことが嬉しくて、思わず抱き着きそうになるのを我慢する。

私はすぐにギターケースをおたえに託し、荷物を持って家庭科室を出る。走ってはいけない廊下を全速力で駆け抜け、すぐに昇降口に靴を履き替え、校門を抜け出した。

「有咲、待ってて……！今行くから……！」

「香澄ちゃん！」

と、私の事を呼ぶ声が聞こえて、辺りを見渡す。近くの電柱から顔をのぞかせ手を振るのは、りみりんだった。私は急ぐ気持ちを抑えて、りみりんの元に向かう。

「りみりん！課題、終わらせてきたよ！今から有咲の家に……！」

「私も、香澄ちゃんが来るの待ってたんだ。翔君、先に有咲ちゃんを追いかけて行ったから、多分家にいるんだと思うけど……！」

「なーくん……うん、急ごう！」

りみりと合流して、私はまた走り出す。有咲に会いたい。話したい。そんな私のために、何かしようとして動いてくれる人がいる。ぐるぐるとせめぎ合う気持ちが背中を押し、スピードは上がっていく。

何を話せばいいのか。何を伝えたら、許してくれるのか。どんな思いで向き合えば、私の気持ちは届いてくれるのか。

どうしたら、有咲はまた、笑ってくれるのか。

「……………」

「かつ、香澄ちゃん！もうすぐだよ！」

後ろから必死についてくるりみりの声で、私は今、有咲の家のすぐ近くまで来ていることに気が付く。

結局、悩んでも答えは出なかった。話す事は何も決まらなかった。

「翔君、有咲ちゃん！」

「遅かったな、りみ。それに……」

有咲の家の門をくぐり、私はすぐに二人の姿を視界に捉える。

ようやく会えた。会って話がしたかったんだ。そんな有咲の表情は、何か吹っ切れたようにも見える。ここに来るまで、なーくんとかあつたのかもしれない。

「有咲……………」

「……………香澄」

私は切れた息を落ち着かせてから、有咲に近づく。でも、いざ目の前にしても、言葉は上手くまとまらない。

悪かった事、許してほしいこと。これからも仲良くしてほしい事。言いたいことはたくさんある。それをうまく言葉にすることが、難しいんだ。

なら、どうすればいい？

「……………」

そんなの、決まっている。考えてもダメなら――。

「有咲……」

そのままの気持ちを、ぶつけるしかない。

「ごめん、有咲！私、有咲の事、ちゃんと見てなかった！」
「……………」

「何にも考えないで、自分の事で精一杯になって……！有咲が離れるまで、有咲の気持ちに気づいてあげることができなくて……本当にごめん！待っててくれたのに……」

昔から、考えることは苦手なんだ。ウジウジしてても仕方ない。頭の中に浮かんだ言葉の一つ一つを、そのままぶつけていくしかないんだ。

「これからは気を付けるよ！約束する!!」

「……香澄」

「だから、有咲……許してよ。私、このまま有咲と一生仲良くできないなんて、無理だよ……。耐えられないよ……っ！」

感情が爆発し、思わず膝をついてうなだれる。頬を熱いものが伝い、視界もぼやけてよくわからない。胸の奥も、何だか痛いんだ。

伝えられることは、全てをさらけ出して言い切った。それでダメなら……考えたくない。

でも、私はきつと諦めないんだと思う。そんな事できないし、認められないから。許してもらうまで謝り続ける。それでもダメなら、何度でも。

だって私……有咲といるのが、楽しいから。

「……契約違反」

「えっ…………？」

ポツリと、有咲がつぶやく声が聞こえて、私は顔を上げる。何かを堪え、私を見下ろしている有咲が、そこにはいた。

「一緒にお昼食べるって言つたのに、どっか行く……！うちで練習するって言つたのに来ない……っ！」

「ごめん、有咲……」

「私の事故つておいて、すぐに違うところに行つて……っ！バンドやりたいんだろ!?その気にさせておいて、適当に振り回すんじゃないよ！ちゃんと、最後まで責任取れよ……」

何か、私の髪を濡らした気がした。拭き取つてはいけない、冷たい雫だった。

「もうしない。放つておいたりなんかしない！私バンドやりたいんだよ！有咲と、一緒に……！」

「……なら、もう一度契約。つてか、お願い」

「お願い……？」

「もう少し、いやほんの少しだけでいい。私と……これからも仲良くしてほしい。友達で、いてほしい」

有咲は横を向いてしまったから、顔は良く見えなかったけど……それって……！

「そしたら、蔵も使わせてやる。不本意だけど、バンドだつて——」

「う、うん！そんなの、仲良くするに決まってるよ！それに私たち、最初から友達でしょ！」

「え……！」

改まる事でも、何でも無い。私は最初から友達のもりで。これからも友達の関係でいたいんだ。

離れそうになって、また戻ってきてほしいと願つたのは私なんだ。頼むのは私の方なのに。

「……つたく、お前は、もう、本当……っ！どうして、こうも変な事ばつか言いやが……あくもう……っ！」

涙声になる有咲を見て、私も泣きそうになってしまう。必死に顔を隠し、目元を見せまいと躍起になる。

でも、一瞬見えた口元は、ほほ笑んでいて……。

「……ありがと、有咲」

「はっ、何がだよ……。感謝するのは、こっちだったのに……」

「えっ、それってどういう……。？」

「べ、別に関係ねーよ！絶対言わねーからな!!」

「よかつたな、香澄。有咲と仲直り出来て」

「うう、なくくくん……。本当にありがと……。！」

ようやく香澄と有咲は和解し、俺たちは蔵へと場所を移していた。あのまま外にいても、特にやることもないからな。

安心して気が抜けたのか、香澄は今更俺に泣きついてくる。香澄にも非があつたとはいえ、今回はとぼつちり。有咲が勝手に話をこじらせただけだからな。香澄も気が気でならなかつただろう。

恥ずかしさはあつたが、今回は仕方ない。抱き着かれてはいるが、俺は香澄をどかさそうとせず、軽く背中をなでてやる。

「俺じゃないだろ。香澄が頑張ったんだ」

「そうだよ。香澄ちゃん、よかつたね」

「りみりんもありがと〜！私、有咲に許してもらえたよ〜!!」

何にせよ、あのまま離れ離れにならなくてよかつた。少しは俺の言葉も、有咲に届いてくれたって事なのかな……。？」

「ところでな〜くん。さつきからずっと気になってたんだけど……」

「どうした？」

「あのキーボードって、どうしたの？前に来た時にはなかつたけど、もしかしてゴミの中にあつたの？」

「ゴミっつーな！こんな綺麗なガラクタ、どこにあるってんだよ!!」

と、タイミングよく有咲が飲み物を持って地下室に入ってきた。家

の外でヒートアップして、喉が渴いていたからな。有咲が人数分の飲み物を取りに行ってくれていた。

俺たちにはジュースを。何故か有咲は一人だけ緑茶。

「好みが渋いな。じじいか」

「年寄り扱いすんじゃないよー!」

「それで有咲、あのキーボードは?」

「えっ、あー……あれは……」

わかつてはいたが、目を泳がせて言葉に困っている。元の関係に戻ったとはいえ、有咲は有咲だ。すぐに根つこの部分が大きく変わるわけじゃない。

香澄に言い寄られて、それが香澄のためにやったことだと素直に言い出すことが恥ずかしくて。今までに何度も見てきたはずの光景も、なぜか今は俺たちを安心させていた。

「そ、その……買ったんだよ」

「えっ、有咲が!」

「悪いかよ!お、お前、バンドやるとか言ってたし、必要な……って」

「あ……有咲っ!」

「わーっ!もう、すぐに抱き着いてくんないやっばお前、ウザくて仕方ねえ!」

「えー!?そんなー!」

突き放そうとしたみたいだったが、逆効果になっただけだった。香澄は抱き着く勢いを強め、有咲にしつこくまとわりつく。もつとも、有咲はまんざらでもない様子だったけど。

仲睦まじいって、この事を言うんだろうな。特にわだかまりも残さず、以前のように談笑できている。無事解決できてよかったよ。

「フフツ。有咲ちゃん、よかったね」

「よくない!笑ってないで助けてくれよ!」

「嬉しそうにしてるのに、助ける理由が見当たらないんだけど」

「どこがだよ!」

照れながら言われてもな。と、ここで香澄が話をキーボードに戻す。

「それで有咲、あのキーボード買ったって言ってたけど……」

「ん？あー、あれはな……」

「トネガワ売ったんだって〜」

「えっ？あの葉っぱ売れるの!？」

「おま、トネガワなめんなよ!」

盆栽売ってまで、キーボード用の資金を確保してたのか。買ったのは前に蔵に来て知ってたが、そこまでは知らなかった。

俺たちと会う前から、有咲は盆栽が趣味だったはずだ。そいつを売るなんて、よほどの事情がないとできないだろう。

つまりは、あのキーボードに込められた思いは相当な物って事だ。

「ね、有咲！弾いてみて!」

「ふふくん、いいぞ」

「調子いいな」

「余計な口はさむな」

そうは言っても、キーボードに触れようとする有咲は上機嫌そのもの。まだ少し覚束ない手つきだが、俺たちに聞かせるように演奏を始めた。

「—————♪」

「すごい!」

「どーよ、音も変わる!」

「すごいすごい!有咲、キーボード上手だね!」

「うん。私もそう思うよ」

「私も!有咲ちゃん、前から練習頑張ってる……あれ?」

ん?今聞こえた声何だ?香澄でもないし、有咲でもないし、当然俺でもない。りみも相槌打ったのはいいが、困惑している。

「おい、今の声誰なんだ……」

「私だけど」

「うわああ!?!って、花園たえ!?!何でここに!?!」

「どうも、市ヶ谷さん」

ヌツと姿を見せたのは、あのド天然女、花園たえ。有咲も突然の事に体をのけぞらせ、尻餅をつきそうになってしまった。

「おい、たえ。お前何でここにいるんだよ。課題は終わったのか？」

「うん、香澄と一緒に終わらせてきたよ。余裕のよっちゃんだった」

「死語を使うな。それに何日も居残りしてるのにどこが余裕なんだ」

「っーか、そもそも何でうちを知ってるんだよ!？」

「あー、課題出しに行つて、その時窓から香澄の姿見えたから。そっちの方に走つて行つたら、香澄たちの声が聞こえて」

かなり大声で話してたからな……。近所迷惑になつていなかったらしいんだけど。

「あの、さつきはいなかったけど……?」

「さつき? 香澄たちの邪魔になるかなつて思ったから、おばあちゃんとおしゃべりしてた」

「何勝手にうちのばあちゃんと仲良くなつてんだよ」

自由すぎるな。でも、たえなりに気を遣つてくれてたんだな。そのおかげで、円満に解決することができたし。

「おじいちゃんともお話したよ?」

「そう言う事じゃねーんだよ!」

「えっ、お前おじいさんいるのか? 全然見ないから、てつきり……」

「勝手に殺すな! じいちゃん死んでると思つてたのか!？」

「えっ、おじいちゃん死んでるの!?! じゃあ、私の話してたおじいちゃんは、一体……」

「そうじゃねーよ花園さん! あーもう、話がややこしくなる! おい、香澄! 花園さんってこんななのか!？」

「うん! 楽しいでしょ?」

「楽しくねーよ!」

何でたえが増えただけで会話がこんなにカオス状態になるんだよ。

「香澄、仲直りできたみたいだね。市ヶ谷さんと話してるの、楽しそう」

「……うん! 私、ちゃんと仲直りしたよ!」

その言葉を聞いて安心したのか、たえは香澄に微笑みかける。これ

だけ見てると、本当に美人なんだけどな……中身が残念ってだけで。「よかったね。市ヶ谷さんも、すっごく楽しそう」

「どこがだよ。見間違いじゃねーの？」

「じゃ、ごはんにしよっか。おばあちゃんが用意してくれてるって」「話すげー飛んだな!?てか、何でうちのごはんの事情知ってるんだよ!?!」どこまでフレンドリーな関係になってるんだ。たえってここに来たの、今日が初めてのはずだよな……?」

「本当!?えへへ。安心しておなかすいてたから、いっぱい食べるぞく！」

「うん。すごくおいしそうだった。ほら、市ヶ谷さんと牛込さんも早く行こうよ。翔も」

「え、えつと……」

「あれ?おなかすいてないの?」

「そ、そうじゃないんだけど……」

さも自分の家のように振る舞っているが、ここは有咲の家だぞ?それに何度も言うが、たえはここに来るのが初めてのはず。どうしてここまでオープンにできるんだ。

「お、おい大丈夫なのか、有咲……」

「んなわけねーだろうが!人んちで勝手に仕切んなー!!」

「……本当、すみません。ごちそうになります」

「遠慮なんかいらぬから、たくさん食べて行ってね」

「はい!いただきます!」

で、結局ごちそうしてもらう事に。俺とりみはためらっていたが、有咲のおばあちゃんの強い押しに気持ち折れ、その好意に甘えることにした。

「皆、有咲の友達でしょ?いつも仲良くしてくれてありがとうね」

「はい、こちらこそ！」

「いつもお世話になってます」

「たえは関係ねーだろうが」

おばあちゃんのの前でも平常運転かよ。さつき話してたと言ったが、その時も色々つぶつ飛んでいたんだらうな……。

てか、ご飯旨いな。昔懐かしい味と言うか、どの料理もおいしい。

「学校では有咲、どんな感じなの？」

「えつと、有咲ちゃんは……」

「人当たりが強くて、素直になれない奴です」

「てめ、翔！人聞き悪いこと言うな！」

嘘はついていない。本当のことを言ったまでだからな。有咲がいくら怒ろうと、俺は何にも悪くない。

「今みたいな感じって事だね」

「さすがたえ、わかってるな」

「えっへん」

「お前も便乗するな！」

その様子がおかしかったのか、誰からとなく笑いが起こり、広がっていく。やがて、その場の全員が笑い出し、食卓に彩りが生まれていく。仲良さそうに笑いあう有咲を見て、おばあちゃんも嬉しそうに見えた。

……次の一言がなかったら。

「おばあちゃんも嬉しいよ。有咲が友達連れてくるようになったんだから。それに、かっこいい彼氏も連れてきちゃって」

「」「えっ!?!」「」

いや待て。待ってください、おばあちゃん。それはさすがに、俺としても黙っていられないんですが。

俺が有咲の彼氏？質の悪い冗談にしか聴こえませんか？そんな可能性、絶対にはないですから！

「ちよ、ばあちゃん！翔とはそんなんじゃないからねーから！／／／」

「あらあら、照れちやつて。可愛いね、有咲」

「ビュービュー、市ヶ谷さんアツいよー」

「止めろつってんだろ！なあ、花園さんを止める方法って何かないのか!？」

あつたら誰も苦労しないから。その天然を楽しめるくらいにならないと、たえの相手は務まらない。

「えっ、ち、違うよね翔君？彼氏なんて、その……／／／」

「なーくん、どうなの!？有咲と付き合ってたりするの!？」

「お前らまで何言つてんだよ！おい、翔もなんか言えよ！」

「あ、ああ。俺と有咲は別に、友達っただけで……。その、お孫さんの顔を見せることはできないですが……」

「誤解を解こうとして、何ふざけてんだよ!？」

そんな有咲の反応を見たかったから。つて言えば、絶対にグーで殴られるよな。この場合。

「えへへっ、おばあちゃん！有咲は普段は素っ気ないけど……」

「つて、おいこら香澄。お前も何言いだしてんだ」

「でも……有咲は一緒にいて楽しいです！私、これからもずっと有咲と友達でいます！大好きです！」

おま、大好きって……。この流れで言い出すもんじやないだろうが。それじゃあまるで――。

「はっ、はあ!？香澄、てめ……何を告白みたいな事言つてんだよ!？／／／」

有咲が代弁してくれたから、まあいいか。

「えっ、違つた?」

「い、いやその……もう、何でもいい!／／／」

やれやれ。彼氏扱いだったり、告白紛いだったり。この団欒は、まだまだ続きそうだな。

phrase 26 震える時を

「じゃあね、香澄ちゃん。翔君。それから……」

「あつ、私はおたえでいいよ。おたえ、気に入ってるから」

「じ、じゃあおたえちゃん……?」

「うん。それじゃあね、りみ」

と言うわけで、その日の帰り道。駅まではりみと一緒にだったが、今ちようどりみと別れたところだ。俺たちは電車通学のため、ここから電車で帰ることになる。

「すっかり元通りの関係になったな、香澄」

「うん！私、有咲と仲直り出来て、本当によかったよ！」

一時はどうなるかと思っただが、有咲が素直になってくれたことが、解決へとつなげることができた要因だろう。香澄と向き合い、言葉をぶつけあい、より絆を深めることができたから。

「めでたしめでたし、だね」

「おたえも、今日はありがとう！」

「ううん。それは香澄が頑張ったからだよ。私は何もしてない」

「でも、ありがとうって言いたいんだよ！それに、おたえにはギターの事も色々教えてもらってるし！」

「そう？私も楽しかったから、お礼なんていいのに」

トラブルは起こったが、たえに指導役を頼んだことは正解だったのかもかもしれない。結果的に香澄と有咲の仲は良くなったし、香澄もギターの経験を積むことができた。たえも何かしらの刺激を受けることができたみたいだ。

「ね、おたえー！よかったら、おたえも一緒にバンドしない？」

「え？私が、香澄と？」

唐突なバンドの誘いに、たえも驚いているようだった。本人の気持ち次第だが、俺的にはありだと思う。

たえのギターセンスは本物だ。素人の俺が見ても、経験者の美羽が見てもきつと、レベルの高さを実感する。

その技術を活かし、香澄をうまくリードしてくれたのなら。きつと

バンド全体のレベルアップにつながるだろう。

……もちろん、ギター面での話だからな？

「いいんじゃないか？たえがいたら、香澄も百人力だろ」

「うん！課題は終わっちゃったけど、私もつとおたえとギター弾きたい！まだまだ教えてほしいこともあるし、おたえとギター弾いてると、キラキラドキドキできる気がするんだ！」

「私と……」

と、ちょうどそこに電車が来た。俺たちはほぼ満員の電車に乗り込み、つり革を掴んで横一列に並ぶ。

「……ありがとう。私、誰かにそんな風に言われたこと、あまりなかったから」

「そうなの？おたえ、すつごくギター上手だし、一緒にいて楽しいし！」

「香澄……」

「だから、文化祭もオーディションも一緒に出られたら、もっとキラキラドキドキできる気がする！」

文化祭って、いつの間にそんな話が出ていたんだよ。それにオーディションって……やる気みたいで嬉しいが、俺初耳だぞ？

「おいおい、文化祭なんてあいつら知ってるのか？」

「前に話したよ！目指せ、文化祭！」

「けど、オーディションって？」

「SPACEの！こっちはまだ言っていないんだけど、文化祭が終わったら受けようと思って……」

文化祭ライブを目標にするのはともかく、SPACEのオーディション受ける気だったのか。有咲たちが知ったら、一体どんな反応が返ってくるんだろうな？

けど、SPACEか……。志が高いのはいいいことだが、今の香澄のレベルを考えると、悪いが恐らく……。

「無理」

「……へ？」

俺たちに言われた言葉の意味が理解できなかったのか、香澄はキョトンとしている。と言うより、何を言われたのか思考が追いついていないみたいだった。ポカーンとして、俺たちを見ていたからな。

「え、えつと……二人とも、何て？」

「だから、無理だと思う」

「む、無理ってそんな……。どうしてなの？」

納得していない香澄のために、俺たちはその理由を説明する。

「SPACEはガールズバンドの聖地でな。バイトを始めてから、オーディションに来るバンドを何組も見ってきたんだ」

「どのバンドもすごかった。曲のよさとか、演奏のうまさだけじゃない。ステージに立ちたいんだって気持ちがあつて伝わってきた」

「みんな、輝いてるんだ。ライブを観ていると、自然と体が……いや、心が震えてしまう。そうさせるだけの何かを、どのバンドも持っていたんだ」

誇張しているわけじゃない。俺がこれまで見てきたバンドは、どれも体の奥底に眠る熱をたぎらせるだけの力を秘めていた。

今すぐにも叫びだしたい。この場の熱気に身を任せて、高ぶる情熱を呼び覚ましたい。そのための原動力、言わばガソリンのような燃料に火をつけてくれる。これまでのバンドには、確かにそれだけの力があつた。

けど、それだけで立つことができない場所でもある。

SPACEの舞台に立てなかったバンドは、いくらでもいた。どれだけ技術が優れていても、熱情を持っていても、あのステージに立たないバンドはほんの一握りでしかなかった。

それだけ香澄の挑もうとしている壁は、高い。

「香澄は、自分が技術でも気持ちでも、その人たちに並んでいると思う？SPACEのステージは、誰でも簡単に立てるようなものじゃないよ？」

脅しにも似た宣告だった。その実態を聞いて、さすがの香澄も怖気づいているかもしれない。

まだギターを始めて数週間でしかないんだ。技術も不足している。中途半端な気持ちでも、届く場所じゃないんだ。それを俺たちは、香澄に教えておきたかった。

「酷な話かもしれないが、それがSPACEなんだ。それだけ真剣に音楽と向き合い、解き放つ場所でもある。香澄は……その場所に立とうと思うなら、どうする?」

だからこそ、中途半端な気持ちではいけない。それは技術面だってそうだ。今の香澄には、まだまだ不足しているものが山のようにある。

だが、こんな話を聞いてもなお、香澄は香澄だった。

「いっぱい練習する!今はダメかもしれないけど、いつかその人たちのように上手になって見せるよ!」

後ろを向くことはなく、前だけを見ていた。誰に何と言われても、折れることなく進んで行くんだろうな、香澄は。そうでなくては、香澄らしくもないけどな。

「ちゃんと弾けるようになるまで、どれくらいかかる?」

「わかんないけど……でも、がんばる!」

「がんばるって、大雑把だな……」

「大雑把かもしれないけど、私はオーディション受けて、みんなでキラキラドキドキしたい!絶対に!!」

いつになるかはわからない。俺たちにも、もちろん本人にだって。果てしない道のりになる事だけがわかりきっている。

でも、そう言い切ってしまうのが香澄の凄いところだ。そこは俺が小さい時からずっと尊敬している部分でもある。芯が強いんだよな。

「……………」

だから……してはいけない期待を、俺は香澄にしてしまう。

「……じゃあ、香澄。やってみせて」

「やってって、何を？」

「私を、震えさせて」

「震えさせて……か」

「おたえをドキドキさせるって事だよね？」

「ドキドキか……。ま、それもそうだな」

たえと別れ、俺たちは家の最寄り駅で電車を降りて歩いているところだった。家まではもう少し距離がある。俺たちはたえを震えさせる件について話していた。

「要は、たえが納得するだけの演奏を見せたらいいんだろ？香澄は、気持ちだけは一人前だし」

「気持ちだけって言い方ひどいよー！」

「ちよ、くつつくなー！悪かったけど、本当の事だろ!？」

俺に触れる熱が、否応なしに体温を上昇させているのがわかる。夜道を歩いているはずなのに、熱くて仕方ない。

「えー？なーくん、またくつつくなって……。二人の時くらいいいでしょ？」

「そう言うセリフはカップルがするんじゃないのかよ」

「カップルか……。そうなれたらいいのに」

「うん？何か言ったか？」

「う、ううん！何でもなくい！／＼／＼」

何だあいつ？急にぼそぼそ話し出したと思ったら、速足で先に行くし……。俺は慌てて香澄の後を追いかけて、再び香澄と並ぶ。

「こら、先に行くなよ香澄。家の近くって言っても、夜なんだぞ？女の子が1人で歩いてたら、何があるかわからないからな」

「あ、あはは……ごめんね、なーくん」

「本当にわかってるんだろうな……」

自分の危機感ってやつをまだ認識できてないんじゃないかって思う時があるからな。香澄は割と可愛い系のポジションにいるし、そう言う目で見る奴とか……。

い、いや俺は違うからな!?ただの幼馴染ってだけだ!ああそうだ!で、話を戻すぞ。とりあえず、香澄はたえを納得させるような演奏を見せるしかない。香澄に足りないのは、ハッキリ言ってまず技術だ。たえはそのところを見たいんだろう」

「なるほどなるほど!それで?」

「俺任せかよ。……だから、まずは小規模のライブ、ってか演奏会みたいなのをやればいいと思うんだ。そこにたえを招待して、自分たちの演奏を見てもらう。どうだ?」

「うん!いいと思う!」

こいつ、全然考えてないような気がする……。

「場所とか日時は、また明日の昼にでも集まって決めた方がいいだろうな。香澄だけで決めたら、また有咲が怒ってきそうだ」

「そうだね。じゃあ、とにかくギターを練習しないとイケないね!」

「けど、そうなるたたえに指導を頼むのは無理だぞ?」

「あつ、そつか……。おたえをドキドキさせるライブなんだよね」

敵に教えを乞うのも変な話だしな。だからと言って、俺もギター経験はほとんどない。教えられることも限られてくる。りみもお姉さんがギターだけど、やってるのはベースだしな……。

「俺もできる限り協力はするが、基本は自力での練習になりそうだ。指導役がいれば、香澄も効率よく練習は……あ」

「どうしたの?」

「指導役、いるじゃないか。すぐ近くに」

「私が香澄さんの指導役?!」

「ああ。さつき説明したように、香澄はどうしてもギターを上達させたい。そのためには美羽、お前の力が必要なんだ」

そう、美羽だ。美羽もギターセンスはあるし、香澄よりは経験もある。ギターの知識に関して言えば、これほど優れた人材は他にいない。

俺は香澄を連れて家に帰り、そのまま美羽に事情を説明。美羽も大体は理解してくれたみたいだった。

「お願い、みーちゃん!私、どうしてもギターで納得させないといけないんだ!少しでも上手になって、ドキドキさせないといけないから……お願いします!」

「香澄さん……」

「俺からも頼む。美羽、香澄に協力してやってくれないか?」

「頼むって……そんなのいいに決まってるよ!香澄さんが、私を頼ってくれたんだよ?嬉しくて仕方ないじゃん!」

まさかの二つ返事だった。そう言ってくれて、俺の方こそ嬉しいよ。これで香澄のギタースキルは、また一つ上がっていくことだろう。

「それに、約束しましたよね。私は、香澄さんのバンド応援するって。楽しみにしてるって。だから、その手助けをするのは当然なんですよ!香澄さん!」

「み……みーちゃん!!」

感極まったのか、香澄は喜んで美羽に飛びつく。ギターを背負ったまま抱き着かれたため、美羽は重量に耐え切れずによるめきそうになっってしまう。

「うわあっ!?!香澄さん、ギター重いですよ!」

「あつ、ごめくん!つい嬉しくって!……あれ?みーちゃん、汗かいてる?」

「本当だ、ちょっと熱いのかな」

美羽はパタパタと手で仰ぎ、風を送る。吹き出ている汗が、頬を

伝っていくのが見えた。

「あつ、そうだ香澄さん。今から練習しましょうよ。どうせ家は隣同士ですし、この家には私とお兄ちゃんしかいませんから」

「本当に!? うん、そうする!!」

こうして、早速練習が始まった。香澄は一旦荷物だけ家に置きに戻り、俺はその間に部屋に戻る。

制服から着替えてリビングに向かうと、美羽は既にギターを持ってスタンバイ。即興で何か曲を演奏しているみたいだった。

「ふう……今日は何か疲れたな」

「何かあったの?」

「ちよつとな……。それより、香澄の指導役、ありがとな」

「お礼なんて言われることじゃないって。私からお願いするくらいだよ。」

「……そっか」

そう言ってくれると嬉しい。俺が冷蔵庫から飲み物を取り出している傍ら、美羽は陽気に歌いながらギターを弾いていた。

……やっぱり、音楽をしている時だけは、何もないんだな。

「しっかし疲れたな……。今日は声出したからな」

「あれ? カラオケでも行ってきたの?」

「そうじゃないけど……。ま、色々とあつてな」

「ふうん。お兄ちゃんも大変だね」

何か素っ気ないな。ま、有咲の事を説明しようと思ったら、かなり長くなってしまうからいいんだけど。

それよりも疲れた。今日は早めに風呂に入って寝るとするか。

「じゃ、香澄来たら相手してやってくれ。俺は先に風呂入ってくるから」

「そう? もうちよつと待ってたらいいのに」

「ん? 何でだ?」

「何でって……香澄さんと一緒に入ったらいいじゃん」

「…………え？」

一瞬、思考が止まった。美羽の言葉の意味を理解するのに、少し時間がかかる。って、これじゃああの時の香澄みたいで……。

「…………って、おい！何言ってるんだよ!?／＼／」

「あ！お兄ちゃん真っ赤になってる！やらしく！」

「ち、違う！からかうのはやめろ！／＼／」

「香澄さんのお風呂……。お兄ちゃん、何想像してたの？教えてよ〜！」

「何もない！俺だって、これでも高校生だぞ!?女の子と風呂なんてそんなの〜」

「みーちゃん来たよ〜！」

何でこんなタイミニングで来るんだよ、香澄はあ!?

「今日からよろしくね！あつ、なーくんもうるさくしちゃうけど、ごめんね?」

「あ、ああ……」

それはいいのだが、今はそれどころじゃない！さっきの言葉がまだ頭の中から離れない！

「じ、じゃあ俺はこれで——」

「ねえ香澄さん！せっかくだし、お風呂入ってきたら？疲れてるでしょ?」

「えっ、いいの?」

お前は何を話ぶり返してるんだよ!?絶対楽しんでるだろ!?

「うん、いいよ！ちようどお兄ちゃんも入るし、どうせなら一緒に入っちゃっても……」

「そう言う事なら、お風呂はい、って……?」

その言葉を理解した途端、香澄の顔が一瞬にして真っ赤になった。

「……………!?／＼／え、みーちゃん!?／＼／」

「あはは、冗談ですよ！そんなに驚かなくてもいいじゃないですか!」

「そ、そうだよね！ビックリした〜……」

「でも、そんなに驚くって事は、もしかして香澄さん、お兄ちゃんと一緒…………?」

「くっ／＼／」

「お、俺もう先に入るからな!!」

もうあのままりビングにいたら修羅場になりそうだったので逃げた。俺は自分の着替えを持って、浴室へと向かう。

「つたく……心臓に悪いっての……」

今日は本当、疲れる一日だ。有咲の説得の件もあるが、一番の障害がここで来るとはな……。

「……にしても、たえが香澄に出した条件、かなりハードなものだったな」

香澄のやる気次第だが、たえを納得させようと思うと一筋縄ではないかない。どこまでスキルを伸ばし、気持ちを保つことができるのか。いや、気持ちは大丈夫か。

後は、美羽の指導に賭けるとして……俺は俺で、やるべきことを進めていくか。

「さーて、さっさと風呂入るか。明日も学校だしな……」

そんな事を考えながら、俺は服を脱ぎ、風呂場の扉に手をかけて――

「お兄ちゃん、タオル置いておく……うわっ!／＼／」

「え、み、美羽!?!」

すぐにボタンと浴室の扉が閉まり、俺は掴みかけていた風呂場の扉から手を放す。後ろ姿だけだからよかったが、前はさすがに妹でも恥ずかしいぞ……。

「ま、まだ入ってなかったの!?!」

「シャワーの音聞こえなかっただろ!?!こういうことだってあるから、ノックぐらいしてくれ!」

「次からは気を付けます……」

全く……。俺は覗くように洋室の扉を開け、まだいるはずの妹を伺う。タオルがどうか言ってたし、一応貰っておかないと。

「それで、タオル渡しに来てくれたんだろ?」

「ああ、そうだった。はい、タオル」

「ありがとな」

俺は美羽の手からタオルを受け取る。ふわふわの暖かいタオルだ。すぐにでも顔をうずめたくなくなってしまおう。

……そんなタオルが、どうして寒がっているように震えていたんだろう。

「おい、美羽」

「えっ？どうしたの、お兄ちゃん」

「お前、何か様子おかしくないか？具合悪いんじゃないのか？」

「そんなこと、ないよ。わたしは、げんきだから」

いや、嘘だ。確かに表面上はいつも通りだ。笑顔だし、持ち前の明るさは健在。パツと見ただけでも、どこも具合が悪そうには見えない。

だが……美羽はやけに汗をかいている。よく考えたら、今の時期に熱がるようなのはおかしいんだ。まだ6月にもなっていないんだぞ。

今も言葉が飛び飛びになってるし、さっきのタオルは美羽の震えが伝わったものだ。何かあると疑うには、材料がそろいすぎている。

「嘘つけ！練習はいいから、早く薬飲んで——」

その言葉を言い終わる前に、固いものが激突する音が響く、扉にもたれかかるように、美羽はその場に倒れこんでいた。

「……っ！美羽!!」

「どうしたの、なーくん！今の音……みーちゃん!？」

くそ……。やはり、そうだったのか。

あの時、香澄を受け止めた時のよろめきは、決して重量の問題だけじゃなかった。あの時から既に、少しおかしかつたんだ。

ほんの些細な変化。杞憂に終わればそれでいい。何もなければなら、それ以上のものは必要ないのだから。

だが……杞憂に終わらなかつたら、こうなることだつてある。

「香澄！悪いが救急車を！それと、母さんにも連絡してくれ！俺は服着替えるから、その間に頼む！」

「わ、わかった！」

「くそ……美羽！しっかりしろよ！美羽！！」

悲痛な俺の叫びに答えてくれる人は、ここにはいなかった。

phrase 27 君の声

あなたは、いつになったら笑ってくれるのか。

ベッドに横たわるあなたの横顔は、何も変わらない。どこを見ているのか、何を考えているのか、あたしにはわからない。

「美空……」

声をかけても、何も答えてくれない。あの真っ直ぐで、明るくて、あたしを広い世界に連れ出してくれたあなたは……いなくなってしまう。

あたしは今でも、あの事件を忘れたわけじゃない。

全てが180度変わってしまったって、これまで当たり前だった関係が、知らない間に崩れていく。

「……………」

透き通った銀髪を、あたしは掬って撫でてみる。サラサラとして、綺麗で……そこから覗く美空の目を見るのが、あたしは辛い。

あの時、あたしはどうしたらよかったのか。今でもわからなくなる時がある。

「……ころ様、そろそろお時間です」

「……………もう少し、待ってくれないかしら。すぐ行くわ」

きっと黒服ね。夜中まで美空に付き添えるように協力してもらってたけど、ここまですみません。

だから、最後に一つだけ。

「……………笑ってよ、美空」

あなたの笑顔が見たい。そのためにあたしはバンドを作った。あなたの教えてくれた音楽で、世界を笑顔にするために。

そんな音楽の力を教えてくれたのも、あなただったのに。

「…………あらっ！」

そんな時だった。一台の救急車が、サイレンを鳴らしながらこの病院に向かって来ていたのは。

俺たちは、すぐに病院へと向かった。

遅い時間帯だった事もあり、すぐに救急車を呼んだ。美羽の付き添いには俺と、香澄も来てくれた。

三人で救急車に乗り込み、病院へと向かう。香澄の家族も、事情を理解したのか病院まで来てくれることに。

前に運ばれた病院と同じだったため、医師もすぐに状況を理解してくれた。検査が行われ、俺たちは待合室へと移動する。

そこから母さんも合流。仕事で疲れ切っているだろうが、そんな様子は一切見せずに美羽の無事を祈る。香澄の母さんと明日香も、俺たちと一緒に検査が終わるのを待っていてくれた。

「…………こそ」

俺は何もできず、待つことしかできない。不安な気持ちをどうにかしたくて、俺は待合室を離れて深夜の病院を歩いた。

大丈夫だ。これまでだって、何とか乗り越えてきたんだ。今回だって…………。

「…………美羽」

ダメだ。そんな気持ちで割りきれものじゃない。俺は結局、別の待合室でじつと時間を過ごしていた。

患者たちも病室に戻り、シンと静まった待合室。ただ、時間だけが過ぎていく。暗い室内と静寂が、俺の中で不安を広げて希望を押しつぶしていく。

「美羽」

じつとしていられない。すぐにでも立ち上がり、駆け出し、美羽の

元に向かいたい。声をかけて、返事が聞きたい。今すぐに、美羽の笑い声が聞きたい。笑顔が見たい。

「美羽……！」

どうして、美羽だけなんだ。俺も美羽と、病気の苦しみを分かち合いたかった。いや……そもそも俺じゃダメだったのか。

音楽が大好きで、明るくて。友達からも好かれて、いつも学校の事を俺に楽しそうに話してくれて。

ちよつとふざけてからかってくる事もあるけど、悪い所なんて何一つない。見つけたくても、何も見つけれられない。

ギターなんて、独学で上手くなつたくらいの努力家なんだぞ。好きな事には一途に取り組む集中力があって。

なのに病気は、どうして美羽を……ふざけるな……っ！

俺を苦しめろよ。俺を痛めつけろよ。美羽が無事なら、俺はどうなつてもいい。

なあ……何で俺を選ばなかったんだよ？何で美羽が病気で苦しまないといけないんだよ!?

「……………」

まだ検査が終わる気配はない。長引いているのか。何かトラブルでもあったのか。

ここまで時間をかけなくてはいけないほど、美羽の容態は深刻なものなのか。

もしかしたら、助からないのか。

「……………っ!？」

嫌だ、怖い。何を考えているんだ。そんな事、あっていいはずがない。俺はかぶりを振り、ネガティブな思考を振り落とす。

だが、時間が経てばたつほど、募っていく想い。耐えきれるかどうか

かも、時間の問題だった。

「俺は……何もできないのか」

「あなた……前にもこの病院で会ったわね？」

突如聞こえた声に、俺は現実へと引き戻される。どこか聞き覚えのある声。それは、前に一度だけ会った金髪の女の子。名前は……。

「弦巻さん、だったか」

「こころでいいわよ。翔、だったかしら」

「ああ。……けど、何でこころがここにいるんだ？もう面会時間は終わっているだろ」

俺のような事情があるならともかく、こころにも何か事情があったりするの？家族の身に何かあったとか……。

「黒服に頼んで、夜中まで面会させてもらっているの。美空、心配だから……」

だからと言って、そんなわがままが通るようなものなのか。権力でもない限りは……ん？今、黒服とか言わなかったか？

「……こころって、何者なんだよ」

「何者って……あたしはこころよ？」

「そうじゃなくて。名前は知ってるからさ。弦巻——」
と、そこまで言って、俺はようやく気がついた。この女の子の正体に。

「な、あんた……弦巻コーポレーションの関係者か!？」

「ええ、そうよ？それがどうかしたの？」

弦巻コーポレーションと言えば、世界有数の大富豪じゃないか……。そりゃ、ちよつとした権力くらい持つてもおかしくない。

ってか、何で気づかなかったんだよ。深夜の病院じゃなかったら、もっと大声出していたところだ。

「……何でもない。って事は、さっきまであの子の所に？」

「ええ。今日も、笑ってはくれなかったけど……」

俺もできるだけ、あの子のお見舞いには行くようにしている。その日何があったか、今は何が流行なのか。答えはなくても、俺は声をかけ続ける。

けど、何も心を開こうとはしてくれなくて。誰に対しても感情を閉ざして、1人の世界に沈み込んでいく。

それじゃダメだ。いつまでも、静かに時間が流れていくのを病室で感じるだけの人生なんて。

その事を悲しむ人は、何人もいるのだから。

「それで、翔はどうしたの？」

「俺は、まあ……ちよつと家族が病気でな。さつき家で倒れて、救急車呼んで……今は検査の途中だ」

「そうだったのね」

俺の隣に、こころが腰かける。ギシリと長椅子の軋む音が、暗い廊下を伝う。

「待つ事しかできないって……辛いわよね」

「……ああ。不安とか、怖さとか、そう言うので押し潰されそう……。今も、正直どうにかなりそうだ」

最悪の可能性しか考えられない。安心できる結果を望んでも、そう考えていたとしても、すぐに真っ黒に塗り潰される。

頭が割れそうに痛い。これは悪夢だ。現実になんて、なって欲しくない。

「大丈夫よ、翔。辛いなら、あたしがしばらく側に居てあげるわ」
「え……？」

「同じ苦しみを知ってるから……そう言う苦しい時こそ、側に居て支えてあげたいの。美空だって今、苦しんでるから……」

俺が今感じている苦痛を、こころも同じように感じている。あの美空と言う女の子が、精神的に傷を負った時に。

それこそ、こころには何もできなかったんだろう。壊れていく様を見る事しかできず、こころは……悪夢を見た。

その悪夢は、現実へと変わってしまった……。

「……強いな、こころは」

「そうかしら？あたしは、笑顔の人が増えて欲しいだけよ。そのための力をくれたのは……美空だけど」

「そうか。……俺には、そんな強さなんて何もないよ。だから、苦しんだ事だってある」

何もできない事を嘆き、そこで止まる事はなかった。こころは美空から教わった事を糧に、前に進むようとしている。

俺は……今、何かできるのだろうか。あの学校に強引に入学したとは言え、その結果何か成し遂げられたのか。

普通の青春を捨て、そうして得た高校生活。それが本当に、正しかったのか。あの苦しみへの抑止力になるのか。本当に、変わったのだろうか。

何もできなかった、あの時の自分から。

「無力だった。大切な人が、苦しんでいたのに。側で支える事ができなくて……そんな経験を、俺は前にした事がある」

「……そう」

「だから美羽には、もうこれ以上苦しんで欲しくはない。そのためなら、俺はできる事は何でもする……！」

誓ったんだ。美羽が少しでも、笑顔でいられるように。そのためにできる事なら、どんな事でやってやろうと。

例え、それが茨の道だったとしても。美羽の苦しみや恐怖に比べたら、大した事なんてあるものか。

「美羽……それが、翔の大切な人なのね」

「ああ、そうだ。……何か似ているな。美羽と美空って、名前の響きが」

「本当だわ、よく気づいたわね？」

もしかしたら、仲良くなれたのかもしれない。美空も、音楽は好きだったと聞いている。美羽とは話も合っただろうに。

そんな彼女が……どうして、感情を閉ざしてしまったのか。俺は、

その辺の話も少し聞いた。

恐ろしく、そして悲しい……。ニュースにも取り上げられる程の話だった。

けど、その話を口にするには、まだ早い。

ただ、彼女は何も悪くない。被害者でしかないだけで……。言っておこう。

「じゃあ、あたしはもう行くわ。そろそろ、黒服の所に戻らないと」

「そうか。……結局、また暗い話しかできなかつたな」

前に別れた時、今度は楽しい話をしようと言っていた。俺もころも、楽しみにしていたはずだったのに。

……その約束は、今果たされることはなかった。

「今度は、楽しい話ができるといいわね。……そうだ、翔」

長椅子から立ち上がり、出口へと歩き出すところ。と、こころは途中で振り返り、ニツと口元を緩めて、

「翔は強いわよ。美羽のためにできる事、やれるかどうかなんて考えないで、やってみようとしてるじゃない」

「……そう言ってくれたら、嬉しいよ」

そう言い残し、こころはいなくなった。しばらく足音は聞こえていたが、それも完全に聞こえなくなった。

こころの肯定の言葉は、少しだけ頭の中に響いていた。

「……今は、何もできないけどな」

また、俺は1人になった。暗闇の中に取り残された。

待つことしかできない。こころと話していて紛れかけた意識が、1人になったことで戻ってくる。

美羽が心配で、呼び起こされた感情が、恐怖を伴って俺の胸を締め付ける。

怖い。

辛い。

痛い。

苦しい。

美羽……！

「……なーくん」

その時、ふと聞こえた俺を呼ぶ声。そこには、香澄がいた。さつきまでは、明日香たちといたはずなのに。

「……香澄」

「なーくん、こんな所にいたんだ」

「母さんは？」

「向こうで待ってる。私のお母さんたちと一緒にだよ」

「……ところが腰かけていた場所に、今度は香澄が腰かける。フウ……と、香澄は息を吐く。」

「検査、まだ終わらないね」

「ああ……」

「大丈夫だよ。みーちゃんなら、きっと」

「そうだな……」

「なーくん、飲み物欲しい？私、買ってくるよ？」

「……いや、今はいいよ」

次から次へと、香澄は俺に言葉投げかけてくる。周りが静かだからか、余計に香澄の声が目立つ。

その全てに、俺は気のない言葉を返すことしかできなかつた。今は美羽の事だけが気がかりで、とても香澄の相手はできなかつた。気を散らして、ごまかす事なんかできない。

香澄の気持ちはわかる。申し訳ないとも思っているさ。けど、ダメなんだよ。美羽が……もし美羽がいなくなってしまうたら、俺はきつと立ち直れない。たった1人しかいない、大切な妹だから。

だから悪いけど、そつとしておいてほしい。美羽の事だけを考え、その無事を祈らせてほしい。優しさを切り捨てるような真似をして、本当にすまない、香澄……。

「……私、何にもできないね。誰かを励まして、勇気づけて、力になる事なんて……何も」

「香澄……？」

「みーちゃんが苦しんで、なーくんも辛いのに……私はここで何してるのかなって。一緒のように待つしかできないなんて、私嫌だ。私の成りたかった私は、そうじゃない」

声色を変えて、香澄は独り言のようにつぶやいた。俺はどう答えたらいいいのかわからず、香澄の言葉を聞く一方だった。

「いつも誰かに助けてもらってばっかりで、支える事なんてできなくて。もつと、なーくんみたいになりたいのに」

「俺みたいに？」

「私の事、いつも支えてくれる。力になってくれる。ずっと昔からそうだから。そんな風に、私もなりたいて思ってるんだ。本気で」

「香澄……」

「でも、全然だね。私、1人じゃ何もできない。今だって、なーくんの力になることもできなかった。私、頼らないと何もできないんだね……」

自分には何もできない。だから何かしたい。できるようになりたいと、そんな言葉だけが香澄の口からは漏れ出していく。

俺みたいにか。

「……………」

俺にできる事なんて、どうって事なんかない。できない事の方が多くて、美羽の苦しみに寄り添う事も、あの時にはできなくて。

そんな俺が、今の香澄にどう言葉をかけてやればいい？そもそも、俺は香澄を支えてやれているだけの力なんて――。

『翔は強いわよ。美羽のためにできる事、やれるかどうかなんて考えないで、やってみようとしてるじゃない』

「……っ！」

「なー、くん？」

俺が何かできるとすれば……それは、俺だけの力でどうにかなるものなんかじゃないんだ。

何もできないかもしれない。けど、何かできるかもしれない。

そのための原動力や勇気は、きつと――。

「……それでいいだろ」

「えっ……？」

「1人でできる事なんて、限られるさ。何でも1人で考えて決めつけて、それで何かが解決するわけじゃない」

「でも、なーくんは……」

「俺なんかには何かできる力なんてない。支えてくれる人がいて、一緒に何かしてくれる人がいるから、行動を起こせるんだ」

誰かのために。その気持ち、俺を突き動かしている。何もできない俺に、力を与えている。

そうだ。俺にそんな力があるのなら、美羽だって、美空だって……。

誰かの心に寄り添うって、難しい事なんだよな……。

「それに、香澄はバンドやりたいんだろ？バンドは、1人でやるものじゃない。1人で何かやろうなんて気持ちで、成り立つものじゃないはずだ。だから、周りの力も頼っていいと思うんだ」

「バンド……」

「ってか、香澄はもつと自分の行動力を考えろよ。あの行動に、救われている人だっているんだぞ？何もできない、なんて言葉が香澄にふさ

わしいとは思えない」

有咲、りみ、それに俺だつて……。これから先だつて、香澄に助けられる人はきつと……。いると思うんだ。

「……そっか。ありがとう、なーくん」

「お礼なんていらさないさ。これくらいの聞き役なら、いつでもするよ」
「えへへ……ちよつと寒くなつてきちゃった。なーくん……もう少しだけ、そつちに寄つていい?」

「ああ、いいよ」

「ありがとう。……翔君」

「え……っ!?!」

香澄は俺に身を委ね、手を重ねてくる。肩にかかる香澄の温もり、そして香澄の横顔がほんのりと赤い。普段抱き着かれているはずが、どうしてもドギマギするのか。

それに何よりも……。

「成川美羽さんのお母さんですか?今、検査が――」

待ち望んでいた、第三者の声。看護師の声だ。検査が終わつたとの報告が、俺の耳にも届く。

「悪い、香澄。検査が終わつたみたいだから、俺行かないと」

「あ……うん。じゃあ私も、お母さんのところに戻るね」

触れていた香澄の温度が離れ、香澄の家族がいる方へと歩いて行く。残された俺も、検査の結果を確認するために立ち上がる。

美羽の容態はどうなのか。入院は必要なのか。美羽の事が頭の中を渦巻いている中、俺はどうしても、気になっていた。

「……………」

最後に呼んでくれた、俺の名前。普段は絶対、下の名前で呼ぶことはないのに。

「香澄……さっきのは……?」

聞き慣れた自分の名前。だが、俺にはずっと、香澄が名前を呼ぶ声
が残り続けていた。

phrase 28 目指す先、その高みは

「おたえをドキドキさせるって何？」

「ライブするの！私がギターで、有咲が――」

「で・き・る・わ・け！ねーだろうがあ!!」

開幕早々、有咲の一刀両断が中庭に響き渡る。香澄はむくれっ面になっていたが、有咲の言い分ももつともだとは思う。

「とは言ってもな……。たえが出した条件だし、一応はそこを目標にしないと」

「そう簡単に言ってくれるけどな？このメンバーでライブが本当にできると思ってるのか!?香澄なんか、まだまともに演奏できねーだろ!?!」

「うええくん……ひどいよお、有咲あ……」

「な、泣き真似したところで本当の事だろ!」

SPACEのレベルの高さを知り、それでもなお努力を続けていつか立つと誓って見せた香澄。それを聞いたたえは、自分を震えさせるほどの演奏を香澄に要求してきた。

言葉なら、誰にだって何とでも言える。どれだけ熱を込めても、思いを託しても、所詮は言葉。それだけでは、力のないまやかしのようなもの。

だからこそ行動で。香澄の気持ちが高かなら、それを行動で証明してほしい。たえの考えている事は、今回ばかりは俺にでもわかる。

が……そのためにライブをするのは、現状では難しい。俺も簡単にライブをすれば意図提案したが、メンバーも3人だけだ。俺が臨時で入って、ようやく4人……。

りみと俺は経験者としても、まだ香澄と有咲は発展途上。音を合わせるところに持っていくまでも時間がかかりそうだった。

「えっと、さっきから基準がよくわからないんだけど、もしダメだったら、そのオーデイションは受けられないって事なの？」

「いや、そう言う事にはならないと思う。たえも、香澄の実力を見たいだけなんだ。沙綾の思うような事にはならないはず……だと思っ」

「最後の間が不安なんだけど……」

「そう言うな、沙綾。相手はたえだぞ？100%考えがわかるような相手だと思うか……？」

「花園さんの事は、確かにあまりよくわからないし……話したこともないかも……」

そう言う事だ。俺もわかっているようで、確信めいた根拠はどこにもないからな。それが、花園たえって言う（見た目だけは）美人な女子高生なんだよ。

「おたえは面白いよ！ね、なーくん？」

「ああ、そうだな」

面白いかどうかは、また別の話だけどな……。

『ありがと。……翔君』

昨日は最後、名前で呼んでただけどな。今はいつも通り、なーくん呼びか。

理由はよくわからないけど、どうしてあの時だけは、俺を名前で呼んだんだろうな……。そうする理由が、香澄にはあるって事なのか……？

「で、でも大丈夫だよね？おたえちゃんは、そんな事しないよね」

「うん。私、オーディションを受けたらダメなんて、一言も言っていないよ？」

「だったら、別に受けるも受けないもうちらの勝手……って、花園たえ！？何でいんだよ!?!」

何でここにいるんだ、たえ。何の前触れもなく、しれっと会話に参加するなよ……ビビるだろ。

いつからそこにいたのか。てか、どこから湧いてきたんだ。

「えっ？だって、おたえドキドキ作戦会議だし！いてもいいんじゃない？！」

良くないと思いますが。

「重要参考人」

「敵だろ！」

「いや、スパイだな」

「二人とも違うよ！友達!!」

「……っ!?!とも、だち……」

何やら動きが止まったぞ。しかも胸に手を抑えている。いきなりの事だから、こいつの言動はよくわからない。

「花園さん、どうかしたの？具合でも悪くなった？」

「心臓痛いのか？」

りみ……もう少し違う聞き方はなかったのか？

「ううん。私、友達って言われたの初めてだったから……」

「まあ、あんまり言わないよね」

「俺たちも、気が付いたら親しくなってたって感じだし。面と向かって友達なんて、ちよつと恥ずかしいよな」

ストレートに友達って呼ぶことなんて、そもそもないんじゃないか？それこそ、本人の前だと気恥ずかしくてとても言えないと思う。

「あ、ちよつと花園さんもいるし……その、オーディションの事なんだけど」

「うん。何かな」

「香澄が言うには、ドキドキ？させる事が条件みたいだけど、もし花園さんがそうならなかつたら、その時はどうなるの？」

「それはね——」

「てか、そんなの一々聞かなくてもいいって、山吹さん。本人来たから改めて言うけど、関係くない？オーディションに出るも出ないも、うちの勝手じゃん？花園さんに審査してもらう必要なんて、どこにもないと思うけど？」

有咲の言う事も一理ある。意欲があれば、オーディションを受けたらいい。一次審査があるなんて話でも、SPACEでは特にないな。な。

他人にとやかく言われて決めるようなものでもない。だが、決して軽い気持ちで決めていいわけでもない。

「確かに有咲の言うとおりだな。これは、たえが勝手に言ってるだけ

だからな」

「なら、別にそんなの無視して、オーディション受けたらいいだけじゃん？」

「まあな。だが……SPACEはそんな軽い気持ちで立てる場所じゃない。そうだろ、たえ？」

「うん。よくできました」

「何様のつもりだ」

俺たちの脅しに、香澄とりみは弱音にも似たうめき声をあげていた。有咲はそこまで深刻に考えてはいないみたいだったが。

「私たちはSPACEでオーディションを見てきたから、レベルの高さがわかるんだ」

「まず気持ちで負けるようじゃ、あのステージには絶対に立てない。オーディションで見ているのは、技術なんて上っ面だけじゃないからな」

香澄の意見は聞いたが、有咲とりみの意志はまだ聞いていない。バンドは全員そろってこそそのバンド。1人が飛び出していようと、そこについていくだけの意志がないと、音なんて合わせられるわけがない。

「へえ、翔ってそっち側なんだ。香澄側かと思ってたのに」

「俺はいつでも香澄を応援してるぞ、沙綾。けど、中途半端に挑むくらいなら、止めておいた方がいい。世界が違うんだ。周りとの違いに苦しんで、きつとバンドを心から楽しむ余裕もなくなってしまふ」

上手くなりたい、合格したい。目的がいつの間にかすり替わって、張りつめてしまふ。何のためにバンドをするのかも、わからなくなってしまうだろう。

それじゃあ、いけないだろ。香澄は、昔見たキラキラを求めてバンドを組んだはずだ。SPACEで立つ事『だけ』が目的ではない。

「そんなかあ……？つか、そもそも何であそこってガールズバンドの聖地なんだ？」

「えつとね、SPACEはガールズバンドのために作られた場所なんだ。オーナーはツアーとかもやるバンドのギターをやってて、ライブ

ハウスの怖くて危ないイメージを壊すために、SPACEを作ったんだって」

「さすがグリグリのギターボーカルがお姉さんってだけあるな。俺が説明するまでもなかったよ」

「あつ!? えっと、その……ごめんね、翔君」

「何も謝る事じゃないよ。むしろ説明の手間が省けて助かったって感じだ」

「う、うん！ じゃあ私、また何かあったら翔君の代わりに説明するね！」

どこに気合を入れてるのは分からないが、大方りみの言ってくれたことで合っている。ガールズバンドがまだマイナーだった時期に、それを普及させようと立ち上げたライブハウス。それがSPACEだ。

一からライブハウスを作り、客やバンドを集め、ライブを行って……。SPACEができたばかりの頃は、オーナーもステージでライブをしていたことがあるらしい。

そんなオーナーの奮闘があったからこそ、今はガールズバンドが世間にも知られるようになった。その基盤は、オーナーにあると言ってもおかしくはない。それだけの立役者なんだ。

ガールズバンド規定法を作ったのも、実はオーナーが関係している。ガールズバンド委員会と言う組織に、オーナーが招集されたことがあったみたいだ。

そう考えると、オーナーの行動力って計り知れないよな……。

「そんなオーナーに認められたくて、SPACEを目指すバンドが多いんだ。だから、軽い気持ちで来るバンドもいるし、冷やかしてもたまにある。中には、オーナーに会うためだけに、口実でオーディションを受けるバンドもあったんだよ」

今は少なくなったけどな。SPACEがある程度名の知れたライブハウスになったことが関係しているのかもしれない。

「オーナー自身も音楽に熱意のある人だから、当然見る目も厳しくなって。でも、オーナーの人柄を知ってるから、みんな本気でSPA

CEに立ちたいって思ってるんだ。わかった、香澄？」

「すごい……！私、ますますSPACEでライブがしたくなっちゃったよ！」

「完全に逆効果だな、香澄には」

「ふふっ、香澄ちゃん、気合入ってるね」

「もちろん！よし、おたえの事絶対にドキドキさせて、SPACEを目指せるバンドだって認めてもらうからね！」

意気込んだ香澄に、りみもやる気を見せる。有咲は面倒くさそうにため息をついていたが。

「でも、ライブするにしてもどこか場所ってあったっけ？」

「この辺りには、ライブハウスはSPACEくらいしかないからな……」

当然使えるはずないし、となると場所がなくなる。何か、うってつけの場所がどこかにあれば話は別なんだが……。

「うーん……あつ、有咲の蔵は？」

「何でうちなんだよ！」

「いいんじゃないかな？有咲ちゃんの家、広いから何人か入れないかな？」

「う、牛込さんまで……」

小規模のライブなら、問題はないだろう。客を呼ぶことになっても、そこまで大人数じゃなかったら行けるだろうし。

「蔵でライブ……クライブ？」

「な、なんだそりゃ……。てか、私はまだやっていいなんて一言も言つて——」

「いいじゃん、クライブ！やろうやろう！」

「はあ!?っーか、私の許可を——」

「有咲、りみりん！クライブがんばろうねっ！」

「う、うん！」

「だから私の話を聞け——!!」

「やはり、音楽を聴いている間は心拍数も安定してますね。原因は、こちらの方でもさっぱりわかりませんが……」

「そう、ですか」

その日の放課後。俺はすぐに学校を飛び出し、ある場所に向かう。そこは、昨日美羽が運ばれた病院だった。

あれから検査が終わり、医師に告げられたのは……数週間の入院。しばらく経過観察を行う必要があると、そう判断した結果らしい。容態が悪化する事があれば、手術も考えなくてはいけないとのこと。

考えたくもない。そんな最悪の可能性にならないように、祈るしかない。そんな自分が憎い。

だが、その中でも不幸中の幸いだったのは、やはり音楽に関する行動による病状の緩和だった。昼間も、音楽を用いた検査を行っていたらしい。

今は美羽の担当医と、応接室で直接話をしているところだ。母さんは仕事で忙しいし、こういう話は俺が聞いておかなくては。辛い事実を突きつけられないようにと、それだけを考えて。

「今のところは、何の問題もありませんね。一人でギターを弾いたり、入院している子供たちの前で弾き語りをしていましたね。とても元気そうに」

「それならよかった……。安心しましたよ」

俺は胸をなでおろす。付き合いだから表には出さなかったが、香澄たちといた時から、美羽の事はずっと気にかけていたから。

「ただ、退院は先になりそうです。何かあるか、まだわからないですから」

「具体的には、どれくらい……?」
「そうですね……。確か、花女ではもうすぐ文化祭があったはずですが……」

数週間、と言ったところか。今回は家で倒れて運ばれたことだし、あらゆる可能性を考慮してくれているんだろう。けど……。

「間に合わない……ですかね。美羽は、中学最後の文化祭なんですよ」
美羽は中三。本当は、文化祭には行かせてあげたい。それなのに、こんな形で奪われるかもしれないなんて。

「文化祭が終わるまでは、様子を見せてほしいですね……。さすがに、すぐに退院を決める事はできませんよ」

「そうですね……。無理言つてすみません」

だが、それが美羽のためなら仕方ない。俺は喜んで、受け入れるしかないんだ。何よりも、俺は美羽が大切なんだから。

だからこそ、譲れない思いだつてある。

「……俺、できる事なら美羽を一人にしたくないんです。一人きりにして、悲しませたくないんです」

孤独の中で、苦痛に耐えながら過ごす時間の重さを、俺は知っている。それは、俺がどうにかしようと思えば、どうにでもできた話だったんだ。初めて俺は、自分の無力さを痛感していた。

病気の苦しみは肩代わりできないかもしれない。けど、一人苦しみと戦い、のしかかる不安を取り除いてやることなら、いくらでもできるんだ。

だから俺は、あの時の涙だけは忘れられない。

「私たちも、妹さんの事は注意して見ていますよ。自分の辛い状況なのに、人を笑顔にする力を持っている。音楽によつてね。だからあの子は、音楽に愛されているんだと思いますよ」

美羽の強さは、俺だつてよく知っている。いつ病気の発作が襲い、苦しむことになるのかわからないのに、美羽はいつでも明るく振る舞う事を忘れない。

あの元気な姿は、一体どこから来るのかと不思議に思うくらいだ。「少し、医者らしくないことを言ったかもしれないね。そんな根拠のない話を持ち掛けて、患者を安心させようなんてね」

「いえ。たまにはフワフワした話もいいですよ。そう言うのって、人間らしさじゃないですか？」

「へえ、なかなかいい事言いますね」

「それはありがとうございます——」

と、ポケットにしまっていたスマホが震えた。オーナーからだ。今日はバイトがなかったはずだが、何の用だ？

「すみません、少し大事な電話が入って……」

「君も大変ですね。妹さんの事もあるし、無理だけはしないように」

無理だけは……か。そうも言ってもらえないんだよな。

「はい。では、美羽の事をよろしくお願いします」

俺は応接室を出て、周りに人がいない事を確認してから電話に出る。何やら騒がしいが、ライブの準備だろう。程なくして、オーナーの声が聞こえた。

「もしもし、オーナーですか」

『ああ、成川。休みなのに突然すまないね』

「いえ、構いませんよ。何かあったのですか？」

『実は、次の休日に人手が足りなくなってるね。成川には悪いが、その日シフトに入ってくれないかい？腕は見込んでいるんだ』

「もちろんです。直々に声がかかるとは光栄ですね」

仕事の連絡かよ……とは口が裂けても言えるはずがない。俺は仕方なく了承の返事を出す。ま、その分別の日に休みを回してもらえから助かるんだけどな。

「これからライブですか？賑やかな声、電話越しに聞こえてきますよ」

『そう言う成川の方は、やけに静かじゃないか。もう家にいるのかい？』

「いえ……実は、美羽が入院してしまっ……」

オーナーにはまだ話していなかったな。昨日も夜遅くだったし、オーナーに報告している時間も余裕もなかったからな。

『そうかい。具合の方は？』

「今のところは、何も。入院している人たちに、弾き語りまで見せていくくらいですから」

『……そうかい』

俺は人気の少ない病院の中庭に場所を移し、話を続ける。いつまでも、病院の中で通話しているわけにもいかないからな。

「あつ……すみません。不謹慎でしたね」

『何を言うんだい。さすがに、もうそれくらいで心が折れるようなものじゃないよ』

「それなら、よかったです。言つてから、少し軽率だったかと……」

『大切にしたい人がいる気持ちは、私も十分理解している。お前も、妹の事が大切なようだからな』

「ええ。そのために、俺はあの学校に入学したんですから」

『……なら、彼女の件についてはどうなった？』

「……それは」

『彼女』とは、あの病室にいる感情を見せない女の子の事だ。誰とも話そうとせず、いつも虚ろにどこかを見つめているだけの……悲しい女の子。

「……これから向かうつもりです。ちょうど、彼女と同じ病院に美羽は入院してるので」

『そうだったのかい。なら問題はないね』

「もちろん。何も行動を起こしていないわけではありませんよ」

『お前の頼みを聞かされたためにあの学校に掛け合ったのは、私だ。その代わりにと、彼女の事は任せている。動いてもらわないと、交渉が成立しないだろう』

「ええ。ですが……なかなか進展が見られず、少し手探りの状態ではあるんですが」

どうすれば、心を開いてくれるのか。何をすれば、彼女は笑顔を見せてくれるのか。

人の心に寄り添うのって、どうすればいいんだろうな。

『そこまで簡単に済む話なら、私だって苦勞してはいないさ。だからこそ、関係ない部外者にまで協力を申し出ているんだ。それこそ、お前の無茶な要望に応えるための引き合いに出すほどにな』
「……………そうですね」

だが、このまま進展がないのなら、俺は最悪あの学校にいられなくなる。それだけは、何としても避けなくてはいけない。

また、あんな事の繰り返しにはしたくないから。

『だが、時間はないぞ。お前にもお前の事情があるかもしれないが、こちらにもこちらの事情がある』

「重々承知してます」

『……………ん、そうか。すまない、成川。ライブが始まる。切るよ』

こつちの言葉も待たずに、オーナーは早々に電話を切った。ライブとなると熱あるからな、あの人。

「……………さて」

まずは、あの子のところに行くとするか……………。

phrase 29 まだ誰も知らないこの歌

「うちでやるのは、まあ香澄に言っても聞かねーだろうからいいとして……」

「何の曲をするか、だよね」

翔が病院に向かっていた頃、香澄たちはクライブに向けて作戦会議を始めていた。場所については、今も集まっている蔵に決まったが、問題は曲。

「えく？きらきら星はく？」

「地味じゃね？」

「いいじゃん！楽しいじゃくん!!」

「駄々をこねるな！まとわりつくな！」

きらきら星を主張する香澄と、それを一蹴する有咲。そして一蹴されて香澄が泣きつく……と、この繰り返し。

「前にも言ったけどな、お前は曲のレパートリーが少ないんだよ！他にはねえのか!？」

「えっと……きよしこの夜?」

「何だよ！お前、星っぽい曲しか頭にねえな!？」

「えへへく！」

「何がえへへだ！褒めてるわけじゃねえんだぞ!？」

香澄がこんな感じなため、候補に挙がった曲はきらきら星ときよしこの夜。たえに聞かせる曲が子供向けの歌と言うのも、盛り上がりには欠ける。

「ねえ、ダメなの……?」

「し、しれつと上目遣いすんな。そんな目で迫られても、無理なものは無理!」

「じゃあ、有咲は何かいい案あるの!？」

「そ、それは……」

「ほら！じゃあ、きらきら星に——」

「それだけはぜつつつつつたいたいに勘弁だからな!？」

いつまで経っても平行線。先に進む目処は一切ない。そんな中、二

人のやり取りを見ていたりみが助け舟を出す。

「あ、あの……だったらこれなんかどうかな？携帯に入ってたの、忘れてて……」

りみのスマホに入っていた、1つの曲。それを見せるためにスマホを香澄に渡し、有咲もその画面をのぞき込む。

「りみりんオススメの曲？タイトルは……『私の心はチョココロネ』？」

「聞いたことねえけど……もしかしてこれ、牛込さんが作った曲とか……」

「う、うん……。昔お姉ちゃんと作った曲なんだけど、あんまり難しくないかって」

「えっ、マジで牛込さんが作ったのかよ!?!」

自作の曲、つまりオリジナルの曲だった。りみが作ったと言われたら、二人もどんな曲なのか気になって仕方ない。

「すごいよ、りみりん！聞かせて聞かせて！」

「うん。じゃ、これイヤホンね」

イヤホンを手渡され、香澄は有咲と左右片方ずつイヤホンをつける。有咲は恥ずかしそうにしていたが、すぐに曲が再生される。

自分たちが作った曲を、二人はどう判断するのか。何せ、かなり前に作った曲だ。変かもしれない。でも、りみは不安ながらもじっと待つ。

しばらくして、香澄たちはイヤホンを外す。一通り聞き終え、緊張するりみに対して言った言葉は……。

「可愛い！すごい可愛いよ！」

「うん。悪くないじゃん？」

「……ほ、本当!?そう言ってもらえると、私も嬉しいよ〜！じゃあ、この曲をやるって事でいいのかな？」

「もっちりろん！私、やってみたい！」

「ま、いいんじゃないね？」

「ありがとう〜！私、明日までに楽譜用意してくるね！」

高評価を貰えたことで、安心するりみ。曲も決まったところで、明

日からはいよいよ練習に入ることができそうだ。

「こちらこそありがと、りみりん！でも、可愛かったなく！歌つてたの、りみりんですよ？」

「えっ？そ、そうだけど……？」

「やっぱりそうだったんだな。案外、牛込さんがボーカルでも行けんじゃね？ゆり先輩だってボーカルやってんだろ？」

「ええっ!?わ、私がボーカルなんて無理だよ！お姉ちゃんみたいに、全然かつこよくないし……」

「えくそつかなく？ゆりさんはゆりさんだし、りみりんはりみりんだと思っただけどなく？」

「香澄ちゃん……」

姉妹だからと言って、比べる必要はどこにもない。互いに持ち味があり、互いに持っていないものがある。それは無理に追いつき、手に入れるようなものではない。

大切なのは、その持ち味をどう育てて、活かしていくかだ。それは簡単なようで難しく、わかっているようでわかっていないこともある。

「よし！じゃあ明日から、クライブに向けて……えつと、『あなたの心をイチコロネ』……だっけ？」

「全然ちげえだろ！『私の心はチョココロネ』な!？」

「あはは……惜しかった」

「惜しくねえよ！」

「とにかく、頑張つて練習していこうね！有咲、りみりん！」

「おおっ!!」

「……結局、何も話してはくれなかったか」

オーナーとの通話を終え、俺はあの子……美空と言う少女のいる病

室にお邪魔していた。

ノックしても返事はなく、中に入っても俺を見ようとしめない。聞こえてくるのは、彼女の息遣いだけだった。

ほぼ無音の個室。張りつめた空間が、俺に緊張感を与えていた。だからと言つて、ここで逃げ出すわけには行かない。彼女をこんな場所に放りっぱなしにするわけにもいかないんだ。

声をかけ、話を膨らませて、俺は彼女が好きそうな話題をいくつも引き出した。学校の事や、バイトの事。趣味だったり、音楽の話だったり。何か反応してくれたらと、俺はそんな淡い期待を込めていた。

だが……言葉は返らない。

表情も、何一つ変わることはない。俺の言葉は、彼女には届いていない。変化のない現状に、俺の心も折れそうだった。

俺は今、本当に正しいことをしているのか？こうして病室に通い、彼女の心をほぐそうと声をかける事が、果たして彼女のためなのか？解決につながるのか？

もっと別の道があるんじゃないのかと、そう思う時はある。だが、その答えが見つからない。見つからないから、取れる手段しか取れない。それが正しいかどうか、わかっていないとしても。

結局、この日も何も進展がないまま、俺は病室を後にした。残るのは、不安と焦りだけ。

「……どうすればいいんだろうな」

そう呟いても、答えが返ってくるわけじゃない。返ってきてくれたのなら、どれだけいい事か。答えの出ない悩みを抱え、俺は1人病院の中を歩く。と、

「……ん？この音は？」

ロビーの方から聞こえてくる、何かの演奏。これは……ギターだ。そして紡がれる音に合わせて響く、女の子の歌声。

これは間違いない、美羽だ。今から病室に向かおうとしていたが、ロビーにいたなんてな。俺は美羽に会うために、ロビーの方へと足を

進める。

「~~~~~♪」

おっ……美羽の奴、また一段と腕を上げたみたいだな。歌もかなりうまい。聞いている患者たちの心も、すっかり掴んでいるみたいだ。療養のために家にいる時間が多かったからな。練習に費やす時間も、十分にあったって事だな。

けど、それにしてもレベルの上がり方が早い気もするんだが……？
「……ありがとうございます！今日はまた、夜の8時から弾き語りするからね！リクエストも待つてまゝす！」

たくさんの拍手。患者たちも、とびきりの笑顔に包まれていた。

美羽は、こうして誰かを笑顔にすることができると。それがどれだけ凄い事なのか。ギター一本で、己の力だけで。

そう考えれば考えるほど、この前の話を思い出して仕方ない。自分には力がない。俺も香澄も、互いに自分の中の壁と戦い、苦しんでいる事を。

香澄を論じたあの言葉も、結局は俺に向けている言葉に過ぎなかった。自分の行動を正当化するために。力のない俺でもやるべき事があった、そのための力を誰かから受け取って、前に進もうとしているんだって。

それでも言うておかないと、俺は不安だった。やはり、今こうして行っていることに、意味があるのかがわからないから。

ここらの言葉は、俺に活路を与えてくれたのか。それとも、何もできなかつた時の言い訳を与えてくれたのか。

「……あつ、お兄ちゃん！来てたんだ！」

患者たちが次々と病室に戻る中、美羽はギターをケースにしまい、額に滲んだ汗をタオルで拭いている。その最中、俺の姿を見つけて駆け寄ってきた。

「ああ。途中からだったけどな」

「途中からでもいいって！ね、どうだった!?!」

「驚いたよ。歌も演奏も、こんなに上手くなってるなんて思わなかったよ」

「へへくん！これも毎日の練習のおかげだね！」

「やっぱりそうだったのか。美羽は見えないところで、地道に努力していたって事なんだな。」

「凄いじゃないか。よく頑張ってるな」

「ギター弾くの、楽しいからね！それに、少し前からちよつと秘密の特訓を……あ」

秘密の特訓？今は、少し聞き捨てならなかった気がするぞ？

「美羽？それってどういう事だ？何か隠れてコソコソしているな？」

「い、いや、別にそう言うんじゃないよ！アハハ……」

「それ、ごまかしてるつもりかよ……」

「そ、それより香澄さんは？私、入院しちゃったし、指導役の話も……」
「あ……」

「言われてみればそうか。香澄の指導役にと、俺は美羽を採用したんだ。その美羽が動けない今、他に頼る宛てはいなくなってしまった。たえは敵って言うか、今回は頼れないから……」

「俺がどうにか教えていくしかないな。基礎くらいなら、俺だって教えられる」

「香澄さんのバンドのメンバーの中で、ギターできる人っていないの？」

「ベースの牛込りみって子のお姉さんがギターやってるんだけど、他はダメ。ってか、後はキーボードの市ヶ谷有咲ってツンデレ大王しかないけど」

ツンデレ大王じゃ、ギター教える戦力にはならないだろうからなあ……。香澄の相手をするスキルには長けているけど。

「ツンデレ大王って……アハハ！何それ！」

「バンドには入ってないけど、面白い奴なら他にもいるぞ？俺のバイト先の同僚に、花園たえって子がいるんだけど……そいつ、ド天然だな。見た目はモデルみたいなのに、話してたらわけわかんない」

「モデルさんみたいな人が友達なの!?!うわ〜いいな〜!」

「可愛さで言えば、同じクラスに山吹沙綾って女の子がいるんだけどな。しつかりしてて、頼りになるんだぞ?家がパン屋で、いつも放課後は手伝いをしてるんだ」

「山吹……それにパン屋って、もしかして、やまぶきベーカリーの!?!」

「あ、ああ。けど、そんなに驚くことなのか……?」

「驚くよ!同じクラス……いや、中等部の中でも大評判のパンだから!お兄ちゃんだけ何かズルい!」

ズルいと言われてもな。てか、沙綾の家のパンってそこまで人気あったのかよ。何か凄いな。

「別に、気が付いたら仲良くなってたっただけだから……。他の奴も、きつかけは色々だけど、仲良くなるのにそう時間はかからなかったし」

「いいな。私も会ってみたいな。……あ」

「うん?どうした美羽?」

「そうだ、お兄ちゃん!今度、さつき話したお兄ちゃんの友達、連れてきてよ!そう言えば私、まだお兄ちゃんの友達の事全然知らないからさ!いいでしょ?」

「……ってわけで、皆には一緒に妹のお見舞いに来てほしい」

その翌日の昼休み。俺たちはいつものように中庭に集合していた。たえにも関係のある話のため、今日は6人だ。

俺はすぐに話を切り出し、美羽が皆に会いたがっている事を伝える。何気に美羽の話をこいつらにするのは、今日が初めてかもしれないな。

あ、でも有咲とりみは知っているのか。りみには前に話したことがあった。有咲に関しては、直接会ってたからな。

だが、美羽が重い病気で苦しんでいる事。今も美羽は入院していて、容態を診ている事。そこまで踏み込んだ話はまだしていない。香澄は当然知っているが、他の4人は息を吞んで耳を傾けていた。

「何でだよ。めんどい。パス。行きたいならみんなで行ってくれば？」

「えく？いいでしょ、有咲く！」

「くつつくなーあいつといると、マジでムカついて仕方ないんだよー！」
いや、それは有咲限定の話だろ。

「えつと……翔？その妹さんって、どんな人なの？」

「美羽って言うんだけど、明るくて活発で、香澄を少し抑えめにしたのが美羽だな」

「つまり、香澄2号……！」

「たえは黙ってろ」

「ギター弾いてるんだよね？前に翔君と、美羽ちゃんのギターの弦買いに行ったから……」

「おう。演奏レベルは高いぞ？たえも相当だけど、それ以上のポテンシャルを秘めているからな」

「凄いね、その子。モフモフしたい」

意味の分からなさは、香澄レベルをはるかに超えてるんだよ。お前は。

「いいんじゃないかな。私、今日は家の手伝いもないから、一緒に行けるよ」

「えつ、本当!?さーやも一緒だろ！」

「へえ、珍しいな」

「ムく……。何かその言い方、私がいたらダメみたいに聞こえるけど？」

「ご、誤解だ、沙綾！そうじゃない！」

ジト目で少しツンツンしながら、沙綾は俺を非難してくる。ふてくされている沙綾もなんか新鮮で、ちよつと可愛かったり……つてバカ。そうじゃない。

「アハハ……。うん、私は行きたいな。美羽ちゃんに会ってみたい！」

「私も。ギター、聞いてみたい！」

「よし、それじゃあ決まりだね！今日の放課後、この6人で、みーちゃんのお見舞いに——」

「却下」

と、有咲だけは反対の声を上げる。全員で行く空気になっていたのに、ここに来てても有咲は自分のペースを崩さないのかよ……。

「話進んでるけど、私は行かねーからな？誰が何と言おうとな！」

「え〜？有咲、行かないの〜!？」

「行かねーよ。大体、あいつムカつくんだよ！ずーっと私の事見て笑ってくるんだぞ?！」

「うん。有咲って変だから」

「お前に言われたくねえ!!」

「あつ、ごめん。有咲って何か面白いから」

「それはフォローでも何でもねえんだぞ、花園たええ!!」

出たよ、たえの天然節。こいつがいると、知らない間に場が荒れていくんだよな……。

「うう、有咲〜！一緒に行こうよ〜！有咲がいないと寂しいよお〜……」

「なっ……!!／／ちよ、抱き着いてくんな！お前は離れろ！／／／」

「香澄がダメなら、私はいいの？」

「何で花園さんにくつつかれないといけねえんだよ！暑苦しい！」

「ギョ〜っ……。あ、有咲っていい匂い」

「くつつくなって言っただろ！あくもう、何で二人にまとわりつかれないといけないんだ！」

「それに有咲、おつきいね」

「はあつ、ちよ、何触ってんだ！止めろ、おい！人の話を聞けー!!／／」

何だこの空間。香澄とたえが有咲にくつついて、たえに大きな何かを弄られてるって……。それを見ている俺たちは、何をどうコメントしたらいいんでしょうか。

「えへへ〜じゃあ私も！」

「お前……っ！ちよ、見てないで助ける！翔でも牛込さんでも、山吹きんでもいいからあ!!」

「アハハ……。どうする、翔?」

「いいんじゃないね? 本人も喜んでるし」

「これのどこが喜んでるように見えるんだよ! いい加減離れろ!」

そもそも目の前でこんな光景見せられて、止めに行けるわけないだろうが。こっちだって、健全な男子高校生なんだぞ。こ、こういうのにドキドキする事だって、まあ……。

「あくあ。有咲、ウサギみたいだったのに」

「どんな例えだよ!!」

「種類はアンゴラウサギかな」

「誰も種類なんて聞いてねえよ!」

「世話がかかるけど、甘えん坊で可愛いんだよ」

「誰が甘えん坊だ!」

「ウサギの話だよ?」

「~~~~っ!! 紛らわしい!! / /」

そもそも何の話してんだよ。脱線しすぎだ。さすがはたえの天然だ。

「えと、翔君。それで、美羽ちゃんの話だけ……」

「ああ。どつかの誰かが行くの拒否するから、ややこしくなったけど」

「さらっと棘のある言葉を投げつけんな」

「いいだろ、別に。ちよつと顔出すだけだし、どうせ暇だろ」

「うるせえよ」

これ以上話を広げるわけにもいかない。ひとまず、美羽のお見舞いについて話を戻していく。

「って訳で、今日の放課後に美羽のお見舞いについてきてくれるって事で、みんな大丈夫だな?」

「もっちろん!」

「私も! 美羽ちゃんに会うの、楽しみだな」

「私は、翔の妹がどんな感じの子なのか、早く見て見たいかも」

「そうと決まれば、早速しゅっぱっ」

「放課後って言うってんだろ、たえ」

今は昼休みだぞ。まだ学校終わってないのに、抜け出してまで行く気なのか。

「で、有咲はどうするんだ？」

「はあ？だから、行かねえって言うってんだろ」

「そっか……。じゃあ悪いけど、今日は有咲1人で帰ってくれ」

「え……。お、おう……」

「よし、じゃあ俺たちは放課後お見舞いつて事で、5人で仲良く行くか！」

「い、行って来たらしいだろ。わざわざそんな大声で……」

「あくあ、でも有咲がいたら、もっと楽しかったんだろうけどなあ？」

「……くう……っ！あくっ、もうわかったよ！行けばいいんだろ!?仕方ねえけど、一緒に行ってやる!!」

根負けするのが早すぎるが、これで有咲も一緒にお見舞いに行ってくれることになった。やっぱり有咲ってチョロい。

「決まりだな。これで全員行ってくれるな」

「あつ、だったら病院に行く前に、みーちゃんに何か買って行こうよ！早く元気になってほしいし！」

「うん！美羽ちゃんもきつと喜ぶよ！」

「女の子へのプレゼントなら、アクセサリーとか小物入れとか、そういうのでどうかな？私、いいお店知ってるよ？」

「いいんじゃないね？私は別に何でもいいけど」

こつちから頼んだことなのに、美羽のためにここまでしてくれるなんて。俺は……いい友達に恵まれたって事なんだよな。

色々な事情を抱えてこの学校に来た。男の身でありながら、女子校に入学して高校生活を過ごして。たった1人の、男子生徒として。

普通の青春は失われたのかもしれない。けど、そのおかげで出会えた人たちがいる。

沙綾。有咲。りみ。たえ。そして香澄、お前だって……。

「それじゃあ、何買うか決めないと。授業中も、そっちの事だけ考えて

るから」

「そこまで真剣に悩むな、たえ」

「えっ、美羽の事だけ考えてたらダメ？」

「ちゃんと授業聞け。てか、言い方が付き合い立ての彼氏みたいになってるぞ」

「えっ……!?! 私、美羽の彼氏なの!?!」

バカ野郎。どうなったら話がそっちに傾くんだよ。

「おたえ、みーちゃんの彼氏なの!?!」

すまん。バカはもう1人いたみたいだったわ。

「アハハ……。それじゃあ授業もそろそろ始まるし、教室に戻ろっか」
「だな。じゃ、また放課後に再集結って事で!」

こうして俺は、放課後を楽しみに待ちながら、午後からの授業に臨むのだった。

phrase 30 隔たり

「沙綾ちゃん、こっちの方のアクセサリーどうかな？」

「おっ、いいかも。私が欲しいくらいだったりして」

「ねえねえ、有咲！これなんかどうかな？」

「お前は星型のもんにしか目がいかねーのかよ」

放課後。俺は香澄たちと一緒に、美羽のお見舞いに行くことになっていた。最初は有咲も渋っていたけどな。

その道中、昼休みの時に出た香澄の提案で、美羽に持っていくプレゼントを買う事に。何を買うかは決まっていなかったが、とりあえず沙綾の行きつけの店に行き、そこで決める事にした。

りみは沙綾と、香澄は有咲とペアで買うものを探しに行き、俺は残ったたえと一緒に店の中を回っている。そんなたえが見つけるものと言ったら……。

「はい、これ」

「何だよ、こいつ」

「可愛いでしょ、ウサギの置物」

「木彫りの熊貫うレベルだぞ」

「ダメ？……じゃあ、パンダの置物にする」

「まず置物から離れようか」

たえはウサギが好きだからな。聞いた話だと、何匹もウサギを飼っているらしい。実際に見たことはないんだけど。

けど、その着地点がパンダってどうだ。まさかこいつ、色だけで決めてないだろうな。

「だったらシロクマの置物は……」

「話を聞いていたのか」

やっぱり色だけで決めてるだろ。てか、置物は貰ったところで置いておく場所に困る。コンパクトなものだとしても、やはりストラップだとか、手軽に身につけられるような物の方が好まれるんだと思う。

と、内心語っている俺だが、実はあまり余裕がない。と言うのも……。

「……………」

「どうしたの？もしかしておなか痛い？」

「いや違う。てか、どこから腹の話が出たんだ」

「変な顔してたから」

それを真顔で言うな。どこでどう結び付けたんだよ。

「別に、何って事もないんだけど……。俺、こういう店って初めてだから、緊張してな」

「ここってそんなに大人な店だったの？」

「誤解を招くような発言は止めてくれ」

ここは、女の子のアクセサリーや小物などを取り扱っている店。男が入るような店ではない。もちろん、他の客や店員も見渡す限り女性だ。

何か、恥ずかしくてソワソワする。女性しかいない店内に、男が1人。しかも隣には（見た目だけは）美人の女子高生。色々と好奇の目を向けられている事だろう。だったら学校もそうだが、また話が違う。

そんなわけで、最初は外で待っていてしようとしたんだが……。せつかくだからと沙綾の手で強引に店の中へ。女の子の好みもわからないし、戦力にはならないと思うんだけどな……。

「大丈夫だよ。私もここに来るのは初めてだから」

「いや、たえは女の子だろ。男の子がこんな店とか、入ることなんてないし……」

可愛い装飾の施された店内で、どうしても男の俺は存在が浮いてしまう。変な注目を浴びるのだけは、ちよつと恥ずかしくて嫌だった。

「うくん……。だったら、女装してみる？」

「何でだよ！余計に目立つから！」

「目立つのが嫌なら、私の後ろに隠れる？」

「……逆に目立つだろ」

「それじゃあ……。手、つなご？」

だからどうして着地点がよくわからないところに繋がっていくんだよ。手なんかつかないだところ、どうなるって言うんだ。

「……理由は？」

「こうしていれば、きっと翔の事も……私の彼氏に見えるんじゃないかなって」

「いや、彼氏に見えたところで、どうなるって言うんだよ」

「翔が自分から入ったんじゃないやなくて、彼女の買い物に付き合ってる男の子って感じになれる」

「なったところで、今度は違う注目浴びそうなんです。そうやって力説してるたえは、何故か表情が強張っていたが。」

「だから、どうかな？手、つなぐ？」

「……別に、つなぐ必要ないと思うのは俺だけか？」

「うん」

即答かよ。

「……わかったよ。繋いだらいいんだろ？」

「……！う、うん！じゃあ、次はあっちの方に行こつ！」

「うえっ!?お、おい、たえ!？」

たえと手をつなぎ……と言うよりは、手を引かれて別の売り場場所を移す。焦りながらたえの横顔を見ると、さっきまで強張っていた表情が嘘のようにほぐれ、頬をほんのり染めながら笑顔を浮かべていた。

で、こつちはこつちとして……あいつらはどんな感じだ……？

「うくん、なかなか決まらないね〜？」

「どうすんの？あんまり時間かけても、面会時間だって限られてんだろ？」

「市ヶ谷さん、行きたがってなかった割には、色々考えているんだね？」

「……ううつ、山吹さん!!／／」

「どうやら、向こうも決まっていなみたいだな。けど、いつまでも長居はできない。時間もあるし、俺のメンタルが耐えられるかの問題もある。」

「てか、たえ。この手って、いつまで繋いでるつもりだ？」

「死が二人を分かつまで」

「結婚でもするのかよ!?!とりあえず、この店出るまでだからな」

「……ごめん。聞こえなかった」

「絶対聞こえてただろ」

「翔って手汗すごいだね」

話を逸らすな。んで、手汗は緊張と、一応女の子の手を握っているからな。もう心臓が破裂しそう。

「翔君、おたえちゃん。何かいいものは見つかるか……って、な、何で手繋いでるの……?」

「翔が恥ずかしくてたから」

「微妙に見当違いなことを言うな」

俺たちの様子を見に来たのか、りみが声をかける。俺がたえと手をつないでいるのを見て、少し泣きそうになっていたけど。

変に誤解されても困るので、俺は簡潔に、どうしてこうなったのかを説明する事にした。

「そ、そうだったんだ……。お、おたえちゃん、そう言う事なら、手を離してもいいんじゃないかな?」

「この手は離さない」

「いや、離してくれよ」

「あ、アハハ。……それならよかった、かな」

「うん?りみ、何か言ったか?」

「うえっ!?う、ううん!な、何も言ってないよ!大丈夫!／＼／＼」

何の大丈夫かはよくわからなかったが、とりあえずアタフタしているりみが可愛かったとだけ言っておく。

「じゃあ、一旦みんなと合流するか。俺も闇雲に探し回るよりは、向こうの意見とか聞きたいし」

「私の意見は?」

「謎の置物チョイスしかないセンスのお前を頼ると思うか」

「ブーブー」

「豚か、お前は」

「ウサギの鳴き声だよ?」

ややこしい。ここに来て、またウサギを推すな。と、色々あったが、

俺たちはりみに連れられて香澄たちと合流。手をつないでいた件については、当然のように触れられた。適当に説明して、すぐに話題転換したけど。

「それじゃあ、そっちでもいいのは見つからなかったんだね」

「ウサギの——」

「却下。で、そっちも特に何もなし、と」

「うん……。ねえ、どうしよくなーくん！みーちゃんの好きな物って何だっけ〜!？」

同じ女子の香澄でも、美羽が好きそうな物を見つけるのに難儀してるんだ。兄とは言え、俺が美羽の好みを把握しているわけがないだろう。

「好きな物か……。つーか、こういう小物とか、そういう女子の好きそうな物ってよくわからないんだよね……」

「妹の事だろ？そう言う話とかしないわけ？」

「しなくて悪かったな」

もし何の前触れもなく話したら、絶対ドン引きされる自信がある。

「あつ……。でも、みーちゃんと言えば音楽だよね」

「ギター弾いてるって、昼休みの時も言ってたよね」

「ああ。それに、あいつは音楽に愛されてるからな。音楽に触れている間は、容態も安定して落ち着くんだよ」

「へえ……。あつ！だったら、さっきいい感じの物見つけたんだけど」

すると、沙綾が何か思いついたようで、小走りである売り場に向かう。そこは、ヘアアクセのコーナー。そこから商品の一つ選び出すと、俺たちに持ってきた。

「ほら、これ。音符の形してて、結構かわいくない？」

黒と白のツートーンカラー。音符をモチーフに、そこから二色の翼が飛び出している。可愛くもあり、少しクールな印象を与えるアクセサリーだった。

確かに、美羽には似合いそうな気がする。買っていくものは、この音符のアクセサリーで決まりだろう。

「いいじゃん、さーや！それにしようー！」

「私もいいと思うな。きつと喜ぶよ」

「ありがと、香澄。牛込さん。じゃあ私、お会計済ませてくるね」

沙綾は鞆から財布を取り出し、レジに並んでいた。あつちは任せるとして、俺はいそいそと店を出る。これ以上は、もう周囲の視線が耐えられない……。

「ああ、恥ずかしかった……」

「翔君、大丈夫？疲れてない？」

「心配してくれてありがとな、りみ。つか、いつまで俺の手握ってるんだよ、たえ。そろそろ離してくれ」

「もうちよつと」

「駄々をこねるな」

強引にたえの手を引きはがして、俺たちは沙綾を待つ。たえはマジマジと、握っていた手を見つめていたけど。そんなに手汗がひどかっただろうか。

「みーちゃん、喜んでくれるよね！」

「ああ。俺たちで選んだんだ。きつと喜ぶさ」

「えへへ〜！なーくんが言うなら、絶対大丈夫だよね！」

そろそろ、患者たちに弾き語りでもしている時間だな。上手く行けば、美羽の演奏しているところも見られるかもしれない。

「あつ、そう言えば私、有咲ちゃんとかこういう店に来たの初めてかも」

「有咲って、普段から引きこもってるからな」

「その言い方止めろ、翔。てか、どっかに寄り道とか、初めてなんだよな……。何か、女子高生みたいって言うか……」

「あれ？有咲、何だか嬉しそう！」

「はっ!?いい、いやそんな事ねーし！別に、その、こういう放課後にみんなまで寄り道して、ワイワイしてみたかったとか、そう言うんじゃないからー」

見事な模範ツンデレだな。聞いてもないのにズバズバと自分から口を滑らせていくんだから。

「ま、そう言う事しておくよ。有咲？」

「何かムカつく……。それに、何ニヤニヤしてんだよ！」

「有咲って、本当奥手だなくって思ってたな」

「何を——」

「有咲の手って、奥の方にあるの？」

「って、いきなり会話に参加してくんな！」

そして炸裂する花園節である。奥手ってそう言う意味じゃねえんだよ。

「……って待った」

「ん？どうかした？」

「お前、その手に持つてる奴、何だ」

見ると、さつきまでは持つていなかった紙袋。側面にはこの店のロゴがついている。もちろん、袋だけ持つていたわけではない。さつき初めて来たと言っていたはずだからな。

「……何買った」

「気になる？」

「えっ、おたえ何か買ったの!？」

「いつの間に買ってたんだ……？」

俺たちが4人で話している間に、こいつ店の中に戻っていたんだな。さつきから会話に混じろうとしてなかったが、そう言う事だったんだな。

「てか、何で沙綾より先に戻って来てるんだよ」

「沙綾、自分が欲しい物も買いに行くって言ってたから。それで先に買ってきた」

こいつと遭遇した時の話だな。たえが何か買うのを見て、沙綾もせっかくならと自分の分も商品を取りに行つたって事か。

って、何で俺が補足してんだよ。たえの説明は端折りすぎなんだよ。

「それでおたえちゃん。何買ってきたの……？」

「一目見た時から、私にはこれしかないって思ってた……」

「私のランダムスターみたい！」

「ランダムスターは売ってなかったけど……はい、これ!!」

たえが紙袋から取り出した物体を見て、香澄は目を輝かせる。……

『香澄』は。

りみは明らかに苦笑しているし、有咲に関しては得体の知れないものを見る目を向けている。俺なんか、もう色々と言いたくて仕方なかったが……一言だけ、こう叫んだ。

「……お前の頭の中は、ウサギしかねえのかよ!？」

それはまさに、さつきからしつかく主張してきた、ウサギの置物だった。

「香澄ちゃん。美羽ちゃんって、普段はどんな子なの?」

「うくとね。いつもキラキラしてて、楽しそう。たまに心配になってキューってしちゃうけど、私の事を応援してくれて!ドキドキが伝わってくるような、そんな子!」

「いや、わっかんねえ。香澄語じゃ無理」

「私はわかった」

「どんな理解力だよ!？」

沙綾が会計を済ませ、俺たちは病院へと向かい始めた。

戻ってきた沙綾は、美羽用のヘアアクセの他にも自分用の……シユシユだったか。それを何個か買っていた。沙綾はちよつと恥ずかしそうにしていたが、女の子らしくいいと思うけどな。

それにしても、賑やかだ。香澄たちはもちろんだが、たえもあいつらの中に馴染んできている。こいつらを見て、美羽は一体どんな反応を示すんだろうな……。楽しみだ。

「何か保護者みたいな顔してたよ?」

「ん、沙綾か」

気が付くと、俺の隣には沙綾がいた。その前を、香澄たち4人が歩く。病院まではまだ少し距離があり、しばらくはこんな感じの時間が続くだろう。

「保護者って……俺を何だと思ってるんだよ」

「香澄たちのお父さん？フフツ」

「あのなあ……」

「アハハ、冗談だよ」

こうしてからかってくる沙綾を見るのも、何だか久しぶりの事みたいに感じる。放課後は、沙綾は店の手伝いで忙しいからな。

「今日は付き合ってくれてありがとな。店の手伝いはないって言うってたけど、そんな貴重な休みを潰してしまったから……」

「いいよ、私は大丈夫。たまにはみんなと出歩くのもいいし、私も楽しいよ。」

「新しいシユシユってのも買えたからか？」

「アハハ、そうかも」

こうして沙綾と放課後に一緒になることもほとんどないからな。いつもは香澄に、有咲に、りみの3人で……。最近は、そこにたえが一緒になって。それまでは、バイトで会う事が多かったけど。

「家の人には、何か連絡したか？」

「一応ね。遅くなるかもしれない、とは言ったんだけど……そしたら、何だか嬉しそうにしちゃって」

「……嬉しそう？」

遅くなるのに、喜ぶってどういうことだ？沙綾も年頃の女の子だし、遅くまで外出させるのを喜ぶ親なんていないと思うんだけどな……？

どうも引つかかったが、沙綾も特に気にした様子もなく話すから、別に深い意味はないんだろう。毎日手伝いしてるし、たまの休みくらいは遅くまで羽を伸ばしてほしいとも思っているのかもしれないしな。

「早く美羽ちゃんに会ってみたいな。翔の妹がどんな子なのか、本当に気になってるんだ」

「楽しい奴だよ。一緒にいると、こっちまで笑顔になるくらいだ。それくらい、美羽から笑顔が消える事ってないからな」

「そうなんだ。ますます会うのが楽しみになったかも」

いつも楽しそうで、元気で。だから、あいつから笑顔を奪う病気が憎い。

これ以上、あいつから笑顔を消したくはない。発作が起きて、病気に苛まれ、笑顔が消える瞬間を……増やしたくはないんだ。

「ところで、翔も何か楽器とかしてるの？ほら、美羽ちゃんはギターやってるって言うってたし、翔もギターとか弾いてたり？」

「俺は……ギターはやってないよ。弦も多いし、難しくてさ」

「へえ。じゃあ翔は、楽器は全くやってないの？」

「いや、やってるよ。沙綾には話してなかったけど……俺、実はドラムやってるんだ」

「ドラム……!?!」

と、沙綾は並々ならない反応を示す。俺がドラムをしていると知った途端、さつきまでの落ち着いた態度が一変していた。冷静さもどこにも見られず、ただ驚くばかり。

いや、ただ驚いているだけではない。ふと落とした視線は、どこか物悲しげに。だが、その口元はわずかに緩み、どこか嬉しさを募らせているようにも見える。

『ドラム』と言う言葉の裏に、一体何があるって言うんだ……？

「そ、そうなんだ。ドラム、始めてから長いの？」

「我流で中学の時の始めたんだ。だから、実力はよくわからないな。前にりみたちに見せた時は、絶賛されてただけど」

「……そう、なんだ」

どこことなく、含みのある言い方だった。沙綾とは打ち解けていると思うが、まだ溝のある部分も多い。他の4人とは、少し踏み込めない一線がある。

音楽の事を話す時、沙綾は決まって、少し暗い表情を見せる。その一線が、沙綾にとって何か深いものなのかもしれない。

「おーい、さーや！なーくん！遅いよ、早くー！」

と、考え事をしている俺の耳に、香澄の声が届く。いつの間にか、あ

いつらとかなり距離が開いてしまったようだ。ちらりと横を見ると、苦笑していた沙綾がそこにはいた。

「よし。じゃあみんなで競争しよう」

「何言いだしてんだ。おい、香澄もなんか言っちゃれよ」

「いいじゃん、おたえ！やろうよ、競争！」

「便乗すんな！」

「遅かった人には罰ゲームね」

「ええっ!?ほ、本当にやるの!?!」

おい、何か始めようとしているんですが。病院までもう少しのところまで来たが、それでもここから競争は疲れるぞ。

絶対俺たちも巻き込むつもりだろうし、俺はそんなの嫌に決まっている。ここは一つ、ガツンと言っちゃあいつらを止めてやらないと……。

「こら、香澄!この辺り車も多いから、走ったら危ないよ〜!」

「うっ、確かにさーやの言う通りかも……」

と、先に沙綾が香澄を止める。おかげで俺の出る幕はなくなったとさ。

「競争はなし?」

「たりめーだ。こつちの事も考えろ」

「よ、よかった……」

りみも一安心しているな。前に体育の時間に、持久走でへとへとになっっていたくらいだ。お見舞いに行く前に、りみの元気がなくなるところだった。

それにこの反応だと、有咲も運動苦手っぽい。香澄やたえは、逆に運動が得意なだけだな。むしろセーブしてほしいくらいだ。

沙綾は運動ってできたっけ?そんな事を考えていた中で、ふと思っただけだ。

「……ところで、沙綾」

「どうしたの?まさか、翔まで走りたかって言いだすんじゃない……」

「沙綾の方こそ、俺以上に保護者面してたな〜って思ってる」

「あ……っ」

さっきの言葉のお返しとばかりに、おれは沙綾を冷やかす。向こうもしてやられているとわかり、少し気分を損ねる。

「むう……前もこうしてからかわれた気がするな……」

「その時に、いつか仕返しするって言ったのは、どこの誰でしたっけ？」

「~~~~っ!!」

プリプリと怒っている姿も可愛いな。つい調子に乗ってしまったが、こういう面は案外子供っぽくて、まだまだ高校生らしいって思う。そんなことを考えてる俺だって高校生なんだけどさ。

「悪かったって。ほら、機嫌直してくれよ」

「知くらない！翔のバカ！」

何だそれ。余計に可愛くなっただが。本人は自覚なくないだろうけど、ついほえましくて笑ってしまう。

「……………」

こうしていると、溝なんて何もなさそうなんだけどな……。

phrase 31 伝えたい言葉

「よし、着いたぞ。ここがその病院だ」

美羽へのプレゼントを買いに行ってから20分ほど。俺たちは美羽の入院する病院へと到着していた。

平日のこの時間は、俺たちのようにお見舞いに来る人が多い。その人達に紛れるように、病院の中へと入った。

「みーちゃん、今何してるだろう?」

「どうせ病室にいんじゃないの?」

「でも、ずっと1人って事だよ。ちょっとかわいそうだな……」

「うん。美羽もきつと……心細いと思うよ」

沙綾の言う通り、美羽は心細い思いをしているに違いない。俺もこうして見舞いに来るとは言え、基本的に1人の時間を過ごすことが多い。夜中に至っては、完全に1人の世界だ。

暗い病室で、病気を抱えながら1人過ごす時間。いつ病気が悪化するのか、この時間はどこまで続くのか。

その恐怖に押しつぶされそうになっているのだと思うと、のうのと家で眠っている俺自身が情けなく感じる。

早く退院してほしい。いつまでも、1人ぼっちで苦しんでほしくない。

「それで、美羽の部屋はどこなの?」

「5階の東棟。その突き当たりの部屋だ。行けばすぐわかるよ」

「……あれ、何か聞こえる」

「話を聞け」

だが、俺の耳にもすぐに何かが聞こえてきた。しっとりとした旋律、その音に乗せて響く柔らかな歌声。

「これ……ギターかな?」

「弾き語り? 誰か歌ってるよね?」

「……っ、こ、この声は、まさか……」

有咲ですら、この反応だ。こいつは間違いない。今も聞こえてくる音色は、俺が一番よく知っている人のものだ。

「なーくん、もしかして!」

「ああ。あの弾き語り、美羽だ」

「「えっ!?!」」

きつと、昨日と同じ場所にいるに違いない。俺は病室ではなく、ロビーを指して足を進める。

そこには、大勢の観客が。患者もそうだが、今日はお見舞いに来た人も足を止めて、美羽の歌声に聞き入っている。

「あれが……美羽ちゃん」

「すごいね。歌も演奏も、全部洗練されてるって感じで……!」

「悔しいけど……あいつ、あんなに演奏とか上手かったんだな」

「美羽の演奏、ハッキリ言っちゃってかなりレベルが高い。手元も全然見えないし、それでいてミスもしてない。しかも歌いながらだから、普通に弾くのも難しいのに……そこにアレンジも入れてるなんて」

たえもこの絶賛ぶりだ。ギターに関してはよくわからないが、ここまで言わせるほど、美羽の技術は高いって事か。

「凄いな、なーくん。みーちゃん、キラキラしてる!」

「ああ。今の美羽、何だか活き活きしているな……!」

そこから何曲か演奏は続き、美羽の小規模のライブは盛り上がった。時には観客からのリクエストにも応え、即興で演奏して見せるスキルも見せてくれた。

今はこうして、一人でライブをしているけど……もし美羽が、バンドを始めたいと言いつ出したのなら……。

「~~~~~♪……ありがとうございます!今回はこれで終わらせてもらいます!」

終わるのが悔やまれる声は何個か聞こえてきたが、みんな拍手で美羽を称える。美羽はその歓声に手を振って応え、やがて観客も名残惜しそうにロビーから去っていく。

一演奏終え、疲れを振り払いながら美羽はギターを片付けだす。それを見て、俺たちも美羽の元に近づいて行く。

「今日も楽しかったな……。みんな喜んでくれてたし、明日は……あつ、お兄ちゃん!」

「よっ、美羽。今日は演奏、聞かせてもらったよ」

「気づいてたよ！途中から見てたよね！あつ、あそこにお兄ちゃんいるー！って」

こっちに気づいていたんだな。いつ気づいたのかは知らないが、演奏しながら俺たちの事も見てたって事か。すごいな。

「で……こいつらが俺の友達。約束通り、連れてきたぞ」

「おお……。お兄ちゃんがこんな女の子連れてるなんて、夢でも見てるみたい」

「美羽!?ちよつとバカにしてないか!？」

それじゃ俺が女っ気がないみたいに聞こえる。一応、俺だつて女の子にモテたいと思う気持ちはある。少しはその、女っ気が……あると信じたいたい。

「翔、妹にもからかわれてるんだね〜?」

「そう言う目で見るな、沙綾」

「へっ、いい気味じゃん」

「うるせえぞ、有咲」

「有咲って……あつ、やっぱり！面白くて面白くて仕方ないひ……クククっ」

「いきなり笑うんじゃねーよ！もう降りてー!!」

お前も早々にバカにされてるじゃねーか。

「えつと……初めましての人は初めましてですな。成川美羽です！お兄ちゃんがいつもお世話になってます！」

場所は変わって美羽の病室。愛用のギターは、ベッドの近くの壁に立てかけてある。横になっていても、すぐに手に取れる場所だった。

「こちらこそ、初めまして。山吹沙綾です。美羽、これからよろしくね」

「あつ、私は牛込りみです。翔君から美羽ちゃんの事は少し聞いてるんだ。よろしくね」

「私は花園たえ。翔とはSPACEで一緒にバイトしてるんだ」

「皆さん、お兄ちゃんから話は聞いてますよ！たえさんの事は、バイトではとつても頼りになる後輩だつて言つてました！」

「お、おい美羽！そう言うのは恥ずかしいから、俺の前で言うのは止めてくれないか!?!/ /」

それですつげえどや顔で俺の事を見てくるたえがムカつく。あくまでもバイト「では」だからな？他は……まだよくわからないし、謎が多いし、天然すぎて読み取れないし。

で、沙綾はここぞとばかりに茶化した視線を向けてくる。してやられてるな……。りみもニコニコと俺を見てくるし、恥ずかしすぎる。「沙綾さんは実家がやまぶきベーカリーなんですよね！私、あそこのパン本当に好きなんですよ！よく買いに行くんですけど、気づいてますか？」

「えつ、そうなの？全然知らなかったな。またお店に来てくれたら、常連さんつて事でサービスするよ？」

「ぜひぜひ！そしたらもう、毎日通い詰めてやりますよ！」

「アハハ……美羽つて、何だか香澄に似てるね。雰囲気つて言うか、性格？」

確かに。美羽と香澄は、どことなく似ている部分があるのかもしれない。今の反応だつて、グイグイ積極的に行くところは香澄っぽいからな。

「えつ？そうですか？」

「うん。私も、何だか香澄ちゃんに似てる気がするなうつて思つてたんだ」

「つまり美羽は、香澄の分身つて事だね」

「適当な事言つてんじゃないよ、たえ」

似ていると言われたからか、ジーンと互いの事を見つめ合っている香澄たち。気持ちはわかるが、見た目の話をしているわけじゃないからな？あくまでも中身の話だぞ？

「つーか、あれ渡さなくてもいいのかよ？」

「あつ、そうだった！有咲、ナイス！」

「香澄さん、あれって？」

「えへへ、実はみーちゃんのために、プレゼントを買ってきたんだ！」
「本当ですか!? うわー嬉しいな！何だろう?」

自分のためにプレゼントを買ってきたと聞き、美羽は声を弾ませて喜ぶ。肝心の中身を喜んでくれるかどうかだが、きつと大丈夫のはずだ。

「プレゼントはこのウサ——」

「たえは引っ込んでろ」

「アハハ……。プレゼントはこっちの紙袋に入ってるんだ。中、見てもいいよ?」

「何だろう?……あつ、これすごく可愛い！ヘアアクセだ！」

美羽はヘアアクセを取り出し、マジマジと眺める。目を輝かせて、上機嫌みたいだった。プレゼントはこいつで正解だったみたいだな。よかった。

「ありがとうございます！このヘアアクセ、大事にしますね！」

「それ、私が選んだんだよ。美羽ちゃんがギターやってるって翔から聞いたから、きつと喜ぶだろうなって」

「沙綾さん、センスありますね！香澄さんとも、バンドやってたりするんですか?」

「……つーあ、えーつとね……。私、放課後は家の手伝いで忙しいから、香澄とは一緒にバンドやってないんだ」

沙綾……?何か様子がおかしかったな……?」

「あつ、そうだ香澄さん。この前の指導役の話ですけど、私入院しちゃったから……。ちよつと無理っばいですね。力になれなくて、すみません……」

「いいよ、みーちゃん！ギターも大事だけど、みーちゃんの方がずっと大事だよ！」

「ん？指導役って何だよ？私、そんなの聞いてねーぞ？」

「みーちゃんにギター教えてもらうつもりだったんだ。クライブまでに、少しでもギター弾けるようになりたかったから……」

「香澄ちゃん……」

うなだれる香澄を見て、りみは優しく慰める。香澄だって、本気でSPACEのステージに立ちたいと願い、そのために努力しようとしていたんだ。来たるクライブで、それだけの實力を見せるために。

美羽の助力が得られないとなると、それ以外にあってはなくなる。事情は知らないだろうが、それをりみも理解したのだろう。

しかし……実際、どうしたものか。

「え？香澄、私じゃダメなの？」

「バカ言うなよ。クライブに向けて練習するって言ってんだぞ？花園さんは、こつち側の人間じゃないだろ」

「え、私……やっぱり、香澄たちの友達じゃ……」

「そう言う意味じゃねー……翔、バトンタッチ」

「俺に振るなよ」

たえの手を借りたいのは山々だが、言わば面接官だ。まさか直接指導してもらおうわけにもいかないだろう。

「でもさ、なーくん。もうこれって、おたえしか頼れる人がいないじゃ……」

「それはそうだけどさ……」

「おたえをドキドキさせるライブだって事は、もちろんわかっているよ？でも、今のままだと全然だから……ちゃんと教えてもらって、練習して、SPACEに立てるくらいにギターが弾けるようになった姿を、見せたいんだ」

確かに、たえは今の香澄の立場からすれば……敵、と言うことになるのかもしれない。が、それ以前にたえは、香澄にとってギターが上手なクラスメイトであり……友達なんだよな。

友達から教えを乞うのに、それを拒む理由付けなんていらぬ。いや、いるわけなかったんだ。

「……香澄の気持ち、よくわかったよ」

「おたえ、お願いだよ。私に、ギターを教えてくださいたくないかな……?」

「当たり前だよ。ギター弾いてる時の香澄って、すごく真剣で、楽しそうで……真つすぐに向き合ってる。そんな香澄の姿が、私は好きだから。いつでも協力する!」

「本当!」

男でも恥ずかしいようなセリフ言いやがって……。一応言っておくが、ここ病室だからな? そんな会話する場所でもないからな?

「よかったね、香澄ちゃん」

「ま、いいんじゃないの? 全然できねーよりは、そっちの方がよっぽどマシじゃね?」

「……香澄、よかったね」

「りみりん、有咲、さーやも! おたえもありがとう!」

指導役の話も解決し、後はクライブに向けて練習するだけ。

曲とかについてはよくわかっていないが、りみが前に作ったオリジナルの曲を演奏することになったらしい。まだ聞いていないが、いつか改めて聞いてみたいな。

「な〜んだ、私が指導役じゃなくても、全然よかったんだ。ちよつと残念かも」

「えっ!? そ、そうじゃないよ、みーちやくん!」

「アハハ、冗談だって。……いい友達に恵まれましたね、香澄さん」

「……っ、うん!!」

俺も香澄も、中学は地元の学校だったからな。知り合いは一人もない。

香澄は、文化祭がきっかけで。俺は……色々と事情を抱えて。導かれるように、花女へと入学した。

人間関係も、一からのスタートだった。俺は当然だが、香澄も不安だっただろう。あの性格だが、やはり最初は緊張が付きまとう。

そこで沙綾と出会い……有咲、りみ、たえとも出会えた。仲良くもなれた。俺たちは、本当に恵まれたものだと思う。

「……………」

そんな事を思いながら、俺たちはみんなの顔を順番に眺めていく。

だが……。

「沙綾……?」

ふと目にとまった沙綾の横顔は、何故か物悲しく、羨望の眼差しを向けていた……。

「美羽ちゃんって、好きな事ってあるの?」

「やっぱり音楽は好きですね〜!聞いたり、歌ったり!」

「へえ〜翔も言ってたけど、音楽好きなんだね。どんなジャンル聞くの?」

「色々ですよ!気に入った曲とかは、ギターで弾いてみたいなくっと思ったり」

「美羽、さっきのロビーでの演奏聞いてたよ。上手だった」

「本当ですか!?!たえさんも上手だって聞いているんですけど、聞かせてくれませんか!?!」

「私もおたえの演奏聞きたい!」

「うん、いいよ。それじゃあ……」

それからしばらくして、香澄たちは美羽との時間を過ごしていた。翔はトイレに行くからと、病室から出て行っている。

「~~~~♪ふふん、どうだった?」

「感想聞いてもねーのに、何をどやってんだよ」

「あつ、久しぶりに有咲さんのツッコミ聞けた!」

「それくらい別にいいだろーが！」

「あつ、怒った！アハハ!!」

「ぐう……!なあ香澄!こいつをどうにかする方法って何かねえのかよ!？」

「みーちゃんはいいい子だよ?」

「……お前に聞いた私がバカだった」

有咲はこの有様だ。美羽にはピンポイントで笑いにハマるようで、さつきから会話に参加しないのは、そのせいでもある。

「たえさん、上手ですよ!様になってます!」

「それほどでも。でも、美羽もすごかったよ」

「あつ、そう言えば……翔はドラムなのに、美羽はギターなんだ?」

「それは沙綾さんの言う通りなんですけど、私はギターの方が楽しくて。ドラムは、前にお兄ちゃんに叩かせてもらったことがあるんですけど……難しくくて」

ギターとは違い、ドラムはただ叩くだけではない。左右のスティックで別々のリズムを刻まなくてはいけない。美羽にとっては、その基本動作も難しく感じたため、ドラムは断念したようだ。

「あ……私、翔がドラムやってるのは知ってるけど、叩いてるところは見たことないかも」

「お兄ちゃんのドラム、上手なんだよ?聞けばビックリするかも」

「あー、それなら私聞いたことあるぞ。うちの蔵に中古のドラムがあつてさ。そいつを叩いて聞かせてくれたことがあつたな」

「私も聞いたよ。ドラム叩いてる時の翔君、めっちゃかつこよかつたな……」

「へえ〜?かつこいいい、ですか?もしかしてりみさん、お兄ちゃんに惚れてたり……とか?」

「え、あ、え、ええっ!?そ、そそ、そんなの違うよ、美羽ちゃん!!」

／＼
と言いながら、りみの顔は真っ赤に染まっていたが。美羽はその様子を見て、案外兄の周りには好意を抱いている人がいるのだと納得する。

が、それは心の中にしまい、美羽はがっかりしたように肩を落として話を続ける。

「そっか……。お兄ちゃんって、妹の私から見てもモテなさそうだからさ。頼りにはなるんだけど、恋愛してるって話も聞かないから。だから、そう言う人が現れてくれるといいな〜って思ってるんだけど」
「アハハ……。美羽、翔に対して辛辣だね」

「でも、本当の事ですからね〜……。ま、これからもお兄ちゃんの事、よろしく願いますね、皆さん！」

「もちろんだよ、みーちゃん！」

香澄が答えたのを聞いて、美羽はニンマリとほほ笑む。とても兄の悪態をついていたとは思え愛ほどの、安堵した笑顔だった。

「んで、その本人はまだ帰ってこないのかよ」

「た、確かに少し遅いよね……。？私、心配だな……。？」

「これはもしかして、病院で起こる事件……。!?」

「なわけねーだろ、花園さん」

たえが半分ふざけたことを言ったが、トイレにしては遅い。りみの言う通り、不安は募る一方だ。

「わ、私ちよつと近くにいないか見てくるよ！」

「だったら私も行くよ、りみりん。な〜くんにか何かあったのかもしれないし！」

そう言って、二人は病室を飛び出す。香澄は右に、りみは左に向かって歩き出した。

「はっ、翔なんか放っておいてもいいんじゃないかね？別に、心配とか思ってる〜し、突然意識失って、倒れてたりしたらどうしようとか思ってる〜し……。？」

「心配なんじゃないですか、有咲さんも」

「あーもう、美羽は黙ってる!!」

「あつ！私、初めて有咲さんに名前呼んでもらえた！すっごく嬉しい！アハハッ！」

「えっ……。そうだったか？って、別にどうでもいい！」

「また怒った！アハハ！」

「もう勝手に笑ってくれ……」

香澄やたえを相手にするよりもメンタルを消耗し、有咲はげんなりと来客用の椅子に座ってうなだれる。その様子を見ていた美羽は、ふと視界に入ったたえと沙綾が、何かソワソワとしている事に気づく。

「……これは、もしかして?」

「美羽、何かあったの?」

「事件の手掛かりが!」

「……もう疲れたから、花園さんの相手は山吹さんがしてやってくれ」「あ、アハハ……」

りみや香澄だけかと思っていたが、そうではなかったらしい。その事を、美羽はニヤニヤと笑みを浮かべながら、この場にはいない兄に向かって一言だけポツリと告げた。

「……お兄ちゃん、意外と周りが見えてないって事なんだね」

「……じゃあ、また来るよ」

俺の言葉に答えてくれる人は、この部屋にはいない。いや、正確に入るのだが、口を開こうとはしない。

例の彼女、美空と言ったか。俺は今、トイレだと偽って彼女の病室へと来ている。今日はこころはいなかったみたいで、俺一人だけだった。

虚ろな目を俺に向けながら、俺の話に答える事もない。受けを狙ってジョークの一つや二つ言ってみるが、反応がない。心が折れる。

それにしても……だ。人が一切の感情を表に出せなくなるほど、傷つくことはあるのだと痛感する。どれだけの過去をその身に背負えば、全てを殺して、抜け殻のように生きるしかできなくなってしまうのだろう。

そんな彼女に光を灯す事が、果たして俺にはできるのだろうか。い

や、できないかもしれない。俺には。

俺にある力なんて、ちっぽけでしかないんだから……。

「つて、弱気だな……」

だが……きつと、あの子たちなら。そうやって、別の光に手を伸ばしたくなってしまう。

「……いや、それはまだ先だな。今のあいづらに、そんな重荷を背負わせるわけにはいかないな」

だが、その可能性に至っている時点で、俺は負けている。その誘惑に。

自分の不甲斐なさを嘆いて、力がなからと弱音を吐いて。こんな独りよがりのために、力を借りなければいけないことを、俺は望んでいないように望んでいる。

「……そろそろ、戻らないとな」

ゆっくりと病室のドアを閉めて、俺は息を吐く。考えをまとめたところだが、いつまでもトイレを言い訳にはできない。どれだけ長いんだと、有咲や沙綾あたりに笑われてしまう。

「……あつーいたー!」

……え?この声は、もしかして。

「翔君!」

「り、りみ……!?な、何でここにいるんだ?」

「戻ってくるのが遅いから、めっちゃ心配したんよ!翔君に何かあったら、うち耐えられへんから!」

「お、落ち着け。ここ病院だし、関西弁になりかけてるぞ?」

「え、えっ!?!／／」

待て待て、おい。探しに来るのは予想外だったぞ!?しかも見られたくない場面を、見られたくない人に見られるなんて……!

「で、でも翔君。どうしてこんなところに?こっちつて、病室と逆方向だよね……?」

「そ、それはな……」

いや、俺の方こそ落ち着け。ここは冷静に、この場を切り抜ける事だけを考えろ。どうにかして、辻褄を合わせるためには……。

「ほ、ほら。みんな美羽と会うの初めてだっただろ？だから、女の子だけで話したい事もあるだろうと思ってる。しばらくこの辺にいいようかなって思ってたんだ」

よし、どうだ！これで何とかしのげるか!?

「そ、そうだったんだ……よかった……。私、翔君がいなくて心配だったから……」

「悪かったな。もうちょっとマシな事言って出て行けばよかったな」
「ううん。翔君、私たちに気を遣ってくれてたんだね。ありがとう」

何とか乗り切れたみたいだな……。沙綾とかだと、言及してきそうで怖かったんだけど。

「余計なお節介だったか？わざわざ探しに来てくれたんだろ？」

「そんな事ないよ。翔君はやっぱり優しいな……」

「な、何かちよつと恥ずかしいな……。けど、りみも探しに来てくれてありがとな」

「お、お礼なんていいよ。ずっとお礼を言いたかったのは、私だから」
「りみが？」

「うん。私がバンドの事で悩んでいた時、背中を押してくれたのは、翔君だったから」

急に改まった口調になったりみを見て、俺は戸惑いを隠せない。だが、りみは構うことなく言葉をつづけた。

「周りの事を気にして、何もできないって思い込んでた。迷惑だとか、香澄ちゃんに恥をかかせてしまうとか……。そんな風にしか考えられなくて、自信が持てなかったから」

「……………」

「でも、そんな私にバンドに入る勇気をくれたのは、翔君だから。もつと自分に自信をもってって。あの時私に言ってくれた言葉のおかげで、少しずつだけど……変わった気がするんだ。あのグリグリのライブだって……」

香澄たちのおかげで成功した、グリグリのライブ。でもそれは、りみも協力もなかったら成し得なかったことだ。

最初に出会った時は、とにかくオドオドしていた女の子だった。同

じクラスにいたはずなのに、言われるまで気づかないほど記憶に残らない、後ろ向きな性格の女の子。

でも、話をするうちに、本当は楽しくて面白くて……気の合う子なんだって気づくこともできた。内に秘めた、バンドへの思いを知る事だって。その陰に潜んでいた、葛藤を知ること。

自分に自信が持てなくて、一度はバンドを辞めると言い出して。それでも、舞台度胸を見せて、自分のベースをステージの上で披露した。舞台袖から見ていたが、それがとにかく嬉しかった。

りみは、変わることができた。それを実感した。

「だから、ありがとう翔君！私を香澄ちゃんのところへ、導いてくれて」

「大げさだな……」

「あれからタイミングが見つからなかったけど……どうしても、伝えたい言葉だったから」

伝えたい言葉……か。

だったら、俺にだってある。今、その言葉が生まれた。

「……りみ」

「何、かな？」

純白のベッドに横たわる、銀髪の少女。いつ見ても、何をしても、変わることはない少女。

でも……目の前の少女は。

「俺の方こそ、ありがとな」

「え……え、えっ？ど、どうして……!?／＼」

「な、何でって……お、俺も言いたかったから……だよ」

「翔君……／＼」

「ほ、ほら！みんな待ってるんだろ？早く戻らないと！」

「う、うん！」

何故か頬を赤く染め、瞳を輝かせて俺を見つけるりみ。その姿がいつもよりも女の子らしく見えて、焦りそうになる。照れ隠しで踵を返し、俺は顔を見られないように病室へと帰る。

「……………」

そんな俺の中には、焦りと羞恥以外にも、別の感情が芽生えていた。言うならば、それは……………希望。

俺の言葉で、行動で、変わった人がいる。俺にそう証明してくれた人が、確かにいる。

なら、彼女だって…………あの病室の少女だって、変えられるのかもしれない。

もしかしたら、俺も…………誰かの心に寄り添い、動かして見せるくらいなら、できるのかもしれない。

phrase 32 微かな胎動

「へえ……」私の心はチヨココロネ』か。なかなかいい曲じゃん、りみ」
「あ、ありがとう翔君。それで、この曲をライブでやろうと思ってる
んだけど……」

「いいと思うよ。俺は賛成だな」

「よかった……」

美羽のお見舞いに行った次の日。俺は休み時間に、ライブの事で
りみから相談を受けていた。演奏する曲の事で、少し不安があったみ
たいだった。

教室の隅で、俺はりみにイヤホンを借りて、その曲を聞く。初めて
と言っていたが、なかなか悪くない曲だ。歌詞も可愛いし、メロ
ディーも明るく弾んでいる。

聞き終わり、イヤホンを返した時のりみは、恥ずかしそうにしてい
たが。

「香澄たちもいって言ってくれたんだろ？」

「そうだけど……翔君にも聞いて欲しかったから」

「俺にも？」

「お姉ちゃんに手伝っては貰ったけど……やっぱり、私が初めて作っ
た曲だったから。翔君の意見も、聞いておきたくて」

俺は曲を作ったことがないからわからないが、相当難しい話なんだ
と思う。詞を作り、そこに合わせるメロディーを考え、最後にそれら
二つを上手く調和させる。完成するまでの工程は、かなり大掛かり
だ。

まず詞を作る時点で心が折れそうだし、作曲だって何をどうすれば
いいのかわからない。それを形にして、歌にしたりみは本当に凄いと
思う。

初めてで自信がなかったのはわかるけど、これは胸を張って誇って
もいいことだ。俺には絶対に真似できないことだからな。

「それに、翔君も演奏するから、やっぱり曲の事は知ってもらいた
かったから」

「そうだな。俺も演奏……ん？」

「えっ？」

「……ちよつと待ってくれよ、りみ？今、俺の聞き間違いじゃなかったら、俺も香澄たちと一緒にクライブするって感じだったと思うんだけど」

「え、そ、そうだけど……」

「そうだけど!?おい、ちよつと待て。いつ、どこでそんな話になった!?俺は全然知らないぞ!」

「あ、あれ!?翔君、香澄ちゃんから聞いてなかったの!」

「いや、聞くも何も……今りみから初めて聞いたんだけど」

「か、香澄ちゃん……」

「そうかよ、あいつの差し金かよ。突拍子もなくこんな事に巻き込んでくるのは、あいつしかいないと思ってたけどな!」

「じ、じゃあ私から説明するね。実は、翔君にはクライブと一緒にドラムとしてライブしてほしいんだ。ミニライブだし、正式なバンドじゃないから、今回だけって形で参加してほしい……」

「……その発案者は？」

「香澄ちゃんです……」

「全く……。放課後になったら、香澄にきつく言っておかないといけないな。頼みごとがあるなら、早めに言っておきたい。」

「はあ……。何か悪いな、りみ」

「そんなの大丈夫だよ。こつちこそごめんね？」

「りみが謝る事なんてないって。で、クライブの件だけど」

「引き受けてくれる？」

「もちろんだ。ドラムできる人を探すには、時間もかかるからな。俺が臨時メンバーって事で、香澄たちに協力するよ」

「ありがとう、翔君!」

俺が承諾したのを見て、りみも満面の笑みを俺に向ける。その笑顔が何だか眩しくて、俺は気恥ずかしくなりながら、休み時間の終わりのチャイムが鳴るのを聞いていた。

「うう、痛いよなーくん……」

「当たり前だ！何でりみが俺にクライブの事を頼まないといけないんだよー！」

「ギターの事で頭がいっぱいになっちゃって……」

で、放課後。俺たちは有咲の蔵に集合し、早速クライブに向けての練習を始めていく。が、その前に今回の件について香澄を叱っておく。

「つたく……次からは気をつけろよ？それと、香澄の代わりに頼んでくれたりみにお礼言っておけ」

「はーい……。ありがとね、りみりん！」

「う、ううん。大丈夫だよ」

さて、香澄も反省したことだし、ここからが本番だな。私の心はチヨココロネ。その練習を始めていく。

楽譜はりみが用意してくれたみたいで、早速中に目を通してみる。……よし、特に難しい点はなさそうだ。これなら本番までには叩けそうだな。

他の譜面はまだ見ていないが、この分だとギターの譜面も比較的簡単なコードで構成されているだろう。初心者の香澄でも、何とか本番までには間に合わせられるか。

「じゃあまずは、各自で練習してみるか。音合わせは、一通り済ませてからって事で」

「そーだな。自分のパートは確認しておかないとな」

と言う事で、早速個人練習を始める事に。時間もそうそうないし、とりあえず全部通して弾いておきたいからな。しばらく時間を取り、俺はリズムを頭の中に叩き込む。

スティックを握り、邪魔にならない程度に軽く叩く。家で叩くような感覚とは違う。いつもは美羽か、俺一人で練習していたが……こん

なに大勢での練習は初めてだ。

誰かと練習するだけなのに、こんなにも楽しく感じるなんてな……。

「……………」

時間にして、1時間くらいが経っただろうか。ある程度練習を終え、俺は何となく手ごたえを感じていた。

有咲もまだぎこちなさはあったものの、何とか形になっていた。まだまだ練習は必要だが、本番までにはどうにかなる。ピアノをやっていたと聞いたことがあるが、その経験が活かしているのか。

さて、問題は……。

「りみりん、この楽譜どう読むの？コードが書いてあるけど、弾き方わかんなくて」

「え、えつと……香澄ちゃんはTAB譜の方がよかったかな？」

「TAB譜？」

この二人。いや、りみは問題ないか。本当に問題なのは、香澄。

音を鳴らす以前に、まず楽譜の読み方がわからない。コードも覚えただてのものしかないし、練習云々よりも、どう弾けばいいのかわかるところからのスタートだった。

そのため、楽譜を覚えるよりも弾き方を教わるところに時間がかかってしまい、まだ最後まで一通り通してもいない状況に。さすがに見かねて、俺は少し助け舟を出してやろうと身を乗り出す。

「押さえる弦とフレットが書いてある譜面の事だ。で、このコードだと……4弦の5フレットを押さえるって事だな」

「翔君、詳しいんだね」

「美羽の影響だな。これくらいの知識は、知らない間に覚えてたんだ」
「さすがなーくん！で、4弦の5フレット……うん、押さえたよ」

りみも大変だな……。自分のベースの練習もあるのに、香澄の事で手を焼いてしまっているんだから。有咲もその体たらくを見かねたのか、少し口をはさむ。

「おい、翔。いつになったら、香澄はまともに練習できるわけ?」「俺に聞くなよ。こいつだって必死なんだし、長い目で見てやろうぜ?」

「いやいや、クライブまでもうあまり時間ねーんだぞ?そんな悠長な事言ってる場合じゃねーっつーの」

「それはわかってるよ。音合わせもしないといけないし、何をするにも香澄次第だ。だったら俺たちは、少しでもミスなく合わせられるように自分のパートをどうにかするしかないんじゃないか?」

「それは、まあ……」

とは言え、譜面を読むのに二人掛かり。下手をすれば、今日の香澄の練習はそれだけで終わってしまう。

「次は1弦の7フレットかな?あれ、違うかも?」

「ううん、合ってるよ。香澄ちゃん、押さえてみて?」

「押さえて……と。うう……なーくん、指疲れてきた〜」

「お前なあ……」

ギターを弾こうとしている奴が、コード押さえるだけで音を上げていてどうするんだよ。そこから音出さないといけないし、香澄はボーカル担当でもあるから、さらに歌も入ってくるんだぞ?

これ……本当に大丈夫なのかどうか、不安になってきた。

「はあ……しゃーねーか。もう1回、キーボード練習するか」

「ごめんね、有咲。知ってるコードもそんなにないから、楽譜見ただけじゃどう弾けばいいのかわかんなくて……」

「ったく……仕方ない。こうなったら、最終兵器だ」

「えっ、ちよつと待て翔。あいつ呼ぶのかよ」

「最終兵器と言っただろうが。向こうもその気みたいだし、今のままだと何日かかるかわからない」

せつかく教えてくれると言ってくれたんだ。ここで力を借りなかつたら、俺たちのクライブはこのまま終わってしまう可能性だってある。

だから、まあ……気は乗らないが、あいつを呼ぶことにしようか……。

「呼ばれたよ〜」

「おう、来てくれたな。たえ」

「来やがった……」

と言うわけで、最終兵器の登場。連絡してからすぐに、たえは来てくれた。

たえを納得させる勝負。それがクライブだ。当然敵だし、呼ぶと言うのも筋違い。俺も最初はそう思っていたから、代替案として美羽に助っ人を頼むつもりでいた。

けど、美羽が病気で倒れ、入院してしまったこと。頼れる相手がたえしかいなくなってしまうこと。そして、香澄の強い意志によって、たえが二つ返事で協力してくれたこと。

それらが重なり、今たえはここにいる。香澄の力となるために。

「もはや花園さんの立ち位置がよくわかんねえけどな……」

「そう言うなよ。たえ、よろしく頼む」

「お任せ。それで、私は何を教えたらいいの？」

せっかく来てくれたんだ。ボーっと突っ立っていても時間が過ぎていくだけ。早速、りみがギターの楽譜を片手にわからない箇所を尋ねる。

「ギター、わからなくてごめんね。教えてほしいのは、この譜面の曲なんだ」

「えつと……私の心はチョココロネ、か。可愛いかも」

「それ、りみりんが作った曲なんだよ！すごいよね!？」

「うん、すごいよ。今の『私の心はぜんざい』って気分かな」

いや、知らないから。話を急に飛ばすな。

「有咲、アンプ借りるね」

「えつ、う、うん……」

楽譜をりみから受け取り、曲を確認。しばらく無言で目を通した後、たえは有咲からアンプを借りてギターを準備する。

「……よし」

と、たえがギターを構えた瞬間、彼女の中で何かスイッチのようなものが入った。さつきまでふざけていたのに、それが嘘のように真剣な表情に変わる。

楽譜を再度チェックし、コードを軽く確認。呼吸を整えた後、たえは弦に手をかける。

「「……っー」」

それは、さすがというしかなかった。俺は一度聞いたことがあったから、たえの技術は知っている。

だが、香澄たちは……たえが真剣にギターを弾くところは初めて目にする。すぐに曲を弾いて見せた適応力と、演奏力の高さに舌を巻く。

美羽の時と同様に、ギターの演奏に集中していた。それほどの演奏だった。さすが、経験者は違うって事か。

「すげーじゃん……。いっつもあんな感じなのに」

「おたえちゃん、すごい……！」

「お、おたえ、もう一回！動画に撮らせて！」

「もちろん！あ、弾く前に何かポーズとか取った方がいい？」

「とらなくていいっつーの！」

たえが来たことで、滞っていた香澄のギター練習も進みそうだ。香澄もふざけているようで、やる気はしっかり持っているからな。

それに……。

「えっ、動画撮ったらダメなの？」

「ポーズを取るなって言ったんだよ！香澄には言ってるー！」

「それじゃあ、有咲も一緒にポーズ取ろう。ほら、こっち」

「話聞いてたか!？」

「りみも、翔も。全員でポーズ！」

「周りを巻き込むな！話をややこしくするな！」

「あ、アハハ……。おたえちゃんって、かなり自由なんだね……」

「ああ……。覚えておけよ、りみ……」
「う、うん……?」

ま、こんな感じでグダグダにはなっているけど……。

おたえが来てから、空気が賑やかになった気がするんだよな。

「ねえ、翔」

「何だよ、たえ」

「ウサギって可愛いよね」

「どっからウサギ来た」

翌日。今は昼休みだ。俺たちは先に中庭に向かった香澄たちのもとに向かっている最中だった。

にしても、いきなりだな。さっきまで俺たちは、クライブに向けての話をしていたはずだったんだが。切り替えが急すぎる。

「……まあな。フワフワしてるし、綿あめみたいだ」

「うん。食べたいよね」

「そうだな……って、はい!」

今こいつ、何て言った!?!おたえワールドにはもう慣れっこだ。だが……俺の耳が腐っていなかったら、ウサギを食べたいとか言わなかったか!?

それはさすがに俺も引くぞ。お前、家でウサギ飼ってるんじゃないのかよ。まさか、食用で……!?!

「ちよ、早まるな!それはアブノーマルすぎる!」

「え?だっておいしいじゃん。いくらでも食べられるよ」

こいつ、イカれているのか。言動こそぶつ飛んでいるが、良識はあると思っていたのに……。

たえ、もしかしたら俺は、お前を見る目が変わるかもしれない。

「……お前は、ウサギに対して愛着がないのか」

「え？もちろんあるよ？」

「違う！たえがウサギに対して抱いてるものは、愛着なんかじゃない！胸に手を当てて考えてみろ！」

「……う？はい」

「つて、俺の胸じゃねえよ」

自分の胸だ、自分の。たえの手を取って胸に押し付けてやるが、どうもピンと来ていない。

本当に、悪い意味でぶっ飛んでいるのか……？いや、そうじゃないと信じて、俺は熱く言葉を投げかける。

「ウサギは愛でるものじゃないのか？そうだろ!?!」

「うん、そうだよ。ウサギ最高」

「ああ、そうだ。だったら何でたえは、ウサギを……動物として見られない!?!決して、自分の腹を満たすために食っていいものじゃないぞ!?!」

「ひっ……!?!し、翔!?!何でそんな怖い事言うの……!?!」

……ん？

「は？何でつて……お前言っただろうが。食べたいって。いくらでも食べられるって」

「誰が言ったの、そんな事」

いや、お前だよ。

「てか、何か話が噛み合っていない気がするな……。お前、俺がウサギの事をフワフワしてて綿あめみたいだって言ったら、食べたいって言うてただろ」

「うん。だから『綿あめ』食べたいって」

「……は？」

……ちよ、ちよつと深呼吸させてくれ。

ス〜ハ〜……ス〜ハ〜……。

よし、落ち着こう。で……こいつ今、綿あめとか言ってた気がするんだけど。

あれ、ウサギは？何でいきなり綿あめに話が飛んで……？

『……まあな。フワフワしてるし、綿あめみたいだ』

こいつ……『綿あめ』の部分だけ反応して、話続けやがったな!? そう言う事か!?

あの流れなら、絶対にウサギを好んで食べる狂人の話だと解釈してしまうだろ。こういう事があるから、たえと話すのは体力を使う。香澄以上にな。

「人であることを疑うところだったぞ」

「え？翔は綿あめ嫌いなのか？」

「そう言う話じゃねえんだよ」

「後でお弁当のおかず、何か交換しようよ」

「綿あめの話はどこに行った!？」

……本当疲れる。前後のつながりをもう少し意識して話をしてくれ……。

「おーい、なーくん！こつちこつち！」

と、気が付けば中庭に到着。ベンチに座る香澄が、俺を大声で呼んできた。中庭にいるの、俺たちだけじゃないんだぞ……。変に注目されるから恥ずかしいんだけど。

それに、ブンブンと手を振っている姿はまるで子供みたいだ。成長していないと言え、していないのかもしれないが。

少なくとも、変わってはいるんだよな。

「遅かったね、翔。それに花園さんも。日直の仕事」

「翔が頑張ってくれたから」

「半分以上、俺がやってた気がするんだけどな」

「SPACEでも頑張ってるから、これくらい問題ない」

「お前はどこ目線にいるんだよ」

日直がどうか言っているが、俺は日直じゃないからな? 『たえ』が日直だからな?

俺は手伝っただけなんだが、最終的にはほとんど仕事押し付けられたし。次にバイト一緒になった時には、少しあいつをこき使ってやろう。一応、俺の方が先輩だからな。

「おい、翔。何か疲れてね? 日直の仕事だろ?」

「……俺がたえという事が、全てを物語ってるだろ」

「アハハ……翔君、お疲れ様」

こうやって心配してくれるだけでも、俺は嬉しい。ありがとな、りみ。

「あつ、そうだ。二人にもお願いしたいことがあるんだけど……クライブの時にお姉ちゃんが見に行きたいって言ってるんだ。来てもらいな?」

「ゆりさんが? へえ、そいつは下手なライブはできないな?」

「うっ……。なーくん、何でこつち見たの?……?」

「気のせいじゃないか? ま、俺は大丈夫。むしろ嬉しいよ。観てくれる人が少しでもいるんだからさ」

せっかくライブするんだ。観客がいてくれるなら、俺たちだってやりがいはある。けど、ゆりさんが来るのは、少し緊張するよな……。

「グリグリのゆりさんが……!」

「お、おたえちゃんは緊張しなくても……」

「あ、うちのばあちゃんも呼んでいいか? 何か見たいって」

「もつちろんだよ! おばあちゃんにも見てもらおう! 私もあつちゃん誘ってみようかな?」

どんどん人が増えていくな。俺も……あ、美羽はさすがに来られないか。残念。

「あ、さーやも来て!」

「えっ、私? うくん……行きたい気持ちはあるけど、時間どうだろ——」

「来て!!」

「ええっ!?は、花園さんまで!？」

あまりの押し強さに、沙綾もたじろいでいる。そこまで言われたら、沙綾も引き下がるしかなかった。

「わ、わかったわかった。少ししか顔出せないかもしれないけど、それでいい?」

「うん!ありがとう、さーや!」

「賑やかになるね、香澄ちゃん」

「いっぱい見に来てくれるから、私たちも練習頑張らないと!」

ライブらしくなってきた。これは香澄の心配だけじゃなくて、自分の心配もしないといけないな。

何たって、ドラムはバンドのリズムの中心。俺がしっかりしないと、全体のリズムも狂ってしまう。

あいつらがしっかりと演奏に集中できるように、俺がリードしてやらないと。そのために、ミスなく叩けるようにリズムを頭に叩き込んで……。

「……あ」

「どうしたの、なーくん?」

「あ、いや……何でもない」

俺は今まで、香澄がバンドを結成できるように、そのためのサポートだけを考えてきた。脇役に徹して、実際にバンドの一員として何かを考えてきたことはなかった。

そうだ。俺は、バンドを外からしか見ていなかったんだ。SPAC Eで見えてきた多くのバンドも、香澄たちのバンドも、俺が直接関係したわけじゃない。外から見て、触れたような気になっていただけだった。

でも、バンドのメンバーになって、中からバンドを見る事で、それまで見えていた世界とは違った視点から見つめ直すことができる。

そして実感する。バンドって、奥深いものなんだって。

こうして色々考えて、試行錯誤を重ねて、答えを見つけて……。そ

の結果を、他のパートとの音の重なりによって一つに紡いでいく。違った音が交わり、奏でられる旋律。その一部になる。たった1回のライブだけど、俺は確かに、香澄たちと音を合わせて形にする。何て楽しい事なんだ。俺も、バンドをする喜びを知ってしまった。香澄のように、湧き上がる衝動が抑えきれなくなりそうだ。

けど、それは叶わない。

俺は男だ。こいつらとバンドをすることもできない。ガールズバンド規定法があるし、残りのメンバーが集まったら、それっきりだ。

けど……もし、俺とバンドをやりたいやつがいるのなら。

バンドが組める日が来るのなら。

そう思わせてくれた香澄と、一緒のステージに立ちたいと、俺はそう思ってる。

わかってる。ガールズバンド規定法があるし、決して同じステージには立てないことも。

それでも……そんな夢を見たい。見せてくれてもいいだろう。

その夢が現実になって、一緒にライブできる日が来ることを……俺は静かに願うことにしよう。

phrase 33 重なる音色

「あゝっ、また間違えた……」

「でも、押さえ方はよくなってたよ。ギター弾いてる人の手になってた」

迫るクライブに向け、俺たちは今日も有咲の蔵で練習に励んでいる。ここ数日の練習で、香澄だけじゃなく、俺たちも演奏技術が上達したように思う。

曲だって自分のパートは通して演奏できるようになったし、後は細かなミスをなくしていくだけ。そのためには、やはり練習が必要不可欠なんだけどな。

だが……問題は別にあつた。

「ホント!? えへへ、やった〜!」

「やった〜! じゃね〜つつーの。そろそろみんなで音合わせないと、本番まで時間ないんだぞ? マズいんじゃない?」

「今の私の真似!? 有咲、もう一回!」

「話を逸らすな! ちよ、こっちくん!!」

そう、俺たちはまだ、一度も音を合わせて練習してはいない。香澄の指導が原因とは言え、かなり時間を取られてしまった。個人ではできなくても、集団ではどうなるかはわからない。

微妙な音のずれが生じたり、細かなミスが他のパートを狂わせる事もある。自分の演奏に集中しつつ、他のパートの音も聞いて、音色を重ねていかなくはいけない。

それは、個人練習では絶対に見につかないスキルだ。そして難しい。だからこそ、今からでも音合わせに時間を割く必要がある。

「まだ自分のパートしか練習してないもんね」

「そうだぞ、香澄。できる事なら、俺も合わせておきたい。もう一通りは弾けるんだろ?」

「うん! もう弾き方は覚えたよ! でも……」

「どうした?」

「演奏だけでもいっぱいいいのに、歌までちゃんと歌えるかな」

「……」

ああ、なるほど。よくありがちな心配だな。片方の事に集中してしまおうと、どうしても片方が疎かになってしまうからな。

まして香澄はまだ初心者の域だ。ギターで手一杯なのに、歌に気を回している余裕なんてない。俺たちよりも一段階上の事をしようとしているんだから。

「大丈夫だ。香澄ならやれる」

「簡単にやれるって言うけど、根拠あるのかよ」

「あるぞ、有咲。今からやるのは、あくまで練習。ミスはいくらでもしていいんだ。本番でミスしないためにな。そのための音合わせだろ？練習だろ？違うか？」

今こうして練習しているのは、一体何のためなのか。それに気づかせてやるだけでも、緊張感は一気に和らぐはずだ。

これは練習でしかない。ミスのない練習なら、別に練習する必要はないんだ。

「おお……」

「な、何だよ香澄」

「なーくん、何だかりーダーっぽくてかつこいい……！私もあんな風になれるかなく？」

憧れるのは勝手なんだけど……香澄にできるイメージが全く湧いてこないんだが。ある意味、周りを引っ張ってはいるんだけどな……。

「無理だろ、香澄には。向いてねえって」

「えー、そんな事ないよー！私だって、こう……リーダーっぽいことできるよー！」

「基本振り回してばっかのお前が、そんな気の利いたことできんのかって言うてんの」

「で、できる！た、例えば……有咲のためにお茶用意してあげるとか……」

「それってリーダー要素全然なくね?!」

いや、一応気遣いって意味では間違っていない……のか？

「じゃあ私は、有咲のためにお菓子用意してあげようかな」

「花園さんはさらつと話に入ってくんな！」

「アハハ……。それで、練習はどうするの？」

「あつ、そうだった！音合わせだったよね」

「ほら見る。自分の事で手一杯なのに、人の事までフォローできるなんて思えねえんだよ」

「えー!?そんなあ〜……」

こればかりは有咲の言う通りだし、俺はあえて何も言わずにスルー。

「香澄の手、二つしかないけど。いっぱいって、三つも四つもないよ？」

「そうじゃねえんだよ！すぐにボケをかましてくんじゃねえ！」

「香澄、不安だったら私も演奏に入ってフォローするからね」

「えっ、おたえ本当!？」

「おい、人の話を聞け！」

「フォローできるかどうかの話？」

話をぶり返すな。その話はさっきの流れで終わってるんだよ。そう言っただけだったけど、一々たえの相手をしていると疲れる。

「くっ……。何だよ、花園さん。こいつの相手していると、香澄以上に疲れる……」

「私の事呼んだ？」

「何でもねえよ！花園さんはもう引っ込んでろ！」

な？こんな風に面倒な事になるんだよ。

「え、えつと……。そろそろ、練習しない……？」

「わ、わかってるから、牛込さん。そんじゃ、えーと……」

「待て、有咲。ここはドラムパートの俺に任せろ。合図出すのは、ドラムの方がいいだろ」

リズムの中心となるのはドラム。バンド内でカウントを取るのは、基本的にはドラムの仕事だ。

時間もないので、俺はスティックを構えてドラム前にスタンバイ。他のみんなも、ふざけるのを止めて演奏の準備を始める。目配せし、

準備が整ったのを確認して、俺はカウントを取った。

ギター、ベース、キーボード、ドラム。出だしはどの音も問題ない。輪の中から外れている音はなく、そのままのペースで演奏は続いた。自分のパートだけじゃなく、他のパートも聞いて。集中力を高め、音色は響く。特に香澄は、そこに歌も入ってくるんだからな。

そして何とか、一発目の演奏は終わることができた。

不安そうにしていた歌も、少し音は外していたが、最後まで歌いきることができた。ギターに関しては、完全にたえにリードしてもらっていたが。

他のパートも、ミスはややあったが目立つほどのものでもなく、何とかやり切ることができた。俺はまあ……自分で言うのも何だけど、できは良かったと思う。

「……………ふう」

たった1回の演奏だが、みんなの表情には疲れが見えていた。無理もない。これが初の音合わせ。俺も疲れはあるし、汗が止まらない。「すごい、すごいすごい！有咲すごいよ！バンド！バンド！バンドになったた！！」

「うわっ!?ちよ、終わった途端に抱き着くな！演奏で体力使ってるのに……ってもう、暑苦しいんだよ!!」

あいつは放っておいて……全体的には、まだ課題があるって感じだな。パート毎のミスは目立たないが、やはりバンド全体としてはミスが目立つ。

そこはまた練習でどうにかするしかないが、もう少し休憩してからだな。時間がないからと言って焦っても、上達にはつながらない。「でも、香澄ちゃんの気持ちわかるな。みんなで一緒に演奏するのって、楽しいよね」

「俺もそう思うな。今までは美羽としかドラム叩いたことなかったから、新鮮な気持ちになれるよ」

「やっぱり、翔君もそう思うよね?」

「ああ。難しいけど、それがいいって言うか……。楽しさの方が勝つんだよな」

ベトベトとくつつきあっている香澄と有咲。和やかになっている俺とりみ。

そんな中、何故かたえだけは、呆然とした様子でギターに手をかけたまま動かない。気が抜けているような、何か考え事でもしているような。

もしかしたら、さっきの演奏がたえの中で納得いかないものだったか。

「たえ、どうかしたか？」

「……え？」

「本当に上の空だな。ずっとボーっとしてたから、何かあるんじゃないかって思ってたな」

「ううん。大したことじゃないよ。ただ、誰かと一緒に演奏するのって、こんな感じなんだなくって思ってた。いつも一人で練習してるから、私、こんな気持ち知らなかったな」

「……そうか」

たえもまた、楽しいと思っていただけだった。俺たちと同じように。ただ、それが少しオーバーすぎただけで。

でも……たえにとっては、それくらい大げさにとらえても仕方のない事なんだよな。

「自分の音と誰かの音が重なるのって、何だか不思議」

「えへへ、そうでしょ？楽しいでしょ？」

「っーか、いつまでお前はくつついてんだ！早く離れろ！」

「えっつ、もうちよつとだけっ！」

「くっ……もうちよつとだからな!？」

本当に有咲は、香澄に対してチョロきMAXだな。顔真っ赤だぞ。と、そんな有咲にくつついていた張本人が、たえにぶっ飛んだ提案を持ち掛ける。

「あっ、そうだおたえ！」

「ん？どうかしたの？」

「本番、おたえも一緒に演奏しない？」

「「……………え？」」

「……………あ、あれ？私、何か変な事言ったかな？」

当たり前だ。これは練習だから仕方なく手伝ってもらってるし、俺もそのつもりで黙認しているところはある。

けど、本番の舞台は……………クライブは、たえを納得させるライブだ。香澄の言葉を借りるなら、たえをドキドキさせるためのライブ。

なのに、本番でたえも一緒に演奏する？そうだったら、勝負はどこに行くんだよ。もはや何のためのクライブなのかわからなくなってしまう。

「またわけのわかんねえ事言ってる……………。花園さんに聞かせるライブだろうが」

「それはそうだけど……………。でも、絶対一緒にライブした方が、ドキドキすると思う！おたえに聞かせるんじゃないやなくて、おたえも一緒に聞かせてほしい！」

「はあ……………。相変わらず、突拍子のない事を言うよな、香澄は」

そんなのには、もう慣れっこだけだな。俺は。

「みんなと一緒に、ライブ……………!?!」

「うん！きつと楽しいよ！おたえも一緒に、ライブ！ライブっ!!」

「子供かよー！」

俺もそう言ってるやられたかったが、有咲が代弁してくれたから、まあ……………よしとするか。

「私は……………。うん。私も、やってみようかな。ライブ」

「やったろ！おたえとライブ〜！」

「はあ!?ちよ、マジでどうなるんだよ、これ……………」

「え、えと……………私にもわからない……………かな」

「俺もわからないから、安心しろ」

「本当、香澄といるとロクでもない事ばっかだな……………」

「それはわかる」

だが……………たえと一緒にライブをしてくれるなら、香澄のカバーに関

しては問題ないだろう。さっきの音合わせもたえは安定していたし、リズムもズレはなかった。

そう言う意味では、たえの参加は大いに助かるんだけど……。

「……………」

それだけじゃないよな、たえ。

お前が、このクライブに参加しようと思った理由って。

「……………つたく、あいつらの世話なんて、疲れる事しかねーな」

「そう言うな……………って言ってやりたいけど、同感。俺、有咲よりも前から二人の相手してるんだぞ」

「考えただけでも恐ろしいな……。そこだけは尊敬する」

「だけってどういうことだ、おい」

その後、俺たちは何回か音合わせをして、今日の練習は終わりにした。終わった頃にはみんなクタクタで、日が暮れるほど遅い時間になっっていた。

そのままの流れで帰るつもりだったが、また有咲の家でご飯を食べさせてくれることに。返って飯を作る元気もなかったし、せっかくだからご厚意に甘える事にする。

香澄たちはまだ蔵の中にいる。きっと、談笑でもしながらのんびりとしているんだろう。

じゃあ俺は何をしているか？答えは簡単。俺は手伝いのために、有咲に駆り出されていた。今は食器を用意して、出された料理を盛り付けているところだった。

「つか、翔って何でもやらせたらできるもんなんだな。盛るだけにしても、綺麗にできてるじゃん」

「家事はやってるからな。美羽は病気だし、家に誰もいない事が普通だったし」

「ふうん。って事は、料理とかも作れたりすんの？」

「ある程度は作れるぞ。何なら、また俺の家に遊びに来たら、作ってやってもいいぜ？」

中学の時から、いつも料理はしてきたからな。色んな料理に挑戦して、作れるようにもなってたんだよな。

「いらねえ。てか、翔の家知らねえんだけど」

「そうか……。じゃ、いつか俺の家に有咲を連れていくよ。今はクラブで忙しいけど、ちよつと落ち着いたらな」

「……は、はあっ?!いい、いや、そんな事別に、頼んでねえんだけど!」

「何でそこで照れるんだよ」

「お前が変な事言いだすからだろ!?!／／」

どこが変なんだか。俺はただ、いつか有咲を家に招待するって言うただけなんだけどな。友達を家に誘って何がおかしいんだか。

「……はあ。にしても、本当変わったよな。私も」

「有咲？」

「前までは、誰かと言えで飯食うとか考えられなかったし。バンドだって、しんどいし疲れるし。今日も大変だったしな。でも……楽しんでよ」

「有咲……」

まさか、有咲の口からそんな言葉が聞けるなんて……。

「正直、あいつらといると気が滅入るよ。香澄はウゼエし、花園さんはよくわかんねえし。牛込さんは……まあいいけど。でも、一緒にいる時間も、悪くねえかなって」

「……そうか」

「私、最近思うんだよな。前は一人でいる事も普通だったし、何ともだったのに。でも今は、一人でいるよりもみんなという方が楽しくてさ。あんなに親しかった一人の時間が、今は寂しく感じるんだ」

それは、間違いなく香澄のおかげだ。一人だった世界から連れ出してくれたのは、香澄なんだから。

その気持ちに正直になる事ができたのは、あの時の出来事があるからだろう。俺や香澄の言葉は、しつかりと有咲に届いている。有咲を

変えている。

そうじゃなかったら、有咲の口からこんな言葉が出る事も……ないんだよな。

「だからな。あいつらにはその……感謝してる。香澄に、牛込さん。一応、花園さんに……山吹さんにもさ。あいつらがいたから……」

「……ここまで棘のない言葉が続くと、有咲に熱がないかどうか心配になってくる」

「はあ!? 何だよ、おい!? 人が素直に感謝の言葉を言ってるだけじゃねーか!」

「あ、でもそれをあいつらの前じゃなくて、俺の前で言ってる辺り、やっぱり有咲は有咲なんだよな〜?」

「それもそれでどういう意味だ、おおい!」

「そうやってムキになって、意地っ張りになるところも有咲らしい。言ったらまた怒ってくるだろうけど。」

「……ったく。これでも、翔にだって感謝してんだぞ?」

「俺も?」

「あの時、自分に素直になれなかった私を叱ってくれただろ。元の自分に戻ろうとしていた私を……気にかけてくれた」

香澄から距離を置き、気持ちを押し殺していくことが、正しいと思いついていたあの頃。でも、それは間違いだと気づいてもらう事ができた。

振り回して、巻き込んで。自分の事を見てくれない香澄に嫌気がさして。つい冷たい態度を取ってしまった。そうじゃないと言葉を投げかけた結果、今の有咲がある。

「私が変われたのは、香澄だけのおかげじゃない。翔……お前も、変えてくれたんだ」

心なしか、有咲の顔は赤く見えた。いつも見るような恥じらいの表情ではなく、はにかんだような照れ顔。

「……あ、ありがとな。翔」

ぎこちなくも、とても素直にその言葉を聞くことができた。

「……やっぱ、熱でもあるんじゃない？」

「う、うるっせえよ！ほら、早く香澄たち呼んで来い！／＼／＼」

「はいはい。結局いつもの有咲に戻ったか……」

「何かバカにしてんだろ！くそ……こっちは恥ずかしい思いしてんのに……」

「プリプリすんなって。あんな風に言ったけど、これでもさっきの言葉、嬉しかったんだぜ？ありがとう、有咲」

「……お、おう／＼」

「パイとそつぽを向く有咲だったが、覗く耳が真っ赤になってるのを見て、俺は苦笑する。」

「けど……こうして言葉を紡ぎだすことができるのは、有咲が成長した証なんだろう。」

「おれはそれを嬉しく思いながら、香澄たちを呼びに行くことにした。」

phrase 34 初めての

「クライブ、ついに明日だね。香澄」

「うん！今日も放課後、有咲の蔵で練習するんだ！」

クライブ前日。初めてのライブを目前にし、俺たちは緊張感に包まれている。まあ、香澄は楽しそうに話題にできるあたり、そんな事なさそうなんだけどな……。

上手く行くかどうか。ミスしないかどうか。練習を重ねても、俺たちには経験がない。人前に立ち、押し寄せるプレッシャーと戦いながら、自分たちの演奏をやり切ると言う経験が。

だからこそ、どうしても不安になってしまう。小規模のライブとは言え、まだバンド初心者なんだからな。りみも有咲も、口数は少ない。たえは……知らん。けど、あいつもあいつなりに思うところはあるんだろう。

「……ヤベエ。さつきからずっと明日のライブの事しか考えられねえ」

「うん……わかるよ、有咲ちゃん。私も、ライブって初めてだから……」

「まあ、緊張するよな……やっぱり」

今は昼休み。天気も快晴。なのに、俺たちはとても明るい気分とは言えなかった。

「みんな大丈夫？そんなに思い詰めなくても大丈夫だって」

「そうだよー！なーくんも、りみりんも、有咲も！明日は私たちの初ライブなんだよ!？」

「知ってるっつーの。だからさ、ハマしたりしねーかって心配になるんだって」

「そうかもだけど！私、やっとライブできて嬉しいんだ！あの時、SP ACEで見たキラキラドキドキを、やっと感じる事ができるんだな〜って！」

「香澄……」

「そう思ったら、何だか待ち遠しくって！失敗なんてしてもいいから、

今は思いっきり演奏したい気分なんだ！」

「「あ……」」

全く……香澄は、本当すごいな。さっきまで失敗しないかどうか、ライブが成功するかどうかしか考えてなかった俺たちの方が、よっぽどバカに見える。

S P A C Eのオーデイションができるかどうか、たえを納得させられるかどうかかかっているのに。香澄は、そんな時でも、ライブそのものを楽しもうとしていたんだ。

何にも縛られないで、素直な気持ちでライブに臨もうとしている。

やっぱり、香澄には敵わないな。この持ち前の性格は、俺にはとても真似できそうにない。

「失敗は成功の元つて言うし、香澄の言う通りに、難しく考えない方がいいんじゃないかな？」

「沙綾……ああ、そうだな」

「えっ、今なんて？すっぱいは健康の元？」

「どんな聞き間違いしてんだよ、たえ」

沙綾の言う通り、俺たちは少しオーバーに捉えすぎていたのかもしれない。明日やるのは、ただのライブだ。緊張感とか、ミスとか、気にしなくちゃいけないことは、確かにあるのかもしれない。

けど、それだけじゃないはずだ。堅苦しく考えて演奏するライブなんか、やっていても聞いていても、楽しくなんかはないはずだ。

香澄のように、もう少し楽しむことを意識するのも、悪くないのかもな。

「……で、その花園さんは何やってるの？」

「これ？ドラムとギターパートの音源を打ち込んでるんだ」

「ドラムとギター？おたえちゃん、それって何に使うの？」

「今日、私たち練習行けなくなっちゃったから。バイト入って」

「「「えっ!」」」

驚くのも無理はないが、急にバイトが入ってしまった。人手が足りなくなってしまうらしく、急遽俺とたえが呼び出されることに。

まさかこんな日に限ってバイトがあるとは。前日だし、最後に合わ

せて練習したかったんだけどな……。こればかりは仕方ないか。
「ってわけだ。今日の練習は、たえが今作ったドラムとギターの音源
を使って練習してくれ」

「ええ〜……。なーくんたちと一緒に練習したかったよお……」

「仕方ないだろ。バイトはバイトだ。ほら、たえ。香澄に音源渡して
やってくれ」

「うん。香澄、この音源を私の形見だと思って……」

お前は放課後何しに行くつもりなんだよ。ただのバイトで大げさ
なんだよ。

「けど、ドラムがないのってかなり大きいんじゃないか？」

「打ち込みの音源はあるけど……やっぱり、翔君のリズムもあるから
……」

「まあそう言うなって、二人とも。明日の本番前に、1回くらいリハー
サルする時間もある。そこで最終確認できるし、今日は悪いが、それ
で我慢してくれ」

「そっか……。うん、わかった。なーくん、バイト頑張つて来てね！」

「お、おう」

香澄……。不意打ち気味にその笑顔は、ちよつと反則だからな？

「じゃあね、なーくん！また明日ね〜!!」

「おう！そっちも練習頑張れよ！」

そして放課後。香澄たちは最後の追い上げにかかるべく、有咲の蔵
へ。俺たちはSPACEの方へと向かい始めた。沙綾も方向が一緒
のため、今日は3人だ。

「何と言うか……。このメンバーって珍しいよな」

「言われてみれば、確かにそうかも。翔と一緒にすることは多いけど
……」

「私も、沙綾とこの道通るのは初めてかも」

クライブの練習で、りみや有咲とはよく一緒になるたえだけど……沙綾は昼休みの時にしか一緒になる事もないからな。

それにたえは、最近になって俺たちと行動するようになったからな。付き合いはまだ浅い。

「そう考えると、何だか嬉しいかも」

「嬉しいって?」

「こうして花園さんと一緒に帰るのって、何だか新鮮だから。いつもは教室とか、お昼の時間にしか一緒じゃないからね」

「新鮮って、私野菜なの?」

「知らねえよ」

どんなボケだ。例えにしても、もつとマシなものがあるだろうが。「けど、大変だねえ。今日はバイトで、明日には本番……。ちゃんと休まないとダメだよ?」

「大丈夫。バイトはバイト。クライブはクライブだ。練習できないのは痛いけど、昨日まで何もしなかったわけじゃないんだ。きつと上手く行く」

「花園さんも、明日は大丈夫そう?」

「うん、私も大丈夫」

まあ、たえに関しては大丈夫だろう。元から技術はあるからな。ミスが一番少ないのも、ハッキリ言ってたえだからな。

「けど、花園さんも演奏するんだね?この前は、勝負事みたいな話になってたと思うんだけど……?」

「香澄に誘われたから。一緒にライブしたいって」

「そ、そうなんだ。香澄らしいと言えば香澄らしいかも……」

その一言で片付いてしまう方が恐ろしいんだけどな……。

「ま、たえに助けられてる部分もあるし、演奏に入ってくれるのはありがたいけどな」

「えっへん」

どや顔でこっち見るな。

「アハハ……。花園さん、かなり重要って感じみたいだね」

「そうなの？ 私は、香澄たちと一緒に演奏できるなら、それだけで幸せだよ」

「それはもう少し危機感を感じてもらいたいな……」

「でも、私今嬉しいんだ。誰かと音を合わせる事が楽しい事だって、それを教えてくれたのは香澄。みんなと一緒に練習して、曲を弾いて。それがすつごく楽しいんだ」

香澄と同じように、ライブができる事が……いや、そうじゃない。誰かと音を合わせ、演奏できるだけで、たえは幸せなんだ。演奏そのものに楽しさを感じているのは、香澄もたえも同じか。

「一人でギター弾いてる方が、気楽だし楽しかったのに。何でだろう？ 今は香澄と、みんなと演奏してる時間の方が……楽しいんだ」

「……そうか」

演奏が楽しい。みんなと、音を合わせるその時間が。たえは確かに、俺たちの前でそう言った。

ただ……そこに込められた思いは、香澄の持つ楽しさとは決定的に違う。

「そっか。演奏を楽しんでるんだね、花園さんは」

「うん。今の私、今まで以上にギターを楽しんでる気がする」

「なら、楽しみだな。そんな花園さんの演奏が。もちろん、翔や香澄たちの演奏もね」

俺たちの演奏を、ここで期待してくれる人がいる。それだけで、明日の本番も頑張れるような、そんな気がした。

「ああ。明日は成功させる。せつかく沙綾も見に来てくれるんだからな」

「沙綾も一緒にライブしてもいいんだよ？」

「ちよ、お前勝手に話を広げるな。それはさすがにアウトだから」

「あ、アハハ……。私も、明日はしっかりこの目で、香澄たちの練習してきた成果を見届けるよ」

そうだな。たえがこっちに回ってしまったんだ。香澄がオーデイ

シヨンを受けるのにふさわしいかどうか、見てもらわないといけない。

その役回りは、沙綾に託す。俺たちは、俺たちにできる事をやるんだ。

「……お、やまぶきベーカリーに着いたな」

「いい匂い……」

「じゃなくて。じゃあ、俺たちはバイトあるから。時間もないし、もう行くよ」

「あつ、ちよつと待つて」

話している間に、やまぶきベーカリー前に到着。久しぶりに、このパンのにおいをかいだ気がする。だが、俺たちはここに長居しているわけにはいかない。遅れたらオーナーに怒られるからな。

そう思ったが、沙綾は急いで店の中に。待つててと言われたら、無視していくわけにもいかないが……もしかして。

「沙綾、何しに行ったのかな」

「このパターンは……前にもあつた」

「えっ?」

「ごめん、お待たせ! はい、これ差し入れのパン!」

やっぱり。前と同じように、紙袋いっぱいパンが。慌てて選んだからか、少し紙袋がつぶれている。

「またこんな……いいの?」

「バイトお疲れ様って気持ちと、クライブ頑張つてねって気持ちを込めて、ね?」

「美味しそう……」

「だから違うつて、たえ。ありがとな、沙綾。またみんなも喜ぶよ」

「どういたしまして。……翔のためなら、これくらいいつでもあげられるのに」

「うん?何か言ったか?」

「な、何でもないよ!じゃ、私も手伝いあるから、また明日ね!」

それだけ言うと、沙綾は慌てて店の中に戻つて行つてしまった。何か言つてたような気がしたんだが、聞き取れなかったな。

ただ……戻ろうとした沙綾の横顔は、なぜかほんのりと赤みを帯びていた気がした。

「今日の仕事は以上だ。お疲れ」

「お疲れさまでした!」

それから数時間後。俺たちは今日のバイトを終わらせ、控え室へと戻る途中だった。

スマホを見ると、香澄たちもさつき練習が終わったと連絡が入っていた。まだ詰まるころはあるが、ほとんど問題なく演奏できたとのことだ。これは明日にも期待が持てる。

「今日は大変だったね、翔」

「ああ。香澄たちも、さつき練習終わったってさ。今帰ってるくらいだと思う」

「そっか。じゃあ私、着替えてくるから」

「おう。俺もこの服のまま帰るのは嫌だしな」

俺は男性用の更衣室に入り、SPACEの制服から花女の制服に着替える。他のスタッフはもう帰ったみたいで、今は俺だけが独占している。

「……………」

この制服にも、もうすっかり慣れたものだ。最初は俺自身、戸惑いや抵抗もあったけど……今は普通に、花女の一員として袖を通していい。

他に来ている人は誰もいない、俺だけの男子用制服。女子だけの学校に入学したんだから、それも当然と言えば当然なだけだ。

けど……こんな制服、本当は生まれるはずなかったんだよな。ずっと女子校としてやってきたのに、いきなり男子生徒が来たんだから。

それも、入った理由が個人的な問題でしかない。

まるで学校を私物化したような扱いだ。でも、そんなわがままが通ったのは、ある種複雑な思惑が絡み合った結果、運よくこうなつたに過ぎない。

まさに奇跡とは、今の俺のためにあると言っても……いや、それは言いすぎか。

とにかく俺は、こうして花女に入つて、目的のために動く一方で……香澄のバンドを支え、明日にはクライブの一員として、ドラムを演奏することになった。

「……クライブか」

規模はともかく、俺にとっては初ライブだ。こうして目前に迫ると、やはり緊張はしてしまふ。香澄の言葉で、吹っ切れたように思つたんだけどな。

何よりも、オーデイションがかかっているんだ。あいつは危機感ゼロだったけど、俺は気が気でならないんだよ……。

けどまあ、香澄のやる気は本物だ。りみや有咲も、やると決めたからには真面目に練習に励んでいた。その気持ちだつて、棒に振るわけにはいかない。

と言うよりも、たえも香澄たちと——。

「翔、何してるの？もう着替え終わったよー」

「うわっ!?ちよ、もうちよい待て！まだ着替え終わってないんだ！」

「翔、着替えるの遅くない？」

「うるさい。ドアの前で待つてろ」

あいつ、着替え早くないか？いや……俺が考え事をしすぎただけか。

俺はすぐに制服に着替え、控え室のドアを開ける。ノブを回し、ドアを引いて開けると、そこにはギターを背負い、髪の毛をクルクルと弄つて待つていたたえが。

……何故か、ドアに密着するくらいの至近距離にいたが。

「何でそんなに近くで待つていたのか、30文字以内で説明しろ」

「うーん……ドツキリ？」

「どうして疑問形だ」

「翔だつて質問してるよ?」

会話になつてない。てか、このドアが押して開けるタイプだったらどうしてたんだよ。そんな待ち方されてるの知らないから、俺がドア開けた途端に思いつき顔ぶつけてたぞ。

それに、そろそろボーッと突っ立ってるのもやめてほしい。黙つたらら美人だし、至近距離だと恥ずかしい。

「まあいい、とりあえず行くぞ。俺が出られないから、部屋の出口で仁王立ちなんかするな」

「入口じゃないの?」

たえから見たらそうなんだけど!俺は控え室から出るんだから、出口になるだろうが!

「……どっちでもいい。オーナーだつて、後始末とか施錠とかあるだろうし、邪魔にならないうちに早く出るぞ」

「りようか?」

「……たたく……。バイト中は真面目なのに、終わるとすぐに天然に戻つてしまう。ただでさえ疲れてるのに、帰る時もたえに振り回されれないといけない。同じ電車通学だしな……」

「ところでさ」

「何だよ、たえ」

「翔つて女の子なの?」

「言ってる側から来たよ。俺は苦い顔をしながら、SPACEを出て歩き出した。」

「黙ってるって事は、もしかして……!?!」

「いや、何でだよ。呆れて何も言えなかっただけだ」

「だつて、さつき着替えるの遅かったから。そう言うのって、女の人の方が時間かかるって聞いたことある」

「本当かよ。適当な事言ってるだけじゃないだろうな。」

「……俺を見ろ」

「えっ……?も、もしかして、ここで告白とか……?ちよつと気が早く」

「違えよ！何でこの流れでたえに告らないといけないんだよ！」

「ああ、よかった。私、そう言うのはもつと場所とか考えてほしいなっ
て思ってるから。期待してるよ」

「何の期待だ。俺の告白はもう確定してるのか」

「プリーズ」

「何で英語にしたんだよ」

「意味は……特にないかな」

「ないのかよ！」

もうツツコミが止まらない。そもそもボケとして成立しているの
かどうかも怪しいからな。脈絡とか気にしないでどんどん言いたい
事ぶっこんで来るから、たえはわけわからなんだらうな……。

「てか、話それた！俺を見て、女子に見えるかどうか聞きたかったんだ
よ！」

「……？翔は男の子だよ？」

「わかってるよ！」

「でも、花女の制服って事は……まさか、そつち系だったり？」

「普通に女の子好きだよ！俺は健全な男の子だからな!!」

「大丈夫。翔は男の子だよ」

「じゃあ何で女の子じゃなかったって聞いてきた!?!」

「……何で怒ってるの?」

「こ、この……っ!」

正直、1発くらい殴ってやりたい。けど、さすがに女の子に手を出
すのはぐ法度だ。よく耐えてるぞ、俺。

「でも残念だね。今日はクライブの練習、行けなかった」

「ん?……ああ、そうだな」

いきなり話変わるんだな。それはそうと、本当に名残惜しそうに話
すたえは、クライブを心から楽しんでるみたいだった。

「明日が本番なのに、今日は香澄、ちゃんと練習できたかな?有咲もり
みも、音源だけで大丈夫だったかな……?」

「たえ……ははっ」

「どうしたの翔?頭おかしくなった?」

うるさい。人が感心してるのに、マジで殴ってもいいだろうか。

「いや……たえが本当、楽しそうに話すからさ」

「だって、楽しみだから。香澄たちと一緒に演奏できるのが」

まさかたえの口から、そんな言葉が当たり前のように飛び出してくるとはな。今日の帰り道も、前の練習の時だって、たえは誰かと演奏する事に対する喜びを、熱く語っていた。

少し前なら、絶対にたえの言わないような言葉の数々。俺はその事を、よく知っている。香澄だって、きつと知らないはずの事を。

だって、俺がSPACEのバイトで、初めてたえと話した時……。

「私、そんなに楽しそうに見えた？」

「丸わかりだよ。知り合ったばかりの頃、お前何て言ってたか覚えてるか？」

「ちゃんと覚えてるよ。自分の事だから」

「ま、そうだよな」

「1人の時間にしか興味ない。1人でギターを弾いてる時間が大好き。他人とセッションするなんて、もつてのほかだって」

そう。たえは……そう言い切ってしまうほどの、冷たい物を持っていた。

俺がこの言葉を聞いたのは、たえのバイト初日の時。何となく、休憩時間の時に話をしていた時の事だ。

確か……音楽の話題になったんだっけ。ライブの合間に、好きなパートの話になって……そこから話が広がって。

その時の言葉が、これだった。自分以外には、何も興味がない。表情こそ今と同じような飄々としたものだったけど、言葉には何とも言えない重みがあった。

淡々と言つてのけるから、それがなおさら深みを持たせた。彼女の抱えていた闇は、いつもの態度からは想像できないほどに大きなものだど知った。

そんなたえが、他人と音を合わせてバンドをすることが、楽しいと

まで感じるようになっていた。

嬉しい変化だった。それはきつと、香澄がきつかけとなって、心の扉を開いてくれたからだろう。

けど……俺は知っている。

それが変化でもなく、自力で扉を開けなかったわけでもない。まして、他人と関わりたくないような冷たさを秘めていた冷酷な人間だったんじゃない事を。

そうするしか、なかった事を。

「でも、本当に興味がなかったわけじゃないよ？バイト始めてすぐに、翔にだけ話したよね？私はどこか周りから浮いていて、近づいてくる人がいかなかったただけだって」

軽く言いきってはいるが、たえの過去は悲しいものだった。

どこか抜けた、天然の目立つ発言。それゆえに、たえは周りとは反りが合わなかった。

変わってる。意味不明。会話にならない……。そんな印象を持たれ続け、陰口を叩かれてきたんだろう。ただ仲良くなりたくて、自分をさらけ出していただけなのに、たえのその想いは、無情にも砕かれ続けた。

そんな性格が災いして、たえは1人になるしかなかった。手を伸ばしても、誰も掴んでくれなかった。1人でギターを弾く時間が好きなのも、過去の悲しい名残でしかなかった。

友達。たえには、そう呼べる人が誰もいなかったんだ。

「だからね。こんな私の事を毛嫌いしないで接してくれる香澄たちには、本当に感謝してるんだ。それに、翔も」

「俺も……か」

「そうだよ。初めて私と普通に話してくれたのは、翔なんだよ？SP ACEのバイト入ったばかりで、不安になってた私に、優しく声をかけてくれた」

右も左もわからず、与えられた仕事を必死にこなしているたえを見

て、俺は放っておけなかった。

もう少し力を抜いて、余裕を持たせて。どんな状況にも対応できるように、冷静でいなくてはいけない。俺にできるアドバイスは、たえに叩き込んだつもりだ。

最初はトンチンカンな事を言ってる、不思議な子だと思ってた。けど……嫌いだとか、避けたいとか。そんな風なたえを見た事は一度もない。

それに、さつきの冷めた言葉をバイト始めに聞いた時から、この子は悲しい奴だと思った。だからかな……放っておけなかったんだと思う。

何も理由なく、人を避けたいなんて思うはずない。お節介でもよかったから、俺はたえと話し続けた。独特で、面白い奴だったから一緒にいたかったってのもあるんだけどな。後は同い年だし。

確かに天然に振り回されて、疲れてしまう事はあるけど……たえと一緒に退屈になる事なんて、何もなかった。

早い話が、たえは俺の友達だ。

「あの時、いつも私に話しかけてくれた事……私は今でも、これからもずっと忘れない。翔はいつだって、私を変な目で見ない。自分らしくいても、何も悪く言わなかった」

「そんなの、当たり前だろ。たえ」

「その当たり前前が、昔の私にはなかったから。でも、翔がいたから、私は私らしくいてもいいんだなって思えたんだ。ずっと否定されてきた自分を、ようやく受け入れてくれた気がしたから」

俺にとっては、何気ない気遣いから始まった。それが、たえの過去の一端を見るきっかけになって……気づけば、いつもたえに話しかけていた。

きっかけは単純だったかもしれない。だが、たえにとっては、それ以上の価値のある出来事だったんだ。

「……つたく、お前は本当に抜けてるな。そんな恥ずかしい事、よく本

人の前で平然と言えるよ」

「翔の前だから言えるんだよ?」

「それを普通に言ってしまうのがすごいって言ってんだよ」

「それが私だから。フフン」

そうだったな。良くも悪くも、それが花園たえって奴だからな。

「なら、明日のライブもその調子で頑張ってくれ。たえの力は、あいつらには必要だ。俺にもな」

「ライブ……? ああ、そう言えば私、ライブの話をしてたんだ」

こいつ、忘れてたのか。たえから始めたんだぞ、ライブの話。

「もちろんだよ。緊張はするけど、香澄たちと演奏する時の気持ち……もつと感じたいから」

「そっか……。だったら、このまま香澄たちとバンドすればいいのに」

「私が、香澄と……?」

「ああ。香澄も上達してるとは言っても、まだまだ発展途上だ。リードしてくれる人が必要なんだよ。その役には……たえ。お前が最適なんだ」

ライブの間だけの関係で終わらせるには、たえは惜しい物を持っている。たえ自身も、バンドへの楽しさを見出しているんだ。悪い話ではないと思うんだけどな。

「話は嬉しいけど……私でいいのかな」

「大丈夫だ。ギターの腕は確かだし、指導も的確だ。気心知れた人がバンドに入ってくれるなら、香澄としても嬉しいと思う」

実際、香澄はこのライブまでにメキメキ力をつけている。それは、たえの教え方があってこそだ。たえがバンドに加われれば、バンド全体としてのレベルアップにもつながるだろう。

「私が、バンドに……」

「別に、今無理に答えを出す必要はないさ。明日のライブで、香澄たちと本番の舞台上で演奏した空気を感じてからでも、遅くはない」

「翔……うん、わかった」

それに、答えを言う相手は俺じゃない。俺はただ、たえと出会った時のようにお節介を焼いているだけだ。

たえが何を思い、何を選ぶのかは、部外者でしかない俺にはわからない。
ない。

その答えも……明日になって見ないとわからない話だ。

そんな明日は、クライブは、すぐそこまで迫っていた……。

phrase 35 私のは

「飲み物はジュースでよかった?」

「はい、ありがとうございます」

有咲のおばあちゃんからジュースを受け取り、沙綾はそれを一口。束の間の休息に羽を伸ばしながら、沙綾はその時を待つ。

今日は、クライブ当日だ。たえを納得させられるかどうか、その全てがかかっている。表向きは単なるミニライブだが、香澄たちの事情を知る沙綾にとっては、不安な要素が残る。

実際のところは、話の方向がずれ始めて、沙綾にもよくわかっていない状況だが。

「香澄たち、大丈夫かな……」

練習も頑張っていたと、香澄たちからは聞いている。翔も昨日はバイトだったけど、自信ありげに話していた。それでも、心配にはなってしまう。

そんな沙綾の近くでは、別の二人が談笑していた。

「先輩も来ていたんですね、クライブに」

「あなたは、戸山さんだね。中3の」

「えっ、私の事、ご存知でしたか?」

「ふふ。水泳部の可愛い後輩だもの。部長としては覚えておかないと」

香澄に誘われて、無理矢理やってきた明日香。それに、りみのお姉さんのゆり。

まさか明日香も、所属する部の部長がこの場にいるとは思ってなかっただろう。ゆりはゆりで、この場で後輩と遭遇するとは思っていなかったが。

「お姉さんの初ライブ、楽しみだね」

「あー……。お姉ちゃん、おっちょこちよいだから……。どっちかっというと、心配なんですけどね」

「きつと大丈夫。りみも戸山さんのお姉さんのために頑張ってるって話、いつもしてくれたから」

「そうなんですか。ああ、でもやつぱり、妹としては心配になるんで……」

常に何か行動がぶっ飛んでいる、元気の塊みたいな姉だ。いつも接しているからこそ、誰かと息を合わせて音を作るバンドが、果たして本当に務まるのかと、明日香は心配だった。

ゆりの言葉が救いなのだが、それも不安を解消するまでにはいいかな。

「わかるな、その気持ち。私も、りみの初ライブ、上手く行くかどうかハラハラしてるんだ」

「えっ、先輩もですか？」

「もちろん。可愛い妹の晴れ舞台だよ？ちゃんと見届けてあげたいって気持ちと、成功しますようにって気持ち、ちよっぴり心配になる気持ちかがグチャグチャになってる」

「私と一緒に……」

姉妹だからこそ、感じてしまう不安や気遣い。それは妹だとしても、姉だとしても関係ない。血のつながった家族の事は、やはり考えてしまうものだ。

「そう言えば、戸山さんはバンドはしないの？」

「……へっ？私、ですか？」

「うん。お姉さんの影響とかで、バンドに興味とか持っていないのかなって。りみも、いきなりバンドするって言い出したから」

「……それは」

バンドに興味があるかどうか……明日香の中で、その質問に対する答えは既に出ている。

人知れず、誰にも打ち明けず、今日この日まで積み重ねた思いが……明日香にはある。あの時の突き上げる衝動が、今も体中を震わせる。忘れたくても、忘れられない。

やってみたいんだ、私も。バンドを。

今はまだ、メンバーも技術もない。行動に移すには、早すぎるけど。

少しずつ前に進むために……せめて技術だけは磨いていく。

そのために、あなたに頭を下げたんだ。

美竹蘭さん。

ついにこの日が来た。

ライブ当日。香澄に、いや……俺たちにとっては初めてのライブだ。観客も集まりだし、少しづつ緊張感が高まりだしている。

朝も少し早めに集まり、昨日できなかった分の練習もできた。リハーサルも問題なく終わったし、今のところは大丈夫だ。大丈夫のはずだ。

と、そんな空気に包まれている中でも……たえはやってくれた。

「紹介するね。オッドアイのオツちゃんだよ」

「おお……」

「つて、何でウサギ連れてきてんだよ！」

「理由つてのをたえに求めても、まともな返答はないぞ」

「それもそうか……」

ケージに入れられて、鼻をヒクヒクさせているのは、たえの連れてきたウサギ。俺以外のみんなは家族を招待した中で、ただだけウサギって謎チョイスだからな、本当。

「可愛い！おたえの家、ウサギがいるんだ！」

「家にはもつとたくさんいるよ」

「すごい！行ってみたい！」

「じゃ、今度遊びに来てよ。有咲にりみも、翔も」

「えっ、私もかよ……」

「おいおい、遊びに行くのはいいが、今はライブだからな？」

既に準備は済ませ、開始時間を待つだけ。そして、本番の時はすぐそこに迫っていた。

香澄がSPACEのオーディションを受けるほどの実力に達したかどうか、たえの心を奮わせるような演奏ができるかどうか。口には

出さなくても、香澄だつてさすがに緊張しているのはわかる。

りみや有咲も、わかりやすく緊張している。この前のきらきら星の時とは、規模は小さくても状況が全然違うからな。自分たちの曲を、自分たちで演奏するんだから。

そんなこと考えてる俺も、普通にプレッシャー感じてる。俺のドラムを誰かに披露するのは、今日が初めてだ。りみや有咲には聞かせたが、ライブとして誰かに演奏を見せた事は一度もない。

そんな俺たちを見かねたんだろう。たえはこのタイミングでウサギを見せ、少しでも場の空気を和ませようとしてくれたんだな。

緊張も、いい意味でほぐれた。こういうさりげないたえの気遣いは、前からよく目にするんだよな。実際、そこまで深く考えていないのかもしれないが。

「香澄ちゃん、本番頑張ろうね」

「うん！りみりんも、有咲も、なーくんも……おたえも！今日はキラキラドキドキしようね！」

「意味わかんねえ。……けど、やるだけやってやるよ。そのために、今日まで練習してきたんだからな」

「打ち上げはおしるこにしようかな」

「気が早えよ!？」

「ストップ、みんな。そろそろ時間だ。……行くぞ！」

「二「うん!!」二」

談笑はここまで。俺たちは持ち場について、楽器を構える。今になつて、手汗かいてきた。

リハーサルもした。失敗もなかった。きつと上手く行くはずだ。俺はリズムの要だし、下手な演奏はできないからな。

最後に軽くチューニングだけ済ませ、準備完了。全員が整ったのを見て、香澄は声を上げる。

「こんにちは、戸山香澄です！今日は、クライブに来てくださって、ありがとうございます！」

香澄のMCが始まった。沙綾に明日香、ゆりさんも静かに耳を傾けている。オツちゃんのいるケージは、有咲のおばあちゃんの膝の上に

置かれていた。

「今日はおたえと……さーや、あつちゃん、ゆりさん、おばあちゃんをドキドキさせます！して下さったら、嬉しいです！」

そのたえは、何故かこっち側にいるんだけどな。

「私も……このライブが初めてで、今すつごくドキドキしてます！このドキドキを、もつと感じたい……。そんな気持ちを込めて、これから1曲、演奏します！」

さあ、香澄。これが、お前の夢見た舞台への第一歩だ。今日はとことん、お前に付き合っつてやる。

「では、聞いてください！『私の心はチョココロネ』！」

言い終わり、香澄が俺に目線で合図を送る。俺のカウントから、演奏はスタートするからな。つまりは、俺のタイミング次第だ。

いや、香澄だけじゃない。りみも、有咲も、たえも。この場にいる全員が、俺に注目している。演奏の始まる、その時を待ったために。

ヤバいな……。マジで緊張する。スティック握る手、震えてないだろうな？

「……………」

でも、こんなにも期待して見てくれてるんだ。香澄だって、俺を見てる。あいつの力になれるなら、俺は喜んで協力してやる。

そうだ……。やってやるんだ。練習してきた事を信じて、全力で突っ走ってやる!!

(……1、2、3、4！)

俺のカウントに合わせて、香澄たちの演奏も始まった。よし、出だしはまずまず。好調ってところだ。

だが、カウント取ったくらいで喜んではいけけない。むしろここからが本番なんだからな。気を抜かず、俺はしっかりとリズムを刻んでいく。4人をリードして、音をまとめ上げていかないといけない。

(みんなの音、しっかり聞かなくちゃ……！)

(焦ってミスんなよ、香澄……！)

(あんなに練習したんだもん！絶対に大丈夫！それに、なーくんもいてくれる!!)

バラバラの音が、1つに集まっていく。それは、1つの楽器では絶対に作り出せない魔法の音色。音を聞き、演奏に集中し、より洗練された音へと研ぎ澄まされていく。

みんな、目立ったミスはない。そろそろサビに差し掛かるし……最後まで落ち着いていけ。そう思いながら、4人の音に気を向けていた俺は……たえの様子がおかしいことに気づく。

演奏に問題はない。ミスもないし、リズムも安定している。だが、どこか別の事に気を取られているような……そんな様子だった。

(あ……まただ。自分の音と、みんなの音が重なっていくあの感じ……)

重なる鼓動の中、たえは1人何かを感じる。

それは、今まで感じた事のなかったもの。

(みんなの気持ち音が音に乗って、伝わってくるみたい……。何だか、すごく楽しい。ドキドキする……!)

私は、ずっと1人でギターを弾いてきた。その方が気楽だったし、楽しかった。

周りの目を気にする事もない。自分らしくいたいだけなのに、変な目を向けられるのは嫌だったから。1人なら、そんな事もない。

そう思っ、私は1人を選んで……いつしか、その時間の中に楽しさを感じていた。

でも、そうじゃなかったんだ。

香澄たちと一緒にギターを弾いて、音を合わせて。他の楽器の音も、そこに加わっていく。まるで、自分たちで壮大な世界を作り出しているよう。

楽しい。1人の時よりも、ずっと。こんなにもギターを弾くのが楽しいと思えたのは、初めての事かもしれない。

(もしかして今、私……!)

香澄たちとずっと、ギターを弾いていたかと思っっているのかもしれない。

「みんなお疲れ様。すごかったよ」

「さーや、ありがと〜！最後までちゃんと弾けたよ〜！」

クライブも終わり、今は後片付けの最中。沙綾はまだ残っているが、明日香とゆりさんはもう帰ってしまった。

ゆりさんは、クライブに感化されてか、今からグリグリで集まって練習に行くらしい。明日香は……何やら用事があるみたいだが。

「翔もドラム、バツチリだったじゃん」

「おう、ありがとな。けど、緊張した……」

今だから落ち着いているが、終わった時には手の震えが止まらなかったからな。汗もダラダラで、心も体も疲れ切っていた。

「牛込さんもよかったよ。花園さんは……あれ？」

「おたえちゃん、さつきからずっとギター持ったままじつとしてて……」

「おたえ……？」

疲れ切っている……と言うわけではなさそうだ。演奏を終え、自分の中の気持ちを整理しているのかもしれない。

このクライブは、たえを納得させるためのものだ。ライブを振り返り、答えを出す時間が必要なんだろう。

後は……昨日言った事も考えてるんだろうな。

香澄と一緒に、バンドをやるかどうか。

「花園さんの事、気になるけど……ごめんね。私そろそろ店に戻らないと」

「そっか……。今日は来てくれてありがと、さーや！」

「私こそ、いい演奏を見せてくれてありがと。それじゃ、また明日

！」

店の手伝いなら仕方ない。沙綾は軽く手を振って、地下室を出て行った。

「にしても、成功してよかったな。ヒヤヒヤする場面はあったけど」

「イントロが終わってから、少し焦っちゃったかも」

「そこもだし……サビ始まってからの香澄の歌もな？」

「うっ……演奏に集中してしまって、声が裏返っちゃって〜」

「おーい、お前ら〜。ジュース持ってきたぞ〜」

演奏で疲れ切った俺たちのために、有咲が5人分のジュースを持ってきた。俺たちは有咲からコップを受け取り、クライブ成功の記念と称して乾杯する事に。

「ふい〜……。身に染みる……」

「有咲、おっさんみたいだな」

「うるせえ。にしてもマジヤバかったな、クライブ」

「でも、楽しかったよね」

「うん！私、すっごくドキドキして、楽しかったよ!!」

たった1曲だけのライブ。でも、香澄たちは全力を注ぎ、そのための練習も何度もしてきた。だからこそ、感じる気持ちは大きい。

成功した。それが嬉しかった。香澄たちも喜んでいるが、俺だって嬉しいんだ。やり切った達成感と、その苦労を分かち合う人がいてくれることに、俺は感謝しよう。

それはまるで、あの時の星の鼓動が見せてくれたような、興奮と感動……。

「どうだった、おたえ？ドキドキした？SPACEに立てるくらい、演奏上手になったかな？」

と、今まで黙っていたたえに、香澄から本題をぶつける。ライブは成功したが、まだ肝心なところは解決していないからな。

呼びかけられ、自分がまだギターを持っていたことによく気付くたえ。まずはギターを外し、それから香澄に向き合う。

自然と、俺たちにも緊張が伝わってくる。さっきまでの緩んでいた空気が、嘘みたいだった。

全ての判断が委ねられ、注目されるたえ。答えを待つ香澄にたえが告げたのは……。

「ううん。演奏はまだまだだった」

「……ええっ!？」

バツサリと一刀両断する、そんな答えだった。

「そ、そんなあ……」

「おいおい、結局ダメなのかよ!？」

「おたえちゃん……」

空気がより一層重くなり、どう言葉をかけていいのかもわからない。たえがそう思ったのなら、それは仕方のないことだ。

だが、まだ続きがあった。

「でもね。香澄たちの気持ちは伝わってきたよ。バンドと音楽に、本気で向き合ってるって」

「おたえ……」

「気持ちか……。確かにそうだな」

ここにいるのは、香澄を筆頭に、バンドをやってやろうと集まった人ばかりだ。りみも有咲も、今日のために手を抜くことなく練習した。

だから、今日も心から喜んでるんだ。生半可な気持ちで参加している人は、ここにはいない。

「多分……そう言う事だからかな。みんな、すごく輝いてた。一緒に演奏してるうちに、震えちゃうくらい」

「えっ、おたえ……今震えたって……!」

「うん。香澄と演奏して、震えることができたよ。震えて、楽しくて。この気持ちをもっと、みんなと一緒に共有したい」

俺が心配するまでもなかった。昨日の答えは、もう出てたみたいだな。

「私も、香澄と一緒にバンドしたい。やらせてくれないかな？」

たえが自分から、バンドに入りたいと頼み込む。後は、みんながどう思うかだ。

「えっ!?おま、入るのかよ!？」

「有咲、ダメ?。」

「うえっ、い、いや……ダメとは言ってねーけど……」

「私はいいと思うな。おたえちゃんがいってくれと、頼もしいな」

りみと有咲は（有咲は微妙だったが）、快く受け入れてくれた。後は、香澄の返事だけ。

「香澄はどうかかな?ダメ……?。」

「……………」

呼ばれた香澄は、無言でわなわなと震えていた。まさか、ダメだったのか?香澄だって、たえに入ってもらいたいと言っていたのに。

「香澄?。」

「……もっちろんだよ、おたええ!入って、バンド!大歓迎だよ!!」

いや、そうじゃなかったらしい。嬉しくて、興奮のあまり震えていただけだったみたいだ。

「よかったな、香澄。これで4人目だな」

「嬉しいよ〜!おたえ、これからもよろしくね!!」

「こちらこそ、不束者ですが……末永くよろしくお願いします」

「何で結婚みたいになってんだよ!」

有咲のツツコミが地下室に響き、誰からと言わず笑いが起こる。香澄と、有咲と、りみと、そして……新しい仲間、たえ。

これで残るは後1人。ドラムだけだ。バンド結成まで、そう時間はかからないのかもしれない。

何はともあれ、今はメンバーが増えたことを……ただ笑って、迎え入れることにしよう。

phrase 36 緑の風、雨の雫

香澄たちがクライブを終えて、数日が経った。

たえを新しいメンバーへと迎え入れ、ようやくバンドとしての形が見えてきた。毎日の練習も欠かさず、香澄のギターセンスも目に見えて上達している。

4人の仲も良好だし、今のところは順調ってところか。特に問題も起こることなく、少しずつバンド結成へと近づいている。

「……君、聞こ……すか……」

あえて言うなら、ドラムの人材確保か。俺がバンドに入ってやれば済む話だが、それはさすがに無理だ。ガールズバンド規定法があるからな。女子だけで構成されていないといけないって言う決まりが。

となると、どうにかして探す必要がある。けど、全くと言っていいほどあてがない。クラスの中にそう言う人がいたらいいんだけど。

少しでもドラムかじってたとか、それくらいの経験者でいい。同じクラス内なら話も早くて助かるし、集まる時もすぐに集まることができる。

「……わくん……てます……」

SPACEまでの道はまだ遠いが、近づいてはいる。オーディションまでこぎつけるのも、案外すぐの話かもしれない。

簡単な事ではないのはわかっているが、もしかしたら――。

「成川君!!」

「……うおおおっ!!」

少女の大声が、鼓膜を突き抜ける。俺は突然の事で驚き、座っていた椅子ごと倒れこんだ。

大きな音とともに背中を打ち付け、教室にいたクラスメイトも何事かと俺の方を見てくる。そもそも、俺だって何が何だかよくわかっていないんだけど……。

「う、いつてえ……」

「あっ!?だ、大丈夫ですか!」

「ま、まあな……」

目の前に手が差し出され、俺はありがたくその手を取って立ち上がる。そこでようやく、俺は彼女が誰なのかに気が付いた。

緑の髪を腰まで伸ばした、清楚な女子。身長は平均的な女子高生と同じくらい。多分、香澄に近いんじゃないか。

「そんな大声出さなくても、俺は聞こえてるって。もつと普通に呼んでくれたらよかったのに」

「成川君が返事してくれなかったからですよ？もう何回も呼んでるのに」

「えっ!？」

頬をプクッと膨らませて、少しご機嫌斜めみたいだ。そんなに呼ばれていたって事か……。ヤバい、全然知らなかった。

「あ、えくつと……。そ、それは、その……。悪かったです」

「ふふっ。そんなに慌てなくても、私は怒ってませんよ？冗談です」

「な、何だ。月島さんも冗談言うんだな……」

「私だって、冗談の一つや二つ、言う時はありますよ?」

上品に口元に手をあて、おかしそうに笑うこの子は……。同じクラスの、月島琴音さん。

俺のクラスメイトで、第一印象は雅な大人の女性。同級生に使う表現ではないんだけどな。

けど、立ち振る舞いとかも可憐で、同性であつても釘付けになるほどらしい。入学してそれなりに時間は経つが、まだまだ彼女の人気は衰えていないようだしな。

そんな月島さんが、俺に声をかけるとは。あまり話したことはなかったはずだが、何かあるのか。

「それで、俺に何か用だったか?そのために呼んだんだろ?」

「今日提出の古典のノート、出していないの成川君だけでしたから。出してもらえませんか?」

「あつ、ヤベ……!」

しまった、忘れてた。ノートも出さず、人の話も聞いていないとか、俺って迷惑でしかないだろ……。

「……本当に悪い。すぐに出す」

「ありがとう、成川君。助かりました」

「それと、俺もノート持つてくの手伝うよ。確か、職員室まで運ばないといけないんだろ？」

「それはそうですけど……いいんですか？」

「さすがに悪いだろ。せめて、これくらいはやらせてくれ」

見たところ、月島さん以外に係の人はいないみたいだったからな。1人で持つていくのなら、全員分はかなり量がある。力仕事ならバイトで慣れてるし、任せてもらいたい。

「なら、お願いしてもいいですか？ちようど、もう1人の係の子が休んでいるので……」

「だから月島さんだけなのか。だったらなおさら手伝わないわけにはいかないな。任せてくれ」

俺は自分のノートを取り出すと、前の教壇に積んであったノートの束と合わせて両手に抱える。さすがに全部は持てなかったが、月島さんの負担は少なくなったはずだ。

職員室まではそこまで距離もないし、月島さんの仕事も早く終わりそうだ。俺は月島さんと並んで歩き、ノートを運ぶ。

「あの、そう言えば成川君。さつき全然返事してくれませんでしたけど……何か考え事でもしてたんですか？」

「ん？ああ、いや……特に思いつめる事でもないんだけどさ。香澄のバンドのこと考えてて」

「香澄って……戸山さん？」

「そうそう。あいつ、今バンド組もうとしてるんだよ。ギターも始めたんだけど、まだまだ素人って感じで」

「ギター……！バンドの花形ですよ！カッコよくて、一番注目されるパートですよー！」

お？俺が思ってたよりも食いつきがいいな。バンドつてイメージとはかけ離れた人だからな。

「それで、戸山さんは今どれくらい弾けるんですか？」

「基本コードはそれなりに……ってところかな。今は少しでも上手くなれるように練習してるよ」

しかも向こうから話を広げてきた。俺が思っているよりも、バンドや音楽に対する興味や関心はありそうだな。

「そうだったんですね。私の友達にも、バンド……と言いますか、そういう事をしている人がいるんですよ」

「へえ、月島さんの友達もバンドやってるんだ。バンドの名前って何て言うんだ？」

「な、名前は……」

と、そこで月島さんの言葉が途切れる。特に変わった質問ではない。が、明らかに態度が変わってしまった。少しぎこちなく、何かをためらうような態度。

「……悪い。言いたくないなら、別にいいんだぞ？」

「あつ、すみません。どうしても名前聞かれると、言うのためらってしまった。悪い意味で、有名になってしまったバンドですから」

「悪い意味で？」

「初ライブで……その、歌ってるフリや演奏してるフリをする……要はエアバンドだった事がバレってしまった。ましてバンドなのに演奏してない事が世間に知れ渡ってしまったって、今の評判は最悪なバンドなんですよ……」

「初ライブで、エアプ……まさか、最近デビューしたって言うアイドルバンドって奴じゃ……？」

「フフ。やっぱり知ってましたか。今は活動を休止しているんですけど、それもどうなるかわからなくて……」

確か……Pastel*Palette（パステルパレット）と言ったか。デビュー前から、アイドルなのにバンドとして、実際に演奏しながらパフォーマンスをする斬新なユニットとしてそれなりに注目されていたはずだ。

それだけに、期待を裏切るようなあのデビューライブは痛ましいものだった。俺も後からニュースで知ったが、やはり印象はよくないものだったな。

少しはほとぼりも冷めたが、そんな状態のバンドだ。公にして、そのような目を向けられるのが嫌で、名前を口にしたくなかったんだろ

う。

友達のバンドなのに。こうなるまでは、胸を張って名前を言えたはずなのに。こうも肩身の狭い思いをしないといけないなんて……。

「……早く月島さんの友達のバンド、胸を張って名前を言えるようになりたいな」

「そうなりたいですね……」

まだ時間はかかるかもしれないが、いつか彼女たちが表舞台に出てくる日を期待したい。その時は……俺も及ばずながら、歓声を送ってやろう。

「この話はもうやめようか。無理に話すことでもないし」

「でしたら、戸山さんのバンドについて話してくださいませんか？私、戸山さんがバンドやってるなんて知りませんでしたから、ちよつと気になっちゃって」

「香澄のバンド？あー……えっと、それがまだ未完成なんだよ。ドラムパート以外はあるんだけどさ。俺ドラムやってるんだけど、ガールズバンド規定法もあるし、メンバーに慣れないからな……」

「えっ、成川君ドラム叩けるんですか!?カッコいいです……!」

何か照れるな。面と向かってこんな事言われたのは初めてだ。ドラムやってよかったかもしれない……なんてな。

「あ、そうだ。月島さんはバンドやってたりとかする？」

「私はしてませんよ。けど、音楽は好きですし、バンドや楽器の知識にも自信はあります。それに……楽器も少しやってるので」

おっ!?こいつはいいんじゃないか!?もしかしたら、ドラムとしてバンドに入ってくれるかもしれないぞ!

「だ、だったら香澄のバンドに入って、ドラムとかやってみないか!?きつと香澄も喜ぶし、考えてくれたら……!」

「えっ!?ちよ、落ち着いてください!ノート落としますよ!」

月島さんに指摘されて、俺は自分の持っていたノートが少しぐらついているのに気づく。ノートの事も忘れてしまうくらいに熱が入ってしまったのは……ついテンションが上がってしまったみたいだ。

「あ……わ、悪い。でも、ドラムができる人はどうしても必要なんだ。ドラムやってる人なんて、俺全然あてとかないからさ……」

「そうですか……」

「だから、月島さんの力を貸してほしいんだ。楽器の知識もあるみたいだし、頼む！」

ノートを落とさないように、俺は器用に頭を下げる。すれ違う生徒が何やら騒がしくしているが、そんな事気にしていられない。

不意にめぐってきたチャンスなんだ。逃すわけにはいかない。楽器もやってて、知識もあるなんて、香澄にとっては大きな効果があるだろう。

もちろん、月島さんの意見も尊重しないとイケないけど。そんな月島さんの返答はと言うと……。

「あつ、ご、ごめんなさい……。私、キーボードしか弾けなくて……」

「えっ!?で、でもさっき楽器は少しできるって……」

「それはその、言い方が悪かったです……。ごめんなさい」

「い、いやいいよ。けどそうか、キーボードか……」

キーボードのパートには有咲がいるからな。いなかったらバンドに協力してもらいたかったんだが、仕方ない。ここは潔く、俺の方から手を引くしかないな。

「落ち込まないでください、成川君。きつとすぐに、ドラムを引き受けてくれる人も見つかりますよ」

「月島さん……そうだな」

焦ったところでどうにもならない。打てる手を確実に打っていかないと、結果は出てこないからな。それが俺のやるべき事なんだよな。

「私の方でも、ドラムやってくれる人、探してみます。少しでも成川君と戸山さんの力になれるなら、私も協力しますよ」

「いいの!?助かるよ!」

「もちろんですよ。成川君がここまで必死になってるのを見たら、私も放っておけませんよ」

クスリと笑いかける月島さん。バンドには協力してもらおう事は

きなかったが、心強い助っ人と巡り会うことができた。

俺はそのありがたさを身に染みて感じながら、いつか出会う5人目のメンバーについて想像を膨らませていた。

「あつ、そう言えば成川君」

「うん? どうした?」

「成川君にとっては初めてですけど……そろそろですよ、文化祭」

「あ……」

そうか。まだホームルームで話には拳がっていないが、言われてみればそんな時期か。ま、俺にとっては初の文化祭だけだな。

出し物決めて、役割分担して。当日までに準備して、全員が一体となって取り組んでいく。女子校とは言っても、文化祭は文化祭だろうし、楽しみではある。

「私たちには、もう恒例行事って感じですけど。高校になっても、クラスメイトは中学の時から一緒の子がほとんどですから」

「そうか……。持ち上がりだと、何となく新鮮味に欠けるって感じなのか」

「でも、やっぱり楽しみにしてしまうんですね、文化祭。あ、戸山さんも初めてじゃないですか? 花女の文化祭って」

「あ……確かにな」

「戸山さんの事だから、きっと楽しみにしてるんじゃないですか? フツ」

楽しみも何も……こいつを香澄に聞かせたら、どんな反応するかなんてわかりきっているんだけどな。

「文化祭! 楽しみ!」

「そう言うと思った」

で、案の定目を輝かせて興奮する香澄をよそに、俺は日直の日記を

書いている。授業も終わり、今は放課後だ。

「文化祭かく！クラスで出し物作って、みんなと一緒に他のクラスも回って……あ！それからライブも！」

「ライブ？」

「有志ライブ！体育館でライブできるんだって！毎年盛り上がるみたいで、私も出ようかなって思ってるんだ！」

「ああ、前に話してたやつか。今思い出した」

「って事は、当分は文化祭ライブに向けて練習することになるんだな。ライブを終えたばかりだったのに、また違う目標ができるとは。バンドへの関心がありまくってるな。」

「だったら、なおさら5人目のメンバーが必要となってくる。有志ライブだし、俺が協力できると思うんだが……それでも、見栄え的には女子のメンバーが欲しいところだ。バンドとしての形は作っておきたい。」

「……なあ、香澄」

「なーくん？どうしたの？」

「お前ってさ、バンドのメンバーの目処ってついてたりするか？」

「え？うくん……いないかも」

「だよな……」

「となると、やっぱり俺の方でも探していくしかないのか。香澄も人脈はあるだろうけど、今の感じだと進展がなさそうだしな。」

「って、本当お節介しか焼いてないな、俺は。ま、香澄のバンドのために応援するって決めたからな。一緒にバンドはできないが、やれるだけの事はサポートしてやらないと。」

「あつ！でもね、一緒に文化祭でライブしたいなうって思ってる人はいるよー！」

「え？誰だそれ？」

「さーや！バンドはダメみたいだけど、せめて文化祭では一緒に歌いたいなうって！」

「沙綾、か……」

確かに、沙綾は放課後は家の手伝いで時間もないしな。バンドはで

きなくとも、文化祭と言う場であれば、即席だろうと一緒にバンドは組むことができる。香澄も、沙綾と一緒にバンドがやりたいと言ったからな。

だが……俺はその申し出に、沙綾が素直に応じてくれるとはとても思えなかった。沙綾には、何か大きく深い事情がある気がしていたから。それも、音楽に関する事で。

前からずっと、音楽の話題になると影を見せている部分があった。向こうからする事もあったが、特にバンドの話になると……無意識に避けようとしている傾向が強かった。

気にはなっていたんだ。けど、無理について掘り返すような事でもない。だから今まで、ずっと触れないようにしてきたんだが……何かあるのは確かだろう。

その何か沙綾の中に根付いている以上、いくら香澄の頼みとは言え、受け入れてくれるようには思えない。それが目に見えているから、俺は気がかりだった。

「……なーくん？」

「ん、あ、いや、何でもなし。沙綾に頼むのはいいだろうけど、やっぱり練習の事とかも考えたら、時間取れるのかな……ってさ」

「だったら、昼休みでも練習するよ！それでもダメなら、放課後はさーやの家に行ってお手伝いして、少しでも練習できるように時間作ってもらおう！」

「はは……香澄は本当、当たって砕けろ！ってやつだな。店の迷惑になるとか、そう言うの何にも考えてないだろ？」

「うっ……だ、だからその、練習するのにさーやをお借りします！って言う、お願い？」

「手伝ってやるから沙綾と練習させてくれて事かよ……」

何にせよ、香澄はこういうやつだ。思い立ったらまず行動する。その過程で壁が立ちふさがらるなら、その時考えてまた動く。香澄がその気なら、まあ何を言っても仕方ないと割り切るか……。

「って、もうこんな時間かよ。香澄、話はまた今度だ。SPACEのバイトもあるし、日誌だけ返して行かないと」

「そっか。じゃあ私は有咲の蔵で練習してるね！」

「わかった。終わったら一応連絡するからな」

話に夢中で、時間を忘れてしまっていた。俺は急いで日誌を書き上げ、職員室へ返却しに行く。返却自体は何事もなく終わったので、その足で昇降口へ。

この感じだと、少し急ぐ必要があるか。ま、多少の遅刻なら、俺なら大目に見てくれ……ないだろうな、さすがに。そう思いながら、靴を履き換えてると……。

「げっ、マジか……。雨降ってきやがった」

小雨だが、地面に水たまりを作っていた。波紋が広がり、曇り空を滲ませる。今日の予報だと、一日中晴れるはずだったんだけどな。まさか雨が降るなんて思ってもいない。

そう思ってる生徒も多かったんだろう。傘を持ってきてなくて、屋根の下で立ち往生している姿がいくつも見られた。

「折り畳み傘持ってきてよかったな……ん？」

俺は鞆から折り畳み傘を取り出し、邪魔にならないように広げようとして……困り果てたように天を眺める、見慣れた少女の姿を見つけた。手には傘も持っていない。俺は近づいて、声をかける。

「よっ、沙綾。傘なくて困ってるのか？」

「あ……翔。アハハ、実はそうなんだ……」

やっぱりか。気まずいように苦笑して、沙綾は隠すことなく困っていることを認めた。

「香澄たちは？俺より先に帰って行ったはずだけど、入れてもらわなかったのか？」

「うん、見かけたよ。でも……わざわざ入れてもらうのも、みんなに悪いかな……って。ほら、方向違うしさ」

何て健気なんだよ、沙綾は。優しさの塊なのか。いくらなんでも、自己犠牲が過ぎるだろうが。

「だから、気にしなくてもいいよ。もう少し雨が止むまで、ここで待ってるから」

「気にすんなくて……そんなの、放っておけるわけないだろ。店の事

もあるだろうし、俺の傘に入れてやるから」

「いいって。早く帰らないといけないのはその通りだけど、そのために翔を付き合わせるわけにはいかないよ」

頑なに態度を崩そうとしない。それだけ優しいってのはわかるが、それは逆に言えば……。

「……いいから入れって。止む目処なんてないし、もし本降りになってきたらどうするんだ？」

「その時は……その時かな」

「沙綾って、意外と頑固だな」

「……そうでもないよ。そんなに自分に素直になれる事なんて、全然だから」

そんな風に答えた沙綾の横顔は、少し曇っていて……それでいて何故か、どこか違う場所を見ているような気がした。

何かを重ね合わせて、言い聞かせているような、そんな感じ。今の返答も、どこかずれていたような気がする。

「……ま、何でもいい。とにかく、方向がどうか、迷惑とか、そんな事言わずに傘入れ。俺は今日バイトでSPACEに行くから、そのついでって事で……いいだろ？」

「バイトって……え、あ、ば、バイトだったの？／／／」

「言おうとしたけどな。タイミングの問題ってやつだ」

「な、何でもっと早く言ってくれなかったのさ……。何か、今になって恥ずかしさが……／／／」

ここで赤面するなよ。俺も何だか恥ずかしくなってきた。

「そう言うわけだから、途中までは一緒って事で」

「じ、じゃあ……お願いしようかな？」

「もちろんだ。ここで沙綾を置いて行くなんて鬼みたいな事、できるはずないからな」

って訳で、俺は沙綾と一緒に傘に入り、雨の中を歩き出した。濡れた地面が靴に触れ、ジワジワと足元を侵食していく。靴下が濡れる感触が、妙に気持ち悪い。

が……それ以上に俺が気にしているのは……沙綾との距離感だ。

「……………」

「どうしたの、翔?」

「い、いや何でもない」

近すぎる。俺の傘は折り畳みのもので、1人用だ。大きさだって普通の物とは小さいし、そこに2人入ろうとすれば、自然と距離感は近くなる。そうしないと、傘からはみ出して雨に濡れるからな。

そのせいで俺は、沙綾とくつつきながら傘をさしている。桃色の髪は頬を撫で、雨だつて言うのに制服越しに沙綾の暖かな体温が伝わってくる。

沙綾が雨に濡れてないかを確認するのに視線を向けると、その度に沙綾と目が合ってしまう。こんなにも至近距離で沙綾に見つめられたことないし、マジでドキドキする。

てか、何だ……まず沙綾と相合傘してるってのが、シチュエーションとしてどうなんだ!?こんな可愛い女の子と、同じ傘の下一緒なんだぞ?!正気でいられねえ。

息遣いとかも普通に聞こえてくるからな。早くやまぶきベーカーリーについてほしいような、そうじゃないような……………!

「あれ、もしかして緊張してる?」

「いや、そんな事ない!お、俺がそんな、緊張なんて……………」

「ふくん?そんな事言つて、目が泳いでるよ?」

「あ、いや、これは……………/ /」

それでこのからかいよう。耳元にダイレクトに沙綾の声が響いてくる。成り行きでこうなったが、もうメンタルが持ちそうにありません。

「アハハ、冗談だよ。言い返せないくらいに余裕なさそうだね?」

「正直に言う……………ないです」

「大丈夫だよ。実はその、私も……………こんな感じだけど、翔と一緒に傘入ってるの、緊張してるから……………/ /」

ああ、もう何だよ!ここで顔真っ赤になるのは反則だつて!ちよ、

本当にどうしよう!?!俺このままだと、普通にバイトできそうにないんだけど!?!な、何か話題を……。

「そ、そうだ沙綾!もうすぐ文化祭だよな!」

「え……あつ、そ、そうだね!確かに、言われてみれば、もうすぐ文化祭なんだ……!」

まさかの、着地点がここになるとは。これも、文化祭の話をしてくれた月島さんのおかげだな。このまま緊張ムードで帰るのも、何か違う意味で気まずいし。

「沙綾は中学からずっと花女の文化祭見てきてるんだろ?どんな感じなんだ?」

「どうって言われてもな……。毎年楽しい……じゃ、答えになってない?」

「例えば、どんな出し物するかとかさ。俺もそうだけど、香澄もこの文化祭の雰囲気ってのを知らないからさ」

「雰囲気かく。そりゃあもう、どこもお祭り騒ぎって感じかな。色んなクラスが、色んな出し物するしさ。普段はできない恰好したり、それでみんな写真撮ったりしてさ」

「へえ。沙綾も、何かコスプレって言うか、そう言う事したのか?」
「まあね。去年だと……クラス全員で動物の格好になったり?」

何だそれ。イメージしたら、すぐくよさそうな感じだったんだが。そんな事してた子たちの中に、俺なんか入ってもいいんだらうか。

とは言え……まあ、文化祭自体は別に普通の学校と大差ない。女子校だからって、特別なものと言うわけでもなさそうさ。

……俺がコスプレするとかになったら、少し考えてもらわないといけないけどな。

「後、有志のバンドがライブするってのもあるみたいだよな。結構盛り上がるってのは、香澄から聞いてるんだけど」

「ライブは……うん、盛り上がってるよ。何て言うか、すごく楽しそうで……ちよつと羨ましく思っちゃうかも」

「羨ましい……」

「あつ、羨ましいって言うのは、楽器弾いてる姿とかかっこよくて、何

だか憧れるなくって意味。さすがに、バンド組んで出場するのは、私には無理っぽいし」

「……そっか」

やっぱり、どうも何か抱え込んでいるみたいだ。今も、どこか受け答えがぎこちなかったしな。

それに『羨ましい』と言った事も少し引つかかる。沙綾は本当は、バンドをやりたいがっている……？

「……その有志バンド、香澄も出るつもりなんだ。有咲にりみ、たえも一緒に。俺も頭数に入れてると思うけど」

「そうなんだ！クライブでの演奏、すごくよかったから、文化祭の時も絶対見に——」

「そのメンバーの中に……香澄は、沙綾も入れようとしている」

「……っ!？」

顔が引きつった。雨の事も見えなくなっているのか、後ずさって制服の一部が雨に当たって濡れてしまっている。

「私を、バンドに……!？」

「香澄は、どうしても沙綾と一緒に、文化祭のステージに出たいみたいだ。バンドは、店の事で忙しいから諦めているが……だからこそ、こういう場で一緒になって歌いたいんだとき」

「そ、それは……」

明らかに動揺している。俺は濡れている沙綾に傘を近づけ、雨風を凌ぐ。再び距離が近づいたが、沙綾の表情は優れない。

「きつとそのうち、香澄から誘われるはずだ。けど沙綾は、それが嫌なんだだろうなって事を俺は薄々感じている。何か、バンドって言うか……そう言う事に対して、色々思う事があるんだろ？」

「……そんな事ないよ。気のせいだって」

「隠さなくてもいい。前から気にはなってたんだ。音楽の話題とか、今みたいにバンドの事とか。結構避けてるような感じがしてたからな」

「……そう、かな？私は、そんなつもりなかったんだけど。翔が気にするような事は、別に何も無いよ」

「だったらいいんだけどな。でも、もし何かあるんだったら相談してくれ。香澄は、必ず沙綾を誘ってくるはずだからな。その時、自分一人で何かに悩むよりは、誰かと一緒に悩む方が、よっぽど気が楽だからな」

「……うん。そうかもね」

香澄は、沙綾の事情に何も気づいていないだろう。だからこそ、断ったところで簡単には引き下がらない。

そうなった時、沙綾は香澄との友情と俺たちには見えない何かとの間で葛藤し、苦しむはずだ。その苦痛を、少しでも肩代わりしてやるのなら……せめて、話を聞くだけでも、力になってやりたい。

その何かを、沙綾が俺に話してくれるのを、今はただ待つしかない。

「……どうやら、もう着いたみたいだな」

「えっ？あ………本当だ」

やまぶきベーカリーの看板が見えた。大きなガラス張りの外観からは、中のパンもうかがえる。まずは沙綾を送り届ける事ができたな。

「話もまだ途中だけど……俺はもう行くよ。そろそろ急がないと、バイトに間に合わない」

「あ………なら、またパンの差し入れ持つてく？すぐに用意するけど」
「いや、今日はいいかな。本当に間に合わないかもしれないし……」

ここからSPACEまで、まだ少し距離があるからな。すぐにでもここを出ないと、集合時間に遅れてしまう。

「そっか……。それなのに、わざわざ私を送ってくれて、ごめんね？」
「何言ってるんだ。方向だって同じだったんだし、沙綾が謝ることなんてない。って言ってる時間もないんだけどな。悪い、本当に行くわ」

「あ、うん。その………今日は、ありがとね」

「……ああーじゃあ、またな！」

俺は沙綾と別れ、雨の中を一人走り出す。バシヤバシヤと水が弾

き、しづきがはねて俺を濡らす。

「……ありがとう、か」

ふと後ろを振り返る。店先にはまだ、俺を見送ってくれているように見つめている沙綾がいた。その表情には、複雑な何かがかもついていた。

ずっと、頑なに態度を崩そうとしなかった沙綾。俺が何を話しても、ずっと隠し続けてきた。我慢して、封じ込めて。

それは、ある意味で優しさの裏返しなのかもしれない。方向が違うからと言う理由で、沙綾が傘を借りるのをためらっていたように。

けど、その優しさから生じる、あの態度は。

きつと。

素直に甘えられないって事なんだと、俺はそう思う。

文化祭の季節がやってきた。

1年に1度、学校中が華やかな色を見せる時だ。生徒たちも学業を忘れ、自分たちのクラスの出し物を成功させるために大盛り上がり。ま、それだけじゃないけどな。

他のクラスを見て回ったり、友達とワイワイはしゃいだり。文化祭でしか味わえない興奮は、いくらでもある。

年に1回と言う特別感も、文化祭を楽しみにしてしまいう一つの理由なのかもしれない。

さて、そんな文化祭だが、何もクラスで好き勝手に決めていいわけじゃない。文化祭を進めるにあたって、各クラスから代表で文化祭実行委員を決めなくてはいけない。

実行委員は3名。内2名は副委員となる。各クラスの実行委員は、クラスをまとめ上げるのはもちろんの事、逐一行われる文化祭の打ち合わせに参加しなくてはいけない。

正直、リーダーシップでもない限り、引き受けるなんて面倒な役職だ。そんな実行委員だが、俺たちのクラスから選ばれたのは……。

「……はあ!? 香澄が文化祭の実行委員!? おいおい、大丈夫か!？」

「ええっ、何で!? 大丈夫だよ! 副委員はなーくんとさーやだし!」

「何だ、山吹さんが一緒なのか。なら、安心だな」

「私とさーやで反応違う!？」

まさかの香澄だった。と言うか、真っ先に香澄が立候補した、と言った方が正しいか。

当然（と言うと香澄に失礼かもしれないが）他のクラスメイトは反対。いい加減な言動も目立つし、不安要素はあったからな。

ま、結局は香澄の猛アピールで、言いくるめる事に成功したけどな。さすが香澄だ。

で、副委員だが……沙綾と、まさかの俺が選ばれた。どうせならと実行委員の推薦で決める事になったのがアウト。まず俺は一瞬で採用されたし、沙綾はどちらかと言うと、周囲の支持が強かった。

で、俺と沙綾は香澄と一緒に実行委員を務めることになり……その旨を、別のクラスの有咲に説明していると言うわけだ。場所はまあ……いつもの中庭だ。

「有咲ちゃんも、クラスみんなと同じ反応してる……」

「そりやそうだろう。だって香澄だろう？ とんでもないことになりそうで怖い」

「えく!? そこまで言わなくても……」

いや、悪いが有咲の気持ちは十分わかるぞ、香澄。てか、そいつに振り回されるこつちの身にもなってくれ。

「それで、A組は何やんの？」

「うちのクラスは喫茶店だよ。うちのお店のパンを出すことになったんだ」

「へえ、いいじゃんそれ」

「と言っても、パンを推してくれたのは牛込さんだけだ」

あの時のりみの熱の入りようはすごかったな……。学者か何かの演説みたいになってたからな。クラスみんなも、若干引いてたような気がしなくもない。

「沙綾ちゃんちのパン、おいしいから〜!」

「俺も。何回か食べたことあるけど、どれもおいしいんだよな。また時間あれば、その時は買いに行くよ」

「アハハ〜。そこまで褒められると、何だか照れちゃうな〜? / / / / やっぱ嬉しいのか、得意げな様子だ。ま、おいしいのは確かだし、俺も最近やまぶきベーカリーのパンは全然食べてないからな。この

前の雨の日も、時間なくてパンもらいそびれたし。

「ね、みんな。ちよつといい?」

「どうしたの、おたえちゃん?」

「みんなに聞いて欲しい曲があるんだ」

会話に混じってこなかったたえが、いきなり曲を聞いて欲しいとせがんできた。手にはいつもの青いギター。それ以外には何も見当たらない。

「曲? たえ、ここで弾くのか?」

「そうだよ？えつと……」

何回か音を鳴らした後、たえは演奏を始める。と言っても、ワンフレーズだけの短いものだったが。

けど、なかなか聞きごたえがある。既存の曲のフレーズ……と言うわけでもなさそう。聞き覚えもないし、オリジナルか？

「すごいすごい！何の曲？」

「朝、お風呂で思いついたの」

「え、たえが作ったって事か？」

「そうだよ。私、作曲のセンスあるかも」

自分で言うなよ。だが、たえも曲を作れるとなると……強者ぞろいだな。りみも曲作ったことがあるんだしな。

「わあ……！素敵な曲だね、おたえちゃん！」

「花園さんも曲作れんのかよ……。すごいな」

「有咲は何かできないのか？」

「いや、できねえよ。曲なんて、まず何をどうすればいいのかわかんねえし」

だよな。俺も曲は作ることできないし、どんな風に組み立てていけばいいのかもわからないからな。素直に尊敬する。

「簡単だよ。自分が弾きたいメロディーを、音に乗せて奏でるの。フン」

「フンじゃねえよ。調子に乗るな」

「あ、でも曲もいいけど、今は文化祭のライブに向けて練習だよね？」
「曲の話はたえから始めたんだろうが」

そう。文化祭の出し物の事や、実行委員の事で盛り上がっているかもしれないが、俺たちはそれだけじゃない。毎年有志のバンドを募って行われる、ステージライブがあるからだ。

当然、香澄は出場する。前にも言ってたしな。そのために練習しないといけないが、そこに実行委員の仕事も上乘せされてくる。香澄はともかく、俺はかなりハードな未来しか見えない……。

「……あつ、そうだ！ねえねえ、なーくん！」

「……何か嫌な予感しかしない」

「そんな事ないよ〜!きつとキラキラするよ〜!」

本当かよ。まず香澄語が出た時点で怪しきしかないが、まあそんなことを言っても仕方ない。どうせ振り回されるのがオチなんだ。だったら腹をくくって話を聞いてやる。

「……わかったよ。で、話って何だ?」

「さっきおたえが弾いてた曲なんだけど、あの曲を文化祭で演奏しようよ〜!」

「「「えっ!?!」」」

ほら見ろ、ロクなもんじやない。簡単にやりたいと言うが、こいつはそれがどういうことなのかわかってるのか?

「え、えっと、香澄ちゃん……!」

「それはさすがに無理あるだろ!まだワンフレーズしかなかったぞ?!歌詞は!?残りの曲は!?それを文化祭までに仕上げ、練習して、間に合わせましょうって言ってんだぞ?!」

「右に同じく」

たえは便乗するな。が、俺も有咲が大方言いたい事を言ってくれたから黙っておく。さすがはツツコミのスペシャリスト。

が、香澄はキョトンとした顔をして、

「うん、わかってるよ?だから、有咲が言ってくれたみたいに、曲を完成させて、練習すればいいんだよね?」

「いや、だからあ……。簡単に言うけど、時間とか大丈夫なのかって言うてんの。それに、香澄は実行委員なんだろう?体持つのかよ」

「持つ!多分!!」

多分を自信満々に言い切られても困る。

「それに、私1人じゃ無理かもしれないけど……有咲にりみりん、おたえになーくんもいてくれるから!」

「うん。私も手伝う」

「いや、他力本願かよ……。ま、仕方ないか」

「私も、この曲をみんなで、文化祭で演奏したいな!」

「ったく、香澄は本当、恥ずかしいセリフを簡単に言いやがって……。わかったよ、私もやってやるよ」

「お、珍しく素直」

「その一言が余計だ!」

やっぱりいつもの有咲だった。

「じゃあ、まずは曲を作っていかないといけないな。そうじゃないと、練習をするにもできないし」

「私、キラキラでドキドキするような曲にしたい!」

「ちよつと待った!まず始まって第一声がそれってどうだよ!?先行きが思いやられるぞ!」

「そうは言っても。曲作りなんてどうすればいいのかわかんないし……。有咲あ〜!」

「ちよ、困った時に抱き着いてくんない!」

手掛かりはたえの作ったワンフレーズのみ。そこから、どのように曲を展開していくか。そのメロディーにどんな歌詞を乗せるか。そもそも、曲のコンセプトをどうするか。何をするにも、とっかかりがないからな……。

「だったら、作詞とかどうかな、香澄ちゃん?作曲なら、私とおたえちゃんがいるから」

「作詞!いいかも!!」

「いや、それは止めた方がいいって牛込さん!絶対香澄語になる!」

なりそうだな、本当。ま、そいつを後で俺たちが修正すればいいだけだし、やるだけやらせても問題はなさそうに見えるけど。

「バンド名も考えないと。ステージに出る時、私たちの事をみんなに紹介しないと」

「そっか。おたえの言う通りかも」

「やる事いっぱいだな……。歌に名前に、練習まであるのかよ……」

何にせよ、これで次の目標は決まった。文化祭のライブを成功させるために、バンド活動に力を入れていく。もちろん、クラスの出し物もな。

「ん?てか、有咲にだって、クラスの出し物あるだろ?そっちはどうするんだ?」

「ああ、別に?そう言うの面倒くせーし。やりたい奴に任せておけば

いいんだって」

「でも、バンドの事は真剣な有咲って……もしかして、バンド好きなの？」

「ち、ちげーよ！勝手に決めつけんな！／＼／＼」

たえ、ナイス。んで、有咲は必ずと言っていいほどツンデレが入るな。

「……ん？」

そう言えば、さつきから沙綾が会話に一切参加してこない。黙り込んで、何かを考えているみたいだった。

「沙綾？どうかしたのか？」

「あ、ううん。えーと、みんな頑張ってるんだな〜って思ってる」

「ああ。色々あると思うけど……応援してくれよ」

「わかった。文化祭ライブ、楽しみにしてるね」

何事もなかったかのように、沙綾は明るく振る舞う。そのまま香澄たちの会話に戻っていったが、やはり違和感があった。

この前の雨の日の沙綾が、どうしても頭から離れなかった。

「うーん……」

各クラスが文化祭に向けて動き始めた。休み時間や放課後になると、教室や廊下が文化祭一色に染まりだす。

物を運んだり、打ち合わせをしていたり。そんな景色が、そこらじゅうで見ることができた。

そんな中、有咲は1人、階段の踊り場にしゃがみ込んで、ノートを広げていた。教室は文化祭の準備で場所がない。廊下も人通りが多く、結局落ちつける場所と言えば、ここしかなかった。

「何かな……。これだっと思うようなのが、全然出てこないんだよな

……」

「こんなところで、何してんの？」

「うわあっ!？」

集中しきっていた有咲は、声をかけられたことに驚いてノートを落とす。慌ててノートを拾い、誰だろうと顔を上げると……沙綾だった。

「そ、そんなにビックリしなくても……」

「い、いや、今のは驚くから!」

(えく……。私、そこまで驚かせたかな……。?)

たまたま見かけて声をかけただけだったが、予想外の反応で沙綾の方も戸惑ってしまう。と、沙綾はノートに目を落とし、有咲の横に座って中身を見る。

「何してんの？歌詞考えてた？それとも、バンド名の方？」

「……バンド名の方。キラキラ何とかとか、ドキドキ何とか、になったら困るし」

「あはは、香澄ならやりそう」

だからバンド名なのかと、沙綾は納得する。香澄は作詞、他の2人は作曲。何だかバンドみたいだ。

「……………」

バンド……か。

「ね、どんな名前考えたの？見せて見せて」

「ま、まあ山吹さんならいつか……。まだ微妙なのしかないけど……」

「どれどれ？……なかなかいいじゃん！そんな事ないよ!」

「そ、そう？ふくん……」

ノートに書かれた候補を確認していくが、どれも可愛らしい物ばかり。微妙と言っているが、沙綾はそんな風には全然感じない。むしろよさそうな物も。

「ほら、これなんかいいんじゃない？ポップンって、可愛いと思うけど」

「えっ、マジか……！へ、へえ……」

嬉しそうにする有咲を見て、沙綾も可愛らしいと微笑みを向ける。それに気づいて慌ててごまかそうとするが、その仕草もまた、ぎこちなくて面白く感じていた。

「うん、ポップコーンみたいで楽しいかも」

「さらっと入ってくんな」

いつの間にか、たえが合流。しゃがみこんでいた2人とは対照的に、壁に背をもたれかけて有咲のノートを見ていた。

「てか、2人はここで何してんの？山吹さんって、副委員だろ？クラスに戻らなくてもいいの？」

「あー、それはね……。あつ、帰ってきた」

階段を上ってくる、2人の人影。たえは手招きして、その人物を呼ぶ。

「香澄、お疲れ〜」

「あー、みんなで何してるのー？」

「香澄ちゃんと買い出しに行ってきたよー」

買い物袋を手に抱え、香澄とりみが戻ってきた。それなりの大きさだが、有咲にはその中身を伺うことができない。

「姿が見えないと思ったら、外にいたのか。てか、買い出しって何買ってきたんだ？」

「エプロンと、後ワッペンとか缶バッチとか。はい」

たえが袋から缶バッチを取り出して有咲に渡す。イラストが星だったのは、どうせどっかの誰かさんが選んだからだろうと、有咲はそう結論付ける。

「これからうちに集まって、喫茶店で使うエプロンを作ろうと思ってね。ほら、放課後は部活ある人もいるし、できる人で作業した方がいいかなって」

なるべく負担はかけたくないと、沙綾が提案したものだった。それに協力してくれたのが、いつものメンバーたち。

「あ、よかったら、市ヶ谷さんも来ない？」

「な、何で私も……？クラス違うんですけど……」

「お昼のメンバーが集まるんだし、市ヶ谷さんもどうかなって。都合が悪いなら、無理しなくてもいいけど……」

「べ、別に都合は悪くない！ま、まあこのままここにいる暇だし？バンド名も思いつかねーし……」

何だかんだで有咲にも協力してもらえらることになり、手伝ってくれ
る人が増えた。これなら、今日中には終われるだろうと、沙綾は安心
して立ち上がる。

「それじゃ、決まりだね。よろしく、市ヶ谷さん」

「お、おう」

沙綾の手につかまり、有咲も立ち上がる。と、ここで香澄がある事
に気が付く。

「あれ？けど、なーくんは？教室にいるの？」

「え？見てないよ？一緒じゃなかったの？」

「ううん。私たち、てつきり学校にいるのかと思って……」

「あいつ、先に帰ったんじゃないの？」

「それはない。翔、手伝うって言ってたから。SPACEのバイトも、
今日はないよ」

だったら、一体翔はどこに行ったのか。見当もつかなかったが、と
りあえず一旦教室へ。香澄はその間に、翔に電話する事に。

別の作業を続けている人には、沙綾の方で事情を説明し、先に帰ら
せてもらう事にした。香澄とりみは既に準備できていたため、たと
有咲、沙綾は荷物をまとめ始める。

そうしている間に、香澄の電話も終わったようだった。気になる翔
の居場所はと言うと……。

「どうだった？」

「さっきまで先生に呼ばれて、職員室にいたんだって。出し物の音響
の事で、連絡があつたみたい」

「そうなんだ。それで教室にいなかったんだね」

「うん。だから、すぐに戻ってくるって。校門で待っていてくれて
言ってた」

翔がいないと聞いて、沙綾たちは何かあつたのかと心配したが……

特に何もなかったようで安心する。

別に何も気にすることもなく、5人は校門へと向かって行った。

「……すみません。俺、友達に呼び出されてしまったので、そろそろ失礼させてもらいます」

「いや、大丈夫だよ。むしろ、こうして直接報告に来てくれるだけでも嬉しいよ」

「いえ、何も結果が出てないのに……申し訳ありません」

「そこまで自分を責めなくてもいいよ。君がこの学校にいる条件だと言うのはわかっているが、簡単にいかない話だと言うのは、私自身よくわかってるから」

香澄が翔に電話をかけた頃、翔はある部屋にいた。職員室？いや、違う。そこは、学園長の部屋だった。

条件として課せられた、俺の使命の進行具合の報告。これまでも隙を見つけては密会していたが、まさか香澄から電話がかかってくるとは。今日はさすがにタイミングが悪かったか。

「それはそうと……さっきの話は、君の方から彼女にしておいてくれないかな？それでも意見を変えない場合は、やむを得ずにこちらでどうにかすることになるが……」

「……はい。直接、その理由を確かめてみます」

だが、俺がそれ以上に気にしていたのは、学園長から聞かされていた、ある話の事だった。あの病室の少女の事も大切ではあるが、今はこっちの方を優先させないといけない。

この話が本当だとしたら……俺は、それを止めないといけない。もし実行に移されてしまったら、その時は……。

「……では、失礼します」

「あまり、気負いすぎないようにね」

俺は外の様子に気を配りながら、学園長の部屋を出る。気遣いの言葉を投げかけられたが……そんな甘いことは言ってられない。

この学校にいる事は、本来あつてはならない事だ。その事実を捻じ曲げて、俺は今もこうしてここにいる。文化祭なんて浮かれてはいるが、俺の居場所ではないはずだ。女子校なんだから。

だが……それでも俺は、ここにいます。理不尽だと、自分勝手だと、道理じゃないと。そう言いたいのなら言わせておけばいい。

俺がこの学校にいる、本当の意味は……それだけ身勝手な、自己満足でしかない。

phrase 38 当たり前のように

「沙綾、みんな夕ご飯食べてくの？」

「そんな張り切り切らなくてもいいって。パンの試食するんだし。あ、でも香澄は泊まっていくんだけど……」

放課後。翔たちは沙綾の家に集まって、文化祭の準備に取り掛かろうとしていた。先に翔たちを部屋に入れ、沙綾は飲み物を持ちに来ていた。

「ねーちゃんばつかズルい！おれもパン食べたい！」

「さーなも食べたい！」

「ごはん食べられなくなるよ。ほら、二人とも宿題やった？後で見えあげるからね」

「えー、つまんない」

弟の純と妹の紗南に泣きつかれるが、沙綾は怒ることなく優しくなだめる。

「……ごめんね、母さん。それに父さんも。最近、文化祭の準備で帰るの遅いから……」

「心配しすぎ。お母さんももう全然平気だから。ね、お父さんもいるんだし」

「そうだぞ。うちの事は気にしなくてもいいから、沙綾は自分の好きな事をやりな」

その言葉はありがたい。両親は、自分の事を本当に気遣ってくれているとわかるから。けど沙綾は、素直にその好意を受け取ることができない。

あの時から、沙綾の中には強い決意が生まれているのだから。

「……ううん。私は平気だから」

「そうか？また、中学の時みたいに友達と——」

「ごめん。香澄たち待たせてるから、私もう行かないと」

「あ、ああ」

その後が続く言葉を拒みたくて。沙綾は強い口調で会話を切り上げて、自室へと向かう。

「……………」

もう、決めたんだ。私は、自分のわがままを通すつもりはない。そのせいで、迷惑をかけてしまう人がいるんだと、知ってしまったから。

私は、今のままで十分なんだ。

俺はやまぶきベーカリーには何回か来たことがある。

方向が違うし、頻繁にと言うわけにはいかないが、お世話にはなっている。パンもおすすそ分けしてもらおう事もあったし、一人の客としてパンを購入したこともある。まあ、少なからず足を運んでいるわけだ。

「……………」

そんな俺でも、沙綾の部屋に入るのは初めてだった。女の子らしい部屋で、美羽や香澄の部屋にいるのとは全然違う。

あ、いや、別に香澄たちが女の子らしくないって言ってるわけじゃないぞ!?それは完全な誤解だ!

「おい、翔。さつきから黙ってるけど、もしかして緊張してんのか?」

「はっ、だ、誰が緊張なんかするんだよ」

「わかりやすっ」

有咲にだけは言われたくねーよ!お前が一番チヨロいんだからな!?

「翔、何だかドキドキしてるみたい。熱でもある?」

「わざわざ触って確認するな」

「えっ、なーくんドキドキしてるの!?キラキラ!」

「そうじゃねえ。てか、くつつくな。有咲のところに行け」

「は〜い！あ〜りさっ！」

「こつちにパスするな！」

香澄の相手は有咲に任せておけばいいだろう。それに、さっきのお返しだ。存分に味わえ。

「くっ……こうなったら、牛込さんパス！」

「え、ええっ!?わ、私なの!？」

「じゃありみりんに……ギョ〜っ！」

「ひゃあっ!?!／／／」

何と言うか……カオスな空間だな。まだここに来て全然時間経ってないのに、ここまで場が荒れるのか？

香澄はハグ魔になってるし、たえはまだ俺の胸に手を当ててるし。有咲とりみは、絶賛振り回されている。りみが一番の被害者だけど。

てか、沙綾……早くこつちに戻って来てくれ……！

「お待たせ〜！飲み物持ってきて……って、何してるの?！」

「……何か色々あつて、こうなつた」

「原因は翔だけだな」

「待て、違つて言ってるだろ。変な事を沙綾に吹き込むな！」

「本当かよ?緊張してたくせに?！」

「こごぞとばかりに弱みを狙つてきやがつて……！有咲、後で覚えていやがれ。」

「アハハ……。翔、緊張してたんだ?！」

「女の子の家に遊びに行くことつて、昔はなかったからな……」

「おい、私の家はカウントしねえのかよ!?!蔵に来てるだろ!？」

「蔵は別だろ。それに、俺はまだ有咲の部屋には入つたことないんだぞ?！」

有咲の家には何回も来ているが、蔵だけしか見ていないからな。部屋には上がったことがない。

そう言う意味では、女の子の部屋にお邪魔するのは沙綾が初めてだ。りみの家にも、たえの家にも行った事はないからな。

「まあ、話はこの辺にして、とりあえずエプロン作り始めよつか。今日の間、できるところまで終わらせよう」

「それに、パンの試食もするんだよな」

「さーやの家のパン楽しみ〜♪」

と言うわけで、俺たちは買ってきたものを広げ、エプロン作りを始める事に。それぞれ違うエプロンを担当し、ワッペンや缶バッチを縫い合わせていく。

途中で談笑したり、休憩をはきみながら、作業を進めていくこと数時間。まずはエプロンを仕上げる事に成功。これで喫茶店で使う衣装は完成したな。

が、次は喫茶店を出すパンの試食だ。タイミングを見計らったように、沙綾のお父さんがパンを持ってくる。疲れた体にちようどよく、俺たちは喫茶店用に仕上げたと言うパンを食べていく。

持ち帰りやすいように、少し小さめに作ったとのことだが……うん。文句なしだ。味はそのままに、サイズを調整できている。沙綾のお父さんって、こんな器用にパン作れるんだな……。

それからしばらくして、今日は解散となった。エプロンは沙綾の方でまとめて、明日学校に持っていく事に。駆け足で説明したが、ま、何とか今日できる事は終わらせることができた。

「お邪魔しましたー」

で、今は店の外。もうすっかり暗くなり、沙綾は見送りに出てきている。

「エプロン、いい感じにできたね〜！」

「うん。これも翔のおかげだよ。翔って、本当に器用だよな」

「そうか？ありがとな、沙綾」

前に家庭科の授業でも言われたが、俺は女子の目から見てもかなり器用に物事をこなすらしい。エプロンの仕上がりも褒められたし、かなり貢献できた気がする。

「パンもおいしかった〜。特にチョココロネ〜♪」

「もうおなかいっぱいだよ〜」

「花園さんは食べすぎなんだよ……」

ま、お父さんも喜んでくれてたから、俺も何も言わなかったけどさ……。一応試食だし、もう少し加減はしてほしかったけどな……。

「てか、この後マジで山吹さんちに泊まってくのか、香澄？」

「うん。今夜は歌詞作り頑張る！」

と言う事らしいので、香澄はこのまま家には帰らずに、沙綾の家にお世話になるらしい。やる気なのはわかるが、わざわざ泊まってまで歌詞作りをするとはな……。

「てか、山吹さんが付き合う必要なくね？」

「だって、一人だと寝ちゃう……」

中学の時も、こいつテスト勉強で寝落ちしていたのを思い出す。それで翌日に泣きつかれるんだよな……。自分の勉強をしないといけなかったのに、大変だったよな……。

あ、でも待て。このままだと、またテストが近づいてきたら、教えてくれとせがまれそうだな……。うん、確実にな。

「明日休みだし、私は構わないから。今日はどこん付き合うよ？」

「本当に本当にありがと〜！さーやくっ！」

「寝てたらたたき起こしてやってくれよ？」

「ええっ!? そんな事しないよ、なーくん！」

嘘だな。そんな未来が見えたから、俺は沙綾に忠告したんだよ。

「私も翔に賛成。香澄の事だし、全然進んでなかったりしてな」

「心配なの？ だったら、泊まって行けばいいのに」

「えっ!? と、泊まりとか急に言われても……」

いや待て。どうしてそこで照れるんだよ。その反応は、普通男がするものだからな？

「え、何緊張してるの？」

「うつせえ、香澄！ わ、私はそんな軽い女じゃないんだよ！ じゃあな！」

結局、たえやりみも置き去りにしたまま、有咲は一人でズカズカと歩いて行った。こいつは、本当にツンデレがブレる事がないよな……。

「有咲、枕が変わると眠れないのかな？」

「アハハ、どうだろ。……でも本当、可愛いよね。市ヶ谷さんって」

「私も、たまにそう思うことあるかも」

「有咲って軽くないんだ。体重重いのか？」

「知らないけど、ああ言うのって女が男に言うセリフだよな」

「ああ、もう！みんな揃って止める！全部聞こえてんだよ！」

あ、振り返った。帰るんじゃないやなかったのかよ、寂しがり屋め。

「面白がってからかいやがって……もう知らねえ！」

「あ、待ってよ有咲ちゃん！」

「女の子が一人で夜道を歩いたら危険だよ」

「花園さんに言われたくねえ！歩かせてるのは誰だと思ってんだよ！」

「それに、もう遅いし、あんまり大声出すと近所迷惑だよ？」

「なっ、ぐ……言い返せねえのが腹立つ！」

ま、今回ばかりはたえの方が正論だしな。こいつはボケてるよう
で、たまに真面目モードに入るんだよな。

「じゃあ、私たちも行くね。またね、香澄ちゃん。沙綾ちゃん。翔君」

「有咲を一人にすると、悲しむから」

「わっ、私は別に、悲しいなんて何にも思っただけだし！」

「わかったわかった。じゃあたえ、有咲の事を頼んだぞ」

「私は親とはぐれた幼稚園児かっての！っておい、花園さん!?腕組ま
なくていい！恥ずかしいから……ちよ、放せー!!」

ま、半ば強引にたえに連れていかれた有咲は放っておくとして……
俺もそろそろ帰ろうかな。

「じゃ、俺も行くよ。またな、二人とも」

「えっ、なーくん帰っちゃうの？」

「当たり前だろ。俺は別に、ここに残る理由もないし」

「えく？せつかくだし、もう少しいたらいいのにく！だつてなーくん、
家に帰っても一人でしょ？」

「まあ、そうだけだよ……」

美羽はまだ病院だし、母さんは仕事で帰ってくるのは遅いからな
……。ここしばらくは、ずっと一人きりだった。

見かねた香澄が家に呼んでくれたり、逆に俺の家に来てくれたこと
もあつたけど……。ま、それはまた別の話だ。

「そう言う事なら、うちでご飯食べていきなよ。お父さんたちには、ちゃんと説明するから」

「え……いや、でも悪いよ。いきなりだし、やっぱり俺は——」

「いいって。香澄だって泊まっていくんだし、何も迷惑なんかじゃないから。ね?。」

「沙綾……」

だが、やはり返答には困る。が、そんな俺の事を気にも留めずに、沙綾は店の中に入り、両親に俺の事を伝える。すぐにOKの返事が出て、中に入るように促してくれた。

向こうも快く迎え入れてくれてるんだ。そこまでされたら、逆に帰る方が失礼だ。

まあ、そんなわけで、俺は今……。

「翔君、ごはんのおかわりはあるから、遠慮はしないでね」

「はい、ありがとうございます」

お邪魔したばかりの沙綾の家に、またお邪魔することになってしまった。

「うくん、さーやの家のごはんおいしくい！おかわりくださいーい！」

「ちよつと待っててね。今よそうから」

「お前は限度を考えろ。それで何杯目だよ？」

「えくつと……4杯目?。」

食いすぎなんだよ。人の家のごはんだぞ。もう少しセーブして食べると言う事も覚えてほしい。

「うちの料理、翔君に合っているかしら?。」

「はい、とつてもおいしいです」

「でしょ?母さんのごはん、すっごくおいしいんだ」

隣に座る沙綾が、母の料理をアピールしてくる。ちなみに今更だが、俺の右隣りが香澄、左隣が沙綾だ。

いつもは昼休みに一緒に食べているが、こうして人の家で食べるのはやっぱり慣れない。有咲の家の時もそうだったし。

「にしても、何か久しぶりに誰かの作ったご飯食べた気がするな……」

「お母さん、仕事が忙しいの?。」

「ああ、はい……。俺の両親、離婚してて、シングルマザーなんですよ。それに妹が病気で、今も入院してるんです。それで、ずっと働き詰め。家に帰っても、1人になっちゃって」

ポツリと漏れた、何気ない一言。だが、俺はこんな風に食卓を囲んで、誰かのご飯を食べるなんて事、久しぶりだったからな。

何か、家族の愛情って言うのかな……。そう言うの、別に母さんから貰っていないわけじゃないんだけど……。今日、俺はこの場所で感じた。

それが何だか、嬉しいようで悲しくもある。

「そう……。そう言う事なら、遠慮しないでうちに来てもいいからね？ 沙綾もお世話になってるし、いつでもいらっしやい」

「お気持ちだけでも嬉しいです。ありがとうございます」

いつも通り詰めってわけにもいかないからな。それに、いつまでも美羽が病院生活を送るわけでもない。家に戻ってくる日は来るんだから。

「でも香澄、よく食べるよね？ おなかすいてたの？」

「あー、香澄はな……」

「フライドポテトと白いご飯なら、いくらでも行けちゃうんだよ！ 歌詞作りのために、体力つけておかないと！」

昔から、その二つだけはよく食べてたんだよな。なのに、どうしても太らないのかと不思議に思ってた。ごはんは別だけど、フライドポテトは揚げ物だし。

そのくせスタイルはなかなかよかったりするし……。うん。ますます不思議だ。

「だからって、大食い大会に来たわけじゃないんだぞ。あ、お替わり貰えますか？」

「えく!? なーくんはおかわりしてるのにー!？」

「お前は十分食べただろ！」

「アハハ。翔たちって、本当仲いいよね。幼馴染なんだっけ？」

「散々振り回されてきたけどな」

俺は沙綾のお母さんに茶碗を渡し、会話を続ける。クスクスと笑う沙綾に、俺は香澄の話しようとして……。

何かがおかしい事に気が付いた。

何故か、沙綾のお母さんはニコニコしている。お父さんも、そう言えばさつきからチラチラと俺の様子を伺っているし。不審な目ではないんだけど。どちらかと言えば、興味ありげな目。

沙綾の妹の……紗南だったか。さつきから箸が止まってるし、何かを見ているようにも見える。

「……なあ、沙綾。さつきから、みんな様子が変な気がするんだけど」「うくん……やっぱり？ちよつとソワソワしているように見えてたんだよね？」

「そうかな？私は何とも感じないけど……」

ヒソヒソ声で沙綾に話を振ると、沙綾も違和感を感じていたみたいだった。おかしいと思っていたのは、俺だけではなかったみたいだ。

ん？香澄？えーと、あいつはまあ……知りません。

「……なあ、翔にーちゃん」

「おつ？純だったか。どうした？」

だが、その理由はすぐにわかった。そのきっかけは沙綾の弟である純の手によって……。

「さつきから仲良さそーにしているけどさ……翔にーちゃんって、ねーちゃんと付き合ってるの？それとも、香澄ねーちゃん？」

爆弾級の発言を、投げつけられたから。

「さ、さつきはーめんね。翔」

「い、いや大丈夫。俺は気にしてないから」

純の放った一言は、想像以上に強烈なものだった。別に付き合っているわけではないが、あんな風に言われてしまうと、嫌でも意識してしまう。

恥ずかしさのあまり、俺は撃沈。二人もそうだったのか、すぐに俯いて撃沈していた。おまけにそんな俺たちを見た沙綾のお母さんが変にいじるし、しばらく恥ずかしい時間が続いていた。

いや、本当に違うんだけどな。別に、あの二人を意識しているわけじゃないんだけど……。香澄もああ見えて可愛いし、沙綾に関しては文句の付け所も……。って、何を冷静に分析してるんだよ、俺は!?

「で、え、えっと……。歌詞の方はどう思う? 今日中に終わると思うか?」

「うくん、どうだろ? 香澄次第だから、まだ何とも言えないよね……」

その香澄は今、紗南をお風呂に入れていて。ついでに自分も入浴を済ませると言う、一石二鳥な手腕。最初は純も一緒に風呂に入れようとしてたけどな。恥じらいはないのか、香澄には。

あ、でも俺とは風呂に入ろうとしたことはないよな。何度も家に来たことはあっても、無頓着に風呂にまで付き合う事はなかった。香澄の家の風呂には入ったことあるけどな。

いや、わっかんねえ。あいつの基準がどこにあるのか、全然わっかんねえ。

「香澄がお風呂出たら、先に翔入っていいよ。私はその間に、香澄の歌詞作り手伝うから」

「本当助かるよ。飯だけでもありがたいのに、風呂まで使わせてもらえるなんて……」

「いいのいいの。遠慮なんかしなくてもいいからね?」

と言う事で、俺は風呂まで使わせてもらえる事になった。せつかく沙綾の家に残ったんだから、この際香澄たちの歌詞作りを手伝おうとは考えていたんだが……。まさかそこまでしてくれるとは。山吹家に感謝だな。

「あ、ありがとな。優しい家族でよかったよ」

「ふふん。うちに悪い人なんていないよ？」

「だ、だよな。アハハ……」

こんな感じで笑ってはいるが……内心は違った。これから風呂に入るのに、心臓がうるさく高鳴って止まろうとしなかった。

……俺だって、思春期の男子なんだぞ？女子の家の風呂に入る事に對して、何も感じないわけがない。てか、本当に大丈夫なんだろうな？

何とか気を紛らわせるために話をするが、どうも意識してしまおう。と、沙綾が俺の事をじーつと見つめてきた後……。

「もしかして……ちよつと緊張してる？」

「……まあ、一応男だし。女子の家の風呂に入るとか、香澄以外で初めてだし……」

言い逃れはできそうにないと判断した俺は、正直にそう答える。

「アハハ。翔、部屋に来た時も緊張してたって言ってたよね？」

「あ、あれはまあ……やっぱ、女の子の部屋に来るとか、今までなかったし……」

「わかるよ、その気持ち。私も男の人を家に呼んだことなんてなかったから。女子校だしね。これでも緊張してるんだよ？」

いつもみたい振る舞っているように見えていたが、心の中ではずっとハラハラしていたのか。全然わからなかった。

「でも、翔は大丈夫。何か、男の人だって思えないんだよね」

「って、おい!?それってどういう意味でしょうか!？」

「嘘だって、ごめん。でも、いつも一緒にいるから、翔は何だか変に意識しないって言うか……。いてくれるのが、当たり前前って言うか……」

何となく、言いたいことはわかる気がする。男の人としてではなく、一人の友達として見てくれている。信頼しているんだ。想像すると恥ずかしいけど。

けど、少し言い回しに悪意があるような気がしてならないんですが。

「……沙綾も、そう言う恥ずかしいセリフとか言っちゃうタイプだっ

たのか」

「えっ、い、いやこれは……その、そう言う意味じゃなくて！友達としてだからっ！／＼／＼」

「わ、わかってるよ。そんなに否定しなくてもいいだろ」

「う、うん……。でも、翔は高校になってから初めてできた友達だったからさ。入学式の際に、転びそうになった私を助けてくれたでしょ？」

「あつたな、そんな事。香澄にぶつかっただよな」

だが、その出来事がなかったら、沙綾と友達に……。いや、友達には、遅かれ早かれなっていただろう。

俺にとって、花女での『最初』の友達には……。なれなかったはずだ。

「だから、翔とは今まで結構一緒だったからね。今更、特別意識しないって言うのかな？」

「……ふーん」

「え、そのふーんって何？」

「いや？さつきは意識してたように見えたよな。って思っ」

「……っ！し、翔だって照れてたじゃん！／＼／＼」

「あ、あれはもう仕方ないだろうが！／＼／＼」

あの場で平常心を貫ける奴は、きっとそう言う事にとことん無頓着な人だけだよ！さすがに俺も、気がないってわけじゃ……。ってこれ言ったらまた誤解されるな。

ああ、もう。あのガキが余計な事言っただせいで、変な空気にしかならないじゃねえか……。どうすんだ、これ。

「さーや、出たよ！さーなの髪の毛乾かしてあげた！」

「えっ!? あ、そうー？着替え置いてあつたでしょー？」

と、浴室から香澄の声が聞こえた。おかげでこの空気も吹き飛び、少しずつ冷静になっていく。今だけは、お前の事を褒めてやるぞ、香澄。

「じゃあ翔。お先にどうぞ」

「……わかった。なら、遠慮なく使わせてもらうよ」

さっきのやり取りで、俺の緊張もどこかに行ってしまっただけだった。何の気兼ねもなく、俺はその言葉を口にする事ができた。

俺は沙綾に見送られ、浴室へと向かう事にした。

phrase 39 星の瞬きの中で

「市ヶ谷さんも牛込さんも、歌詞の案出してくれたんだって?」

「うん、2人の案をまとめて、歌詞にするんだ!」

「大丈夫か? 責任重大だぞ?」

「でも、頑張らないと!」

俺が沙綾の家の風呂に入ってから少し経った。沙綾も風呂に入り終え、全員が体を温めた。2人の寝間着姿に、俺はここにいてもいいのかとドギマギしてしまいそうになったが。

そんな事を考えていた時もあったが、いよいよ歌詞作りを始める事に。沙綾の部屋のテーブルにノートを広げ、準備は万端だ。

香澄の話だと、一から全てを作るわけではないらしい。りみや有咲の意見をヒントにして、歌詞を考えていくと言う事だ。それなら、漠然としていなくていいのだが……。

「本当に大丈夫なんだろうな? 中学の時のテスト勉強の事を思い出すんだが……」

「テスト勉強の時って?」

「香澄、すぐに寝落ちしてさ。俺が起こしても、全然起きなくて。で、次の日に泣いて勉強教えてくれって頼んでくるんだよ。その繰り返し——」

「わー、もういいよ、なーくん! その話はほら……えと、昔の話! 今の私は、前の私とは一味違う!」

違っていたら、俺も苦労しなくて済むんだけどな。

「ほくう? だったら見せてもらおうか。香澄の本領発揮ってやつを」

「もっちゃん! 戸山香澄、歌詞作りに全力で頑張ります!」

「フフ。あ、牛込さんのくれたメモ見て。『香澄ちゃん、フアイト』って書いてある」

「りみりいん、嬉しいよー! よーし、頑張るぞー!!」

「うう、頭パンパン……」

1時間ほどが経った。沙綾と俺もアドバイスを出しながら、香澄は真剣に歌詞を考えていく。

候補を書き上げ、その度に唸り、違うと思ったら斜線を引いて、また候補を見つけていく。その繰り返しだった。

が、さすがに香澄も疲れたんだろう。テーブルに頭を突っ伏して、今にも魂が抜けていきそうになっている。それは、ノートの並々ならない書き込みが物語っている。

「やるじゃないか、香澄。ここまで集中できるとは思ってなかったぞ？」

「あー！なーくん、酷いよ！私だって、やる時はやる！」

「だったら、期末テストの時もそれくらい頑張ってもらいたいな？」

「うっ、べ、勉強はちよつと……なーくん、お願い？」

「可愛く言っても、やるのは香澄だからな」

「そんなあ〜！」

ま、その時が来たら勉強に付き合ってやるけど。でも、今年からは俺の出る幕はないだろう。

何たって、学年トップが近くにいるんだからな。あのツンデレに、たっぷり教えてもらってくれ。

「でも、少し疲れたよね？二人とも、ちよつと休憩にしよつか」

「だな。香澄も頑張ったし、少しくらいはいいだろう」

「なーくん、一言余計だよ〜！」

ム〜つと頬を膨らませる香澄だが、全然怒ってるように見えない。むしろほほえましく見える。

「ハハ、悪かったって。しばらく休もうか」

「やったく休憩だ〜！あ、ねえさーや！ベランダから星見てもいい？」

「え？いいけど、どうして？」

「今日は星がよく見えるし、星を見たら何か思い浮かぶかも！」

「アハハ、キラキラドキドキできるかもね」

香澄らしい気分転換だな。あの時も、満天の星空が香澄に何かを与えてくれたんだから。とか言ってる俺も、あの時の星空に影響を受けているんだけど。

「……………」

バンドか。香澄みたいに、俺もあの時の興奮を体験したいって気持ちはあるんだよな。ライブを通じて、少しはわかったような気はしたんだが……それでも、まだ足りない。

もつと感じていたい。できる事なら、やってみたい。

けど、今は香澄たちの文化祭ライブが控えているからな。そこで足を引つ張らないように、俺も頑張らないといけない。

「ありがとー！さーやもなーくんも、一緒に見ようよー！」

「お呼びみたいだな、沙綾？」

「翔もね。行こっか」

空を指さして、香澄は手招きして俺たちを呼ぶ。子供っぽい仕草に苦笑しながら、俺った位は夜のベランダへと身を乗り出した。

風が少し冷たいが、見上げた先にある星空は、俺の中にある熱を呼び覚ました。幼い時の空には遠く及ばないが、それでも綺麗な景色が広がっている。いい星が見られた。

「……それで、どう？行けそう？」

「うん！名曲の予感♪」

「おいおい。まだ歌詞も全然できてないだろ。曲だつて完成してないのに」

「それはわかってるよ？けど……みんながいるから」

俺と沙綾を交互に見つめ、それから香澄は空に視線を戻す。今はここにいないなくても、自分の力になってくれる人たちの事を思いながら。「最初は一人でワーってなってたけど、なーくんがいて、有咲とりみりんがいて、おたえも一緒に！」

「香澄……………」

「それに……さーやも！」

「えっ、私も?」

「もちろん! 私は、多分一人のままだったら、こうして歌詞を考える事も出来なかったと思うんだ。でも、みんなのおかげで、バンドやりたいてって願い、叶えられそう! ギターも弾けるようになった! 私、それが本当に嬉しいんだよ!」

始まりは、何となくだった。小さな星のシールを見つけて、ランダムスターに出会って。そこから、夢が生まれて。

その夢が、後少しで叶うところまで来ている。5人目のメンバーを見つけ、バンドを結成し、SPACEのステージに立つと言う夢が。

それも、一人じゃ決して成し遂げられないものだった。香澄だけなら、絶対にできなかった。

「全く……よくそんな恥ずかしいことを、香澄は平気で言えるよな?」

「うーん、恥ずかしいのかな? 私、思ったことをそのまま口にしただけだよ?」

「だったら、その気持ちをそのまま歌詞にすればいいんだよ。難しく考えないでさ」

「難しく、考えないで……」

行き詰まっていた歌詞作りのヒントは、香澄自身のふとした言動によってもたらされた。考え込む必要はない。むしろ自然体だからこそ、見えてくるものもある。

香澄の中で、行くべき道が見えてくる。そんな香澄に対して、沙綾はさらに言葉を投げかける。

「香澄、ドキドキしてる?」

「うん……私、ドキドキしてるよ! みんなで歌って演奏したら、絶対キラキラになれる! 全部楽しい! 走り出したい!!」

「その気持ちを歌詞にして、まっすぐ歌に込めたら伝わると思うよ」
「そうかな?」

「大丈夫さ。香澄が言ったんだろ? みんながいてくれるって。後は、俺たちが整えてやる」

「さーや、なーくん……。そうだよね！私が歌いたい事、みんな詰め込んだらいいんだ！」

俺も沙綾に便乗して、つい香澄に助言してしまった。その言葉に励まされたのか、香澄の中でやる気の炎が燃え上がる。

だが、その炎はすぐに勢いを弱める。どうしたのか。そう思う俺の前で、何かを意気込んだように沙綾に向き合って……。

「……あのね、さーや。私、ずっと考えてたんだけど、さーやも一緒に文化祭で歌わない？」

「あ……」

ちらりと、俺の方を見る沙綾。前にした話が現実のものとなり、少し戸惑いの色が見えている。

けど、それは一瞬。沙綾は、すぐに香澄に向き合ってその気持ちを受け止める。

香澄は、ただ沙綾と一緒にライブがしたいだけだ。純粋に、そう願っていただけだ。だから、適当に流してしまうのは、香澄に失礼だと……沙綾はそう思ったのかもしれない。

沙綾はいつも店の手伝いで忙しく、バンドには参加できない。だからこそ、香澄は沙綾と歌いたい。文化祭の時だけでもいいから。ほんの少しでいいから。

「文化祭、一日だけでも。バンドに入るとかじゃなくてもいいから、さーやと一緒に歌いたい！」

「香澄……」

その願いに、沙綾は少し言葉を詰まらせた。香澄の頑張りも知っている。だから、協力したい気持ちもあるはずだ。

「……いいかもね。すっごく楽しそう」

ああ、そうだ沙綾。バンドとしての形だけじゃなくても、誰かと一緒に音を合わせる事は、楽しいって思える事なんだ。俺も、香澄たちの助っ人としてライブを経験して、バンドの楽しさを実感したんだ。

だから沙綾……どんな事情を抱えているのかは、俺には正直よくわからない。その答えを聞き出す時が、今じゃないんだって事も察している。

……けど。そんな風に。

悲しい目で、香澄を見ないでやってくれよ……。

「うん、絶対！ライブって、すっごく楽しいんだ！」

「……そうだね。文化祭は、まだわからない。でも……」

そこで沙綾の言葉が止まり、会話が途切れる。続きをじっと待つ香澄と、続きを探す沙綾。そんな二人を見てみると、無性に悲しくなる。その何かが、見えない隔たりを作っているようで。

「……いつか。いつか、きつと。香澄と一緒に、歌うよ」

「うん！約束だよ、さーや！」

星空の下で、二人の少女は約束を交わす。その願いが果たされるのは、いつの話になるのか。まだ、知る由もない。

「そう言えば、バンド名は？結局どうなったの？」

「確かに。有咲が中心に考えてたんだよね？」

「フッフッフ。それは明日のお楽しみだよ！楽しみにしててね！」

何だよ、もったいぶるのかよ。自信があるみたいだけど、どんな名前なんだろうな？まあ気にはなるけど、そこは明日までお預けって事で。

「……………」

さっきの約束が……いつか。本当に叶う日が来るのなら。

その時は、あんなに悲しそうな顔を、沙綾にさせるのは止めてやってほしい。

「じゃーん、見て見てさーや！私たちのバンドのチラシ、作ったんだー！」

翌日の事。俺たちは休み時間を利用して、学校中を回っていた。自分たちのバンドを紹介するチラシを貼って、アピールしていくためだ。

枚数制限はあるが、基本はどこに貼っても問題ない。他にも参加するバンドのチラシも、廊下の壁などに何枚も見られた。

「へえ、文化祭のためにこんなのも用意してたんだ」

「まあな。でも、チラシに関しては、俺たちはほとんど手伝ってないよ。りみと有咲、それにたえが作ってくれたんだ」

チラシの最終チェックしかしてないからな。それ以外の事は、全て3人の実績だ。イラストからバンド名、構成までやってくれたし……本当に助かる。

「そうだったんだ。可愛くできてるじゃん」

「ど、どうも……」

「有咲、照れてる？」

「うっせーぞ、花園さん。別に照れてねえし」

とか言いながら明後日の方向見るの止める。そんなところには何も無いからな。

にしても、よくできている。色遣いやイラストも可愛いし、目につきやすい。後は貼る場所も考えていかないとな。

「アハハ、このイラストも可愛い。市ヶ谷さんが描いたの？」

「あー、それは……」

「それはりみりんの力作だよっ！」

「いきなり出てくんな！」

さっきまで違う場所にチラシ貼りに行ってたはずなんだが。いつの間に戻って来てたんだよ。

「そうなの？牛込さんのイラスト、すごくいいよ！」

「えへへ、ありがとう」

沙綾も太鼓判だな。りみも褒められて、誇らしげにチラシを見つめていた。

「それで、バンド名は……『Poppin Party(ポツピンパーティー)』？」

「それ、有咲が考えたんだってさ。だろ？」

「い、一応提案しただけだし。それに、山吹さんがその……いいって言ったから」

これでようやく、香澄たちのバンド名が決まった。ポツピンパーティー。女子高生らしい明るくリズムミカルな名前で、香澄たちにはぴったりだ。

晴れて自分たちのバンドの名前を名乗れる……。そんな感慨に包まれていると、俺はチラシの中のあるものに目が留まる。

「……あれ？」

最終チェックの時には気が付かなかったが、よく見ると不思議な点がある。このチラシには、文化祭ライブには存在していない6人目のメンバーの名前が載っていたからだ。

「それと、さーや……メンバーのところ見て」

「メンバー？……えっ？こ、これって……私の名前……!？」

「昨日はあんな風に言われたけど……やっぱり私、さーやと一緒に文化祭ライブに出たいんだ。さーやも、私たちのメンバーだよ」

そこには、確かに沙綾の名前があった。曖昧にごまかされても、香澄の思いは強かった。チラシに刻まれた、その名前を見たらわかる。

喜んでいるのか。それとも、勝手にメンバーに加えられて、怒っているのか。ここからだど、沙綾の様子は伺うことができない。

俺は恐る恐る移動し、沙綾の表情が見える位置まで近づくと……。

「……っ!？」

驚愕で目を見開き、愕然とチラシを見つめている沙綾が、そこにはいた。喜びや怒りはない。信じられない、受け入れたくはないと言う、強い否定の感情。明らかな動揺と焦燥感だけが、今の沙綾からは感じ取れた。

「沙綾、大丈夫か？」

「……………」

「おい、沙綾？」

「……っ！え、ご、ごめん。ちよつとボーっとしちゃって」

ここまで周りが見えなくなるほど、沙綾にとっては衝撃的だったの

か。冷や汗が頬を伝い、心なしか顔も青ざめているように見える。

「……沙綾、やっぱり何かあるんだろ」

「そ、そんな事ないよ。私は大丈夫」

「嘘つくな。俺、前に言ったはずだよな。もし何かあるなら、俺に相談してくれって。一人で悩むなって」

「……うん。でも、平気だから。気にしなくてもいいよ」

どうしても、沙綾は口を閉ざしてしまう。そうやって封じ込めてしまったのは、貯まりこんだものが膨れ上がって、やがて空気のいっぴいになった風船のように……破裂するだけだぞ。

「よし、チラシ貼り頑張らなくっちゃ！行こう、りみりん！おたえー！」
「って、おい香澄！私を置いて行くんじゃないよー！」

香澄は俺たちを放っておいて、別の場所にチラシを貼りに行ってしまう。りみたちも香澄の有智を追いかけてしまい、残ったのは俺と沙綾だけ。

「……それは、俺にも知られたくない事なのか？」

「だから、何も無いよ」

「今なら、俺と沙綾の二人だけだ。他の人に聞かれる心配はしなくてもいい。それに俺は、ここでの事は絶対に口にしないって約束する」
「……………」

「今なら、俺が力になってやれる。言いたくないのはわかるが、このままだと、沙綾は強引に、何かに引きずられたままライブを迎えることになってしまうんだぞ。それでいいのか？」

「それはー」

「沙綾」

と、緊迫した俺たちをよそに、沙綾に声をかける女子生徒が。香澄ではない。有咲にりみでも、たえでもない。

いや……そもそも俺は、こいつの事を知らない。初めて見る顔だ。クラスメイトの顔くらい、さすがに覚えているからな。だが、こいつはそのどれでもない。

「っ、な、ナツ……！」

「知り合い、なのか？」

「……うん。まあね」

互いに顔見知りなのか。中学の時に同じクラスだったとか、そう言うつながりか……？

「何か……久しぶり。って、同じ学校なのに変だけど」

「……そうだね」

けど、どうも気まずい空気だな。前の同じクラスだっただけなら、喜んで懐かしそうに話し出すと思うんだけど。

この二人はその逆。顔を合わせにくそうにして、話し方もぎこちない。部外者の俺でも、過去に何かあったのだと確信できる。

「……そのチラシ、沙綾バンドやるの？」

「えっ？」

「よかった。やる気になって——」

「やらない」

彼女の言おうとした言葉を、沙綾は冷たく拒否する。こんなにも突き放した態度の沙綾は、初めて見た。

いつもの沙綾はもつと、明るくて優しいはずなのに。沙綾の抱えているものは、一体何なんだ……!?

「友達が勝手に書きちやって……ごめん」

「あっ……お、おい沙綾!?!」

そのまま彼女と距離を置くように、沙綾は足早に去っていく。残された彼女の事を、沙綾は見向きもしなかった。

「あ……えっと」

「行ってあげて？沙綾の友達なんですよ？」

「……ああ、悪い。また会った時は、少し話をさせてくれ」

「……うん、わかった。私、B組の海野夏希。A組の成川君ですよ？」

「そうだ。海野さん……だな。覚えておくよ」

俺は沙綾を追いかけるため、海野さんと別れて走り出す。去り際の悲しそうな顔が、やけに鮮明に脳裏に残る。

沙綾に隠されたもの。その手掛かりになるかもしれない、女子生徒。

文化祭に向けて少しずつ動きが見える中で、何か大きなものもま

た、動き出そうとしていた。

phrase 40 時間の重さ

「でき、最後にじゃーんでみんな飛ぶのってどう？」

「えー？ナツ、できんのそれー？」

「大丈夫だつてー！」

あの時の私——山吹沙綾は、浮かれていた。

まだ中学生だった私は、友達と一緒にバンドを組み、毎日集まって練習を繰り返していた。日に日に上達していくのを実感する自分の技術。周りの呼吸が噛み合い、私の音とシンクロする感覚。

何よりも、みんなとバンドができる事が、私は一番楽しかった。一緒にいる時間が、いつしか愛おしくなるほどに。それだけ、私の中でこのバンド——CHISP A（チスパ）が、大きな意味を持っていた。この時は、ナツとだつて普通に話せたんだ。さつきみたいに、逃げ出す事なんて何もなかったはずなのに。

「チスパの初めてのライブだし、やっぱかつこよく決めたいじゃん！」
「うん、そうだね。じゃあ、フミカとマユにも相談して見よつか？」

「だね……と、話したらいいところに！おくい、フミカ！マユー！」
「あ、お疲れー！」

私の元バンド仲間、フミカとマユ。もう全然顔見てないな……。

「ねえねえ、今マユと話してたんだけど、スタジオに行く前にシユシユ買って行かない？」

「えっ、シユシユ？」

「ライブでお揃いのつけたらよくな、って話してたの。ナツもそう思わない？」

「えー？スタジオの時間、間に合うかー？」

「いいじゃん、フミカ！可愛いかも！」

こんな風に、あの頃は。ナツと、フミカと、マユと。

「ナツもいいよね？」

「うん……しようがないな。じゃあ、ダツシユで行くぞー！」

「あ、ちよつと待ってよナツー！」

走っていくナツを、私が後から追いかける。フミカも、マユも、後

に続いて、笑いあつて。

本当に、楽しかったな〜……。毎日スタジオで練習して、ファミレスで課題点を見つけ合つて。学校では、仲良くおしゃべりしたり。バンドが、私たちをつなぎとめていた。そんな関係が、ずっと続くと思つていた。

でも……。

それは、過去の話なんだ。

もう、戻りたくても戻れないんだから。

「やっばいーマジでやっばいー!どうしよう〜!」

「うう、すっごい緊張する〜」

商店街のイベントなんだよ?大丈夫だって。リラックスして、落ち着こう?」

「そうは言つても、これが私たちの初めてのライブなんだよ、沙綾〜!」

この日は、商店街でライブを行うことになつてた。私たちの初めてのライブ。緊張で手が震え、ようやくバンドマンらしい舞台に立つことができているんだと、私は実感していた。

何よりも、ナツたちとここに立っている事に、私は心を動かされていた。あの日スタジオ前に買ったお揃いのシュシュが、より一層気持ちを高ぶらせる。

「今日まで練習頑張ってきたんだから、心配ないって」

この日のために、練習も毎日夜遅くまで頑張つた。できるだけ時間を見つけて、音を合わせて。やれるだけの努力は、全てやってきたは

ずだ。

「だ、だよね……！でも、挨拶飛ばしちやたらって思うと……」

「それは大丈夫だよ、ナツ！その時は沙綾がいるんだから！」

「うんうん。沙綾、よろしく！」

「ええっ!?フミカにマユまで!?それは無理だつてば！ちよつとナツ、頼むよ〜!」

この時は、初めてのライブの緊張をほぐすため、軽口を叩きあっていた。いつものように円満に笑いあつて、本番で成功させようとするために。

……この時は。

「も、もちろん頑張るよ！でも、親が見に来るとか緊張するね……！」

「うちもカメラ持ってきてるし……ほら、あそこ」

「何か発表会みたいだよね」

商店街のイベントに参加するだけあつて、親もライブに顔を出すほど。それが余計に張りつめた空気を作り出している。

「沙綾んちは来てる？」

「うーん、栗つて言つてたけど、ここからだとちよつと見当たらないな……。今の間に電話してみるね」

お母さんも、今日のライブは楽しみにしていた。お父さんはお店があるから、行けなくて残念だつて嘆いていたけど。

紗南と純も昨日は遅くまではしゃいでたし、お母さんと一緒に来ているはず。この会場のどこかで、ステージを見ていると思うんだけどな……?」

私はステージ裏の控え室を抜け出し、今どこにいるのか聞いてみる。

それが、私がバンドを立つきっかけになるとも知らずに。

「あ、もしもしお母さ——」

「うわああん！ねーちゃああん!!」

「え、純……?どうしたの!?!後ろで泣いてるの、紗南……!?!」

私はお母さんに電話をかけたはず。なのに、どうして純が電話に出ているの。電話越しに紗南の鳴き声も聞こえるし、純も動転している。

「おかーさんが、おかーさんが……!」

「落ち着いて、純！何があったの!?!」

「い……いきなり、倒れて……!」

「え……!?!」

私は言葉を失った。どうして、お母さんが倒れるなんてことになったの?昨日も、今朝だって元気に送り出してくれたのに。

どうして。

「紗綾?そろそろ本番だけど……何かあったの?」

そこに、ナツたちが私を呼びに来た。本番が迫っているが、お母さんの事も放つてはおけない。私は、すぐに事情を知らせる。

「お、お母さんが、倒れたって……!」

「えっ!?!それって、本当なの!?!」

「純たち、泣いててよくわかんないけど……お父さんも店にいないみたいで……」

お父さんが見せにいるなら、泣きついてくることなんてない。私が電話するよりも早く、お父さんの方から電話してくるはずだ。きつと、パンの配達か何かで、店を少し空けていたんだ。

「……早く行って!何してんの!?!」

「えっ、で、でもライブは……!?!」

「ライブなんて言ってる場合じゃないよ!?!いいから急いで!」

「純たち、待ってるよ!」

「う、うん……!?!ごめん、みんな……。ごめん……!!」

私は、すぐに会場を後にした。店に戻り、動けないお母さんを病院に運び、今日と言う一日は終わった。おとうさんもすぐに店を閉め、

病院に来てくれた。

すぐに意識は戻り、お母さんは幸い大事には至らなかつた。入院する必要もなく、それから家ではしばらく療養の日々が続いた。

そんな日々を続けているうちに、私はお母さんの苦勞を知つた。

私がバンドの事で家を空けている間、家事にかかりきりになつていた事。紗南と純の世話もして、家の事は全て一人で背負い込んで……。

なのに私は、そんなお母さんの苦勞を、倒れるまで気づいてあげることができなかつたんだ。倒れて、ようやく知つたんだ。

私がバンドをしている間にも、お母さんは無理をしていた。自分だけが楽しんでる間に、弱い体を酷使して。

そんなのでいいはずがない。私には、何も周りが見えていない。そんな私は、どうすればよかつたんだろう。

簡単だつた。だつたら私が、お母さんの代わりになればいい。

もう私は決めたんだ。学生らしく、自由に楽しい時間を過ごすのは……おしまいなんだつて。自分のやりたい事だけするなんて、ただのわがままでしかないんだつて、気づいたから。

だから私は……バンドを捨てた。

そしてこれからも、バンドの道に戻る事は絶対にならない。

「くそ……見失つたか」

あれから俺はすぐに沙綾の姿を追いかけたが、どこにもその姿が見えない。教室に戻っても、沙綾は来ていないと言う。どこかにはいると思うが、そのどこかがわからない。

『やらない。友達が勝手に書きちゃって……ごめん』

どうしても、さっきの沙綾が頭から離れない。あんなにも冷たい沙綾は、一度も見た事がないから。いつもは大人びていて、それでもどこか少女らしくあるのが沙綾なのに。

「……苦しそうだったな」

逃げるように去った時、沙綾は歯を食いしばっていた。それは、後ろめたい気持ちがあるからじゃないのか。

「海野さんの話……。バンドがどうか言ってたけど……」

沙綾の抱える事情と、海野さんのバンドの話は、無関係ではないはず。突き詰めていけば、きつと見えてくる。

だが、今はこの話は止めだ。俺には今日、どうしても話をつけなくてはいけない人物がいる。解決しなくてはいけない問題があるからな。

そのために、俺はクラスのみんなに断って、先に帰らせてもらっている。香澄たちに黙って出ていく形になったのは悪いが、こればかりは優先させておかなくてはいけない。

「……そろそろ、学園長の話を確認しないといけないからな」

それは、昨日の話。香澄たちと沙綾の家に向かう前、学園長と密かに会っていた時の、あの話だ。

『お久しぶりです、学園長』

『おや、君は……成川君じゃないか。顔を出しに来てくれるとは』

『せっかくなので、今日は直接伺おうと思いましたが。あの、報告と言っても、期待できるようなものではありませんが……』

『いやいや、大丈夫だよ。いつもメールでやり取りはしているからね』
時間がない時はそうしているが、基本は会いに行っている。いつ会いに行っているかは……企業秘密だ。

『それに、私の方からも話しておきたいことがある』

『学園長から、話……ですか』

俺は話と聞いて、何か嫌な予感を覚えた。まさか、ここに来て特務生としての入学を無効とする、なんて言い出されたりしたら、たまつたものじゃないからな。

そんな素行の悪い事、もちろんした覚えはない。が、学園長から持ち出された話は……ある意味で核心を突くものだった。

『そんなに身構える必要はないよ。君の妹、美羽さんの事についてだ』
『美羽の……？何かあつたんですか？』

『いや、何かあつたと言うわけでは……。実は、少し厄介な事態になつてしまつてね』

俺は目的の場所に到着する。そこは、美羽の病室。

扉をノックし、美羽の名前を呼ぶ。すぐに返事がした。今日は弾き語りはやっていないみたいだな。

俺が中に入ると、ベッドの上でギター片手に奮戦している美羽がいた。その前には楽譜が広がり、練習の真つ最中だと言う事がわかる。

「練習の途中だったか？タイミングが悪かったな」

「そんな事ないよ。患者さんに弾き語りしてたら、リクエスト貰っちゃったから、その練習してたところ。えへへ、すごいでしょ？」

「それだけ美羽の演奏がすごいって事だよ、きつと」

なかなか評判いいみたいだな。美羽も自慢げだし、今だって真剣にギターの練習をしていたみたいだ。

けど、今はそんな話をしている時間はない。そいつは後回しだ。

「でもこの曲、サビ前の部分が難しくてさ。ここなんだけど、コードチェンジが追いつか……どうしたの、お兄ちゃん？」

「……悪いな、美羽。今日は少し、話があるんだ」

「何？」

ギターを肩から外し、ケースにしまつて壁際に立てかける。上半身を向け、何を言われるのかとドキドキした様子で俺を見る。

「……………」

「ど、どうしたの？表情硬いし、何かこつちまで息苦しくなっちゃいそ

う……」

「……単刀直入に聞くぞ」

「う、うん。どうぞ」

美羽の許可は取った。だから……回りくどいことはなしで、直接問
いください。

「学園長に言われたんだ。美羽が、どうしても文化祭に出たいって話。
あれは、本当なのか？」

「それは……」

あの時、学園長から言われた話。それは、美羽が文化祭への参加を、
学園長に対して要求していた事だった。

「……呼び出されたの？学園長から」

「まあな。いきなり呼ばれたから、何事かとは思ったけど」

「……その時、学園長は何て言ってた？」

「俺に聞かなくても、答えは美羽が一番よく知ってるんじゃないのか
？」

元気にギターを弾き、いつも楽しそうにしている美羽。弾き語りを
見せ、周りからも称賛の嵐。具合が悪いなんて、微塵も思わせないほ
どだ。

けど、美羽は病魔に苛まれている。それだけは、誰が何と言おうと
変わらない。表向きは元気でも、そんな姿を取り繕っても、美羽は病
気なんだ。重く、治すことも難しい……病気を抱えているんだ。

だからこそ、慎重にならないといけない。いつ症状が悪化し、最悪
の事態になるのかも予想できない。些細なきっかけで、それが引き起
こされてしまうかもしれない。

ずっと病院生活を送れと言っているわけではない。しばらくは入
念に様子を見て、それから日常に戻そうと言うだけ。

だが、問題はそこではない。

このままでは、文化祭が終わる頃にしか、退院の許可は下りないと

言う事が問題だった。

美羽は今、中学3年生。これが、中学生での最後の文化祭になるんだ。学校や人間関係は変わらないが、どうしても変わってしまうものはある。

だから美羽は、学園長に話を持ち掛けていた。

『この前電話があつてね。どうしても、最後の文化祭だけは出たいとね』

『え……!?!』

『前に医者から話を聞いたみたいで、そちらにも既に話を持ち掛けているらしい。退院の日時を早めてほしい、とね』

何かのきっかけで、美羽はそのことを知ってしまったんだ。俺が病院にいない間に医者から説明を受けたか、美羽の口から聞いたのか。

どっちにしても、それは美羽にとって望ましくないことは確かだ。俺だって、同じ立場ならそうしている。

『その話は受け入れてくれなかったらしい。まあ、美羽さんの事を考えたら、医者として当然の判断だとは思うよ』

『で……美羽は何と?』

『病院からでも、文化祭の間は学校に通わせてほしいと言っている。既に始まってしまったが、準備期間も含めてね』

『美羽……』

病人をそう易々と、院外に出すわけにはいかない。文化祭の時に症状が酷くなれば、せつかくの楽しい時間が台無しになってしまう。かえって混乱を招いてしまうだけだ。

『電話がかかってきたのも数日前の話だ。機会があれば伝えようとは思っていたが、遅くなってしまうたよ』

『それは構いませんが……学園長はどう返事を?』

『もちろん、断ったよ。気の毒だとは思うけど、入院している生徒を、それも自宅で倒れて運ばれるほどの容態の生徒を学校に通わせることは、こちらも容認できない』

『……俺も同意見です。美羽の言い分も、わからなくはないですが』
「ここは耐えてもらおうしかない。その話は前に、俺と担当医との間で話がついているんだ。体の事を考えたら、それが第一だ。」

『けど、美羽さんはどうも、素直に聞き入れてくれなくてね。譲れない気持ちがあるんだろう』

『……でしようね。でなければ、病院側から断られているのに、わざわざ電話なんてかけませんよ』

『翔君の言うとおりでだよ。結局、話は平行線のまま終わってしまったね。だから……意味の方から美羽さん説得してもらえないかな？それでもダメなら、こちらから対処はするつもりだ』

『……はい』

これが、俺と学園長が交わした会話の全て。そして今から、俺は学園長に頼まれた通りに、美羽を説得しようとしている。

「……やっぱり、ダメなの？」

「当然だろ。美羽は病人で、その病気を治すためにここにいるんだ。もし学校に行つて、病気が悪化したらどうする？それこそ、ずっとこの病院にいる事になるかもしれないんだぞ？」

「それは……そうだけど」

美羽だつて、そんな事はわかつているはずだ。こうも簡単に、俺の話聞いてくれるはずがない。

「でもね、私にだつて引けない時はあるよ！たえお兄ちゃんが相手でもー！」

「……だろうな」

やっぱりか。だが、想像していた通りだ。言い方は少しきつくなるかもしれないが、何とかして美羽を言いくるめなくては。納得させるのは、今のこいつには無理がある。

「けど、今は引くん。来年になって、文化祭がないわけじゃない。それこそ、他の学校に進学するのなら話は別だが……美羽はそうじゃないだろ？」

「確かに、来年だつて文化祭はあるよ。今のクラスのみんなとは……」

クラス替えもあるし、離れ離れになるけど、同じ学校だからいつでも会えるし」

「だったら、ここは折れる。……次がないかもしれない自分の体と、次があるかわかってる文化祭。どっちを取るのが正解なのか、そこまで考えなくてもわかるはずだ」

次がない、なんて……本当は言いたくなんかなかった。俺が望んで、最愛の妹に言ってると思うか？

が、現実と言う刃を突き立てて、美羽を追い詰めなくては。心を折らないと、身体は守れない。

「……そうだね。わかるよ」

「なら、不正解の方を捨てろ。それが正しい選択なんだ」

「……わかった」

さすがに、自分の体を天秤にかけたら、誰だってそっちを選ぶさ。文化祭の事は、この状況ならまだ捨てられる。

美羽にはまだ、将来がある。まだ今年で15歳の女の子なんだ。一時の感情だけで、全てを棒に振る必要はないんだ。

だから、諦めろ。諦めるべきものを。

……なのに。

「自分の体。捨てるのは、そっちにするよ」

「……え」

何の迷いもなく、俺の予想していた答えとは正反対の言葉を、美羽は口にした。

俺の目の前で、言い切った。

「な……どうしてだ!? バカなことを言うのは止めろよ!? 俺は……いや、学園長やこの先生だって、美羽の事を心配して言ってるんだぞ

!？」

「そんなの、何の心配でもない！本当に私の事を思っているのなら、私の気持ちを優先させてよ！体なんて、後から考えたらいいだけの話じゃん！」

「……何だと？」

今、何て言ったんだよ。ふざけるなよ。安っぽく口にするなよ……！

「体『なんて』……!?そんな事、簡単に言うなよ!!」

病院であることを忘れ、俺は大声で美羽を叱る。周りの事なんか見えていない。俺は、美羽しか見ていなかった。

「美羽は、俺のたった一人の妹なんだぞ!?どんなものにも代えられない！なのに、そんな……粗末なものを扱うような言葉を、自分に向けて使うなよ!!」

「私の体が悪いのは、もうずっと前から知ってる事だよ!?当たり前すぎて、今更って感じなの、こっちは！引っ張り出して、取ってつけたような理屈で私の事を縛り付けるのは止めてほしいの！」

「それは縛るためのものじゃない！美羽を守るための——」

「……今しかない！今しかないんだよ!!」

怒号が病室を突き抜ける。美羽の意見を拒絶して、それでも執拗に訴えて。どうして、そこまで必死なんだ。

自分の体だぞ？何度も死に直面する場面は、これでも昔からあったんだ。美羽は当たり前前と言うけれど、こんな悲しい日々を当たり前にしないでほしい。

いつ発作に苦しめられ、倒れるかもわからない日々を。

くらい病室で、一人きりで過ごすことになるかもしれない日々を。

いつだって、生死の境目に立たされている日々を。

そんな体をも蔑ろにして、どうして美羽は……文化祭に力を入れる

のか。

今じゃないと、いけないんだよ……!?

「どうして、なんだ……?そこまで、文化祭にこだわる理由が、どこにある……?」

「……明日香ってさ、花女とは違う学校に進学するでしょ?だから、幼馴染と最後の文化祭を、目いっぱい楽しみたいんだって思って」

そうか。明日香は、この1年間が最後なんだ。美羽は最後じゃないかもしれないが、同じ時間を過ごす友は、いなくなってしまう……。

「でも、それだけじゃないんだよ」

「えっ?」

「……私ね、このクラスになってから、クラスのみんなと約束したんだ。最高の思い出を作ろうって。高校も同じ学校だけど、中学の私が過ごす時間は、今年が最後だから」

「高校は、高校の私で。中学は、中学の私で。過ごす時間の重さって、きつと違うはずなんだ」

「時間にもね、重さがあるんだよ。軽かったり、重かったり。私はね、いっつも重いんだ」

「どうでもいい時間なんてない。無駄にしているいい時間もない。今生きて、時間を使わせてもらっていることが、すごく価値のある事なんだ」

「周りはさ。今って時間を何となく過ごしているのかも。昨日があつて、今日があつて、明日がある。それが当たり前のようになってるんだなくって。それが、時間が軽いって事なんだと思う」

「私には、その何となくで片づけられる時間なんてない。いつこの時

間に終わりが来るのか、震えながら生きてるんだから」

「軽く扱っていい時間なんて、私にはない。簡単に、次があるなんて諦められる余裕なんて、私にはない」

「今この瞬間だって、特別なんだよ。軽くなんかない。重くて、苦しくて……見限って、捨てる事なんかできない時間」

「お兄ちゃんはさ、私の体の事とかを考えて、あんな風に言ってくれたんだよね。普通だったら、文化祭を諦める事が正しいんだよね。それは私も、ちゃんとわかってるから」

「でも、私は人よりも先があるのかわからない中で生きてるんだ。来年なんて都合のいい将来の話なんか、あてにはできない。今日の前に、文化祭は待っているんだから」

「お兄ちゃんは、この気持ちかわかる？いつも、何かの終わりを感じながら過ごしてる？時間に重さを感じてる？」

「……なんて、ちよつと意地悪だったよね。ごめん。普通だったら、そんなこと考えながら過ごす事なんてないもんね」

「今日って言う日が、何回、何十回、何百回、何千回……それ以上の時間の繰り返しの中でやってくる日だって感覚でしかないよね。もちろん、そうじゃない日だってあるけど……」

「でも、そうやって感じられる事って、すごく幸せなんだよ」

「いつ死んでもいいように心構えをしてほしいわけじゃない。張りつめて、不安を抱えて、毎日過ごしてほしいわけじゃない」

「そんなの、息苦しいだけだから。当たり前前の時間を過ごせる事に、感謝してほしいってだけなんだ」

「私には、そんな風に感じられない。今日が終わったら、明日が来るなんて限らない。今こうして話している時間が、私の最期になるかもしれない」

「これが、最期かもしれないんだよ」

「だから、私にとっては今しかない。次なんて、あるかどうかもわからない。重たい時間の中で過ごす私には、取り換えられる時間なんてどこにもないんだよ」

「私の話を聞いて、お兄ちゃんが少しでも時間の重さについて考えてくれたなら……中学生の私の、ううん。中学3年生の私にしかできない文化祭を、やらせてくれないかな？」

時間の、重さ……。

「美羽……」

俺は、何もわかっていなかった。

美羽のためだと、目の前に迫っている文化祭を切り捨てる事が、正しいのだと思い込んでいた。疑うことなく、その考えを押し付けていた。

けど、そうじゃなかった。美羽にとっては、それは甘い考えにしか聞こえていなかったんだ。

たった1年。長いようで、短い時間。365回、1日を重ねていけば、たどり着くはずの時間。

美羽は……そうじゃない。重ねられるだけの時間が、美羽には残っているのかもしれない。でも、もう残っていないのかもしれない。

残っていても、ふとした瞬間に崩れ去ってしまうかもしれない。美

羽は、そんな不安定な足場の上を歩きながら、一歩ずつ歩いている。

そんなの、遠い話だよな……。

「だから……最後の文化祭を、病室のベッドの上で、一人ぼっちで……！みんなが話してくれる記憶を辿るものになんてさせたくない！」
今しかない。それが、美羽を突き動かす理由だった。その『今』を、美羽は他人の手で、孤独な世界での出来事に変えられようとしている……。

その今を共有できる人は、このままの美羽だったら、どこにもいない……。

「……………」

それは、俺が望んでいる事じゃないはずだ。

前に、頼み込むように、俺が言ったんじゃないのか？この先生に。

美羽を、一人きりにしないでほしいと。

だったら、俺がしないといけないことは、美羽を説得して病室に閉じ込める事じゃない。

「……そうだな。美羽の言うとおりだ」

「お兄ちゃん……？」

「悪かった。美羽の気持ち、しっかりと伝わってきた。俺が間違ってたって、気づかせてくれたから」

「それって……」

「ああ。俺の方から、もう一度美羽の事、かけあってみるよ。やりたいてって思う事、こんなところで終わらせたりなんかしないからな」

たとえそれが、周りから見れば間違っている事だとしても。そう望むのであれば、俺はいくらでも協力してやる。たった一人の、妹のためなら。

外の世界に連れ出して、約束を果たしてやる。

「お……！おお、お兄ちゃあぁくん!!」

「ぐえっ!?おい、美羽!?!いきなり抱き着いてくるな!首が……!」

ベッドから抱き着いてきたため、体勢で首が無理矢理引き寄せられる形になる。てか、マジで痛い。それに美羽の体重が首にかかっているから痛い痛い痛い。

「だって、お兄ちゃんがそんな嬉しい事言うからいけないんだよ!」
「そ、それは俺が悪いわけじゃないだろ!?!てか、そろそろ首が痛いから!」

「じゃあ、お兄ちゃんが抱っこして!」

おいおい。中学にもなつて抱っこをせがむなよ。嬉しいかもしれないが、もう子供じゃないんだぞ?

「……まあ、いつか」

仕方ない。たまにはこう言うのも悪くないか。妹とは言え、女の子を抱くのはいつ以来の事だろうと考えながら、俺は屈んで美羽を抱き寄せる。

小さくて、それでも確かに温もりを感じる。とても病人とは思えない。

必死に前に、前へと進んでいる。小さな体で、精一杯生きている。

そんな妹の熱を感じながら、俺は窓の外に目を向ける。

赤い夕陽が、優しげに俺たちのいる病室を照らしているような気がした。

phrase 41 君にできる事

「うん、これで喫茶店のシフトは大体決定つと。後は香澄のシフトだけかな」

文化祭まで、後3日。A組の文化祭の出し物の準備は、問題なく終わりそうだった。飾りつけやエプロン、シフト表なども順調に決まっている。パンは当日、学校まで運んでくれるとの事だった。

「戸山さん、ライブ以外の時間は全部喫茶店に出るって言っていましたよね？」

「あつ、月島さん。お疲れ様」

教壇にシフト表を広げ、全体のスケジュールをまとめていた沙綾の元に来たのは、クラスメイトでもある月島琴音。その手には缶ジュースが。

「山吹さんこそ、お疲れ様です。実行委員として、いつも頑張ってくれているじゃないですか」

「私は副委員つてだけだよ。そんなに大した事してないつて」

「あの戸山さんをサポートして、その上でクラスを取りまとめて、文化祭の準備も率先して引き受けてくれる……。働きっぱなしじゃないですか？」

「そうかな……。でもありがとう。心配してくれて」

「いえいえ。私たちは同じクラスメイトであり、この花女に通う生徒なんですから」

琴音から缶ジュースを手渡され、沙綾はそれを一口。集中しきっていた体に染みわたり、肩の力も抜ける。

と、そんな沙綾の事を思ってたか、琴音は空いている椅子を二つ運んでくる。働きづめだからこそ、休むときには休んでほしい。琴音の好意を感じた沙綾は、やる事も一区切りついていたこともあって、椅子に腰かけて休憩する事に。

「喫茶店の準備、もう少して終わりそうですね」

「そうだね。後は当日の段取りを確認して、本番に備えるってところかな」

準備もいよいよラストスパートだが、それで終わりではない。むしろ、文化祭を迎えるこれからが本番だ。

とは言え、長かった準備もゴールが見えているのは、素直に喜んでもいいだろう。琴音の言う通り、沙綾はずっとクラスのために行動してくれていたから。

「でも、ここまで頑張れたのも、皆のおかげだよ。月島さんこそ、ありがとね」

「私は何もしてませんよ。あ、それでさっきの話ですけど……」

「さっきの話って？」

「ほら、言ってたじゃないですか。戸山さんのシフトが決まっていな

いと」
「ああ、そうそう。さすがに全部出るのは香澄も大変だろうから、まだシフト表は空欄にしてあるんだ」

教壇の上に置いてあるシフト表を引っ張り出し、それを琴音に見せる。表を使ってクラスメイトごとにわかりやすく割り当てられているが、香澄の部分だけが空欄となっている。

「今の時間は……体育館で練習しているんですけどっけ？」

「あー、そうだった。翔に牛込さん、花園さんの姿もないね」

沙綾も、香澄たちのバンドの事については理解している。歌詞作りにも付き合い、どれだけ真剣に向き合っているのかを感じ取ることもできた。

とは言っても、シフトの件については相談しなくてはいけない。戻ってくるのを待ってもいいが、今から聞きに行く方が効率がいいか。

「よし、じゃあちよつと香澄にシフト聞いてくるよ。これ決めたら、今日は解散にするから」

「でしたら、私が行きますよ？ずつと忙しかったんですし、それくらいなら私にもできますから」

「ううん、大丈夫。自分で行ってくるよ」

「そうですか？私、成川君に用があったので、どっちにしても体育館に行くつもりだったんですが……」

「そうなの？それじゃ、一緒に行こっか。香澄たちの練習してるのも、ちよつと見て見たいからね」

「本番まで、後3日だよ、みんな！」

「あんま意識しないようにしてたんだから、止めろって……」

「そうだぞ。クライブの時とは、わけが違うんだからな？」

出し物の事は沙綾に任せ、俺たちは体育館に来ていた。文化祭で有志ライブをするバンドは、今日から本番までの間、体育館のステージで練習をさせてもらえる事になっている。

キーボードはもちろんの事、ご丁寧にドラムまで用意してくれているようで、俺としても助かった。他にも、貸し出し用のギターやベースもあるみたいで、その点もしっかりしているらしい。

「どうしよう……緊張してきちゃった」

「ほら見ろ、香澄。りみだつて緊張してるだろ」

「うっ、ご、ごめくん……」

口にするのとはしないのでは、結構違ってくるからな。プレッシャーにだつてなるし、そこからミスが生じる事だつてある。

「こういう時は、手のひらに人つて字を3回書いて……。はい、飲む？」

「あ、ありがと……」

「人に飲ませんのかよ」

にしても、有志バンドつてそれなりにいるな。人気だと言っていたが、軽く10組くらいはいる雰囲気だぞ。

「色んなやつがバンド組んでるんだな……あ」

「どうしたの、翔君？」

「ん？いや、何でもないよ」

偶然、この前沙綾とバンドの事について話していた女子生徒を見つ

けた。確か……海野さんって言ったっけ。その周りには、3人の女子生徒が。

ここにいてるって事は、あの子もバンドをしているって事なんだよな。周りの子も、きつとメンバーに違いない。

「……………」

沙綾の事……まだ聞き出せていないんだよな。クラスが違うのもあって、ちゃんと話ができていないし。

けど、海野さんは確かに沙綾の抱える事情を知っている。あの時の突き放した沙綾の態度は、2人の間にある決定的な何かから生じたものだ。

それを知って、俺に何ができるのかはわからない。何をすればいいのかもわからない。

ただ……知りたいんだ。沙綾が何で悩み、苦しんで、あんなにもバンドそのものを拒もうとするのか。音楽の話題になる時、悲しそうな顔をするのかを。

きつと、沙綾自身が望んでいる事じゃない。望んでいるなら、痛ましい表情なんかしない。それを見て、俺もここまで気にかけて思うはずもない。

沙綾……。一体、何と戦っているんだ？

「おい、何ぼさつとしてんだよ翔。次、うちの番だから、早く練習始めろぞ」

「……あ、ああ、すまん」

と、有咲に脇腹を軽く突かれる。いつの間にか、俺たちに順番が回って来ていたみたいだった。前にステージにいたバンドも、いなくなっている。

「翔、何か変な事でも考えてたの？」

「考えてないから」

「私はハンバーグの事考えてた」

「聞いてないから」

自分のペースを崩さないたえの事は放っておいて、俺たちはステージに上がる。それぞれ楽器を準備し、俺もドラムの叩き具合を確認。特に困ることはなさそうだ。

「つか、人多くね……？」

「うん……。練習なのに、ちよつと怖いかも……」

確かに、練習と言つても見ている生徒が多い。小規模でやっていたクライブとは、わけが全然違うな。

これが本番となると、さらに人数は増える。俺たちは演奏をこなす前に、観客の圧力に負けないかがどうか問題となりそうだ。

今は体育館にまばらにいる生徒も、いつぱいになるくらい集まるわけだし……。

「……ん？」

体育館の入り口付近、見覚えのある人影が見える。あれは……。

「……沙綾？」

それと、隣にいるのは……月島さんか？教室にいるはずの2人が、こんなところでバンドの見学か？

もしかして、喫茶店の準備で何かあったのか？けど、そこまで切羽詰まった感じはしないし、何か話しているみたいだし……。

ただ……俺たちを見つめる沙綾は、どこか物悲しそうだった。

「大丈夫だよ、りみりん！何も考えないようにすれば、怖くなんかないよ！」

「あつ、また人の字飲む？はい、手のひらに書くから……」

「お前はもういいんだよ！つか、翔も早くカウント取ってくれよ！」

「……ああ、悪い。もう準備はいいのか？」

「いつでも。つか、さつきから何かボーつとしてるけど、何かあるのか？」

おっ？有咲にしては俺を気遣う言葉をすんなりとかけてくれてるじゃないか。本番が近いからか、有咲もいつもよりテンション上がってるのかもな。

……本人に言ったら、後でどうなるかわかんないけど。

「いや、特にどうってわけじゃないんだ。入り口の辺りに、沙綾と月島さんがいたからさ」

「さーや？・琴音ちゃんはいるけど……」

「えっ？」

もう一度視線を戻すと、そこに沙綾の姿はなかった。月島さんは確かにいたが、沙綾だけが煙のように消えていた。

だが、月島さんの様子がどうもおかしい。やけにチラチラと、後ろの方を気にしているようだった。今はここにいない沙綾の事を、気にしているのか？

「どこにもいねーじゃん。見間違いじゃねーの？」

「おたえちゃん、沙綾ちゃんの事見た？」

「うーん、いたかな？・翔は見間違いが多いから。この前だって、みかんをオレンジと見間違えてたよね」

「変な事実をねつ造するな。それに、みかんとオレンジは同じだろ」

「……天才なの？」

「俺が天才なら、お前はどうなるんだろうな!？」

とまあ、こんなやり取りはあったが、持ち時間を使って練習は無事に終了。大きなミスもなく、見られていると言うプレッシャーに押しつぶされることもなかった。この調子を維持できたらいいんだけどな。

「うーし、やっと終わったな」

「有咲、ちよつとおっさんみたい」

「黙ってる、花園さん」

さて、これからどうするか。喫茶店の準備がないなら、これから有咲の蔵に行って練習の続きをしてもいいんだけどな。

だが、どうも沙綾の事が気になる。来ていたと思ったら、いきなり消えていたからな。今は練習も大事だが、このまま放つてもおけないな。

その謎の手掛かりとなりそうなのは……1つしかない。

「すまん、香澄。ちよつといいか」

「うん？どうしたの。なーくん？」

「みんなと先に教室に帰っててくれないか？俺ちよつと——」

「あつ、お兄ちゃんだ！」

と、香澄との話を遮るかのように、俺の名前を呼ぶ声が。それに、俺の事をお兄ちゃんと呼ぶのは……一人しかいない。

「何だ美羽か。出し物の準備とかはいいのか？」

「可愛い妹が来たのに、何だはないでしょ！？今は休憩時間なんです〜！」

「アハハ……。あ、どうも翔さん。バンド、頑張ってるみたいですね」「みーちゃん！それにあっちゃんも！」

体育館に入ってくる美羽と、その付き添いの明日香だった。バンドの練習でも見に来たってところか。

「てか、そんなフラフラ歩き回って、大丈夫か？お前ここにいるけど、一応は病人なんだからな？」

「わかってるって！堅苦しい事言わないでよ！」

そう。ここに美羽がいると言う事は……そう言う事だった。病室で美羽と話し、美羽の意志を聞き出した後、俺はすぐに学園長と話をした。

もちろん、反対された。学園長だって、最初は美羽を説得してほしいと俺に頼み込んできたんだからな。立場を変えた俺の意見を、受け入れてくれるはずはない。

だが、俺もそこで引き下がるほど腰抜けじゃない。それに、美羽の覚悟は十分に伝わってきた。その気持ちに応えてやらないと、兄として情けない。

その甲斐あって、学園長は折れてくれた。美羽もこうして学校に出て、毎日を楽しんでいる。文化祭の準備も、クラスメイトと楽しそうにしているらしい。今の笑顔が、それを物語っている。

「お久しぶりで〜す、有咲さん！」

「うわ出た、生意気な妹」

露骨に嫌がるんじゃねえ。

「久しぶりだね、美羽ちゃん。えつと、そっちの子は……明日香ちゃ

ん、だったよな?」

「あつ、はい。中等部3年の、戸山明日香です。いつもお姉ちゃんがお世話になってます……」

クライブの時に少しだけ会っているか。有咲だけは、それ以前にも会ったことがあるんだつたよな。

「あつ、そうだ!お兄ちゃんたちの練習って、いつから始まるの!」

「残念だったな、美羽。ついさつき終わったところだ」

「え〜っ!じゃあもう1回やってよ〜!」

「いや、それは無理だつて……」

ま、ここに来た時点で想像はついていたが、美羽は俺たちの練習を見ようとしてたんだな。明日香はクライブの時にいたから知っているが、美羽はまだ俺たちの演奏を見た事ないんだよな。

「でもね、実を言うと……ここに来たいって言い出したの、明日香なんだ!色んなバンドを見てみたいんだつて!」

「えっ?あつちゃん、そうなの?」

「ま、まあ……ね。ちよつと気になつて」

照れ臭そうにしながら、明日香はバンドへの興味がある事を口にする。美羽じゃなく、明日香からここに行きたいと言いだしたのは、少し意外ではあつたけど。

「そう言うわけだから、私たちは他のバンドの練習見てるね!お兄ちゃんたちは、これからどうするの?」

「ま、一旦教室に戻ってから、その後の事は考えるつもりだな。で、香澄」

「何なに〜?」

「さつきから待たせてる人がいるからさ。先、教室に戻つててくれ」

俺が見つめる先、こちらの輪の中に入りだすタイミングを掴もうとしていたのは、月島さん。さつきからこんな感じだったし、そろそろ話を切り上げた方がよさそうだ。それに、俺も月島さんとは話がしたいからな。

「えっ、私ここで待つてるよ?」

「気持ち嬉しいけど、今はまず教室戻つて、文化祭の準備を手伝う方

が優先だろ。もし何もなかったら、ライブの練習もしないといけないんだ。俺なんか待つてる余裕はないぞ?」

「そっか……。なーくん、頭いい!」

その発言、すぐく馬鹿みたいに聞こえるからやめた方がいいぞ?

「……まあ、とにかくだ。俺もすぐに追いつくから、教室の様子見て、準備か練習を始めてくれ。後でまた連絡は入れるから」

「うん、わかった!じゃあ皆行こつ!」

「それじゃ、私たちもバンドの練習見てるから、またねお兄ちゃん!」
香澄たちは香澄たちで、美羽たちは美羽たちで別れ、残ったのは俺と……。少し先に月島さんだけ。俺は近づいて、声をかける。

「月島さん、悪い。待たせてしまったな」

「いえ。私の方こそ、無理に話を遮るような事をしてしまって……」

「気にするなよ。何か話があったんだろ?」

「あ、はい。ここだと練習の迷惑にもなると思いますし、場所を変えましょうか」

俺たちは体育館を後にし、人の少なそうな裏庭のベンチへ。あまり人通りもないし、話をするにはうってつけの場所だ。

「それで、話って何だった?」

「文化祭の準備の事なんですけど、前に頼まれていた備品のリストが完成したので、その報告をと思いました」

「ああ、そうだったな。悪いな、こんな雑用任せてしまった」

「成川君は実行委員ですし、ライブの練習もありますから。少しでも負担を減らせるように、私の方から手伝うのは当然ですよ」

俺は月島さんから書類を受け取り、中を確認する。備品と言っても、この喫茶店のために購入したものや借り受けたものをリストアップしただけだ。

後でわかりやすくするために勝手にやったことだし、別に無理にしなくても必要はなかったんだけど……。月島さんのおかげで、楽に会計をまとめられることができそうだ。

「ありがとな。助かったよ」

「ウフフ。そう言ってもらえると、頑張った甲斐がありました♪」

綺麗に図式化されている。月島さん、こう言うのまとめの上手なんだな。俺は感謝を口にする、月島さんもニコリとほほ笑んだ。

「……………」

けど…………それだけじゃないよな。俺からするつもりの話ではあったが、月島さんの方からこんな人の少ない場所を選んできたって事は…………。

「…………他にも、あるんじゃないか？俺に話したい事が」

「あ…………」

「そうじゃなかったら、わざわざこんなところまで俺を連れてきたりなんかしないだろ。この書類渡すだけなら、あの場でも十分だったし」

「…………よくわかりましたね。むしろ、こっちが本題なんですけど」

「やっぱりな。で、その本題って言うのは…………。」

「沙綾の事か？」

「ステージから見えてましたか？」

「まあな。俺もちよつと、沙綾については月島さんに聞きたいと思ってたし」

月島さんも、沙綾の様子については気になるところがあったんだろう。いきなり戻って行ったんだから、それも仕方ないと思うけど。

「山吹さん、最初は戸山さんのシフトを聞くために、体育館まで来たんです。私は、元々この書類を渡す予定がありましたから。バンドの練習も見てみたいって、特に変わった様子はなかったんですけど…………」

「…………俺たちのバンドの練習を見て、戻って行った？」

「はい…………。山吹さん、戸山さんたちの練習を見ている時、すごく辛そうで。もどかしそうで。それを必死に押さえつけているような、そんな感じだったんです」

「やっぱり、沙綾はバンドに対して、何か特別な思い入れがあるって事か…………」

それに耐えきれなくなったんだろう。沙綾は月島さんを置いて、先に戻って行ってしまったと。さすがに沙綾の事だから、何か一言くらいは言い残していったとは思うけど。

「やっぱり?」

「あ……まあ、月島さんならいいか。沙綾、理由はよくわからないんだけど、バンドを避けようとしているみたいなんだ。前にも少し、バンドの事で色々あったからな」

俺の話に、月島さんは黙って耳を傾ける。他の人に広めそうな人ではないし、構わずに話を続ける。

「その時も辛そうだった。逃げるしか選択肢がなくて、それが望んだものじゃないって事はよくわかってるのに、何もできなかった」

「成川君……」

「入学した時から、少し違和感があったんだ。音楽の話題になると、少し影を見せるんだ。気にはなってたけど、無理に聞き出して刺激するのもよくないと思って……そのまま」

そうやって、ズルズルとここまで来た。聞こうと思えば聞き出すことができたのかもしれないが、結局俺は、その苦しみを見ないで、蓋をし続けた。沙綾が苦しんでいると、何となくわかっていながら。

「でも、最近思うんだ。このままでいいのかって。いつまでも、沙綾が苦しんでいるのを見るのは……正直辛い」

「……私も、さっきの山吹さんは見ていて苦しかったです」

「普段は優しくして、明るくて、面倒見もよくてさ。俺たちのバンド、応援してくれているのに。そんな中でも、沙綾は誰にも言えずに、自分の世界で悶えているんだよな」

普通の女子高生なのに。青春してもいい時期なのに。バンドに打ち込んで、楽しいこともいくらでもしていい時期なのに。

何かに縛られて過ごす必要なんて、どこにもないはずなのに。

「俺たちのバンドが形になればなるほど、沙綾は辛そうだった。ここ最近、沙綾の暗い表情、よく見るようになったからさ」

「……そう、ですか」

「俺は、もっと沙綾に笑っていてほしいんだ。事情があるのはわかる。けど、それで人生の一番大事な時期を棒に振る真似なんて、してほし

くはない」

「今からでも取り戻せるから。いや、今だからこそ、まだ始められるから。」

「なのに俺、バカだよな……。沙綾の事、何も聞き出そうともしないで、今になって動いて、こうしている間にも、1人苦しんでいたのに」
「……………」

「SOSは出していたんだ。本当は、気づいて欲しかったんだ。それを見過ごして、抱え込ませてしまっていたんだ」

「成川君……………」

「沙綾は、悩んでるんだ。苦しんでるんだ。たった1人で、バンドを断ち切って、振り切って…………それが、本心じゃないって、無関係の俺でも何となくわかるから…………っ、辛そうに見えて仕方ないんだよ…………！」

感情に任せて言葉を並べ立て、自然と吐き出されていく俺の思い。やがて言い終わり、シンと静まった空気が、俺に冷静さを取り戻していく。

「…………すまん。つい熱くなりすぎた」

「構いませんよ。そうやって熱くなれるのは、立派な事だと思います」
「そんな俺に対しても、月島さんは優しく言葉を投げかける。背中に手を置き、ゆっくりとさすってくれる。」

「俺は…………正直、沙綾の事情を聞きだすことが怖い」
「気持ちの整理が付き、俺は再び言葉を紡ぐ。月島さんも、俺が話した事に合わせてさすっていた手を止める。」

「沙綾にとっては、目を向けたくもない話のはずだ。それを、何も事情を知らない俺が、簡単に引っ張り出していいものなんかじゃない」
「……………」

「でも、その事情を知らないと、力になってやる事もできない。一緒に抱えてやる事もできない」

「……………」

「あいつらの力になるのとは、またわけが違うんだ。これまで、あいつらとは色々あったけど、何とか乗り越えてきた。でも、沙綾の場合

は——」

「……フフツ」

笑い声がした。俺の隣から。

「月島、さん？」

「……素敵ですね、成川君」

「えっ？」

「素敵だと言ったんです。そう思うのは、成川君が山吹さんの事を、大切に思っているからじゃないですか？」

「えっ……っ？」

確かに俺は、沙綾の事を大切に思っている。友達として。けどそれは、香澄やりみ、有咲、たえに対して持っている感情と何も変わりないもののはずだ。

みんな俺の大切な友達だし……それ以上の事は何もない。なのに、どうしてこうも困惑しているのか。

「友達だから、自分の言動で傷をつけたくはないと、そう思っているのでしょうか？ 私にだって……その気持ち、わかりますから」

「あの、アイドルバンドの事か？」

「……はい」

まだ、世間の評判は良くないからな。うかつに名前を出して、それでバンドのイメージをさらに下げることになってしまったら、元も子もない。

「傷つけて、それが本当にマイナスに繋がってしまう事なら、止めた方がいいのかもしれない。ですが、今回は違うはずですよ」

「それは……」

「山吹さんは、自分ではどうにもできないほどに、自分の中の何かに追い詰められて苦しんでいる。でしたら、自分ではない誰かの言葉でしょうか、山吹さんは目を覚ましてはくれませんか」

「だから俺に、沙綾と向き合えと……っ？」

「はい、そうです」

月島さんの俺を見る目が、確かな光を伴って俺の心を捉える。何か、俺の中を駆け巡った気がした。

「向き合ってください、成川君。山吹さんが何で悩んでいるのか、はっきりさせたいのなら……言葉をぶつけて、理解するしかない」

「俺が、沙綾と……」

「……そうしたくても、したところで、何も変えられなかった人もいます。けど、成川君はまだ、変えられるかもしれない」

傷つく事ばかり恐れていた。でも、その果てに待つものが、本当に沙綾を傷つける結果だとは限らない。

俺は、沙綾の力になりたいんだ。あいつらが苦しんで、困っていた時のように。俺の力はちっぽけで、何もできないかもしれないけど……。

「……本当にありがとう、月島さん」

「私は、お礼を言われるようなこととはしていませんよ?」

「それでも、言わせてほしいんだ。俺のすべき事、ようやく見えた気がするから」

文化祭が始まるまでに、必ず沙綾と話をする。そうやって、受け止めていかないといけない。

俺だって、抱えているものはあるんだから。

phrase 42 今を変えるために

本番前日。俺たちのクラスは全ての準備を済ませていたため、ライブの練習に専念させてもらえる事になった。放課後を迎え、早速有咲の蔵に向かおうとしていたのだが……。

「その前に、ちよつと行ってみたい場所があるんだ！」

「寄り道か？そんな余裕ねーんだぞ？」

「わかつてるけど、ちよつとだけ！いいでしょ、なーくくん？」

「素直に有咲に抱き着きに行けよ！何で今日に限って俺なんだ!？」

んで有咲も、いい気味とばかりに俺を見るな。クソ腹立つから、後で何か仕返ししてやる。

「え〜？抱き着くのくらしいじやん！」

「よくねえ。有咲はまあ……百歩譲って、女の子同士だしいと思うんだけどさ」

「すげー雑な理由押し付けんな！」

「俺はほら、男だぞ？そう言うのは、こんな外でやるもんじやないって」

「じゃあ……家に着いてからならいいの？」

「だからそう言う……はあっ!?!／／」

お、おいこら。何か誤解を招くような言い方は止める。俺たちが幼馴染で、家が隣同士だって事はみんな知ってるし……このままだと、帰ってからいつもそう言うことしてる見たいだろ!？」

「……ふくん？翔つて、そう言う……ふ、ふくん？」

「2回言うな！」

「あ、あうう……し、翔君が、香澄ちゃんと、香澄ちゃんと……／／／／」
「ち、違うから！待ってりみ、そんな目で俺を見るな！これは誤解だからー！」

「え？……は五階じゃないよ？」

「お前は何も言うんじゃない！」

香澄が変な事言うせいで、気まずい空気になってしまっただろうが……。りみに関しては、完全に疑われてるし。ああ……誰か、この空

気を修復する方法を教えてください。

んで、どうして当の本人の香澄は、何も気にしないでケロツとした顔してんだよ!? こいつ、自分が何言ったのかわかってないな!?

「あ、あれ……? みな、どうしちやったの……?」

「別に……香澄って、私が思ってたよりも大人だったんだな……って。こ、こつちが恥ずかしいだろ! / /」

「か、かか香澄ちゃん……。し、翔君と末永くお、おおお幸せに……」
「ごめん。私もよくわかってない」

だからたえは黙ってると言ったはずだ。

「え、なーくん、どうして……?」

「いや、お前のせいだよ!」

「だから何で!?!」

こいつ、マジで理解不能って顔してやがる。恋愛に関心がないのか。普通このワードから想像つくだろ!?

「何でじゃねえよ! お前がそ、その……家に着いてからとか、そう言う事言うから…… / /」

「うん、言ったよ? だから『有咲の』家に着いてからなら、いいんだよね?」

「ああ、有咲の……有咲ああああ!?!」

「うう、まだほっぺが痛いよお……」

「悪気はないんだろが、すまん。今回は普通にムカついた」

「私悪くないのに……」

で、香澄の頬をお仕置きとしてつねってから、俺たちはある場所へと向かっていた。香澄が行きたいと言っていた、ある場所に。

そこは、学校から近いところにある楽器屋。ライブ前に、ギターの事で何か探し物でもあるんだろう。

まあ、それはいいんだが……。

「いつちばーん！」

「2番だー！」

「はあ、はあ……」

何故か香澄とたえは猛ダツシユ。出遅れた俺たちは、息を切らしてようやく追いついたところだった。

「つーか、いきなり走んなよ！」

「えへへ、ごめくん。早く楽器屋さんに行きたかったから。でも、いい運動になったでしょ？」

「時間が惜しい気持ちはわかるが、さすがにこの二人の事も考えてやれよ……」

俺はまだいいが、りみと有咲は運動が苦手みたいだからな。その二人に合わせて走っていた俺の事を、少しは見習ってほしい。

「もちろん考えてたよ。だって、有咲のためだから」

「どういう意味だ、テメー……！」

「それで香澄ちゃん、何を見に来たの？」

「ギターの弦だよ！おたえに、材質で音が変わるって教えてもらったから、ちよつと自分の好きな音を探してみようかなって！」

やっぱりそう言う事か。前に美羽と一緒にセツシヨンした時に、ギターの弦についての話は聞いたことがあったからな。本番ギリギリとは言え、少し試してみたい気になったんだろう。

「お前、余裕持ちすぎだろ。明日のライブまで時間ねえってのに」

「そうだぞ、香澄。弦を見るのはいいが、なるべく急いでー」

「……市ヶ谷さん？」

有咲の事を呼ぶ声をして、俺は誰なのかと顔を向ける。人脈の広い香澄ならともかく、人脈のなさそうな有咲が、しかも名指しで呼ばれたんだからな。

だが、その人物は、決して俺と無関係と言うわけでもなかった。

「あんたは……！」

「どうも、成川君。B組の海野夏希、覚えてる？」

「ああ、もちろん」

沙綾の過去について、本人以外で唯一知っていると思われる人物、海野夏希。前は話ができず、そこから会うタイミングも掴めずにいたが、まさかここだとはい……。

「なーくん、知ってる人？」

「前に少し……ってか、有志ライブの練習の時、体育館にいただろ」

「あれっ？そうだったっけ？」

「あ……確かに、翔君の言う通り、見た事あるかも」

てか、有咲はさつきからずっとたえの後ろに隠れているんだが。クラスメイトだったのに、そこまで頑なに顔を合わせないようにしなくてもいいだろ……。

「何人かは初めましてみたいだから……私、B組の海野夏希。私もバンド組んで、有志ライブに出るつもりなんだ。みんなは、市ヶ谷さんのバンドメンバー？」

「うん！私は戸山香澄！こっちは、なーくんにりみりん、それにおたえ！みんなA組なんだよっ！」

「もう少しマシな説明してやれよ……あつ、違っ……。も、もう戸山さん！もっと皆さんの事、わかりやすく海野さんに教えてあげないといけないでしょ？オホホ……」

「オホホ」

「……って、真似すんな！花園たえ!!」

化けの皮が剥がれ落ちるのが早すぎるだろ。

「へえ、意外。学校とキャラが全然違う」

「そ、それはその……」

「有咲は一癖ある子なんだ」

「手のかかる子供みたいに言ってるじゃねー！」

こうしていると、有咲も普通なんだけど……。猫なんか被らないで、もっとクラスメイトとも普通に接していけばいいのに。

「……………」

と言うか、海野さんの後ろでモゾモゾ動いてるのは、まさか……。

「市ヶ谷さんのこんな一面が見られてよかったかも。何だか活き活きしてる」

「い、いや、これは……」

「戸山さん……だったよね。明日の本番まで、もう全然時間ないけど……お互い、頑張ろうね!」

「うん! あつ、後ろにいるその子も、もしかしてメンバー?」

「いや、この人は違う。さつきからずーっと背後霊みたいにはばりついているが、海野さんのメンバーだからじゃない。」

「むしろ、俺よりもりみの方が接点はあると思うんだが……。」

「アハハ。私のメンバーじゃなくて、先輩だよ」

「えっ、先輩!? ……でも、どこかで見た事あるような? ね、有咲?」

「香澄もか? 私もどつかで見た事ある気が……」

ん? この様子、二人は気づいてないな。何回か会っているはずなんだけどな。俺とたえは、よく会っている人なんだけど。

「……まさか、こんなところで遭遇するとはな」

「えっ……翔、あの人誰だっけ?」

「つて、おい! たえはSPACEで何回も会う機会あるだろ!」

「冗談だよ。ひなこさんだよ」

お前が言うのと、全くジョークに聞こえないから心臓に悪い。

「うん、そうだよ。グリグリドラムの、ひなちゃん」

りみは当然気づいてたな。正解だ。この人は、りみのお姉さん、ゆりさんのバンドのメンバーの一員。ひなこ先輩だ。

「……あーっ!」

「やっど気づいたな、二人とも」

「い、いや、何かステージで見るのと少し違う気がするし!」

違う……か。まあ、確かにな。この人の性格は、ライブの時と普通の時とは……文字通り、別人だからな。

多分、すぐにでも……。

「言われてみればそうだ! お疲れ様ですっ、先輩!」

「フフ……。集え、少年少女よ! 大志を抱け! フウ……ツ!!!!」

「ええ!」

……やっぱり、始まったな。

「え？えっ!?ふ、フーツ！抱けー!!」

「声が小さいーい！」

「抱けーっ!!」

「お店に迷惑だーっ!!」

「ええーっ！っ!!」

この人は……香澄以上にぶっ飛んでいるからな。むしろ、香澄がまだ大人しく見えるくらいだ。逆に振り回されてしまっているからな。

「やべえよ、りみ……。この人、何か変だ！」

「いい人だよ？」

「こんな人のどこがだ!？」

「有咲、失礼だぞ。バンドの相談とか、楽器の事とか、親身になって聞いてくれるみたいで、面倒見のいい人なんだぞ」

「う、嘘だろ……?」

まあ、今の一面からは想像もつかないだろうけどな。こう見えて、人気はある。こう見えてな……。

「えーと、きらきら星の香澄ちゃん！花園ミステリアスたえちゃん！蔵弁慶の有咲ちゃん！女子からの評判は割といい翔君！そして、マイシスターりみちゃん！」

「マイシスターじゃないよ〜」

「な、何で私の事知ってるんですか!?!話したの、初めてですよ……?」

「この間、蔵でライブしたってゆりりんに聞いたからー！可愛い少女たちは、全部ひなちゃんワールドにご招待！」

それだと俺は招待されなさそうなんだが。いや、別に招待されたいと思っっているわけじゃないから、このままスルーしてくれてもいいんだけど。

「あつ、もちろん翔君も招待するよ〜！」

この人は心の声でも読めるのか。タイミングがピッタリすぎるだろう。

「こ、こええ……」

「有咲、気持ちにはよくわかる。俺も最初はそう思ってたからな」
「ライブ中はしゃべらないから、静かな人だと思っようね」

SPACEの控室で話をしてるのを聞くこともあるし、俺たちはこのキャラを知っている。けど、ライブではたえの言ったように終始無言を貫くように徹底している。まあ、それにも一応理由はあるみたいで……。

「止められてるんだよね、ひなちゃん？」

「んー！なんかねー、イメージ崩れるから黙っとけって！」

ライブの時まで暴走したら、どうにも手が付けられなくなるからな……。ライブどころじゃなくなってしまう。

「……おい、翔。マジでこの人ヤバいって」

「慣れろ」

「もつと他にアドバイスはねえのかよ?！」

「あつ、有咲ちゃん！ツインテ可愛いー！」

「ぎゃー！ぜってー無理だ！助けてくれー!!」

本人が目の前にいるのに、あからさまに無理とか言うなよ……。って言ってる間にツインテール弄られて、逃れようと必死になってるし。何か、トラウマになってそうだな……。

「そう言えば、翔君は香澄ちゃんのバンドでドラムやるんだよね！」

「は、はい。あくまで文化祭のライブなので、臨時と言う形で参加しているんですが……」

「ガールズバンド規定法だね？そうだよねー！女の子の中に、男の子が1人！何だかバランスが悪い気がするなー！」

「アハハ……それはわかってますよ。できる事なら、女子でドラムの経験者が近くにいたらいいんですけど……」

「なーんだ、そんな事で悩んでいるのかい、少年？だったら、その悩みは一瞬で解決だ！」

すぐに解決する？という事だ？まさか、ひなこ先輩がドラムとして入ってくれるって事か？

いや、でもそれは文化祭の一次的なものにしかならない。バンドとして広い目線で考えると、ひなこ先輩に協力してもらったところで根

本的に解決はしない。

と言う事は……ひなこ先輩は、ドラムの経験者を知っている？いや、むしろ俺たちが気づいていないみたいにも聞こえるが……？

「あの、あまり話が掴めていないんですが……。もったいぶらないで、俺にも教えてくださいよ」

「フン、いいとも！ま、一番よく知ってるのは、なっちゃんだけけどね〜！」

「……………」

海野さん？でも、この前の体育館の練習の時には、確かギターを弾いていたはずじゃ……？

だが、その答えはすぐにわかった。確かに悩むことでも何でもなかったと、俺も香澄たちも知る事にはなる。

でも……。

その答えは……。

「……………沙綾の事ですね？」

「……………え？」

俺が予想もしていなかった、まさかの答えだった。

「え、さーやって……………」

香澄も、すぐには理解できていないみたいだった。どうしてここで沙綾の名前が出てくるのか。沙綾は、ドラムをしていると言うのか。

そんな話は、一度も聞いていない。そう言いたげに、香澄は答えを求めめるかのように俺を見つめてくる。それに見合うだけの答えは、俺だって持ち合わせていない。

……でも。

何となくつながった。沙綾がバンドを避けようとしていた事、音楽の話題を無意識に遠ざけていた事。そして、海野さんと再会した時の、あの言葉。

『そのチラシ、沙綾バンドやるの?』

『よかった。やる気になってー』

沙綾は、前にバンドをやっていたんだ。海野さんと。今の話だと、担当パートはドラムって事か。

そう言えば、前に俺がドラムをやっていると沙綾に話した時、妙に熱の入った反応を見せていた。ヒントとなるものは、いくらでもあったんだな……。

「山吹沙綾。もちろん、知ってるよね?」

「うん……。でも、さーやがドラム経験者って……?」

「やっぱり、戸山さんたちには話してなかったんだね……」

これが、沙綾が隠し続けてきたものの正体か。バンドを組み、沙綾は香澄と同じように、他の誰かと音を奏でていた。その楽しさを、沙綾は知っていた……。

だとしたら、何故?それを隠して、1人苦しむ必要があったんだ?バンドをやっていたのなら、何故止めないといけないかったんだ?

もう一度、香澄たちとバンドをやる事を……頑なに拒み続けないといけないんだ?

「……中学の時に、沙綾とバンド組んでたんだ。私がギターボーカルで、沙綾がドラム」

「沙綾ちゃん、バンドやってたんだ……」

「中学の時から……すごいね」

「うん。いつも放課後に集まって、練習して。メンバーの家に泊まりこんで、遅くまで練習する事だっであつたんだ」

海野さんは自分のスマホを取り出し、写真フォルダを開いて俺たち

に見せる。そこには、海野さんを含めた4人組の女子が、楽しそうにバンドに打ち込む姿が。それも、何枚も。

その中には、沙綾もいた。

「……山吹さん、そんなに熱心にバンドやってたんだ」

「でも、結局ライブはできなかつたけどね」

「どうしてだ？」

「私たちの初めてのライブの時に、沙綾のお母さんが倒れちゃってね。沙綾のお母さん、身体弱いみたいだから」

「え……!?!」

前に家にお邪魔した時も、全く弱っているようには見えなかったのに。俺たちに見せないように、ひた隠しにして振る舞っていたのか。

「それで、沙綾がいまま、ライブ自体は何とか成功させたんだけど……」

「その後、さーやのお母さんは……?さーやは……!?!」

「……その後沙綾に会えたのは、初めてのライブが終わって少ししてから。お母さんの容態は安定してるって聞いたし、その時は沙綾とも、また『いつか』ライブしようって話してて。けど……」

「何かあったのか?」

「……うん。その『いつか』は、来なかつた。それからすぐに、沙綾は自分からバンドを止めてしまったから」

自分から……?沙綾が海野さんと再会した時の2人のぎこちない様子から、何かいがみ合いが生じてバンドを止めたのだと勝手に思っていたんだが……。

「理由は色々あると思うけど……沙綾、言ってくれなかつたから。一人で悩んで、全部一人で抱え込んで決めちゃって。正直、私にも本当のところは……はつきりとは分からないんだ」

もつと違う、別の理由。ターニングポイントは、恐らく初ライブでの出来事。沙綾のお母さんが倒れた事が、きっと関係している。

もし沙綾の選択が、バンドメンバーとの関係ではなく、家族との関係が生んだ結果だとしたら……。

「……似ている、のか」

「えっ?」

「いや、何でもない」

そう、似ている。自分の気持ちを押し殺し、誰にも頼ることもできずにその身を犠牲にした人を、俺は知っているから。

きつと、今置かれている状況は、本望でもある。けど、冷静に振り返ってみると、正しい道と決めつける事も容易くはできない。無理に選び取ったような、脆さがある。

だからか。沙綾の姿と、その人の姿が重なって見えるのは。

「……あの時、どうしてもやらなかったのか、今でもよくわからない。もつと必死になって止めていれば、少しは違ったのかなって。沙綾、一人で悩む必要もなかったのかなって。そう思う時が、たまにあるんだ」

「なっちゃん……」

「でも、私たちは『いつか』を信じて待つことしかできなくて……。沙綾がまたドラム叩きたいって、前を向いて進む時を待つ事しかできなかった。あの時、私がそうする事を選んでしまったから」

海野さんの握るスマホは、震えていた。行き場のない感情が力となって、拳を強く震わせる。

「だけどね、高校生になって、少しずつ沙綾に笑顔が戻ってきて……。嬉しかった。きつと、戸山さんたちと一緒にいる時間が、楽しかったんだなって」

「私たちと、一緒の時間が……」

「だから、戸山さんたちのバンドのチラシ見て、やっと前を向けたんだって……。嬉しくって。本当は、あの時泣きそうになってたんだよ」

「それで、あの時沙綾に声を……」

コクリと頷く海野さん。その目には、うつすらと涙が浮かんでいるように見えていた。

苦しい気持ちを共有する事もできず、重荷を背負わせ、自分たちは信じる事でしか支えとなる事ができなかった。1人の道を歩かせて

しまった後悔は、海野さんに強く残っていたんだろう。

そんな沙綾が、バンドのメンバーとして名前を紹介されている。海野さんにとつて、それは待ち望んだ『いつか』だった。信じていた瞬間だったんだ。

「でも……ちよつと、早とちり……っ」

おもむろに、海野さんが店の奥の方へと立ち去っていく。これ以上は、言葉にするのも苦しかったんだろう。自責と後悔が渦巻き、コントロールできない感情となって支配する。その結果、みつともない姿を見せたくはなかったんだ。

残された俺たちは、誰も一言も言葉を出せずにいた。ひなこ先輩も、さすがに空気を読んだのか、軽口を言って冷やかそうともしない。普段の沙綾からは想像もつかないほど、重い過去の片鱗を見た。そこから抜け出せずに、苦しんでいる事も、俺は改めて突き付けられた。

それを知つてなお、俺には何ができる？

力になれるのか。またドラムを叩けるように、俺ができる事は何か。海野さんの望んだ『いつか』を、俺は沙綾に見せてあげることができるのか。

俺は……。

沙綾を変える事が、できるのか？

誰を変える事が。

人の心を変える事が、できるのか？

「……………」

わからない。そんな力なんて、俺にあるのかどうかもわからない。振り絞つて、何かできるだけのものをかき集めても、それで解決す

るような何かを得られるとは限らない。

でも……。

それでも……。

変えたいんだ。

「……なあ、香澄。ちよつといいか」

「……うん、いいよ」

香澄を呼び出し、店の外へと連れ出す。きつと、香澄だって同じことを思っている、俺が思ったから。

さつきから香澄、悲しそうで、なのに体は震えていて。今すぐにも走り出しそうで、キュツと紡いだ唇からは、無数の言葉が溢れ出てきそうで。

香澄も、沙綾のために何かしたい。けど、その方法がわからないで、頭を悩ませているんだって。そう思ったから。

だから呼び出した。俺のように、沙綾の力になりたいと思っている香澄に、道を示すために。そして、今の香澄の気持ちを、確かめるために。

「お前ってさ……沙綾の事、大切な友達だと思っているだろ？」

「……もちろんだよ。私、さーやの事大好き。花女に来て、初めてできた友達だから」

「……だよな、悪い。聞くまでもないよな、そんな事」

する必要もなかった。香澄はきつと、そう答えると思っていたから。

「……俺、前にある人に言われたんだ。苦しんでいる人の力になりたいたら、言葉をぶつける事でしか理解できないって」

月島さんの力強い言葉が、俺の脳裏に浮かぶ。今ならまだ変えられると、そう確信めいた響きが、俺に力をくれる。

「沙綾は今、苦しんでいる。その今を変えたいなら、直接問いただし

て、ハッキリさせるしかないんだ」

「……なーくん」

「お前は今、どうしたい？その答えは、ちゃんと聞いておきたい」

この答えも、俺には何となくわかる。けど、それを俺の口から言うのでは意味がない。

香澄の口から、自分の思いを聞き出さないと。

「……私、さーやと話したい。抱えている物、少しだけでも分けてほしい」

「……そうだな」

「このままじゃ、さーやはいつまでも苦しんだままだよ。そんな未来を変えたいから……今を変えたい」

「わかった。その気持ちだけで十分だ」

思いは伝わった。確かめた。なら後は……香澄の思うように、それを行動に移すだけだ。

「行ってこい、香澄。俺は後から追いかけるから」

「なーくんは？」

「他の3人を見捨てて先に行けるか。香澄は、今の香澄が正しいと思う事をするんだ」

もう日も暮れてきた。香澄が話をできる時間も、限られている。俺は香澄の肩に手を置いて……。

「力になってやろう。沙綾の」

「……うん！ありがとう、なーくん！」

肩を軽く押し、香澄を前に走らせた。その先に待つ、友の元に向かうために。

「おい、翔。いつまで……って、香澄は!?あいつどこ行ったんだよ!?!」

「今、沙綾の家に向かった。さっきの話、確かめるためにな」

いつまでも外に出ていったまま戻ってこない俺たちを心配してか、有咲が様子を見に来る。走り去っていく香澄の後ろ姿を見た有咲は大声を上げ、俺に詰め寄ってきた。

「んだよそれ!?練習はどうする!?!何で止めなかったんだよ!?!」

「言って止まる相手だと、有咲は本気で考えているのか?」

「思わねえけど……っ！けど！あいつが行ったところで、何ができる！？何て声かけて、どうすればいいのか……私には、わかんねえよ……」
「そうだな。けど……」

俺は突っかかる有咲を優しく引き離し、それからこう言った。

「練習を放り出して、何ができるかわからないかもしれない事を、やらないといけない時だつてあるんだ。あいつはそれを、実行に移せる力を持っている」

「それは……」

「今、俺たちがやる事は、そんな香澄を止める事じゃないはずだ。香澄を尊重してやる事だろ」

「……なのかもな。結局、あいつに何言つたつて聞かねえし。私たちはあいつに付き合つてやるしかねえんだな」

それに……俺も。

「そうと決まったら、中の二人呼んで来い。今から沙綾の家に向かうぞ」

「私をパシリに使うなっつーの」

つて言いながら、すぐに店に戻って呼びに行ってくれるんだよな。本当に素直じゃない。

「……………」

それに……。

「俺も、お前と」

沙綾と話したい事は、あるからな。

phrase 43 決めつけないで

さつき楽器屋さんで聞いた話が、私の頭の中で繰り返される。

さーやが中学生の時、なっちゃんと一緒にバンドをやっていた事でも、何かがきつかけでバンドを止めてしまった事。そのせいで、今苦しんでいる事。

どうして、さーやはバンドを止めてしまったのか。一度バンドをしていたなら、私を感じているキラキラドキドキを、さーやだって感じているはずなのに。

こんな気持ちになれるバンドを、自分から止めてしまう理由が……私にはわからない。

「……着いた」

楽器屋さんから走り続け、ようやく私はやまぶきベーカリーに来了。もう日が暮れ始め、本当なら今からでも練習を始めないといけないけど……。

話さないといけない。今一番大切なのは、さーやと話す時間だから。

「あれ、香澄?!?何でこんなところにいるの?!?練習は!?!」

「あ……さーや」

私が店の中に入る前に、さーやが私を見つけて出てきてくれた。今頃練習してると思っていたはずだし、まさかいるなんて思わないよね。

「もしかして、何か文化祭の準備でトラブルでもあった?」

「ううん。そうじゃなくて……」

「あつ、もしかして練習中に小腹空いちやったとか? 売れ残りしかないけど、それでよかったら……」

「そう言う事でもないんだけど……」

いざ目の前にすると、話を切り出しにくい。言いたくない事だから、さーやだって自分から言わないし、隠しているんだ。

それなのに、全く事情を知らないはずの私から、いきなりバンドの事について聞かれたら……いい気はしないと思う。

だから、切り出せない。でも、このまま何も言い出せないままなのも、さーやにも迷惑かけちゃうし……。

「どうしたの？香澄、何か変だよ？」

「え、えつと……」

迷っている時間はない。なーくんにだって、背中を押ししてもらったんだ。ここで立ち止まっていたら、意味ないよね……！

「さ、さーやが……」

「えつ？」

「さーやがバンドやってた事、聞いちゃって……。それで、さーやと話
がしたくなっちゃって……」

「……っ!？」

『バンド』と言う言葉に、さーやは明らかに動揺していたみたいだった。けど、すぐに事情を察し、表情が硬くなる。そこにはどこことなく陰が見えた。

「……そっか。ナツと話したんだ」

「なっちゃん、心配してたよ？」

「……そう」

「さーや、何も言ってくれないって。一人で抱え込んじゃって、今のまま
じゃ……嫌だなんて」

「……」

「ね、文化祭、やっぱり一緒に出ようよ！私、さーやがドラム叩いてい
るところー」

「ストップ」

と、言葉が続けようとする私を止める。チラリと後ろを見て、店の
中を確認したさーやは……。

「部屋行こう。話……聞かれたくないから」

「それで……聞いちゃったんだ。私がバンドやってた事」
「うん……」

ちやうど忙しくない時間帯だったみたいで、私はさーやの部屋に案内してもらえた。夕日が射し込む空間で、話は着々と進んで行く。

「さーや、楽しそうにバンドやってたって。でも、自分から止めちゃったって……」

「……そうだね」

「ねえ、何でバンド止めちゃったの？私今、バンドやっててすつごく楽しいーなのに、止めちゃう理由がわからない……」

「……」

「やっぱり私、さーやと一緒に文化祭ライブ出たいよ！この前一緒にライブやろうって、約束したよね!」

「……」

「ベランダで星を見ながら、いつかライブやりたいって……！さーやにドラム叩いてもらって、一緒に歌いたいんだよ!」

「……」

「ねえ、さーや!」

何も話そうとしないさーやに対して、私は可能な限り言葉を続ける。答えてくれないからって、こっちが諦めちゃいけないよね。

私は、さーやとバンドがやりたい。さーやに、ドラムを叩いて欲しい。さーやに、バンドを続けてほしい。

さーやに……笑っていてほしい。

「……無理だよ。翔がいるんじゃないの?」

「なーくんは、ドラムが見つかるまでの間だけ、代わりにドラムに入るって……。だから、さーやがいてくれたら、なーくんだって喜ぶよ!」

なーくんは、ドラムができる人がいないかどうか、ずっと気にか

ていたんだ。私たちのバンドに、男の俺がいるのは邪魔でしかないだろうって。

SPACEのオーディションに出たいなら、そんな中途半端なバンドは認めてくれない。5人揃って、バンドとしての形を作っておきたかったみたい。私は、なーくんとバンドやりたかったけど……。

「……気持ちは嬉しいけど、私は無理。練習してないし、迷惑かけるだけだって」

「いいよ！私だって、さーやにたくさん迷惑かけた！文化祭の準備だって、ライブで忙しい私の代わりに、全部進めてくれて……。だから——」

「やだよ。私、もうバンドなんてやるつもりないから」

冷たく、そう言い切った。鬱陶しく聞こえる私の言葉を振り払うように、さーやはきつぱりと断った。

でも、ここで折れるつもりはない。まだ何も変わってないから。

「……どうして？」

「どうしてって……」

「教えてよ、さーや。私、さーやの事知りたい。だから今、こうしてさーやと話してるんだよ？」

畳みかけ、さーやの事情を探り出す。それが、さーやがバンドを止めた理由を解決して、もう一度バンドができるようになる事に繋がるかもしれないから。

「……………」

「さーや……………」

しばらく、さーやは黙っていた。このまま時間が過ぎたらいいと思っていたのか、それとも言葉を見つけているのか。ためらいがあるのかもしれない。

私には、それが本当の理由なのかはわからない。けど、何も言わないうって事は、それだけさーやの抱えている物が、大きいんだって事はわかった。

一緒に抱えたい。一人で背負い込む事なんて何も無いって、さーやに教えてあげたい。私だって、誰かに支えられてなかったら、今この場所にはいない。

有咲、りみりん、おたえ、なーくん。それに……さーやだって。

「……帰りが遅くなるの、嫌なんだ」

さーやが、ようやく話し出した。決心がついたのか、静かに語りだす。

「私がいないと、お母さん無理しちゃうから……」

「お母さん、体悪いんだよね？」

「その話も聞いてたんだ……。昔から、身体弱くてね。なのにお母さん、家の事は全部自分ひとりでしょうとして……。私、お母さんが倒れるまで、その事に気づいてあげられなかった」

「それで……バンド止めちゃったのって……？」

「……これ以上、お母さんに迷惑はかけられない。だから、バンド止めたんだ」

「……っ！」

さーやがバンドを止めたのは、お母さんを助けようとしていたから。体の悪いお母さんの支えに、少しでもなるために。

そのためにさーやは、続けたかったはずのバンドを……犠牲に……。

「バンドの事ばかりで、私は自分の事しか見てなかった。見えてなかった。もう自分の都合だけで、親不孝な真似なんかできない。店も手伝って、家の事も……」

「それなら、お店が忙しい時は私も手伝う！みんなで協力すれば、さーやがバンドする時間だって——」

「ごめん。他の人探してよ。それまでは、翔がいてくれるんでしょ？」
頑なに、さーやはバンドを拒み続ける。先回りして捕まえようとし

ても、すぐに逃げられちゃう。どうしても、さーやの中で譲れない気持ちがある……。

でも、力になりたい。一人で我慢して、バンドやらないなんてもつたない。

「何でダメなの？」

「……………」

「バンドしている時のさーや、すっごく楽しそうだったって。なっちゃんがそう言ってくれたんだ」

「……………」

「どうして……っ？そんな風に、なっちゃんだって言ってくれてるのに……。バンド、嫌いになっちゃったの!？」

「…………っ！」

そうじゃなかったら、バンド止めるなんて辛くて仕方ないはずだよ……!私だって、バンド止める事になっちゃったら、悲しくて怖くて、止めたくない。嫌だよ！

私の中からバンドがなくなったら、ポツカリ穴が開いちやいそう……。バンドを始めたから出会えた人たちとの出会いが、なかったことになりそうで……怖い。

「楽しいのに、気持ちいいのに！キラキラドキドキするのに!!嫌いだから、バンドから逃げたんじゃないの!？さーやは——」

「そんなわけないじゃん!!」

「……………」

突然の大声。それがさーやのものだと、正直思えないくらいの大きさで。いつもの優しいさーやからは、全く想像できなかった。

「香澄にはわかんないよ！私、みんなに迷惑かけてまでバンドはできない！好きで、逃げたくなんて本当はなかったのに……そうするしかなかったんだよ!？」

「さーや…………」

「ナツたちも、香澄と同じこと言ってくれたんだよ!？私が大変なら力になるって！手伝うって!!私の事心配して、練習時間も減らそうって!!」

こんなさーや、見た事ない。大声で、言葉を並べて感情的になつて
いるさーやは。

でもきつと、それだけ我慢していたんだ。堪えていた気持ちが溢れ
出して、どうにも止められなくなって。そのせいで、大量の涙がさー
やの頬を伝つて落ちる。

だから……今のさーやの言葉は、聞かなくちゃいけない。こんなに
も必死になつてまで、伝えたい事なんだから。

「みんな、自分の事より私の事ばっか！それで楽しいの？私だけ楽し
んでいいの？いいわけないじゃん！」

「……………」
「純と紗南だつて、あの時の事がきつかけで、ずっと家にいるように
なつて……………不安で仕方ないの！あんな気持ち、もう二度とさせたく
ないの!!」

「……………」
「香澄だつて、SPACEでライブしたいんでしょ!?だったら、こんな
私なんか放つておいて、もつと練習しないとイケないでしょ!?私の事
気にして、合わせて！それでライブできるなんて無理だよ！私、足手
まどいにしかない!!」

手で拭う事無く、ボロボロと涙をこぼし続ける。そんなさーやの姿
を見ていると、何だか胸の奥がキューっとして…………痛くて。

目の奥が、熱くなつてきた。

「私の代わりに誰かが損して、傷ついて…………。だから止めたのに…………
！今さら、できるわけないじゃん!!」

「……………」
「私には…………バンドはできない！もう帰つてよ！放つておいてよつ
!!」

私の事が邪魔だと感じて、手で振り払つて部屋から追い出そうとす
る。泣き崩れ、うづくまるさーやを見て、私は言葉を失つていた。

さーやは、家族のために。そして、そんな自分を支えようとする誰

かのために。自分を犠牲にしたんだ。

私たちが手を差し出そうとすればするほど、さーやにとっては負担になる。気まづくなくなっちゃうんだ。

助けたいのに、その気持ちさーやを苦しめる。自分中心に話を進めて、周りが合わせて力になろうとする事が……さーやには耐えられない。それが迷惑だと思うから、バンドを続けていく事を拒むんだ。迷惑じゃない。でも、それをどうやってさーやに伝えたらいいんだろう。今こうして力になろうとしている事だって、さーやは迷惑をかけていると感じているはずなんだから。

本当は違うのに。迷惑じゃないのに。力になりたいから、私がそうしたいから。

傷ついてもない。損してもない。自分からここに来たいと思ったのに、そこに迷惑なんてもものはないんだよ。

さーや……。

「……できるよ」

「無理だよ。できないから」

「そんなの、勝手に決めつけないでよ……」

「決まってるの！私には、バンドなんてできないんだよ!!」
「できるっ!!」

ハッと顔を上げて、私を見るさーや。でも、その顔はぼやけていた。視界が滲んでいた。

それでも、私は伝えたい。

「できるの！何でも一人で決めちゃうのズルい！ズルいズルいズルいっ!!」

「か、すみ……」

「一緒に、考えさせてよ……っ!」

一人で考えて、答えを出すしかないと思っっているなら、そうじゃな

いって教えたい。どんな人だって、一人でできる事には限界があるから。私だってそうだから。

だから……さーやは一人じゃないって、気づいて欲しい。

「ん、終わったみたいだな」

沙綾の家に到着してから少し経った。俺たちは外で香澄の話が終わるのを待っていたところ、沙綾のお父さんが俺たちに気づき、快く中に入れてくれた。

さつきまでは純と紗南もいたが、沙綾の大声のせいでもどこかに行ってしまった。あんな声は俺も初めて聞くし、純と紗南も、聞いたことなかったんだろうな。怖かったんだろう。

ここまで聞こえていたし、話の内容はある程度わかった。そして今、香澄たちが話を終え、待っていた俺たちのところに来たと言う事だった。

「なーくん……」

「お疲れ。みんなもいる」

「有咲、りみりん、おたえ……」

まだ、解決したと言うには早すぎるみたいだな。この様子だと、少しギクシャクしてしまっただけのまま話が終わってしまったな。

「つか、翔はさつきから何してんだよ。スマホばっかいじってるし」

「ちよつとな」

「何だそれ。……じゃ、私たちはそろそろ行くか」

「えっ、で、でも……」

香澄の言いたい事はもつともだ。こんな状態で帰るなんて、できるわけがないって思っているんだろう。けど……。

「こんな状態で、これ以上香澄と山吹さんでまともな話できないで

しよ。まあ、私はどうでもいいけどさ……」

「おい、有咲」

「わかってるよ。けど……新しいメンバー、知らない人が入るよりも、山吹さんの方が私は楽かな……」

「私も！翔君とできないのは残念だけど、沙綾ちゃんとできたらすつごく嬉しいー！」

「……スマホに曲のデータ送ったよ。後で聴いてみて」

3人も、できる範囲で沙綾の背中を押そうとがんばっている。香澄だけじゃないんだ。沙綾を心配してくれているのは。

「だから、無理だつてば……」

「待ってる。さーやの事、待ってるから」

「……………」

それだけ言い残し、香澄は店の外へ。有咲たちも、香澄の後に続いて外に出ていく。

けど……。

「……悪い、香澄。俺はここに残る」

「えっ!?!」

俺は、話をしないとイケない。そのために、俺はここに来たんだから。

「おま、残るつて……練習は!?!ドラムがないんじや、練習できねえぞ!?!」

「それなら心配ない。……りみ、スマホ見てみろ」

「え?……翔君から、メールが届いてる」

「りみりん、どういう事?」

「これつて……音声データ?」

「ドラムの打ち込みの音源だ。これがあれば、俺がいなくても練習できらだろ」

こっそりとりみにメールを送っておいた。何とか間に合ったみたいだな。

「さつきからやたらとスマホをいじってると思ったら……こういう事かよ」

「そうだ。だから悪いが、俺は練習には行けない。明日のリハーサルには、何とか間に合わせる」

「え……それじゃあ、なーくんは？」

「決まってるだろ」

香澄が沙綾の事を心配してるように、俺だって心配している。有咲やりみ、たえのように。

ずっと気になっていたんだ。沙綾の抱えている物が。その事で苦しんで、助けてやる事もできなかった。

SOSはいくらでも出していたのに。沙綾の内側まで踏み込むことを恐れて、俺は今まで目を背けてきた。

けど、そうじゃないだろ。

今からでも遅くはない。沙綾が自分の選択で苦しんでいるなら、その選択を正してやる。

友達として、俺にできる事をする。何ができるかは、俺にもわかりきってはいないけど。

そんな俺の背中を押してくれた人がいるから。

そんな俺に背中を押された人がいるから。

「俺も……沙綾と話がある」

今度は、俺が沙綾の背中を押す番だ。

phrase 44 決意の向かう先に

沙綾の家に来るのは、これで何度目だろう。

S P A C Eのバイト前に立ち寄った事もあった。あの時は、俺に気を利かせて差し入れをくれたんだった。

普通に客として来た事もあったな。最近だと、文化祭の準備か。器用に裁縫をこなすって、沙綾には褒められたっけ。

「……………」

そして今日。俺は沙綾と話をするために、ここに来た。香澄も頑張ってくれたが、俺は俺として話したいんだ。

沙綾は、俺が花女に入學してから初めてできた友達なんだ。女子校で、男子なんて誰もいなくて。香澄はいたけど……やっぱり、全ての始まりは沙綾だった。

沙綾が初めての友達だったから、俺は女子しかない気まずい空間の中でも、俺らしく居られたんだと思う。男子だからって特別扱いせず、いつも変わらず接してくれたから。

だからな……思う気持ちは、他の奴よりも強いに決まっている。

「……翔も、私と話すつもりだったんだ。優しいね。香澄みたいに、気遣ってくれるんだ」

「気遣いだって気づいているなら、今の場所から前を向こうとは思わないのか?」

「それは……無理だよ。さっきの話、下まで聞こえてたんだよね? だったら、何となく事情はわかってるでしょ?」

まだピリピリしている空気を持ち込みたくないからか、沙綾は俺を自室へと連れていく。香澄たちはもうここにはいない。俺だけだ。

今、沙綾と向き合えるのは……俺だけなんだ。

「そうだな。けどな、だからと言って沙綾の言い分を、はいそうですかって認めるわけにはいかない。このままずっと自分を殺して、後になつてつまらない高校生活だったって……後悔だけはしてほしくな

い」

「つまらないかどうかなんて……翔には関係ない。翔が決める事でもないよね」

「確かに、決める事ではないな。でも、勝手に無関係な事にするのは止めてくれ。友達の事なんだぞ？これから一緒に高校生活を送っていく、大切な仲間の事なんだぞ？そんな沙綾に、後悔なんかしてほしいと思うわけないだろ」

「……後悔なんて、するつもりなんかない。誰かに迷惑かけてまで、掴んだ幸せを思い出したくない！」

ここに来た時には、まだ日も沈み切っていなかったのに。今では部屋の電気をつけないと、互いの顔がハッキリと見えないほどになっている。明かりの灯る沙綾の部屋で、俺は沙綾の顔をまつすぐに捉える。

だからわかる。沙綾は今、自分の感情を押し殺して、必死に言葉を並べているだけなんだって。辛そうに吐き捨てる気持ちだが、正しいものとは思えない。無理に自分に言い聞かせて、正当化しているようにしか見えないんだ。

嫌悪、悲愴、覚悟。混ざり合う思いが、確かに表情には滲み出ているから。本音に被せている蓋を、俺が丁寧を外していかないといけない。

「それこそ、後悔しちゃうよ……。自分のやりたい事のために、どうして周りを巻き込んで負担を背負わせないといけないの？それなら、私一人で背負ってた方がいいに決まってる！」

「それで本当にいいのか？頼れる人もいて、後押ししてくれる関係が沙綾にはあるだろ？なのに、その善意を蔑ろにして、自分が正しいと信じて疑わないまま進むのか？」

「善意……そうかもしれない。でも、そこに縋ってしまったら、生まれるのは罪悪感だけなんだよ。本当の幸せなんて、とっくの前から見えていないんだよ。私には」

「だったら、その幸せを手にしようとは思わないのか？」

「思うわけない……。誰かの幸せを奪ってまで、自分の幸せなんか手

にしたくない。それって、ただのわがままじゃん！自分勝手な子ども
のする事じゃん！」

さつき香澄と話している事もあってか、すぐに感情的になる沙綾。
また大声を出して、純や紗南は大丈夫だろうか。

けど、少しでいい。耐えてやってくれ。沙綾は、溜め込んできた気
持ちを吐き出させないといけない。その隙間に刺激を与えて、本音を
表に見せてやらないといけないんだ。

「私は、そんな事してまでバンドをするつもりはない！だから、ナツの
前からも姿を消したのに……っ！今さら、無理矢理バンドに引き込も
うとしないでよ！」

「それは無理だ。まだ沙綾は、バンドが好きなんだって気持ちが伝
わってくるからな」

「だから……！」

「感情的になってまでバンドを否定するやつに、バンドへの情熱がな
いとは思えない。本当に無関心なら、香澄だって適当にあしらってい
ればよかっただろ」

「……………」

「沙綾は、誰かに気づいて欲しかったんだな。止めてほしかったんだ
な。自分の中のモヤモヤした気持ちを、どこかにぶつけて受け止めて
くれる……そんな関係がほしかったんだ。葛藤を受け入れて、またバ
ンドをやってもいいんだって認めてくれる関係がな」

俺はチラリと、部屋の片隅にしまわれていたものに目を向ける。そ
れは、ドラムのペダルバッグ。これでもドラムの経験者だから、すぐ
にわかる。

バンドが嫌で、覚悟があって、金輪際触れずに絶ちたいと本気で
願っていたのなら、いつまでもペダルバッグを置いたりなんかしな
い。それこそ、後悔しか残らない。過去にいつまでも縛られ、バンド
を断つ事なんかできないはずだ。

バンドをやりたい気持ちは残っている。それを前に出せないから、
沙綾は苦しんでいるんだ。助けてほしかったんだ。

よく見れば、ドラムのスティックもまとめて棚の上に置かれてい

る。大事に使っていたんだな。俺にはわかるよ。

だから、自分でバンドを捨てようとするな。やりたい事を諦めるな。諦めたくなかったから、回りくどくても、誰かに話を聞いて欲しかったんだろ。

間違っているって、言っただけだろ。

もう一度バンドやろうって、言っただけだろ。

「沙綾、バンドやろう。それが自分勝手に、誰かに迷惑かけてるだけだって、それを決めるのは沙綾じゃない。自分の中の基準を、俺たちに押し付けて正当化してるだけだぞ、それは」

「私が、間違ってるって言うの？」

「ああ。自分で決めた事が、何でも正しいわけじゃない」

「本当にそうなの？ 私には、そうは思えないよ……」

説得しようとしても、すぐに言葉巧みに逃げようとする。それだけ沙綾の意志が固いつて事か。

「そもそも、どうして翔や香澄は、そこまで私の事をどうにかしようとするの？ 私がバンドをしても、していなくても、関係なんかないはずなのに」

「そんな事はないさ。香澄も、俺だって沙綾の事を心配してるんだ。有咲に、りみやたえだって……」

「……っ、だから、どうしてなの!? 別に放っておいてくれたっていいじゃん！ 私は、今のままで十分なの！……これでいいのっ！」

「良くなかない。自分で自分を苦しめてるのに、それをどうにかしたいと思う方が間違っているのか？」

「間違ってるよ！ 私はいいつて言ってるんだよ!? 私は……心配されるような生き方をしてるつもりはないの!!」

「……っ！」

放っておいてもいいだろ？ これでいいと、今のままでいいと？ 心配されるような生き方なんて、してない……？

そうかよ。今の沙綾には、自分自身の姿が、そんな風に映っている

んだな。だから、俺の手も振り払えるんだな。力強く、何か重りをつけたみたいな強引さで。

だとしたら……何だよ。チクショウ。何だよ、それ……！

そんなの、まるで……!!

「……ふざけるなよー！」

「っ、し、翔……!?!」

「ふざけるなって言ったんだ！自分だけで何もかも抱え込んで、全てを犠牲にしようなんて……簡単に言い切って見せるなよ!!」

言ってるのは簡単だ。けど、そんな軽々しく口にするな。それができるのは、本当に自分を捧げる事ができる奴だけなんだ。

「俺は……っ！今の沙綾のように、誰かのために動いて、自分を捨てて、感情を殺すしかなかった奴を知っている！そいつのように、沙綾にも同じ道を辿ってほしくないだけなんだよ!!」

「私と、同じように……?誰の事……!?!」

「この際だから、全て教えてやる。沙綾と同じ生き方しかできなかった、哀れな奴の事を」

そいつの事は、他の誰でもない俺自身が、一番よく知っている。当然だ。それは……。

「……そいつは、俺の事だ」

「え……!?!」

俺自身の話。沙綾が自分を犠牲にしたように、俺もまた自分を犠牲にしてここにいる。

そうするしかなかったから。沙綾に偉そうに説教している身だが、俺も人の事は言えない。

だが……俺は、仕方なかったんだ。この生き方を選ぶしか、どうにもできなかったから。他にできる事があったのなら、俺はその生き方を選んでいたはずだった。

「何、それ……？…どういう事……?!」

「言ったはずだ。今から教えてやるって。沙綾のように、俺も何かを犠牲にするしかなかったから……その全てを」

沙綾、よく聞いている。これが……俺の過去。俺の全てを変え。そのための誓いを生んだ出来事の話だ。

「俺が中学3年の時の話だ。美羽の事は覚えてるな？前に一緒に病院に見舞いに行っただろ？」

「うん、覚えてる。翔の妹なんだよね？」

「ああ、そうだ。その美羽の事で、少しトラブルが起こったんだ」「トラブル？」

忘れるはずがない。あの日の事は、いつまでも俺の中に残り続けている。

「俺は当然、中学の時は美羽と違う学校に通ってた。美羽は花女だったけど、俺は普通の共学の学校。香澄も一緒に学校だったんだ」

「うん……。それで？」

「その当時から、美羽は病気だった。もつと言えば、小学生に上がる前からずつとな」

「そ、そんなに前から……?!」

「ああ。美羽は病気を抱えて、闘いながら今まで過ごしてきた。学校にいる間も、家にいる時でも。いつ病気が悪化するかもわからない恐怖感に苛まれていたんだ」

前はそこまで踏み込んだ話はしていなかったからな。ちよつと入院していたくらいなの、軽い感覚でしかなかったはずだ。

「そんな美羽が、ある日倒れた」

「えっ!?!た、倒れたって……?!」

「そのままの意味だ。俺は授業中に職員室に呼び出されて、美羽が急に倒れて病院に運ばれた話を聞いたんだ。病院と花女から、学校に連絡があったらしい」

当時の俺は、頭が真っ白になっていた。授業中にもかかわらず、職員室に連れ出されるくらいだ。何かやってしまったのかと、内心恐怖で身構えていたくらいだ。

そこに告げられた、美羽の病院への搬送についての連絡。頭を握りつぶされたかのような衝撃と痛みが、俺に襲い掛かる。焦りが胸を締め付け、吐き気や眩暈を引き起こしていた。

「俺、父さんがいないんだ。離婚して、母さんが一人で俺たちを育ててくれて……。だから仕事も忙しくて、ほとんど家にいる時間がないくらい余裕がなかったんだ。家の事は、基本俺がしてたくらいだよ」

「それで、学校に電話が？」

「ああ、そうだ。多分、連絡がつかなかったんだろう。ついていたのかもしれないけど、残っている家族は俺だけだ。だからこっちに連絡してきたんだろうな」

「……翔は、どうしたの？」

「どうするも何も、すぐに学校を早退して、病院に向かったさ。大切な家族、妹なんだ。けど、少し問題があった」

美羽の話聞き、走ってはいけない廊下を走り抜けて教室に戻っていた。授業中の教室の横を通り過ぎ、俺に向けられる訝し気な騒ぎを聞きながら。

教室に戻り、荷物をまとめて学校を出るのに、5分もかからなかったのを覚えている。説明しているのも面倒で、教師の静止も聞かずに鞆に荷物を詰め込んでいたんだった。

早く美羽に。美羽に会いたい。

会って、無事な姿を見せてほしい。

そうでなかったら、俺は……。どうすればいい。

決死の思いで、俺は病院へと走っていたんだ。

でも……。

「俺の通っていた中学は、病院から距離があつてな。30分以上は確実にかかっている」

「30分も……」

母さんは、仕事ですぐには病院に行けない。俺も、病院まではかなり時間がかかる。でも、俺が行かないと美羽は、ずっと一人なんだ。

倒れて、不安で、一番傍にいてあげないといけない時に……誰も家族がついてやれない事が、どんなに悲しい事か。その気持ちだが、本当にわかっているか？

「電車を待つ時間も、腹立たしかった。乗っている間も、急いでくれと運転手に頼み込んでやりたかった。ようやく病院の最寄り駅に降りて、俺は無我夢中で走ったよ」

「病院には、ちゃんと着いたんだよね？美羽は、無事だったんだよね？」

「検査自体はすぐに終わったみたいでな。無事なのは無事だった。けどな、それは外見だけの話だ」

「……どういう事？」

「体は良くても、心は傷ついていた。誰にも傍にいてもらえず、ずっと一人きりだったんだぞ？まして、命に関わるかもしれない病気を抱えて、それがきっかけで病院に運ばれたんだ。不安で、仕方なかったはずだ」

「……それは、きっとそうだよ。もし私が同じ立場に立ったら、耐えられないと思う」

「友達も、家族もない。医師や看護師はいても、そう言う時に心の拠り所になれるのって、やっぱり身近な存在だと俺は思う。だからな、俺が病院に到着するまで、病室のベッドで気の抜けたように横になってたみたいだ」

その苦しみは、俺にはわからない。病気から生じる発作の症状。そして、そんな辛さとたった一人で立ち向かわなくてはいけないと言う、縋るもののない恐怖。

30分だ。ほんの30分だ。だが、されど30分なんだ。

そのわずかに感じる時間でも、美羽にとっては数時間……いや、数日のように感じる程、長い長い時間なんだ。その間、美羽は死と隣り合わせの苦しみを経験していた。

恐怖の中で、俺が力になれなかった事が、ただ悔しかった。もつと

早く、少しでも早く着いていれば、美羽の苦しみを1秒でもなくしてやることができたかもしれないのに。

「俺が病室に入った時、美羽は何もせず、ポーツと天井を見ていた。何も考えられなかったのか、何も考えなくなかったのか……両方かもしれないけどな」

「美羽……」

「けど、俺が来たってわかった途端、美羽はどうしたと思う？」

「えっ？それは……喜んでくれた、とか？」

俺は首を振って、沙綾の答えを否定する。ある意味、美羽の取った行動は、その真逆だったから。

「泣いたんだ。号泣して、俺に抱き着いてきたよ。ベッドから這いずるように、必死に……っ、もう離したくないんだってくらいに……！」
嬉しかったんだろうな。怖かったんだろうな。俺の背中に回した手は、弱々しくも力強かった。荒れ狂う海原で溺れそうな時に、ようやく縋れるものを見つけたような……あの時の美羽は、まさにそうだった。

抱き返した美羽の体は、震えていて。緊張の糸がほどけて、溜め込んでいた気持ちが爆発して、俺の制服を濡らしていた。

まだ中学2年の女の子だ。病氣と闘うには、あまりにも弱かった。

あの時の美羽の悲痛な声は、頭から消えない。消したくても、消せない記憶だ。

「その時、俺は決めたんだ。これから先、美羽を一人きりで悲しませたりなんかしないって。また同じ事を繰り返して、誰にも頼れない時間ができるのは……嫌なんだよ」

「翔……」

「だから俺は、普通じゃない生き方を選んだ。特務生として、女子校である花咲川女子学園に入学するって生き方をな」

「翔が花女に入学した理由って……」

「ああ、美羽のためだ。俺は家族のために、自分を犠牲にした」

俺が犠牲にしたのは、普通の男子高生としての青春。花女には当然、女子しかない。同性の人たちと過ごす時間は、学校生活の枠組みの中では永遠に保証されなくなってしまふ。

休み時間にバカ騒ぎして、部活して。学校行事で騒いで、一緒に思い出を作る事だつて。それは、今の俺には女子としか作れないから。それでも、美羽のためだからと言いついて聞かせてここに来た。当然葛藤はあつたし、そもそも受け入れてくれるのかもわからなかつたけど。けど、全てが上手く行つた結果がこれだ。俺は美羽に何かあつた時、すぐにでも駆けつけられる場所を得ることができたんだ。

その場所が、花咲川女子学園。男子の俺が決して入ることのできなはずの、女子校だつた。

そこにたどり着くまでに、また色々と問題を抱えてしまふことになつたが……今はその話は関係ない。

いつか時が来たら、俺の口から語ることになるのかもしれないな。

「沙綾と一緒になんだよ。同じように家族を思つて、同じように決心して、自分自身に言い聞かせながら、過酷な道を選んだのは」

だから沙綾……根っこは一緒なんだ。沙綾は自分の大好きなバンドを捨て、俺は男子と共に過ごす普通の青春を捨てた。違うように見えても、同じなんだよ。

俺たちは、自分を投げ打つて得た今を生きているんだ。

「でも、どうして花女なの？共学じゃないし、他にも学校はいくらでも……」

「そう思うだろう？けど、病院に近い学校はここしかなかったんだ。学力がなかったとか、そうじゃない。単純に、この辺りには花女しか行ける場所がなかったんだよ」

花女からなら、病院までの距離はそこまでかからない。前のように

30分も時間を使う事はなくなった。

それに、結果的に俺は、美羽と同じ学校にすることができるようになった。学校にいる間に倒れても、すぐに駆けつけてやれる。登下校中だろうが、中学に比べたら時間を割くことはできるからな。

「SPACEでバイトしてるのも、病院から近いのが理由だ。美羽の治療もあるし、少しでもバイトして、家計を支えたかったからな」

忙しい母さんの代わりに、俺がどうにかしないとイケなかったんだ。だって、何かあった時にすぐ動けるのは、俺しかいないんだから。

どこまでも美羽のため。そんな俺の行動がキモいとか、シスコンだとか、言いたいのなら勝手に言ってる。誰に何を言われても、俺は俺自身で選ぶしかなかった生き方を曲げるつもりはない。

俺にとっては、かけがえのない妹なんだ。

「とにかく今の俺は、美羽を悲しませない事だけを考えて動いてる。花女に入学して、たまにこれでよかったのかって、わからなくなる時もあるけど……後悔しても仕方ないんだ。だって、それが俺の選んだ道だから」

「……………」

「沙綾には、俺のようになってほしくない。この先いつかきつと、自分の気持ちをだまし続けた事を後悔してしまう時が来るかもしれないから」

そうなってからじゃ遅いから。俺は今、後悔しているわけじゃないけど、後悔してしまうかもしれない。今は正しいと信じていても、間違いだと思う日が来るかもしれない。

あの時できたかもしれない事。それを後から振り返って、思い出にも残らない意識の片隅でしか描けない将来を、俺は認めたくはない。せめて、沙綾には。

「自分のしたい事、全力でしてほしいんだよ。俺と同じ道を進もうとして、沙綾だから」

けど、沙綾はまだ変えられる。手を伸ばせば、自分の生き方をどう

にかできる場所に立っている。俺みたいに、後戻りできない場所にいるわけじゃないんだ。

沙綾……変わってくれ。

「……そう言ってくれるのは嬉しい。翔の気持ちとか、抱えてる物も伝わったよ」

「……そうか」

「でも、私には無理だよ。誰かを傷つけるくらいなら、自分だけが後悔した方がよっぽどいい。それがいいんだよ……」

「本当に、そうする道しかないと思っっているのか？」

「そうだよ。だって、翔の言っている事は、誰かを振り回しているのと同じなんだよ？子供が駄々こねるような事で、大切な友達を振り回したくない。できるはずないよ……」

いつしか、沙綾の声も弱々しく、静かになっていた。あれだけ大声を出していたのに、今は俯いて目を合わせようとしない。

自分よりも、他人を優先して。そのためなら、どれだけ酷な道でも選んで、後悔を一人で背負ってやる覚悟が沙綾にはある。

ああ……だからなんだろうな。沙綾が、誰にも頼れないのは。他人の事を考えすぎて、優しくなってしまうから。優しすぎるんだ。

優しさは必要だ。でも、度の過ぎた優しさは、時として自分自身を傷つける。見えているはずの物を霞ませ、自分がどうにかしなければと、我が身を削る刃になる。そこから流れた血で、他人を潤す。

でも、それじゃダメなんだ。

「……もつと周りを見てくれよ」

「え……？」

「俺には、頼れる人がいなかった。友達に協力してもらおう事でもないし、まして母さんにはなおさらだ。仕事で忙しくて、すぐに病院に来られなかったからこうなった。頼ったところで、また繰り返してしまいかもしれないんだ」

ハツとして、沙綾は顔を上げる。俺の言葉が、少しだけ沙綾の心の

壁に亀裂を入れる。

母さんを信用していないわけではないが、現に起こってしまった事だ。仕事のせいだし、仕方なかった。

けど、俺は？

急いだとは言っても、すぐに美羽の近くにおいてやる事ができなかった。悲しい思いをさせてしまったんだ。

だから、俺が何とかするしかない。誰にも頼れないのなら、俺が美羽を支えてやるしかない。そう思って、俺は今日まで動いてきたんだ。

「けど、沙綾は違う。支えあえる家族がいて、心配してくれる仲間がいる。俺のように、自分だけで背負い込む選択肢しかないわけじゃないだろう？」

「で、でも……」

「それは迷惑だとか損だとか、そんな話とは一切関係ない。そう思うのなら、それは優しさでも何でもなし」

自分を押し通しているだけ。ただのエゴだ。取れる選択肢を放棄し、わがままを口にしてるだけ。

「みんなは、沙綾を待ってる。海野さんだって、香澄だって、俺だってそうなんだ」

「翔、も……？」

「俺も沙綾の力になりたい。まだ周りが見えなくて、そこから前に進めないのなら、俺たちの手で連れ出してやりたい」

病気の事を知って、そこから止まってしまった沙綾の時間を、前に向かわせる手助けをしてやりたい。もう一度、バンドと向き合ってほしい。

「沙綾は、俺の事聞いてどう思う？」

「どうって……」

俺の言葉を聞いて、沙綾は何を思ったのか。少し間が開いたが、沙綾はゆっくりと話し出した。

「……私も、何か協力できることがあったら、そうしたいって思った」
「だよな。けど、それって同じなんだよ。みんなが沙綾に思っている事は、今沙綾が俺に対して思ってくれた事と一緒になんだ。迷惑だと思われても、力になってやりたいって、そう思わないか？」

「……うん、思うよ」

俺も沙綾も、抱いた決意は変わらない。ただ、向かう方向が少しずれてしまっただけなんだ。

「……私、気づいてたよ。本当は、バンドの事を完全に捨てきる事なんか、できないんだって」

「沙綾……」

「でも、いいのかな？私、迷惑じゃないのかな？このまま自分の気持ちに、正直になっちゃったら……」

「そうじゃない、沙綾」

何も迷惑なんかじゃない。そう思う人は、どこにもいない。いるはずがない。だって、沙綾……。

「バンドってさ、一人じゃできないだろ」

「……あ」

「自分の音に合わせてくれる仲間がいて、初めてできるものだろう？一人だけの気持ちじゃ、成立するものじゃないんだ」

ハッと気づかされるように、沙綾は瞳を揺らして俺を見つめる。一人だけの気持ちを前面に押し出しているも、バンドは成功するはずがない。その言葉に、沙綾の中で変化が大きくなっているのかもしれない。

「みんなが沙綾の思いを共有して、沙綾がみんなの思いを共有する。それがバンドだ。喜びもあれば、衝突だってあるさ。もちろん、迷惑な事だってあるかもしれない」

「……」

「でも、それでいいんだ。みんな、沙綾と一緒に損したいだけなんだ。その代わりに得られるものは、どんなに苦しい事だって乗り越えられる力になる」

それは、一人では決して得られるはずのないものだ。目には見ええない。けど確かに、胸の中に刻み込まれる、大切な何か。

「……私、本当にいいの？バンド、しても」

「ああ、大丈夫さ。自分に正直になって見ろよ」

「お母さんやみんなに、迷惑じゃないんだよね……？」

「もちろんさ。沙綾が前向きになれば、それこそお母さんだって喜ぶはずだ。それは、香澄たちだって……」

「香澄……」

沙綾が前を向いたからと言って、お母さんの病気が治るわけじゃない。回復に向かうわけでもない。

もしかしたら、沙綾が家にいる時間が減って、無理をしてしまうかもしれない。その結果、より悪化してしまう事だって……。

「……っ」

けど、それを支えてくれる人は周りにいる。沙綾は、恵まれているんだ。

少しずつ、沙綾の心を何かが満たしていく。想いを紡いで重ねた言葉が、心の内側から溢れ出そうとするものをせき止める壁を壊す。

そしてついに、望んでいた言葉が外に出た。

「……うん、そうだね。私、やっぱりバンドを諦める事なんか無理だったよ」

バンドを止めたくない。沙綾は、ようやく自分の気持ちを前に押し出すことができた。

「アハハッ……。私、バカみたいだよ。頑固になって、香澄や翔に言ってもらうまで、素直になれなかったから」

「そんな事ない。沙綾だって、苦しかっただろ？」

「苦しいなんて……。私、市ヶ谷さんの事も笑えないくらいに強情

「だっただけだよ」

「強がらなくてもいい。沙綾は十分、一人で頑張ったよ。責任を感じて、背負って、よくここまで我慢したな」

ポンと、優しく沙綾の頭に手を置く。驚いて頬を染める沙綾をよそに、俺はさらさらとした沙綾の髪をなでてやる。

誰にも支えられなかったんだ。今は、沙綾をゆつくりと休ませてやりたい。褒めてやりたい。そう思ったら、自然と体が動いていた。

その動きに合わせて、光るものが零れ落ちていた。

「え、あれ……？わ、私……何で」

俺が頭をなでてやるたびに、沙綾の瞳からは一滴ずつ涙が流れていく。次第に溢れ出し、感情の制御が効かなくなっていく。

「ご、ごめんね、翔。ずっと、止まらなくて……。な、何でだろ……」
「強がるなって言っただろ？泣いていい」

「だ、大丈夫。みつとも、ないから……っ」

「泣いていいんだ、沙綾。今は泣いていい」

「翔……ありがとう。うっ、う……っ！」

「辛かったな、沙綾。一人で抱え込んで、誰にも相談できない苦しみは俺がよく知ってる。だから、その辛さを今は吐き出してくれよ。前に進むために」

手を止めることなく、俺は沙綾をあやし続けた。最初はうめくように声を殺して泣いていた沙綾も、小さい子供のように大声を出し、ただ泣いた。

その距離も次第に近づき、いつしか俺の胸に沙綾の温もりを感じていた。背中に腕を回され、抱き着かれていた。俺ももう片方の手で、沙綾の背中に手を回して優しくなでる。

あの時の美羽のように。俺の決意が生まれ、今度は沙綾の決意が生まれる。

「……………」

そうしてひとしきり泣いた後、沙綾は恥ずかしくなったのか、俺から距離を置く。と言うか、俺も今になって思えば、かなり気恥ずかしいことしてるんだよな……………」

「……………落ち着いたか？」

「う、うん……………」

まだ目は赤いが、それだけ溜まっていたものを外に出せたと言う事だろう。

「ごめんね、翔。私、あんな風に泣いちゃって……………」

「ごめん、が最初に出てくるあたり、やっぱり沙綾は沙綾だな。けど、それだけ辛かったって事だろ？」

「……………そうかもね」

何はともあれ、無事に話が片付いてよかった。これで沙綾は、もう周りばかりを気にすることなく、自分に縛られたりはしない。

もつと自分自身を、大切にできる時間が増える。

「でも翔、その……………大丈夫？ほ、ほら、私、思いつきり泣いちゃったし、服とか濡れてないかなって……………」

「制服のままだし、大丈夫だろ。俺は何も気にしてないって」

「それならよかった……………」

また自分より、俺の事を心配するんだな。その優しさを、これから正しく向けることができる。

「……………私、明日ちゃんとお母さんに話すよ、バンドの事。何か、あやふやなままにしたから。それから、香澄たちと一緒にステージに立ちたい」

「それがいい。きつと香澄も、喜んでステージで待っていてくれる」

「うん……………ありがと」

ニコリとほほ笑んで、沙綾は感謝を口にする。俺は今日、初めて沙綾の笑顔を見ることができた。

けど……………何故か、まだ影が見えているような気がしていた。

「それじゃ、もう大丈夫だな。もう時間も遅いし、そろそろ帰らないと」

「えっ?.....あ、今こんな時間なんだ」

気が付けば、もうかなり遅い時間帯だった。電車の事もあるし、帰るならこのタイミングしかない。

俺は沙綾の部屋の端に置いてあった荷物を持ち、もう一度バンドに向き合う決心がついた事を嬉しく思いながら部屋を出ようとして.....。

「.....ん?」

急に後ろから、制服の裾を掴まれたような気がした。振り返ると、そこには当然沙綾が。俺の事を帰さないと言わんばかりに、裾を引っ張って俺を止めている。

沙綾がこんな風に、自分の感情をさらけ出すことは、珍しい.....と言うより、初めてかもしれない。驚きと、緊張と、妙な恥ずかしさが俺の頬を熱くする。が、沙綾はと言うと.....。

「え、あ、え.....!?!」

「さ、沙綾.....?」

沙綾自身も、自分がどうして引き留めたのか、よくわかっていないみたいだった。いや、俺にもわかんないんだけど。

顔も赤い。明らかにテンパっている。恐らく、無意識だったんだろう。そうじゃないなら、ここまで思い切った行動を沙綾が起こすとも思えない。

俺もどうすればいいのかわからず、沙綾が何かしらのアクションを起こしてくれるまで向かい合い続ける。沙綾も自分自身に驚いて、フリーズでもしているのか。俺も至近距離の沙綾に、フリーズしそうではある。

だが、少し冷静になったのか、沙綾は自分の行動の意味をようやく理解したようだった。そうなのかどうかはわからないが、頬の染まり具合が、一段と色濃くなったように思えた。

何を企んでいるのか。自然と俺の胸も高鳴ってくる中、沙綾は震える声である頼みごとをする。

「……っ、い、行かないで」

「え、沙綾……!?!」

「急に、その、怖くなってきて……っ。これまで間違っていた事、失った時間の事考えてたら、何だかモヤモヤして、押しつぶされそうで……怖くなった、みたい……」

「沙綾……」

さっきの陰の正体は、これだったのか。自分を犠牲にして得た時間と、本来あるはずだった時間とのギャップが、沙綾にどうしようもない喪失感と後悔を与えていた。

失った時間は、あまりにも大きくて。バンドを捨てて、その間違いに気づいて戻ってきたとしても……それでも、時間は戻らない。

その時間に、何ができたのか。自分のために使えた時間を棒に振ったようで、やり場のない感情だけが後には残る。それがきつと、沙綾の胸に靄となって残っているんだ。怖くなったんだ。

「だから、そっ、その……」

「……な、何だ?」

「今日は……ここにいて……?」

涙を滲ませ、上目遣いで懇願する沙綾。こんなにも弱々しく、何かを頼み込んでくる沙綾は初めてで……心が締め付けられる。

「……ダメ、かな?」

そんな沙綾を見捨てて、家に帰られるはずもなく……。

「……わ、わかりました」

俺は今日、家に帰らないと決めた。

phrase 45 振り絞る声

「うっ、ううん……」

窓から射し込む光で、有咲は目を覚ました。やけに疲れが残っている気がして、ボーツとする意識を働かせながら、有咲は昨日の事を思い出す。

(確か、うちに戻る前に楽器屋に寄って、それから……)

クラスメイトに会って、そこで山吹さんがバンドやってたって話を聞いたんだ。まさか山吹さんがバンドやってたなんて、思いもしなかったけど。

んで、翔が香澄呼び出して、何か話してると思ったら……香澄が店飛び出して行って、山吹さんと色々話しこんでいたんだ。私たちも後を追いかけていったら、今度は翔も沙綾と話がしたいとか言い出ささ。

結局昨日は打ち込みの音源を使って練習したんだっけ。うちに来たのも遅くなったし、少しだけ練習して、それからみんなでご飯食べることになって……。

「……あ」

ああ、そうだった。香澄たち、うちに泊まっていったんだっけ。

本当は嫌だったけど、ばあちゃんも泊まらせる気満々だったしな……。牛込さんはまだいいとして、問題なのはあの二人。

香澄と、花園たえ。ただでさえ一緒にいると疲れるのに、夜まで付きまとわれると思うとぞつとしてたんだ。けど……。

「……香澄、やっぱり気にしてたな」

もつと騒がしくすると思ったら、全然そんな事なかった。黙り込んで、今日の本番でやる新曲の歌詞のノートを広げて、泣きながら歌詞を書き直していた。

山吹さんとの話を経て、歌詞に込めたい思いも変化したんだと思う。何かしたいのに、まだその一押しが足りなくて。だからせめて、

香澄は香澄なりに、ライブで伝えようとしたんだ。

結局、ずつとノートと向き合つて、私たちは先に寝てしまったけど……大丈夫だろうか？今日の本番に支障が出たら、それこそ何のためにライブをするのかわからなくなってしまう。

「はあ……。何か、急に心配に……っ!?!」

今、私はベッドで一人で寝ているはずだ。香澄たちには人数分の布団を用意してあるから、そっちはそっちで寝ているはず。

なのに……。

「な、何でこいつ……花園さんがいるんだよ!?!」

やかましい片割れ、花園たえ。それが何故か、私と同じベッドにいる。昨日寝る時はいなかったのに、どうして私のベッドに入り込んできてんだよ!?!

「んん……」

ちよ、えつ、待て。こっちに寝返り打ってきた。避けようにも、狭いベッドじゃ逃げ道はない。

てか、こいつ背中に手まで回してきた。それに、近い！近い！近い！かー。

「は!?!やっ、ちよ……っくくく!?!」

口元に柔らかい何かを感じた時には、既に手遅れだった。

「うくん……。あれ、有咲ちゃん？それに、おたえちゃんも……?」

やべっ!?!今の騒ぎで牛込さんも起きたみたいだ。こんな場面見たら、ぜってー誤解される！もう見られてるけどな!?!

このままじゃ、牛込さんに変な印象を与えかねない。何とかして花園さんをどかさうとするが、上手く行かない。

「んぐっ、んくっ！んんんくくく!?!」

「……オツちゃん」

誰がオツちゃんだ！っーか、まだ寝てやがんのかよ！いい加減起きやがれ！

「あ、アハハ……仲いいんだね。有咲ちゃんとおたえちゃんって」

「んむ……っ、プハアツ！よくねえよ！これのどこがいいんだ！」
「有咲ちゃん、顔真っ赤だね」

「朝起きてこれだぞ！怒りで赤くなってもおかしくねえだろ!？」

ようやく花園さんから解放され、私はまだ暖かい唇を拭う。と、ここでやっと花園さんの目がうつすらと開きだす。

「……ん、あれ？有咲？」

「あれじゃねえよ。早くベッドから離れろ」

「何でいるの？」

「こっちのセリフだ！」

寝ぼけてベッドに入るにしても怖すぎるだろ。もうしばらく、こいつと一緒に部屋で寝たくない。

「やっぱり仲いいよね、二人とも」

「よくない！」

「香澄ちゃんは……あれ？」

「ん？どうした、牛込さん？」

「香澄ちゃんがいらないんだけど……」

「ん……」

窓から射す光で、私は——山吹沙綾は目を覚ました。

いつにもなく疲れていたような、それでいてスッキリしているような、不思議な感覚。何だか、今まで以上に眠れたような気がしていた。そんな奇妙な思いを抱きながら、私はスマホを起動して時間を確認する。

よかった。寝坊はしていないみたい。そこまで深く眠っていたわけじゃなさそうだ。

「あ……」

と、そんな私の目に入る、1つの音声データ。これは、昨日送られ

てきた……。

「……………」

そう言えば、そうだった。香澄が私の家に押しかけてきて、もう一度バンドをやらないかと持ち掛けて……。

私は断った。自分だけ都合よく楽しんで、その代償に誰かが苦しむ姿を見るのが嫌だったから。そのためには、私が我慢するしかないって、そう思ってた。

でも、香澄は。そうするしかないと思っていた私に、怒ってくれた。何でも一人で決めるのはズルだって。一緒に考えさせてほしいって。そうさせてしまう事も、私の中では辛い事だと思っていたのに。

その言葉を聞いて、少しだけ縋ってみたいって思ってしまった。

そこに、市ヶ谷さんや牛込さん、花園さんもやってきて……。立ち止まる事を選んだ私に、できる限りの言葉をぶつけてくれた。

そして、翔も。香澄の次に言葉を投げかけてくれたのは、翔だった。自分を犠牲にして、感情を殺す生き方をしてほしくない。そう力強く、翔は語り掛けてくれた。そこに秘められた、翔の過去を知る事にもなった。

まだやり直せる。もう1度、バンドを。その熱意が、私の心を動かした。封じ込めて、諦めていた気持ちを押し出すことができた。

みっともなく泣いてしまって、翔には恥ずかしいところも見られたけど。本当に感謝してる。あなたがいてくれたから、私は過去の自分にけじめをつけることができた。前を向いて、またバンドやってみようって……そう思えたんだ。

それで、その後は……。

その後、は……。

……………?

「あ……っ!?!?／／／」

た、確か私、いなくなろうとしていた翔を呼び止めて、落ち着くまでいてほしいとか、そんなことを言っただけが……!?!?

そこからの記憶がほとんどないけど、何故だか安心して温かかったのは覚えてる。知りたいような、知りたくないような……／／／

「わ、私……」

何でそんな事言ったのかわからない。あの時、どうして手を伸ばして、翔を掴んだのかもわからない。

でも、ただ側についてほしくて。いたくて。このまま翔に帰ってほしくなくて……。それで、自然と体が動いてたんだ。

お、思い出したら恥ずかしくなってきた。顔が一気に火照り、鼓動が早まり、それでいて胸がキューッと心地よく締め付けられるような、甘い感覚。

けど、そんなのまるで……。

「……んん」

「っ、し、翔……!?!?」

制服のまま、壁を背もたれにして寝息を立てているのは、紛れもない翔。まだ寝てはいるけど、こんな寝間着姿を見られるのは恥ずかしい。いや、昨日の間にもう見られているのかもしれないけど……。

で、でも翔が私の部屋にいるなんて……。しかも、記憶が曖昧だと言っても、同じ部屋で一晩過ごしたんだし……／／／

ちよ、一旦落ち着かないと……。でもこの状況……。どうしたら……。

「……ん、あれ……?」

手遅れだった。私がパニックになっている間に、翔は目を覚ましてしまった。ボンヤリとはしていたが、すぐに私と目が合う。恥ずかしくて布団で寝間着姿を隠し、ちらりと顔をのぞかせて翔の方を見る。

何も反応がない。まだ意識が完全に戻ったわけじゃないのか、見つめ合う事数秒。金縛りにあったように動けないでいると、突然。

「……はっ、え、さ、沙綾!？」

置かれている状況に気づいたからか、翔もまた顔を赤くする。目のやり場に困ったからか、そっぽを向いて何かぶつぶつと話し出した。「そ、そうか。俺、確か昨日、沙綾にいてほしいって言われて……」

昨日の事を思い出し、私のように悶えたりため息をついたり。それもそうだよ。翔だって男の子だし、さすがに一晚同じ部屋で過ごしてたつて言うのは……。

「……わ、悪いな沙綾。その、俺が勝手に残ってたのに、そのまま寝てしまったみたいで……」

「う、ううん。いいよ、全然。むしろ、私がいつ……いてほしいって、翔に頼んじやったから……／＼／＼」

改めて本人に言うと、とても恥ずかしいね、これ。どうしても、一夜を共に過ごしてしまった事と……それから、私自身が翔に縋ってしまったことが頭から離れずに、いつもとは少し違った意識を向けてしまう。

それはきつと、翔だって同じことだとは思う。だから今、こうして同じ部屋でしどろもどろになってるんだし……。

そう考えると……場違いだとは思う。私、不思議と嬉しくなってるんだ。

「た、多分何もなかったと思うし、変な心配とかしなくてもいいからな？そんな気とかないし、沙綾も気にしてるんだっ……」

「そ、そんなの気にしてないよ！翔がそう言う人じゃないって、私知ってるから！」

「お……おう。そうか。な、ならよかったかななんて……」

やっぱりぎこちない。さっきよりは話せてるけど、翔も私の方を見ないようにしてるし、この状況をどうにかしないと。そう思い、私は何とか頭を使って考えようとして……。

「お、おねーちゃんと……何で翔にーちゃんがここにいるんだ……!?」
「あ」

私を起こしに来たのか、半開きになったドアから震える指を向ける純に見つかってしまった。

「あらあら。夕べはお楽しみだったみたいね？」

「ちよつ、お母さん……／＼／＼」

「冗談よ。でも、沙綾もなかなか思い切った事するのね？」

「ち、違うんだって……／＼／＼」

朝から心臓に悪い事態になってしまった。

沙綾を説得し、過去にけじめをつける事には成功した。俺と同じ道を歩む前に、後戻りできなくなる前に、やりたいと思う事をしてほしい。その想いは届いた。

沙綾には、それだけの自由がある。昨日までは、自分自身の手で自由を縛り、苦しみの中で必死にもがいていただけだったから。

……そこまではいい。だが、その後が問題だった。

変えなくてもよかった時間。捨てなくてもよかった居場所。そのギャップが沙綾に後悔となって蝕み、俺が帰ってから一人耐えられる自信がなかったんだろう。

だから、安心するまで残ってほしいと言われた時、戸惑いはしたがここに残った。それで少しでも、沙綾の力になればいいと思って……。

けど、まさかそのまま朝まで一緒にいる事になるなんて、想像してもなかった。俺はともかく、沙綾は気まずかっただろうな……。友達とは言え、同じ部屋で一緒にいたんだからな。

で、目覚めて沙綾が目の前にいて、軽くパニックになっていたところに純が登場。そこに紗南も現れ、二人に促されるがままに朝ごはんをごちそうしてもらった。沙綾の母さんも、快く承諾してくれたしな。

身支度もここで済ませていいとの事だったので、お言葉に甘える事に。まあ、制服のままだったから、そこまで支度する事もなかったけど。

「わ、私制服に着替えてくるから、ちよつと待っててね、翔」

「おう、わかった」

……にしても、沙綾の寝間着姿可愛いな。じゃなくて。

何から何までお世話になりっぱなしだ。また今度、お礼とお詫びを兼ねて何か持っていこう。

「本当すみません……。結果的に勝手に泊まることになって、その上色々と迷惑かけてしまっただけ」

「気にしないで。でもまさか、あなたが沙綾の部屋にいるとは思ってなかったけど……」

「……申し訳ないです」

「あつ、そう言う事じゃないの。ただ……それが、今の沙綾にとって必要な事だったんだなって、そう思っただけだから」

……今の沙綾に、か。なら、もうとつくに気づいていたのかもな。

沙綾がバンドを止めた事も、それが他にもない自分のせいだと。家の事につきつきりで、感情を押し殺し、素直に欲望に随う事を捨てた事が、沙綾にとっては苦しい選択だった事も。

沙綾のお母さんは、ずっと気にかけていたんだろうな。止めたかったんだろうな。でも、沙綾の決意は固くて……言葉は、そう簡単には届かなくて。だから、負担を与え続けるしかなかったんだな。

そんな沙綾が、初めて感情的になった。香澄に、そして俺に。沙綾の心を動かし、刺激して、閉ざされた扉を壊す力に変える。沙綾が心の底で願っていたものは、言葉は、確かに届いた。

それを叶えてくれた俺を、とやかく責めるつもりはないと言いたいんだ。沙綾のお母さんは。

「文化祭、頑張つてね。準備とかは大丈夫なの？」

「昨日までにある程度は準備してましたから、今日については問題ないかと。あ、喫茶店のパンの件、ありがとうございます。本当に助かりました」

「いいのいいの。お父さんも張り切ってたし、今日の文化祭楽しみにしてたから。もちろん、私に純……紗南もね」

やまぶきベーカリーに協力してもらえなかったら、ここまでスムーズに喫茶店のメニューを揃える事も出来なかったはずだからな。パンは学校まで運んでくれるとの事だが、受け取りの時間も考えると、そろそろ学校に向かった方がよさそうか。

「楽しみにしてください。それじゃあ、俺はこの辺で失礼します。本当に、色々ありがとうございます」

「気にしないで。……紗綾の事、これからもよろしくね」
「……はい」

少し含みがあるような言い方だったが、そこまで深い意味合いはない……と思いたい。

「おーい、紗綾！そろそろ行くぞ！準備できたか!？」

「大丈夫！すぐ行くよ!」

程なくして、紗綾は下りてきた。いつもの制服姿に着替え、リュウで髪も束ねている。

「お待たせ、翔」

「おう。……紗綾」

「うん?」

「言っておかなくてもいいのか?」

「あ……」

明日、バンドの事も含めて話し合いたい。紗綾は昨日、そう言っていた。さすがに今からじゃ時間はないが、このわずかな間にも、伝えるべき事はあるはずだ。

「……お母さん」

「どうしたの、紗綾?」

「今日の文化祭、絶対見に来て。私……どうしても見せたいものがあ

るから」

かつての自分じゃ見せられなかったもの。今の自分じゃないと、見せられないものがある。その言葉だけで、今は十分だった。

「……ええ、もちろん。楽しみにしてるから……待っててね」

「うん……」

言うべき事は言った。なら、後は今日の文化祭に全てをかけるだけだ。喫茶店も、バンドも。

「じゃあ、行くか。沙綾」

「そうだね。行こっか!」

俺は沙綾と一緒に、店の裏口から外に出る。こんな風にやまぶきベーカリーから出るのは、文化祭の準備で来た時以来だ。

と、ドアを開けた途端、その隙間から何かが落ちる。ヒラリと舞ったそれは、丁寧に折りたたまれた一枚の手紙だった。

「ん……?何か落ちたぞ?」

「本当だ。こんなの、誰が……」

拾い上げ、手紙を確認する沙綾。と、すぐに何かを見つけたみたいで……。

「これ、香澄だ……」

「えっ?」

見ると、手紙の裏側には香澄の名前が。あいつ、いつの間にかこんなものを持ってきていたんだ。

沙綾は手紙を広げ、書かれている内容に目を通す。そこには、いくつものフレーズが。

歌詞だ。これは、香澄が沙綾に宛てた、今日のライブで歌う曲の歌詞。俺の知らない間に、香澄は香澄にできる事を、やり遂げていたんだな。

『待ってる。さーやのこと、待ってるから』

「香澄……っ」

「行こう、沙綾。そのメッセージに、応えてやろうぜ」

「……うん！」

手紙をポケットにしまい、沙綾は今度こそ店を出る。これが門出だと、そう言わんばかりに。

この後、あんな事がなかったら。

そして学校。文化祭に合わせて華やかに彩られた校舎が、俺たちを出迎えてくれる。昨日は帰るの早かったし、飾りつけの様子も見てなかったからな。

校門にはアーチがかかり、出店があちこちに並び立つ。校舎の中も、各クラスの出し物で普段とは違った色を見せているだろう。

「こんな感じなんだな……花女の文化祭って」

「そっか。翔は初めてだったんだよね」

「ああ。ま、普通に考えたら、男子が女子校の文化祭を経験するなんてレア中のレアだろうけどな」

「アハハ、そうかも。それじゃ、今日は目いっぱい楽しまないとね？」
「もちろんだ。せっかくの文化祭、楽しまなきゃ損だしな！」

喫茶店にライブ。考える事は多いが、まずは楽しまないと。そんなのは二の次だ。

「あつ、お兄ちゃん！おっくい!!」

と、俺を呼ぶ元気な声。その隣には、苦笑して声の主を見つめる少女が。

「美羽、おはよう。それに、明日香も一緒だったんだな」

「おはようございます、翔さん。それと……確か、前にクライブに来てましたよね？」

「うん。私は山吹沙綾。明日香って、もしかして香澄の妹さん？」

「はい、そうです。お姉ちゃんの事、知ってるんですね」

「友達だからね。いつも仲良くしてるよ」

明日香と沙綾は、ほぼ初対面だったか。ライブの時も、何か話している様子もなかったしな。

「調子はどうだ？美羽」

「バツチリだよ！今日も病院の先生に、問題ないって言われたし！」

「けど、美羽はまだ入院扱いなんだからな？特別に許可が下りてるだけで、本当はベッドで寝てないといけないって事は忘れるなよ？」

「はいー！」

昨日はお見舞いに行くこともできなかったからな。けど、元気そう
で何よりだ。いつもより、目に見えてテンションも高い。

もしあの時、俺が美羽の言葉を聞かずに、美羽を病室から出すことを認めていなかったら……こんな笑顔を見せてくれることはなかったんだろいな。

「ねえねえ、明日香！やつと本番だよ！文化祭だよ！ワクワクするよね!？」

「ああ、はいはい。そのセリフさつきも聞いたし、私が病院に美羽の事
迎えに行つてからずーつとその話しかしてないじゃん」

「だってだって、中学最後の文化祭だよ？もう出られないかと思つて
たのに、お兄ちゃんが説得してくれて、それで出られるようになった
んだもん！そんなの、興奮するに決まつてるよ！」

いや、そこまで興奮されても困るんだが。

「説得……？翔、何したの」

「その辺の話は後でな、沙綾。そういや、美羽のクラスって何の出し物
するんだっけ？」

「あれ、言つてなかったっけ。私たち、メイド喫茶するんだよ？明日香
も一緒にね！」

「無理矢理丸め込んだだけじゃん。恥ずかしいから嫌なのに……」

そう言えばそうだった。美羽のクラスは、可愛いメイド服を着
てお客様におもてなしをするんだった。

何でメイド喫茶なんだと聞いてみたが、『せっかくだし、普段じゃで

きそうにない事をやってみようよ!』って美羽が提案し、そこから決まったらしい。だからって、どうしてメイド喫茶なのかは謎だけど。「それじゃ、私たちは準備とかもあるし、先に行くね!お兄ちゃん、それに沙綾さんも、後でぜひメイド喫茶に来てくださいいね!」
「うん、そうするよ。香澄たちも連れて、みんなで行くね」
「明日香、行こ!今日はお祭りだーっ!!」
「ちよ、引つ張らないでよ!……そ、それじゃあ、また後で会いましょう」

「おう。明日香も頑張れよ」

明日香の手を強引に引きながら、美羽は校舎へと姿を消していった。付き合う明日香も大変だな。

けど、それくらい美羽は、今日という日を楽しみにしてたんだ。最高の一日になるように、明日香も協力してやってくれると、俺も嬉しいな。

「あつ、翔君。それに……き、沙綾ちゃん……!?!」

「ん、りみか。おはよう。それに有咲も、たえもな」

りみたちも今来たところなのか、俺を見つけて声をかける。が、昨日の一件もある。俺の隣に沙綾が並んでいるのを見て、心配になったんだろう。

「山吹さん……その、もう大丈夫か?なんて、私が言える立場じゃないんだけど……」

「ううん。そんな事ないよ。それに、ごめんね。心配かけちゃったみたいで」

「そ、そんなの気にしなくてもいいよ!それより、沙綾ちゃんは……?」

「……私はもう大丈夫。もう止まらない。前を向くって決めたから」

「それって、つまり……山吹さんが、うちらとバンナー」

「ストップ、有咲」

と、有咲が言いかけた言葉をたえが止める。口を塞ぎ、そこから先の言葉は言わせないと言わんばかりに。

「それは沙綾の口から聞かないと。それに、今ここにはいないでしょ

？沙綾の言いたい事、一番聞きたがってる人」

「あ……」

沙綾が自分の口で、バンドへの気持ちを伝えないといけぬ相手がいる。昨日、必死になって説得してくれた人が。大声を出し合い、感情をぶつけあったからこそ、彼女に答えを示さないといけない。

「……だな。あいつ、昨日うちで練習した時、必死にノートに食らいついてた。泣きながら、真剣に曲と向き合ってたよ」

「昨日は有咲ちゃんの家泊まったんだけど、今朝も起きたら香澄ちゃんどこにもいなくて。ずっと、沙綾ちゃんの事考えてたのかも」
「うん……。家のドアに、この手紙が挟まってた。香澄、家に来てたんだ」

「香澄は多分、もう学校にいると思う。きっと、沙綾の事待ってるよ」
「市ヶ谷さん、牛込さん、花園さん……」

3人にも背中を押され、沙綾の表情が引き締まる。後は、香澄の元に向かうだけだ。

「んじゃ……これくらいしか言えねえけど、頑張れよ。山吹さん。私はクラスの方に行かねえと」

「……ありがとう」

「珍しく素直なエール、ありがとな、有咲」

「う、うるせえ！」

「あ……市ヶ谷さんも、少しだけ付き合ってくれないかな」

「えっ、私も？」

「これは、香澄だけじゃない……みんなに聞いて欲しいから」

そして教室。他のクラスも既に賑わいを見せている中、俺たちのクラスも負けてはいなかった。

メニユーやシフトの確認、今日の段取りと言った話はもちろんだ

が、空き時間に何をするか、どのクラスを巡るか、今日の予定を立てる声もあった。

その中心にいたのは、他でもない香澄。話の輪をつなげ、喫茶店の事や他のクラスの話で盛り上がっている。その明るさに、自然とクラスメイトも笑顔になっているんだ。

「でしょっ!?それからそれから……あつ、なーくん!りみりんも、おたえも!有咲もいる!」

「よう、早いんだな」

「うん!それに……さーやも、おはよう」

「……おはよう、香澄」

昨日の事があるからか、上手く話せない二人。さつきまでは元気そうだったのに、どこかしおらしく見える。だから、

「……ほら、沙綾」

「うわっ……と」

俺が沙綾の背中を押し、ぎこちなかった距離を縮める。後は、沙綾の問題だ。これ以上は何もできない。

「あのさ……香澄。少し、話があるんだけど」

「……バンドの事?」

「うん……だからちよつと、外出て」

香澄を教室から連れ出し、廊下に出る。教室の中は、準備で邪魔になると思ったんだらうな。俺たちも邪魔だろうと二人から離れようとしたが、いてほしいと言う。

「ごめんね。今度は、こっちから呼び出しちゃって」

「ううん。私、待ってるって決めたから」

「……あれからね。私、色々と考えたんだ。翔の話も聞いて、自分なりに答えは出せたと思う」

「答え……」

「もう間違えない。嘘ついて、我慢して、それがみんなのためになると思ってたけど……そうじゃないんだって、気づく事ができたから」

沙綾は、目を覚ました。自分の価値観だけで、それが間違いだと思える事無く進んだ道を、終わらせる事ができた。

だから、この言葉を口にできる。香澄の前で、昨日は言えなかった言葉を。

心の底では、ずっと言いたかった言葉を。

「香澄……私、バンドがしたい」

「さーや……！」

「歌詞とかリズムとか、まだ全然頭に入っていないし、迷惑しかかけないと思う。けど、この気持ちだけは……もう見ないふりして、閉じ込めておきたくない！私、香澄と、みんなとバンドがしたい!!」

その言葉、しっかりと聞いた。香澄も、俺たちも。

「……っ、さ、さーや……！」

「だから……私を、香澄たちのバンドに……ポツピンパーティーに、入れてくれないかな……？昨日はあんな事偉そうに言っておいて、今更かもだけど、わがままかもしれないけど……お願いっ！」

頭を下げて、沙綾は香澄に頼み込む。廊下を通り過ぎる人たちの視線も、今の沙綾は気にしない。本当に求める居場所は、この先にあるから。

けど、その答えなんて決まりきっている。今更とか、わがままとか、そんな事は関係ない。香澄は、待つと決めていたんだから。

「……うんっ!! 大大大……大つ歓迎だよ!! さーや……!!」

「うわっ!? こ、こら香澄! 市ヶ谷さんじゃないんだし、急に抱き着かないでよ〜!」

「だって……だってえ……っ!」

感極まったのか、香澄は沙綾の背中に手を回して、思い切り抱き着いた。慌てながらも苦笑する沙綾だったが、すぐ近くにある香澄の横顔を見て、沙綾は表情を変える。

香澄は、自分の事のように喜び、泣いていた。

「グスツ……ヒクツ……よかった。さーやがまた、バンドやりたいて言ってくれて、本当によかった……!」

「香澄……。うん、そうだね」

いつしか、沙綾の目にも涙が浮かぶ。けど、悲しい涙じゃない。一緒に泣いてくれる友の姿に心打たれ、ほほ笑むような表情で流す涙。

「……私も、嬉しいよ。香澄」

りみも、有咲も。二人のやり取りに涙腺が崩壊していたようだった。たえも、泣くことはなかったが、温かく見守っている。

「……よーしー!そうと決まったら、早速練習しないとー!」

「ええ!?今から!?!」

「香澄ちゃん、喫茶店の準備は!?!」

「じゃあ、それが終わってから!少しでもさーやのために、時間作らないとー!」

「有咲、手伝ってくれるよね?」

「ちよ、私クラス違うっつーの!おい、花園さん!引つ張ってくな!!」

涙を拭き、香澄は教室へと戻っていく。りみやたえも、その後を追って喫茶店の準備に向かって行った。有咲もたえに連れていかれたが、どうにかなるだろ。

「……よかったな、沙綾」

「そうだね。……翔の方こそ、ありがとう」

「お礼なんていいって。ドラムに関しては、俺に任せろ。最後まできっちりバックアップしてやるから」

沙綾の肩を軽く叩き、俺も教室の中に。もうほとんど準備は終わっているが、まだできてないところもあるからな。

「……本当に、ありがとね。みんな」

今日の喫茶店、そしてバンド。どっちも成功させて、ここから始める。

失ってしまったもの。取り返せないもの。

それらを、取り戻すための時間を。

私だけじゃない関係の中で。喜びも悲しみも、共有できる仲間と一緒に。

牛込さん。市ヶ谷さん。花園さん。

香澄……そして、翔。

みんなと一緒に、バンドをやり直す。

ううん……ここからまた、始めるんだ。

……そのはずだった。

「あれ、電話だ」

スマホが震え、沙綾は画面を確認する。そこには、お母さんの文字が。電話だった。

「何か、忘れ物でもしたっけ……？はい、もしもし？」

「あつ、やつとねーちゃん出た……」

「……純？」

お母さんがかけてきたはずなのに、どうして純が……？しかも、どこか元気がない。

「お父さんって、もうそっちに来てるか？」

「え？……ううん。時間的には、今こっちに向かっているくらいだと思うけど」

「あ……そっか。だから電話に出ないんだ。ごめんな、ねーちゃん。

それじゃー」

「待って」

お父さんがいないとわかると、すぐに電話を切ろうとした。まるで、何かを隠すように。あまり長く話すことを避けようとしているように。

私の思い過ごしかもしれない。けど、純の話し方はどこか変だ。それに、さつきから電話越しに何も聞こえてこない。静かすぎる。

まさかとは思う。あの時とは、また状況が違うから。

けど、それってまるで……。

「お母さんに、何かあったの?」

「……っ、い、いや別に、そう言うわけじゃ」

「話して、純。何かあったの?」

「いや、だからー」

「話して」

少し強く言ってしまったと後悔したけど、純はこれ以上隠しても押し切れないと踏んだのか、正直に話し出す。

「実は……」

「……何?」

「お、お母さんが……さつき倒れて……」

「え……!?!」

起こってほしくなかった、最悪のシナリオを。

phrase 46 待ってるから

電話越しの告白に、沙綾は震えが止まらなかった。

お母さんが倒れた。あの時と同じように、ライブを目前に控えたこの状況で。冷や汗が噴出し、目の前を真っ白に染め上げていく。

思い起こされる光景。耳に焼き付く悲鳴と、気遣う仲間たち。急かされるように飛び出した会場にはない、自分の姿。

そうして永遠に失われた、かつてのCHISP Aとしての時間も。

「……わかった。お父さんには、こっちから伝えておくから」

「いいって。俺から言つとく。ねーちゃん文化祭でいそがしーだろ？だからー」

「大丈夫。私から言うから。……それじゃ」

何とかそれだけ言うと、沙綾はすぐに電話を切った。これ以上純の声を聞いていると、胸が苦しくて正気を保てなくなりそうだった。

今回はお父さんがいる。パンを届けに学校に来るから、その時に伝えたらいい。後は、すぐにでも家に帰って、お母さんを病院に連れて行ってくれるだろう。

けど……今こうしている間も、家ではお母さんが倒れている。純や紗南は、きつと恐怖を感じているはずなんだ。

「あれ、さーや？どうしたの？」

戻ってこない沙綾を心配してか、香澄が教室から廊下に出す。その声で正気を取り戻すが、すぐに平常心を保てるほど、沙綾の状態はよくなかった。

「あ、香澄……」

「さーやも早くおいでよー準備して、すぐにでも曲の練習しようよー」
「う、うん……」

「家に曲の歌詞届けたんだけど、さーや見てくれた？みんなにも手伝ってもらってただけど、昨日の事もあつて書き直したんだ！」

「そ、そうなんだ……」

何とか取り繕ってはいるが、さつきまでと比べると明らかに違う。だが香澄は、沙綾がバンドに入ってくれた事が嬉しくて、異変に気づけないほどテンションが上がっている。

そんな喜ぶ香澄を見て、沙綾は一人苦悩していた。母が倒れ、すぐにも駆けつけたい。純や紗南に悲しい思いをさせないために、今からでも学校を飛び出して、家に戻りたい。なのに、それを拒むものがある。

香澄だ。そして、彼女のバンドだ。

「……香澄」

「うん？どうかしたの、さーや？」

「あつ、いや……」

母の元に向かうと言う事は、それは文化祭を諦める事を意味していた。家に戻り、そこから病院へと向かい、全てが終わってから学校に戻っていても間に合わない。喫茶店はおろか、バンド発表の時間にすら出られなくなってしまった。

そうなれば、沙綾はまたバンドを裏切ってしまうことになる。ライブを台無しにして、今日を楽しみに頑張ってきた、香澄たちの時間を奪ってしまう。

バンドに対して真剣に向き合う香澄を知っている。そんな彼女の姿を見ている。だからこそ、今日のライブは何のしがらみもなく、香澄らしいものにしてほしかった。そこに余計な心配は不要だ。

せつかく手にした、迎え入れてくれた居場所を……今回も自分の手で壊してしまうわけには、いかなかった。

「……何でもないよ。ちよつと緊張しちやったのかも」

「緊張しなくても大丈夫だよ！クラスのみんながいてくれるし、ライブだって、有咲にりみりん、おたえになーくん……さーやだっているからー！」

「……うん。そうだね。今は頼れる人が、私にはいるからね」

今回は、私だけじゃない。お父さんがいる。お母さんの事を託し

て、私は私のやるべきことをしないとけない。

不安はある。でも、割り切らないと。何でも自分だけで抱え込むことが、本当に正しいわけじゃないんだから。それを教えてくれた人だって、私にはいるんだ。

だから……。

「みんな、パン届いたよー！運ぶの手伝って！」

「あ、うん！今行くー！」

クラスメイトの一人が、パンの到着を知らせに来てくれた。という事は、お父さんも外にいる。

「私たちも行った方がいいよね？パン運ぶのって、大変そうだし……」「いや、そんなに大勢でゾロゾロ行っても仕方ない。教室でパンを受け取って、それを準備する役も必要だろ？」

「そうだよ、りみ。ここにはちょうどいい力仕事の専門家もいるんだから」

「遠回しに俺の事を都合のいい運搬役みたいに言うの止めてくれないか」

教室の中から、そんなやり取りが聞こえてくる。けれど、私の心の中に浮かぶのは、倒れてしまったお母さんの事。いつもなら、おかしくて笑ってしまうのに。

それでも、香澄は……。

「ギーや、行くー！」

「……うん」

手を差し伸べてくれた。気づいていないだけかもしれないけど、今はその気遣いが私を文化祭と言う現実へと引き戻す。

「……………」

今日は私が行かなくてもいい。

友達を優先してもいいんだよね。

あの時とは違うんだから。

お父さんがいるんだから。

一緒じゃない。同じ事が起こるわけじゃない。

また……同じ道を辿る事にはならない。

「……大丈夫」

今日は、大丈夫。

……なんだよね。

「おはようございます！」

「おはよう、香澄ちゃん。それに、翔君も」

「ご無沙汰してます」

俺は校舎を出て、パンの受け取りに来ていた。関係者用の門の近くに車を停めていたらしく、俺たちの姿を見つけると手を振って応えてくれた。

メンバーは俺と香澄、そして沙綾の三人だ。特に示し合わせて決めたわけじゃなかったが、実行委員だし、自然とこのメンバーになっていた。他は教室に残ってもらって、パンを運ぶのを待機してくれている。

「ご無沙汰、ねえ……。そう言えば翔君、昨日は色々あったそうじゃないか」

「ええ、まあ……。沙綾と少し話をしてまして。うるさくしてしまっ

たでしょうか?」

「いやいや。けど、それだけじゃないだろ? 昨日は一晚、部屋にいたそうじゃないか。もしかして、沙綾に気があるとか……」

「なっ!? / / /」

待つてくれ。普通にパンの受け取りだけかと思つたら、いきなり何を言い出すんだ!?! 当然俺がいた事は知ってるだろうが、このタイミングで言うかそれ!?

「ハハハハ。顔が赤くなっているよ、翔君?」

「そ、それはお父さんが……」

「ふくん? 私はまだ、君に『お義父さん』と呼ばれるつもりはないよ?」

「あつ、いや、そう言うつもりで言つたんじゃ……」

「えつ、何でなーくんはお父さんって呼んでいけないの?」

「お前は知らなくてもいい!」

「ええーっ!?!」

こいつ、変なところで鈍感だからな。てか、香澄に首突つ込まれると、後々面倒なことになりそうで怖い。というか、普通に知られるのが恥ずかしい。

「何にでも食いついてきやがって……。そう言うところ、嫌いじゃないんだけどさ……」

「おや? これはもしかして、香澄ちゃんの事も……?」

「ち、ちち、違いますから! そろそろからかうのは止めてくださいよ! / / /」

この人、キャラこんなだったか!?! 沙綾がたまに俺の事からかってくるのは、この人に似たんだろうな、きつと……。

「ちよ、沙綾も何か言ってくれよ! お父さん、今日は何かテンション高くないか!?!」

「……え? あ、うん。そうだね」

「……沙綾?」

何だ……? 沙綾の様子が少し変だ。さっきまでは普通だったのに、別人のように沈んだ表情を見せている。今も何か反応を示しているようなものだが、軽く相槌を打つだけで静かに俯いているばかりだ。

バンドへの思いを語り、これから先に進もうと決意を見せていたのに。その反面、沙綾からは笑顔が消えている。その理由がわからない。

「今日は朝から張り切っちゃってね。いつもより気合い入れて作ったんだ」

「そうなんですネ！……あれ、このパン箱、前に頼んでた量よりも多くないですか？」

「張り切りすぎて、たくさん作ってしまったね。余るかもしれないから、その時はみんなで山分けして食べてほしいんだ」

「えっ、いいんですか?!ありがとうございます!」

確かに、当初の予定とは違う数のパン箱が、車の中には積みあがっている。喫茶店で売り切るには少し多いかもしれないが、それだけのパンを提供してくれるやまぶきベーカリーには、感謝しかないな。

「やったね、なーくん!みんなもきつと喜ぶよ!」

「ああ!前に試食してないパンも何種類もあるし、これはお客さんも喜んでくれるな!」

「ハハハ。そう言ってくれれば、私も作った甲斐があったよ!」

それにしても、色んなパンがあるな。おっ、こっちのパン箱にはチョココロネが入ってる。りみが喜びそうだな。

「見てみるよ、沙綾!お父さんがこんなにー!」

だが、そう言いかけて俺は、続く言葉を抑え込む。沙綾は俺たちの輪に入ろうともしないまま、時が止まったかのように呆然としていたから。

「沙綾……?」

やはり、今の沙綾は何かがおかしい。あれだけ元気だったはずなのに、どうしてこんなにも暗く落ち込んでしまっているのか。

香澄とのやり取りから今まで、そう時間は経っていないはずだ。恐らく10分も過ぎていない。その間に、沙綾の感情をここまで欠落させるほどの何かがあったことになる。

バンドには乗り気のはずだ。さっきの告白に嘘はない。なら、その後か?けど、後と言われてもな……沙綾に何か変わったことがあった

かどうか……。

「……………」

ダメだ。それらしい理由が何一つとして思い当たらない。これは直接聞いた方が早いかな。

けど、目の前には沙綾のお父さんがいる。それに、香澄だって。沙綾の事を考えると、どっちにも迷惑をかけたくないはずだ。だから、ここで無理に詮索するよりは、少し人気のない場所に移った方が……。

「沙綾」

「……………」

「さーや？お父さん呼んでるよ？」

「…………あつ、ごめん香澄。お父さんも。何だった？」

ボーっとしてて、名前を呼ぶ声すら聞こえていないみたいだった。香澄に肩を叩かれたことで、沙綾はハッと我に返る。

何が沙綾を変えたのか。その答えは、意外にもすぐに明らかとなる。

「…………気にしてるんだな。母さんの事」

「っ!?それ…………何で」

「さっき母さんから着信が来てたから、かけ直したら純が出たんだ。それで、母さんが倒れたって話を聞いた」

「純…………こっちから伝えるって言ったのに…………」

沙綾の困り果てた顔を見て、俺は悟る。きつと、ここに来るまでの間にお母さんが倒れた話を聞いていたんだ。それを、香澄や俺には黙っておこうとしたんだ。余計な心配をかけないために。

けど、不本意にもお父さんの口から告げられた、沙綾のお母さんの容態。文化祭にすら身が入っていない沙綾を見て、親心で気にかけてくれたからこそその言葉だったんだろう。

「え…………お母さん、倒れたって…………!？」

「…………うん。さっき、純から電話かかってきて、それで母さんが倒れたって聞いたんだ」

「じゃあ、今沙綾のお母さんは…………!？」

「これが終わったら、すぐに私が戻って病院に連れていく。だから、心配はしなくてもいいよ」

心配になるに決まっている。友達の母親が倒れて、心を痛めないわけがない。それに、この事を知った沙綾の気持ちだって……。

「だったらすぐにでも運び出します！なーくんもお願い！」

「わかっている！とりあえず、すぐに車出せるように箱だけでも一旦車から降ろすぞ！」

「いや……そこまで急がなくてもいいよ。少し、沙綾と話がしたいからね」

パン箱を担ごうとする俺たちを、沙綾のお父さんはゆっくりでいと制する。そして、今もまだ何も動こうとはしない沙綾の元へ、お父さんは近づいて行つた。

「……沙綾。お母さんの事は、何も気にしなくてもいい。沙綾には、やるべきことがあつて、いるべき場所があるはずだよ」

「わかっているよ。けど……」

「沙綾は家族思いだ。前に母さんが倒れた時の事、今もずっと気にしているんだね。自分が傍にいないくて、純と紗南に怖い思いをさせてしまったから」

「……うん」

「家の事は気にしないで、自分の好きな事だけしていてほしい。お父さんは……いや、お母さんだってそう思ってるんだから」

この人も、後悔しているんだろう。自分の娘に、望まない生活を強いることになってしまったから。それに気づけずに、今まで甘えてしまった事も。

だから、言葉を投げかけているんだ。こんな時だからこそ、親として。子供が立ち止まって、道を選ばずに悩んでいるなら、その背中を押してあげるのが大人の務めだ。それは、この人にしかできない。

「沙綾がバンドを止めた時だって、受験や内部進学の実験があるからと言っていたけど……それだけじゃないんだろう？お母さんのために、自分から止めたんだろ？」

「……気づいていたんだ」

「いや、あの時はその言葉を鵜呑みにしてしまっただ。昨日の話が聞こえてきて、私はようやく真実を知ったんだ。お父さんやお母さんも、何も疑わなかったから。……心の中では、沙綾が一番辛かったはずなのにな」

やり切れない思いが、握りしめられた拳の震えから伝わってくる。沙綾の本心に触れた時、この人は一体どれだけ自分を責めた事だろう。

「不甲斐ない……情けないよ。娘の事すら何もわかってやれずに、ただ追い詰めるような真似しかできなかったんだから」

「そんな……それはお父さんのせいじゃない！私はただ、少しでも支えになりたかっただけで、自分で勝手に決めただけ！お父さんが自分を責める必要なんてどこにもない！」

「……こんな時でも、沙綾は父さんの事を第一に心配してくれるんだな。やっぱり、沙綾は優しいよ」

自分より他人を。それが沙綾らしさでもある。だが、それは時として自分を縛る鎖にもなってしまう。沙綾がバンドを止めたように。

「だからこれは、私の責務だ。親として、沙綾にこれ以上やりたい事まで失わせるような真似はさせたくはない。これからは、もっと頼りになるような父親として、力の限り家族を支えていく」

「お父さん……」

沙綾が前を向いたように、この人もまた前を向いている。父として決意を語るその姿が、俺には勇ましく見えた。

「すまないね、二人とも。話は終わったよ。後は私の方で何とかするから、沙綾の事はー」
「待って」

が、そんな彼を止めたのは、他でもない沙綾だった。俺たちへの言葉を遮り、話を終わらせようとする父を再び向き合わせる。

父の思いを聞き、それでも引き止めて何を語るのか。バンドへの思いか。母への思いか。何にせよ……沙綾は、何か決意のある表情を見せていた。

さつきとは違う。沈んではいないが、引き締まったような強い覚悟

をその瞳からは感じ取れた。沙綾のお父さんの背中越しに、沙綾の姿が映る。

そんな沙綾が語ったのは……。

「私も車に乗せて。一緒に病院まで連れて行ってほしいんだ」

「え……!?!」

パンを車から降ろし終わったら、このまま沙綾もお父さんに付き添って家に戻り、病院へと向かう。そう言っているんだ。

香澄も思わず声を上げてしまったように……俺も驚いていた。今から向かつては、喫茶店にはほとんど顔を出せなくなるかもしれない。ライブだって、沙綾抜きで行う事になるかもしれない。

自分に正直になって、ここからスタートするための大事なライブだ。ただのライブとは違う。そこに沙綾がいなくては、何の意味もない。

けど、沙綾らしいとも思った。どこまでも優しく、だからこそ振り回されて。今もこの決断に至るまでに、どれだけの苦労を重ねたのかわからない。

だから、場違いにも笑みがこぼれてしまった。

「沙綾……今から病院に行くって事か？」

「うん、ごめん。お父さんの話聞いて、色々考えたんだけど……私はお母さんの所に行きたい。わがままかもしれないけど」

「……それは、どうしてだ？」

「自分のやりたい事をやってほしい……。お父さんはさつき、そう言ってた。前は何もないって答えてたかもしれないけど……今は違う。あるんだよ、やりたい事が」

ずっと沙綾の中に封じ込めてきたことが。それを今、沙綾は口にする。

「……私ね。昨日二人と話して気づいたの。やっぱり、私バンドがしたいって。今日の有志ライブも、香澄たちと一緒に出て、演奏して……一度しかない楽しい時間にしたって」

「だったら……」

「けど、私やっぱりお母さんの所に行きたい。今ここで行かなかったら、私この気持ちをどうにもできない。ライブやっても……きつと楽しめない」

意味のあるライブだから、中途半端な気持ちで臨みたくはない。不安を抱えて演奏しても、そこには何も生まれえない。

母の元に行き、全てにけじめをつけてからじゃないと……本当のライブはできないんだ。

「……それはできない。気持ちはわかるけど、沙綾はここに残るんだ。今学校を離れたら、文化祭はどうする？ やりたいと思っっているライブは？」

「そうかもしれない。私のわがままで、香澄たちには負担かけてしまうことになる。ライブだって、めちゃくちゃにしてしまう。だから本当は、父さんに任せるのが一番だって事くらい気づいてる」

それを押しつけ、沙綾は自分を押し通そうとしている。どれだけの迷惑がかかるのかなんて、誰かの事を第一に考える沙綾なら、すぐに想像がついているはずだ。

それでも、沙綾は……この選択をした。

「でも……ごめん香澄。それに翔も。私……やっぱりお母さんの事とか、純に紗南の事も、どうしても放っておけないんだよ」

「さーや……」

「バンドはやりたい。香澄たちと一緒にライブもしたい。でも……まだ、そのために前を向く強さが足りなかったんだね」

「前を向く、強さ……」

「あの時と同じ状況だから、余計に意識しちゃって。また同じ事、繰り返されるのかなって思うと……怖いんだ。私はまだ、完全に過去から抜け出せていないんだよ」

そうか……言われて初めて、俺は気がついた。このシチュエーション、沙綾が初めてライブを行った時とほぼ一緒だ。

軽くトラウマになっていてもおかしくはない。そんな出来事がフラッシュバックしてしまえば、恐怖はより強いものとなって襲い掛かってくるはずだ。

「だから、向き合わなくちゃ。お母さんの事や、純たちの事だけじゃない。ナツたちとバンド組んでた時の私……そんな時間を壊してしまった私……強がって、一人で全て背負い込もうとしてきた、昨日までの私とも」

その恐怖から抜け出し、自分自身と向き合うために。沙綾にとって、今必要なものはそれだった。

かつての自分を超えないと、その先には進めない。

「父さん、お願い。一緒に病院まで連れて行って」

もう一度、強く訴えかけるような口調で。沙綾はその言葉を繰り返す。

「私が、私じゃない誰かに何かを背負わせる勇気を手にしたのは……二人のおかげだから。けどもう少し、前を向くための時間が欲しいの」

「……………」

「私が本当にやりたい事を、やり遂げるためにも」

父が娘に気持ちをぶつけたように。今度は娘が、父に気持ちをぶつける。

全てを知って、その言葉にどう応えるか。沙綾の思いを優先させるのか、それとも反対するのか。しばらく無言の時間が続き、俺たちも余計な口出しすらできずに待つばかりだった。

そんな沈黙を破るように、沙綾のお父さんが答えを導きだした。

「………わかった。それで沙綾が納得するのなら、父さんは力になる」

「お父さん……………」

「と言うわけだ、二人とも。悪いけど、少しでも沙綾を預かるよ。ライブまでには、私が責任をもって学校まで送り届ける」

「わかりました。沙綾の事、お願いします」

それが選択なら、俺たちも止める事はしない。喫茶店は無理だとしても、絶対にライブには間に合わせると言ってくれたんだ。それを信じて、待つしかない。

俺はパン箱を一旦車から全て降ろし、すぐにでも車を出せる状態にする。それを見て、沙綾はお父さんと一緒に車へと乗りこもうとする。

そんな彼女の背中に向けて、香澄は……。

「待ってる」

「……っ！」

「待ってるから」

それは、昨日香澄が残した言葉。思いをぶつけ、涙に濡れ、それでもまだ立ち止まってしまふ沙綾に向けて、前に進んでほしいと祈りを込めた香澄からのメッセージ。

けど、今は違う。あの時とは別の意味を持ち、沙綾の心に強く響く。自分を信じて、待っていてくれる場所がここにはあるんだと、香澄のまなざしがそう告げていた。

あの時は、その言葉に言葉を返すことができなかった。けど、今は……返す時だ。その言葉に、気持ちに、応える時だと。

「……うん、待ってて」

沙綾を乗せた車が学校を離れた一方、俺たちはパン箱を教室まで運び終えていたところだった。

香澄にも手伝っては貰ったが、ほとんど俺が持つ事に。戻ってきたときは、一斉にクラスメイトに心配されることになったけどな。

「一人で大丈夫だった？このパン箱、結構重いよね？」

「さっきも二人掛かりで持ったけど、何人か連れて行った方がよかつたんじゃない？香澄と二人じゃ、大変だったでしょ？」

「いいって、気にすんなよ。俺はバイトで力仕事は慣れてるし、こういう時こそ男子の出番だ。女子にはちよつときついだらうし」

「でも、よかつたの？」

「何言ってるんだよ。これくらいなら俺一人でも大丈夫だって。俺には俺の、みんなにはみんなの仕事があるんだ。女子に力仕事なんて、そんな大変な事させたくないしな。困った時は、俺に頼ってくれ」

「あ、うん……／＼／＼」

俺はパン箱を教室に設置した大きめの棚にセットし、すぐにでも引き出せる状態にしておく。他のクラスメイトも率先して手伝ってくれたおかげで、時間もそこまでかからずに終割らせることができたけど。

後、なぜか無数の視線を感じるんだが。さつきからずっと見られるような気がして、どうにも落ち着かない。これはどういうことだ……？

「ところで、沙綾は？」

「ん？ああ……。ちよつと、ご家族が体調を崩してしまつてな。念のために病院に行くらしくて、沙綾も同行するらしい。今日の喫茶店は……多分、ほぼ沙綾抜きでやる事になる」

「そうなんだ……。沙綾がいないのは残念だけど、それなら仕方ないよね」

沙綾の事も、言葉を選びながらみんなに話す。辛いとは思うが、すぐに事情を理解して割りきってくれた。

だが……この中で一番辛いのは、きつと香澄だ。待つてるとは言つたが、今日の文化祭をずっと楽しみにしていたんだ。それはこの喫茶店も、ライブも。

喫茶店の準備に中心となつて動いてくれたのは、やっぱり実行委員の香澄と沙綾で。ライブだつて、今日一緒にできると知つて、香澄は大喜びだった。一緒に作り上げて、願っていた舞台が待っていたのに、それが急に崩れてしまった。

「よーし、みんな！さーやは参加できなくなっちゃったけど、私たちが1—Aカフェを盛り上げて行こーっ!!」

「……「おおーっ!!」「……」」

実行委員として、前に立って。心配させまいと、明るく振る舞っていても。そうして強がっていても、俺にはわかる。

香澄はこう見えて、繊細だから。誰よりも傷ついているはずなんだ。

「……香澄」

「うん? どーしたの、なーくん?」

「辛くなったら、いつでも言えよ。何もできないかもしれないが、シフト代わるくらいをサポートくらいはしてやるから」

「……うん。ありがと、なーくん。でも、私は待つって決めたから。大丈夫だよ」

「……そっか」

俺は少しでも落ち着けるならと、香澄の肩にポンと手を置いて教室を離れる。そんな香澄の耳が一瞬赤かった気がするが、見間違いかもしれない。

「……なーくん。——」

名前を呼び、その後ポツリとつぶやいた言葉は、彼に届くことはなく消えていく。香澄は緩めた頬を戻そうともしないまま、準備に戻っていった。

その一方、クラスメイトはと言うと……。

「成川君って、何かカッコよくない?」

「私たちの事気遣って、仕事引き受けてくれたって事でしょ? すっごく優しい!」

「困った時は頼ってくれ、だって……ちよつとときめいちやうかも」
翔が教室からいなくなったのを見計らい、その話題で持ち切りとなっていた。

「……何か、すごいね。翔君、みんなからカッコいいって言われてる……」

その様子を見ていたりみとたえも、翔の話をしていた。が、こっちはその人気っぷりに対しての話だったが。

「む……」

「えっ、おたえちゃん？どうしたの？」

「翔がちやほやされてるの見てたら、何だかモヤモヤしちゃう」

翔が褒められて、好感を持ってきている。翔の良さにクラスメイトが気づいたと言う事だから、悪い事ではないはずだ。むしろ、嬉しい事なのに。

だが、たえはどこか、この状況を受け入れられないでいる。周りが翔をもてはやしているのを見て、素直に快く思えない。

「私も……ちよつと胸がキューってなってるかも。何か、落ち着かないね」

「不安……ライブが近づいてるから？」

「翔君の事と、ライブの事は関係ないんじゃないかな……？」

「うくん……。じゃあ、何でだろ？」

「そ、それは……」

好きだから。成川翔と言う人物の事を、りみは異性として好きだと思っているから。自分に自信が持てなかった自分を変えてくれた翔を、いつしか好きになつていた。

それはたえもだった。翔に好意を持ち、だからこそよく思われていることに嫉妬してしまう。けど、二人はそのモヤモヤの生じる理由をよくわかつてはいない。

だが、それは明らかに……二人が翔を好きだと言う証明だった。

「おたえ、りみりん！そろそろ文化祭始まるから、一旦集合しよ！」

「わかつた〜！ほら、りみ。行こ？」

「うん！」

香澄に呼ばれ、二人はクラスメイトの輪の中に向かう。答えの出ないモヤモヤを放っておいて、目の前の文化祭に集中するために。

けど……二人は知らない。

自分が抱いている感情を、他にも抱いている人がいると。

星型のギターを持つ女の子。素直になれない女の子。今はまだ、バンドの舞台に立ててない女の子。

それは、それぞれがよく知る人であり……後にかけてえのない仲間として結ばれる五人。

その事を、五人それぞれが知る時は、まだ遠い。

その気持ちが表に出る時は、まだ先の話で……。

成川翔と言う人物の、悲劇と直面する時でもあった。

phrase 47 笑顔で

「いらっしやいませー！ーAカフェで休憩していきませんかー！」
いよいよ文化祭が始まった。各クラスがそれぞれ動きを見せる中、俺たちの喫茶店も営業をスタートさせる。

最初はまばらだった廊下の人通りも、すぐに多くなっていく。先輩や後輩、それに中等部らしい生徒まで。中には地域の人も来ていて、校内はすぐにお祭りムードに包まれる。話には聞いていたが、かなりの賑わいだな。

共学の高校だろうが、女子校だろうが、こういう雰囲気は何も変わらない。文化祭になればテンションも上がるし、勉学を忘れて楽しい時間を過ごす喜びは一緒なんだよな。

……もし、この場に沙綾がいたら。

「……っ」

「どうしたの？翔君」

「あっ、いや……何でもないよ、りみ」

顔に出ってしまっただろうか。りみが心配そうに覗き込んできたため、俺はいつも通りを装う。が、りみはすぐに目をそらすと、なぜか俯いてしまう。

今は喫茶店の裏方だ。表では何人かが接客をしているが、この時間は裏方にいるのは俺とりみの二人だけ。スペースも限られているし、自然と距離も近くなる。それで、悟られてしまったのかもな。

「……沙綾ちゃんの事？」

「……口でああ言っても、やっぱりわかるか」

「うん……。私も心配なんだ、沙綾ちゃんの事」

突然の離脱。クラスメイトにとっては、不慮のアクシデント程度にしか思っていないだろう。家族の体調が悪化して、その検査の付き添いと言われたらな。

だが……俺たちは違う。沙綾の抱える事情を知り、今この場にな

い事が何を表しているのかも一段踏み込んで理解している。

沙綾のお母さんに何かあった事。それで沙綾が学校を離れた事。かつての事件で戒めの楔を打ち込んだ沙綾が、何を思っただけで離れていったのか……。

行きつく先に浮かび上がるのは、ただただ沙綾への心配だけ。無事に戻ってくるように、過去にけじめをつけられるように。

もう一度、バンドと向き合うために。

「今は、沙綾ちゃんのために何かできる事はない……うん。心配するくらいしかできないと思う。でも、それが沙綾ちゃんの決めた事で、香澄ちゃんが待つって決めたなら……私も信じて待つてみる。今できる事、やってみる……！」

「そうか……りみ、強くなったな」
「えっ？」

「あんなに引つ込み思案で、自分に自信が持てなくて。オドオドしていたのが嘘みたいだ。自分から進んで何かしようって、できる事に全力で向き合えるのは立派だよ。変わったな、りみ」

出会ったばかりの頃は、話し方だつてぎこちなくて。何もできないんじゃないかって、恐怖で動く事すらできなかったのに。

でも今は、自分の言葉でハッキリと思いを伝えて。何もできないかもしれないけど、それでも何かできるかもしれないって、やれる事に取り組もうとしている。自分から動くこうとしているんだ。

本当、変わったよ。今のりみは強いだけじゃない。頼もしくも見える。それだけ、香澄たちと過ごした時間がもたらした変化は、大きかったんだ。

「そ、それは……翔君が……」

「うん？」

「な、何でもない……」

よく聞こえなかったが、一瞬俺の名前が出たような気がする。ま、りみが何でもないと云った以上は、深追いするとよくないよな。

それはそれとして……。

「……………」

どうもさつきから、おかしいんだよな。

「わあ、このパンおいしー！」

「やまぶきベーカリーのパンです！何個でも食べられちゃいますよー！」

「おすすめて何かありますか？」

「んー、メロンパンにクリームパン。チョココロネやあんぱん、ミルクデニッシュも行けるでしょ？それからそれから……」

「アハハ、それって全部って事？」

「エヘヘー！はい、全部です！」

表から香澄の接客する声が聞こえてくるのだが、あんなので大丈夫なのかよ……。おすすめて聞かれて全部って、気持ちはわからなくもないんだけどさ。

「香澄ちゃん、何だか張り切ってるね」

「だな。ちよつと無理してるけど」

「えっ？」

「少し声に力入ってる。いつもより声も大きいし、無理に話広げようとしているのが丸見えだ」

「それは、接客だからじゃ……？」

「いや、違うな。あいつも、ただ待ってるって決めただけじゃないんだよ。本当は不安で、心配で、落ち込んでるんだ。そんなに強くなかないし、それを必死で隠そうとしてるだけなんだ」

自分の不安を誰かに移して、巻き込んでしまわないように。せつかの文化祭を、楽しい記憶のないまま終わらせたくはないから。そう思って香澄は、笑顔の仮面をつけてごまかしている。

そうして自分を奮い立たせて、強くあるうとしているだけ。でも、俺には脆く見えてしまう。これでも、幼馴染だからな……。

「だから、不安なのは俺たちだけじゃない。お互いにカバーしあって、沙綾が来るのを信じて待つ。」

「翔君……」

「ま、そう思ったのもりみと話してたおかげだな。ありがとう」

「私は、別に何も……」

「ただ。りみの方を向くと、すぐに目が合う。が、わざとらしく目をそらされる。まるで避けているように、逃げているように。」

その時決まって、りみは悲しい表情を見せるんだ。

「でも、私もその、翔君と話してたら元気出たかも。ありがとね、翔君」

「……それで？」

「えっ？」

「りみの元気がなかったのは、それだけが理由じゃないんだろ？」

「……っ」

「やっぱりか。沙綾がいない事への不安だけじゃない、どこか別の原因があるんだな。それも……俺に関係する何かが。」

「さっきからりみの様子がおかしかったからな。目が合っても、すぐに目をそらして逃げ出そうとするし」

「そ、それは……」

「俺、何かりみの機嫌を損ねるような事したかな……？知らない間にりみに嫌われるような事してたなら、これからは気をつける。謝るよ。だから、俺に理由を教えてくれないか……？」

正直心当たりが何もない。りみを不快にさせるような言動もしていないし、そもそもりみを嫌いになるはずがない。

「だとしたら、無意識に俺の言動がりみを傷つけていたと考えるのが自然だ。だが……それらしいものすら思い当たる節がない。」

とにかく、理由を知りたい。それだけなんです。

「え、いや……っ、ち、ちやうよ!?翔君はなんもしてない!そんなに思い詰めんでもええから!……はああっ!／＼／＼」

「えっ、そ、そうか?いや、気になったし、やっぱり視線とか合わないから、思い過ぎじゃない気がして……」

「関西弁丸出しだったな……。それだけ動揺して、焦ってたって事なのか。」

「でも、ありがとう翔君。やっぱり翔君は優しいね」

「そうか？今日は年に一回しかない文化祭だぞ？楽しまないと損だし、何かあったら力になりたいと思ってるよ」

「それを優しいって言うんだよ、翔君」

りみにそう言われたら……納得するしかないな。優しさの自覚は全然ないんだけど。

「……ただ、翔君が他の女の子と仲良く話してるの見てたら、私なんか場違いかなって思っちゃって」

「えっ？」

「あつ、いや、その……変だよ。私、何言ってるのかな……」

ポツリとつぶやいた、りみのそんな本音。すぐにごまかして、また俺から目をそらしたが、何となく事情は察した。

りみは、俺と話すクラスメイトと自分の姿を比べて、少し心細くなってしまったんだな。そう言う部分は、何も変わっていない。もちろん、それは悪い意味じゃない。

そして何故だか、これこそ場違いな気もするが……可愛らしく見えた。

「変じゃないさ。そう感じる事自体は、むしろいい事だ。感じて、それをどうするかを誤ると、周りからは変だと感じられるけどな」

「翔君……何だか難しくわかってないよ……」

「ハハ、悪い。とにかく、何も変じゃないって言いたかっただけだ。だから俺から逃げるような真似をしたって事か？」

「うん……。私、気が弱いし、みんなみたいに積極的じゃないから……。一緒にいても楽しくないんじゃないかなって……」

他人と自分を比べ、そのギャップに心を痛めてしまう事はある。ギャップって言うのは、自分と他人に目を向けていないと感じないから。そう言う意味では、りみの感じている気持ちも全て悪いとは言えない。

それで……俺が何気なくクラスメイトとしていた会話の中にも、り

みを苦しめるトリガーが潜んでいたってわけだ。だから一人苦悶していたと。

「何言ってるんだよ。俺はりみと一緒にいる時間、結構好きだけどな」

「えっ……!?す、すす、好き……!?／＼」

「音楽の話とか、バンドの事とか。そんな話ができるのは、りみだけだからな。香澄はちよつと違うし、有咲にとつては乗り気な話題じゃないだろうし。たえは……話していると疲れるし」

けど、りみは話していても自然と落ち着くんだよな。音楽の知識もあるし、ペースも緩やかだし。ずっと話していても、終始安定していて疲れないからな。

初めて会った時だって、ファミレスでかなり話し込んでしまったが、何も気疲れはしなかった。それまで全然面識もなかったはずなのに、しかも二人つきりだったのに。

早い話が、気が合ってるって感じなんだよな。

「だから、そんな自信なくすなよ。確かにりみは大人しいかもしれないけど、そこが取り柄でもあるんだ」

「あ……ううっ……／＼」

「前にも言ったろ?もつと自分に自信を持つてもいいって。りみは、自分が思ってるよりもいいところがたくさんあって——」

「し、翔君待って!す、ストップ!／＼」

と、りみがブンブンと手を振って、俺の話を遮ってくる。どうしたのかとりみを見ると、耳まで真っ赤にしながら上目遣いを見せている。その仕草に、俺の体温まで上がりそうになってしまう。

「そ、そんなに褒められると……その、恥ずかしいよ……／＼」

「えっ!?あ、いや、すまん!別に困らせたかったわけでも何でもなくて、ただりみが落ち込んだのをどうにかしたかったって言うか、励ましたかったって言うか……!」

「い、いいの!恥ずかしいけど、翔君が言ってくれた事嬉しかったから!」

それならよかったんだが……。つい熱が入ってしまって、りみを困らせそうになったからな。そこは少し反省だ。

だが、別の意味での問題は、この後に起こってしまった。

「そ、それに……」

「それに？」

「……わ、私と一緒にいる時間がすつ、す、すす、す……好きって言ってくれて、めっちゃ嬉しい！私も翔君といえるの、楽しいから！／／／／り、りみ……／／／／」

あ、あれ。何だこの空気。俺、今すぐえ熱くて仕方ない。

りみも急に顔をそらして、このまま爆発するんじゃないかと疑ってしまうほどに顔を赤らめる。チラチラとこっちを見つめる目つきは、俺の心拍数を上げるのにそう時間はかからなかった。

狭い空間の中で男女が二人。しかも、互いに顔を真っ赤にして見つめ合っている。これは俺たちだけでよかったと本当に思いたい。

もしこの現場を誰かに見られでもしたら、変な噂が経ってしまうのは確実。交代が来るまでに、何としても平常心を取り戻さないと……。

「あれ？何だかい感じの雰囲気だ。翔、告白でもした？」

「……っ!?!／／／」

っておい、たえ！お前はどうかしてこんなタイミングで帰ってくるんだよ!?!確かに、俺たちの次に裏方を担当するのは、たえではあるんだけどさー！

「あー、えつと……私ちよつと用事を思い出したから、もう少しゆっくり——」

「バカ、違うたえ！変な誤解するな！」

「おたえちゃん、これはその、何でもないよー！」

いや、これを何でもないで済ませるには相手が悪い。たえだぞ？香澄辺りにすぐに言いふらされそうな気がするし、ここは慎重に言葉を選んでいかないと。

「そうなの?」

「りみの言うとおりで。少し悩みを聞いてあげただけで、決してお前が思ってるような恋愛話じゃない!」

「……う、うん! 翔君が恥ずかしい事言うから、それでその……／＼／」

「ちよ、りみ!? それは俺が悪いみたいじゃないか!」

「はあっ!? ご、ごめん翔君! そんなつもりじゃ……」

必死に弁解しようとしているのに、逆に怪しさが目立ってしまう。慌てる俺たちを見て、たえはと言うと……。

「フフツ。仲いいんだね、二人とも」

「だから、お前なあ……」

「大丈夫、誰にも言わないよ。でも、私だつて負けてないからね」

「本当か! それは助か……ん?」

何とかたえの方が折れて、口止めには成功した。もう少し言及するかと思つてたんだが、思つたよりもすんなり引いてくれたな。

けど、こいつ最後……負けてないって何の話だ……?」

「さ、疑いも晴れた事だし、張り切つて行こー!」

「それは俺たちの言うセリフだからな!」

「でも、まだ次の交代のみんなも戻つて来てないし、それまではおたえちゃんと一緒に頑張ろう、翔君!」

「言われてみればそうだな。よし、ラストスパートだ!」

ここを乗り切れば、自由時間になる。他のクラスの出し物も見てみたいし、美羽のクラスにも行ってみたいからな。今朝も約束したし。

「なーくん、りみりん! 注文だよ! あっ、おたえも戻つて来てたんだ!」

「どんな事があつても、私は香澄の元に戻つてくるよ」

「スケールがデカいんだよ。それで香澄、お客さんか?」

「うん! 伝票置いてくね!」

それだけ伝えると、香澄は伝票を置いてそそくさと戻っていく。始

まっつてからずつと休みなく動いているが、大丈夫だろうか。

沙綾がいなくて、辛いはずなのに。だが、それでもあいつはあいつなりに頑張っている。だったら俺も頑張らないとな。

「で、注文は……と」

クロワツサンとカフェラテか。パンはすぐに用意できるし、そうするとラテアートに時間がかかりそうか。

「りみ、たえ。ラテアート組の出番だぞ。俺はパン取ってくるから、その間に頼む」

「任された。じゃあ、私はカフェの方準備するね」

「えっ!? 私、ラテアートあまり上手じゃないのに……」

とか言いながら、たえはたえで独特のセンスを発揮するんだよね……。ある意味、失敗よりも恐ろしい事が起こりそうで怖い。

俺はそんなやり取りを確認してから、頼まれたクロワツサンを取りに向かう。パンは全て、裏方として設けたスペースの端に置いた棚にしまっている。

「にしても、これだけのパンを準備してくれたやまぶきベーカリーには感謝しても仕切れないな」

普通にパン屋が開けるレベルの量だからな。これはもう、やまぶきベーカリー出張店と言っても間違いじゃない。と……クロワツサンも見つかったな。

「よし。後はカフェラテだが……おくい、りみ! どうだ?」

「あ、あれ? また失敗しちゃった……。うう、ラテアートが上手くできない……」

「いや、よくできてると思うぞ? 少し形は崩れてるけど、これで大丈夫だろ」

「そ、そうかな?」

りみが言うほど、失敗しているようにも見えないからな。このまま出しても問題ない。クロワツサンを皿に移し、カフェオレと共に並べる。

けど、これって何だ……?」

「かわいい、たぬきだ」

「それはないだろ、たえ。こいつはキツネだ」

「パンダだったんだけど……」

「あ」

全然惜しくも何もないな……。

「キツネはないよ、翔」

「う、うるさいな！たえだつて外してるだろ!？」

「でも、可愛いよ。写真撮ろうつと」

「わあく！取らないで〜！」

たえがカメラを構えて、りみの作ったパンダのラテアートを映しこむ。りみは手で隠そうとしていたが、たえがシャッターを切る方が早かった。

「お前、ずっとカメラ持ってるのかよ」

「もちろん。沙綾のために、少しでも思い出を残しておかないと」

そしてこのカメラは、たえの私物じゃない。沙綾のお父さんに借りたものだった。文化祭に出られないなら、せめて何か形にできるもので記録しておきたい。そう考えた結果がこれだった。

「よし、じゃあ持つてくぞ。お〜い、香澄！」

「は〜い！待つてたよ！」

俺が香澄を呼ぶと、すぐに戻って来てくれた。何か面白い事でもあったのか、さっき見たものとは少し違う笑顔を見せていた。

「はい、注文のパンとカフェラテだ」

「ありがと、なーくん！」

「随分と楽しそうだけど、何かあったのか？」

「面白いお客さんがいるんだ！さっきもずーつと話してたんだ！」

「へえ。そいつ、どんなやつなんだ？」

「あそこのテーブルに座ってる子！金色のロングヘアーの！」

「金髪……っ、あれって……」

香澄に言われた通り、俺はロングの金髪の女の子を探す。ちょうど、こちらに背を向ける位置だ。

けど、あの後ろ姿。俺の間違いじゃなかったら、きつと彼女だ。だが、面白いって言うのが、俺の中の彼女のキャラとは少しかけ離れている。せめてこっちを向いてくれたら、判別できるんだが……。

「……このパンって、あの子の注文だよな？」

「そうだよ？それがどうかしたの？」

「ちよつと確かめたい事があつてな。これ、俺が持つて行つてもいいか？」

「それはいいけど……なーくん、あの子の事知ってるの？」

「多分な。それを確かめる」

俺は香澄の代わりにパンとカフェラテをトレイに乗せ、彼女の元へと向かう。回り込み、ちよつと彼女と向き合う形になって、俺は確信する。

やつぱり俺は、彼女の事を知っている。この顔は、見た事がある。

「お待たせしました。クロワツサンとカフェラテでございます。……

弦巻（こころ）さん？」

「え？」

名前を呼ばれ、キョトンとしているようだった。だが、俺の顔を見た途端、すぐに誰なのかを思い出してくれたようで……。

「あなた……翔（じや）ない！このクラスの生徒だったのね！」

「お、おう。久しぶり、こころ。てか、普段はこんな感じなのか……」

「ええ！笑顔で楽しく！ハッピーな気分じゃないと！」

病院の時とキャラが違いすぎたから、内心驚いた。もつと物静かに接してくれると思つたんだが、飛びぬけて元気だ。香澄がこころの事を、面白いと言つた理由もわかるかもしれない。

「それにあたし、文化祭好きなの！どのクラスもみーんなが盛り上がつて、違つた笑顔を見せてくれるんだもの！」

「ハハ、そうだな。俺も文化祭の雰囲気、嫌いじゃないぜ？」

「翔（じや）ならそう言つてくれると思つたわ！あ、これいただくわね？」

「もちろん。食べてみてくれよ」

そう言つと、こころは持つてきたクロワツサンを食べ始めた。大きな口で、モグモグと味わうように頬張る。俺が作つたわけではない

が、緊張しながらその様子を見つめていた。

「……美味しいわ！これ、とつても最高よ！」

「これ、実は商店街のパン屋から取り寄せていてな。気に入ってくれたなら、俺も嬉しいよ」

「カフェオレも美味しいし、この喫茶店に来てよかったわ！あたし今、すっごくいい気分！」

カフェオレも堪能し、こころはご満悦のようだ。気に入ってくれたなら、俺たちも大満足だ。

「そっか。俺たちの喫茶店が、こころを笑顔にできたってわけだ」

「あら、翔だつて嬉しそうじゃない！あたしが笑顔になって、翔も笑顔になった！みんながハッピーな気持ちになれたのよ！」

「俺も笑顔……ハハ、そうだな！」

「やっぱり、誰かが笑顔になる瞬間っていいわね！こんな気持ちになれるなら、できるなら、あたしはもーっとたくさんの人に笑顔になってほしい！それがあたしの夢なの！」

「いいな、その夢。俺も応援するぜ」

「ええ！……でも、一番笑っていてほしいのは、この夢をくれた人なのに」

「あ……」

名前には出さなかったが、きつとあの子。今も病室で虚無の時間を重ねている、あの銀髪の女の子。

美空だ。

「……あつ、ごめんなさい翔。今度こそ楽しい話ができたのに、あたしのせいでつまらなくさせちゃうところだったわ」

「いや、いいさ。あの子がくれた夢が、今のこころを作っているんだ。少しくらいは、弱さを見せてもいいんじゃないか？」

「……ええ、そうね。ありがとう、翔。あなたがそう言ってくれたから、少し気が楽になったわ」

「そっか。ならよかったよ」

「だから……あなたも、少しは弱いところを見せてもいいと思うの、翔」

「……っ」

「こころの一言が、俺の胸に突き刺さる。それを軽く受け流せないのは、やはり俺の中で、まだ沙綾の事を割り切れていないからなのか。」

「……俺、無理に強がってるように見えてたのか？」

「今の翔の笑顔は、何だか違うの。上手く言葉にできないのだけど……心から楽しめてない、のかしら」

「……すごいな。そこまでわかるのか」

「本当に心から笑顔になれる時って、声や仕草に変化があるの。あたしはいろんな人を笑顔にしてきたけど……みんな、気持ち良さそうなの。そんな空気を感じて、それが無意識に声や仕草として現れて……」

笑顔を見てきたからこそ、笑顔から俺を見抜いた。もちろん、俺の抱える事情まではわかっていないだろうが、何かあると感づいたのは大したものだ。

「それにさっきの……香澄も、ここの店員さんも。みんな、笑顔なのに笑顔じゃないの。何か悩んで、モヤモヤしてるみたい」

香澄って……俺たちが準備している間、そこまで親しくなってたんだな。とまあ、それはそれとして……。

「……正解。これ以上は、隠していたらこころに悪いな」

「じゃあ……何かあったのかしら？」

「あまり詳しくは言えないが、クラスメイトが1人、文化祭に参加できなくなってるな。その子は今日のために、ずっと頑張ってくれてたんだが……今日になって、急に来れなくなってたんだ」

「そうだったの……」

「けど、俺は戻ってくるって信じてる。香澄も、きっと戻ってくるってな」

必ず戻ると、沙綾はそう約束した。だから俺たちも、待っていると決

めたんだ。沙綾がいなくても、この喫茶店を成功させてライブに臨まないといけない。

沙綾が来ると、信じて。

「……でも、そう簡単に言い聞かせられるほど、俺もできてないからさ。香澄だって、心配で仕方ないんだよ」

「ええ。その気持ちは、あたしにだってわかるわ」

「だから、素直に楽しめないんだと思う。クラスみんなは、そこまで深く事情を知らないが……やっぱり、本番でいないってのは大きいと思うからさ」

沙綾はクラスの中心で、頑張っていた。全体を引っ張り、支えになってくれていたんだ。パンの事だって、沙綾がいなかったら実現できなかったかもしれない。何から何まで、本当によく動いてくれたと思う。

それが、突然参加できなくなつて。一番楽しまないといけない沙綾が、非情にも楽しめなくなつて。

前を向いて、バンドにも向き合おうとしていた、その寸前で起こってしまった、今回の出来事。過去をなぞるかのような偶然が、俺たちにも不安を与える。

沙綾は、本当に大丈夫なのかと……。

「それは違うと思うわ、翔」

「えっ……？」

「その子がいなくて、上手く楽しめない……本当の笑顔になれない。でも、そんな時だからこそ、笑顔でいないと！」

そんな俺に対して、こころは力強く言葉を投げかける。言い分はもっともだが、それだけで全てが解決するわけじゃない。

そう簡単に気持ちの整理がつけられるのなら、今こうして苦労なんかしてないんだよ。あまりにも、急すぎたんだよ。

わかっているのに、不安は募る一方だから。

「それは、わかってるけど……」

「その子は戻ってくるんでしょ？あたしにはわからないけど、そうなんですよ？」

「……いつになるかはわからないけどな。それでも……必ず来るはずだ」

「だったら、笑っていないと！楽しまないと！だつて……」

その後が続いた言葉を聞いた瞬間、俺は何かを感じた。

「その子が戻ってきたときに、翔が楽しくなかったら意味ないじゃない!!」

「あ……っ」

ふわりと風が吹き、俺の中を突き抜けていくような、そんな感覚だった。

「その子を心配して、翔が文化祭を楽しめなかったら……それはその子にとって、嬉しい事じゃないと思うの。その子だって、戻ってきたときに笑顔じゃなくなるわ」

「それは……」

「もつと肩の力を抜いて、楽しんで。戻ってくるって信じてるなら、難しく考えないで笑いましょ！そうすれば、きっとその子も笑顔になれるわ!!」

「笑顔に……」

そうか……そうだな。俺は、何もわかっていなかったのかもしれないな。こころの言う通りだ。

心配するのはいいが、そのせいで俺まで楽しめなかったらどうするんだ。楽しんでるように見せていても、まだそれでも、心の底から

楽しめていたかって言われたら……嘘になるのかもな。

戻ってくる。それがわかってる。なら、何も心配する事はない。戻ってくる沙綾のために、笑顔になれる場所を用意する。それが、俺たちに与えられた、今文化祭に参加している俺たちにしかできない事だ。

「それじゃ、あたしはもう行くわね！そろそろ、待ち合わせの時間なの！」

「そっか。……ありがとな、こころ」

「ええ！翔が喜んでくれたら、あたしも嬉しいわ！」

俺は空になった皿とティーカップをトレイに置き、席を立ったところを見送る。少し小躍りしているこころを見て、俺は自然と笑みがこぼれる。と、

「あら……いい笑顔になったわね、翔！」

俺の方を振り返り、そう言い残してこころは教室を出ていく。俺は緩んだ口元を誇らしく思いながら、裏方の方へと洗い物を運んでいく。

「いい笑顔……か」

「なーくんお疲れ！もう交代の時間だよ！」

「あ、そうだったな。じゃ、後は任せるか」

俺は喫茶店の方を託し、エプロンを取って休憩に入る。りみもこれから休憩時間だが、既に着替えを終わらせて教室の外で待っていた。

香澄も、最初は休憩なしでやるつもりだったみたいだが、それはマズいと周囲から止められたんだろう。つけていたエプロンは外され、制服姿に戻っている。

つまり、俺と香澄、そしてりみの3人が同じタイミングで休憩に入ることになる。偶然にも、このメンバーになるとはな。

「お待たせ、りみりん！それじゃ、私たちも文化祭を楽しもう！」

「うん！香澄ちゃん、翔君、まずどこに行こっか？」

「どうしようかな……。なーくんは？」

「俺は特に決まってるないし、2人に合わせるよ。てか、どのクラスがどんな出し物してるかわかってないしな」

高等部だけじゃなく、中等部もあるんだからな。そっちの方はよくわからないし、行き先に關しては2人に任せておこう。

「それじゃあ、一個ずつ回ってみようよ！その方が楽しいかも！」

「よし、決まりだな。じゃ、2人とも……」

「……？」

「今日はせっかくの文化祭なんだ。難しい事は考えないで、とにかく楽しもう！そうすればきっと、沙綾だって笑顔で戻って来てくれるはずだ！」

「……うん、そうだね翔君！私たちが文化祭楽しまないと、沙綾ちゃんだって楽しくなれないよね！」

「よし！それじゃあ、まずはあのクラスからだよ！行こう、りみりん！なーくん!!」

「……ああ!!」

香澄に手を引かれ、俺とりみは生徒に紛れて廊下を歩きだす。

沙綾の分まで、笑顔で文化祭を楽しむために。

phrase 48 今だけの時間

「あー、怖かったね〜！」

「ああ……。マジでヤバかった……」

「でも、面白かったよね。あのお化け屋敷」

「えっ!？」

休憩時間となり、俺は香澄とりみの3人で文化祭の出し物を順番に見て回っていた。今は上級生のクラスのお化け屋敷に入り、恐怖体験を済ませてきたところだ。

だが……。祭りの出し物にするレベルの怖さじゃない。セットやメイクのクオリティ、考え抜かれた恐怖演出、全てに力が入っている。入る前は正直甘く見ていたが、今なら言える。もう二度と入りたくない。

なのに、それをりみは面白かっただと……。!?俺はこれでもホラー系統はある程度免疫があるが、今回はマジの怖さだった。それだけホラー好きなんだな、りみは……。

「りみりん、あれ面白かったの……?？」

「えっ?うん。怖かったけど、面白かったよ」

「す、すごいね、りみりん……。私、怖いのが苦手だから、ずっとなーくんにしがみついちやっただ……」

「おかげですげえ動きにくかったし、踏まれたり蹴られたりでポロポロだったんだからな!？」

「うう、なーくんごめんね……」

しかも香澄がくっついてるせいで、走って逃げようにも逃げられなかったし。無理に動こうとしたら、香澄が暴れて体中傷だらけになるし。

それに、俺が離れないように引き留める勢いで、何か柔らかい物も……。おっと、その話は止めだ、止め。誤解を招くような言い方は避けよう。

「にしても、あのお化け屋敷は怖かったぞ……。まだ心臓バクバクしてる……」

「本当だ。翔の心臓、すごく速いね」

ん？翔？香澄とりみは俺を呼び捨てにしないはずだし、しかも背後から温もりを感じる……。

「……って、うおおおお!?は、おま、たえ!?な、何でここにいるんだよ!?」

振り返って確認すると、そこにいたのはたえだった。ピタリとくつき、背中に耳をあてて心音を聞いているようだった。

ただでさえ怖い思いしてたのに、不意打ちで現れるんじゃない!?しかもこいつ、さつきまでいなかったはずだからな!?

「私も怖かった。すごく心臓バクバクしてる。翔も聞いてみる?」

「質問に答えろ!お前今、シフト入ってる時間帯だろ!?抜け出してきたんじゃないだろうな!」

「さすがにそれはないよー。ブーブー」

「変な鳴き声出してんじゃないやねえ!お前は豚かよ!」

「これ、ウサギの鳴き声だよ?」

「どっちでもいいんだが!」

何かもう、さつきまでとは別の理由で心拍数上がりそうなんだが。

「ちようどお客さんも落ち着いてきたみたいだったし、休憩してもいいよって」

「だからって、急に後ろから話しかけるな。心臓止まるかと思ったぞ」

「え?翔の心臓動いてるよ?」

「バカ、言葉のアヤだ」

本当こんな時でもブレないのな、こいつは。

「ビックリしたよ、おたえく……」

「ごめんね、香澄」

「おい、俺には謝らないのか」

「それで、次はどこに行くのか決まってるの?」

しかも普通に無視するのかよ。俺の事はそっちのけって訳ですか。すげえ悲しいんだけど。

「ううん、まだ全然決まってる……」

「おたえちゃんは、どこか行きたい場所あるの?」

「それが、実はね……」

「おっ？何か気になるクラスの出し物でもあるのか？」

「ないかな」

「ないのかよ。だったらそれっぽく間を開けなくてもいいだろうが。いつにも増して、花園節全開だな。」

「ま……それはつまり、こいつも普段通りに見えて、実は文化祭楽しんでるって事だよな。昔のたえの素性を思うと、こうして友達と一緒に過ごす文化祭は、楽しいに決まってる。」

「そっか……。じゃあ今からどうしよう？なーくん、どこか行きたいところない？」

「俺かよ。だったら、一応はあるんだけど……」

「えっ、どこどこ!？」

「すげえ食いつくな……。いや、そろそろ美羽のクラスにも行ってみたいと思ってるな」

「みーちゃんのクラス！うん、私も行ってみたい！」

「行き先も決まったところで、俺たちは高等部の校舎を離れ、中等部の方へと向かう事に。内部生のりみやたえは懐かしさに浸るのかもしれないが、俺や香澄は初めてだ。ちよつと楽しみだ。」

「香澄ちゃんと翔君は初めてなんだよね。中等部」

「ああ。りみとたえは、去年まではこっちの校舎にいたんだよな」

「うん。行こうと思えばいつでも行けるけど、高等部の子にとっては思い出の場所だよ」

「遠く離れてしまったわけじゃないけど、思い出として残り続ける大切な場所……か。そう言うの、俺は結構いいと思うな。」

「ところで、美羽ちゃんのクラスって何の出し物なの？」

「メイド喫茶なんだって！あっちゃんに教えてもらったんだ！」

「冥途の土産……」

「そっちじゃねえよ」

「中等部の校舎の造りはわからないが、メイド喫茶って言うくらいだ。メイドの格好をした生徒が、どこかにはいるはず。まずはそれを探していくか。」

「さて、美羽はどこに……おっ」

俺の視線の先には、よく見るメイド服の格好をした生徒が。プラカードを持って、客引きをしているようだが……あれは、俺たちにとっては見覚えのある顔だ。

「あーあそこにいるの、あつちゃんだ！おっ、あつちゃん!!」
「うえっ!?お、お姉ちゃん!？」

そこにいたのは明日香だった。明日香も香澄に呼ばれて気がついたのか、俺たちの方に目を向ける。が、香澄に大声で名前を呼ばれ、しかもブンブンと手まで振られていた明日香は、恥ずかしさから若干スルーしてたけど。

ま、その後近づいた香澄に抱き着かれて、もうげんなりしてたけどな。明日香、強く生きるんだ。

「久しぶりだね、明日香ちゃん」

「あつ、牛込さん。それに翔さんと……花園さんでしたよね。お久しぶり……ちよ、お姉ちゃん、近いから。みんな見てるから、くつつかないで……」

……そりゃ、実の姉にこうもベタベタされたら、名前呼ばれてもスルーしたくもなるよなあ。

「えっいいじゃん！私たち、あつちゃんのクラスに遊びに来たんだよ！」

「遊びについて……喫茶店に来てくれたって事？」

「ああ、そのつもりだよ、明日香。美羽に誘われたんだ。ちょうど時間も空いてたし、どうせなら香澄たち誘って行こうかなって思ったんだ」

今朝も、美羽は俺たちが来てくれるのを楽しみにしてくれていたかな。俺もメイド喫茶がどんなものなのか、気になってるし。

「……………」

もう一人、ここに連れていきたい子が、いたんだけどな……。

「それにしても翔、ぎこちなかったよね。さつきも緊張してたし、こういう場所って翔なら行き慣れてると思ってたのに」

「たえ、次にそれ言ったらグーで殴るぞ」

明日香に案内してもらい、俺たちはメイド喫茶の中へ。すぐに何人かの生徒扮するメイドにお出迎えしてもらい、今はジュースを注文してくつろいでいるところだった。

でも俺、メイド喫茶とかよくわかんないんだよな……。教室に入る時も、お帰りなさいませとか何とか言われたが……。縁がなさ過ぎて、どう返せばいいのか戸惑う。決してたえの言うような変なイメージ通りの男じゃないぞ、俺は。

「メイドさんの衣装って可愛いね！私たちのクラスも、メイド喫茶にすればよかったかな〜？」

「わ、私は恥ずかしいかな、香澄ちゃん……」

いや、俺とかどうするんだよ。一人だけ女装する羽目になってしまふぞ。と、そんな俺たちに声をかける一人のメイドが。

「ごゆっくりできてますでしょうか、ご主人様？」

「ああ。最初はちよつと、こういう場所に慣れてなかったから戸惑ったけど……って、何だよ美羽か」

「あく何その言い方！可愛い妹がこうして来てくれたのに、ちよつと酷くない!?……あ、やば、ついいつもの口調に……！」

「わ、悪かったって。そんなつもりは何もなかったから」

思わず素の自分に戻ってはいいたが、そこにはメイドになり切った美羽が。さっきの明日香もだが、いつもとは違った新鮮な格好に身を包む姿に、俺は目を奪われていた。

「うわあくめつちや可愛い！」

「美羽、すごく似合ってる！」

「みーちゃん、キラキラしてる！」

「そんな、とんでもない！わたくしのようなメイドに対して、何ともっ

「たいないお言葉か……なくんてね♪皆さん、来てくれたんですね！」
「って、結局メイドモードから元に戻るのかよ。まあ顔なじみではあるし、こっちの方が余計な気を回さなくても済むか。」

「ちようど休憩時間になったし、そろそろ美羽のクラスにも行こうと思つてな。それで、調子の方はどうだ？」

「フッフッフ……それがね、お兄ちゃん。思つたよりも受けが良くて、もう大繁盛だよ！中等部もだけど、高等部からもメイド喫茶に来てくれるんだ！」

「おつ、それはよかつたな！」

「忙しいけど、楽しいし！お客さんも喜んでくれてるし、出し物をメイド喫茶にして本当に正解だったよ！」

メイド喫茶を提案したのは、確か美羽だったみたいだしな。自分の案がこうして成功していて、嫌な気にはならないだろう。

それに……美羽には、この文化祭に並々ならない思いがある。本当は今頃、まだ病院のベッドにいるはずだったんだ。その反対を押し切り、今こうしてクラスメイトと一緒に文化祭に参加しているんだ。

最後だから。その思いが、美羽の言葉が、俺を動かした。だから今、美羽はここにいる。その喜びは……俺なんかじゃ推し量れるものじゃない。

「おおく！すごいね、みーちゃん！」

「エヘヘ！香澄さんたちの方はどうなんですか？」

「うん！こつちもバツチリだよ！みんなで……そう、みんなで頑張つてるよ！」

今……香澄、『みんな』と言つた時に一瞬言葉が詰まつたな。ここにはいない彼女の事が、俺の頭にもチラリとよぎる。

「お互い、上手くいつてるって事ですな。あつ、そうだ！私、そろそろ休憩時間だし、一緒に見て回つてもいいですか!？」

「もつちろん！みんなもいいよね？」

「ああ。美羽さえいいなら、俺は大歓迎だ」

「私もいいよ！」

「さんせーい」

「ありがとうございます！それじゃ、着替えてくるので待っていてもらえますか？」

「あつ、待ってミーちゃん！着替える前に、メイドさんの格好で一緒に写真撮ろうよ！」

教室の裏方に消えていこうとする美羽を、香澄は急いで引き留める。せつかくなら、この格好の美羽と写真を撮っておきたいって事だろう。

「おお、記念写真！しかもよく見たら、たえさん立派なカメラ持ってるじゃないですか！」

「えっへん。すごいでしょ」

「お前のじゃねえだろ。で、撮ってくれるか？」

「うん、いいよ！あつ、だったら明日香も呼んでこよう！おっ、明日香〜！」

先に外に出ていった美羽を追いかけ、俺たちも教室を後にする。他の生徒もいるし、さすがに邪魔になるしな。

と、意気揚々と飛び出していった美羽もすぐ俺たちの元に戻ってきた。明日香の手を掴んではいるが、当の本人はあまり乗り気じゃなさそう。周りを気にして、露骨に嫌そうな顔をしている。

「ほら、明日香！お兄ちゃんたちがせつかく写真撮るんだから、一緒に入ろうよ！」

「ええ……。みんな見てるし、恥ずかしいんだけど……」

「いいじゃん！ほら、皆さんからも言ってやってくださいよ！」

ここにきて他力本願かよ。もう少し自分で説得しようとは思わなかったのか。

「あつちゃん、お願い！私と写真撮って！小さい頃は、仲良く写真撮ってたじゃん！」

「そ、それは小っちゃかった時の話でしょ！？そんな事言われても……」
「それに今日、急に来られなくなった友達がいるんだ。その子のために、思い出をカメラに残しておきたくて〜！いいでしょ？」

「ちよ、うるさいし……。お姉ちゃんのせいで、人集まってきちゃったから嫌なんだけどな……」

そうこうしている間に、周りにはチラチラと俺たちを伺う中等部の生徒たちが。高等部の生徒ってだけでも珍しいのに、どうやらさっきの香澄の大声のせいで余計に注目を浴びてしまったらしい。

そうじゃなかったら、別にこのメンバーで注目を集めるような事は何も……って、待てよ。この状況、冷静に考えたら俺も注目集める一因じゃね……？

「ダメかな？私、明日香ちゃんと一緒に写真撮りたいな」

「牛込さん……」

「そうだよー！りみさんだってこう言ってるし！私、どうしても明日香と写真撮りたいんだよー！」

「もう、何でそこまで……」

ああ、そうか。美羽が写真撮る事に賛成してくれたのは……。

「……俺からも頼むよ。美羽だけじゃなくて、明日香とも写真撮りたいんだ」

「翔さんまで……」

「それに、明日香にとっては中学最後だろ？こういう形で思い出、残しておきたいからさ」

「そ、そこまで言われたら……わかりましたよ。1枚だけですからね？」

「やったー！ありがと、明日香!!」

美羽が承諾してくれた事に喜びを隠せず、思わず香澄のように抱き着く美羽。くつつかれた明日香は、恥ずかしさと同時に大げさな喜びのように困惑もしていた。

けど、俺にはわかつている。美羽にとっては、内部進学せずに羽丘を目指す明日香とは、今年の文化祭が最後だから……。美羽は、明日香との思い出を残すために、少しでも多くの時間を作ろうとしているんだ。

美羽が文化祭にどうしても参加したいと説得してきた時、美羽が口にした事。中学最後の文化祭だから、その時にしか経験できない文化

祭を楽しみたい。それが一番の理由だった。

けど、それだけじゃなかった。美羽は明日香と、最後の文化祭を楽しみたかった。同じ格好に身を包んで、クラスでメイド喫茶をすることも。そんな特別な時間でも、さつきみたいに言葉を交わすだけの何気ないやり取りでも。

たった1枚、写真を撮るだけでも。

「はい、カメラ隊準備完了であります」

「一人しかいないのに隊って何だよ。てか、それじゃたえが入らないだろ」

「……翔って本当天才だよね」

「お前が本当のバカだって説が有力だと思うんだが？」

たえがシャッターマンになろうとしていたので、俺はメイドの一人に写真を撮ってもらおうように頼む。明日香も承諾してくれたわけだし、せつかなので明日香をセンターにして6人で写真を撮る事に。「うう……。同級生の知り合いと写真撮るならともかく、お姉ちゃんたちと撮るのは恥ずかしいな……」

「隣に同級生って言うか、幼馴染がいるのにな？」

「それとこれとは別。……けど」

「けど？」

「美羽と写真撮るのは、その……悪くないかなって思ったし。一番の友達だもん」

「明日香……」

その言葉に、美羽が少し顔をそらして涙ぐみそうになっていたのは……黙っておいてあげよう。

「ポーズどうしよう。ウサギかな。それとも、ギターにしようかな」

「ギターのポーズってどうするんだよ」

「エアギターみたいな感じで、ギューンンって」

そうしているうちに、カメラの人は準備OKみたいだ。俺は無難にピースサインでもしていよう。

が、たえだけポージングが決まらないと時間がかかる。ウサギなのか、ギターなのか。すぐには決めかねているみたいだったが……正直どっちでもいいんだけど。

「……よし、決めた。もう迷わないよ」

「早くしろよ。いつまでも待たせてるのも悪いし」

「うん。パンダにする」

あの二択はどこに行ったんだよ。

「……で、今からどうするよ」

記念写真を撮り終え、俺たちは一旦高等部の方へと戻って来た。美羽も一緒なら、中等部を見て回るのもいいが、高等部にはまだ来てないと思ったからだ。

明日香はまだシフト中のため、一緒には行けないとの事。ま、それなら仕方ない。美羽と香澄は泣きついてたが。

「お兄ちゃんたちのクラスにも行ってみたいんだけど……その前に、沙綾さんと有咲さんはいないんですか？」

「有咲は別のクラスだけど……沙綾は、ちよつと急用で帰って行ってな」

「えっ、そうなの!?!沙綾さん、今朝はあんなに元気だったのに!?!」

「……まあな」

残念そうにしていた美羽だったが、そこでハツと口を紡ぐ。どうしたのかと周りを見ると、ほんのわずかに沈んだ素振りを見せる香澄たちが。何かを悟り、深追いは止めようと思ったんだらう。

「……じゃあ、有咲さんは今、クラスにいるって事？」

「うん?多分そうだな。てか、俺たちも有咲のクラスにはまだ行っていないんだよな」

「そう言えば、今朝別れてから有咲ちゃんの姿見てないよね」

「それに有咲のクラス、何の出し物するのか知らない気がする」
「言われてみれば、確かに……」

香澄も聞いていないんだな。けど、考えてみれば有咲の口から文化祭の事を聞いた記憶が全然ない。そもそも文化祭に対して消極的だったしな。

「じゃ、そこにしましょうよ！香澄さん、有咲さんのクラス気になりませんか!？」

「気になる！みんなも行ってみようよ！」

そんなわけで、俺たちは有咲のクラスである1―Bへ。ちょうど隣が俺たちのクラスだし、この流れで美羽を喫茶店にも連れていけるな。

「ところで香澄さん、今日のライブは大丈夫ですか？前は練習見られませんでしたけど……」

「大丈夫だよ！多分……」

「た、多分なんですね……」

ライブまでの時間は、すぐそこまで迫っている。香澄が心配してるのは、演奏面の事もあるだろうが……恐らくそうじゃない。

「自信もって、香澄。前よりも上達してるし、ミスも目立たなくなってる。落ち着いたら、きつとやれるよ」

「私も心配だけど、みんなで練習頑張ったから。香澄ちゃん、きつとみんなで成功させられるよ……!」

「心配するな、香澄。信じようぜ、成功する事を。きつと上手くいくからさ」

「なーくん……みんな……」

「おっ！お兄ちゃん、今カッコいい事言ったね！」

よしてくれよ、美羽。恥ずかしいだろうが。

「さて……と。B組に着いたな。で、これは一体何の出し物だ……?」「えっと、どれどれ……?」

教室の前には、手作りの看板が。お姫様のイラストとともに、カラフルな文字で『視聴者参加型アトラクション 姫を笑わせろ!』と書かれている。喫茶店のようなタイプの出し物と言うわけじゃないら

しい。

「わ、笑わせるの？私、そう言うの苦手かも……」

「りみさんもですか？私も、笑わせられる自信ないですね……」

「りみりん、みーちゃん！諦めちゃダメだよ！おたえは!？」

「私もダメかもしれない」

いや、お前は独特のセンスで笑いを誘ってくるだろうが。ないとは言わせないぞ。

「とにかく入ってみるか。有咲もいるかもしれないぞ？」

「そうだね！よーし、行こー！」

物怖じしないで、香澄はすぐに中に入る。それが香澄のいいところだったり、悪いところだったり。

で、俺たちも中に続く……そこには教壇を使った特設のステージが。その前には大勢の観客が集まり、前の方から順番に笑いを取ろうと持ちネタを披露している。

ステージには姫らしい女子生徒と、その側近をイメージした二人の女子生徒が。側近の一人は、あれ海崎さんだな。

「ああ……。誰か、姫を笑わせることができるお方はおらぬものか……」

また一人、挑戦者が姫の前に玉砕したみたいだな。姫は優雅に腰を下ろし、素っ気ない表情を見せている。

けど、あれってさ……もしかなくても、あいつだよな……？

「あつ、アハハ！あれって、もしかして……!？」

「おたえ、カメラ撮って!？」

「もうやってるよ」

貴族と見違えそうな金髪。いつもの髪形とは違うが、香澄たちの反応を見て確信する。

「有咲ちゃんだ!？」

「アハハッ、おくい有咲!？」

「似合ってるじゃねえか！ほら、今写真撮ってやるぞ!？」

「こつち向いて。いい笑顔だよ！ハイ、チーズ!？」

「じゃねえよ!!お前ら、邪魔すんな！そんで見るな！てか、何であのウ

「ゼエ妹までいる!？」

「覚えててくれたんですね!有咲さ……プツ」

「何笑ってんだよー!!」

最早キヤラも隠すことなく、その変わりようにむしろ俺たちが笑ってしまおう事態に。

で、收拾がつかなくなったのか、数分後。

「帰る!」

「え〜?有咲、可愛かったじゃん!」

「そうですよ!本物のお嬢様って感じでした!」

「香澄に続いて、お前まで茶化すんじゃないよ!ぜってー本心じゃねーだろ!」

機嫌を損ねた有咲が、大事な姫役を放棄して制服姿に戻っていた。髪もツインテールになってるし、俺たちが止めなかったらすぐにも帰りだしそうだ。

「あーもう、恥ずかしい……。セリフがない役だからって言われたから引き受けたのに……。穴があつたら入りたい……」

「穴、穴……落とし穴?」

「花園さん、ちげえ!そうじゃねー!」

「まあまあ、そう怒るなよ。有咲姫」

「お前まで止めろ!本当そう言うところは兄妹だな!」

仕方ないだろ、兄妹なんだし。それに有咲はこういう役回りの方が活き活きしてる気がする。

「でも、大丈夫なの?このままじゃ、クラスのみんな困っちゃうんじゃない?」

「そりゃ、牛込さんの言う事もわかるけど……私、関係ねーし。もう疲れたし、本当に帰るからな?」

おいおい、本当に帰りだしそうだと。さすがに見かねたのか、香澄が手を取って止めに入る。

「えっ、ちょっと待ってよ!有咲、ライブは!？」

「知るかよ、そんなもん!」

「今日までいっぱい練習したじゃん!一緒にライブしたいよ〜!」

「そんなの、そつちが勝手に……」

「あくりくさく!!」

「……あーもう、鬱陶しいんだよ! わかった、わかったから!!」

有咲……本当チョロいぞ、お前。

「つーか、山吹さんは? もしかして喫茶店?」

「あ……そうか。有咲はあの子の事、知らないんだよな……」

「は? 何だよ、翔。どういうことだよ?」

「それがな……」

俺は有咲に、沙綾のお母さんが倒れてしまい、今は病院に付き添っていることを説明する。そのせいで文化祭に参加できず、ライブにも間に合うかどうかわからないことも。

「マジか……山吹さん、バンドやるって言ってたじゃん……」

「それはそうだ。沙綾だって、本当は残っていたかっただろうさ。文化祭、準備だって沙綾が頑張ってくれてただろ」

香澄を助け、副委員としてクラスを取りまとめていたのは、他でもない沙綾だった。なのに、今日この場に立役者はいない。

俺と香澄が言葉を投げかけ、願った思いが叶う事は……もしかしたら、なくなるのかもしれない……。

「……………」

「香澄……」

沙綾の事、やっぱり心配なんだろうと思う。何も連絡はなく、不安で気になってしまうのも仕方がない。香澄の瞳には、影が見え始めていた。

「沙綾ちゃんなら、きっと大丈夫だよ」

「私たちには、私たちにしかできない事がある。だから今は、そこに全力を尽くそう。クラスを盛り上げて、文化祭を成功させて……ライブを成功させられるかどうか、香澄にかかっているんだよ?」

「うん……。けど、さっき電話して、送ったメッセージにも何も反応なかったから……」

シフトを終えて、教室を離れる少し前。香澄は沙綾と連絡を取っていた。けど、反応は何もなく、今沙綾がどうなっているのかを確かめ

る事も出来ない。

きつと、心ではわかつている。が、沙綾の抱えるものと覚悟を知り、それを乗り越えて立とうとしている舞台が、すぐそこまで迫っているから……不安になる。このまま間に合わず、自分たちだけでライブをする事になるビジョンを想像して。

それでは、沙綾が決意し、望んだ今日のライブの意味が失われる。これは香澄たちポップンパーティーのライブであり、山吹沙綾と言う一人の女の子が前を向くためのライブでもあるから。

徐々に空気が沈んでいく。りみも、たえも、有咲も。何とか保たれていた明るさも、なくなっていく。

このままではいけない。今はまだ、俺も香澄のバンドのメンバーだ。俺はどうか喝を入れようと、口を開きかけて……。

「元氣出してくださいよ、香澄さん！」

代わりに口を開いたのは、美羽だった。

「さっきの話……私には、沙綾さんの抱えている事情はよく分かりません。それに、その事で香澄さんたちが何に苦しんでいるのかも……」

「みーちゃん……」

「でも、ここで落ち込んでいい理由にはならないはずですよ！皆さん、この後ライブがあるんですよ？そんな気持ちでライブなんて、私にはできないと思いますよ？」

美羽は、さっき俺が有咲に説明していた事を横で聞いていただけ。断片しか理解はしていない。わかったつもりでしか、話を進める事はできない。

けど、今必要なのは言葉だ。それを感じ取っているから、美羽はこうして行動に移したんだ。

「香澄さんがやりたいと思ってたバンドは、ライブは……そんな気持ちでできるものじゃありません。盛り上がれないし、熱くもなれない。そんな興奮が欲しかったから、バンドを組んだんじゃないんです

か？ライブしたいんじゃないんですか？」

「それはそうだけど……」

「何かに悩んで、躓いているんだって事は私にもわかります。何となく、ですけど。でも……今日と言う日で出来るライブは、もう二度と訪れない」

それは、美羽だから言える事。病気に苦しみ、今と言う時間を精一杯生きている美羽だからこそ、そんな言葉が口を突いて出てくる。

「ライブなんて言葉でひとくくりにしてしまえば、それは確かに取り換えの付くものだと思いますよ。けど、『今日の文化祭の有志ライブ』は取り換えの付くものですか？」

「……ううん。違うよ」

「なら、落ち込んでなんかいられませんよ。たった一回しかできないライブを、どんな事情であれ、つまらないものにするわけにはいかないでしょう？」

「……うん」

「最高の形で終わらせるのか、それとも最悪の形で終わらせるのか。どっちがいいかなんて明らかです。自分から悪い道を選ぶなんて、香澄さんにはあってほしくない。せめて楽しんでライブしてほしいです」

「……楽しんで」

「多分、香澄さんが気にしてるのって、沙綾さんがこの場にはいない事ですよね。それで、望んだライブができなくなるとしても……振り返って、それでも楽しくやり切ったと思えるだけのライブじゃないと、沙綾さんだって報われない」

「……！」

美羽の言葉が、香澄を捉える。暗く沈んでいた空気も晴れ、香澄は息を吹き返す。

「……そうだよね、みーちゃん。私たちが落ち込んでいるわけにはいかないよね」

「香澄さん……！」

「さーやの事も、もちろん大切に心配だけど……その前に、私たちがラ

イブを楽しむ気持ちを忘れてしまったらダメだよ。私がやりた
いって決めて、みんなと一緒に立ちたいって願ったステージだから
……！」

その気持ちまで、失うわけにはいかない。そんな事は、沙綾は望ん
ではないはずだ。

「その意気だ、香澄。今は沙綾を信じて、俺たちは沙綾の分まで楽しむ
んだ。沙綾が戻ってきた時に、笑顔で迎えられるようにな」

「……うんーそうだね、なーくん！」

「……………」

沙綾……今、どうなっている。

間に合うんだろうな。

お母さんは、大丈夫なんだよな。

それに……沙綾。

お前は、大丈夫だろうな……？

phrase 49 昨日までの日々に

「何でもなくてよかった……」

「心配しすぎなの。お医者さんだって、ただの貧血だって言ってたじゃない」

「それは、そうだけど……」

お父さんに連れられて、私たちはすぐにお母さんを病院へと連れて行った。幸い、大事には至らないとの事で、私は何とか一安心する。

今はお医者さんから結果を聞いて、お母さんと二人で待合室に戻ってきたところだった。お父さんは、純と紗南を見てくれている。本当は私が二人を見るはずだったが、私が行きたかった。お母さんの傍で、結果を聞いたかった。

やっぱり……心配だから。今までずっと、そう思い続けてきたんだから。

「文化祭も、抜けてきたみたいじゃない。さつきお父さんから聞いたわ」

「……うん、そうだよ」

「そこまでしなくてもよかったのに……。今日はお父さんもいたんだから……」

「ううん、いいの。私が……来たかったから」

私が、支えないと。体の弱いお母さんに代わって、家族を安心させないと。紗南や純にも、あの時のような恐怖を与えないためにも。そうじゃないと……ダメなんだ。

紗南の鳴き声が、純の悲鳴が、頭から離れない。私が自分のわがままで、バンドなんか打ち込んだから。自分だけ楽しい思いをする事が、罪だと悟ったから。

そんな私を見かねて、気を遣ってくれるナツたちの思いも……私には棘でしかなかった。私のために、私に合わせてくれている。そう思えば思うほど、情けなくて。周囲の人間に、そう強要させている私が、憎くて。

だからバンドを止めた。楽しい時間はもう捨てた。自分だけいい

気分で、周りの時間を奪ってまで得られる幸せに何の意味もない。それでいいんだって、そう思いながら。

思うしかなかった。

だって、そうでしょ？私有家の手伝いをするようになって、紗南や純が怖い目に遭う事はなくなった。お母さんも、一人で無理をして抱え込まずに、安定した日々を送っている。

何も悪い事なんかない。私が、私さえ我慢してしまえば。それで全てが上手くいくのなら……。

「……どうかしたの、沙綾？」

「えっ、あ……ごめん。ちよつと、ボーつとしちゃった」

もし、私がバンドの道を選んでいたら。

「……………」

その時は、また繰り返してしまうのか。そうならないように、バンドを捨てたのに。

今だって、こうしてお母さんが倒れて……あの時と同じ時間が繰り返し返されようとしている。

選ばなかったから、今がある。選んでいた時、何が待っていたのかは分からない。その道の先が、どうなっていたのかも。

いくつもの夢を数えても。

見て見ぬふりをした。聞こえないふりを続けていた。

家族を、友人を、そして自分をも苦しめてしまうから。

私の選択は……結局、誰かに迷惑をかける事にしかない……。

『それは、迷惑だとか損だとか、そんな話とは一切関係ない。そう思うのなら、それは優しさでもない』

そう思っていた。はずだった。

『できるの！何でも一人で決めちゃうのズルい！ズルいズルいズルいっ！！一緒に、考えさせてよ……っ！』

自分は楽をしたらいけないんだって、何もできないと思っていた私に、泣きながら言葉を投げかけてくれた友達がいる。

『みんな、沙綾と一緒に損したいだけなんだ。その代わりに得られるものは、どんなに苦しい事だって乗り越えられる力になる』

自分を閉じ込めて、耐える事が正しいと思っていた私に、本当の正しさを教えてくれた友達がいる。

あの時、私に前を向く勇気をくれた言葉が。固く鍵をかけていたはずの私の心を開いてくれた、二人の声援が。ずっと立ち止まっていた私に、力をくれる。

「……ねえ、お母さん」

「どうしたの？」

「……今朝さ、どうしても今日の文化祭、見に来てほしいって言ったよね」

一言ずつ、ゆっくりでいい。この気持ちを、伝えないと。

「その理由、あの時は言えなかったから……今、話すね」

「……ええ」

「私……もう一度、バンドがしたいんだ」

本当は、ずっと気づいていた。

私は、バンドがやりたいんだって願ってた。

「バンドがやりたくて……でも、ずっと我慢してた。あの日、初ライブの時にお母さんが倒れて、純や紗南の悲しんでる姿見て……自分だけ楽しむのは、間違ってるなって思ったから」

「……………」

「バンドのみんなも、私に合わせてくれようとしたけど……それで自分だけ楽しんでいいはずないって、そう思ったから」

「……………」

「だから、バンド止めたんだ。周りに迷惑かけてまで、続けても仕方ないって。私がバンド止めたら、誰も悲しまない。迷惑もかけない。そんな姿を誰かにさせるのが嫌だったから、私は……バンドから離れたんだよ……」

お母さんは何も言わず、ただ静かに聞いてくれる。ここが病院だからじゃない。私の言葉を、全て受け止めてくれている。

「でも、ごめんなさい……。ごめんなさい……。っ！私、やっぱりバンドがやりたい！私のわがままで、お母さんにはまた一人で負担かけることになっちゃうけど……。でも、もう抑えられない！我慢なんかできない！」

記憶の底の小さな声が、今確かに響いていく。

自分勝手に、どうしようもなくて。

私が自分を優先して、そのせいで迷惑をかけてしまう人もいる。

不安にさせてしまうかもしれない人がいる。

でも……これからは、欲張りでいさせてくれないかな。

ねえ……お母さん。

この声、聞こえてますか？

「こんな私を、待っていてくれる人がいるから……だから今日、もう一回バンドやるんだ。ライブもする。ここに来たのは、どうしてもお母さんにこの話をしたかったから……」

「……沙綾」

「昔の私とは違う。本当の気持ちに気づかされて、そこから逃げて諦めていた私とはお別れするために、お母さんと話がしたかった。過去にけじめをつけるために、伝える事で変わりたかったんだ……」

変われているのかは分からない。けど、変わるためには、お母さんと向き合わないといけない。

お母さんが倒れたから。お母さんに迷惑をかけたくなかったから。お母さんを少しでも助けたかったから。私がバンドから遠ざかってきた理由を作り出していたのは、全てお母さんに関係していた事だ。だから……伝える必要があったんだ。

「……沙綾は優しいね。その優しさに、いつの間にか母さんも甘えてしまった」

「お母さん……」

「そのせいで、大切な物まで奪ってしまった。ダメな母さんだね……」

「そんな事ない！お母さんは何も奪ってない！私が選んでしまっただけ……！」

「でも……そうやって倒れるまで無理をしてしまって、結果的に心配させるようなことになってしまったのは、母さんの責任。倒れてしまったから、早く安心させたい一心で、余計に無理して心配かけてしまったから……」

「……そんな事で負い目を感じる事なんか、何もないよ」

「そんな事じゃない。自分の子供の幸せを奪う親なんて、親として失格なの。だから……ごめんね、沙綾。母さん、間違えちゃったね……っ！」

スルリと、お母さんの腕が私の背中に回される。苦しさを感じるほ

どに力を込め、お母さんは私を抱きしめてきた。

肩に触れるお母さんの顔。そして濡れた感触。悲しさと後悔が、お母さんの震えた体から伝わってくる。後悔なんて、お母さんがするこ
とでも何でもないのに。

でも……結局私は、お母さんを苦しめてしまった。私自身が、自分
を殺して生きようとしたことで。その過ちに気づいて、前を向こうと
しても。そうであった過去は変わらないし、その事実には傷つく人は確
かにいた。

それこそが、迷惑だったのかもしれないって……今ならわかる。昨
日までの私なら、絶対にわからなかった事でもある。

「グス……っ、沙綾、電話が……」

「えっ……っ？」

ふと、スマホが鳴っている事に気がついた。取り出して確認して見
ると、それは香澄からの不在着信だった。ボイスメッセージも2件あ
る。

「これ、香澄……」

「香澄ちゃんから？」

「うん……。ごめん、お母さん。ちよつと確認してくる」

『保存されたメッセージは2件です』

場所を移し、私は病院の中庭に来ていた。院内だと、騒がしくして
しまつて邪魔になると思うし。

けど、中庭か……。いつも学校の中庭で、香澄たちとお昼ご飯食べ
てる時の事、思い出しちやつた。今、そんな話なんか全然関係ないは
ずなのに。

そうやって感傷に浸るのは、香澄からのメッセージだからなのか

な。

『さーや？……あつ、私、香澄だよ』

わざわざ名前言わなくても、知ってるよ。これは香澄からのメッセージなんだから。

『お母さん、どう？さーなん泣いてない？じゅんじゅん元気？』

もう大丈夫だよ。そんなに心配しなくても、こっちは平気だから。お母さんだけじゃなくて、純に紗南の事も気遣ってくれて……。

『それに……さーやも、大丈夫？』

「……香澄」

私の事まで、心配してくれるなんて。そこまで気を遣ってくれなくてもよかつたのに。

何だか、もう一人の私を見ているみたいだった。けど、そんな風に周りからは見えていたのかな……。

『カフェはね、大成功！お客さん、パンおいしいうって言ってくれてね！お持ち帰りする人もたくさん！えっへへ……』

『沙綾？香澄、沙綾に電話してるのか？』

『わっ、なーくん！』

『おーい、沙綾！元気か？こっちの事は気にすんな。しっかりやってるぞ。だから沙綾も、自分のやるべきことをしっかり果たして来い』
「翔まで……」

何だろう。翔の声を聞いたたら、少し安心したような気がした。昨日の事があつたから……かのかな。

『えっ、沙綾？！もしもーし、お母さん大丈夫？こっちは任せて！』

『みんな沙綾の分までがんばってるよー！』

『うう、沙綾ちゃん！』

『山吹ベーカーリーの曲作つたから聞いてー！』

『わわっ、ちよつとみんなストップ！さーや今病院だから、あんまり騒がしいとー』

「アハハ……。盛り上がってるな」

牛込さんに、花園さん。それにクラスメイトのみんなも。賑やか

で、本当に楽しそう。私もその場にいたかったけど……これは私が自分で選んだから。

『2件目のメッセージです』

あれ、1件目終わってる。こっちは何だろう？

『もしもし、さーや？あ、さつきはごめんね。話どころじゃなくなっちゃって……』

それで新しく撮りなおしたんだ。今回は、周りもそこまで騒がしくない。場所を変えたのかな。

『こっちは大丈夫だから！それにすつごく楽しい！だから……ライブも、がんばるよ！』

「香澄……」

『さーやに届くように、がんばるから！それから、歌詞！さーやの家に届けたんだけど、見てくれた？』

うん、見たよ。今朝、翔と一緒に見た。あの曲を、香澄は今日のライブでするんだ。

みんなと一緒に作り上げて、今日のために練習を重ねたあの曲を。大勢の生徒の前で披露する。前のクライブとは規模も何もかもが違う、今日と言う日の舞台で。

その舞台には、私も求められていて。『みんな』の中には、私の存在も含まれている。

今も、きつと待っている。

ううん。きつとじゃない。待っているんだ。

あの曲を……私と一緒に演奏する時を。

『STAR BEAT!〜ホシノコドウ〜』香澄らしい、その曲を。

「……………」

ダメだね。この思いは離せない。

もう離さない。

ずっと離したくない。

この気持ちが本物だから……自然と涙が頬を伝うんだ。

バンドへの思いが詰まった、本物の熱だ。

「行って、沙綾」

「お母さん……」

いつの間にか、お母さんも中庭に出てきていた。その隣には純と紗南、お父さんも一緒だ。

「沙綾の優しきは本物だね。お母さんにもみんなにも、すごく優しい。その優しさを、今度は自分に向ける番。一人じゃないんだから」

「お母さん……」

「お父さんだっているんだ。もう沙綾だけに、何もかも背負わせるような父親にはならないからな」

「お父さんも……」

「俺だって、もう大丈夫。何かあれば、助けを呼ぶくらいできるから」
「さーなもいるから、心配しないで……!」

「純、紗南……」

そうか、さつき私に連絡してきたのは、純だった……。怖がって動揺する事なく、むしろ冷静だった。

私……全然周りが見えてないね。まだまだ子供のようにはしか見ていなかった。純も紗南も、私が思うほど弱くも何もなかったんだね。

「ね?何でも一人で背負う必要はないの。後は、沙綾の番」

「私の……」

「これからは、沙綾を待っていてくれる友達のために……そして、自身のために、その優しさを使ってあげて」

わかってる。何も言葉はいらないから。踏み出す勇氣は、もう十分に貰えたから。

「……ありがとう、お母さん。お父さんも。紗南と純も……ね?」

しゃがみこんで、私が順と紗南を抱き寄せる。まだ涙で顔が濡れて

いたけど、何も嫌がることなく、私の好きにさせてくれた。

「私、ちよつとだけわがままになつてみるよ……」

「それくらいが、沙綾にはちょうどいいのよ。さ、行つておいで。待つてる友達がいるんでしょ？」

香澄……翔……。それに、みんなも。

いつも遠くから、みんなの事をずっと見つめてた。

羨ましくて、でも届かなくて。

でも、ようやく届きそう。もう少しで届くんだ。

とつても眩しくて、バンドに対して一生懸命で……。

前向きに、いつも走つてたあなたたちに。

風に揺れた君の声は、私の心も揺らしていたんだよ。

「……うんー」

昨日、こんな私のために、家まで来てくれた人がいる。

昨日、こんな私のために、涙を流してくれた人がいる。

昨日……こんな私のために、こんな私の事を、真剣に受け止めてくれた人がいる。

眠つてた声が、思いが私を誘う。私の向かうべき場所へと。

瞼を閉じ、諦めてた夢を形にする。あなたと、みんなと。

歌いたい……奏でたい……！

「……行つてきますー！」

待つてね、香澄。すぐに行くから。

昨日までの日々とは、今ここでサヨナラしたから。

『有志ライブの時間が近づいてきました。参加バンドの皆さんは、体育館にて準備をお願いします』

美羽を加えたメンバーで文化祭を見て回り、ライブまでの一時を過ごしていた俺たち。そこに、校内アナウンスでライブの始まりが告げられる。

「……そろそろ時間だね」

「ああ……」

ようやく来た、この時が。今日のために曲を作り、練習し、そして……いてほしい人のために言葉をぶつけた。

まだ、全てが叶ったわけじゃない。でも、やれるだけの事をやって、今日を迎えた。必ず来るからと、だからこそ信じて待つと決めた。その全てが、今から始まる時間へと繋がる。

「頑張ってくださいね、皆さん！私も、明日香やクラスのみんなと一緒に応援に行きますから！」

「みーちゃん……ありがとー！」

美羽は中等部の方へ戻っていった。俺たちも、教室に戻って楽器を準備しないとな。

「いよいよだな……」

「うん……。どうしよう、緊張してきちゃった……」

「大丈夫。落ち着いて演奏すれば、きっと成功するよ」

ライブへの緊張感は、もちろん俺だつてある。前のクライブとはわけが違うんだ。数人に聞かせるだけの、軽い音合わせ感覚じゃない。俺たちの音色が、その場の空気を作り出すんだ……！

「……沙綾」

そして沙綾。お前がいないと、今日のライブは意味がない。美羽はああ言ってたが、これは俺たちだけで終わらせていいものじゃないんだ。

だから……間に合ってくれよ。

「やっべー、こんなに見に来るのかよ……」

「目玉イベントって言ったからな。ほとんどの生徒が集まってるんじゃないか?」

「うーわ、マジかよ……」

ついにこの時を迎えた。いつも見慣れた体育館がライブ会場へと変わり、今日のために積み重ねた努力を観客へとぶつける瞬間が。

生徒たちは一斉に体育館へと集まり、既にいっぱいになっている。高等部だけじゃなく、中等部の生徒も来ているからな。美羽や明日香も、どこかにいるんだろう。

にしても、俺もさすがに緊張するな……。これだけの人数を相手に、ドラムなんて叩いた事ない。ライブだから覚悟はしていたが、いざ目の前にすると押しつぶされそうになる圧力を感じる。

「お姉ちゃんもこの後にライブあるから、すぐ近くで見てるんだよね……。あ、足震えてきた……」

「リラックスして、りみ。また人の字飲む?」

「お、お願いしようかな……?」

するのによ。けど、俺だって手汗が止まらないからな。気持ちは痛いほどわかる。

「……おい、香澄。いつまでスマホ見てんだよ。私たちの出番、そろそろだぞ」

「……………」

「ちよ、無視すんなよ。かす——」

「待て、有咲」

強引に話しかけようとした有咲を、俺は肩を掴んで止める。気持ちはわからなくもないが、今は無理に声をかけない方がいい。

「香澄はな……最後まで信じてるんだよ。沙綾は必ず来るって、約束したんだからな」

「けどよ……いつまでもそんなんじゃない、今からのライブにだって支障が出るかもしれねーぞ?」

「大丈夫だ。その辺りの切り替えは、香澄にだってできるはずだ。……多分」

「おい翔、歯切れ悪いぞ」「うるせえ」

香澄が沙綾を信じているように、俺だって香澄のそう言うところを信じてやらないと。ま、何かやらかしそうな気もなくはないんだけどな……。あいつの事だし。

「だから、有咲も少しは自分の心配しろよ？ りみやたえだって、自分の事で手一杯だしな」

「わかってるっつーの」

有咲も理解したのか、これ以上は突つかからないで黙り込む。俺たちの番は次だ。その時に向けて、気持ちを集中させるために。

「……香澄」

それでも香澄は、ただじっとスマホの画面をのぞき続けていた。

「はあ、はあ……！」

私は走り続けた。髪が乱れるのも、スカートが揺れるのも、何もかもが気にならないくらいに。学校までの道のりがこうも長く感じるのは、今日が初めてかもしれない。

「香澄、みんな、待ってて……！」

こんなにも必死になって走ったのは、お母さんが倒れたあのライブ以来だ。あの時も、私の中には焦りがあった。今だって、胸を満たすのは焦燥感だ。

けど、それだけじゃない。同じ感情でも、その先に結びつく思いは違う。私の事を待っていてくれる人が、そこにはいる。

何よりも、私自身が望んだ未来が待っている。

「見えた……っ！」

耳につけたイヤホンからは、昨日送ってもらった曲が流れ続けている。練習もしていないし、どうなるのかはわからないけど……それでも必死に頭にリズムを叩き込む。

そんな私の目の前に、ようやく慣れ親しんだ校舎が見えた。外にはほとんど生徒の姿はなく、微かに重低音が聞こえてくる。もう、ライブは始まっていたか。

後は、香澄たちの出番が終わっていないことを祈るだけ。約束したから。必ず戻ってくるからと。

そんな私を、待つてると。信じてくれたから。

校庭を駆け抜け、人影をかき分け、体育館へと続く通路へ。よくは聞き取れないが、まだライブ自体は終わっていない。安堵しながら、一気に走り抜けようとして……。

「……沙綾」

「……っ！」

私にとって、居場所「だった」存在が……並んで歩く姿を、私は見た。そして向こうも、私に気づいた。

「ナツ……。フミカ、マユも……！」

かつての仲間たちを前にして、私は足を止めてしまった。

「ど、どうしてここに……」

「文化祭ライブ、私たちも参加してるんだ。と言っても、もう出番終わっちゃったけどね」

ナツたちも、今日のライブに出てたんだ……。嬉しいような、悲しいような、複雑な気持ちだった。

「そう言う沙綾は……どうしてここにいるの？」

「……私は」

一瞬、その後が続く言葉が詰まる。今日の前にいるのは、私が音を合わせ、同じ時間を過ごしてきた仲間だったから。

彼女たちとの時間は、完全に過去となる。思い出として、もうあの頃のように戻れない。それは、いい意味としても悪い意味としても。

だから……。

「あのね、ナツ。フミカ、マユも。私……」

私は、ずっとナツたちに負い目を感じていた。

彼女たちの気持ちに応える事もなく、自分の都合で背を向けて。好意を蔑ろにして、だから気まづくなって……。上手く言葉を交わせず、今までぎこちなく距離感を保ってきた。

私が、奪ったんだ。みんなでライブする機会を、永遠に断ち切ってしまった。そうしないといけないって、あの時の私は思ってしまったから。

嫌われてもおかしくはなかった。心無い言葉を投げつけて、もっと私の事を罵倒してくれてもよかった。その方が、私だって罪悪感を感じることができたのに。

だから……っ！

「……沙綾、もう一度バンドやりなよ」

「……ナツ」

ナツがそうやって、今でも優しくしてくれる事が。マユもフミカも、笑いかけてくれる事が。

私には嬉しかった。

私が離れても、気まづくて距離を置いていても……ナツたちは諦めずに接してくれた事が、嬉しかったんだ。

「すっごく楽しかったよ、一緒に練習して、曲考えたり、バンドの事話したり。短い間だったけど、沙綾とバンドができて、嬉しかった」

「ナツ……っ！」

「ちよつと、ダメだよ沙綾。泣かないで」

「だって……っ、だって……！」

私は、本当に仲間に恵まれていた。

私と過ごした時間を、今でも大切にしてくれていたから。身勝手に手放しても、ナツたちは繋ぎ止めていてくれた。

失った時間は、もう二度と戻らない。けど、失ってしまったからこそ、分かったこともある。

そのなくしたものは、あまりにも大きかったんだって。取り戻したくても、今の私じゃ取り戻せないものだって。

だから……この涙は、決別の涙。彼女たちとは別の道を歩むと決めた、私の郷愁の涙。

「……私も楽しかった！みんなとバンドするのが、大好きだったよ！」
嘘はない。でも、今の私には待っていてくれる人がいる。

みんなと過ごした時間は、長いようで短い時間だったけど。
いつか戻れるのなら、また戻りたいと願うような時間だけど。

それでも、大切な思い出として残り続ける。これから先、何があったとしても。私の……ううん。私たちの中に、いつまでも。

私たちは、仲間だったから。

「それなら、またバンドしなよ！戸山さんたち、今ちようどライブしてるんだよ？」

「香澄が……！」

「紗綾を待つてる人、この先にいるよ」

まだ、演奏が終わる気配はない。香澄たちの演奏は、まだ終わっていない。ナツたちの奥にある、体育館へと続く扉を開けば、そこにはみんながいる。

これは儀式。過去の自分に終止符を打ち、新しい自分の扉を開くための。その扉は、自分で開かないといけない。

みんな喜んで、迎えてくれるかな……？

「あ、あの、私のスティック使って……」

「あつ、えつと……」

「ストップ、サトちゃん。気持ちはわかるけど、沙綾がスティックを受け取る相手は、もう決まってるから」

私の代わりに入った、CHiSPAの新メンバーか。サトちゃんつて言うんだ。少し恥ずかしがり屋みたいだけど、きつと演奏は上手いんだろうな。

けど、私がスティックを貰う相手って……。

「行つて、沙綾。きつちりバトン貰つて、派手なライブにしてよ!」

……ううん。言葉にしなくても、私にはわかった。ここに来ることは、あの人だつて願っていたんだから。

「……わかった」

今行くから。香澄。牛込さん。花園さん。市ヶ谷さん。それに……翔。

そして、さようなら。私が、CHiSPAとして過ごした時間。

「最後に……つ、最後に!一つだけ!!」

だから、ナツ。フミカ、マユ……!

「……ありがとう!!」

「ありがとうございました!次は、今日のために作った曲です!」

俺たちのライブは、もう始まっていた。香澄も気持ちをバンドモードに切り替え、練習の成果をギターに込める。出だしは上の空で、段

取りすつ飛ばしてたりしたけどな。

りみたちも緊張はしていたが、それでも音を外すことなくついてきている。俺も必死でドラムを叩き、演奏を支えていた。何と言っても、リズムの要だからな。それを言い出したら、ベースのりみもなんだけど。

と、ここで香澄の曲紹介が入るため、一旦酷使した体を休める。後ろから見ているとよくわかるが、みんな息が上がって疲れている。汗も滝のように流れ出し、スポーツでもしたのかと疑うくらいだ。

それだけ、このライブに思いを込めているんだ。今この場にはいない、もう1人のメンバー事を思いながら。

「ここにいるみんなと……それから、今日ここにはいないけど、大切な人と一緒に作った曲です」

沙綾は、間に合わなかった。信じて待つ。俺たちには、ただそうする事しかできなかった。それでも、これが結果だった。

「香澄ちゃん……」

「香澄……」

「本当は、一緒に歌いたかったです。いつか歌えたら……そのいつかが、今日だったらいいなって、約束しました」

沙綾の部屋のベランダから見上げた、星空の下で。そして今日、バンドと向き合おうとした沙綾と、向かい合って。

そのいつかが、今日この瞬間になる事はなかったけど。

その話が、いつになるのかもわからないけど。

その夢が、叶うのかどうかも、わからないけど……。

「信じてる。一緒に歌う事、できるんだって」

「「「……………」」」

香澄は信じている。あの日の約束は……。

「そんな気持ちを含めて、その人にも届くくらいの演奏をしてみせます」

必ず叶う。

「その人にも届くくらいの声で、歌ってみせます……！」

誰に何と言われても、それでも香澄は……信じる事を止めない。

「その人にも届くくらいの気持ちを、私たちの音色に込めてみせます！！」

沙綾と、バンドができる時を……！

「みんな……！！」

声が、聞こえた。

香澄の声を遮るように、一人の少女の声が体育館に響く。勢いよく開け放たれた入口に、彼女の姿はあった。

見なくてもわかる。けど、反射的に顔を向け、それが確信へと変わる。そこから広がっていくのは、この上ない安堵と喜びだった。ずっと、待っていたんだから。香澄も、俺だって。このステージにいる、5人全員が望んでいたから。

今立っているこの場所に、彼女を迎え入れるために。

「沙綾！」

「沙綾ちゃん！」

「……つたく、遅えつつーの。山吹さん」

ステージに向かい、沙綾が一步ずつ歩みを進める。その姿を視線から外すことなく、俺たちはここまで来た健闘を称えるように、微笑みを投げかける。

そして、香澄は……。

「……さーやつー！」

嬉しさのあまり、泣き笑いを浮かべていた。ステージの下に立つ沙綾へと手を差し伸べ、こちら側の世界へと引つ張り上げる。

沙綾は苦笑しながら、だがどこか清々しい表情を浮かべて。香澄に手を取られながら、5人の待つステージへと、ようやく辿り着くことができた。

スポットライトの当たらない、暗い暗い観客席から。

スポットライトの当たる、沙綾が経ちたかった場所へと。

「ようやく戻ってきたな、沙綾」

「ごめん……待たせちゃったね。こんなに遅くなっちゃって」

「何言ってるんだよ。ここにきてくれただけで、俺たちは嬉しいに決まってる」

もう来られないかと思っていた。間に合わないかと思っていた。それでも、信じて待ち続けた結果がここにある。こうして6人で、ステージに立てた。

「やつと、自分の意志でここに立てたな」

「その勇気をくれたのは、間違いなくみんなだよ」

「そっか。なら、もう心配はいらないみたいだな」

沙綾の抱えていた過去も、家族との関係も。そして、バンドへの向き合い方も。全てを乗り越えた結果が、今の沙綾だ。

なら……俺は、そんな沙綾に渡すべきものがある。

「だから……」

手に持つスティックについた汗を拭きとり、本来あるべき持ち主の元へと送り出す。このスティックは、俺が持っているとはいけないものだ。

俺は代理でしかなかった。ライブの時も、今日のライブまで練習に付き合っていた時も。ただの人数合わせでしかなかった。

でも、今は違う。俺がいなくても、彼女たちなら大丈夫だ。互いに支え合い、音を奏でることができる。仮初の関係しか持てなかった俺よりも、ずっと素晴らしい演奏ができる。

本当のポップンパーティーのドラムは……俺の目の前にいるから。

代わりに繋いでいたバトンを、今託す。

「後は頼む」

「任せて」

俺の代わりに、ドラムセットの前に沙綾が座る。スティックを握る感触を確かめ、一度深呼吸してから、懐かしむようにスティックを振り下ろす。

「……っ！」

想像以上だった。肩慣らしにと軽く叩いているはずだが、それだけでも沙綾のレベルが伺える。

バンドから遠ざかっていた以上、ブランクは確かに存在してるはずだ。なのに沙綾は、練習を積んでいる俺と同等に……あるいはそれ以上の演奏技術を見せ、魅了している。まだ本調子ではないだろうが、自分の手足のように簡単に叩いて見せる。

経験者だからこそ、沙綾の腕前は俺よりも高いと……そう断言できる。

「沙綾、すごい……」

「けど、いきなりできんの？練習とか、してないんだろ？」

「どうだろ。ここ来るまでに聞いてただけだし、ボロボロになっちゃうかも」

笑顔で、でもいつもとは違う表情で、冗談交じりに返す沙綾。でも、それでいい。

今ここで、香澄たちとライブをすることに意味がある。上手いとか下手とかは、何も気にしなくてもいい。失敗なんて、恐れたらいけない。今はライブをやり切るんだ。

「あつ、でも翔君はどうするの？沙綾ちゃんがドラムなら、もうパート残ってないし……」

「あ……言われてみればそうじゃん。翔、やる事ねーぞ？」

「カスタネットでも叩いとく？」

「それは有咲の専売特許だからパス」

「違いからな!？」

俺たちがグダグダとやり取りしているのを見て、観客も笑い出す。熱が冷めてないのはいいが、いつまでもこのままなわけにもいかない。

「……俺は別にいいよ。このライブは、ポップンパーティーの初ライブだ。俺は代理とは言え、このバンドのメンバーでも何でもない。それなのに、俺がお前たちの初ライブを邪魔するわけにはいかない」

せつかくの初舞台を、部外者が立ち入って台無しにするつもりはない。ここから先は、お前たち5人のステージなんだ。

だから、俺は……。

「それは嫌だよー!」

「……香澄」

「私は確かに、さーやとライブがやりたいよ。でも、なーくんともライブしたいの!」

「お前なあ……さっきの話聞いてたのか。俺はこのバンドには無関係なんだぞ。代理ってだけなんだぞ。そんな男が、このバンドに混じってライブしても、お前たちの初ライブに水を差すだけだからな」

「無関係じゃないよ！なーくんは、私たちがバンドになるまで、ずっと支えてくれたじゃん！代理でも、私たちの大切な仲間で……ポツピンパーティーの一員なんだよ！」

「俺も、お前たちの……」

なのに、香澄ときたら……結局、そうなるんだよな。

「それに本当は、私なーくんと一緒にバンドやりたかったよ。けど、なーくんとライブできるのは、こんな機会くらいしかないみたいだから……今、一緒にライブしたい！」

「……………」

「だから、今だけはいてほしいの！なーくん!!」

それに、俺だってこのまま全てを委ねるのは名残惜しい。最後に、俺自身の心にも残るライブを。

「……わかった。俺も、香澄たちとライブさせてくれ」

「なーくん……うん、ありがとう!!」

手を引くのは、それからでも遅くはない……か。

「でも翔、楽器はどうするの？私、今だけでもドラム交代した方がいいかな？」

「それはダメだろ。沙綾はドラムじゃないと」

「じゃあカスタネット一択だね」

「たえはどんだけカスタネット推すんだよ。どっかの誰かみたいに恥かきそうだからやめてほしい」

「おい、こら翔！」

冗談に決まってるだろうが。けど、この舞台と空気の中で、一人カスタネットを鳴らし続けるのはさすがに勇気がある。

「じゃあ、翔君は何をするの？香澄ちゃんと一緒に歌う……とか？」
「それもありだな。けど……俺がいつ、ドラムしかできないって言ったんだ？」

「……えっ？」「……」

「ちよつと待ってろ」

俺はすぐにステージ裏に戻り、例の楽器を持ってくる。今日のライブ用に学校側が貸し出していた楽器の中に、あれもあつたのを見たかな。

確か……お、あつた。俺はそれを担いで、ステージに戻る。その楽器は……。

「えっ、なーくん、それって……!?!」

「おいおい、何でも弾けるのかよ?」

「翔、バイリンガル……!」

「それは違うと思うけど……翔、その楽器を弾くって事は……」

「そ、それって私と一緒に、ベースを演奏するって事……!?!」

ベースだった。まだ話したことはなかったが、俺はドラム以外にもベースを弾くことができる。ギターは無理だが、ベースに挑戦したら思いのほか上手くできたって感じた。

ま、他にも弾ける楽器はあるにはあるんだが……それはそれだ。けど、これなら俺も気兼ねなく参加できる。

「そう言う事だ。俺はリズムに合わせて、ツインベースの形で演奏に参加する。リズムは何も気にしないで、練習通りに演奏してくれたらいい」

「え、で、でも翔君……バンドに二人もベースって、大丈夫かな?それに、ベースやっているとところも見た事ないし、本当に弾けるの……?」「ツインベースのバンドは珍しい話じゃない。そこはどうにかなるだろう。ベースの腕前は……ここで軽く見せてやってもいいぞ。それなりに自信はある」

「で、でも練習だつてやってないよね?」

「まあな。けど、演奏の事なら、俺はずっとドラムとして後ろで音聞いてきたからな。リズムは頭に叩き込んである。それに、他のパートの楽譜にも目は通してあるからな。当然、ベースもだ」

そう言い切られては、リズムも納得するしかないのだろう。不安そうではあったが、力強くうなずいた。

「だからって、練習無しでいけるのかよ、翔」

「やれるさ。いや、やるさ。そんな事言ったら、沙綾だつてここに来る

までに音聞いただけだぞ？それで本番迎えようとしてるのに、俺が弱音吐いてどうする」

沙綾は入念にドラムを叩いて、リズムを確認している。成功するよりも、失敗する方が目立ってしまうかもしれない。

それでも、沙綾はここにいる。過去から前を向き、未来を見つめている。これから始まるライブは、その証明。

だったら、俺もやってやろうじゃないか。まだ人前では披露したことの無い俺のベースを、このライブで見せてやる。

ポップンパーティーの結成ライブ。そして俺の……最初で最後の、この5人とのライブに華を添えるために。

「……じゃあ、沙綾。もう行けそうか？」

「多分ね。そう言う翔は？」

「こつちも行けるぞ」

「自信满满だね。私はちよつと、不安なところもあるけど……」

「そこは気持ちで！」

「一緒に頑張ろうよ！」

たえとりみの言葉に後押しされ、沙綾もスティックを構える。俺もベースを構え、りみの隣に立つ。

こんな風に立つなんて、初めての事だ。けど、それも今日限りの話。香澄たちと同じステージに立ってる事は、もう永遠に来ないのかもしれないから。

だから、楽しんでやろう。みんなで作ったこの曲を、歌い上げる事を。

この……ライブをな！

「いいぞ、香澄。行こう！」

「うん！えー、お待たせしました！では、聞いてください……『STARR BEAT！』ホシノコドウ』!!」

沙綾のドラムが鳴り響き、曲が始まる。そこにみんなの音が続き、一つの音色を作り出していく。

(すごいよ、翔。ドラムだけじゃなくて、ベースも弾きこなしてる！)
(私の音と、翔君の音が重なり合ってる……。かつこいい！)

(翔だって頑張ってるんだ。私だって、ドラムに集中しないと……。！)
(翔の奴、普通に上手いじゃんか!?練習してねえって嘘じゃねえの!?)
(なーくん、すごい！よし、私だって！)

上手く弾けてるみたいだ。自信はあると言ったが、ぶっつけ本番な事に変わりはないからな。ま、それでも沙綾のドラムの方が、すごいんだけど……。

(沙綾のドラム、気持ちいい。音が弾んでる！)

(何だかドラムの音が、背中を支えているみたい……。！)

(山吹さんも、ちゃんと弾けてんじゃん……。！よし、こっちも集中！)
(すごいよ、さーや！なーくんとは違う……。でも、安心する！それに、楽しいよ！さーや!!)

やっぱり、このバンドのドラムは沙綾じゃないとダメみたいだ。俺の時よりも、活き活きと音が広がっていく。

演奏するみんなの表情が、笑顔に変わる。とても楽しそうに、曲を紡ぎだしている。

沙綾、お前がドラムとして、ポップンパーティーに来てくれて、本当に良かった……。！

(すっごく楽しいよ、香澄！翔！やっぱり私、バンドが大好きみたい……。!!)

そんな翔の思いは、沙綾の心にも確かに届いていた。

あつという間の一時だった。演奏の終わった俺の額には汗が滲み、疲労感が襲ってくる。

けど、楽しかった。俺以上にみんなの方が疲れているだろうが、笑顔を絶やすことはない。観客からも惜しみない拍手が送られ、俺たちの演奏を称えてくれる。その興奮の中で、俺たちはライブを成功させた達成感をかみしめていた。

「やった……！私、さーややなーくん、みんなとライブできた……！」

「気持ちわかるけど、その前にメンバー紹介だろ」

「あつ、そっか。エへへ……」

有咲の冷静な一言で、香澄も喜ぶ気持ちを後回しにしてマイクに向かう。観客の方を向き、香澄は一人ずつ名前を呼んで紹介を始めていく。

自分たちの存在を、ポップンパーティーを知ってもらうために。

「メンバー紹介します！青いギターのおたえ！」

たえはギターをかき鳴らし、クールに決めつけて見せて。

「ベースのりみりん！」

りみはちよっぴりオドオドしながら、ペコリとお辞儀して。

「あっちが有咲！」

「キーボードをつけろ！」

有咲は観客の笑いを誘い。

「そして、ドラムの……さーやー！」

沙綾は、満面の笑顔で応えて見せた。

「それから、さーやが来るまでドラムを担当してくれて、さつきはベースを担当してくれた……なーくん！」

「つて、俺も？てか、本名で呼んでくれねえ!？」

まさか呼ばれるとは思ってなかったので、少しとぼけた返事になってしまった。けど、まあ……いつか。俺の事は、全校生徒が知ってるだろうし。

「私は、ランダムスターの戸山香澄！」

ジャジャーンとギターを鳴らし、それっぽくアピールして見せて。

「ここにいるなーくんとは、もうバンドすることができないけど……私たちが5人を応援してくれる、大切な仲間です！今日のライブは、とてもいい経験になりました！」

「……ああ」

俺もだ、香澄。今日みたいなライブを、いつかまたしてみたいって。できたらいいって……本気で思えたよ。

「そして、私たちは！」

待機していた4人が、ステージの前に登場する。香澄と横一列に並んだのを確認して、俺は後ろに下がる。

「……みんな、いい顔してるな」

もう俺は必要ない。

ここから先の道に、俺の出る幕はどこにもない。

この5人だけのステージだ。

「この5人で……！」

見届けよう。そして、しっかりと焼き付けてやる。

これが、香澄たちの門出だ。

「Poppin' Partyです!!」

phrase 51 ありがとうの気持ち

「今年の文化祭は、無事に成功しましたね」

「生徒が一丸となって、皆頑張っていたからね。どのクラスの出し物も、とても素晴らしかったよ」

今年の文化祭は無事に終わりを迎えた。各クラスが出し物の片づけを行っている中、俺は一人学園長の部屋にいた。片付け中の香澄たちには申し訳ないが、今日ばかりは顔を見せておく必要があったからな。

何せ、美羽の文化祭への参加を許してもらえたんだ。本当なら今頃、美羽は病院のベッドの上にいたはずなのに。

他でもない学園長の手によって、美羽の願いは叶えられた。その感謝を伝えるのは当然の事だ。約束したから。美羽に何かあった時、すぐに駆けつけられるようにと、俺はこの学校に入学した。

その事を条件に……ある望みを叶える事になったが。

「全て見回っていたのですか？気づかなかったのですが……」

「翔君とも、何度かすれ違っていたんだけどね。私よりも、一緒にいた彼女たち……ポップンパーティー、だったかな。そちらに夢中だったんじゃないかな？」

「なっ!?そ、それは、その……違いますからね!？」

「ハッハッハ、冗談だよ。けど、その反応はもしかすると、まんざらでもないのかな？」

「ちよ、学園長!／＼／＼」

完全な誤解だ。俺は別に、あいつらをそんな目で見た事は全くないんだぞ。香澄は幼馴染ってだけだし、他のみんなも友達ってだけだ。むしろあいつらだって、俺をそんな風に見てもいないはずだ。りみや有咲はともかく、香澄やたえに恋心があるとは思えない。

「……………」

けど、客観的に異性として見ても、あいつら可愛いからな……。香

澄もそうだし、りみやたえ、有咲、沙綾も……って、これじゃ俺が変態みたいだな。

実際、そう言う関係になるかはともかく、今は友達でいられたらそれでいい。もしかしたら、今とは違った感情を持つ事になる可能性がある、程度に考えていたらいいか。

「そつ、それよりも、美羽は大変喜んでいました。友達との時間も満喫していましたし、これも学園長のおかげです。感謝しても仕切れません」

「いやいや。あの時は反対こそしたが、私は生徒を第一に考えているからね。それはもちろん、翔君の事もだよ」

俺は強引に話を变え、改めて学園長にお礼を述べる。これ以上弄られても、返しに困って余計からかわれるのが目に見えているからな……。

「事情はどうあれ、翔君もこの学校の仲間。生徒の気持ちは、できるだけ優先させてあげたいと思っっているよ」

「その理念、立派です。俺も美羽も、そのお考えに救われたんですよ」
「そうか……ならばなおの事、そんな翔君に対して、本当はあんな条件を出したくはないんだよ」

学園長の顔が悲痛に歪む。一人の生徒のために、それもこの場にいる事が特殊な俺と言う生徒に対して、そこまで感情を表にできるとは。だが、

「何をおっしゃいますか。俺は本来、この学校に存在してはいけない異端児なんですよ？それくらいのリスクはむしろ背負わないといけないんです。あなたがお気になさる事はないですから」

「そうは言っても……私の手で何とかできるのなら、本当はそうしなかった。それを全く関係のない他人に委ねること自体が、間違っっているんだ」

「それだけの傷を、背負ってきたわけでしょう？あなたも……あの人も。それに、彼女だって」

「だからこそ……私が受け止めなくてはいけない事なんだ。それを他人に押し付けて、奇跡に縋りつくしかできないのは、辛いんだよ。君

のような若者に託すには、あまりにも重い。成し遂げられる話でもないかもしれないのだから」

「……おっしゃる通りです。できないかもしれない。けど、やるしかないんですよ。それが俺にとっての使命でもあり、あなたと……あの人の恩返しだ」

「では聞くが、何か……期待できるような変化はあったのかな？」

学園長の声が、俺の胸に鋭く刺さる。向こうにそのつもりはないだろうが、その言葉が嫌に響いた。そう思ってしまうのは、痛いところを突かれているからか。

「……いえ。文化祭の準備と美羽の入院が重なり、そこまで顔を出せておらず……」

進展は何もない。兆しすら見せてはくれない。今日こそはと祈りを込めても、そこには何も生まれない。

あの銀髪の少女は、今も心を閉ざしたまま。どれだけ言葉を投げかけても、少女の心を蝕む氷の壁は溶けない。それだけの傷を負い、今も孤独に眠り続けている。

「……ダメですね。俺は」

「そんな事ない。翔君はよくやっているよ」

「結果が見合わないようじゃ、俺の行動なんてまだまだなんですよ。こんなんじや、美羽のために入学した俺の意志も、大した事はないの——」

不意に、何かが落ちる音がした。

この部屋にある物じゃない。外からだ。それも、部屋の扉は閉まっているのにハッキリと聞こえる音だ。すぐ近くで、何かを落とした音だろう。

もしかしたら……聞かれていたか。今の会話を。

それだけはダメだ。俺は特務生扱いとしてこの学校に入学した事

に表向きにはなってるんだ。学園長と裏で手を引き、取引のような形で入学していたなんて話が、もし誰かに知られてしまったら……！

俺は学園長を手で制し、一気に扉との距離を詰める。盗み聞きしていた奴が逃げないうちに、俺はすぐに扉を開けた。

「そこにいるのは誰だ！」

だが……。

「いない……」

人影らしき姿はどこにもなく、俺は静かに扉を閉める。さっきの物音は、気のせいだったとでも言うのか？

いや……確かに聞こえた。学園長だって、かすかに眉を上げていたしな。誰かがいた事は間違いないはず。

問題は、誰に聞かれたか、だ。

「その様子だと、誰もいなかったみたいだね？」

「はい……」

「今日のところは、これで話は終わりにしよう。また誰に聞かれるか、わからないからね」

「……そうですね。それでは、俺はクラスの方に戻ります」

俺は学園長に頭を下げ、部屋から慎重に外に出る。幸い、誰にも遭遇する事はなかった。

「……………」

けど、さっきの物音がどうにも引っかかる。誰に、どこから聞かれていたのか。今となっては全く分からない。

そしてそれが、もしか美羽だったとしたら……。

あいつは……。

「こんな兄の事を、どう思うんだろうな……」

そんな事がありながらも、それ以外には特に何事もなく文化祭は終わった。クラスで打ち上げしたり、ポツピンパーティーだけで蔵に集まったりはしたんだけどな。

香澄たちはともかく、クラスの打ち上げは女子ばかりで落ち着かなかったりしたけど。ま、ポツピンパーティーとしての打ち上げはそうでもなかった。気心知れてるしな。

沙綾もライブ以来の蔵だったし、最初はソワソワしてたけどすぐに慣れてた。他のみんなも、時間を忘れて楽しんでたよ。地下だし、感覚も違うしな。あ、泊まりとかはなかったぞ？

そうして数日が経過して……文化祭ムードは薄れていった。俺たちにはいつもの日常が戻り、楽しかったあの時間は思い出へと変わる。また今日から、新たにバンドの練習も始めていくことだろう。

香澄にはSPACEのステージに立つ目標がある。そのために、ポツピンパーティーのみんなでオーディションを受けようとしてる。まだ不安な点はあるが、それでも香澄は立ち向かおうとしてる。

俺も見習わないといけないな。高い壁ではあるが、俺にはどうしてもやるべきことが残ってるんだ。バンドのメンバーの件も解決したし、そろそろ本格的に動き出さないといけない。

あまり……時間も残ってないしな。

「……はあ」

と、新しいスタートを切ろうと動き出す雰囲気を見せる中。

「翔、ため息ついたら幸せが逃げちやうよ？」

少し問題が起きていた。

「それってよく聞くけどさ、逆に考えたら幸せを求めてるって事じゃないのか？」

「おお、言うね。って事は、翔は今そんな気持ち？」

「当たり前だろうが……。全く、何でこんなことになったんだ」

俺は今、沙綾と二人で楽器屋さんにいる。他のみんなは先に蔵に向かい、練習を始めているはずだ。本来なら、俺たちも蔵にいたはずなんだが……。

「アハハ……。香澄だつて、わざとやったわけじゃないつて」

「沙綾は優しいな……。けど、さすがにあれは酷いぞ。あいつは何か問題が終われば、また新しい問題を持ち込まないと気が済まないのかよ」

「で、でもさ、あれだつてその……。事故みたいなもの……。だと思っ」

「いや、だからって事故でドラムをぶっ壊すつてどうなんだ!？」

そう。俺がドラム代理として練習している間、ずっとお世話になっていたドラムが壊れた。原因はさつきから度々口にしてる香澄とか言う奴のせい。

さつき打ち上げの話をしたが、その時に調子に乗ってたえと騒いでたら、そのはずみでドラムと大激突。香澄に怪我はなかったが、ドラムの方はダメだった。元々使い古されてたし、仕方なかったと言えば聞こえがいいが。

つて、おい。たえにも原因あるじゃねえか。後であいつにも言っておかないと……。つて、話がずれた。

とにかく、このままでは沙綾が練習に参加できない。本当は今日から一緒に練習するはずだったんだけどな。蔵のゴミの中にも、もうドラムらしいものはなかったし。

で、今に至るわけだ。沙綾の練習のために、ドラムを探さないといけないからな。

「ありがとね、翔。わざわざ付き合ってもらつてさ」

「俺も蔵に行ったところでやる事ないし、暇だからな。俺の本職はドラムなんで」

「でも、文化祭の時はベース弾いてたよね」

「弾けるっただけで、上手くも何もないぞ? りみの方が普通に上手いから」

人に教えられるほど、ベースをやりこんでるわけじゃないしな。り

みに何かアドバイスできるだけのスキルは持ってない。

「さ、とりあえず見てくか。できる事なら今日中には買って、蔵に運び込まないと」

「そうだね。私、まだ有咲の蔵で練習した事ないから、早くやりたくて楽しみなんだ」

「よし、なら早く決めないとな」

ドラムコーナーに到着し、俺たちは早速ドラムを吟味して選んでいく。叩きやすさ、そして音。これから使う上での性能面ももちろん大事だが……。

「そういや沙綾。ドラム買うのはいいが、そんな金持ってるのか？俺も持つては来たが、あまり心持たないぞ？」

学生にとつて一番求められるのは、何よりも値段だ。金銭的に余裕があれば別だが、ドラムを買うとなると、出費が痛くなるのは確実な話。

その中で、どれだけ安く済ませられるか。性能が優れているか。両者をバランスよく備えているドラムを探し出していかないといけない。

「大丈夫。私のお小遣いと、足りない分はお母さんが出してくれるって」

「そつか。お母さんも、沙綾がバンド再開した事、きつと嬉しいんだろ。うな。その気持ち、応えてやらないとな」

「うん……！」

そうやって心配してくれる人がいるってのは、本当にありがたい話なんだよな。一人でつ代えるよりも、心にも体にもかかる負担がぐつと軽くなるから。

美羽も……そう思ってくれているのだろうか。それとも、ただのお節介でしかないのか……。

「あつ、ねえ翔。これなんかどう？」

「すげえ本格的なドラムだな。けど、その分音も叩きやすさも申し分なしってとこだな。値段は……」

俺は値札を探して、金額を確認する。えーと、一、十、百、千、万

……。

「げっ、に、20万!? き、さすがに高くないか!？」

「だ、だね……。お小遣いも全然足りないし、こんなに高いとお母さんにお金出してもらおうのためらっちゃうよ……。」

「相応の値段ではあったが、これは学生の俺たちには手に負えない。切り替えて、別のドラムを探るか……。」

「……お? 沙綾、これなんかどうだ?」

「どれどれ? ……あつ、電子ドラム!」

「音も変わるみたいだし、これならそんなにスペースも取らないだろ。多分値段も、そこまで高くはないはずだ」

「沙綾が試し打ちを始める横で、俺はドラムの値札を探す。見つけて確認すると、案の定10万弱。まあ、それでも高いことに変わりはないけどな……。ドラムはこんなものだと割り切るしかない。」

「うん、いいかも! 翔、これにする!」

「よっぽど気に入ったみたいだな。即決だったぞ?」

「値段もさっきのドラムみたいに高くないし、叩きやすくていい感じだったし! これなら有咲の蔵にも邪魔にならなさそうだし、もうこれしかないよ! 買おう、今すぐに!!」

「わ、わかったから落ち着け沙綾。それじゃ、会計だけ済ませておくか」

「いや〜いい買い物したな〜♪」

「沙綾がこんなにご機嫌なのって、初めて見る気がするな」

「そ、そうかな?」

「俺たちはすぐにドラムを購入し、今は配送の準備を行ってあげるところだ。俺たちは休憩スペースでくつろぎながら、手続きが終わるのを待つことに。」

けど、こんなにも感情を表にする沙綾は今まで見た事なかったな。指摘されて照れ臭そうにしてたが、それだけ沙綾の中でドラムが、そしてバンドが大きな意味合いを持っていたって事なんだろうな。

「でも、そう見えるって事は……私、やっぱりバンドが好きなんだな」「かもな。今の沙綾、活き活きしてるぞ」

「ふくん？それじゃあ、私は今まで活き活きしてなかったみたいだに聞こえるんだけど？」

「あ、いや、そう言うわけじゃないからな!？」

「フフツ、わかってるって。冗談だよ」

笑いながら舌を出す沙綾。そうやって軽口を叩いてるくらいだから、やっぱりいつもよりもテンションは上がってるんだな。と、

「……ありがとね、翔」

「ん？何がだ？」

「私に、またバンドやりたいって思わせてくれた事……本当に感謝してる」

少し照れ臭そうにしてたが、沙綾は俺にそう言った。そんな風に改まらなくてもよかったのにな。

「私だけじゃ、どうにもならなかった。自分の気持ちを閉じ込めて、諦めて……。だから、ありがとって言いたくて」

「いや、それは沙綾自身の力だよ。俺は背中を押しただけだし、香澄だってそうだ。それに、沙綾は自分の手で過去と向き合う事も出来た。文化祭の時、自分の足でステージに立った事がその証明だ」

「うん……でも、ちゃんとお礼を言っておきたいの。私が過去と向き合えたのも、ステージに立てたのも、全部背中を押してくれたからできたんだよ。立ち上がって、前を向く勇気をくれたんだ」

「沙綾……」

「香澄が、そして翔がいたから、私は今ここにいるんだ。大好きなバンドを、居場所を、もう一度くれたんだ」

俺にとっては大したことはない。そんな大げさに感謝されることでも何でもない。

ただ、力になりたかっただけなんだ。一人で悩んで、苦しんで、周

りが見えずにボロボロになってしまふ沙綾を見たくはなかった。俺みたいなにはなつてほしくなかった。だから、礼なんて言われること自体が筋違いなんだ。

けど、嬉しくないわけじゃない。俺の言葉が、行動が、沙綾を変えらる事に繋がった。こんな俺でも、誰かの役に立つことができたって思えるからな。りみの時や、有咲の時みたいに。

「……って、何だか恥ずかしいね。やつぱり面と向かって言うのは照れ臭いな」

「それを言うなら、俺も恥ずかしいからな。ここ、店の中だぞ?」
「ば、場所とか考えた方がよかったね……」

伏し目がちに見る俺を見る沙綾は、ほんのり顔を赤らめていた。お礼を言われた事に対してか、それとも別に理由があるのか……俺の顔も熱を帯びているのがわかる。

でも……。

「……ん? 香澄から電話だ。もしもし?」

『もしもし、なーくん? 今どこ? ドラム見つけた? 色は? いくらくらい?』

「一度に話すな! 答えられねえよ!」

『エツヘへ……気になっちゃって』

だからって質問攻めするなよ。けど、今で俺たちの緊張も解け、沙綾も隣で苦笑していた。

『それで、ドラムは見つかった?』

「ああ。いい感じのドラムが見つかったぞ? 沙綾も大満足だ」

『えっ、本当!? よかった〜!』

「どっかの誰かがぶつ壊さなかったら、こんな買い物しなくて済んだけどな!」

『うっ、ごめんなさい……』

「それと……たえ! 聞こえてたら、後で話があるから覚えてろ」

電話越しに遠くからたえの声が聞こえたが、無視しておこう。何か

プロポーズがどうか言ってたが、そんなわけねえだろうが。説教だ。

『けど、よかったねさーや！ドラマ見つかったね！』

「沙綾に代わるか？俺にそんな話してても仕方ないだろ」

『じゃあお願い！』

「わかった。……ほい、沙綾。香澄が話したいってさ」

「みたいだね。じゃ、電話借りるよ」

俺の手からスマホを持ち上げ、そのまま自分の耳に当てて香澄と話し出す。何を話してるのかはあまりわからないが、沙綾の明るい声と楽しそうな表情が、それを物語っている。

「……よかったな」

今、香澄たちと本当の意味で交わって、そんな風に笑えるようになったのは……沙綾が変われたからだ。初めて出会った時とは、全然違う。

そのきっかけを作り出したのは俺たちだ。力になりたい、そう思っ
て行動した結果がこれだ。香澄も、みんなも。俺も……なんだよな。

その積み重ねが、今も病室で眠るあの子の心を動かすための自信につながっていく。いつの日か、必ず。

俺はそう信じてる。

「はく、つかれたく！」

「今日の授業終わったただけだろうが」

翌日。俺たちは学校も終わり、有咲の蔵へ向かっているところだった。俺にとっては見慣れたはずだった光景も、今日からは新鮮なものへと変わっていた。

「さーや、今日から蔵練デビューだね！」

「蔵練って？」

「蔵練の事？」

「りみ、多分当たってる。だろ、香澄？」

「そうそう！よくわかったね？」

いや、わかるだろ。普通に略しただけだし、お前の考えなんか大体わかる。何年一緒にいると思ってるんだ。

「ふうくん。さすがは幼馴染って奴だな」

「うるさいぞ、有咲。そう言うお前も、香澄とは仲いいだろ」

「お前らほどじゃねーよ」

「えくっ!?有咲、私の事嫌いな……?」

「翔ほどじゃねーっただけで、嫌いなんで一言も……っつて、あ、ちよ、ちが、そんな目で見んな!／＼／＼」

あく本当微笑ましい。香澄もウズウズしながら抱き着いて行ったし。有咲はやっぱり、肝心なところで素直になれないな。

「そう言えば、沙綾ちゃんのドラムってどうなったの？」

「有咲の家に届いてるはずだよ。もう来てる？」

「おう、バッチリ。ばあちゃんが受け取ってくれたからな」

「おばあちゃんに無理させちゃいけないよ。有咲、いけない子だ」

「おたえは黙ってる」

沙綾のドラムは既に届いてるらしく、このまますぐに練習に参加できらしい。おばあちゃんが受け取ってくれたらしいが、本当にお世話になりっぱなしだ。練習場所だって提供してくれてるんだしな。

たえが有咲に叩かれ、涙目になりながら頭をさする。その横で苦笑

する俺たちだったが、ふと思い出したように沙綾が有咲に話を切り出す。

「でも、本当によかったの？ドラム、有咲の家になんと置いてていいって言ってくれたけど……」

「そんなの気にすんなって。練習だつて、うちでするじゃん？どうせ前と何も変わんねえから」

気が利いてるんだか、マジで寂しんぼうなだけなのか。そんな事口走ったら、確実に有咲は顔を真っ赤にしてポコポコ殴ってきそうな気がするが。それすら可愛らしいんだろうけど。

ま、何だかんだあったが、ようやくポツピンパーティーもバンドとしてスタートを切ることができそうだ。今まで重ねた苦労は、この日の始まりのためにあったんだ。

「いいぞ、有咲。太っ腹」

「うるせえぞ、翔。後で覚えてろ」

「有咲、太ってるの？ちゃんと運動しないと。明日から私と走る？」

「おんまえも後で覚えてろよお!!」

俺の言葉に、たえも便乗して軽くボケを放つ。有咲がツツコミを入れ、それを見た沙綾とりみが笑いあって……。

「……香澄？」

俺たちが並んで歩く、その後ろで。香澄は静かに、ただじつと俺たちを見ていた。いつもなら会話に交ざってくるはずなのに、一言も話そうとしない。

何かあるのか。けど、その表情には何も深刻そうな含みはない。むしろ逆だった。頬を緩め、夢げながらも嬉々とした眼差しをこちらに向けている。

「あつ、ごめん！つい嬉しくって……ジーンとしちゃって」

「……ジーンと、か」

「うん。やっと揃ったなうって思つて。私たち、ポピパが」

ポピパ……もしかして、ポツピンパーティーの略か？初めて聞くから何かと思つたぞ。

けど、確かにな。ここまで来るのに色々あったし、ジーンとしてし

もう気持ちもわかる。

「ポピ……何？」

「コピペだよ、コピペ」

「いや、言ってるねえだろ」

それに、お前の理屈だと香澄の揃った発言はどう解釈するんだよ。面白いコピペ集でもできたのか。

「ポツピンパーティーの略だろ？ポピパって」

「なーくん、正解！」

「ポピパかく。可愛いかも」

「美味しそう」

沙綾の感想はわかるが、たえは何をどうしたらそんな場違いな感想が出てくるんだ。

「よくわかったね、翔君」

「まあな。こいつの考える事なんて、手に取るようにわかるぜ？」

「ええっ!? な、なーくんって……もしかして、超能力者だったり？」

「エスパーかも」

どっちもちげえよ。

「本当かよ。口から出まかせじゃねーの？」

「いや、何となくでわかるだろ。有咲だって、香澄とは何だかんだで付き合い長いし」

「私と翔とじゃちげーじゃん。翔、幼馴染じゃねーの？何かパワーとかあんだろ」

「ねえよ」

まずパワーって何だ。双子は互いの考えてる事をシンクロできるとか言うけど、そんな類じゃねえだろ。

「じゃあなーくん、私の考えてること当ててみてよ！」

「……まーたお前は変な事始める」

「変じゃないよ！これは勝負だよ、なーくん！」

「勝負って……」

何かいきなり勝負始まったぞ。このままスルーして逃げるのも手だが、香澄はやる気みたいだし、期待のこもった眼差しで俺を見てく

る。

「フフン。今回は当てられない自信があるよ?」

「……やらかなきやいけない?」

「いけない」

「何でたえが答えるんだ」

面倒くさいなあ……。別に確証があるわけじゃないが、大体で予想できるからな……。

「……どうせ、今すぐにも練習したいとか、早く蔵に行きたいとか、そんなところだろ?」

「えー!?何で分かるの!」

「わかるに決まってるだろ」

マジで思った通りじゃねえか。

「やっぱパワーあんじゃん。幼馴染パワー」

「うるせえな、有咲」

何か前にも聞いた気がするぞ、幼馴染パワー。それに、恥ずかしい思いをしたような記憶もあるんだが。

てか、すごくどうでもいい話してる気がする。そろそろ蔵に着きそうだし、俺も動き出すか。

「じゃ、みんな。今日はこの辺でさよならだ。練習頑張れよ」

「あつ、そつか。なーくん病院行くんだったよね。さっきの勝負の続きやりたかったのに……」

お前になら、いくら勝負持ち掛けられても負ける気がしないから諦めてくれ。それに、香澄が言ったように今日は病院に行く予定があるからな。ここからは別行動だ。その理由についてだが……。

「翔、どこか具合悪いの?」

「バカ。今日は美羽が退院する日だ。今日も昼休みに話しただろ」

と言うわけだ。手続きとかもあるし、母さんは仕事で忙しいからな。任せるわけにはいかない。家族で向かえるのは、俺しかないしな。

それに……ちょうど病院に向かうんだ。あの銀髪の子……美空の病室にも、少し顔を出すだけの時間はある。そろそろ、何か変化の

きつかけが欲しいところだしな。

「でも、本当にいいの？ 私たちも時間あるし、一緒に行ってもいいんだよ？」

「沙綾は初めての練習だろ？ 気持ちは嬉しいけど、今日はそっちに専念してくれよ。オーディションに向けて、練習しないんだろ？」

今のポピパの目標はそこだ。そのために今は、少しでも練習する時間は欲しい。オーディションだって、待ってはくれないからな。

「ってわけだ。時間もないし、美羽も待ってるからな。そろそろ行くよ」

「わかった！ また明日ね、なーくん！」

俺は5人に見送られ、その場を後にする。ふと振り返ると、子供みたいに手を振る香澄の姿が見えて苦笑してしまった。

あんな感じだけど、バンドへの情熱は確かなんだ。オーディションまでの残された時間で、どこまで成長できるのか……期待と同時に不安でもある。他の四人も、不安に思うところはあるしな。

とは言え、また明日になれば、俺も練習に参加できる。あいつらのサポートに回るだけの時間は取れるし、少しでも支えになれたらいいんだけどな。

あいつらの夢を、俺が支えてやる。

そう思っていた。

それが、当たり前だと思っていた。

だが……。

俺はまだ、知らなかった。

香澄たちと次に会う時は、明日ではないことを。

そして、その時を境に……いや、違うか。

もしかしたら、今この瞬間から……そもそも、既にそうなるべくしてなっていたのか……。

わからない。わかりたくもない。けど。

悪夢は、近づいていた。

ゆっくりと、何かがきしむ音を立てていた。

歯車は、悪い方向へとずれて、回り始めていた……。

「あつ、お兄ちゃんやつと来た！」

「悪い、美羽。ちよつと寄り道しててな」

慌てて病室に駆け込んできたお兄ちゃんの姿を見て、私は待ち焦がれたように胸が高鳴るのを感じていた。この時を、どれだけ夢見ていたかわからないから。

今日は私が退院できる日だ。数週間の間続いた、長かった入院生活ともこれでお別れできる。文化祭の間は学校にも行けたけど、それでも帰る場所が病院なのは……ちよつと寂しかったし。

一人の病室よりも、やつぱり誰かが待っていてくれる家の方がいい。これからは、またお兄ちゃんと一緒にいられる。

それに、明日からはまた、いつも通りに学校に行つて、友達とお話して、ギターも弾いて……あく楽しみだなく！もつともつと、やりたい事はいっぱいあるし……何から始めていこうかな！

「とりあえずまずは……荷物まとめて、それから退院の手続きだな」

「あ、荷物なら私の方でまとめておいたよ！早く退院したかったし！」
「気が早いな……。元気なのはいいが、調子は大丈夫か？退院できるからって、我慢なんかしてないだろうな？」

「そこは問題なしですよ、お兄ちゃん。今の私なら、ギター弾きながらドラム叩くくらい余裕だよ！」

「それは絶対無理だって」

苦笑するお兄ちゃんを見て、私も目に見えて舞い上がってるなくと内心笑う。でも、それだけテンション上がっちゃうんだ。多分、今日はずつとこんな感じだと思う。

って、あれ。そう言えば、さつきから気になっていたんだけど……？

「ところでお兄ちゃん。その手に持つてる紙袋って何？」

「ん？これか？この病院にもお世話になったし、お礼も兼ねて買ってきたんだ。ちよつとしたお菓子の詰め合わせだけだな」

寄り道してきたって、こういう事だったんだ。ちよつとした気配りだけど、こう言うところはしつかりしてるよね、お兄ちゃんって。

「ふくん。私にはないの？」

「何で美羽にも買ってこなきゃいけないんだよ。それに、荷物だって持って帰らないといけないのに、また荷物増やすわけにはいかないだろう」

「え〜いいじゃ〜くん！お兄ちゃんのケチ〜！」

これ見よがしに頬を膨らませながら、ブーブーと文句を垂れ流す。からかい半分、本音半分。それをお兄ちゃんは多分わかつてはいるだろうけど、ちよつぱり困った顔になる。

「お前なあ……。ったく、わかったよ。帰りに何か好きなお菓子買ってやるから、それで我慢しろよ？」

「わーい！嬉しい！やっぱりお兄ちゃん最高！大好き！」

「大げさなんだよ……。このおねだり上手め」

「じゃあ私グミね！ちよつとシユワつとしてるの！」

「はいはい、わかったから。退院祝いつて事で、ちゃんと買ってあげるからな」

退院できるだけでも嬉しいのに、おまけにグミまでついてきた！今日は本当、いいこと尽くしだ。もしかしたら、もつと他にもいい事が起きるかもしれない。

「けど……本当に元氣そうでよかったよ。退院ありがとな、美羽」

「ありがとつて……普通おめでとじやないの？」

「元氣に退院して、戻つて来てくれてありがとうつて事だよ」

「ありがとう、なんて……本当、お兄ちゃんは優しいな。そこが好きだったりするんだけど。でも……その言葉を言いたいのは、私の方なんだよ。」

「いつも病氣の私を支えてくれて、そんな私に優しくしてくれて。苦しそうな顔なんか何一つ見せずに、私に寄り添ってくれる……。」

「私は、重荷になつていいるのかもしれない。お兄ちゃんに、迷惑ばかりかけているのかもしれない。私は、何も返せていないのかもしれない。」

「だから、言いたいの私なんだよ。ありがとうつて。」

「よし、じゃあ早く退院の手続き済ませて、美羽がどうしても食べたってねだつて仕方ないグミを買つてやるとするか！」

「ちよつと、お兄ちゃん!? それじゃあ私がままな食いしん坊みたいじゃない！」

「冗談だつて。んじゃ、ちよつと行つてくるよ。美羽は先に荷物持つて、ロビーで待つててくれ」

「りよ〜かい! すぐに戻つて来てね、お兄ちゃん！」

「ああ、わかつてるよ」

お兄ちゃんは紙袋を片手に、病室を出ていった。私も忘れ物がないかどうかを確認し、荷物を手に持ち、それから愛用のギターを背負つて病室を出る。

ふと、去り際に後ろを振り返つた。数週間とは言え、ずっと過ごしてきた場所だ。初めて来たときのように静かになった室内を見て、少し名残惜しくも感じていた。

その気持ちを振り払い、私は1階のロビーへ。空いている席を見つけて、そこに腰かける。この時間はロビーにいる人も少ないから、私以外に10人ほどいたくらいか。暇つぶしにギター弾いてもいいんだけど、お兄ちゃんもすぐ戻ってくるはず。チューニングもしてないし、今はスマホでもいいじつていよう。

LONEのクラスグループに目を通し、今日で退院する報告を入れておく。すぐに何人かのクラスメイトが、おめでとうと反応してくれた。明日香は……部活もあるし、さすがに反応なかったか。

私もありがとうと返信し、そこから何気ない雑談が続く。まだお兄ちゃんも来てないし、しばらくはおしゃべりを楽しんでいよう。

昨日見たテレビの話や、駅前に新しくできたクレープ屋の話。明日の放課後に遊びに行く予定を立てたり、また会えるのが楽しみだと言ってくれたり……。

「……幸せだな、私って」

私は、本当に幸せ者だ。周りの人に、恵まれすぎている。

いつ病気の発作が襲うのかもわからないのに、倒れてしまうのかもわからないのに。それでも気さくに接してくれるのは、周囲の優しさがあったからだ。負担をかけてしまう方が多いはずなのに。

それは、お兄ちゃんだって同じだ。優しく、とても頼りになる。頼りすぎて、迷惑ばかりかけられる事の方が多いけど……何も返すことができてないけど……。

でも、そんなお兄ちゃんが好きだ。私の事を大切に思ってくれてるお兄ちゃんが好きだ。どんな時も、必死になって心配してくれるお兄ちゃんが好きだ。

何よりも、家族や妹だからって上に見たり下に見たりしないで……同じ歩幅で、高さで、ありのままの私を受け入れてくれるお兄ちゃんが……好きだ。大好きだ。

これまでも、そしてこれからも、何も変わらないでいてくれたらいい。私の大好きな、優しくて頼りになるお兄ちゃん。

この関係が、ずっと続いてくれたらいいのに。

「……って、あれ？」

ふと現実に戻り、私はスマホの画面から目を離して顔を上げる。ロビーの一面にある時計を見ると、それなりに時間が過ぎていたことがわかる。

けど、まだお兄ちゃんは戻ってこない。手続きに時間がかかっているのか、それともお医者さんと話し込んでいるのか。グループでの会話もいつの間にか途絶え、ロビーにいるのも私だけ。

そんな事を考えている時だった。待ち続けていたお兄ちゃんの姿が、視界に入ってきたのは。

「あっ！来た来た、お兄ちゃ——」

私のいる方向とは真逆の、エレベーターの前に立っているお兄ちゃん。

「……え？」

退院の手続きは終わったのかな？その部屋も、エレベーターとは反対方向にある。わざわざエレベーターに乗り込む必要はないはずだ。

もしかして、病室に何か忘れものしてた？けど、私が出る時にはちゃんと確認したし、何もなかったと思うんだけど……？

それに、紙袋も手に持ったままだ。あれはお医者さんに渡すお菓子の詰め合わせのはずじゃ……？

気になる事が多すぎる。まだエレベーターは来ていないみたいだけど、お兄ちゃんは確実に乗り込むはず。やけに周りを気にして、キョロキョロしているようだったけど。

どうしよう……追いかけた方がいいのかな。それとも、待っていた方がいいのかな。お兄ちゃんの不可解な行動に、私は何か妙な空気を感じ取っていた。

だってそうだ。すぐに戻ると言いながら、戻ってくるのも遅かった。そして、何故か私をスルーしてエレベーターへと向かっている……。それに、紙袋の事もある。

何かあるのかな。私の知らない、お兄ちゃん秘密があるのかな。そう考えると、少し暴いてみたい気持ちが強くなる。

でも……それは本当に、知ってもいい事？

やけに人目を気にしたような素振りだった。あそこまで周囲に気を向けていたら、さすがに私にも気がつくと思うんだ。ロビーには私しかないし、そこまで人目の付かない場所を選んだつもりはない。誰にも知られてはいけないような、そんな……覗いてはいけない何かを覗こうとしているんじゃないの？

「……いや」

そうじゃない。私の思い過ごしだ。お兄ちゃんに限って、そんな不審な事に手を染めているわけじゃないよ。

きつと、本当に私がいる場所がわからなかったただけだ。だから、私がないか周りを探してキョロキョロしているだけなんだ。

そう……なんだって、思い込みただけなのかな。

「あつ……！」

エレベーターの扉が開いた。私は考えるのを止めて、荷物を持ってエレベーターへと駆け出す。

けど、扉は非情にも閉まってしまう。幸いにも隣のエレベーターがすぐに来たため、私はそっちに乗り込んで私の病室のあった階層を指す。

これでお兄ちゃんが病室に戻っていれば、私の思い過ごし。でも……もしそうじゃなかったら？

嫌な汗が頬を伝う。発作の時とは違う胸の締め付けが、息苦しく感じる。と、扉はすぐに開いた。私は焦りからすぐに飛び出してしまったが、そこは目的のフロアじゃない。

「あつ……乗りなおさないと……！」

さっきのエレベーターは、もう上に上がって行ってしまった。私は

他のエレベーターを探そうと、一步前に出たところで……。

「えっ……!?!」

曲がり角へと消えていく、お兄ちゃんの姿を見た。

「何で……!?!」

ここは私の病室のフロアじゃない。と言う事は、私を探しに行くために、エレベーターに乗ったわけじゃない……!?!

どこに向かっているのか、想像もつかない。そもそも、このフロアには来たこともない。入院していたはずなのに、何があるのかも把握できない。

気になる。お兄ちゃんがどこに向かっているのか。けど……。

「っ、足が……」

すくんでいる。震えて、前に進むことを拒んでいる。

この先に進んでしまえば、知ってはいけない何かに、本当に近づいてしまう気がしたから。引き返すなら今だと、何も知らずに戻りを待てど、何かがそう囁いた気がした。

でも……。

「……行こう」

ここで戻っても、このモヤモヤがなくなるわけじゃない。むしろ、知らなかった事で私は、お兄ちゃんを疑い続けてしまう事になる。

そんなのは嫌だ。私はお兄ちゃんが大好きなんだ。このままずっと、お兄ちゃんをそんな目でしか見られなくなるのは嫌だ。ずっと気まずい空気が流れるのは嫌だ。

さつき、私自身がそう願ったんじゃないか。お兄ちゃんとの関係が、ずっと続いてくれたらいいって。

覚悟を決めて、私は後を追う。気づかれないように、身を隠して距離を取って。すれ違う看護師や患者さんの目は痛いけど……今はそんな事言ってもらえない。

でも……何だろう。今私は、普通にお兄ちゃんを追いかけているだけだ。そのはずだ。

なのに、どうしてこんなにも胸騒ぎがするんだろう……？

「……あつ」

やがて、お兄ちゃんはある病室に入ってしまった。軽くノックをして、どこか物悲しい表情で。

ちようど人通りも少ない場所にある病室だったため、私は転がるように病室の前に移動して様子を伺う事にする。

「この病室……知り合いが入院してるなんて話、聞いた事なかったけど……？」

だとしたら、この病室には誰が？病室の前にあるネームプレートを確認すると、どうやら私と同じ一人部屋らしい。

けど……この名字、どう読むんだろう？と……ち、く……？ダメだ、わからない。名前の方はすぐに読めたけど……美空、か。聞いた事ない。

「……も、元気……たか？毎日……ここに……じゃ、つまないだろ」
うつすらと、お兄ちゃんの声が聞こえた。内容はわからないけど、この美空って人と話をしているみたいだ。でも、その呼びかけの声がないのが疑問だけだ。

私は誰もいないのを確認して、扉に耳を当てて話を盗み聞く。さつきより鮮明に会話が聞こえてきた。

「今日の授業、ちよつと難しくてさ。あの先生の教え方は悪くないんだけど……内容が難しくてな」

「昨日、友達とコンビニでアイス買ったんだけど、変な味のアイスが売っててな？ウニメロンビーフって味で、肉か魚か果物かハッキリしてほしいだろ。友達買って食べてただけど、これが意外に合うみたいでな？俺もまた買ってみたいなくってさ」

「あつ、そうそう。これ美空のために持ってきたんだ。別に怪しいものじゃないから、後で食べてくれ」

話題を提供し、自分から気さくに話しかけてる……。少なくとも、全く知らない人って訳じやなさそう。てか、あの紙袋……。最初からこの人に渡すつもりだったのか。けど……。

「……相手の人、何も話してない？」

お兄ちゃんの声は聞こえてくるのに、もう一人……。美空と名乗る人の声は一切聞こえてこない。私が聞き取れないほど小さい声なのかもしれないけど、それにしてお兄ちゃんの話はどうも一方通行な気がする。

と言うより……。最初から一人で、自分のことを話しているような……。聞かせているみたい？

全くわからない。お兄ちゃんが話している相手の、美空って人は……。一体何者なの？

「近くの駅前にクレープ屋ができたみたいだな。俺、甘い物好きだから、また行きたいな。って思ってるんだ。妹も甘い物好きだし、一緒に行きたいんだよ」

ビクツとした。いきなり私の事が話題に上がったから、気づかれてるのかと思った。

「あつ、そう言えば今日、妹が退院するんだ。そのついで……。みたいになつちやっただけど、少しでも美空に心を開いて欲しくてさ」

心を開く？何か精神的に重い病気を抱えている人なのかな？

「……………」

けど、そんなお兄ちゃんの気持ちに応える声は、どこからも聞こえない。耳を澄ませる先には、沈黙しかない。

「……美空。君の心の傷もわかる。あれだけの目に遭って、簡単に立ち直れるなんて思ってなんかいない」

「……………」

「けど、だからって君は……。いつまでもこの病室で立ち止まっているつもりか？抜け殻のように生きるだけで、本当にいいのか？」

「……………」

「俺もさ……。心配なんだよ、美空。このまま君が、たった一人で人生を

過ごしていくなんてさ……悲しすぎるだろ」

「……………」

「君の境遇を知って、それがどんなに惨いものなのかを痛感して……放っておけないと思った。力になりたいって思ったよ。初めは……ただの使命感で動いていたかもしれないけどな」

使命感……？今一つ話が見えてこない。

「自分勝手だとは思ってる。俺の独りよがりのために、君を利用しているように見えても仕方ない。そう言う私欲しかない人間が一番嫌いだって事もわかってる。だから君は、心を閉ざしたんだろ……？」

「……………」

「最初はただの条件でしかなかったかもしれない……けど、今は違う。俺自身の目的のためだけじゃない。君のために、できる事をやりたかって思えたから」

私の知らないお兄ちゃんが、次々と顔を出す。条件？目的？何が何だか、全くついて行けない。

「この数か月の間に、俺は多くの経験をした。その中で俺は……こんな俺でも、誰かの力になれる事を知った。何もできなかった俺が、何かをできる事を知ったんだ」

「……………」

「そうだ……俺には何もできなかった。妹が、美羽が倒れて病院に運ばれていったあの日、俺は痛感した。家族にも傍にいてもらえず、ただただ病気の恐怖と戦い続けてた美羽の苦しみに寄り添える事が……できなかった」

「…………お兄ちゃん？」

病室の中からは、相変わらずお兄ちゃんの声しか聞こえない。けど、そこから語られるのは、私の事……？でも、それがいつの話なのかはわからない。

「美空。君は今、誰かが傍にいてくれる喜びを知らない。いや、なくしてるんだと思う。けどな……美羽はあの時、やっとの思いで病室に駆け込んだ俺を見て、泣いてたんだ。悲しいからじゃない。嬉しかったんだと思う」

「……………」

「美空にも、その誰かがきつといる。その中の一人に、俺はなりたい。それが今の俺の思いだ。その気持ちを教えてくれたのは、花女に入学してからの時間でもあるし、あの時の美羽の涙でもある」

「……………」

「だから俺は誓ったんだ。もうこれ以上、美羽を一人きりで悲しませることがないように、俺が支えてやるんだって。だから……………」

「そのために俺は、少しでも美羽に近い場所にいられるように、支えられるように、花女に入学したんだから」

「……………?!?」

今、お兄ちゃんが何を言ったのか、理解できなかった。

私のために、花女に入学した……………?どう言う事なんだろう。そんな話、私はお兄ちゃんから一度も聞いてない……………!

「……………って、何だか俺の一人語りになってしまったな。とにかく俺は――」

言葉が遠い。頭が痛い。今まで見えていた、信じていたものが崩れていく。耳に入るお兄ちゃんの声が、まやかしだっと思いたい。

きつとそうだ。そうなんだ。私の知っているお兄ちゃんは、こんな嘘をつく人じゃない。そんなはずはないんだ。

けど……………。

「もう、わけわかんないよ……………っ!」

混乱した頭をどうにかしたくて、今は病室の前から逃げる事だけで精一杯だった。

俺は一体、何を語っているのだろう。

この手の話はご法度だったはずだ。美空の抱える過去を縛る鎖を、断ち切るだけの刃になりかねないのだから。

美空の過去を刺激し、あろう事か自分語り。美羽の事まで持ち出してきてしまった。美空の様子に変化は見られないが、何を話しているのかと疑問がられているかもしれない。単純にウザったらしく思われているか。

けど、どうしても知っておいて欲しかった。美空を思う人は、まだいるんだって事を。辛く苦しく、立ち上がる事も許されない傷だったとしても……その事実亲身を委ねて、このまま生きる事を俺は認めたくはない。

もう一度前を向くんだ、美空。それは俺だけじゃない。今日はここにいないが、ここらだつて……そう思ってるはずなんだ。

だから俺は諦めない。何もできなかった俺、無力だと思っていた俺にでも、何かできる事があるんだと教えてもらったから。

りみ、有咲、たえ、沙綾。そして……香澄に。

「……ん？」

と、電話がかかってきた。病院の中のため、マナーモードにはしてあるが。

相手はオーナー。今日はバイトはないはずだし、特に連絡されるような覚えはないんだけどな。シフト調整か、それとも連絡事項でもあるのか。美空の事……って言う可能性がないわけじゃないよな。

とにかく、まずは電話に出ないと。だが、さすがに病院の中だ。後でかけ直すように伝えるか。

「……はい、成川です。悪いのですが、今病院にいるので、後から——」

『悪い、成川。話はすぐに終わらせるから、そのまま聞いてくれ』

「そういう事でしたら……わかりました」

どうやらただ事ではないらしい。オーナーが切羽詰まっているのが、電話越しにもわかる。

『早速本題に入るよ。成川、大至急SPACEに来てくれないか。予定があるなら話は別だが、そう言うわけでもないだろう？』

「それは構いませんが……なぜですか？今日は確か、スタッフの人数多

かったですよ？俺がいても、かえって手持無沙汰になるだけでは……？」

『そのつもりだったんだが、予定が変わった。今日来るはずだったスタッフのほとんどがインフルエンザでダウンだ。人手が足りない』

「え……!?!」

インフルエンザ……おいおい、マジか。休みの俺に連絡寄こしてまで、人を集めるくらいだ。かなりピンチな状況ではあるな。

『さつき花園にも連絡したが、それでも人手は足りない。悪いけど、今すぐに来てほしい。頼むよ』

「わかりました、すぐに向かいます」

俺はそれだけ言って電話を切ると、すぐさま病室を飛び出した。

phrase 53 凍てつく笑顔

「悪い、美羽。さつきバイト先から電話があつて、すぐに行かないといけないんだ」

「あ、うん……。そうなんだ」

さつきの電話の事もあり、俺はすぐに美羽の元に戻っていた。インフルエンザでスタッフが総倒れになってるんだ。緊急事態みたいだし、美羽にも事情を話しておかないと。

「帰りは遅くなるかもしれない。悪いけど、晩飯は美羽に作ってもらうしかないか……」

「そ、それくらいなら平気だよ。うん……」

「けど、病み上がりで無理させるのもな……。あつ、今日だけ明日香の家にお世話になるか？」

「い、いいよ。私は大丈夫。大丈夫だから……」

美羽はそう言つて、どこか言い聞かせるように繰り返す。その言動に、俺は何か違和感を覚えていた。

さつきまでの美羽とどこか違う。何か様子がおかしい気がしていた。俺がロビーで美羽と別れるまでは、いつもみたいに明るく接していたはずだ。退院できることを喜び、はしゃいでいたはずなのに。

なのに今は、その興奮が嘘のように冷めている。話す口調もぎこちなく、別人のようにも感じていた。俺がいない間に、何かあったのか。……本当に大丈夫か？」

「えっ？」

「何か変だぞ？元気がないし、どこか具合悪いとかじゃないだろうな？」
「う、ううん。違うよ。退院できるのは嬉しいけど、それでも少しはここで過ごしたから……。何か寂しくなっちゃっただけだよ。だから大丈夫」

何だ、そういう事だったのか。短い間だったとはいえ、お世話になった場所だしな。ちよつとした思い入れを持ってしまうのも、無理ないか。

「ならいいんだが……。つと、時間がない。マジでヤバいみたいだから、

ちよつと行つてくる！」

「い……っ、行つてらっしやい。お兄ちゃん」

俺は美羽の言葉を待たずに、病院を飛び出す。ここからなら、急いで走ればすぐに着けるか。美羽には悪いが、今日はこつちを優先するしかない。

だから……。

「……………」

この時の翔は、気づいてやれなかった。

「……嘘だよ、お兄ちゃん」

そう呟く美羽の瞳からは、頬を伝う涙が一つ。

「何で、こんな嘘つかなきやいけないのかなあ……？」

「遅かったね、2人共」

「たえも来てたか」

「うん。さつき着いただけだよ」

オーナーに出迎えられ、俺はSPACEに到着した。既にたえの姿もあり、少し息が上がっているのがわかる。俺もかなり息切れしてるけど。

息を整えながら中を見ると、そこには目まぐるしく作業を進める少人数のスタッフが。中には今日は休みだった人もいる。俺たちのように呼び出されたって事か……それだけ人数が必要なんだ。

「それでオーナー、インフルエンザで人手が足りないってのは……」

「ああ、全員アウトだ。参ったよ」

「他にスタッフは？」

「よくて3名。後はダメだね。残りは今いるスタッフだけだ。こいつでどうにかするしかないね」

「大丈夫なんですか……？」

たえが不安になるのもわかる。いつもとは違い、個人に与えられる仕事量は多い。バイトを始めてまだ経験の浅いたえが、どこまで仕事をこなせるかは正直なところ分からない。

「大丈夫かどうかを心配してる暇はないよ。客は待ってるんだ。弱音を上げて止まってる時間はない」

「オーナー……」

が、そんな不安を軽く一蹴してみせるのが、このオーナーだ。厳しい面もあるが、こうしたカリスマ性も持ち合わせているのが、何とも憎めないところだ。

「今日はG l i t t e r * G r e e nとR o s e l i aのジョイントライブでしたよね？」

「そうだ、成川。客たちも、この日を楽しみにしてたんだ。どんな状況だろうと、やるしかない」

グリグリはともかく、ロゼリアか……。最近注目されている、本格派のガールズバンドだったよな。プロも顔負けで、その高い技術や演奏力は圧巻と称されている……。

特にボーカルの湊友希那の歌唱力は、素人目から聞いても文句のつけようがない。あつ、そう言えば前に偶然会った事もあったな。あの時はりみも一緒だったが……。って、話はそこじゃない。

とにかく、ロゼリアとグリグリのライブだ。ライブハウス側の一方的な都合で、バンドの立つ場所を奪うわけにはいかない。

「……で？そいつらは？」

「俺もそれをお聞きしたかったです……何でいるんだ、香澄」

たえの横で、さも当たり前のように並んでいる香澄。しかも香澄だけじゃなく、有咲やりみ、沙綾までいる。これはいったいどういう事かと、俺の方が問い正したいくらいだ。

「私も手伝います！そのためにここに来たんです！」

「……あんたが？」

「はい！」

香澄は何となく予想がつくが、ブレーキ役になりそうな有咲や沙綾までいるのは予想外だ。あ、でも……根負けして仕方なくついてきた可能性も捨てきれないか。

「私たちもそのつもりです。人手不足なんですよね？おたえから聞きました」

「私も、力になりたいです。何かできる事があれば、やらせてください！」

「わ、私はその……こいつらについてきただけだし、手伝うって……」
そこで言い淀むな。沙綾とりみは、何だかんだで手伝ってくれようとしてくれるだろ。そうさせるのも、スタッフ側からすれば本意ではあるけどな。

「やめときな。素人に手伝わせるわけにはいかない」

「でも、できる事はないですか？難しいのは無理かもしれないけど……」

「お姉ちゃんたちのライブ、手伝いたいです。掃除とか、私頑張りますからー！」

「何したらいいか分からないんで、言っていただけなら」
「……………」

オーナーは断固として拒否し続けるが、香澄たちも負けじとアピールを重ねる。だが、折れる気はオーナーにはないだろう。

強情と言うか、意地と言うのか。それでせっかくの好意を棒に振ってしまうのは、今行うべき事ではないはずだ。オーナーの気持ちもわかるが、プライドだけですべて解決できるのなら、最初から人手なんか必要ない。

だったら、俺からも加勢してやる。

「オーナー、私からもお願いします！みんな、足を引っ張る事はしませんからー！」

「花園……あんたまで……」

「俺からもです。こっちにも守り通すプライドはあるかもしれませんが、今は四の五の言っていられる事態ではないでしょう？客のため、とあなたがそう仰るのなら、意地を通すのではなくライブを無事に成功させる事にこそ、意味があるのではありませんか？」

口では断っていても、現状は猫の手も借りたいほどの忙しさなのは間違いない。そうじゃなかったら、俺たちに連絡なんかよこしては来ない。

オーナーは少し考えていたが、やがて重そうに口を開いて……。

「……今日だけ頼むよ」

「はいっ！頑張ります!!」

「はあ……。何で私まで……」

「口動かす暇があるなら、まず手を動かせ」

「やってるっつーの」

オーナーの指示により、俺たちは分かれて準備を始めることになった。沙綾、りみは受け付け等の確認を。有咲、かすみは楽屋の準備を。たえはスタッフのため、スタジオの機材の方を担当している。

で、俺は4人の指導役になった。友達の俺が仕事を教えた方が、変に気負う事もなくていいとオーナーが判断したからだろう。さつきまで沙綾たちの方を教えていたが、今は香澄たちの方を教えている。「っーか、翔って毎日こんな事やってんのかよ」

「当たり前だ。仕事なんだぞ」

「うえっ、マジかよ……。めんどくせえ……」

ニートか、お前は。働いて金貰うありがたさを知ったら、嫌でもそんな言葉出なくなるぞ。

「ほら、嫌なら無駄口叩くな。働け働け」

「つて、きつきから私にばつか偉そうに言ってるけどな……」

そう言う和有咲は、不服そうに楽屋の片隅を指さして……。

「あそこで呑気にサボってるあいつにも言えよ！私よりタチ悪いじゃねーか！」

そこには、熱心に何かに食い入っている香澄の姿が。名前を呼ばれた事で、香澄はビクついてぎこちなく振り返る。いたずらの見つかった子供みみたいな反応に、俺はため息をこぼす。

「……おい、香澄。お前から手伝うって言ってここに来たんだろうが。遊びじゃないんだぞ？」

「アハハ……。き、気を付けます……」

「てか、きつきから何見てたんだよ。ノートっぽいけど」

香澄が持っていたのは、どこにでもあるような大学ノート。だが、使い古したような形跡があり、中もびつしりと書かれている。しかもこのノートと同じようなものが、他にも机の上には何冊かおかれていた。

「SPACE NOTEって言っらしいんだ！ここでライブしたバンドが、いっぱいメッセージ残してるんだよ？」

「ふくん、そうなのか」

「あつ！気になるんだったら、有咲も一緒に——」

「こら、香澄。まずは仕事しろ」

「ご、ごめんなさい……」

すぐにサボろうとするの止めてくれよ。マジで人手が足りないって言ってるのに、あんまり余裕だつてないんだからな。

と、そこに沙綾とりみが合流。先に教えたからと言うのもあるが、もう仕事を終わらせてきてくれたのか。やっぱり、この二人に関しては何も心配しなくてよかったな。

「受付の方は終わったよ。特に問題なし」

「そうか。沙綾もりみも、想像通りの手際の良さだな」

「後で香澄ちゃんたちにも、受付のやり方とか私たちで教えておくね、翔君」

「いや、想像以上に助かるんだけど」

後で香澄たちにも教えようとしてたんだが、二度手間にならなくて済む。それに比べて、この二人ときたら……。

「おい、お前ら。少しは沙綾たちを見習え。手伝うって言った手前、ちゃんと集中してやってくれよ」

「はあ!? 私はやってんだよ! どつかの香澄って奴が、仕事丸投げしてるだけだ!」

「えく!? 有咲だって、さっき仕事したくないって言ってたじゃん! 私だけじゃないよー!」

「おま、私と一緒にすんじゃないかねー! 平気でサボってノート読んでただろ!」

「有咲も読みたそうにしてたじゃん! だから——」

「喧嘩すんな! どつちもどつちだからな!」

「なんで「だよ」!」

沙綾とりみを一緒にするんじゃないかなかったか……。いや、この二人と一緒にしたのがいけなかったか。

「くつそく! 香澄のせいで、私たちの方が遅いじゃんか!」

「ううく……さーや、りみりん! 手伝って!」

「助けを求めるんじゃない。もう少しだろうが」

隙あれば楽しようとしゃがって……。そう言うの、昔から変わってないんだよな。泣きつかれるのは、いつも俺だったけど。

「でもさ、翔。私たちも待つてるだけじゃつまらないし、香澄たちの事手伝ってもいいかな?」

「いや、それはダメだ。香澄たちのためにならない」

「アハハ。何だか翔、お父さんみたい」

「お父さんって、あのなあ……」

保護者じゃねえんだぞ、俺は。それに、まだ高校生なのに保護者と言われても嬉しくも何ともない。

「ちよ、だから私はやって」

「2人よりも4人でやった方が早いよ。まだこれで終わりじゃないと思うし、それじゃあダメかな?」

「りみ……」

本当、沙綾もりみも優しさの塊なのか。俺が真正面からぶった切ってるのに、それでも手を差し伸べようとしているなんて。

「……ま、いつか。時間もなし、手伝ってくれよ」

「やった〜！ありがと、さーやー！りみりん！」

「けど、このままじゃ沙綾たちに申し訳が立たないし……今度、2人にはやまぶきベーカリーのパン奢ってやるよ」

「本当!? 私、チョココロネがいいな！」

「えー!? なーくん、私はー!?」

「ない」

むしろ何であると思ったんだよ。

「奢るって、うちのパンじゃん」

「あ……そうか。だったら、沙綾には今度何か好きなもの買ってやるよ。休みの日とか、2人で予定合わせて買い物にでも行こうぜ?」

「ふ、ふた……っ、え、あ、うん」

何かしれつと約束してしまったが、まあいいだろう。それよりも今は、このライブの準備に専念する事を考えよう。

「……は、話の流れでそうなっちゃったけど、翔と2人だけで買い物なんて……／＼／＼」

「ん? 沙綾、何か言ったか?」

「い、いいいやいや、べ、別に何もなしよ!?!」

「そうか?」

「ほ、本当だよ。アハハ……」

そうしている間にも、沙綾たちの協力もあって楽屋の準備は終わった。後は受付の段取りを教えるだけだったんだが……その仕事もやらなくて済みそうだしな。

「終わったよ、翔君」

「お疲れ様。本当はすぐに終わってるはずだったんだけどな」

「まあ、香澄たちも頑張ってたんだし、少しくらいは大目にね?」

それはそうなんだけどな。最後の方は、香澄も有咲も軽口を叩く事なく真面目に取り組んでたし。

「そう言えば、さつき有咲がノートの話してたけど、それって何なの

「？」

「さーや、これの事だよな？」

お前はいつの間にも持ち出してきたんだよ。準備するのに元の場所に片づけたんじゃないのか。

「そいつは『SPACE NOTE』だ。ここでライブしたバンドが、メッセージや感想を残していくためのノートだな。早い話が、皆で作るSPACEの日記帳だ」

「へえ、面白いかも」

香澄からノートを受け取り、沙綾はパラパラとめくっていく。香澄も顔を近づけ、りみも気になったのか横から覗き込んでいた。

『ライブ最高でした』『オーナー愛してる』……だつて」

「昔から置いてあるのかな。ノートたくさんあるよ」

俺がバイトを始めた時から、このノートは置いてあったからな。今のノートは新しいが、中には年季の入ったノートもいくつか見られる。

「こっちのノートには写真も挟まってるな。オーナーと出演したバンドの記念写真か？」

有咲も仕事が終わった解放感からか、適当に1冊ノートを引っ張り出し、中を見て行く。そこには、メッセージの他にも何枚かの写真が。ライブの様子を写した物や、記念に撮った写真まである。バンドと一緒に写真に写るオーナーは、普段見せる厳しい顔ではなく、柔和な顔をしている。

「オーナー、笑ってるね」

「あのばあちゃんも笑うんだな……」

「みんなこの場所が好きなんだね。いいなあ、私たちもいつかこのノートに……あれ？」

と、香澄が写真の中から気になる1枚を見つける。それは、明らかにライブの様子や記念写真とは違った1枚。

「え……っ!？」

そこには、1人の少女が無邪気に笑いながら、ベースを演奏している様子が映されていた。年齢は俺たちよりも一回り幼い、恐らく小学

生。高学年と言ったところだろうか。自然をバックに、楽しそうな笑顔を見せていた。

「これって……?」

「女の子? ベース弾いてるね?」

「どうしてこの一枚だけ、バンドとは関係ないのにノートに入ってるんだろう……?」

「よくわかんね。もしかして、あのばあちゃんの娘とかだったり——」

「あんたたち、遊びじゃないんだよ!」

少女の写真に興味を抱く香澄たちの前に、オーナーが鬼気迫る表情で迫ってくる。勢いよく楽屋の扉を開け、どこか焦りを伴っているように。

「勝手に楽屋内の物を漁って……仕事はどうしたんだい!？」

「す、すみません! 指示された仕事は終わらせましたが、つい興味本位で……」

「成川も成川だ! 何をさせてるんだい!? 指導は任せると言ったはずだよ! なぜ注意しなかった!？」

「大変失礼しました! 配慮が行き届いておらず、申し訳ありません!」

「仕事かひと段落着いたら、成川はすぐに私のところに来い! それからあんたたち!」

「はっ、はい!」

「邪魔するのなら出て行きな! こっちは真剣なんだ。生半可な優しさだけの雑用なら、うちには必要ないよ!!」

有咲の持っていた少女の写真を強引に奪い、オーナーは楽屋から出て行った。受け答えをした沙綾も、動揺を隠せないほどだった。俺もあそこまで切羽詰まったオーナーは初めて見たけどな。

「お、オーナーこええ……」

「仕事に厳しい人……って事なのかな」
「……だろうな」

オーナーの気迫に恐怖する香澄たちだったが、俺は適当に相槌を打つだけに留める。傍目から見えるオーナーの姿に、俺は同調してやろうとは思わなかった。

あの人が見せたのは、怒りでも何でもない……恐怖だったからだ。

そしてその恐怖は、きつと香澄たちにはわからない。わからなくてもいい。わかってしまつてはいけない事だ。それを恐れて、オーナーはあの写真を持ち出したんだ。

でも、俺は知っている。今この場にいなかったら、絶対に知る事になかった恐怖を。とある悲劇から生まれた、瓦解した日常も。

そしてその日常は終わってなどいない。

今もなお、幾多の人々を巻き込んで蝕み……。

更なる崩壊を招こうとしている。

phrase 54 深まる熱情

「こっちはこれでOKと……。後は、これに向こうの部屋に運ぶだけかな」

香澄たちが準備に勤しんでいる間、たえはステージ裏の機材等の調整の仕事を受け持っていた。ライブの質に左右するため、さすがに香澄たちには専門的な事を任せるわけにはいかないからだ。

人数も少なく、かなりハードな仕事になってしまったが、たえは何とか終わらせることができたようだ。

「え〜つと、この部屋でよかったよね。……あれ？スケジュール表？」
機材関係の道具を運び込んだ部屋で、たえはたまたまある物を目にしてしまう。それは、SPACEの予定を管理しているスケジュール表。1ヶ月分のライブの予定等がぎっしりとメモされているはずのスケジュール表だが、何故か途中から空欄になっている。

「これって……」
ライブの予定がないのか？いや、だとしても全く予定がないと言うのも考えにくい。曲がりなりにも認知度があり、評判の高いライブハウスだ。それが示し合わせたように空白の時間が続くのは違和感がある。

さすがのたえでも、これには何か事情があると察していた。それが何なのかは、今のたえにはわかるはずはなかったが。

「あー、おたえここにいた！グリグリとロゼリアの人たち来たよ！」

「……あつ、香澄。うん、今行く」

香澄にて招きされ、たえは部屋を出る。ただ、空白の目立つスケジュール表だけは、頭から離れる事はなく……。

「うーん、ライブ凄かったね！」

「そうだな。俺も裏から見てたが、特にロゼリアの演奏は群を抜いてた。あれがバンドなんだなって……」

その後、俺たちはどうにかライブを成功させることができた。いつも以上にハードではあったが、それでも成功できたのは香澄たちのおかげだろう。素直に感謝してる。

「お姉ちゃんたちもかつこよかったけど、ロゼリアの人たちもすごかったな〜」

「ボーカルの湊さん……だっけ？あの人の歌、マジでプロ並みじゃね？」

「演奏のレベルも高かった。普段、どんな練習してるんだろ」

りに有咲、たえもロゼリアのライブには感じるものがあつたようだ。俺だって、あのバンドのライブは文句のつけようもないほど質が高かったと思ってる。

俺もみんなも、いい経験になったんじゃないかな。

「ね、あそこにいるのってロゼリアの人たちじゃない？」

沙綾が見つけた先、そこはエントランスの休憩スペースだった。その一角に、ロゼリアが集合している。

もうお客さんは帰っているため、ここにいるのは俺たちとロゼリアだけ。グリグリはまだ控室にでもいるのか、姿を見かけない。

「本当だ！ちよつと話しに行こうよ！あの——」

「待て、香澄。気持ちはわかるが、何か様子がおかしいぞ」「えっ？」

だが、近づこうとした香澄を、俺は肩を掴んで引き戻す。集まったロゼリアは、ライブを終えて和気藹々と談笑しているような雰囲気ではなかった。むしろ、逆。

メンバーの1人……名前までは憶えていないが、茶髪でベースを弾いていた子が、悔しそうに泣き崩れているのが見えていた。メンバーも彼女をなだめ、とても部外者が軽々しく割り込める状況じゃない。

「ごめん、みんな……。大事なところで、とちっちゃって……」

「お、落ち込まないでください……」

「そーだよ、リサ姉〜！あそこまですっごくいい感じだったんだし！」

ライブをしていれば、ミスはつきものだ。誰だって、完璧に演奏ができるわけじゃない。練習ではできても、本番では様々な要因によって左右されてしまう。体調、緊張感、場の空気。それが良くも悪くも、ライブなんだ。

だが、彼女たちの言葉を聞いてライブを思い返してみるのが、特にそれらしいミスはしていなかったように思える。いや、もしかしたら本当は気づいていないだけかもしれない。ミスをミスとして認識させないような、そもそもなかったかのように思わせる演奏技術に、脱帽するしかない。

それ以上に、そこまで些細なミスにもここまで悔しさを滲ませることができるのは、バンドに対する熱意が底知れないと言う裏返しでもある。見習うべき点だ。

「落ち込んだところで解決なんてしません。演奏でのミスは、地道な練習で改善するべきです」

「ええ。紗夜の言う通りよ。終わったことを悔やんでも、意味はないわ」

「でも、せっかくグリグリとのライブだったのに……」

「こんなところで落ち込んでるんじゃないよ」

そこに現れたのは、オーナーだった。まだ涙を流すロゼリアのメンバーの元に、ゆっくりと近寄っていく。

「……ライブってのは、完璧な演奏が100点なわけじゃない。客は、どうしてわざわざライブハウスに歌を聞きに来てくれると思う？」

「それは……」

「今この瞬間、目の前のあんたたちがどんなステージをやり切ってくれるか、それを楽しみにしてるんだ。その期待、理想ってのは……完璧な形だけを描いてるわけじゃない」

「オーナー……」

「やり切ったんだろう？」

その言葉で、泣いていた彼女は涙をふく。悔しさに満ちていた表情とは打って変わり、自分の成し遂げた演奏に誇りを持っているようにも見えた。

「……はい」

「だったら、胸張って帰りな。よくやった」

「はい！ありがとうございます！」

それだけ言うと、オーナーはフツと笑い、店の奥に消えていく。一瞬だけ俺と目が合い、軽くうなずいておいた。

ロゼリアのメンバーたちも、どこか晴れ晴れとした様子でSPACEを後にしていく。もう暗いムードはどこにもなく、むしろやる気に満ち溢れていた。

「……オーナーって、厳しいけど何だか先生みたい」

「そうだな。バンドに一生懸命で、本気だなって思うよ」

「バンドの事、大好きだよな。オーナーって」

沙綾の言うとおりであった。バンドに対して誠実で、だからこそさっきのような言葉を投げかけられるのだろう。日頃の態度も、バンドへの真摯な姿勢が厳格に見えてしまうだけで、本当は思っているような人じゃないんだよな。

「ここでライブしたいって香澄の気持ち、わかった気がする。私もここでライブしてみたいなって思うよ」

「私も、今度は勝手にじゃなくて、ちゃんと認められて立ちたい！」

オーナーの生き様を直に感じて、いい影響を受けたみたいだな。インフルエンザには困らされたが、全てが悪い方向に傾いたわけじゃなかったようだ。

香澄はもちろんだが、他のみんなもSPACEでライブがやりたいと言うやる気と目標を持った。ポピパが前進するうえで、大きな一歩になったんじゃないか。

「けど、SPACEに立つのは簡単じゃないぞ？前にも言ったが、オーディションは厳しいからな？」

「翔の言うとおりでだよ。みんなを怖気づかせるわけじゃないけど、オーディションを合格したバンドって、ここしばらく見てない気がする。それだけレベルは高いんだよ」

「う……」

確かにな。ここ最近、ライブに出るバンドがワンパターン化して

いる。グリグリもそうだが、常連のバンドが中心なんだよな。早い話が、マンネリ化だ。

もちろん、香澄のようにステージに立つことを夢見て、オーディションを受けに来るバンドも一定数はいる。演奏も申し分ないし、気持ちだつて中途半端なバンドはいなかった。

けど、届かない。どれだけ願つても、それだけで立てる場所じゃない。マンネリ化の理由がそこにあると言っても仕方ないのは仕方ないんだが……生半可なバンドを立たせるだけでは、ただの演奏会と何も変わらないからな。

「でっ、でも立ちたい！みんな一緒に、この場所でライブしたいんだよ！」

「だろうな。香澄ならそう言うと思つてた」

「エヘヘ、やっぱりわかる？」

「当たり前だろ。俺は香澄の幼馴染なんだからな」

それこそ、お前の行動パターンなんてわかりやすいんだからな。思考回路が単純と言うか、何と言うのか。

「ねえ翔。次のオーディション、いつだったっけ？」

「確か、来週にはあつた気がするな。もうすぐだな」

「じゃあ、みんなで受けようよ！オーディション!!」

思いついたら即行動かよ。ブレねえな、こいつは。

「はあ!?!まだ何の準備もしてねーだろ!?!」

「来週はちよつと早すぎない……?」

「今からでもやれば大丈夫だよー!」

根拠もないのに、そう言い切つてしまうのは何なのか。そんなやる気だけで通過できるほど、SPACEと言う舞台は甘くないと言うのに。

けど、何故だかできる気がしてしまう。この、真っ直ぐでブレーキもないような彼女ならば。

「また考えなしに言いやがって……」

「とか言つて、付き合つてあげるんじゃないの?」

「う、うるせーぞ沙綾!」

「これから毎日練習しなくちゃね。有咲もやる気みたいだし」

「おたえまで私をからかうんじゃないねー!」

いや、もう有咲はそう言うキャラだから仕方ない。諦めるんだな。

「放課後は蔵練だね、香澄ちゃん」

「俺もできる限りはサポートするぞ。顔出せるなら顔出すようにする」

「ありがとう、なーくん!よくし、みんなで頑張るぞー!」

「!」
「!」
「!」

どこまでできるのかはわからないが、俺も応援しよう。香澄が作ったバンドだ。香澄が、それにみんながやる気なら、SPACEでのライブに向けて、俺は惜しみなく力を注いでやる。

「って、有咲!おーってやろうよ!」

「えっ、いや……私、そう言うのは別に……」

「恥ずかしいの?」

「そうみたい。有咲、照れてるよ」

「う、うるせーよ、おたえ!てか、こつち見んな!ちよ、ついてくんなってえ!!」

「……先ほどは申し訳ありませんでした」

「いや、こちらこそすまなかった。あの子たちは悪くないのに、大声を出してしまった」

「それは、俺から伝えておきますよ、オーナー」

「悪いね、成川」

それから数分後。俺は香澄たちを一旦エントランスで待機させ、オーナーの部屋の中にいた。さつきすれ違った際に、目線で合図を送られたからな。準備の時の不注意による失態に対して、まだお咎め食らってなかったし。

けど、何故かたえまで一緒に行こうとして来たんだよな。あいつは関係ないから放っておいたんだが、何か納得いつていないようだったし。

で、オーナーに部屋に通され、先ほどの件について謝罪して……今に至るわけだ。オーナーからの注意もなく、むしろ自らの非を詫げるほど。

と言う事は、俺を部屋に呼んだ理由は準備中の件だけじゃない。ここまでハッキリとは口にしてはいないが、きっとオーナーには別の思惑があるんだろう。

例の、写真について。

「しかし……私も不甲斐ないね。自分の事しか見えていない」

「……俺も予想外でした。まさか、ノートにあの写真が挟まっていたなんて」

「ノートを整理していた時に、うつかり入ったんだろうね。楽屋の外から写真の話が聞こえた時には、私も冷静さを失っていたよ」

「それは、仕方がないですよ。オーナーにとって、あの少女は……何よりも大切な存在だったはずなんですから」

笑顔を見せる少女の姿は、オーナーには何物にも代えがたい宝物だった。自分の事のように大切に、少女との時間はかけがえのないものだった。今も写真を大切に持っていることから、その思いは伝わるだろう。

それだけ影響を受けた少女の写真だ。あの控室での叱責は、他人には簡単に見せたくないと思つての事だろう……と、普通ならそう思つてしまう。

でも、違つた。明確には、そこに潜んでいる感情の問題だった。決して少女への愛の深さゆえに引き起こされた行動では、何一つなかったからだ。

「私も大人だ。仕事に私情を持ち込むことはしない。けど、どうしてもあの写真を見ると……思い出してしまうんだよ」

「……数年前の、例の事件ですか」

「……ああ」

そう呟くオーナーの表情は、苦痛に歪んでいた。あの写真の少女の笑顔とはかけ離れた、重く深い事件を思い返して。

「今でも信じられない……なかつた事にしてやりたいと心から思っているよ。奴らの事も、まだ許したわけではないからね」

「ですが、あの事件は解決した話でしょう？憎む気持ちはわかりますが、そんな感情で動いてもあの子がよくなるわけじゃないですよ。むしろ、あなたが悪人になるかもしれない……。そうなったら、そこそこの子が戻ってくる居場所もなくなってしまおう」

「わかっている。気持ちの話と言うだけだ。だが……事件に関しては、あくまでも表向きの話だよ。何も解決しちやいない」

「オーナー……」

「奴らから受けた、あの子の傷はどうなった？変わり果てていくあの子を見て、耐え続けなくていけない私たちの傷はどうなった？事件が解決して、治ったとでも言うのかい？」

「……それは」

それはまさに恐怖だった。悪意の矛先が理不尽に向けられ、平穩だったはずの時間を歪め砕いて行く。歪みは新たな歪みを生み、希望がどこにもないかのような暗闇を見せる。

そしてその暗闇は、今もなお続いている。どこまで歩けば終わりが見えるのか。何故、こうも絶望しなければいけないのか。罪を背負い、生きていかなければならない枷を身につける必要はどこにもなかったはずだ。あの少女も、そしてオーナーだって。

一瞬だ。たった一瞬で、全てを壊された。超えてはならない一線の先に、その崩壊は存在した。

それは悪夢だ。夢として見るものだ。フィクションとして語られるものだ。現実に合わせてはいけなことが、容赦なく少女を襲い……。

「……すまないね。困らせる質問をした」

「いえ、大丈夫です。オーナーの言う事も、もつともですから」

ふと、オーナーの声で我に返る。思い返した事件の、苦い味を口の中に感じながら。

初めてこの話を聞いた時、俺はショックで吐きそうになったのを覚えてる。怒りで体が震え、そのやり場のなさに歯噛みした事も。

「いつになったら、また戻れるんだろうね……あの頃に。あの子と過ごせたはずの日々を、今からでも過ごしていききたい」

「……いつか戻れます、きつと」

「その言葉は嬉しいさ。それに、そう望んでいるからこそ、お前はここにいる。あの子を救ってほしいと、私が心から願うからこそ」

「ええ……わかっています」

戻りたい。それは、普段のオーナーの見せない、想像もできないほどに弱々しい言葉だった。でも、そう吐き捨てなければ整理がつけられない。湧き上がってきた恐怖を閉じ込め、蓋をすることができない。

そんな言葉に俺は……応えなくてはいけない。それは、2つの意味で。少女を心から願う事。そしてもう1つは……。

「絶対に救い出して見せます。あんなことが起こって、今も……これからも苦しみ抜いて生きていくだけの時間、過ごしていいはずがない。被害者なのに」

「……そうさ。でも、時間は動いていないよ。私も、あの子も」

「だったら動かします。あの子の時間を動かして、オーナー……あなただけの時間も取り戻します」

「フン……気障つたらしい事、言ってくれるじゃないか」

「あつ、い、いや……」

「真に受けなくていいよ……冗談を言えるくらいには、落ち着けたみたいだ」

苦笑を浮かべるくらいには、余裕はあるようだった。てか、この人冗談とか言うんだな。そんな人だとは思ってなかったぞ。

でも……この人の心の傷は、完全に癒えたわけじゃない。その根底にあるのは、数年前の事件。そして、あの写真の少女。

時間が止まってしまったのなら、もう一度動かしてやる。あの写真

の中で、カメラ越しに微笑んでいたように……もう一度。それを望んでいる金髪の少女も、君には確かにいるんだから。
「もう一度笑えるように。あの子が……美空が」

「けど、さっきのロゼリアのギターの人、どこかで見た事あるんだよね
〜?」

「そうだったけ?あれ、でも言われてみれば私も見たような……?」

「さーや、心当たりある?」

「うーん……何か見た事ある気はするのに……モヤモヤするなく?」

その日の帰り道。俺はオーナーとの話を終え、香澄たちと合流していた。美羽に電話を入れたのだが、今日は明日香の家で夜ご飯を食べさせてもらったから、あまり急がなくてもいいとの事らしい。

と言う事で、俺は香澄たちと一緒に帰る事にした。荷物も有咲の家に置きっぱなしみたいだし、もう時間も遅い。女の子だけで夜道を歩かせるわけにもいかないしな。

「はあ……。今日は練習以上に疲れたな……」

「おいおい、そんなので根を上げてたら、バイトなんかできないぞ?」
「くっ、翔に上から目線で言われるの腹立つ……!」

たえはともかく、りみはまだまだ元気そうだ。このメンバーの中で疲れてるの、有咲だけだからな?ちよっとは働く辛さを知れ。

「けど、翔君やおたえちゃんの仕事、疲れたけど楽しかったよ。またやってみたいな」

「だろ?疲れるけど、やりがいはあるからな。本当にいい仕事だよ」

「いやあくそれほども」

「何でおたえが照れてんだよ」

そもそも照れる場面だったかどうかも怪しいけどな。

「あ……ところで翔」

「ん?どうした、たえ」

「実はさつき、たまたまスケジュール表見たんだけど、今月の途中から空欄になってたんだ。それをさつき、オーナーに聞きに行こうとしてただけど……」

「ああ……そうだったのか。言ってくれたら俺が聞いておいたのに」
「……確かに。翔ってやっぱり天才だね」

たえってやっぱりド天然だよね。

「でも、やっぱり気になるな。書き忘れかもしれないけど、ちょっと変だなくって思ったから。翔はどう思う?」

「俺も……そう思うな。あのオーナーでも、歳には逆らえないって事だろ」

俺がそう答えたのを聞いて、たえは納得したように引き下がる。
と、そのやり取りを聞いていた沙綾が、

「フツ、自分の働いてるところのオーナーの事、そんな風に言うんだ?」

「い、いやこれは言葉のアヤって奴だろ!真に受けるなよ、沙綾!」

「へえ?本当にそうなのかな?」

「ちよ、止めるよ沙綾。それに、りみまで笑ってこっち見るな!」

「だ、だって……エへへっ」

何だか完全に悪者扱いだな……。まあ、仕方ない。俺が口下手だったって事でよしとするか。あ、でもオーナーにも、おばあ……年寄りだってイメージをつけてしまったな。よからぬ飛び火してしまったぞ。

けど……それでいい。

「……まだ、だからな」

「えっ?なーくん、何か言った?」

「いや……何でもないよ」

今はそういう事にしておいてくれ、オーナー。

あの話を口にするわけには……まだいかないでしょう？

phrase 55 後戻りはできない

ロゼリアとグリグリジョイントライブから1週間が過ぎた。

今日はSPACEのオーディション当日。目指したステージに立てるかどうかが認められ、ライブができるかが決まる日となる。ライブの手伝いの事もあり、香澄たちのやる気は衰える事を知らない。むしろ、今日に向けて念密な練習を重ねてきた。沙綾の加入で土台作りを行う事すら大変なのに、昨日の練習ではかなり完成された仕上がりを見せていた。やはり、元から仲が良かったことが響いているか。

ま、最終的に決めるのはオーナーだ。あの人の心に届くかどうかで、結果は左右するからな。

「何ボーっとしてるのかな、翔?」

「……うわあっ!?!」

沙綾がいきなり覗き込んできたことで、俺は驚いて後ろに倒れそうになる。そんな俺を見た沙綾は、面白おかしくクスクスと笑い出した。くそ、してやられた。

「いきなり脅かすなよ……」

「前にやられた分を返したただだよ。言ったよね?覚えてなよって」
「いつの話だつてくらい前の事だな……。にしても、今教室だからかなり恥ずかしい。みんなこっち見てるし。」

「……で、何の用だ?」

「今からお昼にしようって。みんな練習してたし、待つてくれたんだよね?」

「まあな。俺だけで食べるのも、沙綾たちに悪いし」

昼休みの時間を削ってまで、香澄たちは最後の仕上げにかかっていた。さすがにドラムとキーボードはないから、主にギターとベース組の練習だけだな。

「んじや、行くか。今度は俺が待たせてしまうからな」

「あ、でもおたえは先にお弁当開けてた気が……」

「おい、マジかよ。少しくらい辛抱してくれよ」

俺は弁当を持って、いつもの中庭へと向かう。時間も限られてるし、急ぎ足になりながら。

「それで、完成度はどうだ？」

「まだ不安なところはあるけど、今日まで練習してきたから大丈夫だと思う。やれるだけの事はやってみるよ」

「それは頼もしいな。あつ、けど緊張とかは？オーディションとか初経験だと思うし、してないのか？」

「あ……それは、大丈夫とは言い切れないかも。やっぱり初めてだし、みんなだつて緊張してるよ。有咲なんか、もうガツチガチなのが丸わかりだよ」

確かに目に浮かぶな……。

「でもね、香澄は何にも緊張してないって感じだったな。むしろ、私たちを元気づけようとしてくれるから」

あいつは、どんな状況でも自分を貫き通そうとする芯の強さを持っている。バンドを始めたのだからそうだ。ポピパを結成するまでには多くの障害があつた。けど、あいつは真つ向から乗り越え、進んできたんだ。

その度に、香澄は周りの人を変えてきた。それだけの力が、あいつにはある。どこまでも明るく、笑顔で。躓くことはあつても、そこで怖気づいたりなんかしない。後ろを向く事なんて想像もできないくらいの前向きさが、俺には眩しく見える。

「そうか……やっぱり、香澄は香澄だな」

「香澄つて、何だかんだで頼りになるよね。香澄がいなかったら、私はドラムを叩いてたかもわからないから」

沙綾だつて、その1人だ。香澄の眩しさに心打たれ、またバンドの世界に戻ってきたんだ。他の3人だつて、香澄がいたからここにいる。全ては、香澄の力なんだよな。

「つて、何だかんだつて言っちゃうんだな、沙綾。それだと、普段は香澄が頼りないみたいに聞こえるぞ？」

「アハハ……。ま、頼りにならないわけじゃない……からね？」

それはフオローでも何でもないんだよな……。

「あつ、なーくん来た！こっちだよー！」

「練習終わったみたいだな。お疲れさん」

場所は変わって中庭。沙綾と一緒に向かうと、既に楽器を片付けた香澄たちの姿が。手には代わりに弁当を持ち、お昼モードに切り替えているようだ。

「ごめんね、翔君。私たちだけで練習したいなんて言い出して……」

「いいよ、りみ。ポピパにはポピパの時間も必要だしな」

「モグモグ……うん、おいしい」

「つて、本当に先に食べてるのかよ。てか、会話になってねえ」

「私は止めたんだけどな……」

たえは切り替えが早すぎるのが問題なんだよな。ちよつとは待つてくれよ。

ま、それも過ぎた話だ。俺もいつまでも突っ立っているわけにもいかない。香澄たちの傍に座り、弁当を広げて食べ始める事にする。

「ほほほふえふあ、ひよお」

「食いながらしゃべるな、たえ。で、何だよ」

「……私、どうしても気になる事があるんだ」

「はあ？何だよいきなり。どうせしようもない事だろ？」

「ハッ……！翔だけに、しようもない……！」

「……お前が一番しようもないからな？」

てか、お前が話を脱線させるんじゃない。戻ろうにも戻れなくなるぞ。

「ま、それはそれとして……私、やっぱりあのスケジュール表の空欄がどうしても気になっちゃって」

「またその話か……。それはあのオーナーのミスって事で、話がついただろ？」

「それはそうだけど……あの人に限って、そんな事もないと思うし……。スケジュール管理だって、今までにミスしたところも見えてないから……」

「買いかぶりすぎだって。ミスしない人間なんかいないぞ？」

「おっ、翔カツコいい事言うじゃん」

「遠くから茶化するよ、沙綾」

たえはどうにも、スケジュール表の違和感を拭いきれていないみたいだな。沙綾のおかげで話は途切れたが、やはり納得はいつてなさそうだ。

今日のオーディションで、何か一悶着なかったらいいんだが……。

「で、どうだ？有意義な時間にはなったか？」

「うん！ミスもほとんどしなかったし、これならオーディションも行けそうな気がする！」

「へえ、それは心強いな。他のみんなはどうだ？」

「えっ、えっつと……」

「それは……」

香澄は自信満々に答えたが、有咲とりみはどうも歯切れが悪いな。特におかしなことを聞いたわけでもない。さっきの練習が、よかったのかどうかを聞いているだけだ。

言葉にできない、あるいはやりにくい理由がある。そして質問の内容と結び付けて考えるのなら……ああ、なるほど。そういう事か。

だとしたら……だ。これはある意味で、香澄よりも有咲たちの方が一枚上手なのかもしれない。

そしてその答えは、非情にもおたえの口から告げられた。

「ダメかもしれないね」

「ちよ、おたえ！そんな堂々と言う事じゃねえだろ!？」

「かもしれないけど……そうやって都合のいいようにごまかしたところで、私たちの実力が伸びるわけじゃないよ。逆にどんどん止まっていっちゃう」

「それは……おたえちゃんの言う通りかも」

どうやら、まだ本調子とはいってないみたいだな。俺だってここ最近の練習を見てないわけじゃないから、全く仕上がっていないダメダメな状態ではない事くらい知ってる。

たえが言っているのは、細かな点での調整。演奏の形になっていないからそこを修正する、と言った話ではなく、音の連携のズレ、リズムキープ、小さな演奏ミスの連続……そう言ったわずかに目立って演奏を邪魔する要因を、まだ排除しきれていないのが現状。

あのオーデイションで求められるのは当然、実力だ。ただ楽器がそれなりに弾けるだけのお飾りバンドでは、何も通用なんかはしない。洗練された努力の結晶が演奏に現れる……そんなバンドを求めている。

だからこそ必要なのは、そう言ったミスを少なくすることもある。バンドに限った話ではないが、より優れたものを見せるためには不要なものを取り除く努力も必要となるからな。

「はあ……これじゃ、隠しても仕方ねえな。そうだよ。まだちよつと、ミスしてしまうパートがある……」

「私も、少し焦ってテンポが速くなる時があつて……」

それが有咲とりみの違和感の正体。今日と言う日を迎えながらも、まだ完成されていない自分の演奏を前にその事実をごまかしたかつた……そんなところだろう。

確かにたえの言う事の方が事実。隠したところで事実が変わらない。だが……少しでも不安やプレッシャーにならないようにと、隠したい気持ちだつてわかる。

だが、それ以上に俺が懸念しているのは……。

「なるほどな。で、有咲」

「何？まさか、何でできてねえんだとか説教じゃねえだろうな？」

「俺は鬼かよ。……手、震えてる」

「……っ」

そう、緊張だ。沙綾も言っていたが、やはり初めての経験が迫っている事から来る緊張が体には表れていた。

緊張は練習では最も取り除くことが難しい要因だ。その場の空気、本番と言う圧力、それらがのしかかり、全身の力を奪い震えを生み出す。普段の感覚を削がれた体は、上手く言う事を聞いてくれない。

その結果、ミスが増える。震えた手では上手く弦を鳴らせない。震えた足では上手くドラムのリズムを取れない。

震えた喉では、要とも言える歌声が……上手く出せない。

「……悪いかよ。さつきから手とか足とかもう震えっぱなし。こんなにやべー緊張とか、生まれて初めてしたかもな……」

「珍しく素直だな。いつもなら、強引にでもごまかして強がって見せるのに」

「い、いいだろ別に!私だって、強がれるのならそうしてーけどさ……」

「けど?」

「……緊張して、それでも練習しても何か上手いかわなくてさ。そんな状態でオーディションするって考えたら、ちよつとこれ大丈夫なのかって思えてきて……」

有咲は有咲なりに、自分の中の緊張とどうにかケリをつけたかったんだな。ま、それも指摘されてボロが出たって事は、やっぱり根っこ部分は有咲なんだと思っただけだ。

けど……だとしたらだ。

「……なあ、香澄。やっぱり、まだ今日は早かったんじゃないか?みんなだつてまだ仕上がっていない。本番のプレッシャーだつてあるし、また次の機会を狙ってみたらどうだ?」

何もこれで全てが終わると言っているんじゃない。オーディションは定期的に開催されるし、一度落ちたからと言って再度受けることができないわけじゃない。何度だつて挑戦して、紆余曲折の果てに合格をもち取ったバンドもいる。

今の状態を見る限り、本番でもすぐにガタが来る。演奏の形にはなると思うが、納得のいく物になるかどうかは難しい。

機会を捨てる勇気も、時には必要なかもしれない。

けど……タイムリミットがない、とは言っていないからな。

「……うん。私は、今日のオーディション受けたい」

けど。それでも。香澄はそう言い切ってしまうやつだ。

「確かにダメかもしれないし、みんなだって緊張してるのはわかったよ。でも……それで目の前にあるチャンスから逃げるのは嫌だ！」

「香澄……」

「ダメかもしれないだけだよ！結果なんて、やってみないと分からないじゃない！それでダメなら仕方ないけど……何もしないでダメになるよりずーっといいよ!!」

栄光を掴めるかもしれない機会を失ってまで、栄光を掴めるかもしれない試練に臨むための努力は重ねたくはない。どっちにしたって行きつく先は同じだ。

だったら、香澄はその機会を見捨てない。目の前に輝きがあるなら、這いつくばってでもつかみ取りに行こうとする。

「やらなきゃ何も始まらない！このバンドだって、そんな積み重ねでできたキラキラなんだよ!!」

幼い時に見た星の鼓動に代わる何かを求めて……。そう、このバンドの原動力は、いつだってその思いから生まれているんだ。

やっぱり敵わないな……香澄には。

「……うん、いいね。香澄のそう言うところ、私は好きだな」

「ってか、元はと言えばお前がダメかもしれないねーって言い出したのがきつかけだろうが」

「あれ、そうだったけ？」

「アハハ……。でも、私も香澄と同じ気持ちかも。ここで逃げちゃったら、前の私と同じだよ」

「私も、今日のオーディションは受けたいな。失敗するのは怖いし、緊

張だつてしてるけど……でも、やるだけやってみたいな」

みんなの気持ちは固まった。他でもない香澄の言葉で。あれだけ緊張を恐れ、ミスに怯えていたはずだったのに。

「み、みんな……！」

「よかつたじゃんか、香澄」

「うん！よし、そうと決まれば、今からもう一回練習だー!!」

「ええっ!?か、香澄ちゃんまだお昼食べ終わってないよ〜!」

「お前、本当いきなりだな！私だつて、まだ食べ終わってねーからな！やるなら先にI人でやつてろよ!」

「そんなくっ！有咲、冷たいよ〜!」

「ちよ、待てー!くつつくな!暑苦しい!弁当食べさせろおおおお!!」

「Poppin' Partyです!よろしくお願いします!」

そして放課後。香澄たちは緊張した面持ちでSPACEにいた。ここに来るまでも口数は少なく、不安が胸の中を支配する。だが、気丈に振る舞う香澄の姿、そして昼間の香澄の言葉もあり、思ったよりは張りつめている様子は見られない。

「……始めな」

オーディションの会場は、香澄たちが立ちたいと願っているステージ。そこで演奏を行い、オーナーが審査を務めることになる。

一度ステージ袖に戻って楽器を準備しながら、香澄たちは気持ちを落ち着かせていく。ライブや文化祭の時とは違う。本当のステージで演奏する緊張感が、香澄たちを掴んで離さない。

「うう、やっぱり緊張する……」

「大乘だよ、りみりん!練習頑張ったんだもん!」

「そうだ、りみならやれるさ。香澄は……まあ、緊張もしてなさそうだ

し、何とかなるだろう」

「ちよつと、なーくん！私だつて緊張くらいしてるよ〜!？」

ツツコミ入れるのはそこじゃないんだよね……。

「それで、翔は審査に回るんだよね？」

「オーナーの補佐としてな。ま、そこは与えられた仕事をこなすだけだし、ひいき目はなしだからな？」

いくらライブハウスのオーナーだからと言って、全てを独断で決めてしまつては公正な判断ができない可能性がある。そこで、審査員として補佐役を1人立てる事で複数の視点からジャッジするようにしている。

その役には、俺が前々から当たっている。過去に何度もオーディションの場には同席したし、経験はある。香澄たちには合格してほしいが、私情は禁物だ。あくまでも客観的に演奏を見せてもらう。

「変なところでミスらねーようにしないと……」

「有咲、リラックス」

「は、話しかけんなよ、おたえ。集中してんだから」

と、これ以上はむしろ邪魔か。俺はステージ袖から離れ、ステージの向かい側に椅子を置き座るオーナーの横に立つ。俺も自分の仕事に専念しなくては。

「……成川」

「何でしょう、オーナー」

「彼女たちの事、どう見ている？」

「忬度抜きでお話しますが、いいと思います。特にあのギター……戸山香澄は、人を惹きつける力がある。誰かに寄り添い、心を揺り動かす力を持っています」

「心を……か」

「もしかしたら、彼女が……いえ、その話はまたの機会に改めて」

今はオーディションだ。それに、合否も例の話も、俺が全てを決めるわけではない。

オーナーの目にはどう映るのか。香澄たちのバンド……ポップン

パーティーが。

「それじゃあみんな、練習思い出していこうよ。準備はいい？」

「うん………」

ステージが上がってきた。それぞれが持ち場に付き、真剣な顔つきでその時を待つ。

「行くよ、みんな。ワン、ツー、スリー、フォー……」

始まった。静かな入りだしから、徐々にテンポを上げて音が重なり合うポピパの新曲。このオーディションのために完成させた『前へススメ!』だ。

「……………」

けど、やはり緊張しているな。少し音に余裕がなくなっている。練習では弾けていたはずのところも、ミスが目立つようになっていく。それでも演奏全体から眺めて見ると、ばらつきはあまり感じない。何とかまとまり、歌としての形にはなっている。

とは言え、形になっただけだ。俺はまだいいが、このオーナーの事だ。どう判定を下すのかはまだわからない。

俺は成功を祈りながら、演奏が終わるのを見守る事しかできなかった。いや、俺にはそれしかできなかった。今ステージの上で頑張っているのは、香澄たちだから。

「……ゆめ見てくいる〜♪」

ピタリと音が止み、ポピパの演奏は終わった。オーナーが無言で天秤にかける中、ステージ上に立つみんなは……。

(注意してたのにミスった……)

(指、上手く動かなかった……)

(練習ではちゃんと弾けたのにな……)

(音ずれてた。足りてなかったかな、練習……)

有咲、りみ、たえ、沙綾。4人の表情が、全てを物語っていた。今の演奏では、合格するのは難しい。言葉に出さなくても、俺にはわか

る。

彼女たちはきつと痛感してるはずだ。まだまだ演奏技術が足りていなかったことを。もつと練習を重ねて、ミスを減らして、本番でも緊張に負けないメンタルを身につける事も。

努力はした。それは俺も知っている。この場にいるポピパの全員は、俺以上に知っている。毎日のように蔵に集まり、音を合わせて、ミスがあれば修正して……。

でも、ダメだった。

その全てが足りなかったから。思いだけで、実力が追いついていなかったから。その結果が、今の演奏に全て現れている。

それでも、何もしないよりはマシだった。足りていなかったことを、結果で知ることができた。今日の機会を失えば、絶対に得られなかったもの。

そう考えると俺は……何を安易に、今日は見逃せと言ってしまったんだろうか。

「……やり切ったと思う者は？」

「「……………」」

答えられない。誰も、オーナーの質問に対して何も言えない。その答えは、既に自分の中で出ているから。

ミスしてばかり。合わせるのに必死。プレッシャーに負けた。言い訳ならいくらでもできる。だが、そのことを許容して『やり切った』と胸を張って言える人は、ここにはいなかった。当然、俺も。

俺は俯き、そして悟る。オーナーの下す結末を……。

「はいっ!!」

なのに、あいつは。

「か、香澄……」

沙綾が止めようとするが、香澄はキラキラと輝く瞳を俺たちに向け、手をまつすぐに上げながら自信満々に言い切つて見せる。子叔母にいる誰もが、自らの無力さを嘆き、不合格であることを察していると言うのに。

ミスは下。けど、それがどうかしたのか。今できるだけの事は、精一杯やったはずだ。だから、暗くなる方がおかしいんだ。

崩れる事のない自信を見せる香澄からは、そんなメッセージが感じ取れた。自分の演奏に、誇りを持っていた。

だが、現実是非情だった。

「……ダメだ。内のステージに立たせるわけにはいかないね」

オーナーの宣告。わかつてはいたが、いざ口にされると、悔しさがこみあげてくる。いや、俺よりもあいつらの方が受けた痛みは何倍も大きいはずだ。

「成川はどう思う?」

そこで俺に振るのかと言ってやりたくなつたが、仕方ない。酷だが、思った事を伝えるしかない。

「……俺も彼女たちとは付き合いますし、正直受かつてほしい気持ちはあります。ですが、今日の演奏を聞く限り、不合格は妥当だと思えます。まだ彼女たちには多くの面で足りないものがあり、それを自分のものにできて初めてステージに立てると……そんな気がします」

追い打ちをかけるように、しかも俺の口から聞かされるんだ。痛みは大きいと思うが、今だけは耐えてほしい。

有咲も、りみも、たえも、沙綾も……。

「また受けます! いっぱい練習して、何回でも挑戦します!!」

それでも、香澄は表情一つ変える事はなかった。オーナーの言葉を、そして俺の言葉を受け止めてみせた。

「何回でも……ね」

「はいっ！私、ここのステージでライブしたいです！私たちのバンドが始まったきっかけは、ここなんです！」

「香澄……っ」

どこまでも純粹で、まっすぐで。いくら周りが落ち込んでいようと、諦めていたとしても……お前は変わらない。その眩しさに、俺もみんなも勇気づけられてここまで来たんだ。

そんなお前だから、俺は……応援したくなるんだよ。目標に向かって全力で走り続けるお前を。

「……………」

だから、どこかで期待してしまう。

「その性格だけは買ってやるよ。けど……悪いね。オーディションは不合格だ。次も頑張りな」

「はい！頑張ります!!」

結果が覆る事はない。だが、オーナーの心に少しでも響くものはあった。何も爪痕を残せなかったわけではなかった。

学び取る事もあったし、次の成長には繋がられる。ただの失敗で終わらせず、次の目標にも繋げることができた。

けど……俺は知っている。一番の問題はそこにはない事を。

「…………あの、オーナー」

「どうした、花園。結果に不満があると言うのなら、聞くだけ聞いてやろうじゃないか」

「いえ、不合格なのは仕方ありません。私が聞きたいのは、その……先日スケジュール表を見たんですけど、後半が真っ白で……」

「…………ほうっ」

やはり、何かあるとは踏んでいた。聞いただすなら、第三者がいた方が効果的だからな。だからと言って、オーディションが終わった夕イミングで聞くとは思ってなかったが。

「翔にも聞いたんですけど、ただのミスだろうって……。でも、私にはそうは思えない。オーナーはバンドのために全力を注ぐ人です。そんな人が、明らかなスケジュールミスをするとは思えないんです」

「……それで？」

「私に何か、隠していることがあるんじゃないですか？」

オーナーに臆することなく、たえは毅然として問い詰める。そこに何かあるのかを知るために、真正面からオーナーを見据えて。

香澄たちもいる。最早、言い逃れは無理……か。

「……オーナー」

「わかっている、成川。どうせ、すぐに明るみになる事だ。いつまでも隠し通す事でもないさ」

「そうですか……」

「やっぱり、翔も何か知ってて……」

「たえ、その話は後だ」

これ以上は黙っていても仕方ない。その選択は不信感を募らせる事にしかなりえない。ならばと……オーナーが自ら口を開く決断をした。

いや、どつちにしても話すつもりではいた。この前、前もって俺にだけは話してくれたのだが……気持ちの整理がつくまでは秘密にしてくれと言われていた。皮肉にも、半ば強引に背中を押されて整理をつけたことになるが。

だったら、俺はその言葉を聞き入れるしかない。オーナーは重い口を開き、真実を語りだした。

「……花園には、まだ言ってなかったね」

「……はい」

憧れを持つ事は、立派な事だ。目標に向かって努力し、それを叶えようとする姿は何よりも輝いて見える。

香澄たちもそうだ。SPACEに立つ。そしてポピパとしてライブをする。香澄にとっては原点の場所で、バンドを通じて出会った仲間たちと一緒に音を合わせる。そのために頑張る姿を、誰が否定できるのか。

だが、そんな香澄たちに告げられた真実は……。

「SPACEを……閉めるよ」

「……え」

あまりにも重く……。

「ど、どうして、ですか……!?!」

「……私には、やらなくてはいけないことがある。まだSPACEでやり切ったと、心から言えるわけではないが……仕方がない。これは、その全てを投げ打つてもやり遂げなくてはいけない事だ」

「そ、そんな！納得できません！やり切っていないのなら、無理に閉める事なんてないじゃないですか！」

「おたえの言う通りです、オーナー！SPACEを閉めちゃうなんて……私も嫌です！」

あまりにも切なく……。

「……その声を聞くことは、覚悟している事だ。もう決めた。後戻りは……しない」

「何ですか!?!オーナー、ずっとこの場所を大切に思って来たんですよね!?!前にあのノートを見た時、オーナーがどれだけこのライブハウスの事やバンドの事を考えてるのか知って……っ!」

「……」

「オーナーは、この場所が嫌いになったんですか!?!SPACEを止めてまでやらなきゃいけない事なんですか!?!そんなの——」

「何を……分かったような口聞いてんだい!?!」

あまりにも痛ましく……。

「これは……っ、SPACEと、いやそれ以上に大切な事なんだ！たとえこの場所を捨てることになっても、あの子だけは放っておけない！私には、あの子が全てなんだ!!」

「あ、あの子……!? オーナーは、一体何を……!?」

「……っ、話は以上だ！次のバンドも待つてるんだよ！さっさと帰りな!!」

「……はい」

あまりにも、酷な話だった。

誰かに電話するのが、こんなにも苦痛だと思ったのは初めてだった。

連絡先にたどり着くまでが怖い。手が震えて、発信ボタンが押せない。夜の暗闇の中、スマホの明かりが不気味に輝く。

「………」

もし、このボタンを押してしまえば、何かが変わってしまう気がする。これまでの関係が、消えてなくなってしまうような恐怖を感じて。

だから、押せない。胸の鼓動が早い。どうすれば、この焦りを止められる？

「……でも」

聞かなくちや。自分の耳で、真実を知らなくちや。その片鱗を知った今、いつもの関係はまやかしに変わってしまったから。

発信ボタンを押す。もう、吐きそうだった。どうして。それだけが頭を支配し、離れてくれない。

出なかつたらいい。本気でそう思った。こんなことを言うなんて、本当は嫌なのに。誰が好んで、愛する人を疑うことができるのか。

でも……出てしまった。もう戻れない。例え自分の手で、この関係を完全に断ち切る事になったとしても。

「……………」

私は、確かめないといけない。

『あ……もしもし、みーちゃん？こんな時間に電話してくるなんて珍しいね？どうしたの？』

「……実は、香澄さんに少し頼みたい事があるんです」

phrase 56 求めた答えを解き、そして……

「……今日も、合格者は現れなかったね」

「そうですね、オーナー」

香澄たちの初オーディションから数時間後。SPACEの営業時間も終わり、俺はオーナーに呼び出されて今回のオーディションの参加バンドについてデータをまとめているところだった。

不合格になったとはいえ、ガールズバンド界の大切な一員。まだひび割れてない卵なんだ。そこから得られるものだって十分にあるし、データとして残すことでオーディションでは気づけなかったバンドの特徴や魅力を発見できる。

だからこそ、この作業だけは疎かにはできない。オーナーだってそのつもりで、補佐役も呼んで整理する事が多い。ま、こう言うのってどんな事にでも当てはまるだろうけどさ。

「これでは、どう転んだところでSPACEは閉めないといけないよ。うだ。後釜を担う者もいなければ、停滞したこの現状をどうにかできる術だって持ち合わせてはいない。成川もそう思うだろう？」

「それは、そうかもしれないませんが……本当によろしいので？」

「仕方がないよ。それに、この場所がなくなるからと言って、決してガールズバンドそのものがなくなるわけじゃないさ。しがないライブハウスの歴史が、ここで終わるだけ。いつかは来る、最果ての話だ」「わかっています。終わる事は、何に置き換えても避けられないことは。でも……俺は、やっぱり辛いですよ」

終わる未来を受け入れられない。それは誰もが願う事だ。応援しているアイドルに引退してほしくない。大好きなゲームのサービスが終了してほしくない。この時間がずっと続けばいいのにと、そう願わずにはいられない。

飾られた時間から生まれる輝きは、とても眩しくて。眩しいけど暖かくて。それでいて……幸せになれる。

今の俺だってそうだ。数奇な運命から始まった女子校での学生生活だって、今ではとても楽しいと感じるようになった。多くの出会い

があつた。多くの経験があつた。まだ、半年も経ってないのに。

そんな彩られた学生生活だつて、後2年も経てば終わりを迎えてしまう。始まりがあれば、終わりは来ると言うけれど。仕方がないと、割り切れと、そう簡単に言う人はいるけれど。

だからこそ、SPACEを閉める結末を、どうにか聞き入れるしかないんだつて事も……もちろんわかつてはいるけれど。

「今日のたえの話じゃないですが、この場所がなくなる事でショックを受ける人も少なからずいるんです。何も終わらせることはないんじゃないですか？」

「……わかつているさ。けど、あの子たちにも言つただろう。批判は覚悟していると。私の勝手な都合でしかないのは承知の上だが、それでも終わらせるしかないんだよ。わがままを聞いてもらう時間は……もう終わりだ」

「……だから、この場所を捨てると？」

「最善の道を選び取っただけさ。そうでもしないと、私はあの子の力になつてやることができない。私以上に辛いのは、あの子だからね……」

「そうですか。けど……俺には、そんな言葉を口にするしかないオーナーが、一番辛いように感じてますけどね」

「……そう聞こえてしまうなら、私がSPACEに抱く気持ちもまだ完全には捨てきれないわけだ」

二兎を追う者は一兎をも得ず。オーナーの言いたい事も、その理屈だつてわかつてる。今、最優先にしたい事を選ぶためには、それ以外から手を引くしかないのだと言う事も。

だが……それは本当に望んだ結果だったのか。SPACEが歴史あるライブハウスになつたのは、それだけ創始者であるオーナーが強い思いを持っていたからじゃないのか。

そうさせてしまったのは、多分……。

「俺が……力のある人間なら、望んでもない答えを出す事なんてな

かったはずなのに」

「それは違うな、成川。さつきも話しただろう。SPACEの経営不振の問題だってあるんだ。何にせよ、結果は変わらなかったよ」

「……だとしたら、俺は何のためにここにいるのかが分からなくなりそうですよ」

「成川が……か」

「そうですよ、オーナー。俺の理不尽な要求を聞き入れ、花女に入学させてくれたのは……あなたの半身となる事。オーナーの願いを聞き入れるためだったはずですよ」

「……その通りだね」

異例中の異例が認められ、俺が女子校の一員として存在し続けられている鍵は、あの子だった。俺の条件と引き換えに、課せられた使命が俺にはある。

あの病室で眠る、少女の力になる使命が。

「少しでもそばで、美羽を支えられるように……守れるように。これ以上悲しませないように選んだ道の架け橋となったのは、あなたが守りたいと願ったあの子です。俺があの子の力になる事は、今の俺の証明でもある」

「……そうだ。私もそれを望み、あの学校に話を持ち掛け、今に至っているんだ。あの子が元に戻ればと、赤の他人であるはずの成川にまで協力させたのだから」

「だったら……もう一度考え直すと言う道は残ってないんですか!?!俺が結果を出さないから、愛想を尽かしてしまったとも言ってますか!?!」

「それは違う、成川。むしろ感謝しているんだ。私の代わりにあの子の力となってくれた。以前だって、救い出して見せると言ってくれた事……嬉しかった」

「なら……!」

「けど、私もあの子を守りたいと願う一人の人間なんだ。成川が妹の

事を近くで見守りたいと願うように……私もまた、あの子のすぐ近くで力になりたい。そのために、SPACEでの責務を蔑ろにしてしまふ真似だけはしたくないんだよ。大切だからこそ」

そう言われると、俺も納得せざるを得ない。美羽のためにと全てを投げ打って、普通とは違う異端の世界へ踏み込んだ俺と、少女のためにと全てを投げ打って、非難や失意を真つ向から受け止め少女に尽くそうとするオーナーと、何が違うと言うのか。

何も変わらない。愛する人の傍で、親身になって寄り添っていききたい気持ちは。むしろ、今まではオーナーもSPACEでの職務もあり、時間が満足に取れないもどかしさに耐え抜いてきたくらいだ。

それでも簡単にSPACEを手放せなかったのは、少女と同じように大切だったから。日ごとに移り変わり、成長していくSPACEを見守っていたかったから。数多くのガールズバンドの架け橋となる時間を創りたかったから。

そのために、どちらかを斬り捨ててはいけない葛藤がオーナーにはあった。真剣に向き合いたい気持ちは両方にあるから、どちらも手にして少しでも半端な態度で向き合いたくなかった……多分、そういう事だと思う。

だから、今優先すべき方を選んだ。それが……今も病室で眠る少女だった話。

「……確かに、言い分はわかりました。やはりオーナーは、何よりもあの子の事を気にかけている事も……いや、そんなの当たり前ですよね。すみません」

「謝る事はないさ。傍目から見れば、私は未来ある若者の活躍の芽を摘み取っている老人でしかない。悪い部分しか目立たなくなるのも無理はないさ」

「ですが、そう思う気持ちがあるのなら……やはり俺は、無理にSPACEを閉める事はないと思います。まだ全てを終わらせるには早い」
「早いも何も……遅すぎたくらいだ。バンドへの熱を捨てきれず、S

P A C E に執着してしまったのは私の甘さ。なら私は、あの子を取る。ライブハウスを手放すくらい……」

「ここはもう、ただのライブハウスじゃない。今までここに足を踏み入れてきた人たちの……大切な『場所』になってるんです。それでもSPACEを捨てる事が正しいのだと、あの子のために尽くす道が、それしかないと思うのなら……」

俺はオーナーを真正面から見つめ、そして瞳に問いかける。

「やり切ったと、心からそう言えますか？」

「……その答えは、さつき出したはずさ」

「ここに理想の花園ランドを建設するの。こっちはオツちゃんの部屋。ドロちゃんは隣の部屋で……」

「わわ、おたえちゃん戻ってきて〜！」

「……何やってんだよ、たえは」

「知らねえ」

オーデイションを終えた次の日。いつものように蔵に集まった俺たちは、昨日の失敗を糧に練習を始めようとしていた。

俺も今日はバイトもなく、美羽も寄り道して帰ってくるらしい。ショップिंगモールに行くと言っていたが……そんなわけ家で家に帰ってもやる事がない。ならちようどいいかと思いい立ち、練習に付き合う事にした。

のだが……いざ蔵に来てみたら、この有様だ。ただでさえ普段からたえは手に負えないのに、余計手が付けられなくなってる。いや、悪い意味じゃないんだけどな？

「っーか、こっちが聞きてえくらいなんだけど」

「何その謎現象。沙綾は知らないのか？」

「はつきりとは分からないけど……原因はやっぱり、SPACE閉店

かな？」

オーデイションの不合格。そこに投げつけられた、オーナーからのあまりにも衝撃を伴う発言。

S P A C Eを閉める。オーナーが直前まで隠し通そうとしていた事実は、大きなショックを与えていた。特にたえは、精神を病んでしまっただけに。

たえはオーナーを尊敬していたし、そんなオーナーが作ったS P A C Eと言う場所が好きだった。ショックも人一倍大きいのだろう。

「重症だな。これじゃ、練習どころじゃないんじゃないかね？」

「香澄ちゃんも来ないね。翔君、何か聞いてる？」

「いや……昨日も一緒には帰れなかったし、連絡も来てないから何も知らないんだよな。今日も学校があつたら、何かしら話せたんだろうけど」

今日は休日。学校は休みだ。家は隣だからすぐに会いには行けるが、あまり強引に近づくのも悪いかと思っていた。

香澄だつて、目標として掲げていた場所だ。始まりの音をくれた、大切な場所だったんだ。それが無くなると知って、何も動揺してはいはずがない。心を痛めていないはずがない。

S P A C Eでライブがしたい。だが、そのS P A C Eはなくなってしまう。自分ではどうしようもない壁が生まれ、行動では何も覆せない事実直面した時……香澄の中に燃え上がるやる気の炎は、勢いを弱めてしまったのかもしれない。

それに、香澄は普段は何も気にしないように見えて、実は繊細だからな……。割と周りの事は見ているし、あの性格だから素直に受け止めてしまうのもある。

香澄の不在。たえだつて戦意喪失。この状況で、俺には何ができる……？

「……………」

オーナー……確かにあなたの気持ちもわかる。

けど、これだけの傷跡を残してまで完遂する事が、本当に正しい事なんですか？これで、本当にいいんですか……？

「おはよ〜っ！遅れてごめんね!!」

「「「……………!?!」」」

勢いよく地下室の扉が開き、ギターを背負った香澄が入ってくる。落ち込んだ様子はどこにもなく、いつもと変わらない香澄だった。

「お、おはよう……………」

「意外と元気だな……………」

「あれ？みんな暗いけど、どうしたの？さーやも有咲も、何か変だよ？」

ギターを床に置き、どこかぎこちなくなってしまう俺たちを気にかける香澄。目の前で手を振って、心配そうに見つめてくる。

「あ、あの……………香澄ちゃんは大丈夫なの？」

「何が？」

「SPACE閉店の事だ。目標にしてきたのに、夢を叶える前に無くなってしまいかもしれないんだぞ？」

変に心配なんかしやがって。そうしないといけないのは、俺の方なんだぞ。一番辛いのは、この中でお前のはずなのに。そう明るくされると、むしろ見てられない。

だが香澄は、キョトンとした顔を俺に向けている。少し考え、ようやく思い当たったのかと思った矢先……………。

「……………プツ、アハハハ！なーくん、心配しすぎだよ！確かにSPACEなくなっちゃうのは嫌だけど、仕方ないよ！落ち込んでる暇なんてないよ、みんな!!」

いきなり吹き出しやがって……………。けど、香澄の言う通りだ。残された時間は少ないし、不幸を嘆いて立ち止まっている場合じゃない。

ただのやせ我慢で、無理に気丈に振る舞ってるわけじゃない……………と
思うんだがな。

「それに、今日は本番のライブできる衣装を考えてきたんだよ！どう!?」

「これは……………スケッチブック？」

「もしかして、それで遅くなったのか？」

「そうだよ、有咲！みんなの衣装考えてたら、つい時間かかっちゃって
く」

「可愛い衣装を着た、1人の女の子の絵だ。こいつを香澄が考えたのか。なかなかいいデザインだし、俺もちよつと見てみたい気がする。」

「この絵、香澄ちゃんが描いたの？」

「うん！可愛いでしょ？」

「いいね！私もありだと思っうな」

自分の世界に閉じこもって現実逃避していたたえも、身を乗り出してスケッチブックを眺めている。有咲もチラチラと遠くから見ているし、ウケは良さそうだ。

強いな……香澄は。さつきまで打ち砕かれていた空気を、一瞬で変えて見せたんだからな。お前だって、辛いはずなのに。

それなのに俺は……何もできなかったな。

「ま、まあ悪くねーとは思っけど……もうすぐなくなるんだぞ？ライブができるかどうかも——」

「まだなくなるらない!!」

ダンと机に手をつけて、香澄は有咲の言葉を遮るように大声を上げる。いきなりの事だったからか、有咲もだが沙綾やりみも驚きを見せる。

「オーディション、必ず合格する！私、頑張るから！みんなとあの場所でライブしたいから!!」

衣装まで考えて、くじける事なく前を向こうとしているんだ。それだけ必死だったから、懸念を生みたくはなかったんだろう。できない『かも』なんて言葉で、夢を終わらせないために。

その姿勢に、他の4人が何も思わないわけもなく……。

「……うん。やれる事、まだまだあるよね。落ち込むのは、全部やつてからでも遅くないよ」

「そうだね。みんなとおそろいの衣装、着てみたいな」

「花園ランドは、ライブが終わってからにする」

「いや、作らせねーし！」

そもそも何だよ、花園ランドって。

「……………」

活力は戻った。勇気は奮い立たせた。何とか、立ち上がった。

けどさ、香澄。

「……………」

お前は、どうなんだ？

実際、お前は強い。仲間を鼓舞して、背中を押して。そうできる事は、お前の強みだ。持ち味なんだ。

なら、お前の背中を押してくれるのは？

今、お前は誰かの背中を押してやれた。そんなお前がくじけそうになつて、心が折れないようにと繋ぎ止めるための力は、誰から貰ったんだ？

そう思うと、やはり俺には…………あいつが強がつてるようにしか見えない。分け与える強さではなく、自分の中の不安と戦う強さはまだ足りていない。

さつきもそうだ。ライブができないかもしれないかもと言う有咲の言葉を聞かないように、必死に耳を塞ごうとするように。香澄の行動は、激しさとは対照的に弱々しさを感じ取れるものだった。

それでお前は…………本当に大丈夫なのか？

「で、次はオーデイションいつ行くつもりなの？」

「今日！」

「「「えっ…………？」」」

「…………香澄」

大丈夫とは…………言えないかもな。

「まずは昨日の件、いきなり大声を出して悪かった。謝らせてほしい」それから数十分後。香澄のあまりにも強引な提案により、オーディションを受けるためにSPACEを訪れていたポピパー一行。俺も蔵で待っているだけじゃ退屈だし、ついでにその様子を見に行くことに。

香澄は意気揚々とオーディションに臨んでいたが、他の4人はあまり表情も優れない中での演奏を見せていた。昨日の今日で、満足な結果を残せるとは到底思えていないだろう。それは俺だって思う。

課題を見つけ、それを改善してからじゃないと演奏も上手くはない。それに、自信にも繋がらない。自然と消極的になってしまい、それがミスを誘発する事にもなりかねない。

それは聞き手にも同じ。自信のない演奏からは、何も感じ取ることができない。さすがに早すぎたのではないかと、俺は思っていた。

そうして迎えたオーディションだったが……香澄たちの演奏が終わった後、オーナーが謝罪の言葉を口にする。椅子に座りながらだったが、頭を下げて。

声を荒げてしまったのは事実だし、このままにしておくのも悪いと思っただろう。そこは大人の対応だ。事情を知っている俺からすれば、仕方がなかったのかもしれないが。

「い、いえー私たちは何も気にしてませんからー！」

「そう言ってくれると助かるよ。で、オーディションの結果だが……」
とは言え、それはそれだ。オーナーはすぐさま気持ちを切り替え、オーディションの結果の方に話を映す。

だが……それが本当に望んだものになると言う確証を持った者は、この場にはどこにもいなかった。恐らく、ただ1人を除いて。

「不合格だ。……受かる気あんのかい？」

「あります！」

「話にならない。何も足りないよ。今日はもう帰んな」

香澄は自信満々に答えて見せたが、周りがその気持ちについてこられていない。今のお前は、先走りすぎているんだよ……。

「それと、成川」

「えっ、自分ですか？何でしょう？」

「あんたもあんただ。冷やかしならいらぬよ」

「それは、まあ……ごもつともなんですけどね」

止めたところで聞く耳なんか持ちそうになかったから、香澄の好きにさせただけだ。4人が付き合ってるのも、そう言う部分が大きいんだろう。

「全く……他にもオーディションを受けるバンドはいるって言うのに」

「俺も手伝いましょうか？」

「必要ないよ。あんたは今日休みだろう？休める時にしっかりと休めないようじゃ、まだまだとしか言えないね。そんな奴に仕事を任せるつもりもないよ」

「そうですねか……。では、お言葉に甘えて失礼します」

「そうしな。こいつらの練習にでも付き合っただけやるんだね」

俺は元々そのつもりだったんですけどね。ま、そんな事面と向かっては言えないから黙っておく。

香澄たちもステージを離れ、楽器を持って俺のところに戻ってきた。もう用もないし、関係ない人がいても邪魔になるだけだ。

「ほら、だから言っただじやん。まだ早いつて」

「う……で、でも次こそは……！」

「そんな調子じゃ、いつまで経っても合格なんてできないぞ。ただ闇雲に数をこなして認められるような場所なら、簡単に立ってない場所なんて言われるわけないだろうが」

「そうは言っても……どうしたらいいの、なーくくん!!」

人目もはばからず、俺の左腕から体を包み込むように抱き着いてくる。ギターの重みもあってよろけそうになったが、それ以上にすれ違

うスタッフに見られてるのが恥ずかしい。

「おま、ここで抱き着くんじやない！とりあえず場所を移して、やるなら有咲にしろって！」

「何でこつちなんだよ！」

「じゃあ有咲！どうすればいいの〜！」

「本当にこつちに抱き着いてくんな！離れろって!!」

よし、これで香澄避けはバッチリだとして……俺たちは一度SPA CEのエントランスに移動した。邪魔にならないようにって理由もだが、さっきの話の続きもある。

「さっき、オーナーも言ってた。私たちには足りないものがあるって」「足りない……何が足りないんだろう?」

今の香澄の、ポピパとしての課題点はそこだ。練習を重ねるだけ、上達を続けていくだけの時間からは、オーナーが求めている物は絶対に得ることができない。

「技術じゃねえの?つか、いい加減離れろって」

「でも、見てるのは技術だけじゃないって前に聞いたことあるよ?」

「だったら……気持ちとか?」

「ま、それもわかるけどな沙綾。だとしたら、昨日の今日でオーディション受けた香澄の気持ちは全然足りなかったのかって話だろ?」

「それは……そうだよ。受かりたいから今日もここに来たんだし、その気持ちは確かだよ……あれ?」

ふと、沙綾が何かを見つける。俺も視線の先に目をやると、そこにあったのはモニター画面。天井付近に取り付けられたそのモニターに映っていたのは、さっきまで香澄たちがいたオーディション会場の様子だった。

SPACEではオーディションの様子をモニター越しに見学することができる。今もステージ上で4人組のバンドが演奏しているみたいだが……。

「あれって……CHiSPA!?!」

「えっ、なつちゃんたちオーディション受けてるの!?!」

まさか彼女たちもオーディションに来ていたとは。以前から受け

ていた話は聞いてないし、今日が初挑戦って感じか。

……その証拠に、全員緊張の色が表情に出ている。演奏もぎこちなく、音がまとまっていけない。それでも何とか形にしようと思死になるあまり、力んで余計にリズムが崩れている。

結局、最後まで調子を戻せる事なく、演奏は終わった。傍目から見たら、結果は最悪。まず間違いなくアウトだと思えるだろう。演奏面を見ても、昨日のポピパの方が遥かにマシだと思える完成度だった。

「オーナー……どうでしたか」

「……そうだね」

「……ただ……多分オーナーの出す答えは。」

「……ベースは走ってるし、ドラムは余裕がない。キーボードとギターは勢いでごまかしている」

「……っ、で、では私たちは——」

「やりきったかい？」

オーナーのダメ出しに、心が折れるCHiSPAの面々。だが、そんな彼女たちに対して向ける言葉は、ただ一言。

やりきったのかと、今の演奏を最後まで成し遂げることができたのかと、それだけを口にした。

「……オーナーの仰る通り、私たちの演奏はまだまだ課題が多いです。SPACEのレベルも、そのレベルに自分たちがまだ達していると言えない事も、悔しいですが感じてはいます」

「……………」

「ですが、私たちは皆……今ある自分を全部出し切りました！やれる事は……やっただつもりです!!」

海野さんが、そして彼女の言葉に後押しされたメンバーたちが、力強くうなづく。思いは込めた、出し切ったと。何の迷いもなく言い切って見せた。

己の弱さは認めている。指摘された部分も、肯定して受け入れた。けど、それでも……演奏に懸けた気持ちだけは否定しなかった。否定

させなかった。それだけ、彼女たちの思いが強かった。本物だったから。

その言葉にオーナーは……。

「……そうか、わかった」

「……………」

「合格」

その言葉だけで全てわかったと言わんばかりに、余計な言葉を並べ立てる事なくオーナーは告げた。彼女たちが一番待ち望んだ事を。

「えっ……？あ、は、はい！ありがとうございます!!」

至らない部分があると自覚しながらも、合格を貰えるとは思っていなかったのだろう。喜びと感動が入り混じり、4人はステージの上で泣きながら互いを抱きしめ合う。

よかった、信じられない、嬉しい……！積み重ねた努力が報われた彼女たちに、オーナーは野暮な言葉をかける事なく見守っていた。そんな彼女たちを見ていた、俺たちは……。

「やった！合格合格！すごいよ、なっちゃん！」

「ま、マジか……」

「すごいすごい」

「先行かれちゃったか……」

「ま、慌てるなよ。残された時間が少ないからって、合格者を出さないわけじゃない。それはさっきのでもわかっただろ？」

「なら、後はこつちの問題ってわけだよ……」

CHiSPAの合格を褒め称え、合格者を出さないわけじゃない意向が見えた一方で、結局は自分たちに問題があったことも事実だと悟ることになってしまった。そこを否定するつもりは、香澄たちには申し訳ないが俺にはない。

2つのバンドを見比べた時、足りないと思うものがあつた。だから合否の差が生まれた。オーナーの下した決断に、違いが生じてしまったんだ。

「何が違うんだろう……私たちと。ちゃんと返事できたから？曲が良かったから？」

「それは……」

たえの疑問に、香澄たちは言葉を返すことができない。自分たちに足りないものは、CHISP Aよりも劣っているものは何なのか。その答えを、見つけることができないでいる。

むしろ客観的に見ても、演奏の質に関してはポピパの方が上手だったと言い切れるくらいだ。それは俺が演奏の後にも指摘したからわかるだろ？

単純な技術なら、ポピパが上。なのに落とされた。それ以外の部分で、明らかにステージに見合わない判断された部分があったから。

「……何なんだろ」

考えても答えは出ない。沈黙の時間が流れる中、俺も安易に言葉を出すことができない。モニターも向こうでは華やかな時間が流れているのに、重苦しい空気に包まれていた。

「やあやあ、どうしたんだい！こんなところで落ち込んで？幸せが逃げちゃうぞーっ!」

「わっ、ひなちゃん先輩!」

「そうとも！ひなちゃん先輩だぜ、フウーっ!」

そんな空気を軽々しくぶち壊してくるのは、キャラがぶっ飛ん……い、いや、とにかく明るい先輩。グリグリひなこ先輩だ。

SPACEはグリグリ御用達のライブハウス。それに今日はライブが控えている。とは言え、さっきまではいなかったはずなんだけども。俺たちがオーディションに夢中になっている間に、来ていたって事か。

「何でここに……!」

「ひなちゃん求めるところに、ひなちゃんあり……そう言う存在に、ひなちゃんはなりたい!なりたいんだああああ!!」

「求めてないんですけど」

この人は本当にライブの時とプライベートの時でキャラとかテンションが違いすぎるからついていけない。有咲の反応にも共感して

しまう。すげえ失礼な話してるって自分でも思う。こんな奴になるなよ？

「いいのかい、お嬢さんよお。せーっかくオーディションに受かるコツを教えてあげようと思ったのによお」

「何でそんな口調なんですか、ひなこ先輩……」

「フツ……男には、カツコつけたくなる時があるってもんだぜ、少年……？」

「いや、あなた男じゃないでしょ……」

何か香澄の方が可愛く見えてくるから不思議な話だ。グリグリのメンバーはいつも苦労してるんだろうなあ……。

「細かいことは気にしない！それよりも、オーディションに受かるコツ……知りたくないかい？」

「はい、知りたいです！」

「よし、ならデートしてくれたら教えるー！」

「はあ!？」

「有咲、頑張つて！」

「おまつ、何で私なんだよ！押し付けんな！」

まずデート前提で話が進んでるのもどうかと思うんだが。たえも悪乗りするんじゃないやねえ。

「はいはい、私も行く！」

「それももうデートでも何でもねー！てか、私は行くの決定なんだな!」「やめて！ひなちゃんを巡って争うのは止めて！」

ダメだ、これ。ついていけねえよ……。

「ほらほら、困ってるからその辺にしなよ」

「ん、この声は……」

「あつ、お姉ちゃん！」

ゆり先輩もいたんだな。他の2人はいないみたいだが、後から合流でもするんだろう。まだライブの時間には早いからな。

「お姉ちゃんもオーディション見に来たの？」

「うん、刺激になるからね。勉強になる事も多いから、よく見てるんだ」

「ポップンパーティーのオーディションも見てたよー！」

「私たちのオーディションも……」

足りないものを補う事に、実力や経験だけで判断して他のバンドを見るのは大間違いだ。何も知らない無垢な原石だからこそ、持っている物だってある。経験を重ねたがゆえに、無意識にそぎ落とされるものだってあるからな。それは決して、落としてはならないものだというのに。

それを取り戻し、力とするにはやはり、新人の演奏を見る事が不可欠。だからこそ、彼女たちはオーディションを見るために足を運ぶだろう。

ステージに立ち、実力が認められてもなお、日々精進を積む姿には脱帽だ。それも、練習を重ねた技術向上だけじゃない。他人のパフォーマンスから、時には新人の演奏からも何か学ぼうとする姿勢は見習わないといけない。

「……あの」

「うん？」

「何がダメだったんでしょうか。私たちに足りないものは？受かるコツは？考えても答えは出なくて……なのでその、一体何だったのかわかって」

ふと、口を開いたのは沙綾だった。バンドとしても、学年としても先輩のグリグリに、教えを請いたいと思っただろう。

まだ幼く、拙い沙綾たちの目線からでは、見えない物だってある。技術、経験、何を取ってもグリグリには敵わない。だからこそ、彼女たちの目線から俯瞰した自分たちの姿を知っておきたい。そんなところだろう。

そんな沙綾の熱意ある質問に対して、出した答えは……。

「よーし、それじゃーまずはデートする事だねー！」

って、おい。その話まだ続いてたのかよ。

「……ってのは冗談で〜」

冗談かい。何で内心突っ込まないといけないんだよ。会話しなくても疲れるのか。

てか、有咲もげっそりした顔してるけど、心の中でツツコミ入れてたんだろぅなあ……。あいつは根っからのツツコミ気質だし。

「二つだけヒント！一生懸命考える事！これ大事!!」

「一生懸命、考える……?」

「考えて考えて考えまくれー！それが答えを見つける唯一の近道さ!!」

「で、でも私たち、考えても答えが出なくて……まだ足りないって事なんですか?」

「そゆことだね!」

「けど私たち、さつき、なつちゃん……友達のバンドが合格するの見て、どこが違うんだろぅって皆で考えてたんです。演奏とか、色々……でも、答えは出なくて、このままじゃダメだなって思って、だから今の私たちに足りないものの手掛かりを、少しでもほしいんです! お願いです!」

沙綾の言葉に後押しされ、香澄も思いをぶつける。ポピパからしたら、とにかく考えろなんて曖昧な答え、具体的な改善策が全く見いだせていない不明瞭なものだ。

だからこそ、少しでもいい。せめて何か改善の手掛かりとなるだけものが掴めたら……薫をも継る気持ちだった。

「じゃあ、戸山さん。私からいいかな」

「は、はいっ! 教えてください、ゆりさん!」

と、ひなこ先輩に代わり、ゆり先輩が香澄に言葉を投げかける。

「今、ポピパが直面している問題は、バンドとしてとても大切なものだよ。だから私も、力になりたいって思うし、一緒になって考えてあげたいって思うよ」

「それじゃあ……」

「でもね、ダメなんだ。ううん、違うね。できないんだよ」

協力したいと願う一方で、その気持ちを形にできない。実力も経験もあるグリグリなら、答えを出す事だって簡単なはずだ。なのに、どうしてなのか。

きつと、香澄たちはそう言いたくて仕方ない。手掛かりすら教えて

は貰えないのかと。何故それが叶わないのかと。自分で考える事ではか答えが出ないのかと。けど、先にゆり先輩が言葉を続ける。

「私たちがアドバイスするのは簡単。でも、この問題は、誰かから与えられた答えを当てはめても解決しない。自分たちの力だけでしか、解決できないんだよ」

「私たちの、力だけで……」

「だから考えなきゃ。悩んで、悩んで、どうすればいいのかを考えるの。その答えは、戸山さんたち5人じゃないと出せないんだから」

「でも、考えても答えは見つからなくて……」

「それはね、見つけようとするものじゃないの。探すものだよ」

「見つけるんじゃないくて、探す……？」

どっちも似たような意味だが、その本質は違うんだろう。答えを見つげるために考えるんじゃないかと、探すために考える……答えを得るつて意味的には、何も変わらない気がするんだが。俺も少し混乱してきたな。香澄は大丈夫だろうか。

今の俺たちには見えてない何かがある、ゆり先輩には見えている。きっと、ひなこ先輩にも。それも、必死に考えて探した答えがあるから……なのかもな。

「そう。音楽には正解なんてない。答えなんて、みんな違うよ。私たちの音楽が、ポピパの音楽と違うようにね」

「私たち、ポピパの音楽……」

「だから私は、答えを教えるには上げられない。それじゃあポピパは、ポピパじゃなくなっちゃう。ポピパは、ポピパの答えを探さなくちゃ」

「ポピパの答えを……」

「それが、考えるって事……」

「うん。私に言えるのは、ここまでかな。後は、ポピパだけの答えを探せるように頑張っつてね」

バイバイと手を振って、ゆり先輩はひなこ先輩を連れてSPACEを出て行った。去り際にひなこ先輩が大声で俺たちに呼びかけていたが、反応できるほどの余裕は誰も持ち合わせてはいなかった。

りみも沙綾も、ゆり先輩の言葉に何か突き動かされたものがあつた

んだろう。たえも有咲も、口にこそ出さないが表情は変わっている。受け止めた言葉の重さを、自分たちの力に変えようとしている。

俺も、正直感じるものはあった。バンドとはほとんど無縁だが、その世界の奥深さを垣間見た。ただ楽器を演奏し、音を出して奏でるだけでは成り立たない領域。何気なく耳にする音色の響きには、想像もつかないほどの感情や時間が積み重なっている。

だから人を惹きつける。興奮させ、感動させる。歌い、演奏するだけでは決してたどり着けない世界。そこに踏み込むだけの「答え」が、あの場所に立つ「答え」でもある。

バンドって、音楽って……やっぱりすごいんだ。

香澄も……さっきより真剣な面持ちになっていた。誰よりもポップに対して思いが強く、SPACEに立ちたい思いが強いから。

何よりも、バンドに対する気持ちは……本物だからな。

「……………」

だから……。

少し思い詰めたように見えてしまったのは、気のせいなんだよな………？

あの電話は、本当なんだろうか。

あの話は、確かなんだろうか。

きっかけは何となくで、ただ私なりにどうにかしたいと抗いたかっただけだった。このまま終わるのを、見ているだけなんて嫌だった。だから聞いてしまった。あの時、オーナーの部屋で話していたことを。

SPACEを閉じる事と同じくらい、心に重くのしかかる……翔の秘密を。

「……………」

花女への入学。そこにどうしてオーナーが絡んでいるのか。それに、話の中で出てきた謎の少女の事も。彼女の存在が、SPACEの存続を左右する理由が見えてこない。つながりが見えずに、もやもやとした気持ちだけが頭に残る。

そんな時に、あの電話がかかってきたんだ。

「……………」

そこで決めた。2人で一緒に。

「……………」

SPACEの事。オーナーの言う、少女の事。

「確かめないと、ね」

そして、翔の事。

「ん？何か言ったか、たえ？」

「……………」
「うん。何でもないよ。今はね」

「今はって何だよ。何か怖いんだが」

「大丈夫だよ。怖いのは一緒」

「どう言う意味だよ……………」

そのままの意味だよ、翔。

知りたくないけど知らなきゃいけない事、
今から知るんだから。